

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第184集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

黒熊栗崎遺跡

1995

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第184集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

黒熊栗崎遺跡

1995

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

序

西毛の鐺川流域は武蔵国から信濃国への交通の要路として早くから開けてきました。その要路に高速道の上信越自動車道が建設され、平成5年3月に藤岡市から長野県佐久市までが開通しました。この上信越自動車道の建設に伴い、数多くの埋蔵文化財が発掘調査され、記録保存されました。

高速道が通過する多野郡吉井町黒熊の中西・栗崎地区も、埋蔵文化財調査の対象となりました。両地区は、上毛三山を始め上信越国境の山々が一望できる景観の良き地であります。中西地区は吉井町内にある特別史跡「多胡碑」の碑文中「給羊」の「羊」の解釈をめぐる識者の注目をひいた「辛子三」の文字瓦が出土した地として第2次世界大戦前より知られている地でありました。両地区の発掘調査は平成元年度・2年度に行われ、丘陵上の遺跡より平安時代の寺院跡・集落跡等貴重な遺構・遺物が発見され、本県の古代寺院またそれを取りまく集落の研究を進める上で大いなる調査成果がありました。

これら、貴重な遺構・遺物等の資料は平成3年度より調査報告書刊行のための整理作業を行い、既に中西地区の寺院跡については「黒熊中西遺跡(1)」として、また集落関係については「黒熊中西遺跡(2)」として報告書を刊行しました。この度、これに続いて栗崎地区の集落・祭祀・生産関係の整理が終了したので、ここに「黒熊栗崎遺跡」の報告書を刊行する運びとなりました。本書には、先に報告された寺院跡と密接に関連する住居跡を始め、貴重な調査成果が報告されています。特に明治維新時まで存続した旧平地神社跡の調査は、この種の建物跡の調査例が少ないので神社建築の研究を進める上で貴重な資料となりましょう。

本報告書と併せて、次年度に刊行が予定される「黒熊八幡遺跡」をもって吉井町黒熊に所在した埋蔵文化財発掘調査の報告書が終了となります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで日本道路公団東京第2建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会、地元関係者等より種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りました。ここに深甚なる感謝の意を表し、本報告書が本県の歴史を解明する資料として広く活用される事を願い序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、関越自動車道上越線建設工事に伴い事前調査した、事業名称「栗崎八幡遺跡」の発掘調査報告書である。栗崎八幡遺跡は中西区・八幡区・栗崎区に分けられ、本書はそのうち栗崎区を扱い、「黒熊栗崎遺跡」と呼称した。
2. 遺跡所在地 群馬県多野郡吉井町大字黒熊字平地・栗崎・柿山
3. 事業主体 日本道路公団
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 昭和62年4月1日～昭和62年9月30日
6. 調査組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 白石保三郎 井上唯雄 田口紀雄 上原啓巳 定方隆史 国定 均 笠原秀樹
須田朋子 吉田有光 柳岡良宏
関越自動車道上越線調査事務所
井上 信 片桐光一 原田恒弘 黒澤重樹
調査担当 鬼形芳夫 谷藤保彦 三浦茂三郎 外山政子(囑託)
7. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成5年4月1日～平成6年3月31日
9. 整理組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 中村英人 近藤 功 佐藤 勉 蜂巢 実 神保侑史 岸田治男 斎藤俊一 国定 均
笠原英樹 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂 高橋定義 松下 登 大沢友治
関越自動車道上越線調査事務所
吉田 肇 依田治雄 吉田有光
整理担当 山口逸弘 長岡美和子 鈴木紀子 土田三代子 富沢スミ江 茂木良子 高橋優子
新井雅子 猪野熊洋子 阿久沢明子 加藤和子 中橋たみ子
器械実測 伊藤淳子 尾田正子 筑井弘子 戸神晴美 佐子昭子 千代谷和子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 樋口一之 小沼恵子
10. 本書の編集は山口があたり、本文執筆は第Ⅲ章第6節を大西雅広・第Ⅲ章第8節縄文土器を橋本 淳・第Ⅳ章を外山政子、他は山口が行っている。
11. 本書使用の遺構図面の一部のトレースは株式会社測研に委託した。
12. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
13. 発掘調査に際して吉井町教育委員会、及び地元関係者の多大なる御支援を戴いた。ここに感謝の意を表す次第である。
14. 報告書作成にあたり、下記の諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して感謝を表す。(敬称略)
石北直樹 市川淳子 大塚昌彦 軽部達也 小林真寿 鈴木徳雄 千田茂雄 田口一郎 利根川章彦
中島 誠 羽鳥政彦 昼間孝志 古郡正志 三浦京子 茂木由行 山下歳信 若狭 徹 渡辺 一
事業団調査研究員諸氏

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は真北である。

2. 遺構実測図は下記の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。

住居……………	1/60	溝……………	1/30	1/60	1/100	1/200
住居のカマド……………	1/30	掘立柱建物跡……………	1/100			
土 坑……………	1/40	神社跡……………	1/40	1/80	1/120	
墓 壙……………	1/20					

3. 遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示いた。それぞれ図中に付記したスケールを参照されたい。

坏・碗類……………	1/3	石製品……………	1/2	1/3	1/4
羽釜・甕類……………	1/4	ガラス玉……………	1/1		
古代瓦……………	1/4	近代瓦……………	1/6		
羽 口……………	1/3	縄文土器……………	1/3		
土 錘・紡錘車……………	1/2	縄文石器……………	1/3		
鉄製品・古銭……………	1/3	1/2			

尚、実測図で残存率1/2以下の個体については、中心線の両脇を離すことで標記した。網がけの標記は、下図の通りである。



4. 本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行 1/50,000地形図「高崎」「富岡」(平成2年3・11月)

国土地理院発行 1/25,000地形図「高崎」「藤岡」(平成元年7・12月)

5. 遺物写真図版は基本的に実測図の掲載順に整理し、実測図と対照できるように図版右下に番号を記した。

6. 土器の色調の断定は、農林省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」昭和45年を使用した。

7. 遺物の計測に際し、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚は小数点第2位を四捨五入しcm単位で、重量は電磁式はかり(EY-2200A)を使用し、小数点第2位までg単位で表示した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
抄 録	
第Ⅰ章 発掘調査の経過と調査方法	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 調査の方法	3
第Ⅱ章 環 境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3節 基本土層	14
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	15
第1節 概 要	15
第2節 竪穴住居跡	18
第3節 土坑・墓塚	147
第4節 溝	163
第5節 掘立柱建物跡	168
第6節 神社跡	170
第7節 土器埋設遺構	184
第8節 遺構外出土遺物	185
第9節 出土古銭	201
第Ⅳ章 成果と問題点 平安時代のカマド構築材の選択について	209
補 遺	209

写真図版

黒熊栗崎遺跡周辺地形図

挿 図 目 次

第1図	路線図	1	第61図	17号住居跡(2)	91
第2図	グリッド設定図	4	第62図	17号住居跡出土遺物(1)	92
第3図	周辺の地形区分	6	第63図	17号住居跡出土遺物(2)	93
第4図	周辺の遺跡分布図	9	第64図	18号住居跡(1)	95
第5図	基本層序	14	第65図	18号住居跡(2)	96
第6図	第Ⅰ台地遺構配置図	16	第66図	18号住居跡出土遺物	97
第7図	第Ⅱ台地遺構配置図	17	第67図	19号住居跡(1)	100
第8図	1号住居跡(1)	19	第68図	19号住居跡(2)	101
第9図	1号住居跡(2)	20	第69図	19号住居跡出土遺物	102
第10図	1号住居跡出土遺物	21	第70図	20号住居跡(1)	105
第11図	2号住居跡(1)	23	第71図	20号住居跡(2)	106
第12図	2号住居跡(2)	24	第72図	20号住居跡出土遺物(1)	107
第13図	2号住居跡出土遺物	25	第73図	20号住居跡出土遺物(2)	108
第14図	3号住居跡(1)	26	第74図	21号住居跡(1)	111
第15図	3号住居跡(2)	27	第75図	21号住居跡(2)	112
第16図	3号住居跡出土遺物	28	第76図	21号住居跡出土遺物	113
第17図	4号・10号・11号住居跡重複状況	30	第77図	22号住居跡(1)	114
第18図	4号住居跡(1)	31	第78図	22号住居跡(2)	115
第19図	4号住居跡(2)	32	第79図	22号住居跡出土遺物	116
第20図	4号住居跡(3)	33	第80図	23・24・25号住居跡	119
第21図	4号住居跡出土遺物(1)	34	第81図	23・24号住居跡	120
第22図	4号住居跡出土遺物(2)	35	第82図	23号住居跡	121
第23図	4号住居跡出土遺物(3)	36	第83図	23号住居跡出土遺物	122
第24図	4号住居跡出土遺物(4)	37	第84図	24号住居跡出土遺物(1)	124
第25図	5号住居跡(1)	41	第85図	24号住居跡出土遺物(2)	125
第26図	5号住居跡(2)	42	第86図	25号住居跡	129
第27図	5号住居跡出土遺物	43	第87図	25号住居跡出土遺物	130
第28図	6号住居跡(1)	46	第88図	27号住居跡(1)	132
第29図	6号住居跡(2)	47	第89図	27号住居跡(2)	133
第30図	6号住居跡出土遺物(1)	48	第90図	27号住居跡出土遺物	134
第31図	7号住居跡(1)	50	第91図	29号住居跡(1)	137
第32図	7号住居跡(2)	51	第92図	29号住居跡(2)	138
第33図	7号住居跡(3)	52	第93図	29号住居跡出土遺物(1)	139
第34図	7号住居跡出土遺物(1)	53	第94図	29号住居跡出土遺物(2)	140
第35図	7号住居跡出土遺物(2)	54	第95図	30号住居跡	143
第36図	8号住居跡(1)	56	第96図	30号住居跡出土遺物	144
第37図	8号住居跡(2)	57	第97図	31号住居跡	146
第38図	8号住居跡出土遺物(1)	58	第98図	土坑(1)	148
第39図	8号住居跡出土遺物(2)	59	第99図	土坑(2)	149
第40図	9号住居跡(1)	62	第100図	土坑(3)	150
第41図	9号住居跡(2)	63	第101図	土坑(4)	151
第42図	9号住居跡出土遺物	64	第102図	土坑(5)	152
第43図	10号住居跡	66	第103図	土坑(6)	153
第44図	10号住居跡出土遺物	68	第104図	土坑(7)	154
第45図	11号住居跡(1)	69	第105図	1・2号墓塚	155
第46図	11号住居跡(2)	70	第106図	3号墓塚	156
第47図	11号住居跡出土遺物	71	第107図	土坑・墓塚出土遺物	160
第48図	13号住居跡	73	第108図	1号溝	164
第49図	13号住居跡出土遺物	74	第109図	3号溝	165
第50図	14号住居跡(1)	76	第110図	4号・5号溝	166
第51図	14号住居跡(2)	77	第111図	溝出土遺物	167
第52図	14号住居跡出土遺物	78	第112図	1号掘立柱建物跡	169
第53図	15号住居跡(1)	80	第113図	神社跡(1)	171
第54図	15号住居跡(2)	81	第114図	神社跡(2)	172
第55図	15号住居跡出土遺物(1)	82	第115図	神社跡(3)	173
第56図	15号住居跡出土遺物(2)	83	第116図	神社跡(4)	174
第57図	16号住居跡(1)	85	第117図	神社跡(5)	175
第58図	16号住居跡(2)	86	第118図	神社跡出土遺物(1)	176
第59図	16号住居跡出土遺物	87	第119図	神社跡出土遺物(2)	177
第60図	17号住居跡(1)	90	第120図	神社跡出土遺物(3)	178

第121図	神社跡出土遺物 (4)	179
第122図	神社跡出土遺物 (5)	180
第123図	土器埋設遺構	184
第124図	第Ⅰ台地出土遺物	185
第125図	第Ⅱ台地出土遺物	187
第126図	南側区域外表採出土遺物	189
第127図	グリッド出土遺物	191
第128図	縄文土器実測図 (1)	194
第129図	縄文土器実測図 (2)	195

第130図	縄文土器実測図 (3)	196
第131図	弥生土器実測図	197
第132図	縄文石器実測図 (1)	198
第133図	縄文石器・砥石実測図 (2)	199
第134図	古 銭	202

目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	10
第2表	1号住居跡計測表	19
第3表	1号住居跡遺物観察表	21
第4表	2号住居跡計測表	23
第5表	2号住居跡遺物観察表	25
第6表	3号住居跡計測表	27
第7表	3号住居跡遺物観察表	29
第8表	4号住居跡計測表	33
第9表	4号住居跡遺物観察表	38
第10表	5号住居跡計測表	42
第11表	5号住居跡遺物観察表	44
第12表	6号住居跡計測表	47
第13表	6号住居跡遺物観察表	48
第14表	7号住居跡計測表	51
第15表	7号住居跡遺物観察表	54
第16表	8号住居跡計測表	57
第17表	8号住居跡遺物観察表	59
第18表	9号住居跡計測表	63
第19表	9号住居跡遺物観察表	64
第20表	10号住居跡計測表	67
第21表	10号住居跡遺物観察表	67
第22表	11号住居跡計測表	69
第23表	11号住居跡遺物観察表	72
第24表	13号住居跡計測表	73
第25表	13号住居跡遺物観察表	74
第26表	14号住居跡計測表	76
第27表	14号住居跡遺物観察表	79
第28表	15号住居跡計測表	80
第29表	15号住居跡遺物観察表	83
第30表	16号住居跡計測表	86
第31表	16号住居跡遺物観察表	88
第32表	17号住居跡計測表	90
第33表	17号住居跡遺物観察表	93
第34表	18号住居跡計測表	96
第35表	18号住居跡遺物観察表	98
第36表	19号住居跡計測表	100
第37表	19号住居跡遺物観察表	103
第38表	20号住居跡計測表	106

第39表	20号住居跡遺物観察表	109
第40表	21号住居跡計測表	111
第41表	21号住居跡遺物観察表	113
第42表	22号住居跡計測表	115
第43表	22号住居跡遺物観察表	117
第44表	23号住居跡計測表	119
第45表	24号住居跡計測表	119
第46表	23号住居跡遺物観察表	123
第47表	24号住居跡遺物観察表	126
第48表	25号住居跡計測表	129
第49表	25号住居跡遺物観察表	130
第50表	27号住居跡計測表	132
第51表	27号住居跡遺物観察表	135
第52表	29号住居跡計測表	137
第53表	29号住居跡遺物観察表	140
第54表	30号住居跡計測表	143
第55表	30号住居跡遺物観察表	145
第56表	31号住居跡計測表	146
第57表	土坑計測表	157
第58表	48号土坑遺物観察表	161
第59表	49号土坑遺物観察表	161
第60表	52号土坑遺物観察表	161
第61表	53号土坑遺物観察表	161
第62表	1号墓壇遺物観察表	162
第63表	2号墓壇遺物観察表	162
第64表	墓壇計測表	162
第65表	溝計測表	163
第66表	3号溝外遺物観察表	167
第67表	3号溝遺物観察表	167
第68表	神社跡出土鉄器計測値	180
第69表	神社跡出土瓦計測値	181
第70表	土器埋設遺構遺物観察表	184
第71表	第Ⅰ台地遺物観察表	186
第72表	第Ⅱ台地遺物観察表	188
第73表	南側区域外表採遺物観察表	190
第74表	グリッド遺物観察表	192
第75表	縄文土器観察表	200
第76表	古銭計測表	203

図 版 目 次

図版 1	遺跡全景	図版40	2・3号住居跡出土遺物
図版 2	第Ⅰ台地全景 第Ⅱ台地全景	図版41	3・4号住居跡出土遺物
図版 3	1号住居跡	図版42	4号住居跡出土遺物
図版 4	2号住居跡	図版43	4号住居跡出土遺物
図版 5	3号住居跡	図版44	4号住居跡出土遺物
図版 6	4号住居跡	図版45	4号住居跡出土遺物
図版 7	5号住居跡	図版46	4・5号住居跡出土遺物
図版 8	6号住居跡	図版47	5・6号住居跡出土遺物
図版 9	7号住居跡	図版48	6・7号住居跡出土遺物
図版10	8号住居跡	図版49	7・8号住居跡出土遺物
図版11	9号住居跡	図版50	8号住居跡出土遺物
図版12	4・10・11・13号住居跡	図版51	9号住居跡出土遺物
図版13	14号住居跡	図版52	10・11・13号住居跡出土遺物
図版14	15号住居跡	図版53	14・15号住居跡出土遺物
図版15	16号住居跡	図版54	16号住居跡出土遺物
図版16	17号住居跡	図版55	17・18号住居跡出土遺物
図版17	18号住居跡	図版56	19・20号住居跡出土遺物
図版18	19号住居跡	図版57	21・22・23号住居跡出土遺物
図版19	20号住居跡	図版58	23・24号住居跡出土遺物
図版20	21号住居跡	図版59	25・27号住居跡出土遺物
図版21	23号住居跡遺物出土状態	図版60	29号住居跡出土遺物
図版22	23・24号住居跡	図版61	29号住居跡出土遺物
図版23	25号住居跡遺物出土状態	図版62	30号住居跡出土遺物
図版24	27号住居跡遺物出土状態	図版63	4・7・8・11・14号住居跡出土遺物
図版25	29号住居跡	図版64	15・16・17・18号住居跡出土遺物
図版26	30・31号住居跡	図版65	19・20・21・22・23・24・27号住居跡出土遺物
図版27	作業風景	図版66	48・49・52・53号土坑 1号墓壙 3号溝出土遺物
図版28	20・21・22・23・24・26・27・28号土坑	図版67	土器埋設遺構出土遺物 遺構外出土遺物
図版29	29・30・31・32・33・34・35・36・37号土坑	図版68	ガラス玉・鉄製品・遺構外出土遺物
図版30	40・41・42・43・44・45・47・48・49号土坑	図版69	神社跡出土遺物
図版31	50・51・52号土坑 3・1号墓壙	図版70	神社跡出土遺物
図版32	1・3号溝 1号掘立柱建物跡	図版71	神社跡出土遺物・古銭
図版33	神社跡	図版72	遺構外出土遺物（縄文・弥生） 黒熊栗崎遺跡現況
図版34	神社跡		
図版35	神社跡		
図版36	グリッド出土状態		
図版37	作業風景		
図版38	第Ⅱ台地遠景 試掘風景		
図版39	1・2号住居跡出土遺物		

抄 録

1 概 要

本遺跡は群馬県多野郡吉井町大字黒熊字栗崎・平地・柿山に所在する。鎭川右岸の中位段丘と高位段丘の変換線に位置し、北側へ下る急斜面地形に占地する。発掘調査は関越自動車道上越線建設に伴い、昭和62年4月1日から9月30日まで行われた。

2 内 容

遺跡の数量は以下のとおりである。

種 別	時 代	数 量	備 考
竪 穴 住 居 跡	古墳終末～ 奈良・平安	28軒	小鍛冶遺構 2 含む
土 坑	奈良・平安 ～近世	55基	
墓 塚	近代	3 基	人骨・古銭等出土
掘 立 柱 建 物 跡	奈良・平安	1 棟	
溝	奈良・平安 ～近代	4 条	
土 器 埋 設 遺 構	古墳初頭	1 基	
神 社 跡	近世～近代	1 基	基壇・礎石列

3 ま と め

吉井町黒熊地区の東端に位置する遺跡。鎭川右岸の中位段丘と高位段丘に境界部に占地する。検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡を主体とする。小規模な集落遺跡ではあるが、第Ⅱ台地調査区で検出された平安時代の住居跡 2 軒は、小鍛冶施設を付帯しており、当地域の該期集落内生業の一側面を提示している。

また、遺跡地に南接して「搭之峰廃寺」が存在しており、当遺跡の奈良・平安時代の集落跡は、古代寺院跡と併存した可能性を示している。この例は、周辺に群在する古代寺院跡と集落の典型的な形態として位置付けられよう。

その他には、近世～近代に比定される合祀前の神社跡が基壇・礎石列・土塁等を伴って検出されている。

発掘調査報告書抄録

フリガナ	クロクマクリサキイセキ
書名	黒熊栗崎遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第29集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第184集
編著者名	山口 逸弘
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1995年2月28日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東緯 ° ′ ″	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
クロクマクリサキイセキ 黒熊栗崎遺跡	タノダヨシイマチ 多野郡吉井町 クリサキ ヒラチ カキヤマ 栗崎・平地・柿山	10363		36°14'30"	139°1'35"	19870401- 19870930	30,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項
黒熊栗崎遺跡	居住	竪穴住居跡	28軒	土師器・須恵器・灰釉陶器・石・鉄・瓦	7世紀末～10世紀後半 奈良・平安時代～近代 近代 奈良・平安時代～近代 奈良・平安時代 古墳時代初頭期 近世～近代 9世紀	
		土坑	55基	土師器・須恵器・瓦・石		
		墓墳	3基	かわらけ・陶器・ガラス玉・鉄・古銭		
		溝	4条	灰釉陶器・かわらけ・陶器		
		掘立柱建物跡	1棟			
		土器埋設遺構	1基	土器		
	祭祀	神社跡	1棟	近代瓦・鉄器・古銭		
生産	小鍛冶遺構	2軒	土師器・羽口・石			



黒熊栗崎遺跡

第I章 発掘調査の経過と調査方法

第1節 調査にいたる経過

本遺跡の発掘調査は、関越自動車道上越線（以下上信越線）の建設工事に伴い、昭和62年4月に着手された。上信越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団が事業主体者となり建設された。東京都練馬に起点を置き、新潟県上越市までの総延長280kmが予定路線であり、既に平成5年3月27日藤岡～佐久インター間69kmが共用開始となっている。藤岡～佐久インター間の基本計画は、昭和47年に策定され、同54年に建設大臣により日本道路公団が施工命令を受けている。同56年、この藤岡～佐久間の路線が発表された。

昭和47年の基本計画策定後、群馬県教育委員会（以下県教委）は路線内及び周辺の埋蔵文化財の扱いについて、以下のように対応した。

昭和49年度 県教委は上信越線路線の藤岡～下仁田間に存在する埋蔵文化財について、県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法の遵守、指定文化財の回避、関係事項の県教委文化財保護課との協議等の考え方・方針を示した。

昭和55年度 文化財保護課は路線周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。その結果は、同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として報告されている。

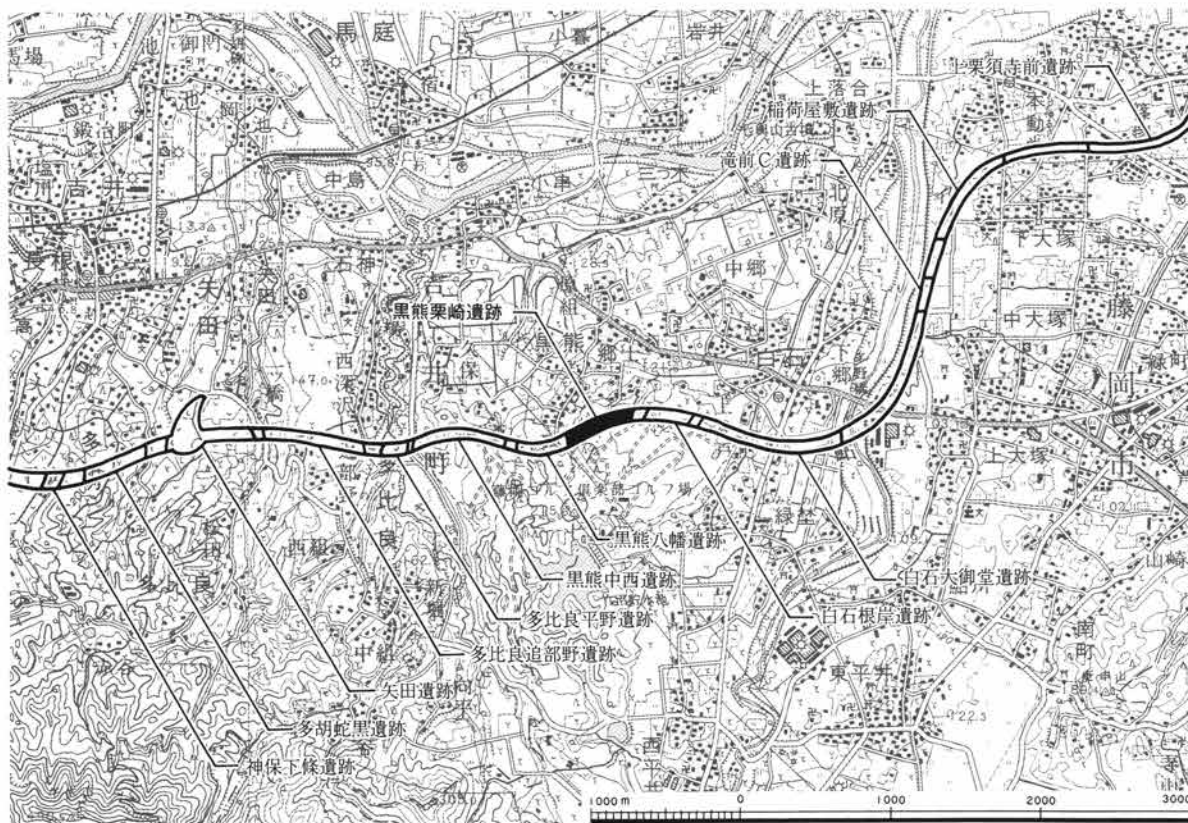
昭和59年度 建設工事が具体化し、道路公団の調査依頼を県教委が受け、文化財保護課による包蔵地の詳細分布調査が行われた。

昭和60年度 県教育委員会は、分布調査の結果を踏まえ、要調査面積を約100万㎡、55遺跡と想定し、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を策定した。以下主な事項である。

1. 発掘調査終了年度を昭和66年度末（平成2年度末）とする。
2. 調査は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。機関別の対応面積は、事業団 約76万㎡（富岡市以東）
調査会 約22万㎡（妙義町・下仁田町・松井田町）である。尚、面積は変動の可能性があると考えた。
3. 事業団出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併行する。
4. 日本道路公団東京第二建設局が県教委に調査依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教委はそれを受け、事業団及び各遺跡調査会等に再委託のかたち委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 上越線調査事務所開設。4班15人体制。

昭和62年度 6班22人体制、昭和63年度 9班36人、平成元・2年度 12班45人体制で各遺跡が調査され、平成2年度に一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行し、3年度より本格化している。



第1図 路線図 (国土地理院5万分の1「高崎」「富岡」使用)

第 2 節 発掘調査の経過

本遺跡は、対象面積が 3 万 m² と広く、尾根状の台地と小支谷が東西に横列する地形であるため、各地点で遺構の有無を明確にする必要があった。そのため、トレンチによる試掘調査を併用して調査を進める見通しを立て、各地点に幅 1 m 前後の試掘トレンチを数条設定した。この試掘調査の結果、対象地域の東側の比較的平坦地に恵まれた地点（第 I 台地）と西側の急傾斜地点（第 II 台地）で住居跡等の遺構が確認され、この 2 地点に挟まれた南側の丘陵上に神社遺構が検出されたことから、この 3 地点を全面調査対象として、調査の主力をあてる方針を立てた。

この 3 地点とも、山林と桑畑が地目であり、特に山林部分が多くを占めた。調査はこの桑と雑木の除去作業が優先し、かなりの労力と時間を費やした。検出された遺構は、第 I 台地が奈良・平安時代の住居跡 16 軒、土坑 47 基、墓塚 3 基、溝 3 条、掘立柱建物跡 1 棟等、第 II 台地は同時期の住居跡 12 軒、土坑 8 基、溝 1 条と第 I 台地が優位ではあるが、第 II 台地の遺構は密集する傾向が見られ、路線外に遺構範囲は広がる可能性も見られた。

また、神社跡は礎石列・瓦溜まりが検出され、瓦の時代観から近代の所産と捉えられた。

尚、旧石器時代の遺物調査も、遺構調査と併行して行われたが、残念ながら積極的な遺物の出土は見られなかった。

調査日誌抄

昭和 62 年

4 月 1 日～

事務所建設・器材搬入及び重機による桑抜作業

4 月 27 日 黒熊公民館で地元住民に対し遺跡調査説明会。89 名出席

1. 総括次長挨拶 2. 調査員の紹介 3. 調査等の説明

5 月 1 日～

山林部 下草刈り、しいたけホダ木や枝類の焼却

第 I 台地 桑根の運搬、枯れ草の焼却

重機による表土掘削

5 月 11 日～

第 I 台地の調査着手 桑畑部分と山林部分からなる。

桑畑部分より 1 号住居跡を検出

山林部分は重機による表土掘削継続

5 月 21 日～

第 I 台地 住居跡・土坑調査（～10 号住等）

山林部 表土の掘削・ローム層の精査

この時期養蚕のため作業員数激減

6 月 1 日～

第 I 台地 住居跡・土坑・溝調査

山林部 木の根の周辺の切り崩し

6 月 10 日～

第 I 台地 住居跡調査佳境

山林部 ローム部の精査を開始

作業員健康診断を行う

6 月 22 日～

第 I 台地 住居跡調査（～11 号住）

山林部 土層図作成

6 月 30 日～

第 I 台地 住居跡調査継続（床面上終了）

山林部 古式土師器出土 記録化

航空写真撮影

天候不順の日が多く、屋外作業にやや難が生じる

7 月 7 日～

第 I 台地 各住居跡床下調査

1/100 全体図作成等

土坑群等測量

山林部 土層図注記等

蒸し暑い日が続く

7 月 15 日～

第 I 台地 住居跡床下調査継続

山林部 調査終了

第 II 台地 調査着手 伐採・トレンチによる試掘

午後の雷雨著しい日が続く

7 月 20 日～

第 I 台地 住居等・遺構調査継続

山林部 重機による埋め戻し

第 II 台地 重機による表土掘削。住居跡確認（13 住）

方眼杭設定 一部旧石器試掘

山林部で神社跡確認調査着手

8 月 5 日～

第 I 台地 遺構調査終了へ

旧石器試掘 遺構・遺物は検出できなかった

第 II 台地 山林部神社跡精査 掘り下げ及び実測

住居跡等遺構確認

8 月 17 日～

第 I 台地 重機による埋め戻し

第 II 台地 住居跡調査（14～21 号住等）

神社跡 地形測量継続 土壇平坦部掘り下げ 瓦出土。

9 月 1 日～

第 II 台地 住居跡調査（31 住等）

神社跡 地形測量 平坦部掘り下げ。

瓦溜まり検出実測・礎石列作図・遺物取り上げ

9 月 15 日～

第 II 台地 住居跡床下調査

神社跡 全体測量・全景写真撮影

次調査遺跡（神保植松遺跡）への移動準備

9 月 22 日 職員救急処置講習会出席（～10：30）

9 月 30 日 神保植松遺跡へ移動。プレハブ電気撤去工事。終了
残務等数人で処理。

第3節 調査の方法

本遺跡の調査は、昭和61年度の土越線調査初年度の経験を生かし、例えば丘陵地形上の調査方法や排土方法、更に安全対策に万全の配慮をし調査を進めた。以下は調査に伴った主な留意点である。

(グリッド設定方法) 遺構・遺物の記録方法として、グリッド設定による調査方法を基本とした。グリッドは第2図に示したように国家座標軸を基準とし、遺跡全域に5m方眼を組んだ。グリッドの呼称は、0基点を $X=27200.000$ 、 $Y=-72200.000$ におき100m毎に大グリッドを設定した。X軸・Y軸とも算用数字で表し、敢えて大グリッド呼称は用いず0基点からの通しの小数字を優先し、各種測量・平面図作成・遺構外出土遺物の取り上げ等を行った。尚、呼称は北東隅の番号をもってグリッドを表した。

(調査手順) 前節にも述べたように、本遺跡は急傾斜地形の山林地域を主体とするため、トレンチによる試掘坑を併用し調査を進めた。そのため、小支谷の一部や山林部の急傾斜地点は試掘により無遺構と判断でき、遺構が確認された地点を優先して調査を行った。無論、無遺構の地点であっても土層・地形等の記録を取った。

住居跡・土坑等の遺構確認面は、軟質ローム層上面に堆積する暗褐色土層下面の漸移層である。しかしながら、漸移層と遺構覆土の色調差が極めて乏しいため、輪郭の判然としない遺構に関しては、やや掘り下げて軟質ローム上面で平面形を確認した。

尚、神社跡は表土を除去して確認できた。

住居跡の調査は、土層軸を交差させ堆積状態を図化した。住居跡の床面上の状態及び床下の状態は、各々記録し、構築の様相も明らかにするように努めた。カマドは土層の観察を十字軸を基本としたが、必要な場合は、短軸・長軸とも数本を追加して詳細な観察をした。

重複住居跡は、新住居跡を先に調査する方針を立てたが、平面形による新旧確認が困難な場合が多く、重複状態で検出した住居が多い。その際には、

住居間の新旧は土層で確認している。

また、住居外の施設にも注目し、精査を重ねて壁外柱穴の検出も試みた。

神社跡は伐採後表土除去の際に、土層軸を交差させ、除去後も基壇・礎石列に沿った土層観察を行った。基壇は断ち割り、礎石下のピットを確認したが、基壇は地山を削り出したものであった。

土坑の土層軸は単軸を基本としたが、大型のものや遺物等の遺存が良好なものは交差軸で観察した。単軸のものは、半割調査で行っている。溝等は特徴的な箇所を選び土層軸を設定した。

上記の遺構調査後あるいは途中で、旧石器調査の試掘を行った。調査深度は暗色帯下を限度とした。結果としては遺物の出土は見なかったが、周辺の旧石器遺跡が充実した際に、参考となるよう試掘坑各地点で土層図を作成した。

(実測方法) 記録図面類は住居跡1/20・カマド1/10を基準とし、袖石等の遺存の良いカマドは見通し図を取った。さらに、1/2図を加えたカマドもある。土坑・溝等も、1/20で記録化し、墓壇等は1/10で対応した。

神社跡は遺構の性格上、平面図は1/100・1/40平面図を主に施し、瓦溜まり・礎石列等は1/10図で対応した。1/100平面図には10cm毎の標高線を記録した。尚、神社跡断面図は1/10・1/20で作図した。

全体測量も神社跡と併せて、1/100と1/40平面図を作成し、遺跡の全体感を把握するため1/200で測量した箇所もある。全体測量と神社跡の一部の平面図は、業者に委託している。

急斜面のため平面図は、平板測量を主な手段としたが、カマド・一部の住居跡は簡易遣り方実測を施した。断面図も1/20・1/10で対応し、水系レベルを標高で表すようにした。

(遺物の取り上げ) 出土遺物は、全点の出土地点(レベル含む)の記録化を基準としたが、微細片は出土遺構・出土層位を明記し取りあげた。

取り上げ方は、遺構を重視し遺構内で収束するように番号を付した。遺構外出土遺物はグリッド毎

第I章 発掘調査の経過と調査方法

で、番号を付している。ただ、神社跡出土瓦は、発掘調査による出土の場合に点とレベルを記録したが、表面採集のものは、出土位置等の記録はせず、表採品として扱った。

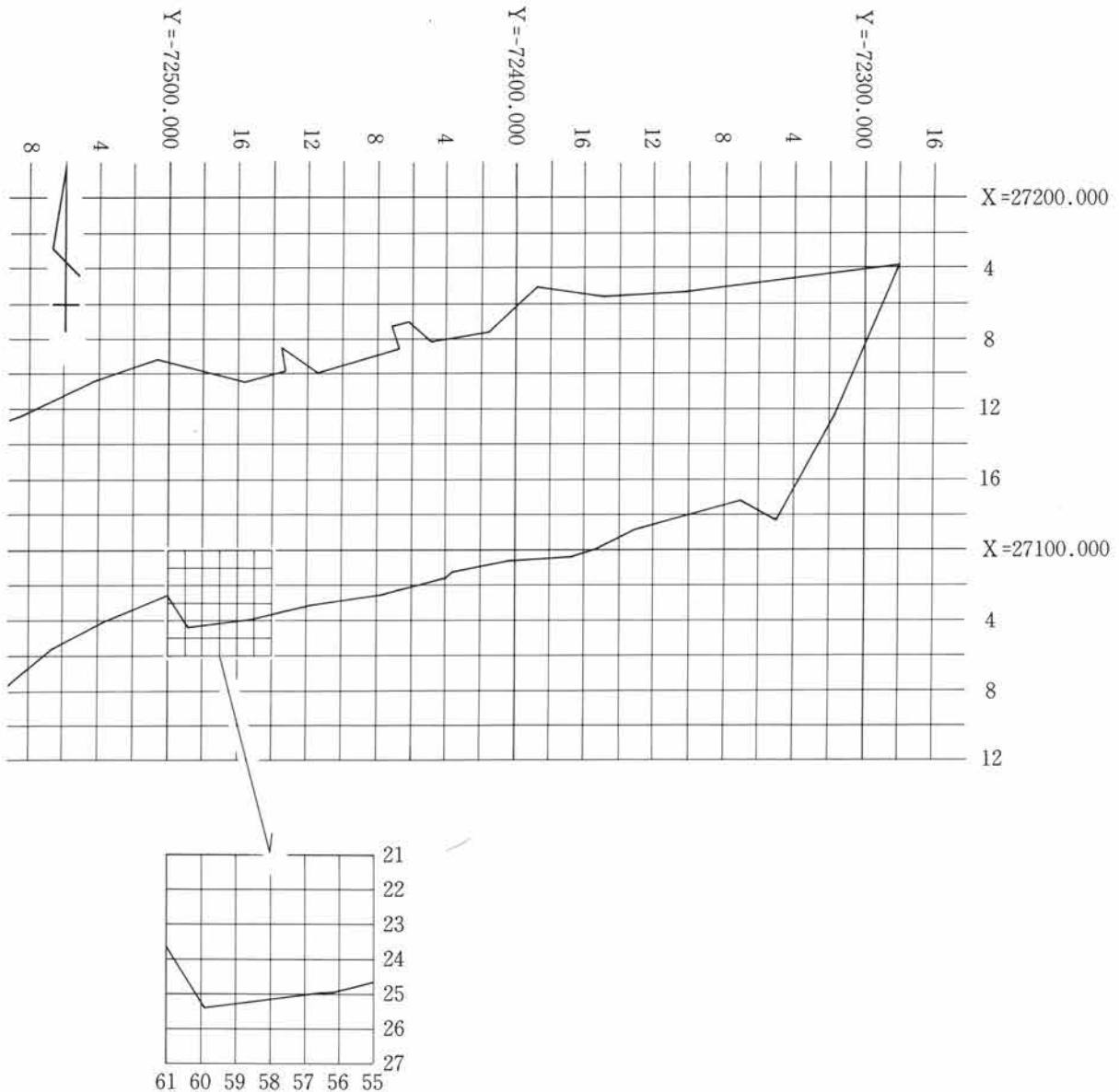
(写真撮影) 写真は、各遺構に対して撮影した。住居跡も遺物出土状態、遺物取り上げ後の床面上の状態(使用面)、床下の状態を各々撮影し、更にカマドも燃焼面と燃焼面下状態、特徴的な遺物の出土状態や土層に際しても、接写を行った。

使用した主な機材として、カメラはブローニー版
(120)一眼レフ6×7(ペンタックス)、ライカ版

(135)一眼レフ35mm(ニコンFM2)。フィルムはモノクロームネオパンSS及びリバーサルコダクローム64である。尚、通常の写真はブローニー版はモノクローム写真のみを扱った。

また調査途中から、写真撮影に伴う安全対策の必要上モニタリングカメラを使用し、その際はカメラがキャノンEOS、フィルムがトライXに変更された経緯がある。

(基本整理) 調査途中より、出土遺物の水洗、図面整理を行い、整理作業段階の省力化を図った。



第2図 グリッド設定図

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境

黒熊栗崎遺跡は群馬県多野郡吉井町黒熊に所在する。吉井町の東端にあたり藤岡市境に接し、鎭川右岸の段丘上に位置する。

鎭川は、南牧村南牧川と下仁田町西牧川を合わせ、群馬県南西部を東流し、藤岡市鮎川と合流した後、高崎市阿久津町で烏川と流れを重ねる。鎭川は鮎川と合流するまで、両岸に河岸段丘を発達させている。これら各段丘面及び沖積地は、当地域の居住・生産・文化・交通の要所であり、一文化圏として「甘楽の谷」とも呼称されている。

さて、この鎭川が形成した段丘は右岸において特に顕著であり、吉井層を基盤とした低位・中位・高位と三面の段丘が位置付けられている。また、南側の最上位には、丘陵性の山地地形が展開し、いわゆる「多野山地」に延長する。ただし本遺跡の南側の丘陵性の山地は鮎川扇状地と土合川沖積地によって挟まれた恰好となり、独立した様相を呈す。

鎭川右岸に横列する河岸段丘は、鮎川によって収束するが、特に高位段丘と丘陵性山地地形は本遺跡周辺が最も東端に位置するといえよう。鮎川以東は、鮎川及び神流川の氾濫等によって形成された藤岡台地が面し、関東平野へと更に広がる。換言すれば、本遺跡周辺は丘陵性地形（山地形）と平坦地形（平野）との接点ともいえるのである。尚、高位段丘は開析が進み、丘陵性山地部分との境界が明瞭ではなく、連続した斜面地形を呈している。

鎭川右岸段丘では中位段丘面が広い面積を誇る。洪積台地であり、給排水・日照なども利便な要素が内在し、現在も集落・畑といった土地利用が頻繁で、低位段丘とともに人間活動の拠点ともなっている。本遺跡も、この中位段丘と高位段丘との境界に接し、中位段丘上集落と高位のそれとの比較等検討課題は多い。高位段丘と中位段丘との接点は、比較的明瞭な地形変換線で現れている。高位段丘は丘陵性の地形を主とするが、中位段丘は平坦地形を保証

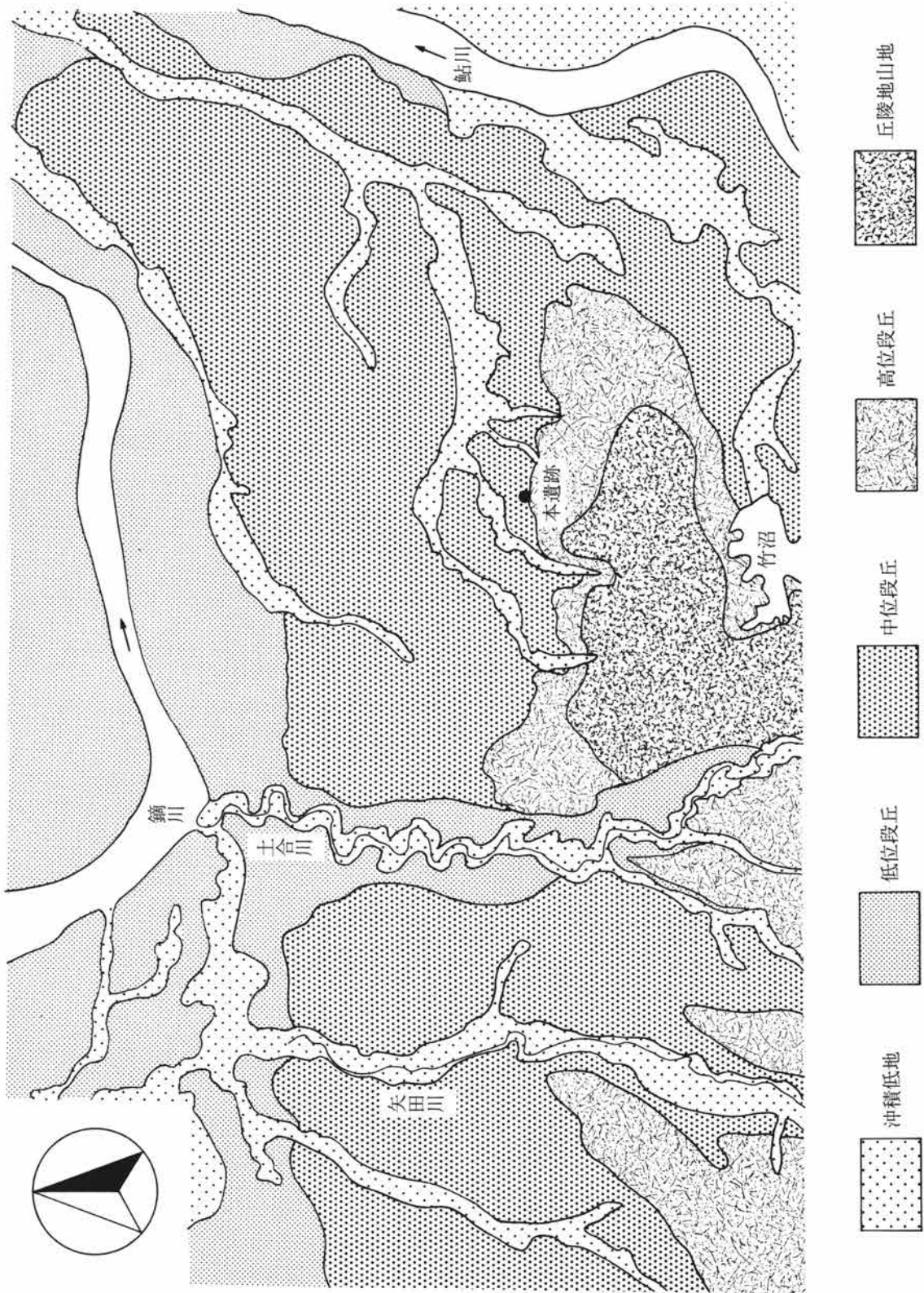
した形態となる。そのため、集落遺跡は中位段丘上に濃密な分布状態を呈しており、この延長から高位段丘の裾部へと集落が広がる様相を呈している。本遺跡の奈良・平安時代集落はこの中位と高位段丘の集落分布を具現化しており、中位段丘集落の高位段丘への進出をも示唆している。

この中位段丘上の地形は、北側へ緩やかな傾斜を呈すほぼ平坦な地形が主だが、樹枝状に伸びた沖積地が各小河川を中心に台地を刻む。特に本遺跡北側では鮎川下流域へ伸びる沖積地が複雑に台地を分割しており、この沖積地の土地利用と画された台地の集落分布が集落の性格の側面を表しているのではないだろうか。

本遺跡は、第3図にもあるように中位段丘と高位段丘の変換線にあたり、および周辺を沖積地が囲む形態をとっている。中位段丘と高位段丘及び丘陵性山地、更に沖積地を近距離に持つ地理的条件は、鎭川右岸河岸段丘上の遺跡群の中でも本遺跡及び周辺は特筆する要素を示している。

次に低位段丘を概観すると、中位段丘との変換線を崖線で画す場合が多く、地形成因は大きく異なる。沖積地とは緩傾斜を連続し平坦地形が保証されているため、中位段丘とともに積極的な土地利用・開発が集中し、吉井町の中心部分ともなっている。集落遺跡・郡衙・寺院跡等多くの包蔵地も予想されており、当地域の低位段丘への進出が、古代より積極性を持って果たされていた動態が理解されよう。この低位段丘は土合川流域でも狭小ながら存在し、例えば多比良平野遺跡等が調査されている。

沖積地は前述の土合川・矢田川更に鎭川流域で確認され、水田等の土地利用がなされている。前述した本遺跡周辺の沖積地は、本遺跡背後の丘陵性山地中の湧水より小谷が発達し、樹枝状に段丘を刻む。これら小谷は本遺跡の北側で合わさり、狭小ながらも連続して鮎川へと北流する。現状も水田地帯としての利用が果たされており、周辺地域の水田耕作を考える際には重要な地形と位置付けられよう。尚、小谷の谷頭は湧水利用の貯水池が設けられている。



第3図 周辺の地形区分 国土地理院2万5千分の1「高崎」「富岡」「藤岡」「上野吉井」使用

第2節 歴史的環境

本節では、周辺の遺跡を概観するが、既に当該地域では一連の上信越線調査に伴う報告書により、歴史的環境が詳細に述べられている。各報告書も併せて参照していただきたい。

(旧石器時代) 近年岩宿時代とも呼称されているが、本節では旧石器時代とし、周辺遺跡の報告書と合わせたい。

藤岡市教委が積極的に調査をしている。古くは竹沼遺跡(37d)が著名である。報告書では、表採・住居跡覆土出土資料にもかかわらず、両面加工石器・搔器・石核が報告され出土層位も軟質ロームと想定している。当時の群馬県内の旧石器時代調査レベルを勘案するに画期的な報告といえよう(小島1978文献25)。その後、藤岡市教委は藤岡北山遺跡・山間遺跡・緑埜上郷遺跡(38h)等の旧石器時代調査を重ね、また、緑埜島遺跡(38k)や三ッ木東原遺跡(10a)・白石中郷遺跡(18)の表採品を資料化している。AT前後の石器としては、緑埜上郷遺跡(38h)出土の剥片や緑埜島遺跡(38k)のナイフ形石器が知られる。また、三ッ木東原遺跡(10a)・白石中郷遺跡(18)では軟質ロームに層位比定される槍先形尖頭器が出土している。

吉井町内では、一連の上信越線調査による例が充実する。出土層位はAT下に集中する。多比良追部野遺跡(19)では石器ユニットが6箇所、矢田遺跡では1箇所が確認され、黒熊八幡遺跡(22)でもAT下より数点の石器が出土している。吉井町教委調査においては、新堀城跡(34)において尖頭器が表採されている(文献2)。

(縄文時代) 上位・中位段丘上に多くの遺跡が分布する。傾向としては前期遺跡が比較的多いが、調査例を重ねるに従い、他の時期も様相が明らかになるだろう。また、当地域の縄文時代遺跡分布は鬼形芳夫・内木真琴の作業に詳しい(鬼形・内木1988)。同様に参照していただきたい(文献35)。

草創期・早期：本遺跡に近接する黒熊遺跡群(14)で槍先形尖頭器が出土している。その他で

は、竹沼遺跡(37)・白石北原遺跡(10d)で有舌尖頭器や尖頭器の出土が報じられ、東原D₁遺跡(10b)、入野遺跡(13)では押型文の出土が見られる。

前期：前半の関山式・黒浜式期はやや劣勢である。多比良追部野遺跡では住居跡1軒が検出されている。後半の諸磯式期は遺構・遺物とも各段丘上で確認されている。特に従来b式からc式の遺跡の様相は上位の段丘に集中する傾向が指摘されているが、近年の調査により、低位段丘の遺跡例えば藤岡市滝下遺跡等の存在が知られている。中位・高位段丘の遺跡としては入野遺跡(13)・黒熊第5遺跡(14)・白石根岸遺跡(25)が挙げられ、数軒の住居跡が確認されている。

中期：前半段階の遺跡は少ないが、遺物の出土は多く見られるため、おそらく集落遺跡も中位段丘を中心に存在すると思われる。初頭期の遺跡としては、藤岡北山遺跡や黒熊八幡遺跡(22)で五領ヶ台式土器を出土した住居跡が、薬師原遺跡(27)では土坑が調査されており注目したい。

中葉段階でも目立った遺跡は無いが、吉井町誌(文献2)等で個人所蔵の阿玉台式土器等が紹介されており、出土地点からも遺跡は中位段丘に占地するものと思われる。

後半の加曾利E式期になると調査例は多い。中位段丘に限らず、小串塚原遺跡(9)のように低位段丘にも分布が見られる。加曾利E I式あるいは出現期の竹沼遺跡(37)、敷石住居跡を検出した白石大御堂遺跡(26)は著名である。その他では薬師原遺跡(27)や藤岡平地区遺跡群(48)・白石北原遺跡(10)等で住居跡や土坑が検出されている。

後・晩期：低位段丘上や鮎川沖積地・扇状地上の遺跡が知られる。特に藤岡市の一連の調査では、良好な遺跡群を確認している。例えば、緑埜地区遺跡群(38)内の鍛冶谷戸遺跡(38d)では堀之内式土器や加曾利B式土器の出土が見られ、さらに安行3b式・大洞B-C式が出土する土坑を検出している。薬師原遺跡(27)では称名寺式を伴う土坑が調

第Ⅱ章 環 境

査された。吉井町内では小串塚原遺跡（9）や黒熊栗崎遺跡（23）等で後期～晩期の土器片が出土しているがやや希薄な存在である。その他、第4図範囲外だが藤岡市谷地遺跡・山間遺跡・薬師裏遺跡・神明北遺跡が当該期の遺跡として著名な存在である。

（弥生時代） 遺跡数は多くはない。中期初頭期に比定される藤岡市沖Ⅱ遺跡は沖積地に進出した該期遺跡として北関東地域屈指の評価を得ている。第4図内では白石大御堂遺跡（26）で遠賀川式系の壺形土器や岩櫃山式系の甕形土器が出土している。緑埜遺跡群の緑埜上郷遺跡（38h）でも破片の出土を見る。

その他の中期の遺跡では第4図範囲外で神保富士塚遺跡や神保植松遺跡・長根羽田倉遺跡が上信越自動車道関連の調査で良好な資料を提供している。

後期になると、鍋川中位段丘を中心に遺跡数は増加する。入野遺跡（13）・黒熊遺跡群（14）・多比良追部野遺跡（19）等で集落跡が検出されている。これら後期の集落は大型の台地上に営まれる傾向が窺われ、人口の増大及び労働力の結集等の必要性が背後に存在し、大型化へと発展していったのであろう。大型集落は周辺地域との接触も頻繁であり、出土する土器からもその交換と融合の様相が看取されよう。

（古墳時代） 当地域の古墳は、県下においても濃密な分布を誇る。しかし本遺跡は、該期の遺構、特に古墳そのものが検出されておらず、本節では、周辺の集落遺跡を概観するに止どめたい。

前期の集落跡としては、前述の多比良追部野遺跡（19）や入野遺跡（13）が鍋川右岸中位段丘上に営まれる。鮎川流域では竹沼遺跡（37）で弥生終末～初頭期の住居跡が確認されている。

中期は緑埜地区遺跡群（38）や薬師原遺跡（27）に顕著な住居跡が確認されている。

後期は中位段丘に色濃く分布する。おそらく、各中位段丘に分布するといえよう。入野遺跡（13）・黒熊遺跡群（14）・多比良追部野遺跡（19）・白石大御堂遺跡（26）・東沢遺跡（28）・竹沼遺跡（37）・

緑埜遺跡群等（38）は大型集落跡の一部であろう。

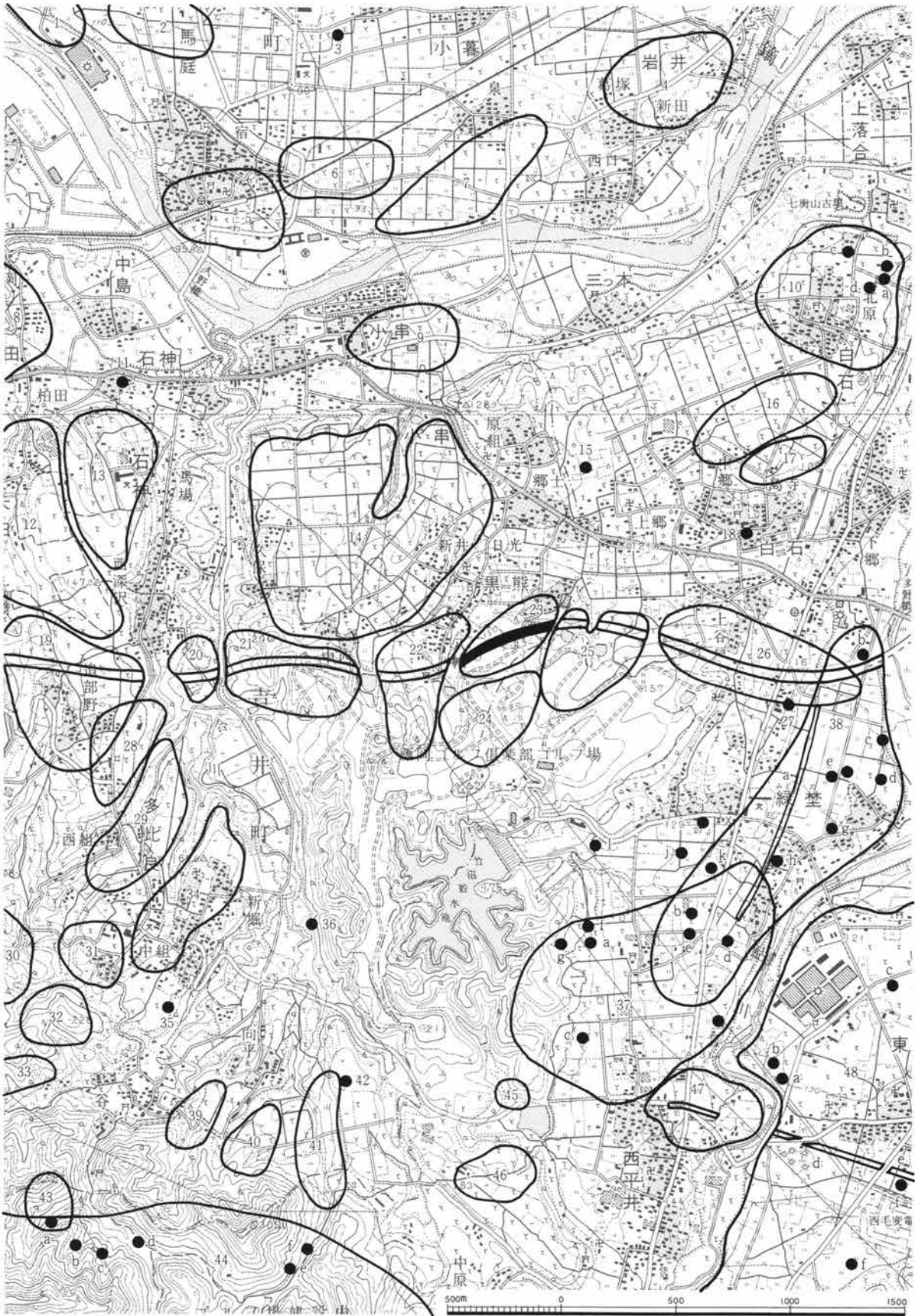
段丘面としては高位及び低位段丘に集落跡が少ない。水田跡等の生産遺構の検出も無く、特に低位段丘における該期集落跡・生産跡の検出が望まれよう。

（奈良・平安時代） 集落跡は古墳時代後期と継続して中位段丘に分布する。ただ高位段丘への進出が著しく、本遺跡（23）・黒熊八幡遺跡（22）・黒熊中西遺跡（21）等の急傾斜地形への住居跡立地も目立つ。おそらく低位段丘へも積極的に居住が行われており、鍋川左岸の包蔵地（1～7）や右岸低位段丘の遺跡（8・9）や土合川流域の低位段丘上の多比良平野遺跡（20）が相当しよう。多胡碑もこの低位段丘上に位置し、馬庭東遺跡（5）のように官衙・寺院跡等の存在も予想されている遺跡も多い。

さらに、高位段丘にも該期の寺院跡が占地する。礎石建物数棟を調査した黒熊中西遺跡（21）がその代表だが、本遺跡の南側にも塔之峰廃寺（24）が存在し、黒熊八幡遺跡（22）でも瓦の出土が見られ、周辺に寺院跡の存在を予測しておきたい。

高位段丘の南側には丘陵性山地が控え、瓦・須恵器を対象とした窯跡群が存在する。滝の前窯跡（35）産出の瓦は国分寺補修期のものとされ平安時代以降の瓦窯といわれる（須田1989文献19）。下五反田窯跡（36）は国士館大学が調査し、9世紀末～10世紀の所産と位置付けている。その他では金山窯跡は国分寺創建期の瓦窯とされ、末沢窯跡は8世紀中頃と比定されている。また、藤岡・吉井窯跡群（44）は近年藤岡市教委が下日野・金井窯跡群（44d・e・f）として、16基の窯跡を調査した。また、その他に製鉄炉4基も併せて検出している。

該期のその他の生産遺構としては、鮎川沖積地の緑埜地区遺跡群で水田・畠と溜井が調査され、白石根岸遺跡と黒熊八幡遺跡で沖積地の谷頭部分のAs-B下水田跡が確認されている。また、鍋川左岸低位段丘や沖積地では、現状で調査例が見られないが、存在は確定的で、今後の調査蓄積に期待が集まる。



第4図 周辺の遺跡分布図 (国土地理院2万5千分の1「高崎」「藤岡」使用)

第Ⅱ章 環 境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名称	旧	縄	弥	古	奈	平	瓦	窯	中	近	遺跡の概要	参考文献
1						○						鑄川左岸の低位段丘面に位置する。	
2						○						鑄川左岸の低位段丘面に位置する。	
3	下山遺跡										◎	富岡丘陵の南、鑄川左岸の低位段丘。As-A埋没の畑・溝跡。	1
4			○		○	○	○					鑄川左岸の低位段丘面に位置する。	
5	馬庭東遺跡		○			○	○					鑄川左岸の低位段丘面。寺院跡(推定多胡寺)といわれる。軒平瓦・軒丸瓦採集。	2
6			○			○						鑄川左岸の低位段丘面に位置する。	
7						○						鑄川左岸の低位段丘面に位置する。	
8			○			○	○					鑄川右岸の低位段丘面に位置する。	
9	小串塚原遺跡		◎	◎		◎					◎	鑄川右岸の低位段丘面の微高地。縄文中～晩期・弥生時代包含層、平安時代住居、中世遺物。	3
10	東原遺跡		○			○						鮎川左岸の中位段丘面に位置する。	
a	三ツ木東原遺跡	○										槍先形尖頭器の表採資料。	4
b	東原遺跡(D ₁)		◎		◎	◎						縄文時代早・前・中期の土器、古墳2基、平安住居1軒、他。	
c	東原Ⅱ遺跡(D ₂)		◎			◎					◎	縄文中期土器、奈良～平安住居9軒、中世土壇1基、他。	
d	白石北原遺跡		◎			◎					◎◎	縄文時代中～後期住居・草創期石器・前期土器、平安時代柱穴、中世溝、近世建物跡・溝。	5
11	祝神遺跡			○								鑄川右岸の中位段丘面に位置する。95片の表採資料。	6
12	千保原遺跡		○		○	○	○					鑄川右岸の中位段丘面に位置する。	
13	入野遺跡		◎	◎	◎						◎	鑄川右岸の中位段丘面に位置する。縄文前期・弥生後期・古墳前後期の集落、中世の墓域。	2・7 8・9 10
14	黒熊遺跡群		◎	◎	◎	◎	◎					鑄川右岸の中位段丘面に位置する。縄文～平安時代の集落、方形周溝墓。	3・11 12
15	三ツ木橋向遺跡											鑄川右岸の中位段丘面。時期不明の溝を検出。昭和58年調査。	
16						○	○					鑄川右岸の中位段丘面に位置する。	
17			○									鑄川右岸の中位段丘面に位置する。	
18	白石中郷遺跡	○										鮎川支流の猿田川左岸、河岸段丘面に位置する。槍先形尖頭器の表採資料。	4
19	多比良追部野遺跡	◎	◎	◎	◎	◎	◎				◎◎	鑄川右岸の中位段丘面に位置する。旧石器～奈良・平安時代の集落遺跡、中近世の畠・墓域・道、近世溜池。	13・14 15
20	多比良平野遺跡					◎						中西丘陵と多比良台地に挟まれた土合川右岸の河岸段丘面に位置する。平安時代の住居跡。	16

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名称	旧	縄	弥	古	奈 平	瓦	窯	中	近	遺跡の概要	参考文献
21	黒熊中西遺跡		◎		◎	◎	◎			◎	鍋川右岸の高位段丘面に位置する。古墳～平安時代の住居・礎石建物・井戸・土坑、他。寺院跡。	17・18
22	黒熊八幡遺跡	◎	◎			◎	◎		◎	◎	鍋川右岸の高位段丘面に位置する。縄文～平安時代の住居跡。	14・15
23	黒熊栗崎遺跡		◎	◎		◎	◎			◎	本報告書の遺跡。鍋川右岸の中位・高位段丘面に位置する。	
24	塔之峰遺跡						○	○			鍋川右岸の高位段丘面。寺院跡といわれる。瓦・土器等表採。	2・19
25	白石根岸遺跡		◎			◎					鍋川右岸の中位段丘面東部。縄文前期住居、奈良・平安住居、他。	16
26	白石大御堂遺跡		◎		◎	◎	◎		◎	◎	鮎川左岸の沖積低地～ローム台地上部に位置する。縄文時代中期住居、中世寺院跡。	4・20
27	薬師原遺跡 (F ₉)		◎		◎					◎	鮎川左岸の東と西の沖積低地に挟まれた南北にのびる台地上。縄文・古墳時代住居、中世ビット列、他。	4・21
28	東沢遺跡		○	○	◎	◎					鍋川右岸の中位段丘面に位置する。古墳～平安時代の住居跡。	22
29			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
30			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
31			○								鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
32			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
33						○	○				鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
34	新堀城跡	○	○							◎	土合川に解析された高位段丘面に位置。旧石器・縄文表採。	2・23
35	滝の前窯跡							○			土合川を南に遡った谷あい。窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。	19
36	下五反田窯跡							◎			土合川右岸の山裾斜面。昭和51年地下式無階無段登窯2基と灰捨場を調査。	10・24
37	竹沼遺跡 (F ₁)										鮎川左岸、多野山地に続く丘陵上に位置する。	
a					◎						昭和48年度調査古墳時代後期の住居1、溝3。	4・10
b					◎						昭和50年度調査古墳時代後期の住居。	12・25
c					◎	◎					昭和51年度調査古墳～平安時代の集落。	
d		◎	◎	◎	◎	◎					昭和52年度調査旧石器・縄文～平安時代の包蔵地、集落。	
e	西平井島遺跡				◎	◎				◎	古墳～平安時代の住居、中世竪穴・墓壇、他。(F ₁₃)	4・26
f	西平井天神遺跡									◎	中世の石組み井戸。(F ₁₃)	
g	西平井八幡遺跡				◎	◎		◎			古墳～平安時代の住居・窯跡・溝、他。(F ₁₃)	

第Ⅱ章 環 境

番号	遺 跡 名 称	旧	縄	弥	古	奈	瓦	窯	中	近	遺 跡 の 概 要	参 考 文 献
38	緑埜地区遺跡群										(F ₂)	
a	緑埜遺跡群		◎		◎	◎			◎	◎	鮎川左岸。台地の竹沼・緑埜上郷地区、低地の緑埜地区を調査。	15
b	緑埜地区水田遺跡					◎					鮎川左岸の沖積地。平安時代の水田・溜井・畠。	4・27
	大御堂遺跡		◎						◎	◎	鮎川左岸の沖積微高地。縄文時代埋設土器、中世掘立柱建物。	
c	緑埜押出シ遺跡		◎			◎					鮎川左岸の微高地。縄文時代後期土壙、奈良・平安時代集落。	4・28
d	緑埜鍛冶谷戸遺跡		◎								鮎川左岸の小規模な段丘上。縄文時代後期配石墓、土坑群。	4
e	緑埜シモ田遺跡		◎								鮎川左岸の沖積地。縄文時代晩期土壙1基。	4
f	緑埜水押遺跡		◎		◎						鮎川左岸の沖積地。縄文中期、古墳時代集落。	4・28
g	緑埜中郷遺跡		◎								鮎川左岸の洪積台地。縄文時代中期。	
h	緑埜上郷遺跡	◎	◎	◎	◎	◎				◎	鮎川左岸の洪積台地上。旧石器出土、古墳時代集落、近世屋敷。	4・28
i	中里遺跡					◎			◎	◎	鮎川左岸の洪積台地上。奈良時代集落、中・近世の土坑・井戸。	4・28
j	大工ヶ谷戸遺跡		◎			◎					鮎川左岸の洪積台地上。縄文前期～中期、奈良・平安時代集落。	4・28
k	緑埜島遺跡	○	◎		◎						鮎川左岸の洪積台地上。旧石器出土、古墳時代集落。	4・28
l	五領遺跡		○								鮎川左岸。縄文時代前期。	
39			○					○				
40			○					○				
41			○					○				
42	中ノ原城跡		◎		◎	◎	◎		◎		多野丘陵の土合川に侵食された台地上。縄文土器、古墳2基。	2・29
43	不動沢遺跡							○				2
44	藤岡・吉井窯跡群										多野・藤岡丘陵。	
a	山ノ神A								○		須恵器散布。	19
b	山ノ神B								○		瓦散布。	
c	山ノ神C								○		須恵器散布。	
d	下日野・金井 f ₁								◎		窯跡2基発掘。	4
e	下日野・金井 a ₄								◎		窯跡1基発掘。	
f	下日野・金井 a ₂								◎		窯跡4基発掘。	
45										○		
46	上ノ場遺跡							○			寺院跡か。軒丸瓦・軒平瓦・土器出土。	19

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名称	旧	縄	弥	古	奈	瓦	窯	中	近	遺跡の概要	参考文献
47	西平井久保田代遺跡		○		○	○				○	鮎川左岸台地上。縄文前期住居・中期土坑、古墳～平安時代の住居、窯跡。近世道状遺構。	30・31
48	藤岡平地区遺跡群										鮎川右岸、藤岡台地上の扇状地地形の扇頂部一帯に位置する。	
a	飛石A (F ₆)		○		○						縄文時代中期土坑・配石状遺構、古墳3基。	4
b	飛石B		○								縄文時代中期。	
c	F ₁₅		○			○			○	○	縄文時代中期住居・集石、古墳9基、平安時代住居、他。	32
d	東平井塚間遺跡		○		○				○	○	縄文時代後期土坑、古墳周堀、飛石の礎。近世道状遺構。	14・30 33
e	東平井官正前遺跡					○			○	○	奈良～平安時代の住居、中世井戸、近世畠・溝。	15・30
f	F ₁₂		○		○	○				○	縄文時代中～後期の住居・配石等、古墳～平安時代の住居・水田、中世井戸、他。	26・34

参考文献

- 1 茂木由行『下山遺跡』1990 吉井町教育委員会
- 2 吉井町誌編さん委員会『吉井町誌』1974
- 3 矢島浩『塚原遺跡黒熊第1遺跡発掘調査報告書』1983 吉井町教育委員会
- 4 藤岡市史編さん委員会『藤岡市史資料編原始・古代・中世』1993 藤岡市
- 5 田野倉武男・志村哲『市内遺跡Ⅰ』1993 藤岡市教育委員会
- 6 外山和夫『群馬県吉井町祝神の弥生土器』『信濃34巻4号』1982 信濃史学会
- 7 尾崎喜左雄『入野遺跡』1962 吉井町教育委員会
- 8 茂木由行・矢島浩『入野遺跡』1985 吉井町教育委員会
- 9 茂木由行『入野遺跡Ⅲ』1986 吉井町教育委員会
- 10 群馬県史編さん委員会『群馬県史資料編2原始古代2』1986 群馬県
- 11 茂木由行『黒熊遺跡群発掘調査報告書(1)～(5)』1981～1985 吉井町教育委員会
- 12 群馬県史編さん委員会『群馬県史資料編1原始古代1』1988 群馬県
- 13 『年報8』1989(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下群埋文)
- 14 『年報9』1990 群埋文
- 15 『年報10』1991 群埋文
- 16 斎藤利昭『多比良平野遺跡白石根岸遺跡』1994 群埋文
- 17 須田茂『黒熊中西遺跡(1)』1992 群埋文
- 18 山口逸弘『黒熊中西遺跡(2)』1994 群埋文
- 19 須田茂『吉井町・滝ノ前遺跡の採集遺物とその性格』『群馬文化第220号』1989 群馬県地域文化研究協議会
- 20 綿貫鋭次郎『白石大御堂遺跡』1991 群埋文
- 21 古郡正志『F₉葉師原遺跡』1985 藤岡市教育委員会
- 22 茂木由行『東沢遺跡折茂東遺跡』1987 吉井町教育委員会
- 23 茂木由行『新堀城跡』1991 吉井町教育委員会
- 24 戸田有二他『群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡他』『考古学研究室発掘調査報告書』1984 国士館大学文学部考古学研究室
- 25 前原豊他『F₁竹沼遺跡』1978 藤岡市教育委員会
- 26 茂木努『年報(7)』1992 藤岡市教育委員会
- 27 田野倉武男他『F₂緑埜地区遺跡群Ⅱ』1987 藤岡市教育委員会
- 28 古郡正志・田野倉武男『F₂緑埜地区遺跡群Ⅰ』1982～1985 藤岡市教育委員会
- 29 茂木由行『中ノ原城跡』1989 吉井町教育委員会
- 30 石守晃『飛石砦跡東平井塚間・官正前・土井下遺跡西平井久保田代遺跡』1994 群埋文
- 31 『年報12』1993 群埋文
- 32 寺内敏郎『F₁₅藤岡平地区遺跡群Ⅲ』1992 藤岡市教育委員会
- 33 『年報11』1992 群埋文
- 34 古郡正志『F₁₂藤岡平地区遺跡群Ⅰ』1990 藤岡市教育委員会
- 35 鬼形芳夫・内木真琴『鮎川右岸下流域段丘上における縄文時代遺跡分布調査』『群馬の考古学』1988 群埋文
- 36 川原嘉久治『西上野における古瓦散布地の様相』『研究紀要-10-』1992 群埋文

第Ⅱ章 環 境

(中・近世) 中世の遺構としては白石大御堂遺跡(26)で、寺院跡に伴う園池・土塁・掘立柱建物跡等が特筆されよう。また、各遺跡とも中世火葬墓・井戸・掘立柱建物跡等の遺構を確認されている。また新堀城跡(34)・中ノ原城跡(42)・飛石の砦(48d)・平井城等城館跡も山地部分に多く分布している。

近世の遺構は近年の調査でようやく注目され、資料化が進みつつある。各遺跡で溝・道路状遺構・井戸・掘立柱建物跡が検出されている。当地域の近世村落の景観復元も重要な課題である。また、本遺跡では近世～近代の所産とされる神社跡がある。

第3節 基本土層

本遺跡は鍋川右岸中位段丘と高位段丘の境に位置し、丘陵性の起伏に富んだ地形を呈する。調査では各地点の層位を記録化したが、本書では最も遺存度の高い土層を選び(第Ⅰ台地23-53グリッド)、基本土層とした。周辺遺跡の基本土層との比較の際に参考にしていただきたい

以下各層の説明を述べる。

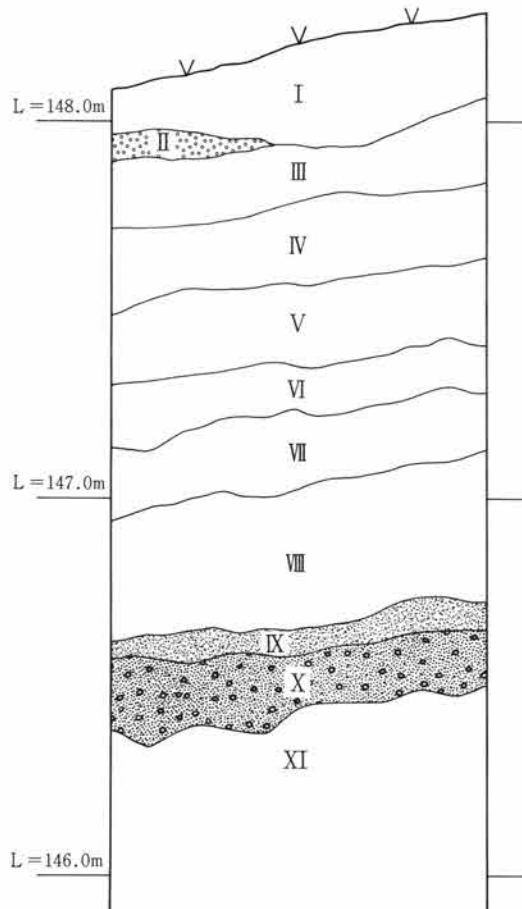
- I層 表土層
- II層 浅間A軽石層 (As-A) 地点によっては堆積の見られない箇所もある。
- III層 鈍褐色土層 地点によってはAs-Bが見られる。奈良・平安時代の遺物包含。下面遺構確認面。
- IV層 鈍褐色土層 台地全面を覆う。ローム質だが粘性弱く軟質。縄文中～後期の遺物包含。
- V層 暗褐色土層 ローム質で粘性弱い。縄文前期の遺物包含。
- VI層 褐色ローム層 全体に軟質だが、硬質ロームを塊状に含む。白色の細粒軽石を含む
- VII層 暗褐色ローム層 軟質。粘性強い安定したローム層。下面に不連続面。
- VIII層 黄褐色ローム層 いわゆる硬質ローム。
- IX層 黄褐色ローム層 硬質。As-BP(浅間板鼻褐色軽石)を粒状に含む
- X層 黄褐色ローム層 硬質。As-BP(浅間板鼻褐色軽石)を塊状に含む
- XI層 明褐色ローム層 軟質。As-MP(浅間室田軽石)を主体とする。下に従い白色化する。

以上の11層を基本土層としたが、ローム層各層位の生成や性格は今後の旧石器遺跡調査に伴い明らかになるものである。本遺跡調査当時は、浅間室田パミスの存在等は周知化されておらず、またローム中

の分層基準や色調は統一化されていなかった。さらに、XI層以下の掘り下げも一部行い、硬質ローム(暗色帯)を確認したが、周辺のローム層位の確認もされておらず、XI層以下の硬質ロームを暗色帯としては確定できなかった。極端に硬質な暗色帯の様相が、県内の他地域とは著しく異なるためでもある。

後の調査では、当地域による暗色帯にもAT極大値が見られ、例えば、白倉下原遺跡では肉眼で堆積状態が確認されている。旧石器時代の遺物もAT前後の暗色帯中の出土が圧倒的に多い。

本遺跡の場合、試行段階の調査とはいえ反省点として明記しておきたい。本節では周辺遺跡の層序を参考にして、上記の基本層位を提示した次第である。今後は、層位番号や色調の統一を含めて体系的な旧石器調査と分析が当地域の課題である。



第5図 基本層序(1:20)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

黒熊栗崎遺跡は、吉井町黒熊地内にあり鑄川右岸の中位段丘と高位段丘の境である丘陵性地形に占地する。本遺跡は上越線調査においては、黒熊地区端緒の調査であり、後に着手される黒熊八幡遺跡や黒熊中西遺跡の調査では、本遺跡の数々の調査経験が参考にされた。本遺跡を含むこれら3遺跡の調査区の殆どが急斜面を持つ丘陵性の台地に占められており、第Ⅰ章第3節で述べたように斜面地における、遺構覆土の色調差が少ない特徴を持っていた。このため、住居跡等の平面形確認に際しては、焼土や炭化物・遺物の散布状況を念頭に置き、試掘坑を副次的に設ける方法や、やや掘り下げてプランを明確に把握する方法をとった。この方法は、黒熊八幡遺跡と黒熊中西遺跡においても踏襲され、大規模な集落遺跡等を調査できた。

しかしながら、本遺跡調査着手時はこの地山と覆土の色調差に戸惑い、重複住居跡の新旧の把握等に困難が生じた。また、北側斜面地形が著しく北側壁の遺存は南側と比較するとやや悪い。住居跡平面規模等の比較は床面規模での把握が望ましいだろう。尚、掘り込みの深い住居跡もあり、本書では壁上端による計測値を優先している。

このような状況下で、古墳時代後期終末～奈良・平安時代の集落を中心とした調査を行ったが、住居跡以外にも様々な遺構が検出されている。以下遺構種毎の概略を説明する。

(竪穴住居跡)

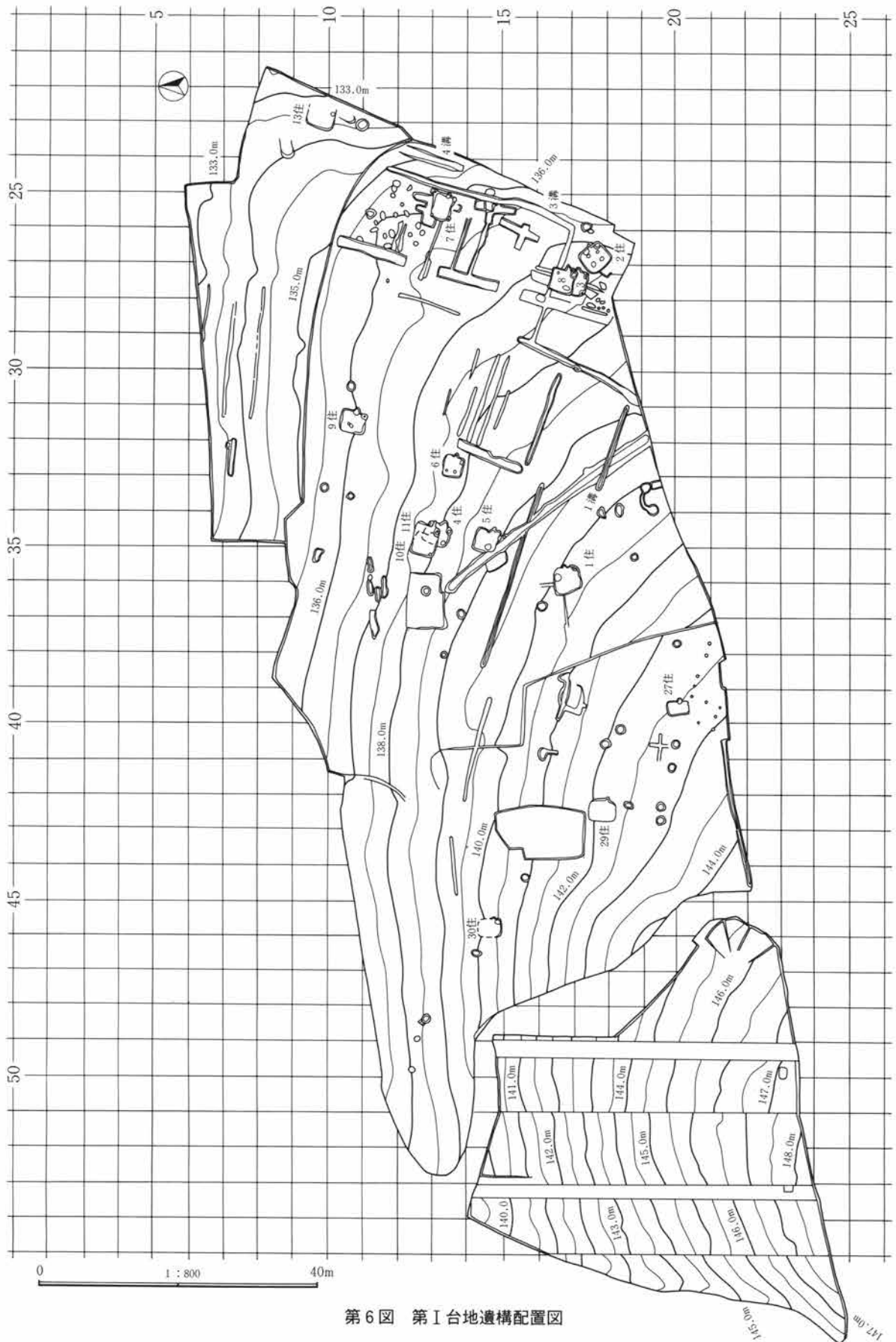
本遺跡で検出された住居跡は28軒を数える。古墳時代終末期のものが1軒、他は奈良・平安時代に比定されるものである。住居跡の細かな時期区分は避けるが、7世紀後半代が1軒、8世紀代が3軒、9世紀前半代が7軒、9世紀後半代から10世紀前半代が15軒、後半代が1軒、不明1軒と9世紀後半から10世紀前半代に居住の集中が見られたようだ。

分布は第Ⅰ台地調査区が若干多く16軒が検出され

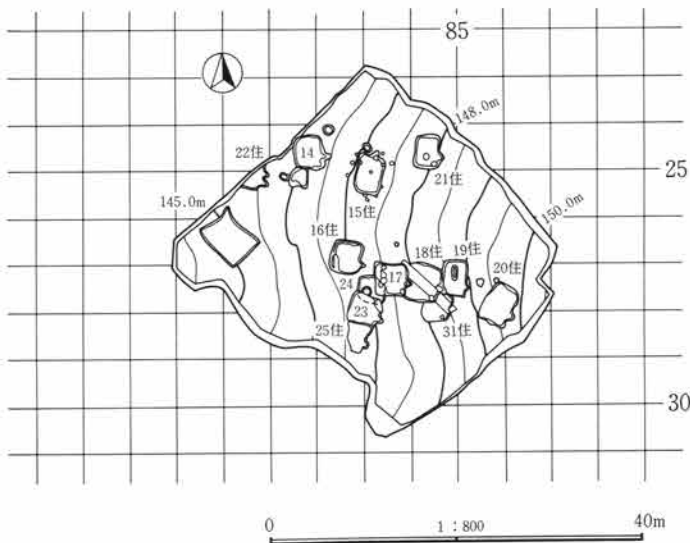
ているが、住居密度は第Ⅱ台地調査区が濃く、調査区域外への延長を考えると、集落規模は第Ⅱ台地がまとまった様相が窺えよう。

第Ⅰ台地調査区：本調査区は住居跡密度が比較的散漫な状況で、27号住・29号住・30号住は他の住居跡と距離を離して、高標高急斜面地形に単独の占地を見せる。この一群より低標高に位置する1号住・4号～6号住・9号～10号住は調査区中央の比較的傾斜の緩やかな平坦地形を選ぶ。さらに、調査区東端の崖状斜面との変換部には2号住・3号住・7号住・8号住・13号住が検出されており、13号住がやや距離を置くが一群の住居跡として認識できよう。このように、第Ⅰ台地調査区では、3群の住居跡群が看取された。その中で、2号住居跡のみが7世紀後半代の住居跡単独の検出であり、他の奈良・平安時代の住居跡と大きな時期差を持つ。おそらく丘陵上において1軒あるいは極少数の居住と見られ、居住者の性格や該期の集落感覚に興味を持たれる。また4号住では石組みのカマドが良好な状態で検出されている。当地域のみならず群馬県域は、利根川とその支流の上流域であり、素材となる河原石の入手が容易である。石組みカマドの例は他地域に比して多く、4号住もその範疇に入るものである。4号住カマドは遺存状態も良好であり、カマド構造を考える上で好資料となろう。

第Ⅱ台地調査区：対する第Ⅱ台地調査区は、重複の著しい状況だった。第Ⅰ台地調査区に比して、第Ⅱ台地調査区は斜面地形が著しく、狭小な集落設置空間に選地せざるを得なかった状況も考えられよう。重複する形態も、主軸に沿ったものや主軸に直交するものがあり、各住居間に何等かの居注意識が存在した要素が窺われる。また、本調査区には2軒の住居跡に小鍛冶施設が設けられていた。第Ⅱ台地調査区で検出された全ての住居跡には特定できないが、集落内生業が集中した様相として位置付けられよう。第Ⅱ台地調査区の住居跡群は北側へ伸びる傾向も見られ、集落の全容は判然としないが、狭小な斜面地形に占地した特定生業の集落の側面が把握できよう。



第6図 第Ⅰ台地遺構配置図



第7図 第Ⅱ台地遺構配置図

(土 坑)

本遺跡からは、多くの土坑・ピットが検出されたが、浅く、自然営力による落ち込み等は除外し、掘り込みのしっかりした55基を土坑として調査した。内訳は、8割以上が第Ⅰ台地調査区に偏り、第Ⅱ台地調査区では8基程度の検出にとどまった。

また、各土坑の出土遺物は貧弱であり、帰属時期の判断や土坑の性格の特定にまでは至らなかった。このうち、48号土坑は大型の方形土坑であり、完形の短頸壺の出土から墓塚としての可能性を見ている。その他には、円形の土坑が数箇所群在している。第Ⅱ台地調査区では、住居跡時期に併行するものもあるが、全体に埋土中にAs-Aを含むものが多く、近世～近代の所産とした。

(墓 塚)

3基の人骨を伴う墓塚が第Ⅰ台地調査区東端で検出され、出土遺物・埋土の様相から近世～近代の所産とした。出土遺物は1号墓塚より土師質小皿と磁器・古銭が出土した。古銭は「寛永通寶」1点と北宋銭5点であり、種類を変えた副葬状況を見せた。これは「寛永通寶」11枚で占められる2号墓塚と対照的な在り方である。1号墓塚と2号墓塚は距離も近接し、主軸方位や規模も近似することから、副葬形態の差は被葬者の性格あるいは当時の葬法の差が

具現化したものと思われる。

(溝)

4条の溝が調査されている。殆どが近世～近代の所産であり、地割り・区画溝といった小規模なものである。特に、3号・4号溝周辺は近世～近代に比定される小ピットや土坑が群在し、何等かの施設の区画溝の可能性が高い。尚、5号溝は急斜面地形に沿った走行を示し、あるいは道路状遺構としての性格も考えられた。

(掘立柱建物跡)

第Ⅰ台地調査区で1棟を検出した。調査区域外に伸びるため、全容は把握できないが底を持つ建物が想起される。調査区域外で周知されている塔之峰廃寺の存在から、時期は平安時代の可能性もある。

(神社跡)

第Ⅰ台地調査区と第Ⅱ台地調査区に挟まれた地点で、基壇を持つ礎石建物跡1棟が確認され、周辺より瓦が多量に出土したことから瓦葺建物と捉えた。

基壇は四方を溝・道路・土塁で囲まれており、基壇南側に建つ礎石建物は3×4間のしっかりした作りで、おそらく本殿部と思われ、拝殿部を付設した形態をとっていた。

当神社跡は、明治43年の浅間神社に合祀された記録があり、当時、地元では「平地神社」「おへっちゃま」と呼称された記録・伝承がある。本遺跡の調査はこの「平地神社」の位置を追証したことになり、近世～近代における農村地における神社形態を具体化した成果である。また、出土した瓦の組成から、神社上屋構造が切妻屋根ではなく、入母屋あるいは寄せ棟の可能性が指摘できた。

(その他)

古墳時代初頭期の「S」字状口縁を呈する台付き甕2個体による土器埋設遺構が第Ⅰ台地調査区で検出されている。土坑等の掘り込みを持たず、遺構としての積極性を持たないが、当地域では比較的類例に乏しい資料であり、今後の資料蓄積が待たれる。

第2節 竪穴住居跡

前節でも述べたように、本遺跡で検出された竪穴住居跡は28軒である。鍋川右岸高位段丘上に占地する集落跡としては一般的な在り方と窺われるが、それぞれの性格に特徴をもち、小規模な集落とはいうものの当地域の特徴を帯びた良好な集落跡である。

第Ⅰ台地では15軒、第Ⅱ台地では13軒を調査した。第Ⅰ台地は面積も広く、比較的平坦地形に恵まれており、居住域として適した条件を備える。第Ⅱ台地の住居跡は北側への急傾斜地形に属しており、東西に馬の背状の台地が迫る狭小な間地を選地している。つまり、比較的平坦地形の第Ⅰ台地の住居跡分布は薄く、居住に適さない斜面地の第Ⅱ台地での住居跡分布は、面積・地形に比して濃密であり、狭小な地形を選ぶ傾向は重視しておきたい。これは、平坦地形に住居跡を集中する黒熊中西遺跡や黒熊八幡遺跡とは様相を若干異にしており、時期的なものか集落の性格が反映したのかは課題である。

住居跡は2号住を除き、他の26軒は奈良・平安時代に比定される。平面形は方形を基調とし、極端に大型のものや小型の住居は無い。東側壁にカマドを設け（15号住は北側に設置する。13号住はカマドを逸失する）、住居跡主軸方位も同様な傾向を見せる。遺存状況は、比較的良く壁高30cm以上のものも多い。カマドは石組のものも見られ、当地域の特徴を見せる。4号住は、羽釜を煙道部に設けた例として興味を引く。

重複状態は、第Ⅱ台地に顕著である。狭小な居住域に一定の居住を目指した結果なのだろうか、7軒が重複した状態で検出されている。重複方向も東西と南北に分かれ、一定の規則性も看取されよう。22号住も新旧のカマドが設置されており、居住の変化が現れたものであろう。第Ⅰ台地は5軒の重複が2軒・3軒単位で確認された。全体的に散漫な分布を鑑みると、住居の重複に移築・拡張等の積極的な理由が存在したのかもしれない。

1号住居跡

第Ⅰ台地調査区の中央やや東寄りで見出された。単独で確認され目立った重複遺構はない。近接する住居跡もなく、北東12mの5号住居跡が最も近い。

平面形は約4×3.5mの隅丸方形を呈し、北壁と西壁長が約3.6mのやや長い。また、東壁がカマドに向かって彎曲する特徴を持つ。深さは、約40cmを測り比較的遺存は良い。壁の立ち上がりもしっかりしているが、北側傾斜のため、北壁の遺存は20cm以下で、特に北西隅は壁が逸失する。

床面は僅かな凹凸が見られるがほぼ平坦面を築く。貼り床で小型のローム塊を主体にした鈍黄褐色土を埋めている。硬化面は中央部より南側に顕著で、特にカマド前庭部が硬かった。

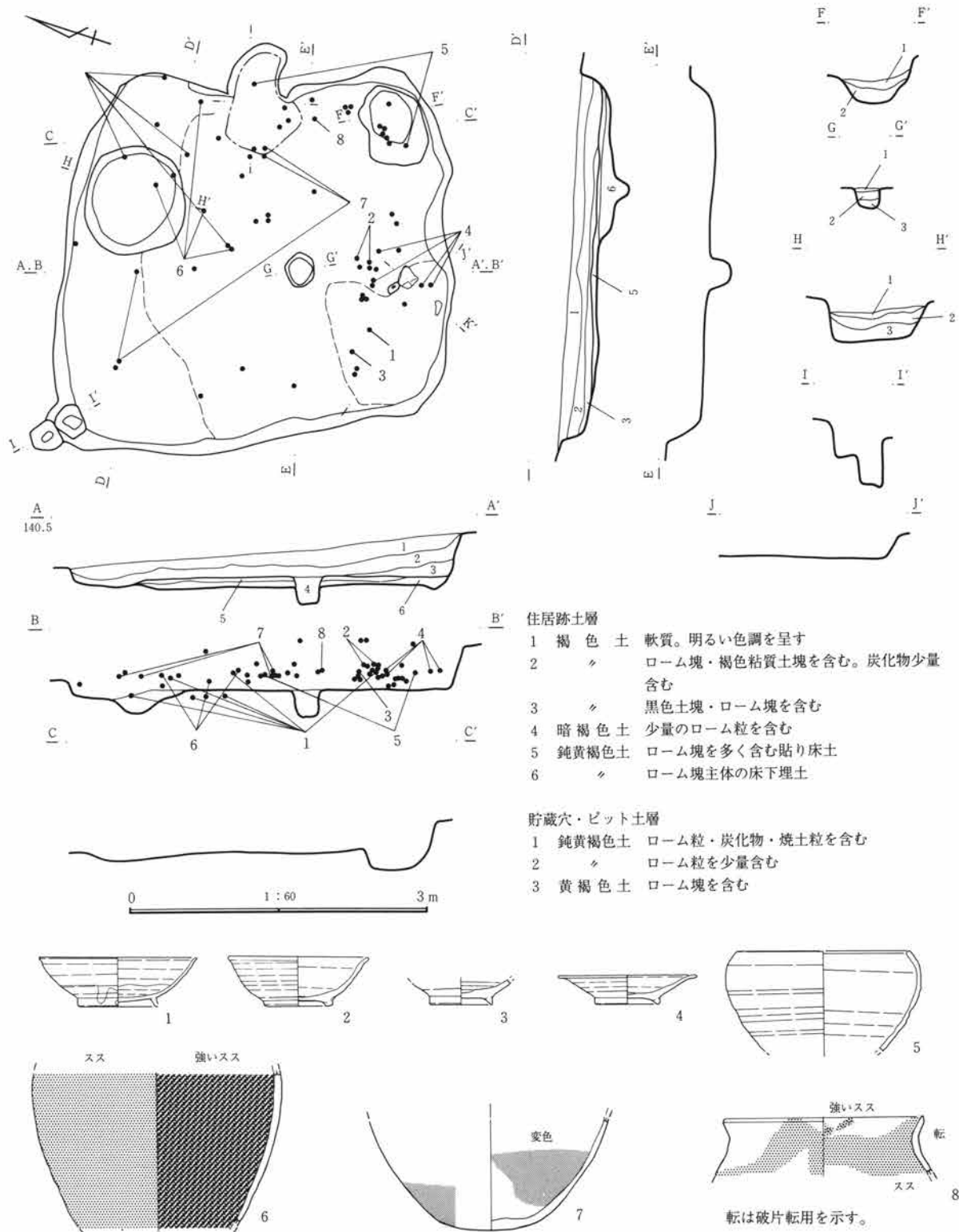
柱穴は、床面中央やや南よりの小ピット（G-G'）を充てたい。柱痕は確認されなかった。貯蔵穴は、南東隅で不整形の土坑（F-F'）を検出した。その他では、北壁やや東寄りに径1m程度の円形の土坑を検出したが、用途は不明である。また、北西隅にも2ヶの小ピットがあり、あるいは補助的な柱穴としての可能性もあろう。

また、南壁下に焼土と自然石が並列して確認された。焼土の堆積は薄く、カマドとしての積極性は持たないが、小ピットの存在もあるため、何等かの作業場として推定しておきたい。

床下の状態は小ピットが群在する様相である。ピット、段差に規則性・方向性は見られなかった。掘り込みのしっかりした明瞭な床下土坑も検出されなかった。床下埋土はローム塊主体の鈍黄褐色土である。

カマドは、東壁ほぼ中央に設けられていた。前にも述べたように、東壁が彎曲しカマド袖部に接続する平面形である。煙道は緩やかな彎曲を呈し、使用面においては浅く立ち上がる。燃焼面は僅かな凹みに焼土・炭化物を堆積する。袖は前述のように地山を掘削して造り出され、南側は顕著に突出するが、北側は痕跡も少ない。カマド前庭部に構築材が検出されなかったことから、大規模な袖・天井部では

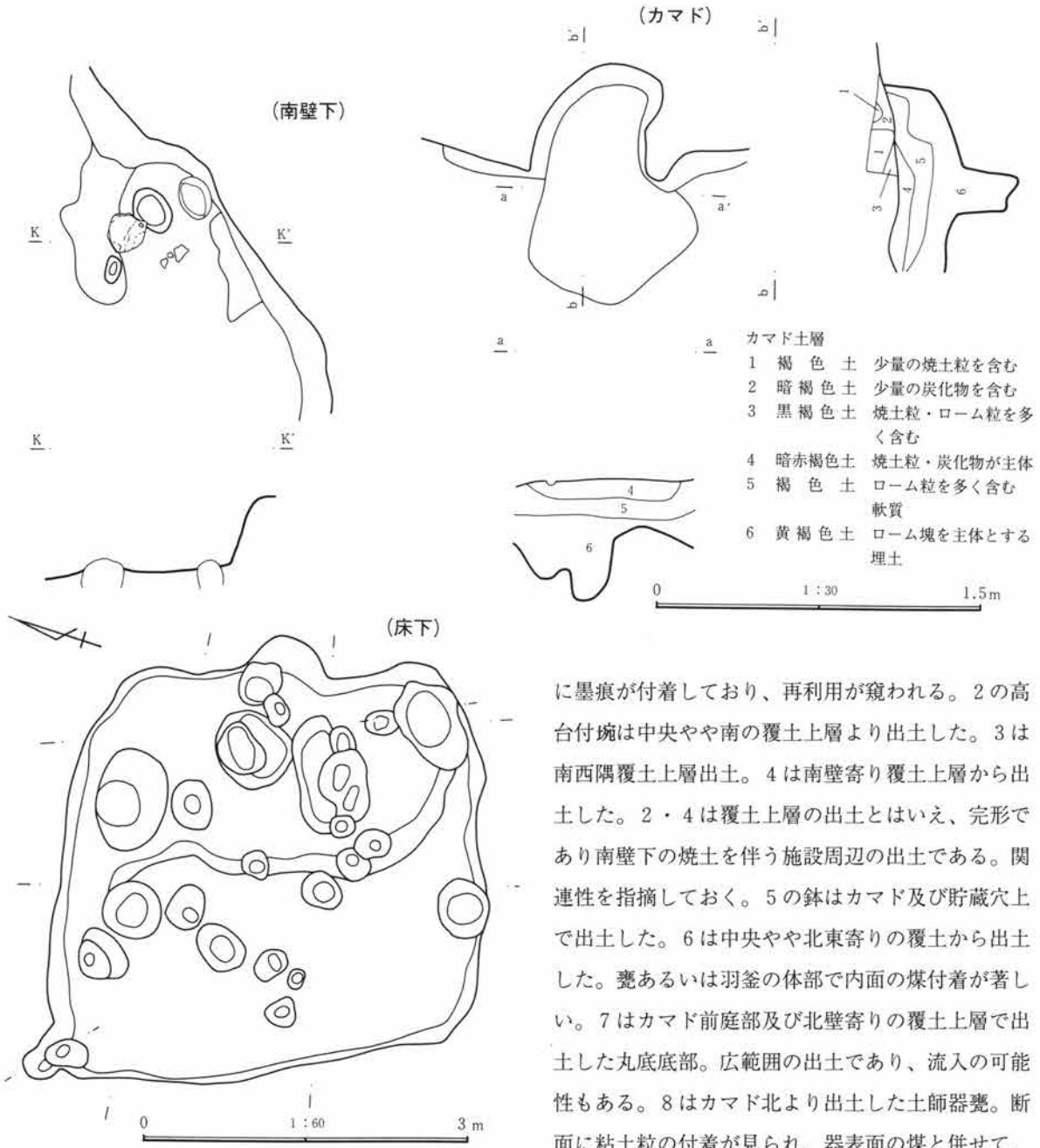
第2節 竪穴住居跡



第8図 1号住居跡(1)

第2表 1号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
36・37-16・17	隅丸方形	398×346×40	N75°E	N77°E	貯蔵穴	碗3 皿1 鉢1 甕3	



第9図 1号住居跡(2)

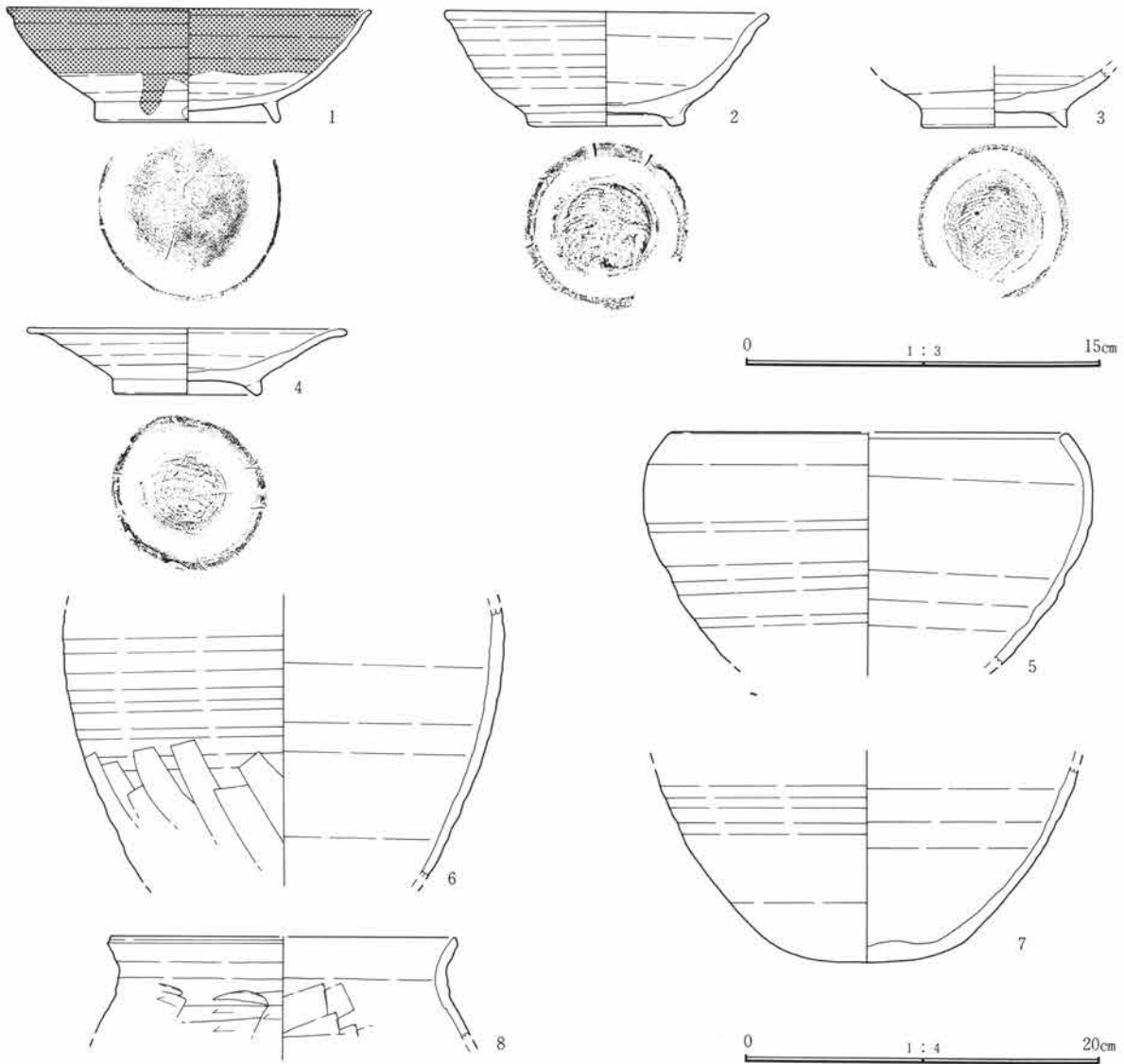
なかったようだ。カマド使用面下はローム塊を主体とする黄褐色土が埋められ、小ピットが検出されたが、カマド施設としてのピットとは考えられず、別種の性格を位置付けたい。

遺物は、全体に渡って散漫な出土状態を呈すものの、カマド周辺及び南壁下の集中が目立つ。1の灰釉陶器壺は、北東隅および南西隅で出土した。北東隅に破片は偏り、床直出土のものもある。内外底面

に墨痕が付着しており、再利用が窺われる。2の高台付壺は中央やや南の覆土上層より出土した。3は南西隅覆土上層出土。4は南壁寄り覆土上層から出土した。2・4は覆土上層の出土とはいえ、完形であり南壁下の焼土を伴う施設周辺の出土である。関連性を指摘しておく。5の鉢はカマド及び貯蔵穴上で出土した。6は中央やや北東寄りの覆土から出土した。甕あるいは羽釜の体部で内面の煤付着が著しい。7はカマド前庭部及び北壁寄りの覆土上層で出土した丸底底部。広範囲の出土であり、流入の可能性もある。8はカマド北より出土した土師器甕。断面に粘土粒の付着が見られ、器表面の煤と併せて、カマド構築材としての転用を可能性として挙げたい。このような、散漫な遺物出土状態から本住居跡に伴う遺物は特定できない。しかしながら、転用硯としての灰釉陶器壺1・南壁付近出土の2・4等は覆土出土とはいえ、本住居跡との関連は強いものと捉えられよう。

尚、出土土器の例からは9世紀後半～10世紀初頭期に比定されよう。

第2節 竪穴住居跡



第10図 1号住居跡出土遺物

第3表 1号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第10図 1 灰釉 碗 図版 39	口: 15.5 高: 4.9 底: 7.6	ほぼ完形 北東隅覆土	①細 ②還元焰 ③灰色 ④灰釉陶器 光が丘	右回転轆轤整形。上半横撫で下半窺削り。高台貼付後底面及び周縁撫で。口唇部は鋭く体部は緩やかに内彎し、高台も強く内彎し三日月状を呈す内底面及び高台底面墨痕付着。施釉はハケ掛け。
第10図 2 碗 図版 39	口: 14.0 高: 4.8 底: 6.8	ほぼ完形 覆土	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口唇部は丸みを帯び緩やかに外反する。体部中位に丸みを持たせ、高台は短く直立気味に開くが、内面は内彎する。全体に比較的整った作りを呈す。
第10図 3 碗 図版 39	口: — 高: — 底: 6.2	底部 覆土	①粗片岩 ②還元焰 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台は直立気味に開くが、内面の内彎は著しく、高台端部は鋭く尖り、丁寧な貼付である。内底面の凹部が著しい。胎土は縞状を呈す。
第10図 4 皿 図版 39	口: 13.7 高: 3.8 底: 6.0	完形 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反し、体部は僅かに影らむ。高台は直立し内面は内彎する。内底面の凹部著しい。器厚は薄く整った作りだが焼成のためやや軟質の感がある。

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第10図 図版	5 鉢 39	口：22.6 高：— 底：—	口縁～体部 約1/5 カマ ド・貯蔵穴	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形後横撫でが加わる。口縁部の内彎は強く、屈曲状となる。体部上半の膨らみも著しい。轆轤目は比較的強く体部外面は凹線状となる。下半には篋撫でが及ぶが顕著ではなく図示していない。鉄鉢状鉢か。
第10図 図版	6 甕 39	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。外面体部下半に縦位篋削り。頸部にかけて緩やかな彎曲が見られる。あるいは羽釜か。外面の轆轤目強く凹線状となる。
第10図 図版	7 甕 39	口：— 高：— 底：—	体部～底部 カマド・ 覆土	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	丸底で大きく開く底部形態。あるいは大型の鉢か。外面上半の轆轤目強く凹線状となるが、下半は丁寧な横撫でが及ぶ。内底面中央肥厚する。
第10図 図版	8 甕 39	口：(20.0) 高：(5.6) 底：—	口縁～肩部 破片 カマド	①粗 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部は外傾し、頸部は緩やかな直立を呈す「コ」字状口縁甕。口縁器厚はやや厚い。口縁部内外面とも横撫で。体部外面横位篋削り、篋当て目残存。体部内面は横位篋撫で。

2号住居跡

調査区最南東隅に位置する。本遺跡で今回調査された住居跡群で唯一の7世紀代の住居跡であり、単独の検出となった。ただし、北西には重複住居跡である3・8号住居跡が近接しており、近世～近代の溝・ピット群も同時に確認され、遺構密集地点の一隅を占める形態である。

周辺の地形は北側への傾斜が主ではあるが、傾斜は緩く平坦地形に近い。また、調査区域外東側および南東側は南北に谷頭が貫入しており、急斜面地形が連続することから、集落は本住居跡周辺が東端と捉えられている。本住居跡南側は調査区域外ではあるが、分布調査等からは本住居跡が帰属する古墳時代後期の資料は採集されておらず、おそらく本住居跡は単独の占地で成り立っていた可能性が強い。該期集落形態としては例は少ないものと思われる。

平面形は隅丸正方形を呈し、辺長約3.5m前後を測り比較的整った形態をとる。平面形から得られる主軸方位はN-53°-Eであり、他の奈良・平安時代住居跡と大きな隔たりを見せる。深さは約50cmで遺存状態は良好ではあるが、北側への緩傾斜地形が影響して北側はやや浅く、北西隅の壁上半は大きく逸失していた。壁は開き気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを見せる。

床面は、ほぼ平坦面を築き灰褐色土を基調とした

貼り床を広げる。硬化面は顕著では無かったが、中央部が若干硬く叩き締められていた。

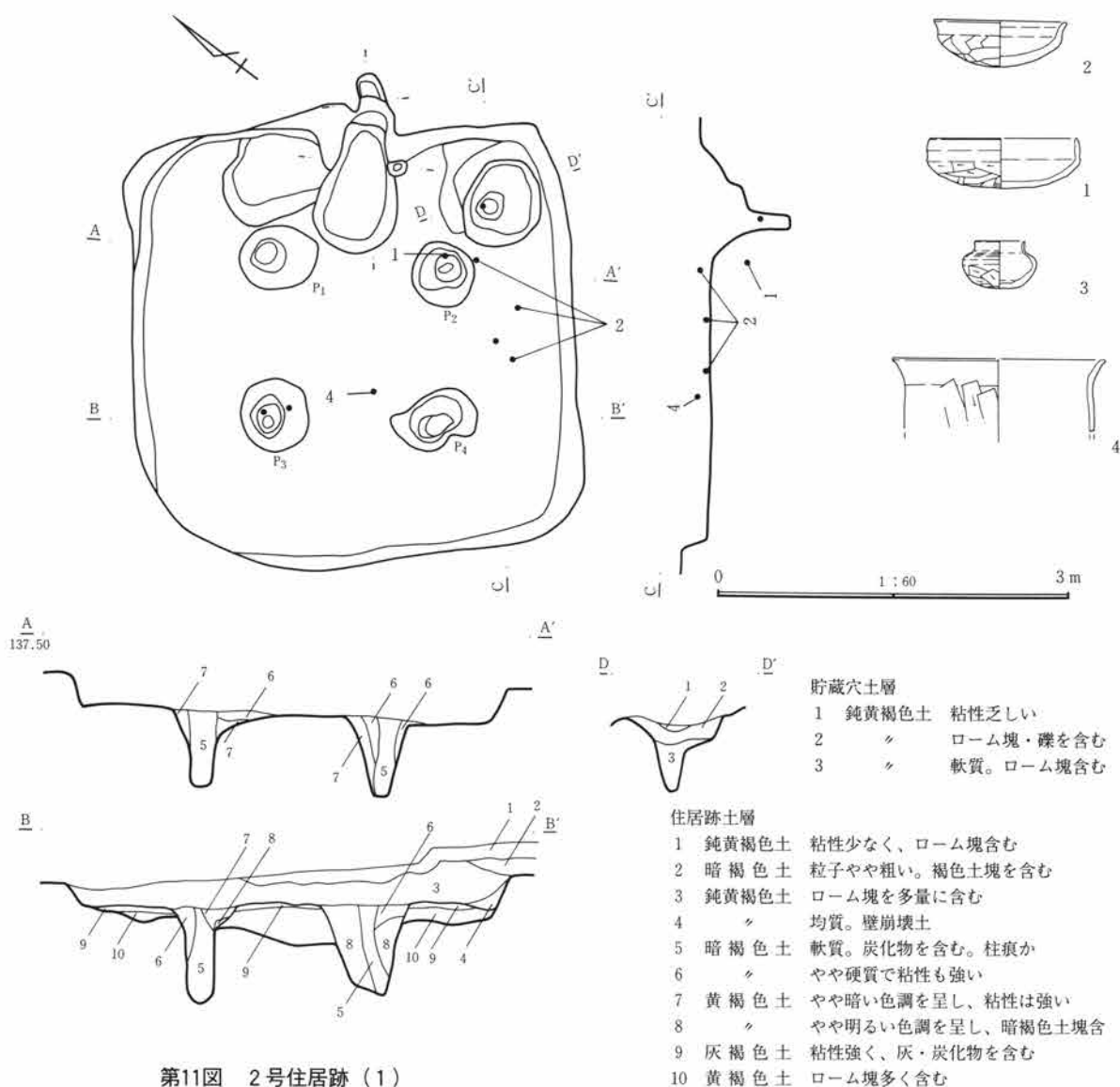
柱穴は、四本柱穴が床面やや中央寄りに整然と設けられていた。各柱穴の詳細な規模は別表に挙げたが、柱穴間は東西1.3m・南北が1.5mと南北辺に沿った距離がやや長い。これは住居跡規模と比例しており、柱穴設定時の企画性が窺われよう。各柱穴の平面形はP4を除きほぼ径50cm前後の円形を呈し、下端径は約20cmを測ることから、上下端の径差は大きい。埋土の観察からは、柱痕として炭化物を含む暗褐色土が確認され、黄褐色土や硬質暗褐色土による補強がなされていた。

貯蔵穴は南東隅に約60×90cmの不整形円形を呈して検出された。深さも、坑底面で約30cm・最深部で約50cmを測り、壁はやや緩やかな傾斜を見せながらも、しっかりと掘り込まれていた。埋土はローム塊を含む鈍黄褐色土を基調にしており、特徴的な包含物は認められなかった。

床面上のその他の施設としては、カマド北側に見られる浅い落ち込みが挙げられよう。深さは約20cmで、径80cm程度の不整形の落ち込みである。焼土・遺物等の有機的な出土もなく、埋土の特徴にも乏しいことから、住居跡居住に伴う施設としては積極性を持たない。周溝は無かった。

床下遺構は、小ピットとほぼ中央に不整形の床下

第2節 竪穴住居跡



第11図 2号住居跡(1)

第4表 2号住居跡計測表

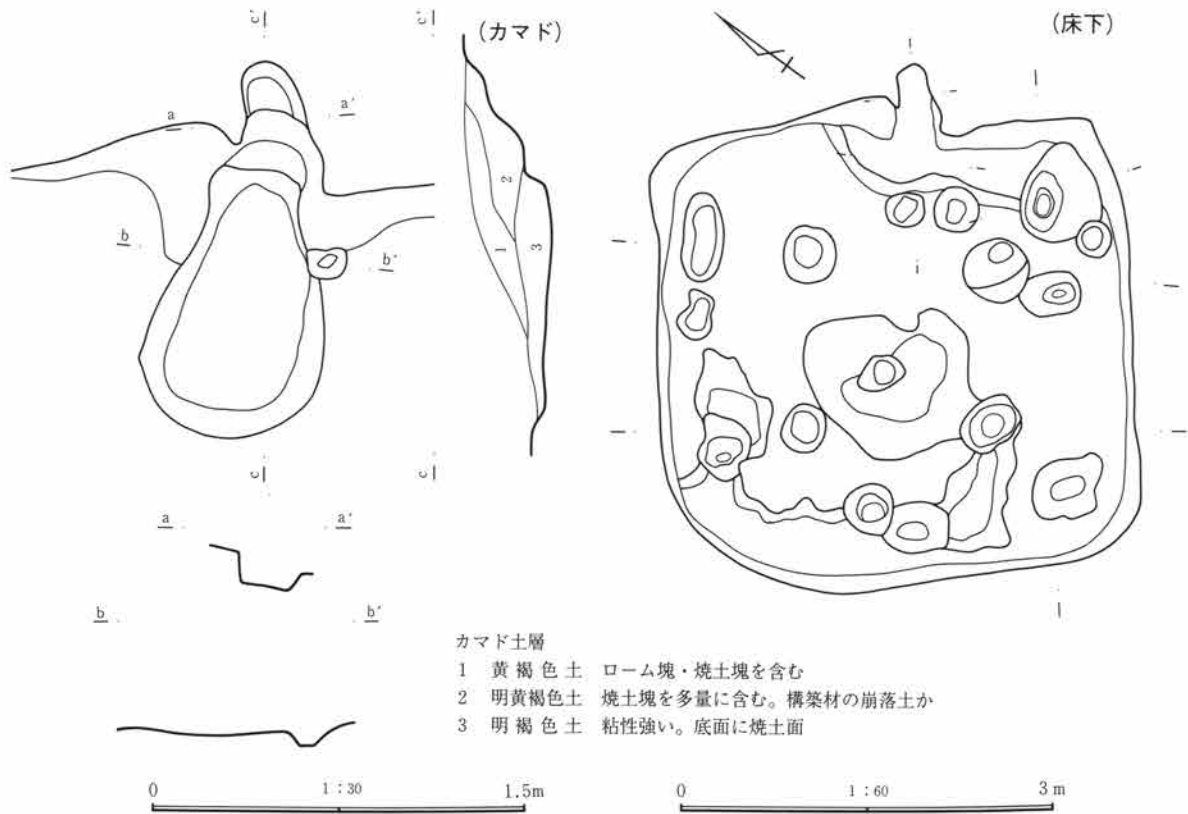
位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
27・28-17・18	隅丸正方形	380×350×48	N53°E	N52°E	四本柱穴・貯蔵穴・ 床下土坑	坏2 短頸壺1 甕1	

土坑を検出した。埋土はローム塊を含む黄褐色土である。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられる。煙道は壁外に突出し、段差を設けながら緩やかに立ち上がる。燃烧面には浅い掘り込みがなされ、少量の焼土・炭化物が堆積していた。袖は大型ではなく、短

く突出する。南袖が顕著で、北袖の形状は把握できず、僅かな突出が確認されたのみである。袖は地山ロームによるもので、粘土・自然石等の構築材は出土しなかったが、南袖の先端部に浅い小ピットが検出されており、おそらく構築材の自然石等が設置された痕跡であろう。また、土層中に焼土塊を主体と

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第12図 2号住居跡(2)

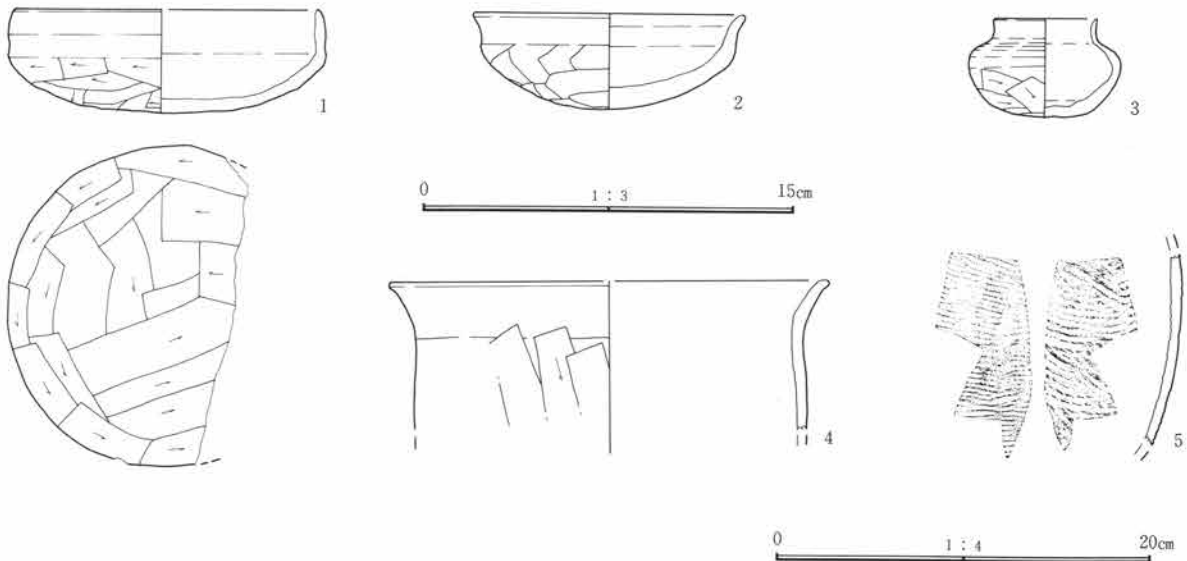
する層が確認されており、天井材構築土崩壊によるものと判断できよう。さらに、カマド内からの遺物出土は非常に希薄であり、土師器小破片の出土を見るのみで、完形・半完形の出土を見ない。このことから、本住居跡カマドは居住後に、遺物を除去し構築材を破壊・抜き取りという行為が行われた例として位置付けられよう。

住居跡全体の出土遺物も少量であり、居住後の「持ち去り」行為が想起される。出土遺物のうち5点が図示できた。1の土師器坏はP2埋土内より出土している。2は中央南側の床直より出土した3点が接合された完形の土師器坏。3は覆土上層出土の須恵器短頸壺。4の土師器甕は中央覆土下位より1点で出土している。5は須恵器甕体部破片。覆土出土。このうち1・2の土師器坏は本住居跡に帰属し得る遺物として捉え得る。3の短頸壺は覆土上層出土であるが、まとまった出土であり、居住に伴った所産ではないものの関連遺物として位置付けて良い

のではないだろうか。

以上のように、本住居跡は7世紀代の所産であり、住居跡平面形・規格等は該期の通常に沿うものである。しかしながら、おそらく群をなさない単独の占地形態であり、当地域の高位段丘における古墳時代後期の居住形態の特徴的な例として、検討を要する資料であろう。

第2節 竪穴住居跡



第13図 2号住居跡出土遺物

第5表 2号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第13図 1 坏 図版 39	口： 12.4 高： 4.2 底： -	約1/2 ピット内	①粗片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部は直立気味に内傾し、体部境は強い横撫でのため凹む。体部外面は不定方向の篋削り後周縁を横位に削る。篋削り後撫でるが顕著ではなく判然としない。内面は丁寧な撫で調整が及ぶが底面に篋当て目が残る。
第13図 2 坏 図版 39	口： 11.0 高： 3.9 底： -	ほぼ完形 床直	①粗石英 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部は外反し、丸底の底部形態を呈す。口縁と体部境は屈曲するが明瞭な稜線ではない。外面口縁部は強い横撫で、体部は篋削り後撫でが及ぶ。内面は横撫でだが底面は摩滅する。器厚は厚く小径ながら量感ある。
第13図 3 短頸壺 図版 39	口： 5.5 高： 5.3 底： -	ほぼ完形 覆土	①粗片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型の短頸壺。右回転轆轤整形。口縁部は直立し、体部は上半が張る。底部は丸底で、下半よりの篋削りが及ぶ。薄手の器厚を呈し、端正な作りである。
第13図 4 甕 図版 40	口： (23.7) 高： - 底： -	口縁部破片 中央覆土下 位	①粗片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部は緩やかに外反し開く。体部は直立状で僅かな彎曲を見せる。口縁部は内外面とも横撫で。体部外面は縦位・斜位篋削り、内面は横位の篋撫でが看取される。
第13図 5 甕 図版 40	口： - 高： - 底： -	体部破片 覆土	①粗白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面平行叩、内面青海波文が残る。薄手の器厚で堅緻な印象を得る。器内はサンドイッチ状で赤褐色を呈す。

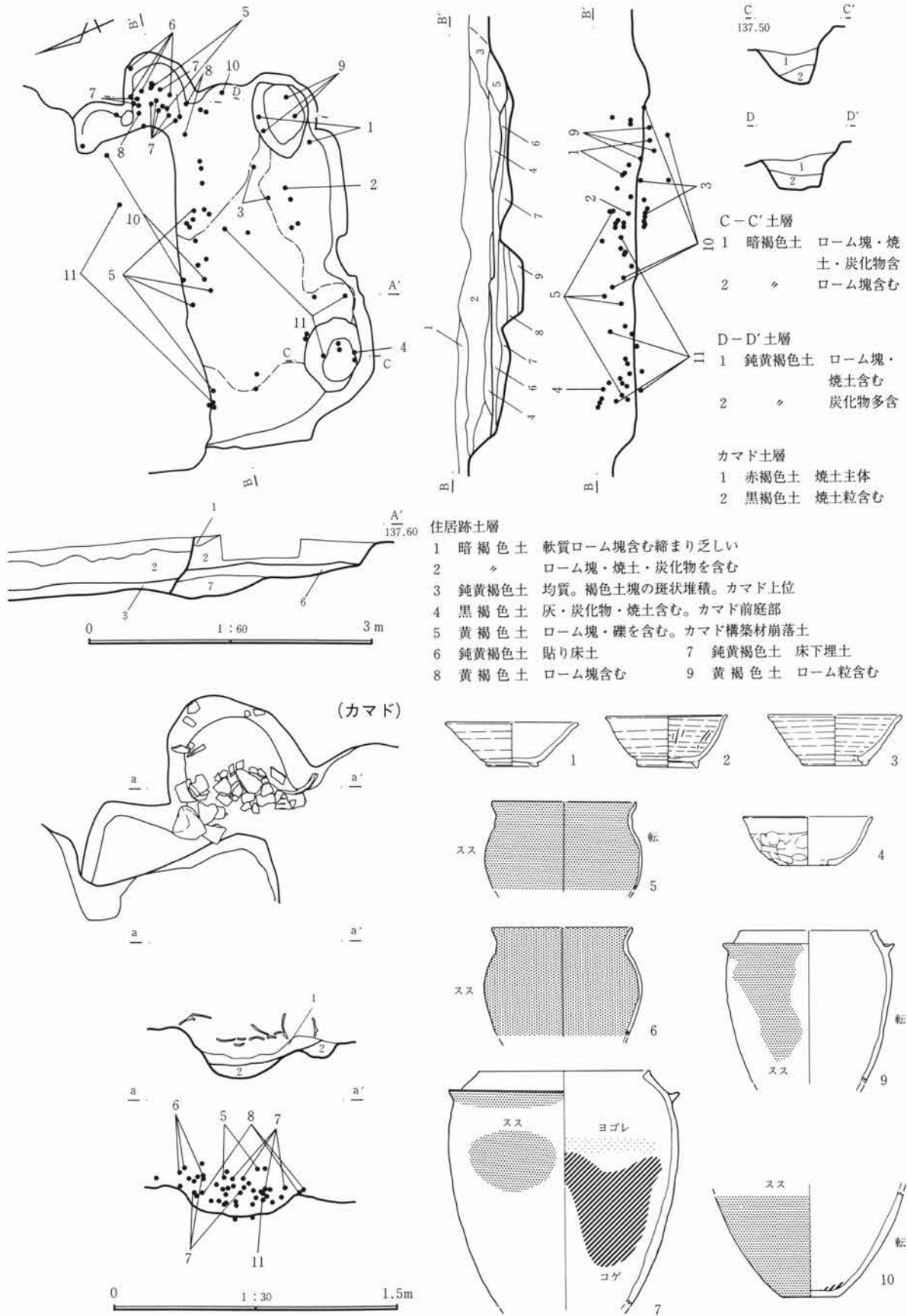
3号住居跡

前述の2号住西に近接して検出された。2号住と同様に周辺は緩やかな傾斜地形であり、ほぼ平坦地形の占地と位置付けられよう。8号住居跡と重複しており、その新旧は8号住が本住居跡を切る状態が土層の観察から得られた。近接する他の住居は前述の2号住以外に無く、2号住とは時期的に大きな隔りがあることから、本住居と重複する8号住との関連性が主軸方位・出土遺物においても極めて近い

ものであることも考えておきたい。断定できないが、住居の建て替え・移動といった要素も考慮する必要がある。

3号住居跡の平面形は判然としないが、おそらく長軸を東西に持つ不整長方形を呈するものである。カマド北側に北東部の彎曲が見られることから、短軸長は約2.5m前後と思われる。西壁・南壁は不連続であり、そのため全体感が不整長方形となっている。深さは良好な残存部で36cmを測り、重

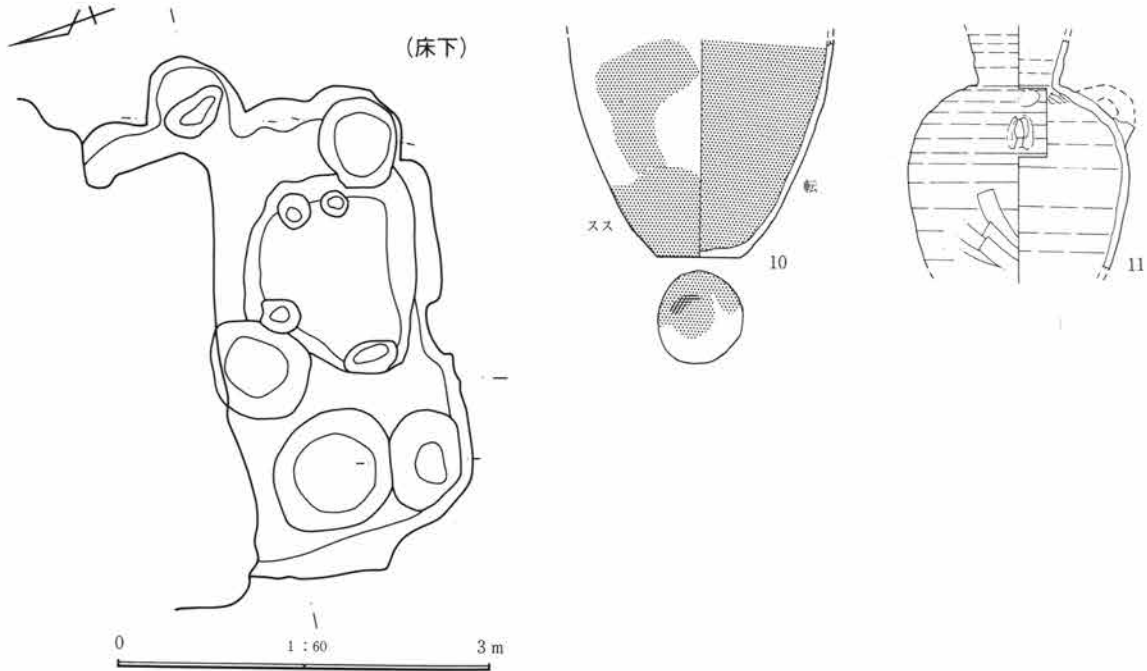
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第14図 3号住居跡 (1)

第6表 3号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
27-17	不整長方形	354 × - × 36	N93°E	N90°E	貯蔵穴・床下土坑	坏1 埴3 甕4 羽釜2 把手付長頸壺1	8号住居



第15図 3号住居跡 (2)

複部分以外の遺存は比較的良好といえよう。

床面は僅かな凹凸はあるものの、ほぼ平坦面を築き、鈍黄褐色土による貼床がなされていた。硬化面は床中央部分で広範囲に認められた(破線内)。

柱穴は無く、東南隅と西南隅に径約60cm程度の土坑が検出され、東南隅の土坑(D-D')は貯蔵穴として位置付けた。西南隅の土坑(C-C')も規模および埋土に焼土・炭化物を含む東南隅の貯蔵穴との類似性から、この土坑も貯蔵穴としての可能性が強いと考えた。故に2基以上の貯蔵穴を持つ住居として捉えられよう。

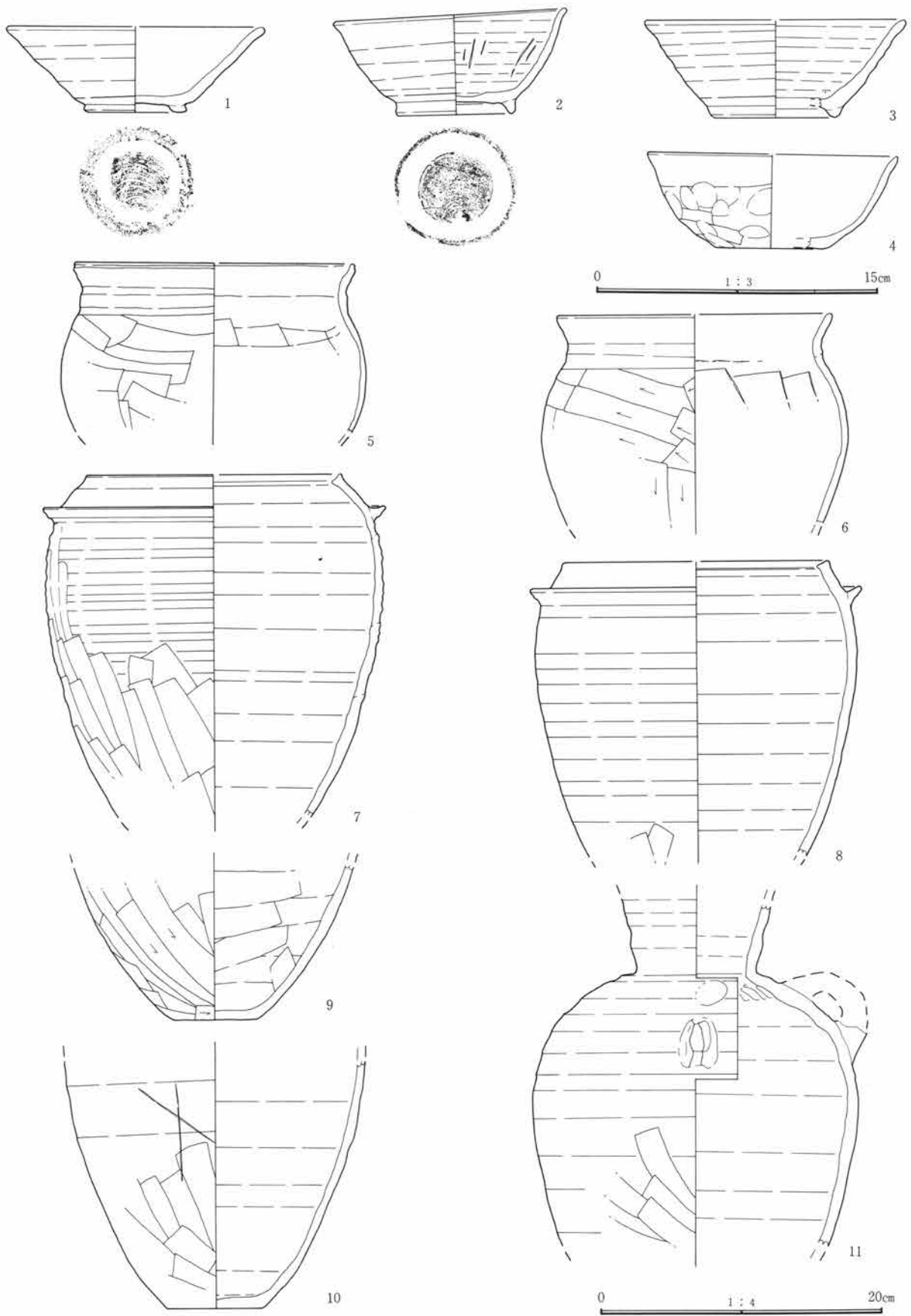
床下遺構としては、不整円形のもの2基・不整形のもの1基と床下土坑を3基検出したが、性格は特定できない。

カマドは東壁のやや西寄りに設けられる。馬蹄状に突出し、煙道部は緩やかな立ち上がりを呈す。袖

は短く、北側の袖下端には自然石が置かれていた。袖材の一部であろう。焚き口部・燃焼部は掘り込みを持たず、焼土粒・炭化物が散布していた。燃焼部から土師器甕や須恵器羽釜が破片状態で出土しているが、使用状態のものは7の羽釜で他はカマド側壁や天井部の構築材としての再利用のものであろう。カマド埋土は焼土塊が多量に含まれ、天井部の崩壊と捉えた。

出土遺物は比較的多く、11点を図示した。1の高台付埴は東南貯蔵穴より出土した。2も東南貯蔵穴の西で床直出土。3は中央やや南東寄り床直出土。4の土師器坏は西南の貯蔵穴中より。5は中央及びカマド内覆土。カマド出土の破片は転用材か。6はカマド出土の土師器甕。7もカマド出土。大型の破片状態であったが、使用状態の出土と思われる。8の羽釜はカマド出土ながら、転用材として捉

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第16図 3号住居跡入土遺物

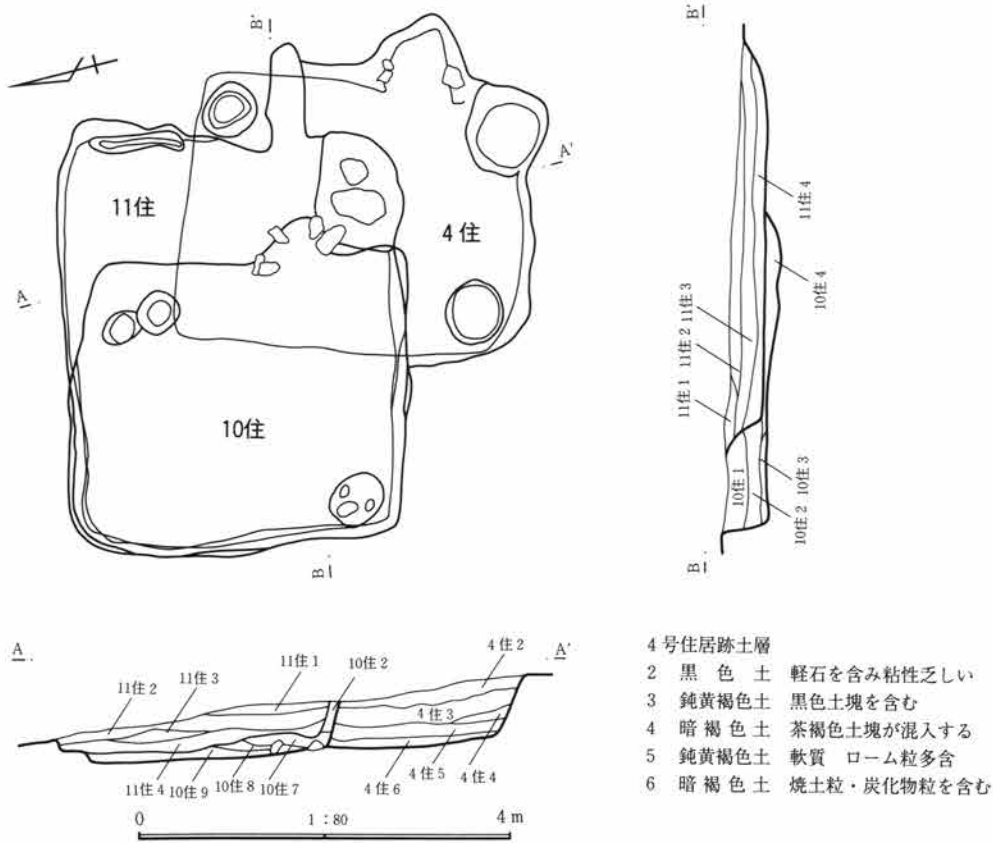
第7表 3号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第16図 1 碗 図版 40	口: 13.8 高: 4.6 底: 5.4	約1/4 貯蔵穴	①粗角礫 ②還元焰 ③オリーブ 黒色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部は直線的に開く。高台は短く開き気味に付される。器厚は比較的厚手で肥厚差は少ない。胎土の角礫は1cm前後のものも含まれる。
第16図 2 碗 図版 40	口: 12.5 高: 5.3 底: 6.4	約2/3 床直上	①粗白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯び底部に至り高台は直立気味に開く。器厚は薄く整った作りを呈す。体部内面に縦位の線刻が看取されるが意図的なものかは判然としない。
第16図 3 碗 図版 40	口: 14.0 高: 5.3 底: 7.0	約1/6 床直	①粗白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し直線状に底部に至る。高台短く直立気味に付される。器厚は比較的厚手でやや多孔質の感がある。
第16図 4 坏 図版 40	口: (13.3) 高: 5.0 底: (6.0)	約1/4 貯蔵穴上	①粗片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	器高の深い土師器坏。口縁部は緩やかに外反し体部の膨らみを持って深身を際立たせる。口縁部は横撫でを施し、外面体部中位は横位斲削り後撫で。指頭痕残る。体部下半～底面、撫では及ばず斲削りのみ。
第16図 5 甕 図版 40	口: 19.8 高: - 底: -	口縁部 約1/4 覆土	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部は内屈し口縁部外傾する。頸部は内傾気味に立ち体部は球胴状に膨らむ。口唇部に1条の沈線が巡り、頸部は2条の強い撫でで画される。体部上半は横位斲削り下半は縦位斲削り。体部内面は横位撫撫でを施す。
第16図 6 甕 図版 40	口: (19.5) 高: - 底: -	口縁部 約1/4 カマド	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部は外傾し頸部は緩やかな外彎状を呈す。体部は上半に張りを持たせる。口縁部は横撫で、体部上半は縦位斲削り後斜位の斲削り、下半は縦位斲削り。体部内面は撫撫でを施す。
第16図 7 羽釜 図版 40	口: 18.0 高: - 底: -	口縁～体部 約1/2 カマド	①粗片岩 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。鏝貼付。口唇部僅かに立ち上がり口縁部内傾する。鏝は上位を向き体部上半に膨らみを持たせ下半に至る。外面強い轆轤目残り中位より下半は縦位斲削りを施す。内面体部下半に煤附着。
第16図 8 羽釜 図版 40	口: (19.0) 高: - 底: -	約1/4 カマド	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。鏝貼付。口唇部内面極僅かに突出。口縁部内傾し鏝は上位を向く。体部上半に膨らみを持ち下半に至る。外面の轆轤目は弱く浅い撫でが及ぶ。下半に縦位斲削りが施される。
第16図 9 羽釜 図版 41	口: - 高: - 底: 6.0	体部～底部 約1/4 貯蔵穴	①粗石英片岩 ②酸化焰気味 ③暗褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。緩やかな膨らみを持った体部下半。底面は平滑。外面は斜位・横位の斲削り、内面は横位撫撫で。
第16図 10 羽釜 図版 41	口: - 高: - 底: 7.0	体部～底部 約1/5 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。緩やかな膨らみを持った体部下半。底面は平滑。外面は縦位・斜位斲削りを施す。体部中位に「X」状の線刻が刻まれる。器厚は比較的薄手。
第16図 11 長頸壺 図版 41	口: - 頸部: 9.2 底: -	頸部～体部 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	肩部に把手が付されるが単位不詳。輪積後右回転轆轤整形。口縁部は開き気味に立ち上がり、頸部で強く屈曲する。肩部～体部上半に膨らみを持たせる。外面体部下半に斲削り、内面肩部に指頭痕が看取される。

えた。9は東南貯蔵穴出土の羽釜底部。10は中央よりの覆土上層および東壁際、さらに8住からも出土した。11の長頸壺は、住居西半の覆土と8住覆土の破片が接合している。

以上のように、本住居跡は重複住居でありながら、出土遺物も豊富であり、積極的な居住が果たされていたものと考えられる。出土遺物の大半が10世紀前

半の所産であり、本住居の年代も窺い知れようが、重複する8号住の出土遺物との時期的な僅差さらに接合関係も確認されているため、確定的な時期は充てられない。8号住との関連を煮詰めて分析の俎上に乗るものである。



第17図 4号・10号・11号住居跡重複状況

4号住居跡

第Ⅰ台地調査区中央やや東寄り、10・11号住居跡と重複して検出された。この3軒の重複関係は土層の観察からは11号住>10号住>4号住であり、本住居跡が最も古い新旧関係を得た。ただし前述の2・3号住でも勘案されたように遺物の分別や接合関係を煮詰め、重複住居跡の新旧を捉えなければならないだろう。出土遺物整理作業では、発掘調査時の遺物取り上げ番号を重視して、住居跡出土遺物を一括して掲載しており、そのため本住居跡と11号住の重複部分においては、出土遺物の詳細な分別ができない。11号住との新旧関係を優先すれば、本住居遺物として21図～24図に掲載した遺物では、1・2・4・8・11・12・16・21・34は11号住に帰属する可能性は高い。注意されたい。

さて4号住は南北長軸がやや長い横長方形の平面形を呈し、良好な残存部の深さが約60cmを測る。し

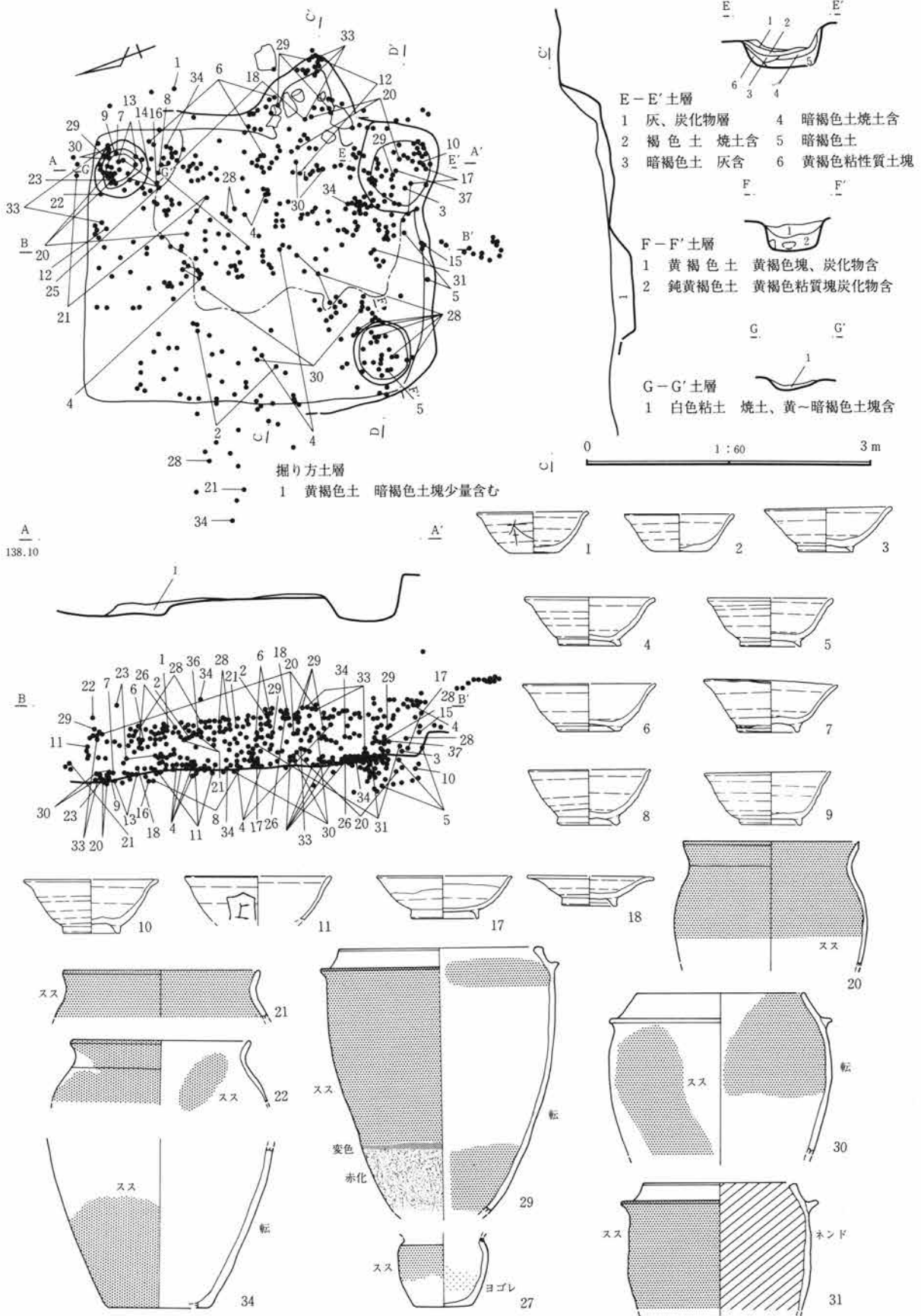
かし、10号・11号住の重複により、北半の殆どを大きく逸失しており、僅かにその痕跡が確認し得た北東隅から、住居跡全体像を推定した。

床面は平坦で、層厚の薄い暗褐色土の貼床がなされていた。硬化面はカマド周辺から中央部にかけて顕著で、焼土粒・炭化物を含む。

柱穴は特定できなかったが、3号住と同様に複数の貯蔵穴を確認した。東南隅は一般だが、本住居跡の貯蔵穴はその他に西南隅と北東隅に確認され、3基の貯蔵穴を保有する住居として特筆されよう。各々の埋土は東南隅は焼土・炭化物、西南隅は粘質ローム塊と炭化物、北東隅は白色粘土が検出された。このうち、北東隅の白色粘土は南に接する11住カマドの存在も念頭に置かねばならず、本住居の居住に伴う所産とは確定できない。

床下遺構としては中央部に開ける大型の不整形の床下土坑が挙げられる。性格は不明である。

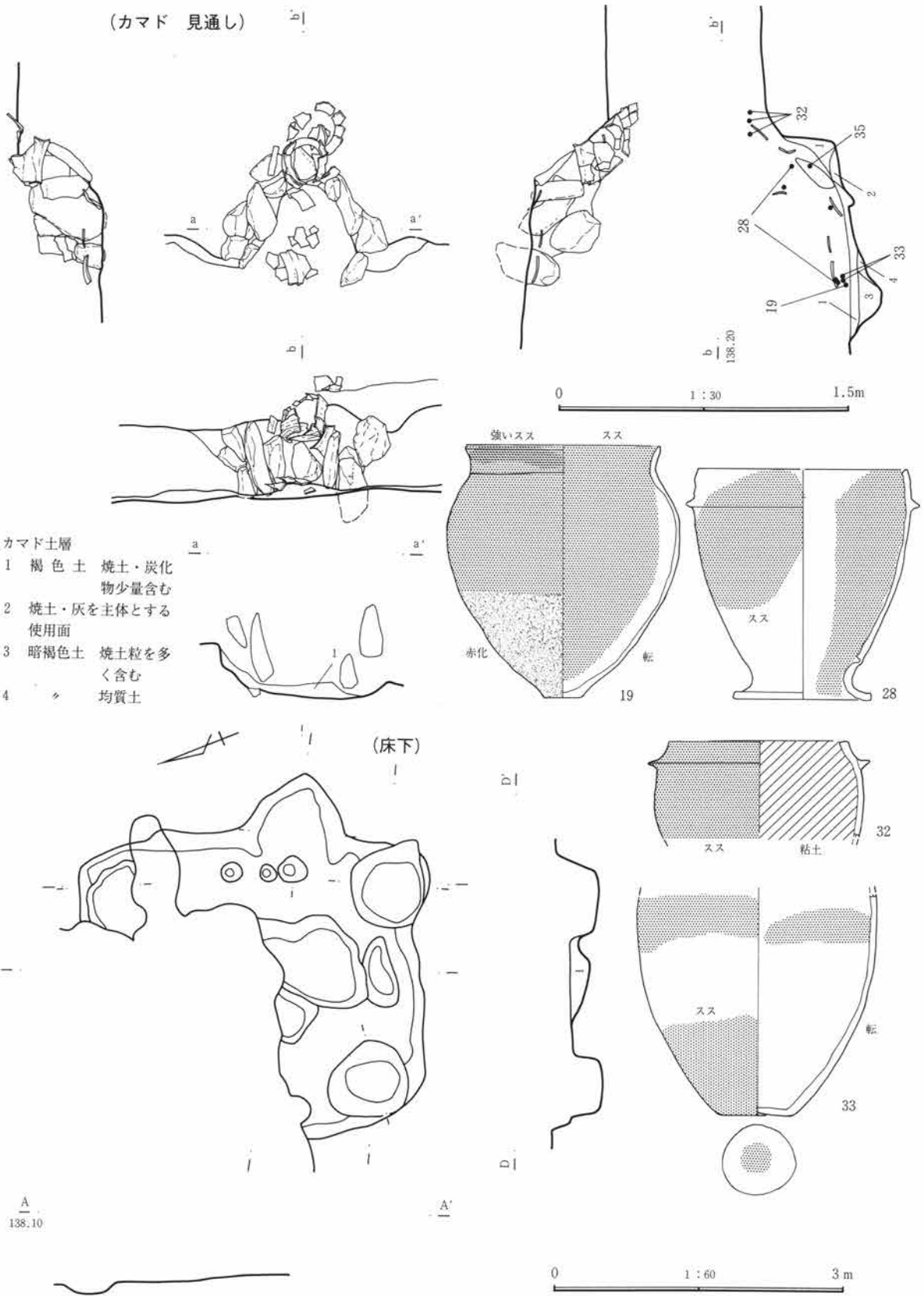
第2節 竪穴住居跡



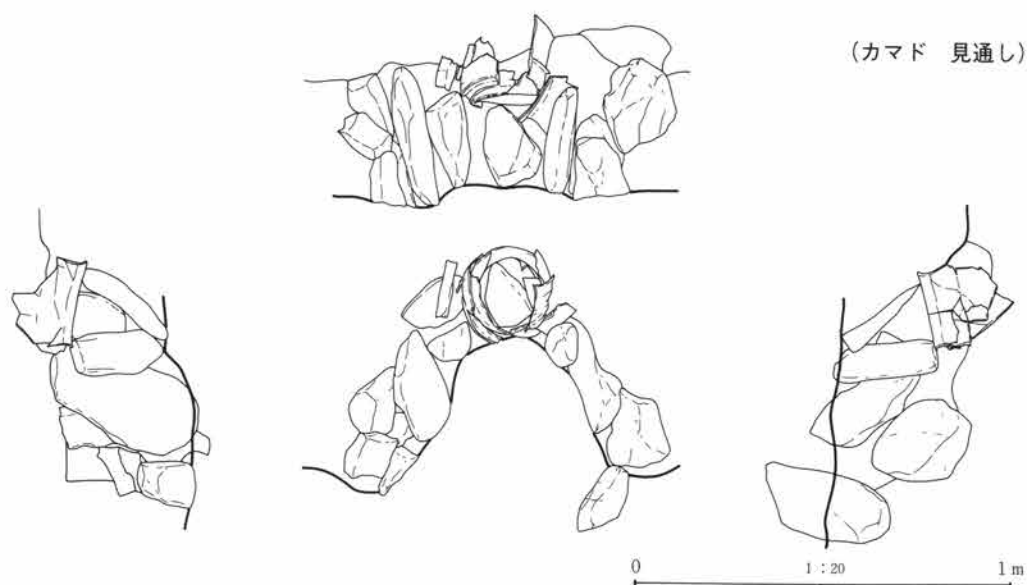
第18図 4号住居跡(1)

第三章 検出された遺構と遺物

(カマド 見通し)



第19図 4号住居跡(2)



第20図 4号住居跡(3)

第8表 4号住居跡計測表

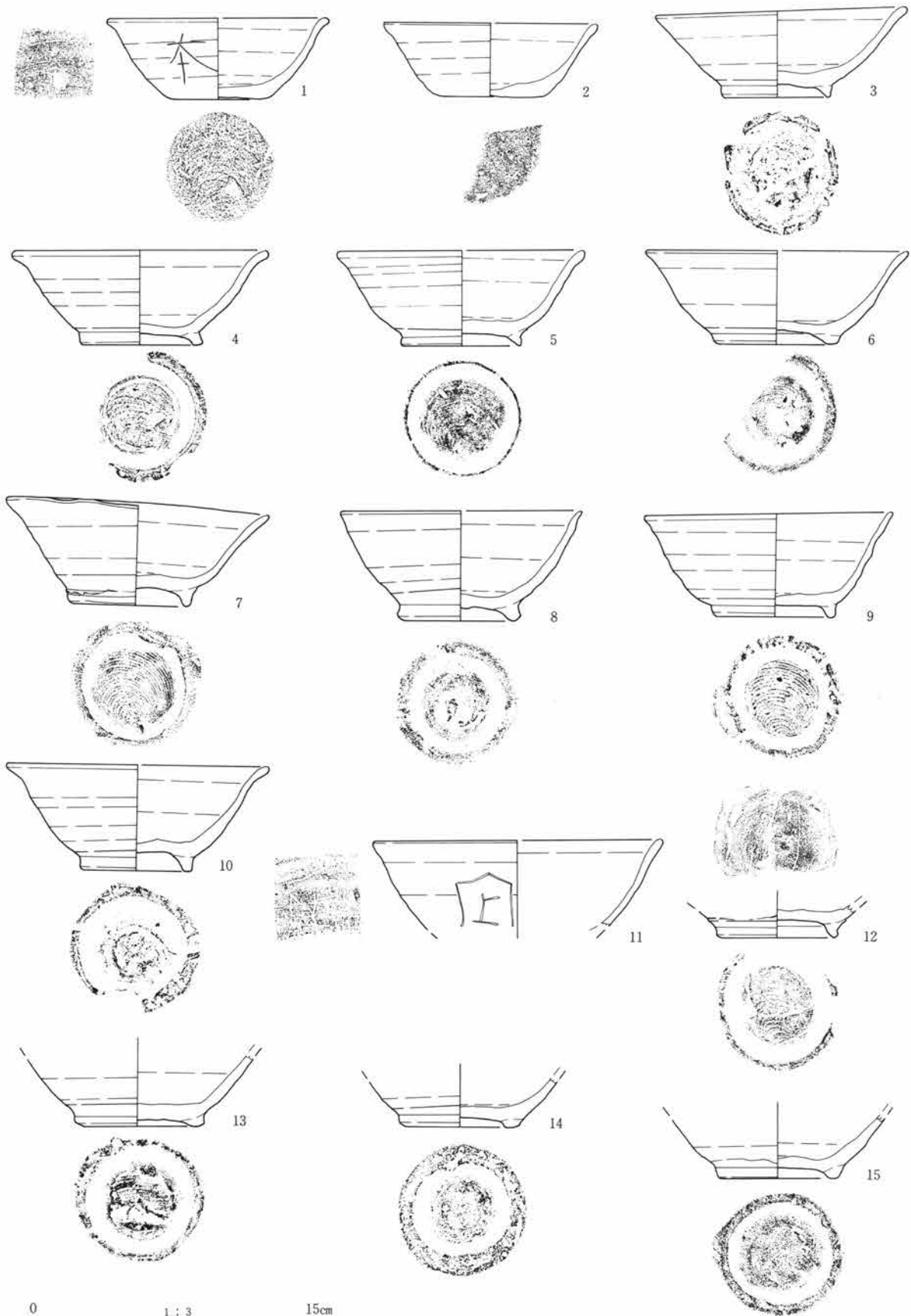
位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
34-12・13	横長方形	384×290×56	N23°E	N113°E	貯蔵穴・床下土坑	坏2 壺15 皿1 甕9 壺1 甕1 羽釜5 瓦1 石2	10号住居 11号住居

本住居跡の最も特徴的な施設は東壁やや南寄りに設けられた石組みのカマドであろう。大型の自然石を立位でカマド側壁に並べて補強材とし、延長にある袖部分にも両袖に対応するように中型の袖石を設ける。側壁の自然石には片岩質の棒状礫が積極的に選択されており、整然とした配置が意図されている。更に、煙道部に羽釜(29)と土師器甕(19)を逆位に組み合わせており、さらに近接した壁外にも羽釜口縁部(32)が逆位で出土したことから、煙道部における土器再利用が窺われた。燃烧部は緩やかに凹み、下層には灰・焼土・炭化物が堆積し、上層は焼土塊が多量に検出されたことから、天井部等の構築材は崩壊したものと捉えられた。袖は短く自然石で補強されていたが、地山を造り出したものである。

遺物の出土は多く、37点を図示した。前述のように、10号住と11号住との重複から、遺物の混在が見られ、本住居跡出土遺物として掲載した1・2・

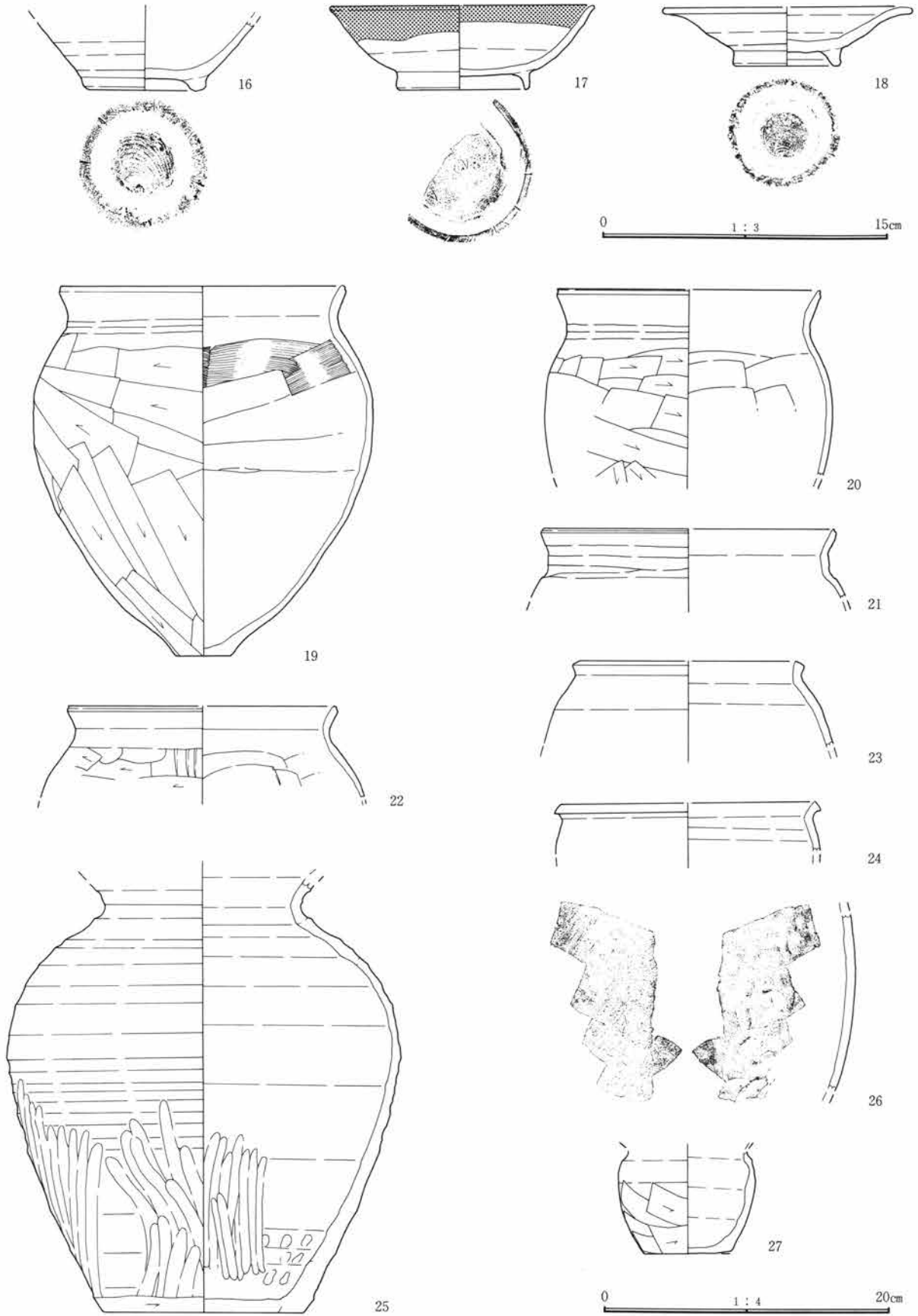
4・8・11・12・16・21・34は11住に帰属する可能性が高い。よって、この9個体についての記述は11住の項で述べたい。その他の遺物の出土状態としては、カマドと各貯蔵穴よりの出土に偏る傾向が見られる。カマドの出土は前述の煙道部に再利用された甕・羽釜類の他、構築材としての羽釜破片利用が見られる。貯蔵穴からの出土は、おそらく廃棄等の所産と思われるが必ずしも貯蔵穴内部の出土ではなく、上層に集中する傾向がある。埋没過程における集中なのか、検討を要する。以下まとめると、カマド出土は19・29・32の煙道部。燃烧部には28の甕口縁部が出土した。構築材としては33の羽釜が出土している。尚、埋土からは18の高台付皿や20の土師器甕口縁部破片が出土した。東南隅の貯蔵穴からは、3・10の高台付壺・17の灰釉陶器壺・29の口縁部破片・37の磨り石が出土している。西南隅の貯蔵穴では5の高台付壺と28の須恵器甕が、また27の小型壺が上層より出土している。北東隅の貯蔵穴は多く、

第三章 検出された遺構と遺物

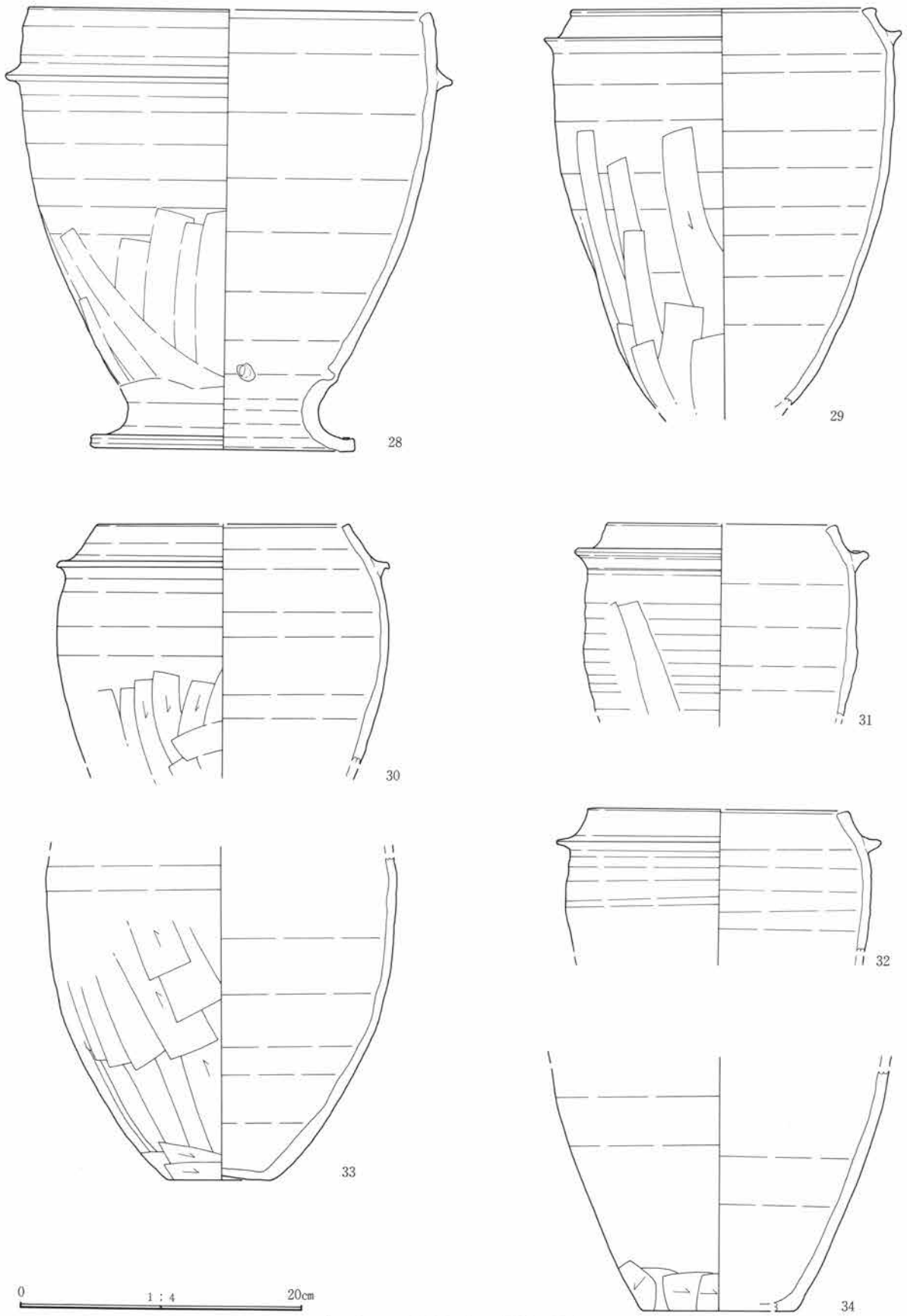


第21図 4号住居跡出土遺物(1)

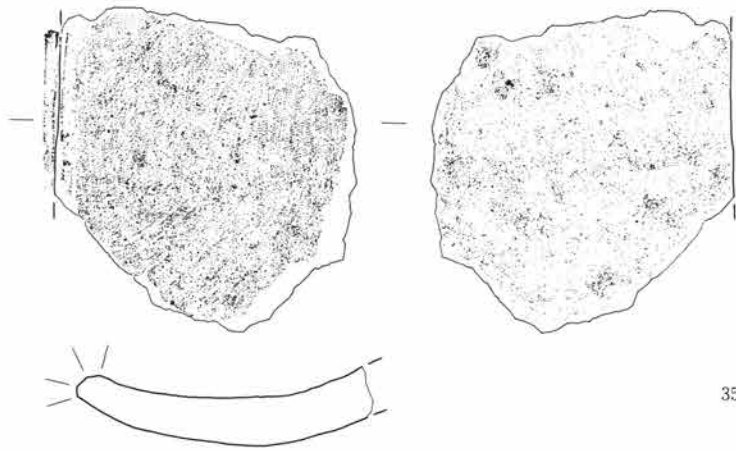
第2節 竪穴住居跡



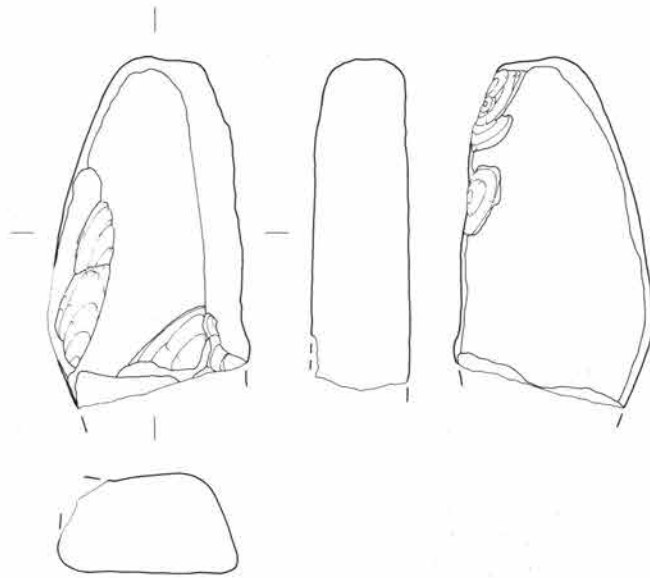
第22図 4号住居跡出土遺物(2)



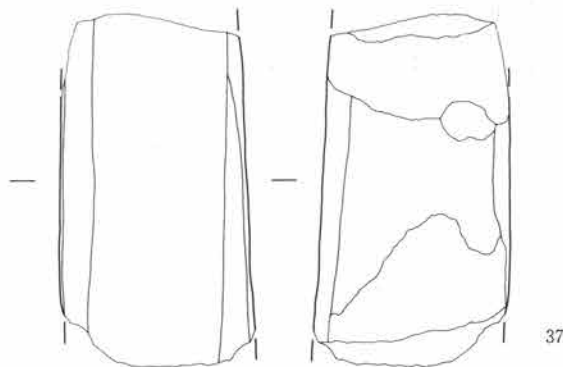
第23図 4号住居跡出土遺物(3)



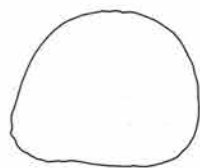
35



36



37



0 1:4 20cm

第24図 4号住居跡出土遺物(4)

第三章 検出された遺構と遺物

第9表 4号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第21図 図版	1 41	口：(11.8) 高：4.3 底：5.6	約1/3 住居外	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器 刻書土器	右回転轆轤整形後体部撫で。口縁部は外反し、体部中位に緩やかな丸みを持たせる。底面周縁は強く摩滅する。器厚は薄手で比較的整った作り。胎土はサンドイッチ状で暗褐色。体部中位に焼成後の線刻字「本」か。
第21図 図版	2 41	口：(11.4) 高：3.9 底：(5.6)	約1/3 覆土	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	小径の坏。右回転轆轤整形後体部撫で。口縁部は外反し僅かに肥厚する。体部は直線状で見込み部の器厚は厚く内底面中央は凹む。外底面は撫でにより平滑。
第21図 図版	3 41	口：13.4 高：4.6 底：5.7	ほぼ完形 貯蔵穴	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形後体部撫で。高台貼付後周縁撫で。口縁部～体部は直線状に開くが、下半に僅かな丸みを持つ。高台は小径で直立状に開き内面は湾曲する。内面見込み部は緩やかである。
第21図 図版	4 41	口：(13.4) 高：5.0 底：6.1	約3/4 覆土	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部中位に丸みを持つ。高台は短く開き内面は湾曲する。内面見込み部は緩やかながら屈曲する。
第21図 図版	5 41	口：(13.0) 高：5.0 底：6.0	約1/2 南壁下	①粗片 岩石英 ②還元焰 ③オリーブ黒色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部やや下位に丸みを持つ。高台は短く直立気味に付され比較的端正に仕上げる。内面見込み部は緩やかながら屈曲する。底部器厚やや厚く内面の器壁剥落。
第21図 図版	6 41	口：(13.8) 高：5.0 底：5.7	約1/3 東壁上	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部やや下位に丸みを持つ。高台は短く直立気味に付され丁寧な撫で。内面見込み部は緩やかである。
第21図 図版	7 41	口：14.0 高：5.4 底：6.4	完形 北東ビット 内	①粗 大粒の片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄 橙色 ④須恵器	口縁部の歪み著しい。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は緩やかに外反し、直線状に体部に至るが下半に丸みを持たせる。高台は直立し貼付は雑である。内面見込み部は緩やかに湾曲する。
第21図 図版	8 41	口：(13.0) 高：5.8 底：6.0	底部完存 他約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③赤褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形後体部撫で。高台貼付後周縁撫で。口唇部器厚薄く尖る。口縁部は極僅かに外反し体部に丸みを持たせるが、撫でに伴う指頭圧痕のため凹凸が著しい。高台は内彎気味に立ち、内面見込み部は緩やか。
第21図 図版	9 41	口：13.0 高：5.4 底：6.2	完形 北東ビット 内	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部若干歪む。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部やや回に丸みを持つ。高台は短く比較的雑に付され歪みも生じている。内面見込み部は緩やかながら屈曲する。口縁器厚が薄手。
第21図 図版	10 41	口：(13.8) 高：5.6 底：5.8	約1/2 貯蔵穴内	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙 色 ④須恵器	右回転轆轤整形後体部撫で。高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反しやや肥厚気味。体部に丸みを持たせ直立気味の高台を付す。薄手の口縁器厚に比して底部は厚手である。内面見込み部は緩やかに湾曲する。
第21図 坏・碗	11	口：15.2 高：— 底：—	約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器 刻書土器	右回転轆轤整形。口縁部は極僅かに外反し体部に丸みを持たせる。口縁部内面に浅い凹線が撫でによって巡る。比較的しっかりした作り。外面体部中位に焼成後の線刻。「上」のみ判読可能。
第21図 図版	12 42	口：— 高：— 底：6.0	底部 カマド	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙 色 ④須恵器 線刻	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。外彎気味に高台が付される。内底面に焼成後の線刻が刻まれるが判読は不能。
第21図 図版	13 41	口：— 高：— 底：6.5	体部～底部 約1/2 北 東ビット内	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味③明褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形後体部撫で。高台貼付後周縁撫で。体部に丸みを持たせるが撫でによるものか凹凸がある。高台は短く直立状に開く。内面見込身部は緩やかな湾曲を呈す。
第21図 碗	14	口：— 高：— 底：6.0	底部 北東ビット 内	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部は丸みを持ち、高台は短く直立状に付される。丁寧な貼付だが高台端部は摩滅する。比較的厚手の器厚を呈し、内面見込み部は緩やかである。

第2節 竪穴住居跡

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第21図 15 壺	口：－ 高：－ 底：6.2	体部～底部 約2/3 南壁上	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄 橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形後撫で。高台貼付後周縁撫で。体部は緩やかな丸みを持たせ若干内傾気味に高台を貼付する。内面の見込み部は緩やかな彎曲を見せ、重ね焼きの粘土粒も付着する。
第22図 16 壺 図版 41	口：－ 高：－ 底：6.0	体部～底部 約1/3 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄 橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形後撫で。高台貼付後周縁撫で。体部は直線状を呈し高台は短く直立状に付される。内面の見込み部は緩やか。体部器厚は薄手。
第22図 17 灰釉 壺 図版 42	口：(14.2) 高：4.5 底：7.0	約1/2 貯蔵穴上	①細緻密片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器 大原2？	左回転轆轤整形高台貼付。口唇部は極僅かに外反し、体部に丸みを持つ。高台は三日月状に付され端部が滑沢である。外面体部下半は回転斲削りが施される。施釉は潰け掛け。内底面に研磨痕が看取される。転用硯？
第22図 18 皿 図版 42	口：13.2 高：3.1 底：5.7	約1/4 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	小型の高台付皿である。轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反し体部に丸みを持たせ、開き気味に高台を付す。高台周縁の撫では丁寧で整った形状を呈す。器厚は比較的厚手。
第21図 19 甕 図版 42	口：22.0 高：26.0 底：4.0	約2/3 覆土	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部は浅い凹線を巡らし立つ。頸部は緩やかな彎曲を呈するが、平行する2条の撫でにより画される。体部は上半に膨らみを持たせ小径の底部に至る。口縁部は横撫で、外面体部上半は横位斲削り、下半は斜位斲削りが施される。底面は撫で。内面は横位・斜位の斲撫で。口縁部の歪みも少なく、整った器形を呈する。
第22図 20 甕 図版 42	口：(18.6) 高：－ 底：－	口縁部破片 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部は浅い凹線を巡らし直立。口縁部は外傾し体部は緩やかに膨らむ。口縁部は強い横撫で、体部上半は横位斲削り、下半は斜位斲削りを施す。内面は横位斲撫で。
第22図 21 甕 図版 42	口：(20.6) 高：－ 底：－	口縁部 約2/5 覆土	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部は浅い凹線を巡らし直立。口縁部は外傾し、頸部は湾曲するが2条の撫でにより画される。外面体部は横位斲削りが施される。内面は斲撫でが看取されるが器壁剥落著しい。口縁部器厚やや厚手。
第22図 22 甕 図版 42	口：(19.0) 高：－ 底：－	口縁部 約1/6 北東ピット	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口唇部は浅い凹線を巡らし直立。口縁部は外傾し頸部は屈曲するが強い撫でにより肩部と画する。体部上半はノッキングを伴う横位斲削り及び無調整部分。内面は横位斲撫でを施す。
第22図 23 甕	口：(15.2) 高：－ 底：－	口縁部破片 北東ピット 上	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	轆轤整形。回転不詳。口唇部は短く内傾し、口縁～頸部は弱く彎曲する。体部は緩やかに張るが顕著ではない。器面摩滅。
第22図 24 甕	口：(18.0) 高：－ 底：－	口縁部破片 覆土	①粗破片 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口唇部は短く内傾し、口縁～頸部は弱く彎曲する。体部の張りは顕著ではない。 23・24とも小破片のため、口径・傾き等不確定
第22図 25 甕 図版 43	口：－ 高：－ 底：14.0	頸部～底部 約2/5 覆土	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③オリーブ黒色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。頸部は屈曲し体部上半に膨らみを持たせ、底部に至る。大径の底部のため安定感を得る。外面の轆轤目は強く、体部下半においては凹線状となり、棒状工具による縦位・斜位の撫でが入念に加わる。腰部には横位斲削りが巡る。内面体部下半には棒状工具による縦位の撫でが施される。
第22図 26 甕 図版 43	口：－ 高：－ 底：－	体部破片 覆土	①底片岩 石英 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	輪積？轆轤整形。外面平行叩後撫で。内面円環状当て目残る。器肉はサンドイッチ状を呈し、赤褐色を呈す。
第22図 27 小型壺 図版 43	口：－ 高：－ 底：6.0	頸部～底部 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。頸部上は外反し体部に膨らみを持たせる。底部径は器高に比して大きい。頸部は横位撫でで明瞭に画す。体部は斜位・横位の斲削りが施される。

第三章 検出された遺構と遺物

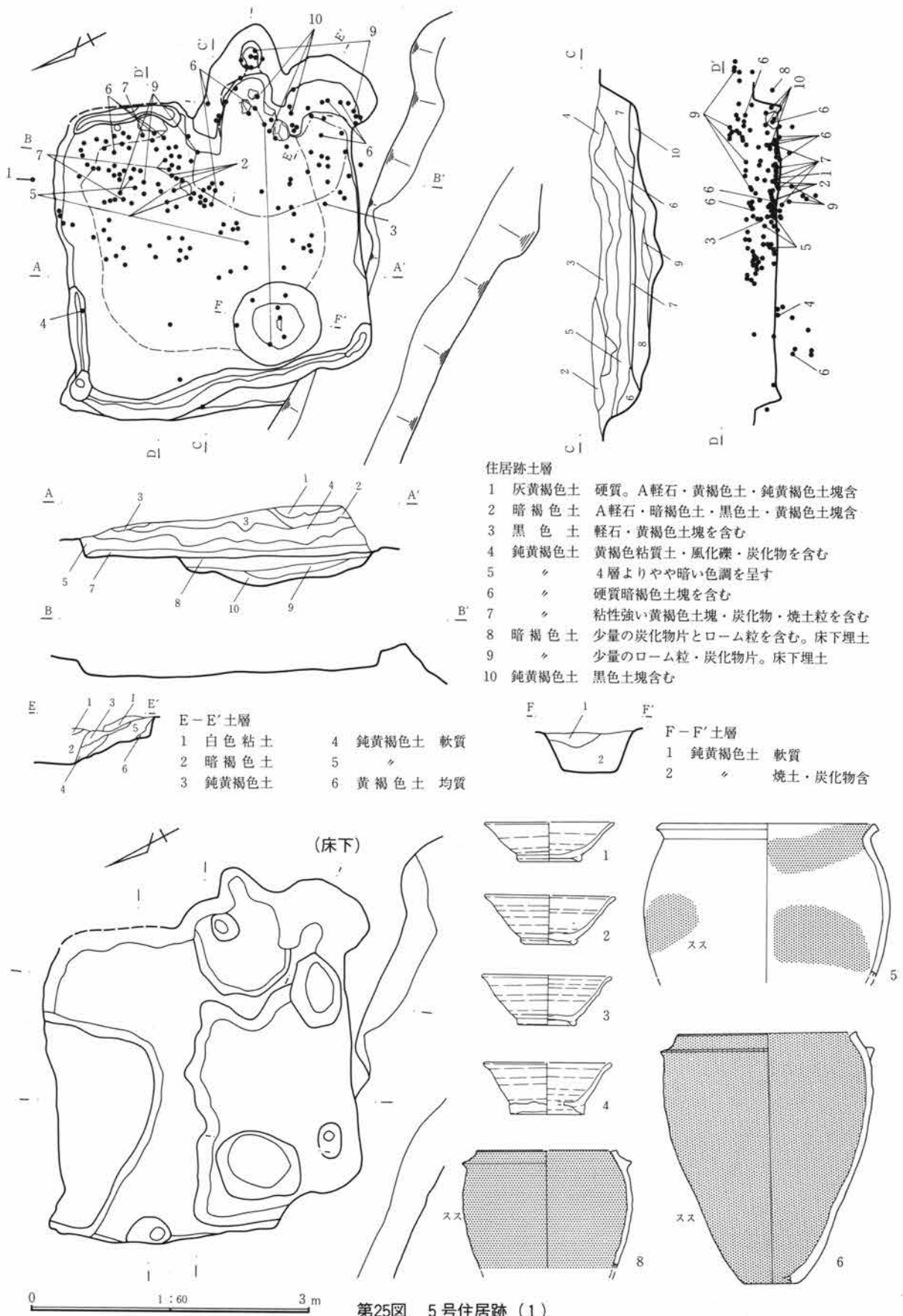
図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第23図 甗 図版 44	口： 28.4 高： 31.5 底： (18.4)	約1/2 南西ピット 内	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	鐏付き甗。口縁部は歪む。口唇端部は内傾し、口縁部はやや長く内傾気味に直立する。鐏はやや下位を向き体部は緩やかな膨らみを持ち裾部は外反する。輪積後右回転轆轤整形。体部下半は縦位斲削り、裾部は横位撫でが施される。内面体部下半に受け用の小孔が穿たれる。
第23図 羽釜 図版 45	口： 21.4 高： - 底： -	約1/2 貯蔵穴・ カマド	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部は突出し口縁部内傾する。鐏は上位を向き貼付される。口縁下内面で著しく内傾する。体部は比較的小径で緩やかな彎曲を呈す。体部轆轤整形後横撫で下半は縦位斲削りが施される。
第23図 羽釜 図版 43	口： 18.0 高： - 底： -	約1/4 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は内傾し鐏は水平に貼付されるが端部が下位に僅かに突出する。体部は上半に膨らみを持つ。下半に斲削りを施したのち、撫でが加わる。
第23図 羽釜 図版 43	口： 8.2 高： - 底： -	口縁～体部 覆土下位	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は内傾し鐏は僅かに上位を向く。体部の張りは少ない。上半より斲削りが施され撫でが加わる。内面口縁下の内傾が顕著。
第23図 羽釜 図版 44	口： (18.2) 高： - 底： -	口縁部 約1/2 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部内傾し鐏は水平に貼付される。体部は緩やかに膨らむ。轆轤整形後撫でが施されるが、轆轤目も顕著で凹線状に巡る。砂質である。
第23図 羽釜 図版 45	口： - 高： - 底： 7.4	約1/2 カマド・ 北東ピット	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。体部は中位に膨らみを持たせ小径の底部に至る。斲削りは比較的入念で、中位より縦位に施される。底部上は横位斲削り。斲削り後薄い撫でが加わる。
第23図 甗 図版 45	口： - 高： - 底： (11.0)	体部～底部 約1/5 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③明褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。直線的な体部形態を呈すため甕形土器と判断した。轆轤整形後斲削りが施され入念な撫でが加わる。底部直上は横位斲削り後薄い撫で。
第24図 平瓦 図版 46	厚： 2.5	約1/5 覆土	①粗石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵質	凸面は縦位斲削り後撫で。薄く自然釉が付着。凹面は細かな布目。剥ぎ取り痕が看取される。側部の面取りは3回に及ぶ。一枚造り。厚手。
第24図 磨石 図版 63	長： 18.6 幅： 11.0 厚： 5.3	3/4 覆土	①粗粒安山岩 ④1,906.7g	表裏の平坦面に浅い線状痕が看取される。おそらく台石状の用途が想起されるが、縁辺の調整剥離の一部は風化していることから、縄文時代の石器の再利用であろうか。側縁に煤付着。
第24図 磨石 図版 63	長： 13.9 幅： 7.8 厚： 6.1	両端欠損 貯蔵穴	①粗粒安山岩 ④1,057.3g	縄文時代石棒の再利用か。表裏面及び周縁が磨られ滑沢面を持つ。表裏面中位に加熱痕跡あり。

高台付塚6・7・9・13・14・土師器甕22・23・須恵器甕の25等が出土している。その他では、南壁際にも遺物の集中が見られ、高台付塚の体部破片・15の底部・31の羽釜を見た。床直遺物としては30・34が挙げられる。その他の21・24～26・35・36は覆土出土である。

また遺物の断面分布からは、重複部分を含むが、床面～覆土下位と覆土上層に遺物集中が分けられる。廃棄・流入という竪穴住居跡内部への遺物の存

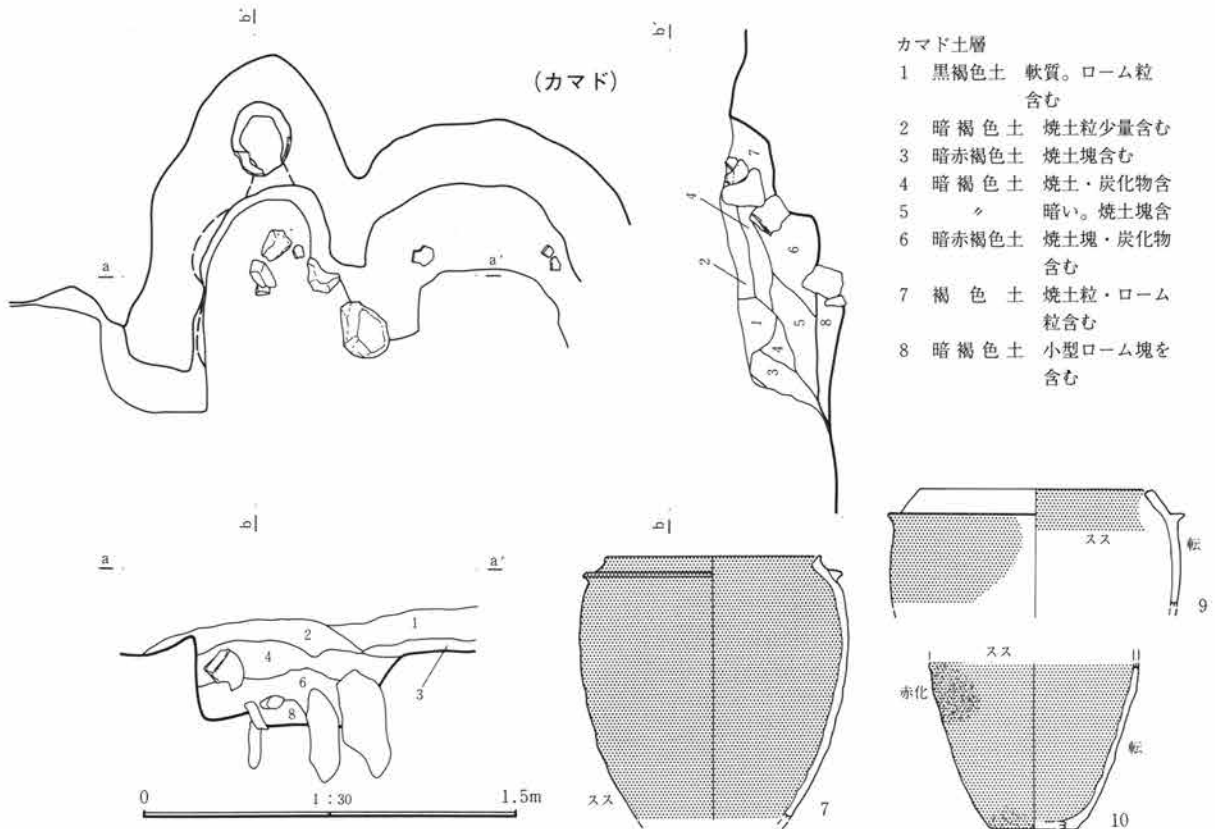
在背景が一系的ではないことを物語る。

このように、4号住居跡は重複住居であり、遺存状態は比較的良好でないが、残存部に残された、石組みのカマドと煙道への土器の再利用、さらに複数の貯蔵穴等特徴的な施設の在り方が提示されている。残念ながら、整理作業において重複部分の遺物の分別に手間取り、掲載遺物の一部を11住出土遺物に帰属させたが、重複状態の把握と併せて再検討したい。



第25図 5号住居跡(1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



カマド土層

- 1 黒褐色土 軟質。ローム粒含む
- 2 暗褐色土 焼土粒少量含む
- 3 暗赤褐色土 焼土塊含む
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物含む
- 5 暗褐色土 暗い。焼土塊含む
- 6 暗赤褐色土 焼土塊・炭化物含む
- 7 褐色土 焼土粒・ローム粒含む
- 8 暗褐色土 小型ローム塊を含む

第26図 5号住居跡(2)

第10表 5号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
34・35-14	不整正方形	330×320×52	N113°E	N113°E	貯蔵穴・床下土坑?	甕4 甕1 羽釜5 刀子1	1号溝

5号住居跡

第Ⅰ台地調査区中央やや東寄りに位置する。4号住の南約4mに近接して検出された。住居跡南側と西側壁の一部が1号溝に切られる重複関係を見せる。周辺の地形は、北側へ傾斜しているが緩やかであり、ほぼ平坦地形が保証されている。そのため、北壁も良好に確認された。尚、東壁北半は過掘により逸失したため、図上復元とし壁線は破線で表した。

平面形は、軸長約3.3mのややいびつな不整正方形を呈す。深さは約50cmを測り、良好な遺存といえよう。壁は開き気味に立ち上がるが、掘り込みは

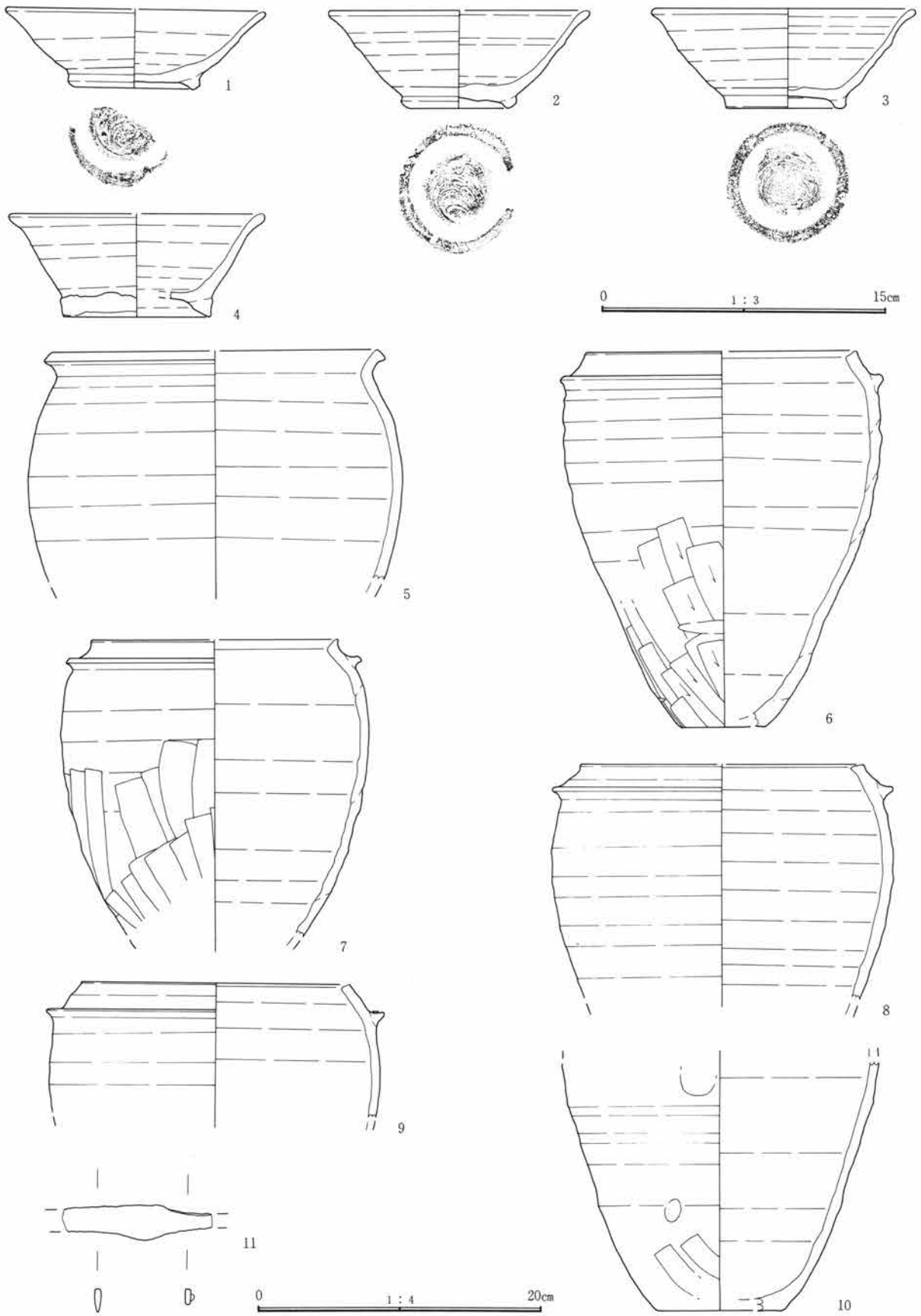
しっかりしていた。1号溝との重複部は南西隅を中心として南壁の上半であるが、溝最深部との重複が免れたため、床面や壁下半は残存していた。

床面はほぼ平坦面を築き、ローム粒を含む暗褐色土を貼床としていた。硬化面は広く確認され、床面中央部からカマド周辺にかけてが特に顕著だった。

柱穴は無く、壁周溝が東壁北半・北壁西半から西壁にかけて検出された。

貯蔵穴は明瞭な掘り込みを持たないが、東南隅部分の壁が大きく彎曲し、床面も凹み、遺物の集中も見られることから、貯蔵穴は東南隅に設けられたものと考えたい。

第2節 竪穴住居跡



第27図 5号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第11表 5号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第27図 1 碗 図版 46	口：13.8 高：4.2 底：6.4	約1/4 住居外	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部緩やかに外反し体部中位に丸みを持つ。高台は短く直立気味に開く。内面の見込み部は緩やかである。比較的軟質。
第27図 2 碗 図版 46	口：(13.8) 高：5.2 底：5.2	約1/3 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部緩やかに外反し緩やかな丸みを帯びる体部器形。高台は短く開き気味に付される。内面の見込み部は顕著に屈曲する。
第27図 3 碗 図版 46	口：14.1 高：5.3 底：6.3	約3/4 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は顕著に外反し体部は緩やかに丸みを持つ。高台は直立場に付される。内面の見込み部は顕著に屈曲する。器厚は比較的薄手。
第27図 4 碗 図版 46	口：(13.6) 高：5.5 底：(8.0)	約1/5 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は顕著に外反し体部は僅かに丸みを持たせる。高台内面は強く開き端部を尖鋭にする。器高に比して高台径が広く安定感のある座りを呈す。
第27図 5 甕 図版 47	口：(23.0) 高：— 底：—	約1/4 床直	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部内傾し口縁部外傾する。頸部は緩やかに彎曲する。体部は中位に膨らみを持たせる。体部下半は轆轤整形後斲削りを施し丁寧な撫でを加える。器厚は比較的薄手。
第27図 6 羽釜 図版 46	口：19.0 高：26.9 底：(6.0)	約1/2 カマド	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形鑄貼付。口唇部僅かに立ち口縁部は短く外傾する。鑄は短くほぼ水平に付される。体部は上半に膨らみを持たせ小径の底部に至る。口縁部内面の内傾も顕著。外面体部下半は縦位斲削りを施す。
第27図 7 羽釜 図版 47	口：(17.4) 高：— 底：—	口縁～体部 約1/5 床直	①粗片岩 ②酸化焰 ③明褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形鑄貼付。口唇部は短く立ち口縁部は内傾する。鑄は短くほぼ水平に付される。体部は上半から中位にかけて緩やかに膨らむ。鑄貼付後横位撫で。体部中位より縦位斲削りが施され撫でが加わる。
第27図 8 羽釜 図版 47	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁～体部 約1/4 カマド	①粗片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形鑄貼付。口唇部は短く立ち口縁部内傾する。鑄は短くほぼ水平に付され体部は中位に緩やかな膨らみを持たせる。口縁部に著しい歪みがある。鑄貼付後横位撫で。体部下半は斲削り後撫で。
第27図 9 羽釜 図版 46	口：18.0 高：— 底：—	口縁部 約2/3 覆土	①粗石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色④須恵器	輪積後右回転轆轤整形鑄貼付。口縁部やや長く内傾し鑄は僅かに上位を向く。体部は僅かに膨らむ。鈍黄橙色と浅黄色の色調差のある破片が接合する。
第27図 10 羽釜 図版 47	口：— 高：— 底：(7.2)	体部～底部 破片 カマド	①粗片岩 ②酸化焰 ③明褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不祥。薄手で轆轤目強いため器面の凹凸強い。体部下半に斲削りが看取されるが、撫で線が強く判然としない。
第27図 11 刀子 図版 68	長：8.0 幅：1.9 厚：0.3	覆土	④10.42g	比較的大型の刀子。茎端部と先端部を欠損するが、棟区、彎曲する刃部の形状が明瞭であり、目釘も看取される。

その他の施設としては、西壁際やや南寄りに径約1m弱の円形の土坑が検出されている。焼土・炭化物を含む鈍黄褐色土が埋土の主体を占める。性格は不明だが、焼土を埋土とする床下土坑と同等の用途も想起される。

床下遺構は、明瞭な施設は見られなかったが、南半と北半に各々大型の掘り込みが検出された。住居構築の際の所産と思われるが確定的ではない。

カマドは東壁やや南寄りに貯蔵穴の彎曲に接して設けられる。比較的遺存の良好なカマドで一部の天井材が残存していた。天井材は砂礫を混入する白色粘土が主体で燃焼部から煙道部にかけて残存していた。煙道部は壁外に延び、径約30cmの端部につながる。端部壁には羽釜破片(9)が再利用されていた。白色粘土は南東隅の貯蔵穴にまで範囲を広げるが、おそらくカマド構築材崩壊により、南東方向へ

流れたものと捉えられる。カマド袖も白色粘土と自然石によるものだが、粘土部分は明瞭には残存しておらず、自然石と袖基部の地山ロームが確認された。燃焼部からも自然石は出土しており、これも側壁等の補強材崩壊によるものだろう。燃焼部の掘り込みは無いが、焼土・炭化物は広範囲に散布しており、前庭部から東南隅にまで及んでいた。

遺物は、比較的多く出土し11個体を図示した。住居跡東半の集中が目立ち、図示した遺物の大半が東半の出土である。さらに北東部分に分布の中心が偏り、他の住居跡の出土状態と差が見られた。また、カマド出土遺物は良好な遺存の割りには以外に少なく、持ち去り行為等も考慮しておきたい。

1は北壁外の出土の高台付碗。2は床面中央やや北東寄り床直で出土した。3は南側で覆土。4は唯一西半部の出土。北壁西寄りの周溝脇の床直で出土している。5の須恵器甕は床面中央及び北東部で床直出土。6の羽釜はカマド周辺・東南隅・北東部、さらに西壁際の土坑内より出土している。広範囲に散布する破片が接合されたもので、廃棄行為は一箇所に止どまらぬ現象が窺われよう。7は北東部の床直で集中して出土した。8の羽釜口縁部大破片はカマド煙道部下端で出土した。9は前述の煙道部端部の補強材として見られた。その他に北東部では覆土から出土している。10もカマド内出土。おそらくカマド補強材としての再利用であろう。11の刀子は覆土出土である。

本住居跡出土遺物は比較的まとまった出土を見せるが、おそらく廃棄行為や破片転用行為が伴っており、必ずしも同時性を保証できるものではない。しかし、概ね10世紀後半代に帰属する遺物であり、住居跡に与える時期も同様にしたい。

以上のように、5号住居跡は1号溝に切られるものの、カマドの遺存状態は良好であり、天井材の残存と煙道部端部の土器再利用を確認できた。先に述べた4号住も土器を煙道部に再利用しており、自然石と共に土器がカマド構築材へ再利用される様相は当地域では一般として周知できよう。

6号住居跡

第I台地調査区中央東に位置する。周辺は緩やかな北側斜面で、ほぼ4号・5号住と同様の地形に占地する。4号・5号住居跡は西側に近接しており、4号住と重複する10号・11号住さらに距離を置くが1号住等と共に群をなすともいえよう。しかし、4号・10号・11号住以外は単独の住居であり、本住居跡も重複関係は認められなかった。このことは各住居跡が近接した時期に営まれ、各々の住居配置が意識された、居住形態の痕跡といえよう。

6号住居跡は、辺長3m前後の隅丸正方形の平面形を呈し、比較的整った形状を見せる。北壁や南壁の一部に小さな彎曲が見られるが、壁崩落の所産であろう。また、若干ながら西壁は南北壁に直交していない。深さは約50cmを測り、良好な遺存状態で確認された。壁も強く立ち上がりしっかりしていた。

床面はやや凹凸が見られたが、平坦な水準が意識され、暗褐色土による貼床がなされていた。硬化面はカマド前庭部から床面中央にかけて顕著だったが、北東部に関しては判然としなかった。

柱穴は、床面中央西側に2ケ1対で確認された。径40cm程度の小穴で、1mの間隔を置いて設置されている。埋土の観察からも柱痕が確認され、柱穴として確定的であろう。尚、南壁際で貯蔵穴に接して径約30cmの小ピットが検出されたが、浅く、小規模なことからも柱穴としては積極性を持たない。

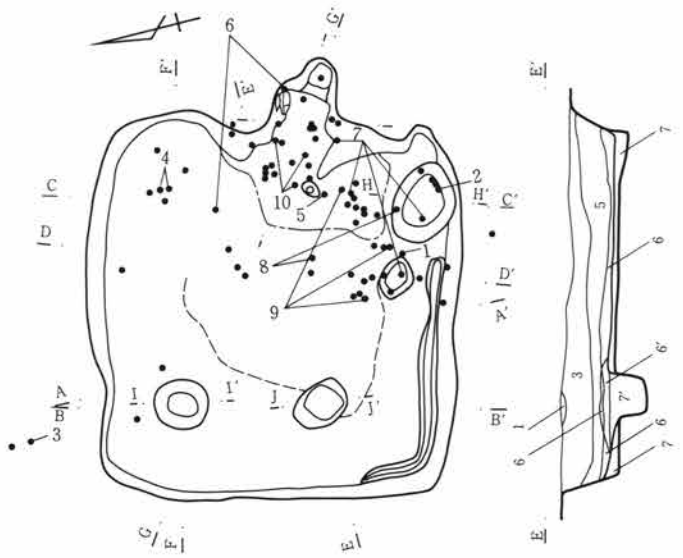
貯蔵穴は、南東隅で西壁に接するように設けられる。やや小型の規模を呈すが、下層より炭化物・焼土塊が検出されている。

その他の施設としては、南壁から西壁の一部にかけて周溝が確認されている。

床下遺構は、明瞭なものは無かったが、貼床下の地山は全体的に中央部分が盛り上がり、周辺部分が凹む様相を見せる。住居掘削時の所産と思われる。埋土はローム塊含みの鈍黄褐色土が主体である。

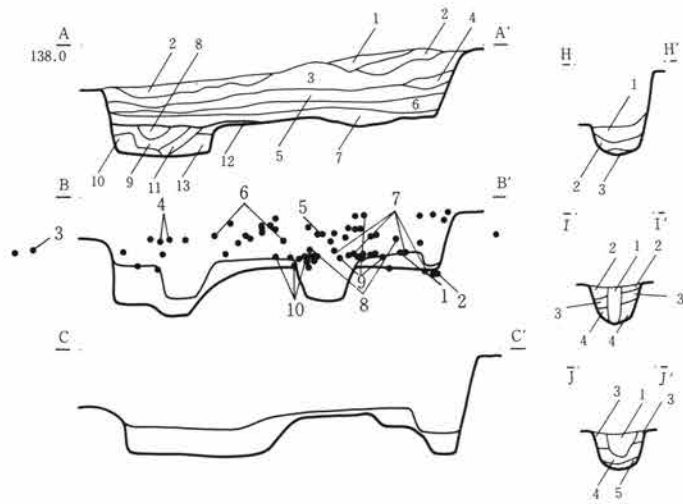
カマドは東壁のほぼ中央に設けられる。カマド主軸は住居跡主軸と差が見られ、そのため煙道部が南に傾く形態を見せる。煙道部は壁外に突出し、比較

第三章 検出された遺構と遺物



住居跡土層

- 1 黒色土 A軽石を含む
- 2 暗褐色土 硬質。軽石(B?)を含む
- 3 鈍黄褐色土 軟質。粘性乏しい
- 4 〃 黄褐色粘質土塊を含む、壁崩壊土か
- 5 〃 軟質。炭化物・焼土粒を含む
- 6 暗灰褐色土 床直上。灰・炭化物を多く含む
- 6' 〃 床直上。ローム塊を多く含む
- 7 暗褐色土 6号住貼り床土ローム粒を多く含む
- 7' 〃 ビット土層
- 8 黄褐色土 YP混入のローム塊
- 9 暗褐色土 ローム粒を含む。粘性に富む
- 10 鈍黄褐色土 ローム粒を多量に含む
- 11 〃 色調やや明るい
- 12 暗褐色土 ローム粒を含む
- 13 暗褐色土 ローム塊を含む



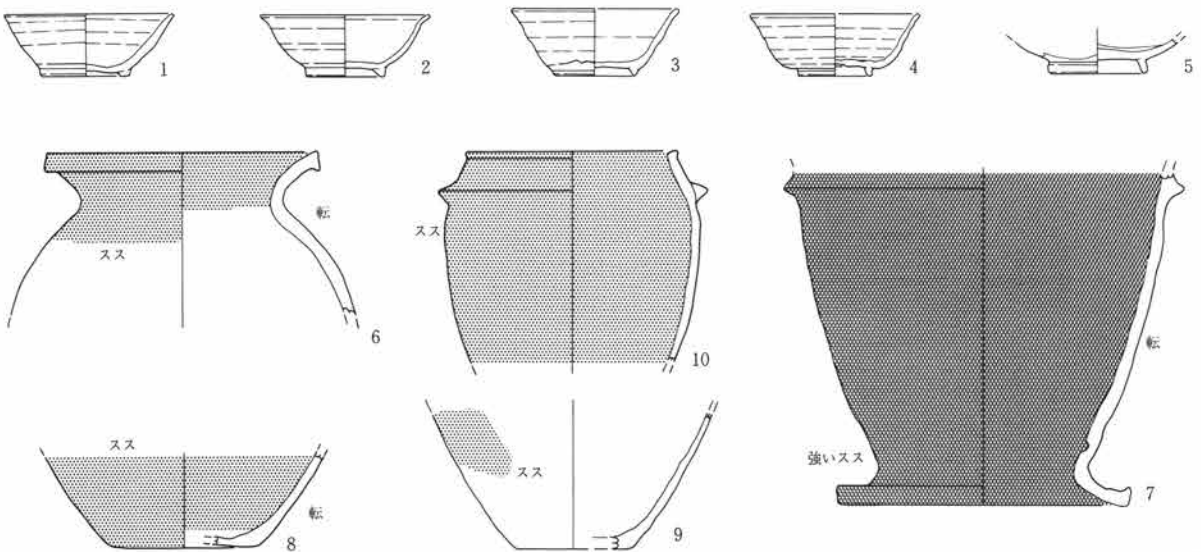
ビット土層

- 1 暗褐色土 軟質。ローム粒を少量含む
- 2 鈍黄褐色土 ローム塊・風化礫含む
- 3 〃 ローム粒を含む
- 4 黄褐色土 風化礫を含む塊状堆積
- 5 鈍黄褐色土 軟質土

貯蔵穴土層

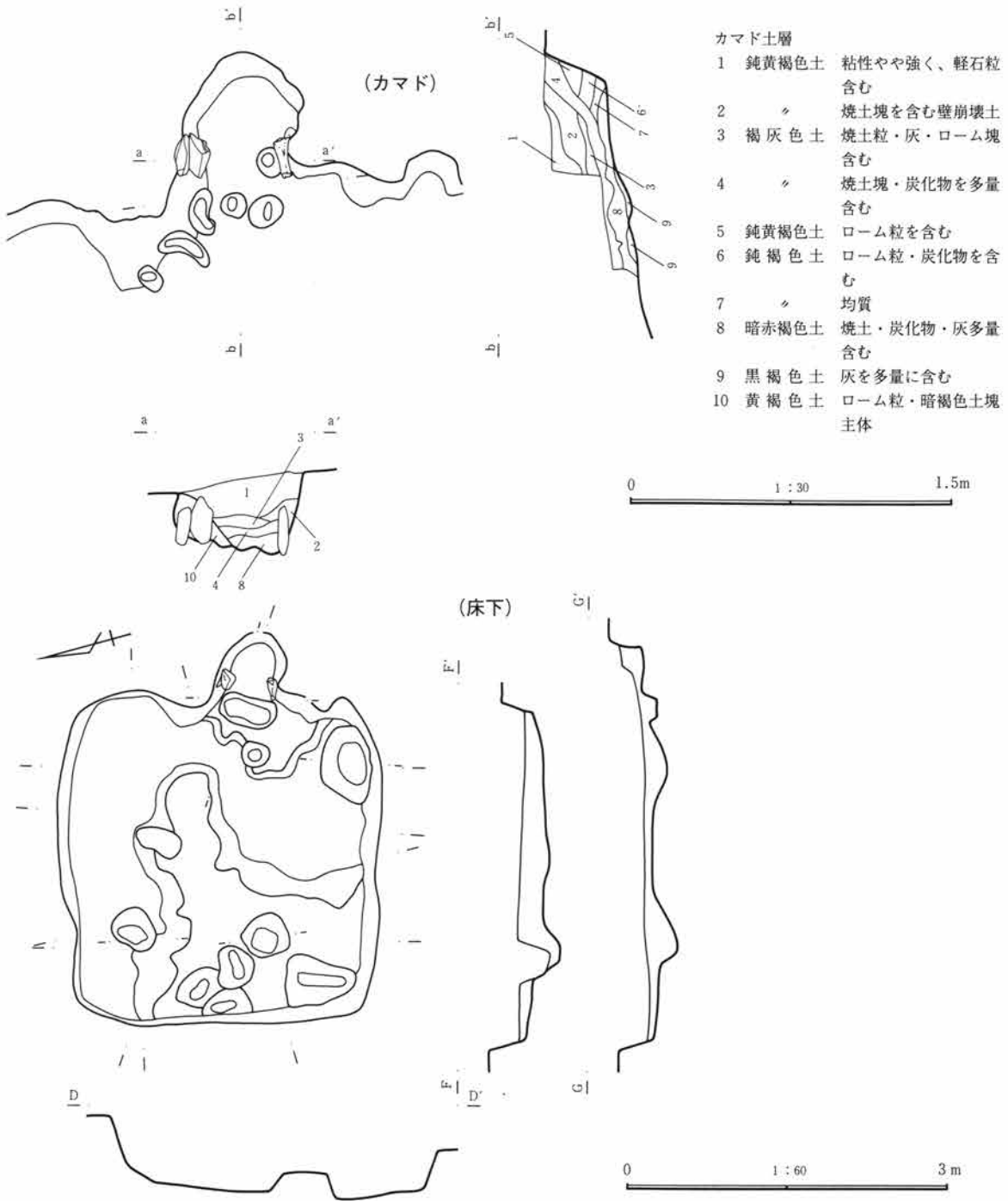
- 1 鈍黄褐色土 ローム塊を含む
- 2 暗灰黄褐色土 炭化物を含む
- 3 灰黄褐色焼土 塊を含む

0 1:60 3 m



第28図 6号住居跡(1)

第2節 竪穴住居跡

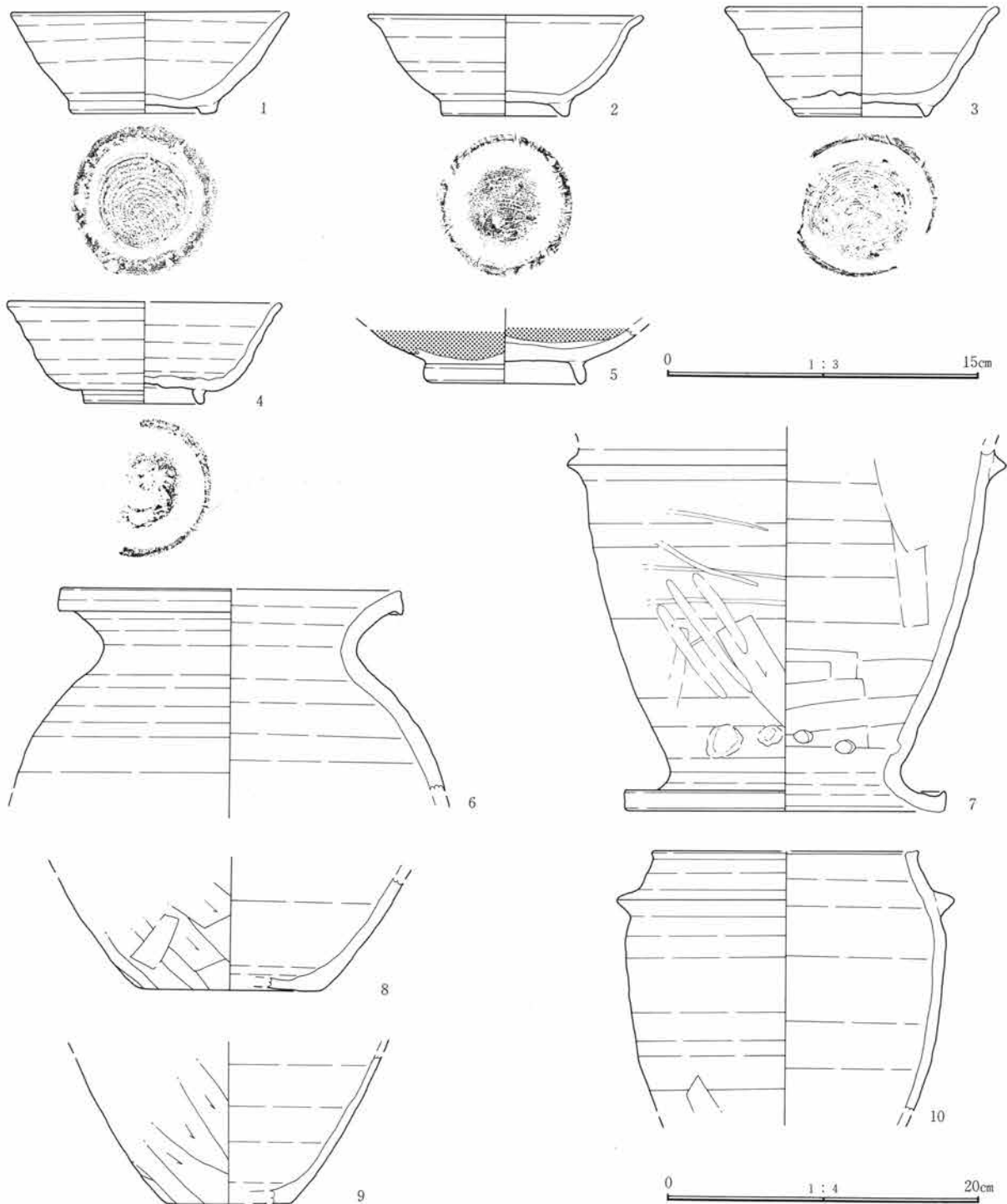


第29図 6号住居跡 (2)

第12表 6号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
32-13	隅丸正方形	296×290×50	N105°E	N124°E	貯蔵穴・周溝	碗4 皿1 甕2 甌1 羽釜2	

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第30図 6号住居跡出土遺物

第13表 6号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第30図 1 碗 図版 47	口：13.4 高：4.9 底：6.8	完形 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部に僅かな丸みを持つものの、ほぼ直線状の器形。高台は短く直立する。内面の見込み部は緩やかである。器厚は体部に著しく厚みが見られる。

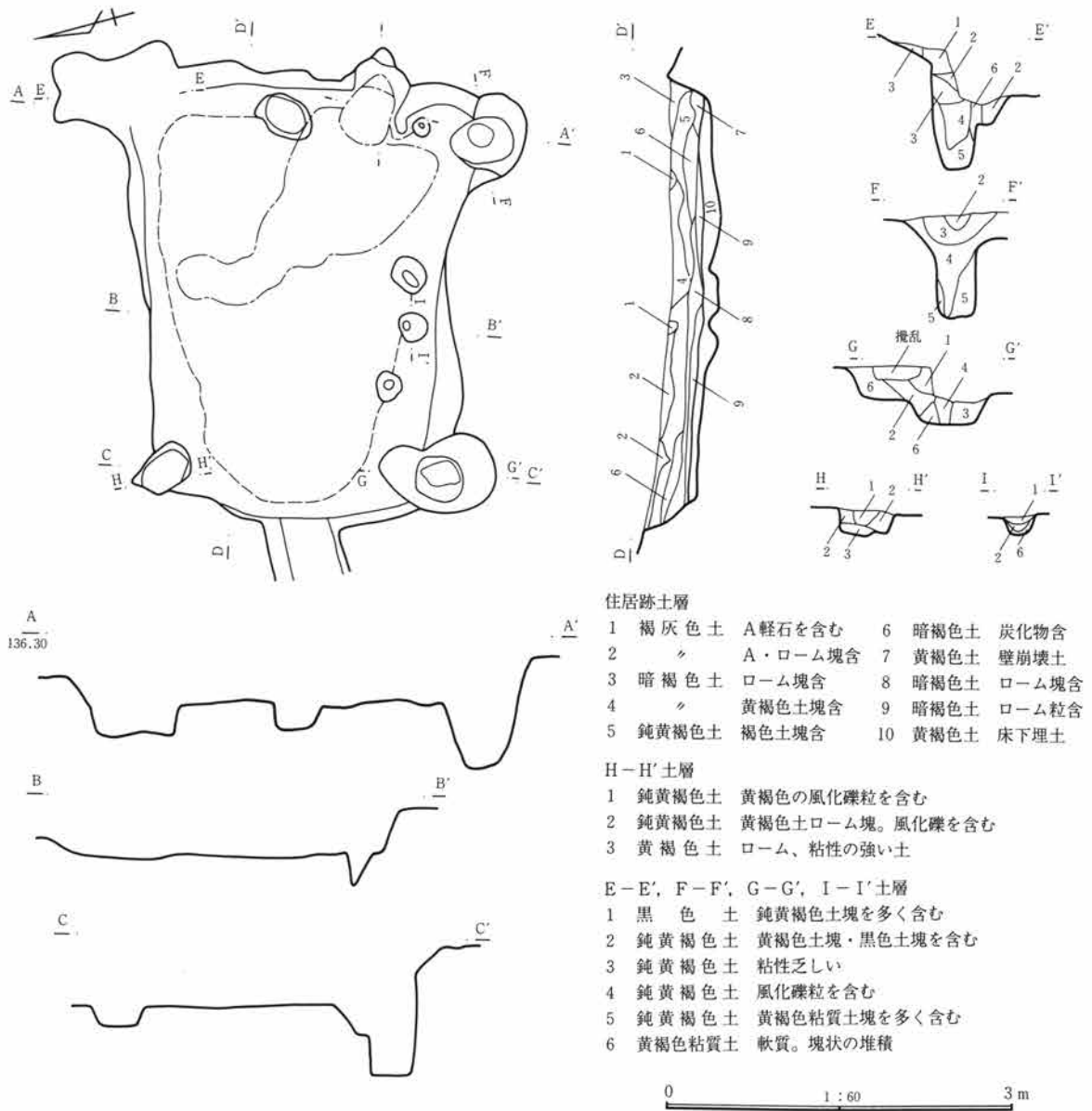
図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第30図 2 壺 図版 47	口：13.3 高：4.8 底：6.0	約3/4 貯蔵穴	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部中位に丸みを持つ。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やかな彎曲を呈す。器厚は薄手で全体に整った作り。
第30図 3 壺 図版 47	口：13.2 高：5.3 底：6.2	約1/2 住居外	①細 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部は直線状を呈す。高台は顕著に短く直立する。体部の轆轤目は強いが、内面見込み部は緩やかである。腰部の器厚はやや厚手で、安定感がある。
第30図 4 壺 図版 47	口：13.4 高：4.9 底：5.9	約1/4 覆土上層	①細 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部下半に丸みを持たせる。高台は短く直立する。外面体部及び内底面の轆轤目強く、内面の見込み部は顕著に屈曲する。
第30図 5 灰釉 皿 図版 47	口：— 高：2.5 底：7.4	底部破片 約1/2 カマド前庭	①細 緻密 ②還元焰 ③灰黄色 ④灰釉陶器 虎溪山	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台は比較的長く入念な貼付。体部下半に丸みを持たせる。施釉は漬け掛け。内底面に僅かな研磨痕が看取され、重ね焼きの粘土粒も付着する。
第30図 6 甕 図版 48	口：22.0 高：— 底：—	口縁～肩部 約1/2 カマド	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は外反気味に開き、頸部は緩やかな屈曲を呈す。肩部は張り、体部中位に膨らみを持たせる。比較的薄手の器厚で端正な作り。
第30図 7 甕 図版 48	口：— 高：— 底：20.8	頸部～底部 約1/5 床直 貯蔵穴	①粗 片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	鑄付の甕。口縁部は欠損するが、鑄は短く貼付され体部上位に膨らみを持たせ裾部上位で屈曲気味に開く。鑄は横位撫で貼付。体部下半は縦位鑄削り後撫で。内面下半は匏撫で。受け用の穴が2ヶ1対看取され外器面にまで及ぶ。体部上半の沈線は工具の当て目か。轆轤回転方向は不詳。
第30図 8 甕 図版 47	口：— 高：— 底：12.0	底部約1/5 床直上	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④須恵器	あるいは羽釜か。輪積後轆轤整形。底部は強く開き広径の底面を誇る。体部下半は匏削りが入念に施され一部撫でが加わる。底面は撫で。内面は横撫でが主で縦位匏撫でも認められる。轆轤回転方向はおそらく右回転。
第30図 9 羽釜 図版 48	口：— 高：— 底：8.0	底部破片 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。小径の底部で緩やかな膨らみを帯びて体部が立つ。体部には縦位・斜位の匏削りが入念に施され底面にまで至る。器厚は薄手。轆轤回転方向はおそらく右回転。
第30図 10 羽釜 図版 48	口：— 高：— 底：—	口縁～体部 破片 カマド	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部は突出し口縁部は内傾する。鑄は厚く、水平に付され、体部は上半に若干の膨らみを持たせる。内面口縁部下位に緩やかな屈曲を持たせる。

的強く立ち上がる。燃焼部には顕著な掘り込みを持たず、灰・炭化物が薄く堆積していた。また、灰層上には焼土塊が多量に堆積しており、構築材の崩壊と考えられる。袖は短く突出し、やや幅広に確認できた。側壁には補強材の自然石を立位に出土している。その他に、須恵器甕の破片が出土しているがこれも補強材として位置付けられよう。

遺物は良好な遺存の割には少なく、10点を図示した。カマド・貯蔵穴周辺の出土が目立つが、カマド本体で使用状態を想起させる出土は見られなかった。1の高台付壺は貯蔵穴西で床直出土。2も貯蔵穴内。3は北壁外で出土している。4は北東隅の覆

土上層で。5の灰釉陶器皿はカマド前庭部覆土下層。6の須恵器甕はカマド出土。補強材として破片転用されたものである。7の須恵器甕は貯蔵穴内及びその周辺で出土している。カマドからも出土しており、補強材の破片転用としての可能性は高い。8は床面中央の床直上及び貯蔵穴上で出土した甕底部。9の羽釜底部は貯蔵穴周辺で床直出土。10の羽釜口縁部はカマド前庭部で床直上出土である。

以上のように、本住居跡の出土遺物は少量ながらも床直上や貯蔵穴内の出土が良好であり、近接した時期に帰属し得る。破片転用としての6・7・8には注意を要するが、概ね10世紀前半代に属しよう。



第31図 7号住居跡(1)

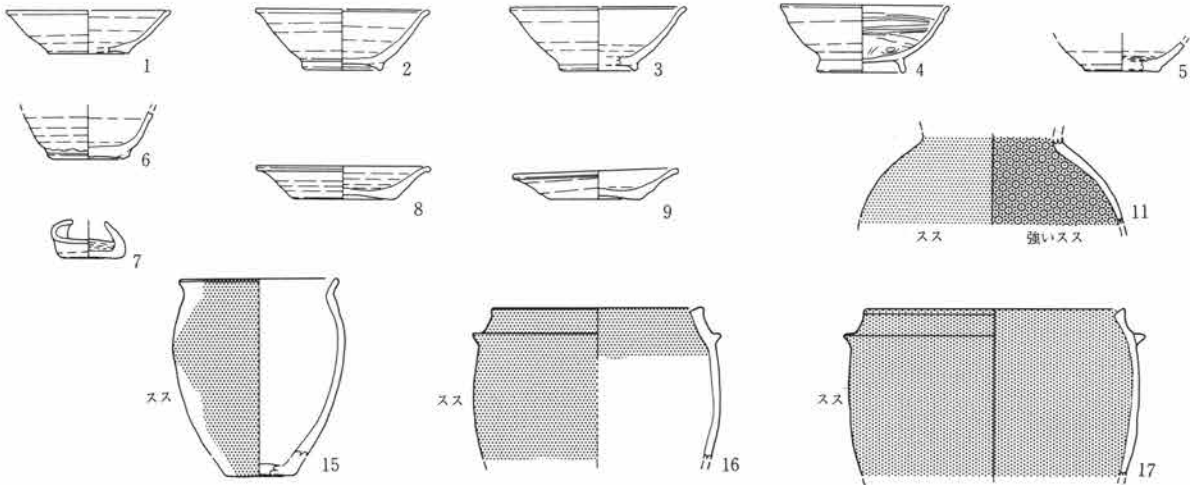
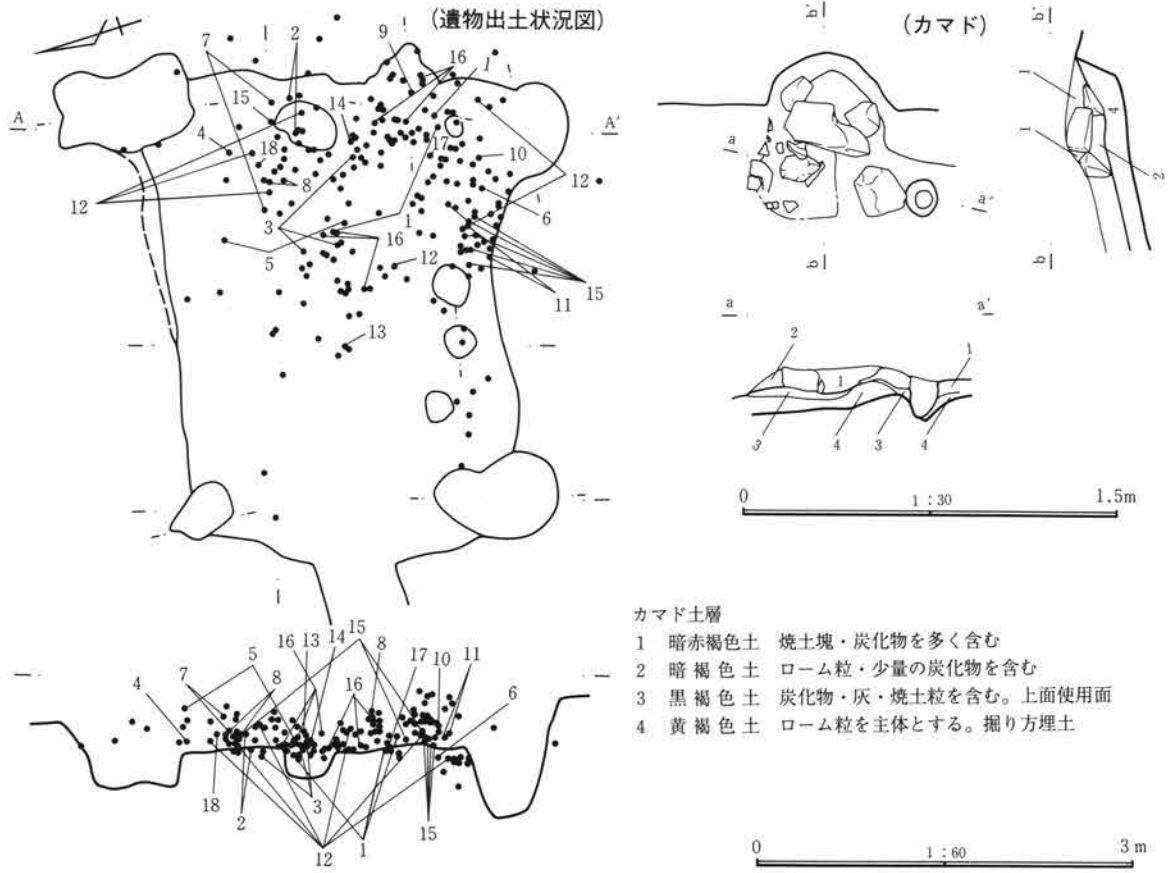
7号住居跡

第I台地調査区東端で検出された。周辺は比較的平坦地形に恵まれた箇所であるが、全体的には北側と東側への緩傾斜面である。住居跡同士の重複は無く単独で検出された。近接する住居跡も無く、南10mに2号・3号・8号住、北約10mに13号住居跡が見られるのみで、孤立した印象を得る住居跡である。住居跡が帰属する時期の重複は見られないが、周辺は近世～近代の溝・土坑が群在しており、本住居跡自体にもAs-A(A軽石)を混入する土層が

確認されている。

住居跡平面形は、東西に主軸を設け、約3.8×2.6mの縦長方形を呈するが、東辺長と西辺長に差があり、ややいびつな平面形となっている。深さは約40cm程度で比較的良好な遺存といえよう。壁は開き気味に立ち上がり、上端の崩れが見られる箇所もあるが、しっかりした壁である。

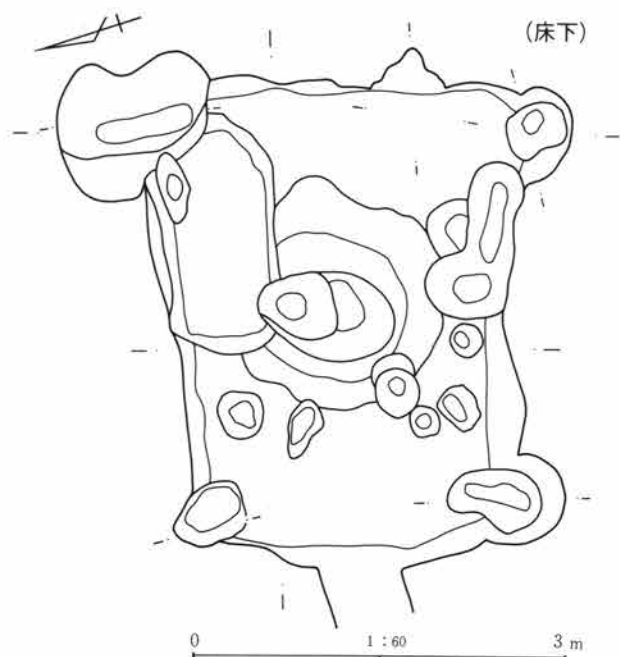
床面は、僅かな凹凸が見られるがほぼ平坦面を築き、暗褐色土による貼床がなされていた。硬化面は、広く、壁際を除き床面全域に認められた。



第32図 7号住居跡(2)

第14表 7号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
25-13	縦長方形	384×266×44	N114°E	N114°E	四隅柱穴・貯蔵穴・ 床下土坑	坏2 壺4 耳皿1 皿2 甕3 壺1 羽釜2 石1他	



第33図 7号住居跡 (3)

柱穴は、顕著なものとしては住居跡各隅部において確認された4ヶが該当しよう。各々の平面形は不整形で、深さ等の柱穴規模に統一性は無いが、土層の観察で柱痕が確認されており、配置からも積極的な四本支柱穴として確定した。尚、北東隅のピットは攪乱坑が重複するため、詳細な規模等は把握できないが、これも下層において柱痕が確認されており、住居隅部の柱穴として認定した。床面上の小ピット3ヶは、あるいは壁柱穴としての用途も想起されるが、連続性を持たず特定はできない。硬化面に沿うことから、少なくとも居住に伴う施設であり、柱穴としては、補助柱穴として考えられよう。

貯蔵穴は、本来の東南隅には設けられない。これは、同箇所の柱穴に影響されたものとして、柱穴と貯蔵穴の配置に強い規制が働いたものと考えている。本来の位置ではないが、カマド北側に貯蔵穴と同様の規模を呈す土坑が検出された。傍竈坑として貯蔵穴と同等の性格を捉えた。

床下遺構としては中央部の大型円形土坑と北壁東寄りの不整形長方形の土坑が主な遺構である。中央の円形土坑は、住居構築時の掘り方の一例であろう。

一方の不整形長方形の土坑は、北壁の位置部に沿うことから、円形土坑と同様に構築時の北辺を定めたものか、あるいは通常呼称される床下土坑としても位置付けられる。ここでは形状から床下土坑として考えておきたい。

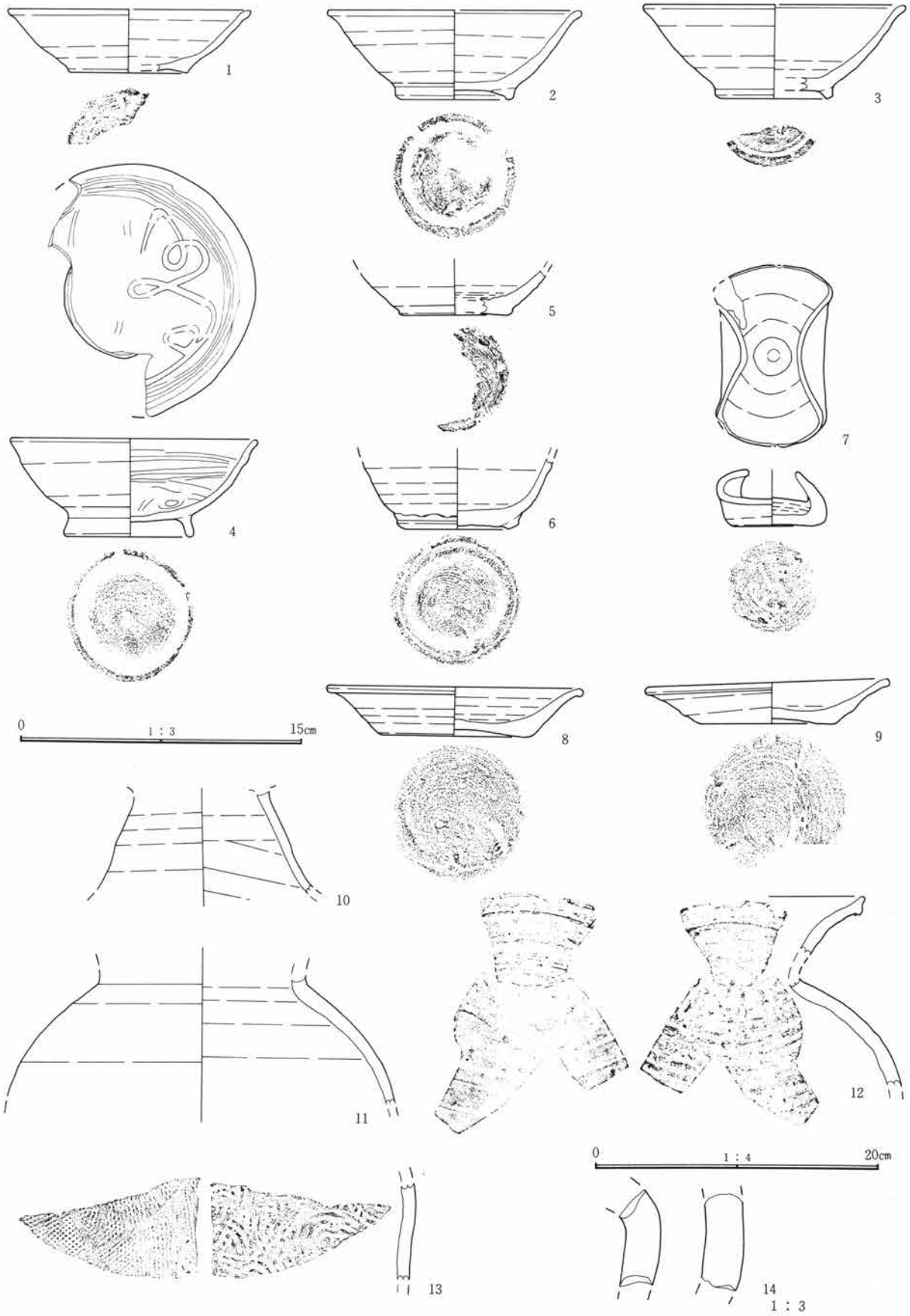
カマドは東壁中央やや南寄りに設けられる。確認時より焼土の散布が著しく、確定的に調査できた。煙道部の突出は短く強く立ち上がる。燃焼部は比較的狭く掘り込みを持たない。構築材に使用された自然石が散乱した状態で出土しており、焼土塊等の堆積も著しいことから、廃棄時の強い破壊行為が想起される。袖は南側袖が顕著に突出する。自然石の出土さらに南側袖南で確認された小ピットは補強材の抜き取り穴として捉えられよう。燃焼部および前庭部にかけて焼土粒・炭化物の散布が多く、この散布は床面中央にまで及んでいた。この散布に同調する

ように羽釜 (16) の口縁部破片も出土しているが、おそらく構築材として破片転用された羽釜がカマド破壊時に焼土等と共に散乱したものと考えられる。

遺物は比較的多く出土しており、18点を図示した。全体的に住居跡東半に出土の偏りが見られ、覆土上層より床直まで満遍なく出土している。カマド周辺や床面中央部、さらに南壁際に集中が見られるが、カマド北側の貯蔵穴とした土坑周辺にも集中しており、このことは、本土坑を貯蔵穴とした確定を裏付けよう。

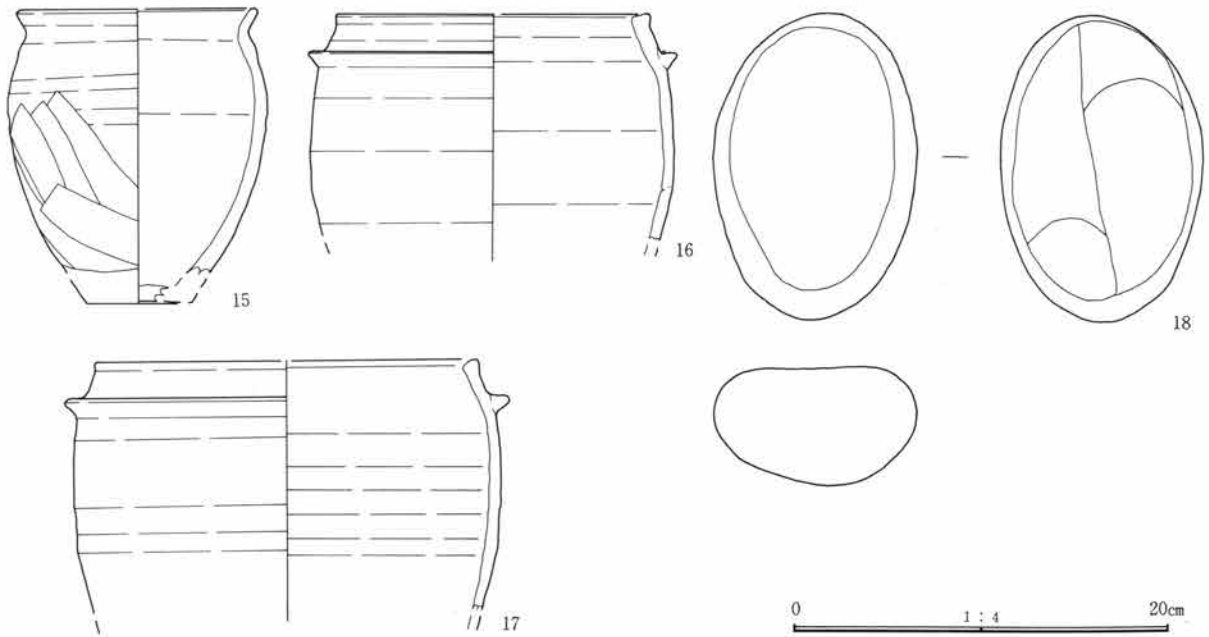
床直・床直上の出土遺物は多い。1～4・6の高台付壺。12の須恵器壺口縁部破片。15の須恵器小型甕や羽釜口縁部破片 (16・17) 等が挙げられる。ただし、完形の出土ではなく総て破片状態の出土であり、使用状態は具現していない。1はカマド前庭部および床面中央さらに東壁外と広範囲に散布する。2はカマド北の貯蔵穴とその周辺。3は床面中央付近で3点の接合。4の黒色研磨壺は北東隅で出土。5の坏は中央部で覆土出土である。6は南東隅で出土。7の耳皿は完形ではあるが、北東部壁際で覆土

第2節 竖穴住居跡



第34图 7号住居跡出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第35図 7号住居跡出土遺物(2)

第15表 7号住居跡遺物観察表

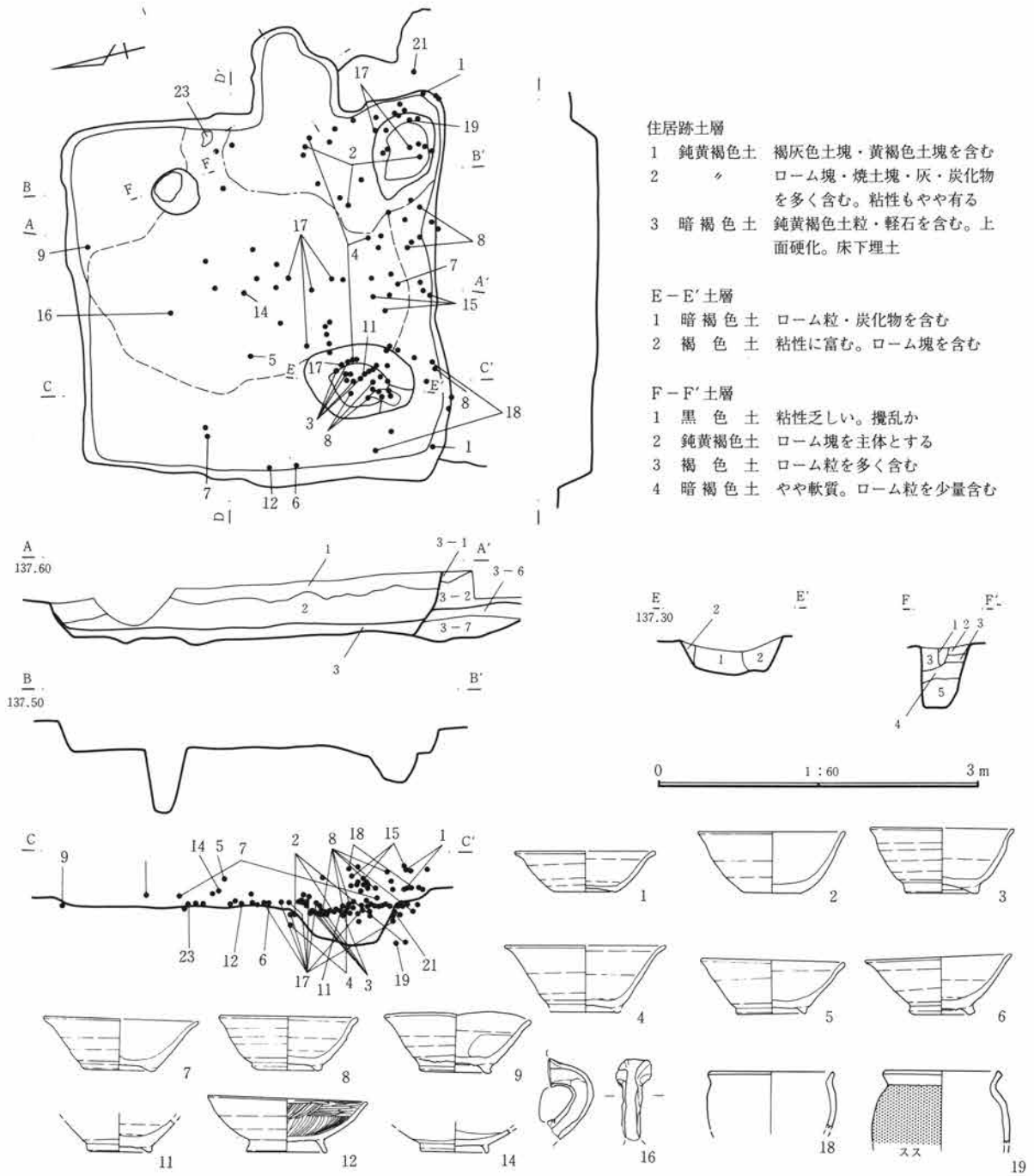
図 器 種	番号 ()推定値	法量 (cm)	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第34図 図版	1 48	口：(13.0) 高： 3.4 底： 6.2	約1/3 床直	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部極僅かに外反するが、ほぼ直線状の体部器形を呈す。底部は緩やかに立つ。内面見込み部は緩やかで、器厚は薄い。
第34図 図版	2 48	口： 13.6 高： 4.8 底： 5.7	約1/3 床直上	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部薄い撫でを加える。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを持つ。高台は短く直立気味に付される。内面見込み部は緩やかで、器厚は薄手である。
第34図 図版	3 48	口：(14.0) 高： 5.0 底： (5.8)	約1/3 床直	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部薄い撫でを加える。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを持つ。高台は短くやや開き気味に直立する。内面見込み部は緩やかで、器厚は薄手である。
第34図 図版	4 48	口： 13.2 高： 5.3 底： 7.0	約2/3 床直	①細 石英 ②酸化焰 ③橙色・黒色 ④須恵器	内面黒色研磨。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し、体部は丸みを持つ。高台はやや長く開く。均整のとれた器形を呈し、器厚も薄手である。内面は口縁部横位研磨。体部～底面螺旋状研磨を施す。
第34図 図版	5 48	口： - 高： - 底： (5.8)	約1/2 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底部は僅かに立ち上がる。轆轤整形後体部は薄い撫でが加わる。底部器厚はやや厚手で、内面の見込み部は緩やかである。
第34図 図版	6 48	口： - 高： - 底： 5.4	底部 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台は極短く、開き気味に直立し雑な貼付。内面見込み部は緩やかで体部器厚に比して底部器厚は厚手。
第34図 図版	7 48	口：9.7×6.0 高： 3.0 底： 4.3	ほぼ完形 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。両側縁を強く内彎し、対称性を保つ。口唇部は比較的厚手の器厚を呈し、底部の座りも良好である。湾曲部内面には亀裂が生じている。
第34図 図版	8 48	口： 13.8 高： 2.7 底： 8.0	約3/4 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口唇部は強く外反し玉縁状をなす。体部は直線状で、底部径は広く、低い器高からも安定性を持つ。器厚は厚手だが底面は薄く、やや上げ底状を呈す。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第34図 9 皿 図版 48	口: 12.8 高: 2.2 底: 7.2	ほぼ完形 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は緩やかに外反し、体部も外反気味に開く。底部径は広く低器高から安定性を持つ。轆轤整形後体部薄い撫でが加わる。底部はやや上げ底状を呈す。
第34図 10 脚部	口: - 高: - 底: -	脚部約1/6 覆土	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。おそらく壺・瓶器種の脚部であろう。体部接合部と裾部の開きが看取される。中位に緩やかな膨らみを持ち裾部が開く。内面下位に斜位の撫でが加わる。
第34図 11 甕 図版 49	口: - 高: - 底: -	肩部破片 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。頸部は屈曲し肩部一体部上半に膨らみを持たせ張る。轆轤整形後内外面とも横位撫でを施す。
第34図 12 壺 図版 49	口: (21.6) 高: - 底: -	口縁破片 肩部破片 床直上	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	やや軟質。輪積後轆轤整形。回転方向不詳。口唇部は僅かに内傾し口縁部は強く外反する。肩部に張りを持たせ上半にかけて膨らむ。肩部外面に匏撫で、内面には接合時の工具圧痕及横位匏撫でが看取される。
第34図 13 大甕	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	紐作り叩き整形。器形はやや歪み湾曲がある。外面は平行叩が密に施され、内面は青海波文が著しく残る。器厚は比較的薄手。
第34図 14 把手	口: - 高: - 底: -	把手破片 床直	①細 ②還元焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	甕・壺器種の肩部・体部上半に付される把手か。細身で、断面形は円形で、周縁を入念な縦位撫でで仕上げている。
第35図 15 甕 図版 49	口: (12.8) 高: 15.7 底: -	約1/3 床直	①粗片岩 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は短く外傾し頸部意は緩やかな屈曲を呈す。体部上半～中位に膨らみを持たせ底部に至る。外面体部上半より斜位匏削りを施す。
第35図 16 羽釜 図版 49	口: 17.0 高: - 底: -	口縁部 約1/3 カマド・床直上	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部突出し口縁部内傾する。鈔はほぼ水平に貼付され強い横撫でを加える。体部に緩やかな膨らみを持たせる。内面口縁下で屈曲せず、口縁部が肥厚し体部器厚との差を顕著にする。
第35図 17 羽釜 図版 49	口: (20.8) 高: - 底: -	口縁部破片 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部僅かに突出し口縁部は内傾する。鈔はほぼ水平に貼付され横撫でを加える。体部は上半に膨らみを持たせる。内面口縁下で屈曲せず、口縁部が肥厚し体部器厚との差を顕著にする。
第35図 18 磨石 図版 63	長: 12.3 幅: 8.3 厚: 4.9	完形 覆土	①粗粒安山岩 ④700.3g	円礫を素材とし、表裏面に長軸方向の擦痕が看取される。特に表面は滑沢面を持ち頻繁な使用が看取される。

出土。8の皿も北東部覆土出土。9の皿はカマド前庭部より覆土中位で出土した。10の脚部は覆土。11は南壁際の覆土下位で。12は東南隅および中央、北側貯蔵穴周辺等広範囲に散布する。13は中央部で覆土出土。14の把手は貯蔵穴内で床直。15は南壁際で比較的まとまった出土を見せる。他に北貯蔵穴上出土の体部破片とも接合している。16は床面中央部で床直及びカマド内。前述のように補強材としての破片転用であろう。17はカマド前庭部で。18の磨石は覆土出土である。

以上のように本住居跡は、本遺跡で唯一隅部柱穴を設ける例を見せる。また、平面径も縦長方形であり、他に11号住にその可能性が求められるのみで、柱穴位置と共に特有の例といえよう。出土遺物からは、破片状態ながら床直出土である1～4・6等からは9世紀末～10世紀初頭期の所産と思われる。また、2個体の皿や小型甕の存在は該期の器種組成の特徴でもあり、やや煮沸具の量が少量ながら良好な組成といえよう。尚、破片転用の16の羽釜はほぼ同時期と思われるが注意を要する。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第36図 8号住居跡(1)

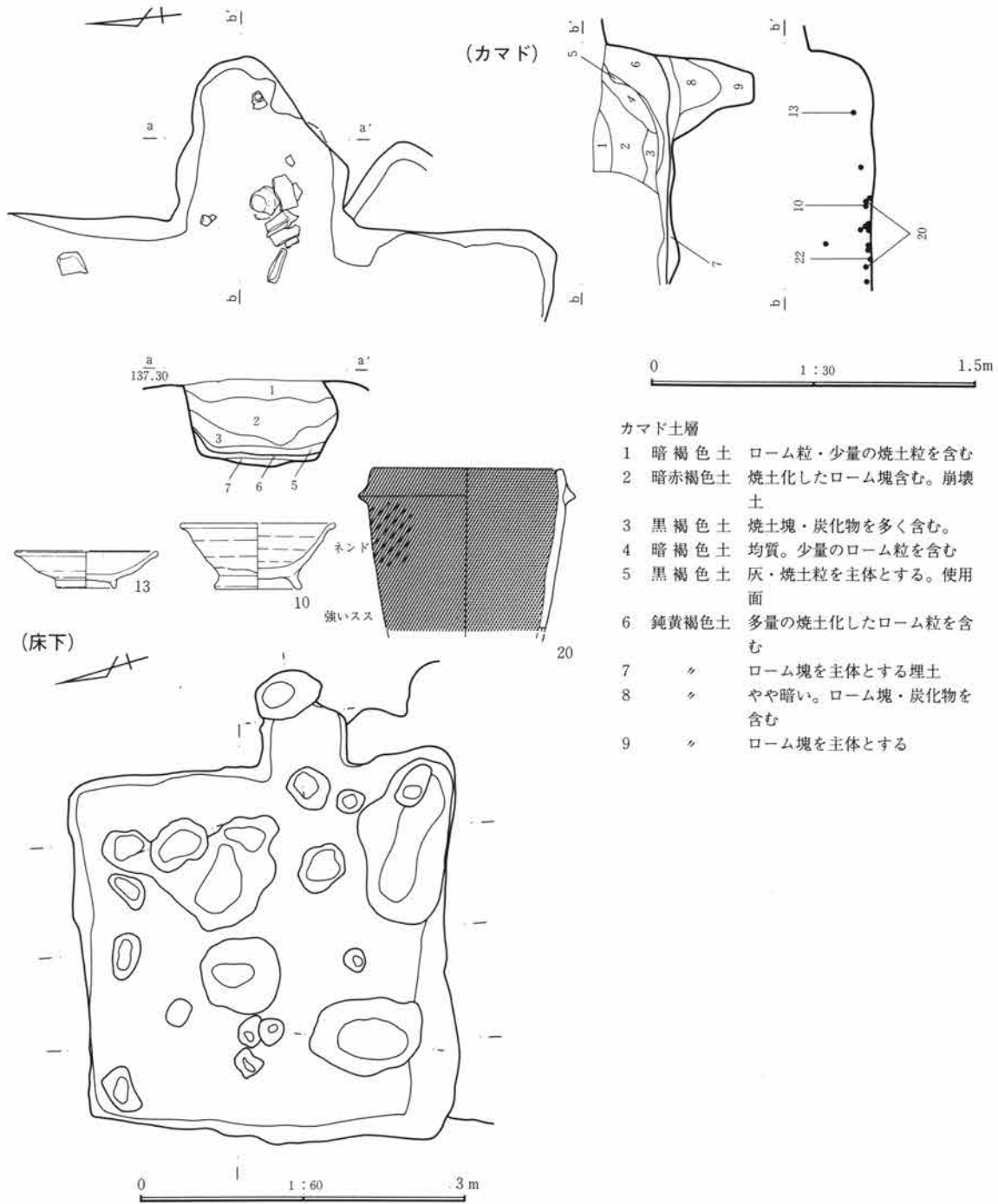
8号住居跡

前にも述べた3号住と重複する。2号住とも近接するが、時期的に大きな差が見られ、本住居との近縁性は3住に求められる。

平面形は約3.4×3.3mの不整正方形を呈す。北辺や西辺は比較的整った形状を見せるが、南側壁が緩やかに彎曲し、南東隅が突出する特徴がある。深さは

46cmを測り遺存は良好である。

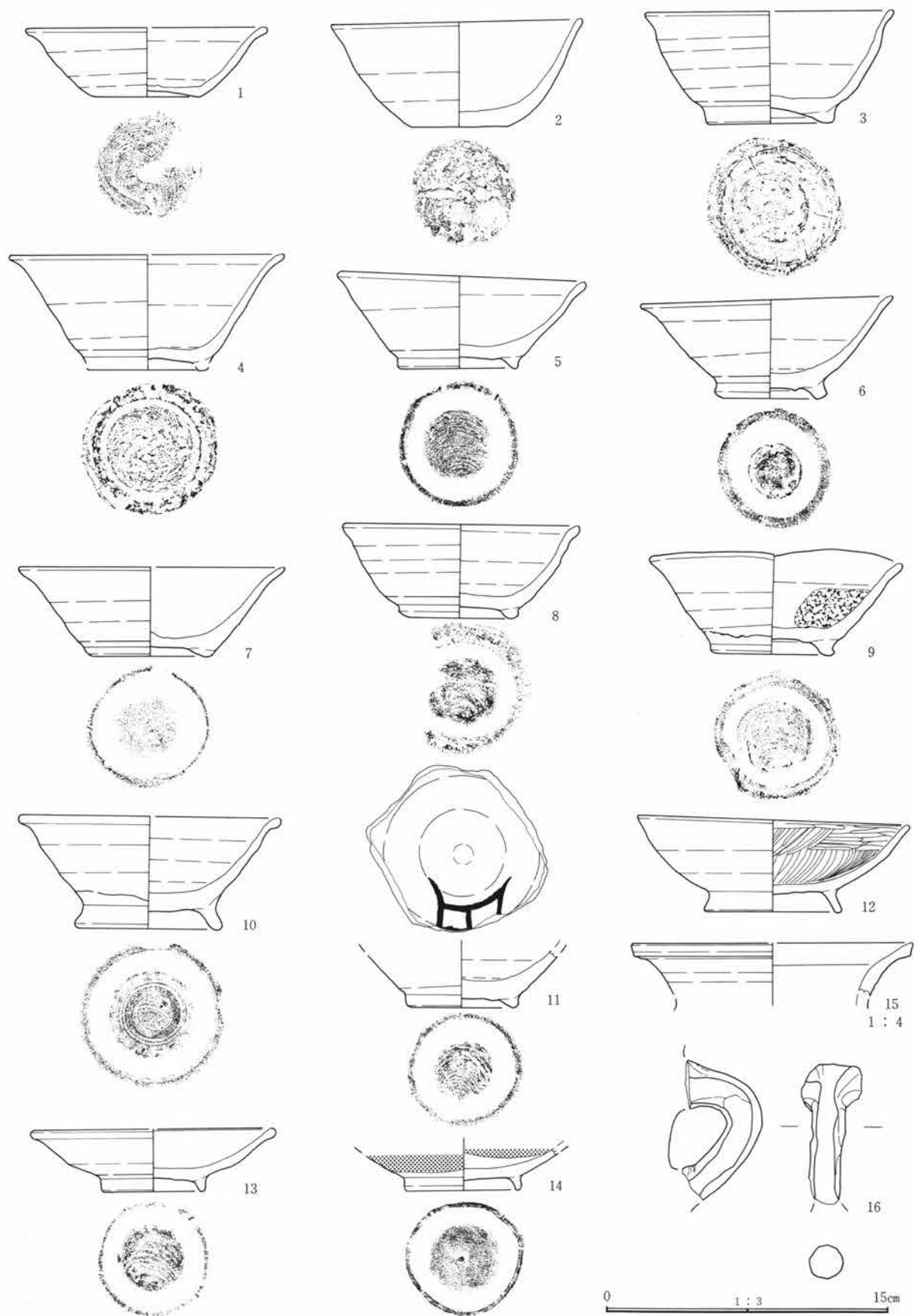
床面はほぼ平坦で、暗褐色土による貼床がなされ、硬化面は中央部よりカマドにかけてが顕著だった。柱穴は規則制を持った配置ではないが、北東部に妥当性を帯びるピットが検出された。土層に柱痕等の特徴は見られないが、平面形・深さから柱穴として位置付けたい。



第37図 8号住居跡(2)

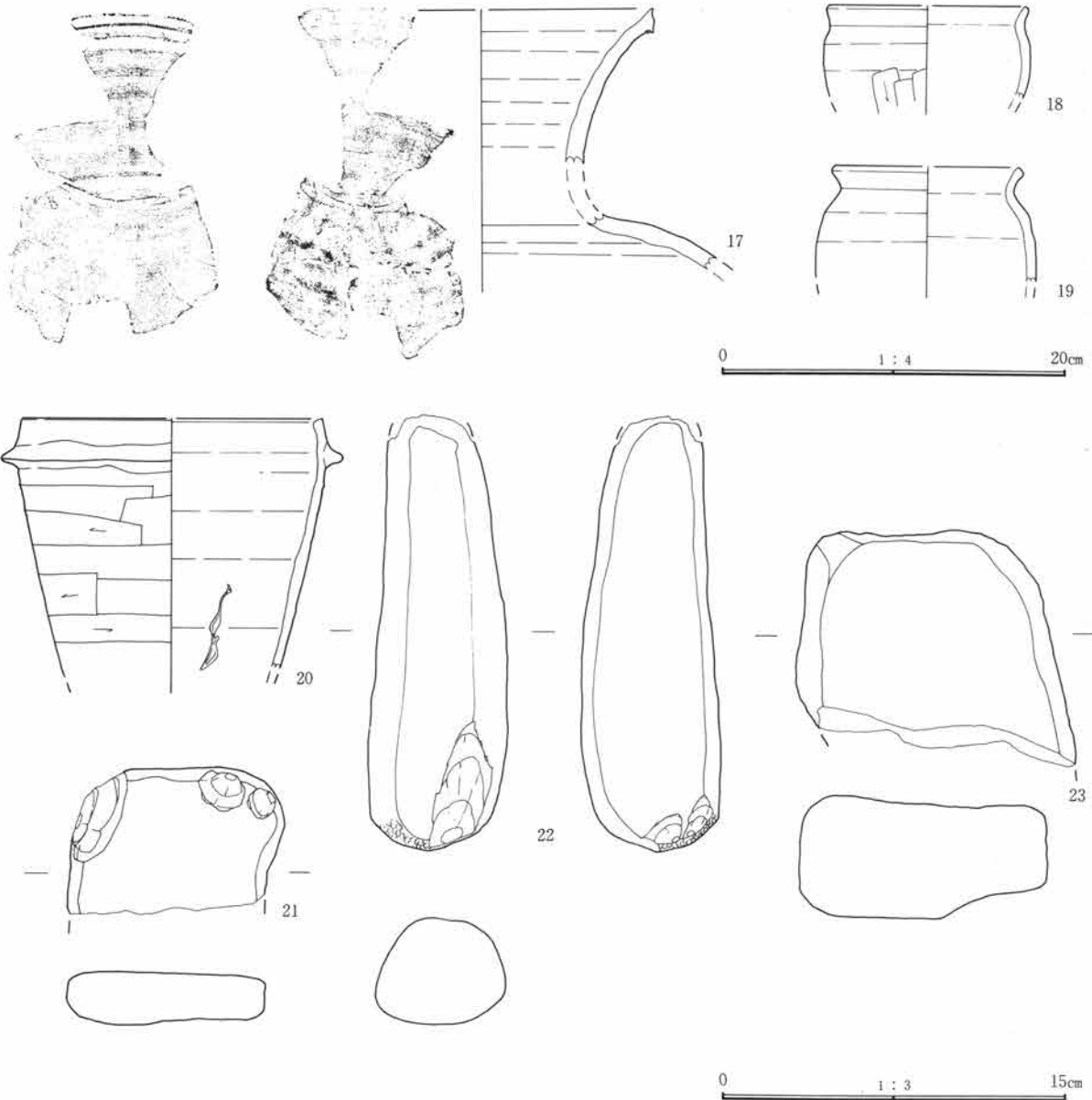
第16表 8号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
26-16・17	不整正方形	340×336×46	N106°E	N105°E	貯蔵穴・床下土坑	坏2 碗10 皿2 甕4 甗1 把手1 石3	3号住居



第38図 8号住居跡出土遺物(1)

第2節 竪穴住居跡



第39図 8号住居跡出土遺物(2)

第17表 8号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第38図 1 坏 図版 49	口：(12.8) 高： 3.7 底： 5.8	約1/2 壁上	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを持つ。底部は立ち上がりわず僅かに上げ底状を呈す。内面の見込み部は顕著な彎曲を呈す。器厚は薄手。
第38図 2 碗 図版 49	口：13.4 高： 5.6 底： 5.0	約3/4 貯蔵穴・ 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	無台の碗。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は僅かに外反し体部は緩やかな丸みを持つ。底部は立ち上がらない。内面の見込み部は緩やかで底部器厚も厚い。内外面とも器面剥落する。
第38図 3 碗 図版 49	口：(13.2) 高： 6.0 底： 7.0	約1/3 南西ピット	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反し体部は丸みを持つ。底部に歪みが生じており、高台の貼付により安定化する。内面の見込み部屈曲は顕著。轆轤整形後体部外面は薄い撫でを加える。

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第38図 碗 図版	4 49	口：(14.6) 高：— 底：—	約1/2 高台部欠損 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し、体部は直線的に底部に至る。内面の見込み部は緩やかな彎曲を呈す。器厚は比較的薄手。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	5 49	口：13.2 高：4.9 底：6.2	ほぼ完形 覆土	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部上半に僅かな丸みを持つ。高台は開き気味に直立し丁寧な貼付を施す。内面の見込み部は緩やかで、器厚は比較的厚手。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	6 49	口：(13.4) 高：5.3 底：6.0	約2/3 西壁下	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを持つ。高台径は狭く、丁寧に開き気味に貼付される。内面の見込み部は緩やかで、器厚は比較的厚手。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	7 50	口：(14.2) 高：4.8 底：(6.2)	約1/2 覆土下位	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部は緩やかに丸みを帯びる。高台は短く貼付される。内面見込み部は緩やかで底部器厚が厚いため安定感を見せる。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	8 50	口：(12.2) 高：(5.0) 底：5.4	約2/3 南西ピット 上	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部は中位から下半にかけて丸みを持たせる。高台は短く貼付される。内面見込み部は緩やか。器厚厚く量感に富む。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	9 50	口：13.4 高：5.3 底：6.7	ほぼ完形 北壁下	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部著しく歪む。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを持たせ、高台は短く開き気味に貼付される。内面見込み部は緩やか。器厚は厚手。轆轤整形後体部に薄い撫でが加わる。
第38図 碗 図版	10 50	口：13.8 高：6.0 底：7.6	約1/2 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部が強く外反するため口唇部は玉縁状を呈す。体部は丸みを持たせ、高台は長く開き丁寧に付される。器厚は厚手で底部に著しい。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。
第38図 碗 図版	11 50	口：— 高：— 底：5.6	底部 南西ピット	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台は短く開き気味に直立する。内面の見込み部は緩やか。器厚は厚く底部に顕著である。内面体部下半～底部に墨書。細く端正な筆跡だが判読不能。
第38図 碗 図版	12 50	口：14.6 高：4.9 底：7.2	ほぼ完形 西壁下	①細石英 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	内面黒色研磨。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反するが、口縁部～体部とも一体化し内彎気味に丸みを持たせる。高台は薄く強く開く。内面は黒色処理され口縁部は横位、体部は縦位の研磨が密に施される。外面には油煙状の付着物、内底面は摩滅する。
第38図 皿 図版	13 50	口：12.8 高：3.3 底：5.2	約2/5 カマド	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	小型の高台付皿。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は肥厚し玉縁状をなす。体部中位に丸みを持たせ高台は直立する。轆轤整形後体部に撫でを加える。
第38図 灰釉 皿 図版	14 50	口：— 高：— 底：6.0	約1/3 覆土	①細緻密 ②還元焰 ③灰色 ④灰釉陶器 大原2号	左回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部は丸みを帯び高台は開き気味に直立する。高台内面は内彎し端部摩滅のため滑沢面を持つ。内底面も僅かながら滑沢面が看取される。施釉は漬け掛け。
第38図 甕 図版	15 50	口：(22.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	軟質。轆轤整形。回転方向不詳。口唇部は僅かに外傾し、口縁部も外反気味に開く。口唇部には1条の凹線が巡る。
第38図 把手 図版	16 50	口：— 高：— 底：—	把手破片 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	甕・瓶器種肩部や体部上半に付される橋状把手。上位は接合痕明瞭。全体的に細身で、断面形は円形を呈す。周縁は縦位の入念な指撫でを基調にして仕上げている。
第39図 甕 図版	17 50	口：20.8 高：— 底：—	口縁・肩部 破片 床直	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。おそらく右回転。口唇部は直立し、口縁部～頸部は緩やかに外反。肩部は強く張る。口唇端部は尖り鋭利な印象を得る。肩部外面は寛撫でが施され、内面は指頭圧痕と横位撫でが看取される。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第39図 18 小型甕 図版 50	口：(11.4) 高：— 底：—	口縁部 約1/5 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は短く外傾し頸部は緩やかに屈曲する。体部上半に僅かな張りを持たせる。頸部内面は強く屈曲し鋭い稜をなす。体部中位に縦位寛削りが施される。内面の器壁剥落著しい。
第39図 19 甕 図版 50	口：10.8 高：— 底：—	口縁部破片 貯蔵穴	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部肥厚。口縁部短く頸部は強く屈曲する。体部は上半～中位に張りを持たせる。轆轤整形後体部は薄い撫でが加わる。器厚は薄手で比較的しっかりした作り。
第39図 20 甕 図版 50	口：(17.6) 高：— 底：—	口縁～体部 破片 カマド	①粗片岩 ②酸化焰 ③褐色 ④須恵器	鈔付甕。輪積後右回転轆轤整形。口唇部は丸く口縁部は内傾する。鈔は短くほぼ水平に貼付され体部は小径で直線状に開く。下半は欠損するがおそらく裾部が付されるのであろう。轆轤整形後体部内外面とも入念な横位寛撫でが施される。内面体部中位に歪み状の縦位亀裂がある。
第39図 21 磨石 図版 63	長：6.5 幅：9.5 厚：2.2	約1/2 住居外	①デイサイト質凝灰岩 ④166.83 g	板状の偏平な円礫を素材とし、表裏面に滑沢面を持つ。側縁より剥離が及ぶが目的性は判然としない。加熱痕跡も認められる。
第39図 22 敲石 図版 63	長：19.2 幅：6.2 厚：4.6	一部欠損 カマド	①緑色片岩 ④949.7 g	乳棒状の石材を素材とし、下端に敲打痕が集中する。表裏面及び側縁にも滑沢面を持つが微少である。
第39図 23 磨石 図版 63	長：10.5 幅：12.3 厚：5.4	約1/2 東壁下	①粗粒安山岩 ④1,052.4 g	台石状を呈す。凹面に滑沢面を持つが使用方向は顕著ではない。加熱痕跡も認められる。

貯蔵穴は2基検出した。東南隅の例と南西部の土坑を充てたい。東南隅の土坑は確定的ではあるが、南西部の土坑は、土層には積極性が無いが、遺物の分布の集中によって、貯蔵穴として考えてみた。

床下調査によって、数基の土坑と小ピットを検出した。土坑は床下土坑として位置付けられるが、良好な形態を呈するものは中央やや西寄りの不整形の土坑である。

カマドは東壁やや南寄りで見出された。やや大型の燃焼部と煙道部を持つ。煙道部は大きく突出し、強い立ち上がりを呈す。燃焼部は明瞭な掘り込みを持たず、焼土が堆積していた。袖は僅かに南側に看取された。その他の構築材も原位置を保ってはならず、燃焼部上層に堆積する焼土塊等は、構築材の崩壊によるものと考えられよう。また、燃焼部中央で出土した羽釜(20)も粘土の付着が見られ、構築材としての破片転用の可能性が高い。

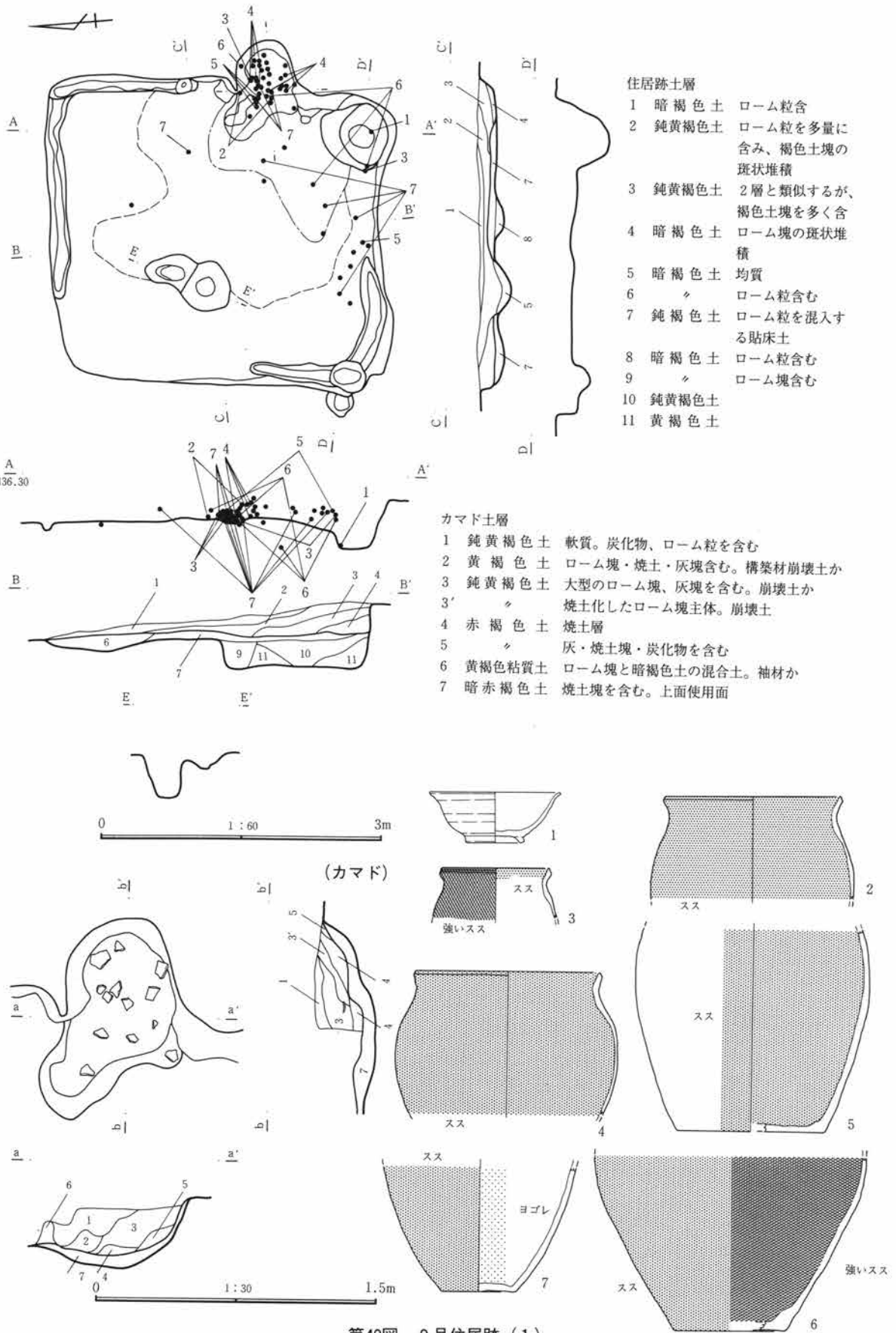
出土遺物は多く23点を図示した。出土は南半に集中しており、これは重複する3号住の遺物が混入し

た可能性を念頭におかねばならない。しかし、重複関係では本住居跡が新しく、かつ接合関係で3住出土遺物は分別したため、ここに掲載する遺物の殆どが本住居跡に帰属するものとする。

床直あるいは床直上に出土したものは、2・4・6・9・12の碗がある。特に6・9と12は壁際出土であり、本住居跡に帰属し得る。その他では、17の須恵器甕破片が床面中央で出土した。東南隅の貯蔵穴出土のものは19の小型甕破片。西南隅の貯蔵穴からは、碗で3・8・11であるが総て上部からの出土である。18の小型甕はさらに上層より出土した。カマドからは前述の羽釜20と碗10と皿13を見る。さらに、棒状礫22もカマドから出土しており、敲石としたが支脚の可能性が高い。その他の出土遺物は覆土出土あるいは1・21のように壁外の出土であり、3住との分別は困難である。

以上のように、3号住出土土器との分別が困難な出土状態ではあるが、壁際やカマド出土遺物からは、10世紀前半代の所産と捉えられる。

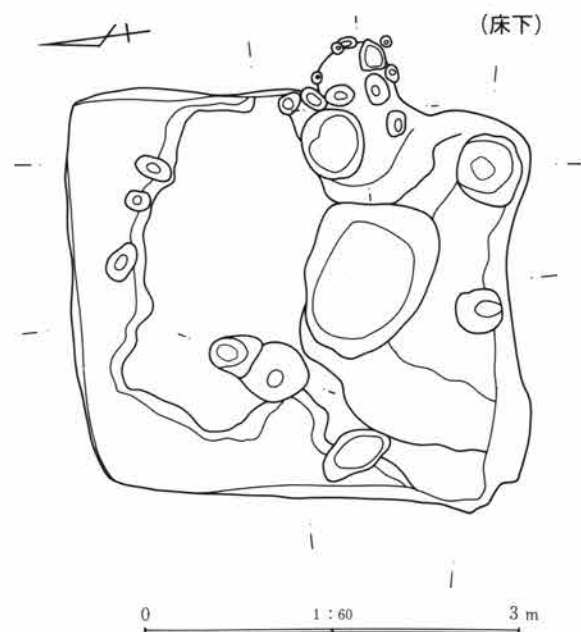
第III章 検出された遺構と遺物



第40図 9号住居跡(1)

第18表 9号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
31-10・11	不整正方形	344×320×34	N4°E	N96°E	貯蔵穴・床下土坑	埴1 甕3 羽釜3	



第41図 9号住居跡(2)

9号住居跡

第I台地調査区中央やや北東寄りに占地する。周辺はやや北側への傾斜が強く、そのためか遺構も密集せず、本住居跡は単独の検出となった。近接する住居跡も無く、南約10mに6号住が距離を離して位置するのみである。

平面形は約3.4×3.2mの不整正方形を呈し、遺存の良い南辺が緩やかに彎曲する傾向を見せる。深さは、約30cm程度だが北側への急傾斜地形のため、北壁と西壁の一部は流失しており、そのため、平面形は壁周溝と西壁南半の壁を延長して推定した。遺存の良い、南壁は直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを呈していた。

床面は、緩やかな北側への傾斜を見せるが、ほぼ平坦面は意識されて築かれている。ローム粒を混入する鈍褐色土を貼床しており、中央部からカマド周辺にかけて硬化面が確認された。

柱穴は確定的な配置で確認され得なかった。床面中央西寄りに重複した状態で2ヶのピット (E-E') が検出されたが、北側のピットが柱穴として深さ・規模とも妥当ではある。また、南西隅及び壁上にピットが確認されており、壁柱穴としての可能性も想起された。

貯蔵穴は、南東隅でやや大型のものが検出された。掘り込みも深く、埋土の詳細は示せないが、炭化物を含む暗褐色土が主体である。

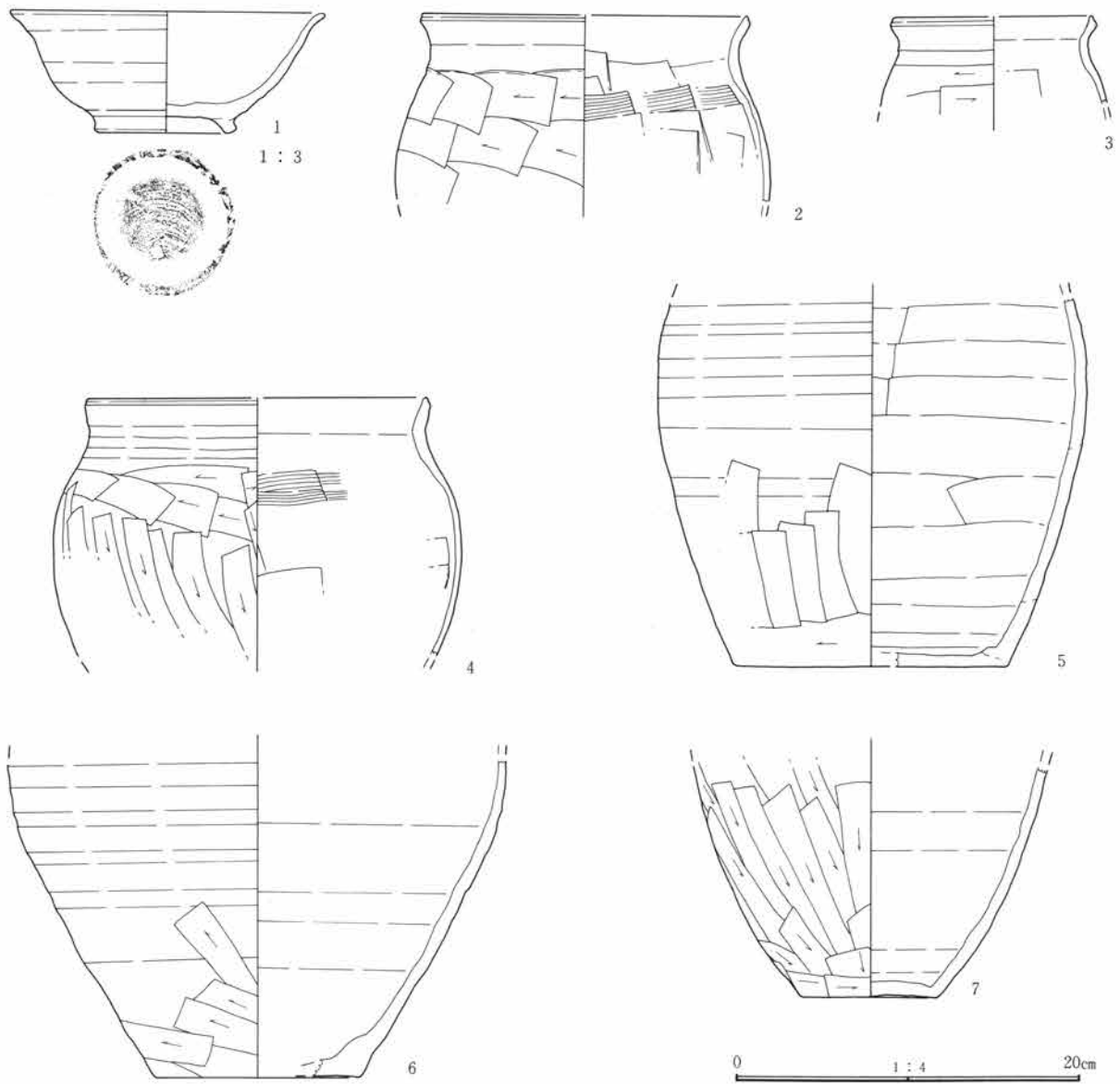
その他の床面上の施設としては、前述の壁周溝が検出されている。東壁北半～北壁・南西隅で確認されたが、北西隅にもあるいは存在していた可能性もある。

床下遺構としては、中央部やや南寄りに不整楕円形の床下土坑が検出された。ローム塊主体の鈍黄褐色土を埋土とし、しっかりした掘り込みを呈していた。その他には小ピットや段差が確認されたが、住居跡構築時の所産と考えた。

カマドは、東壁やや南寄りに設けられている。確認時より、上面より焼土塊や床面より灰・焼土粒が多量に散布して確認されたため検出は容易であった。煙道部は、馬蹄状に突出し緩やかに立ち上がり、焼土・炭化物が多く堆積していた。燃烧部は、不定形の浅い掘り込みを持ち、焼土塊が主体に堆積する。また、土器片も多く出土した。袖は、北袖が短く突出し、南袖は壁の彎曲のみで顕著ではなかった。構築材の自然石や粘土は検出されなかった。

おそらく、燃烧部に堆積する焼土塊は、構築材として使用されていたものが、破壊行為によって崩壊したものと考えられる。自然石等も出土しなかったことから、構築材の持ち去り行為も考慮にいれておきたい。カマド掘り方調査においては、袖下あるい

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第42図 9号住居跡出土遺物

第19表 9号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第42図 碗 図版 51	口：13.6 高：5.3 底：5.7	約4/5 貯蔵穴	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は開き気味に直立する。内面の見込み部は緩やか。器厚は薄く均整の取れた器形。
第42図 甕 図版 51	口：(19.0) 高：— 底：—	約1/5 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部は僅かに内傾し1条の凹線を巡らす。口縁部は外傾、頸部は緩やかな彎曲を見せ、体部上半に膨らみを持たせる。外面口縁部横撫で後体部に横位匏削りを施す。内面は横位匏撫で。口縁～頸部肥厚。
第42図 甕 図版 51	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 カマド	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	小型の甕。口唇部は僅かに内傾し1条の凹線を巡らす。口縁部外傾、頸部は緩やかな彎曲を呈し、体部上半に膨らみを持つ。口唇部及び頸部は横位撫で。口縁部は無調整。体部は横位匏削り。内面は匏撫で。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第42図 甕 図版 51	口：(19.8) 高：— 底：—	口縁部破片 体部約1/4 カマド	①粗 石英 片岩 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部は僅かに内傾し1条の凹線を巡らす。口縁部は外傾、頸部は湾曲し、体部上半に膨らみを持つ。口縁～頸部に2条の横撫でが平行し、体部上半は横位篋削り、中位～下半は斜位の篋削りを施す。内面は篋撫で。
第42図 羽釜・甕 図版 51	口：— 高：— 底：(8.0)	体部～底部 約1/4 カマド	①粗 石英 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。底部径広く、頸部～体部上半が緩やかに張る。上半の轆轤目強く凹線状となる。下半は横位篋削り後縦位篋撫でが加わる。底面は篋削り後撫で。内面は横位篋撫で。薄手の器厚を呈す。
第42図 羽釜・甕 図版 51	口：— 高：— 底：(12.0)	体部～底部 約1/6 覆土	①粗 石英 片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。底部径広く、体部上半に強い張りを持たせ膨らむ。上半の轆轤目強く凹線状となり、下半は横位・斜位の篋削りを施す。内面見込み部の瘤状の盛り上がりは外面の凹みに対応する。補修痕か。
第42図 羽釜 図版 51	口：— 高：— 底：(8.0)	体部～底部 約1/4 カマド	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。体部下半に緩やかな膨らみを持たせる。外面は縦位・横位篋削りが入念に施される。底面撫で。

はカマド壁際に小ピットが確認されたことから、補強あるいは芯材としての構築材の存在は、ある程度確定して良いだろう。さらに、カマド検出時に確認された、床面上の広範囲に散布する焼土・灰は、カマド破壊に伴う現象とも捉えられよう。

出土遺物の量は少なく、7点を図示したにとどまる。分布は、カマド周辺及び貯蔵穴・南壁際に偏り、北側や西側への集中は見られなかった。また、床直あるいは覆土中の出土は細片が多く、図示に耐える破片の出土が、カマド周辺及び貯蔵穴に集中する傾向は興味深い。個体図示し得た7個体のうち、2～7の土師器甕・須恵器甕・羽釜類はカマド出土であり、構築材としての転用痕跡が認められないため、煮沸具としての残存と考えたが、自然石等が抜き取られたカマドの遺存状態から、確定的な用途の判断を避けたい。尚、1の高台付塼は貯蔵穴下位の出土であり、残存状態も良く、本住居跡に帰属する可能性は非常に高い。

本住居跡の出土遺物は少なく、カマドから出土した甕・羽釜類も煮沸具としてかあるいは破片転用による構築材といった用途も特定できない。さらに、住居跡に帰属し得る遺物としては貯蔵穴出土の塼が充てられるが、1点のみであり、本住居跡の廃棄時に主要な生活用具を除去する入念な行為が想起される。カマドにおいても、構築材の自然石等を抜き取

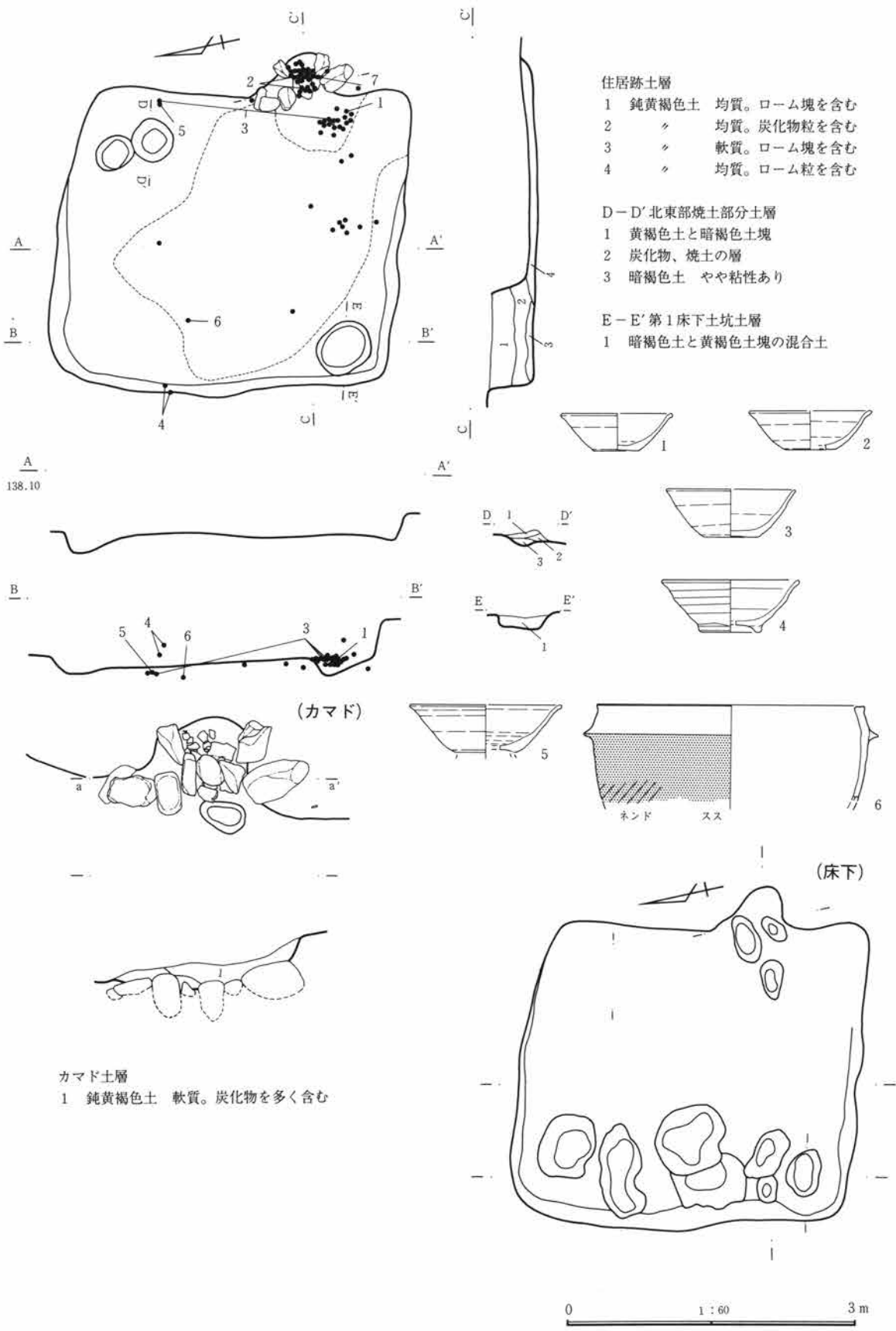
り、おそらく他の住居において再利用したものと考えられるが、その行為の要因や背景までは述べることはできない。

このような、住居跡廃絶あるいは廃棄時における生活用具の持ち去り現象とカマド破壊現象は、本遺跡の他の住居跡や周辺の遺跡でも観察されており、当該期の集落内に普遍的に存在しているようである。しかしながら、この現象を見せる住居跡の集落内での割合や行為の背景等の詳細は明らかにはされておらず、今後の課題として残されている。

また、この現象を持つ住居跡は出土遺物の量も少ない特徴を持ち、帰属する時期は特定できないようだ。本住居跡の場合敢えて、貯蔵穴に残された高台付塼により9世紀後半～末葉を充てたいが、問題も残ろう。

以上のように、本住居跡は独立した占地形態をとり、廃絶・廃棄時のカマド破壊現象が観察された。同時に出土遺物の在り方から、用具の持ち去り現象一居住の移動が捉えられよう。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第43図 10号住居跡

10号住居跡

前述の4号住と11号住と重複して検出された。東側上半を11号住に切られ、4号住の北西部を切る新旧関係を見せる。

平面形は、南北軸約3.7×東西軸約3.0mのやや横長の不整形を呈し、深さは残存の良好な南西壁付近で約50cmを測り壁も直立気味でしっかりした掘り込みを呈すが、東半は11号住に切られるため、壁の遺存は悪く、僅かな立ち上がりで確認された。床面は北側へ緩やかに傾斜するが、周辺の地形に影響されたものであろう。貼床はなされずローム地床である。硬化面はカマド周辺から西側壁にかけてが顕著だった。

柱穴は、妥当性のあるピットを検出できなかった。貯蔵穴も南東隅には設けられず、相当する土坑は南西隅に見られる(E-E')のだが、調査所見では床下土坑と位置付けている。また、北東隅に2ケの小ピットが確認され(D-D')、焼土・炭化物の堆積が認められた。このように位置的には、南西隅と北東隅に貯蔵穴対応の土坑・ピットが検出されているが、積極的な根拠に乏しく、貯蔵穴としては特定できない。両土坑とも性格の異なる他の施設として考えておきたい。

床下遺構としては、前に述べた南西隅の土坑と西壁際に群在する土坑が検出された。東半も床下調査で多数の土坑が確認されたが、11号住との重複のた

め、本住居に帰属し得る床下土坑としては捉えられない。ここでは、西壁際の土坑群のみを10号住床下遺構として位置付けたい。

カマドは東壁南寄りに設けられる。上半を11号住に大きく切られるため、下半のみの遺存の悪い状態で検出された。顕著な掘り込みは見られないが、おそらく馬蹄状の煙道部と燃焼部であろう。大型の自然石が出土したが、構築材として使用されていたものと捉える。袖部・カマド壁際より出土した自然石は原位置と思われ、中心部出土のものは天井部等の構築材であろう。自然石はカマド内のみの出土であり、周辺からは出土しなかったため、主目的な破壊行為を伴わず、11号住構築時の破壊のみが想起されよう。

出土遺物は少なく7点を図示し得たのみである。カマド内及び南東部の2ヶ所に集中が見られ、他は散見する程度である。また完形の出土はなく、破片状態で出土している。カマド内からは2の坏や7の窰書きのある平瓦が出土した。平瓦は構築材としての再利用であろうか。南東の集中部からは、坏(1)と高台付窰(3)が見られた。その他では、西壁上端より4の高台付窰、中央部西寄りからは羽釜(6)、5は北東部から出土している。羽釜には粘土が付着しており、あるいは破片転用材としての再利用が考えられる。出土遺物は概ね10世紀前半の所産と見られる。

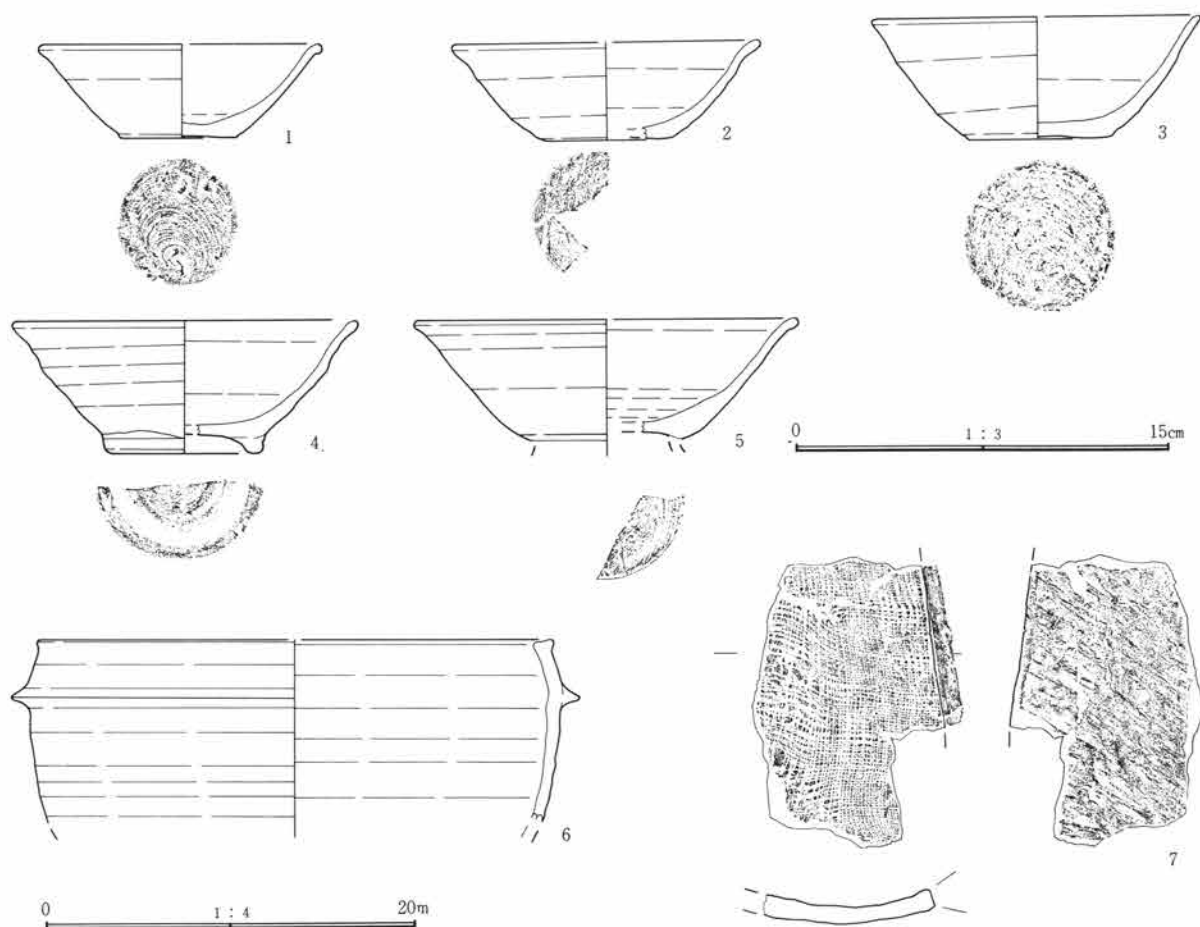
第20表 10号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	窰方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
35・36-12・13	不整形	376×308×46	N15°E	N107°E		坏3 窰2 羽釜1 甕1	4号住居 11号住居

第21表 10号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第44図 1 坏 図版 52	口: 11.2 高: 3.7 底: 4.8	約1/3 カマド前庭	①細石英 ②酸化焰気味・③鈍黄橙色 ④須恵器	右回轆轤整形。口縁部は外反し体部は若干丸みを持たせる。底部は極僅かに立つ。内面の見込み部は緩やかで比較的薄手の器厚を呈す。体部外面は轆轤整形後薄い撫でを施す。

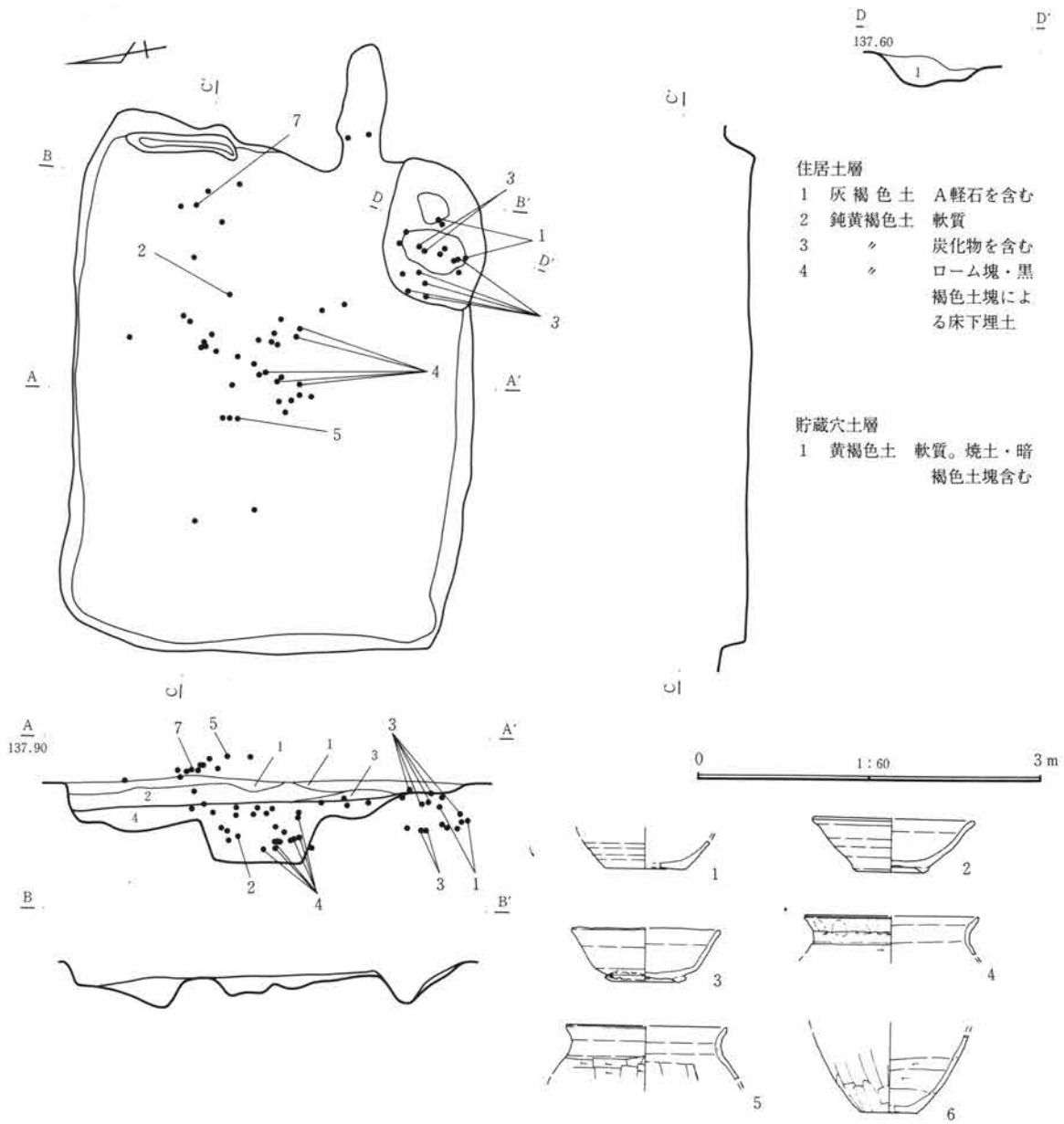
第三章 検出された遺構と遺物



第44図 10号住居跡出土遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第44図 2 坏 図版 52	口：(12.4) 高：4.0 底：(5.0)	口縁～底部 破片 カマド	①細 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙 色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は外反し体部は中位に丸みを持たせる。底部は立ち上がらない。内面の見込み部は緩やかで器厚は薄手。体部外面は轆轤整形後薄い撫でを施す。
第44図 3 坏 図版 52	口：(13.2) 高：4.9 底：(5.8)	口縁～底部 約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙 色 ④須恵器	右回転轆轤整形。やや軟質。口縁部は僅かに外反し体部には緩やかな丸みを持たせる。底部は僅かに立つ。内面の見込み部は緩やかで、器厚は比較的厚い。体部外面は轆轤整形後薄い撫でを施す。
第44図 4 碗 図版 52	口：(13.8) 高：5.3 底：(6.0)	約1/4 西壁上	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③褐黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は強く外反し体部上半に緩やかな丸みを持たせる。高台は開き気味に直立し、内面見込み部は緩やかである。器厚は薄手。
第44図 5 碗 図版 52	口：(15.4) 高：(4.9) 底：(6.0)	約1/3 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台部欠損。口縁部は外反し体部は下半に僅かな丸みを持たせる。内面見込み部は緩やかで器厚も厚手。口縁～体部上半及び底部の器厚は薄い。焼き歪みも看取される。
第44図 6 羽釜 図版 52	口：(27.6) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口唇部は突出し口縁部は内傾する。鈿は若干下位を向き丁寧に貼付される。体部は上半に僅かな影らみを持たせる。内面口縁部下に緩やかな屈曲が見られるが顕著ではない。器厚は薄手。
第44図 7 平瓦 図版 52	厚：0.9	約1/4 カマド	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵質	薄手の平瓦。凸面は平行叩、凹面は布目。側部の面取りは1回。1枚作り。凸面には焼成前の窠書きが刻まれるが、抽象的な文様であり判読等は不能。

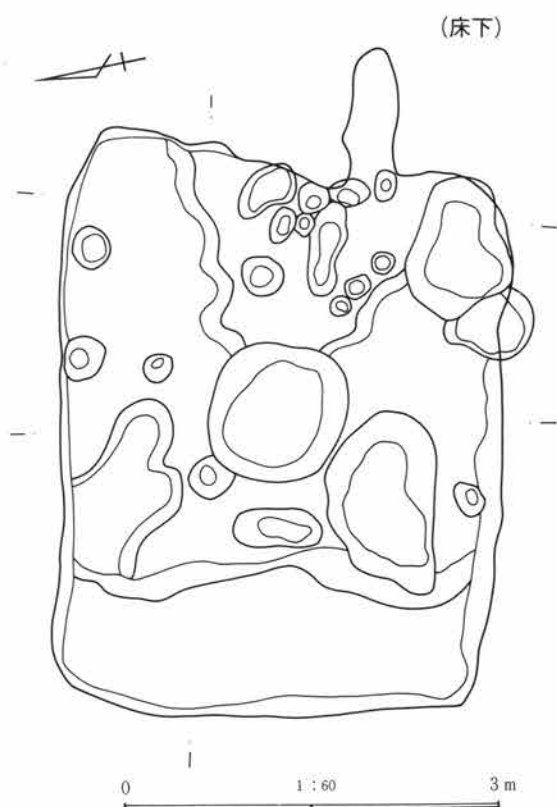
第2節 竪穴住居跡



第45図 11号住居跡(1)

第22表 11号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
35・36-12・13	縦長方形	432×356×40	N100°E	N103°E	貯蔵穴・床下土坑	坏1 壺2 甕2 羽釜1 石1	4号住居 10号住居



第46図 11号住居跡 (2)

11号住居跡

10号住の東半で重複して検出された。南側では4号住とも重なり、平面形の把握や遺物の帰属の判断に苦慮する重複状態だった。しかしながら、土層の観察では10号住を切っており、おそらく3軒の住居跡では、本住居跡が最も新しい位置を占めるのであろう。

平面形は東軸を長軸とした約4.3×3.5mの縦長方形を呈し、深さは約40cmを測る。重複の割には遺存は良好である。また、西壁は10号住西壁とほぼ一致し、南壁も10号住南壁と重なる。さらに、本住居跡と10号住は主軸方位も近似することから、この2軒の住居跡は、住居構築時の密接な関係を示すものと想起できよう。

床面はほぼ平坦面を築き、鈍黄褐色土による貼床をなしていた。硬化面は特に顕著ではなく、全体に軟弱な印象を得る床面である。

柱穴は認められなかったが、床下調査によって得

られた数基のピットが該当する可能性もある。貯蔵穴は、東南隅に大型のものが検出された。やや浅く、掘り込みもしっかりしていないが、位置的にも遺物の出土を見ることから、本土坑を貯蔵穴としたい。その他の床面上の施設としては、東辺北隅の壁周溝が挙げられる。

床下遺構は特徴的である。柱穴の可能性を持つ数基の小ピット以外には、中央部に不整形の床下土坑が検出された。さらに南北にもほぼ同規模の不整形の床下土坑が2基配される。また、カマド周辺は一段高くなっており、小ピットが群在している。

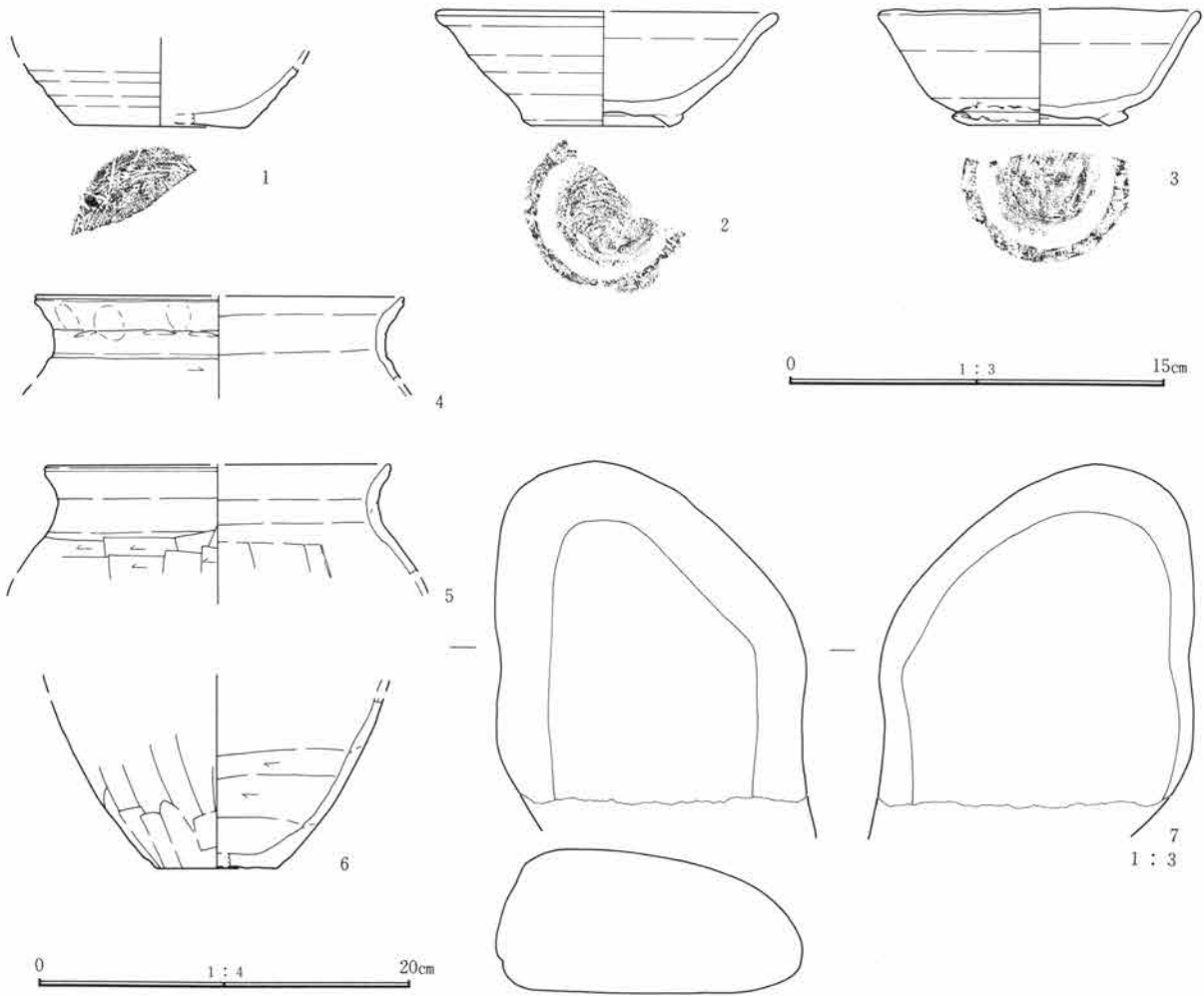
さらに、特筆すべきは西半に見られる段差である。本住居跡拡張に伴う所産と捉えた場合、この西側の段差を11号住(古)西壁と想定できよう。その規模は約3.5×3.5mの不整形正方形となり、該期住居跡の一般例と同規模となる。さらに拡張規模は、10号住西壁で止まる現象は偶然とは思われず、11号住拡張時には10号住は完全には埋没しておらず、西壁の存在が明瞭に確認できたことになる。しかしながら、この拡張過程は、10号住→11号住という新旧関係が保証された場合のみに適用される現象であり、後述するが確定的な様相ではない。

カマドは、東壁の南寄りに設けられていたが、調査当初4号住掘削が先行し、本住居跡のカマドの大半を逸失してしまった。後に住居跡重複関係から、僅かに残る焼土の分布範囲を捉えて、本住居跡カマドを確定した。煙道部を長く突出する形態と思われる、袖材の自然石抜き取り跡が床下調査で得られた。

遺物は比較的多く出土したが細片が多く図示し得た個体は7点のみである。カマドからの出土は少量であり、貯蔵穴や中央部床下土坑の出土が目立つ。貯蔵穴からは坏(1)と高台付碗(3)を見る。床下土坑からは碗(2)と土師器甕(4)が出土した。5・6の土師器甕と7の磨石は覆土出土である。

このように、出土遺物量は少なく確定的な様相は把握できないが、敢えて時期を求めた場合は、9世

第2節 竪穴住居跡



第47図 11号住居跡出土遺物

紀後半～10世紀初頭期にあたる。前述した4号住出土遺物として掲載した21～23図1・2・4・8・11・12・16・21・34を加えて考えると、10世紀前半段階にやや下る傾向はある。

しかしながら、この段階は重複する他の2軒の住居跡出土遺物の時期と近接しており、矛盾が生じる結果となっている。つまり、4号住と10号住も概ね10世紀前半代に帰属するが、本住居跡出土遺物は、羽釜類の出土も見られないことから、重複する住居跡出土遺物との差は明瞭に存在し、若干遡る傾向が見られる。

すなわち、4号住と10号住との新旧はさておき、10号住と11号住の新旧関係は土層とは逆転する可能性がある。床下調査で得られた、11号住西の段差

は、本来の11号住西壁であり、10号住西壁と一致する11号住西壁は、10号住西壁として分離し、出土遺物の様相から11号住→10号住という新旧関係に設定し直すべきかもしれない。また、4号住と10号住の関係は出土遺物の様相から、やや4号住が古く見られ、土層の観察と一致する。

重複住居の新旧関係を考える際には、土層を主に優先するが、その他に施設の在り方・出土遺物の様相を念頭におき確定に至る。しかし、上記のように、本住居跡及び4号住・10号住の新旧は4号住→10号住→11号住という流れを示した土層所見と、床下調査によって得られた西壁の存在と遺物の在り方から、11号住→4号住→10号住という逆の流れが想定される。また、11号住が拡張住居であり、11号住

第三章 検出された遺構と遺物

第23表 11号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第47図 図版	1 52	口：－ 高：－ 底：(7.0)	口縁部欠損 約1/4 貯蔵穴	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。体部に緩やかな丸みを持たせる。底部の立ち上がりは顕著ではなく、内面見込み部は緩やかで器厚は厚い。体部・底部器厚は比較的薄手。
第47図 図版	2 52	口：(13.6) 高：4.6 底：5.6	約1/2 床下	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部中位に僅かな丸みを持たせる。高台は開き気味に付され、内面の見込み部は緩やかである。口唇部は肥厚するが体部～底部の器厚は比較的薄手。
47図 図版	3 52	口：(12.8) 高：(4.7) 底：(5.6)	約1/2 貯蔵穴	①粗 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部～底部は大きく歪む。口縁部は強く外反し、体部中位～下半に丸みを持たせる。高台は短く開き気味に付され、内面の見込み部は緩やかである。口唇部は肥厚。
第47図 図版	4 52	口：(20.0) 高：－ 底：－	口縁部 約1/4 床下	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口唇部は直立し1条の凹線が巡る。口縁部は外傾し下位は直立気味に立つ。口縁部は横位撫でが施されるが窺の当て目が残る。体部との境には強い撫でが凹線状に巡る。
第47図 図版	5 52	口：(18.5) 高：－ 底：－	口縁～頸部 約1/5 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部は直立し1条の凹線が巡る。口縁部は外傾し下位から頸部にかけて直立気味に彎曲する。体部上半に張りを持たせる。口縁部横撫で後体部横位窺削りが施される、内面体部は横位窺撫で。
第47図 図版	6 52	口：－ 高：－ 底：(6.6)	底部約1/2 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。緩やかな膨らみを持つ体部器形を呈す。体部外面は縦位窺削り後撫でを加える。内面は横位窺撫でが施される。底面は撫で。
第47図 図版	7 63	長：13.9 幅：12.7 厚：5.8	約3/4 覆土	①粗粒安山岩 ④1.700.0g	表裏面とも滑沢面を持つ。特に図右面は摩耗が著しく頻繁な使用が看取されよう。

(古) → 4号住 → 10号住 → 11号住 (新) という設定も一応考えられるが、实际的ではなく確証に乏しい。

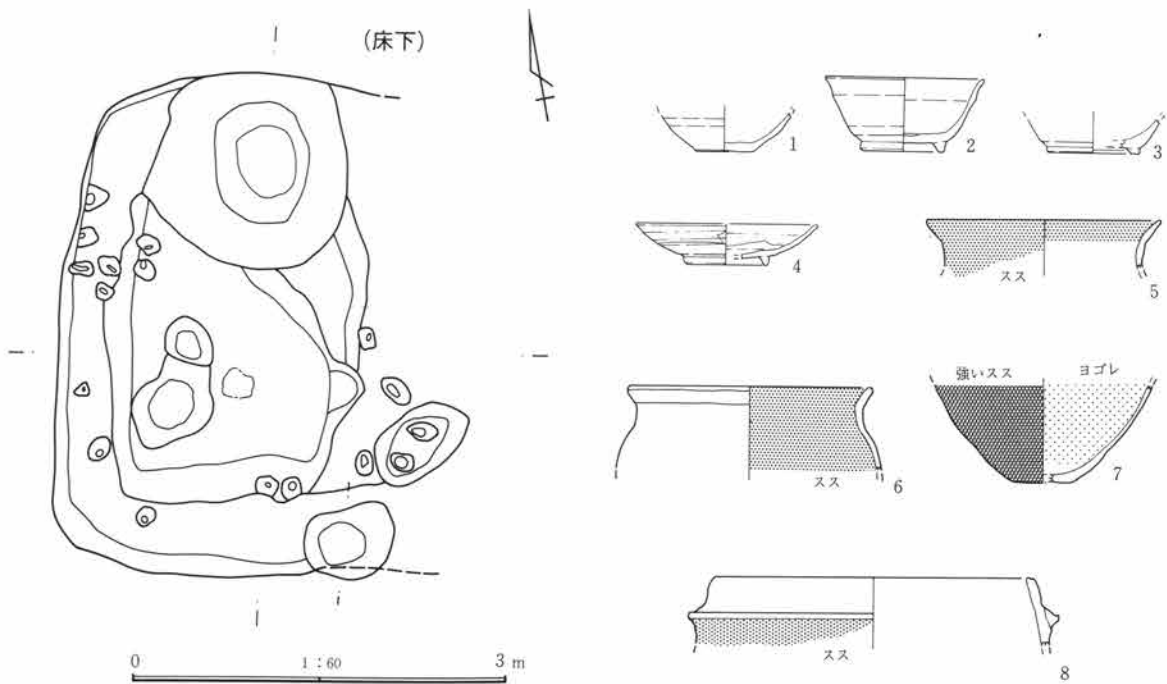
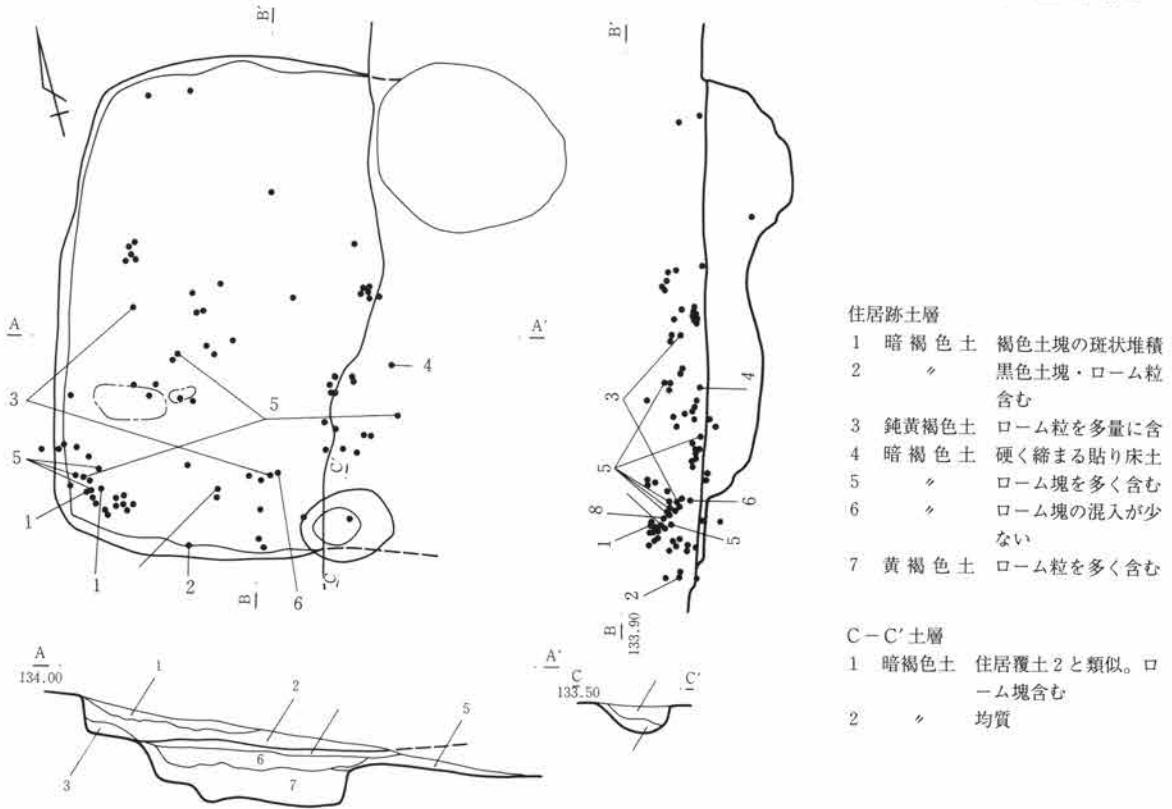
以上、11号住に重複する4号住・10号住の3軒の時代幅は9世紀後半から10世紀前半に求められ、おそらく短期間に重複・居住移動がなされたものと考えられる。各住居の出土遺物の在り方も僅差で、混入も著しい。このような状況下では、詳細な時期判別は困難であり、とりあえず、

4号住 → 10号住 → 11号住 (土層所見から) 11号住 → 4号住 → 10号住 (床下遺構と遺物から) という、2例の重複関係を提示し、選択肢の幅を広げておきたい。

13号住居跡

第I台地調査区の最も北東寄りで見出された。周辺は東側の谷頭部への傾斜変換地点であり、傾斜は東側へと急激な地形を呈す地点でもある。そのため、周辺には近～現代の攪乱坑が数基確認されたのみで、該期住居跡も近接せず単独の見出となった。北側への傾斜も強く、北西方向にも住居跡が存在しないことから、本遺跡が乗る丘陵地形上では北東端の住居跡となる。

上記のように急傾斜地形に占地するため、遺構の残存状態は非常に悪い。平面形も住居跡東半が流失するため判然としない。おそらく、辺長4m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。壁の遺存も悪く、最も良好な西～南西壁で、深さ約30cm程度の壁を確認したに過ぎない。北壁及び南壁の立ち上がりは僅かで東半を流失する。

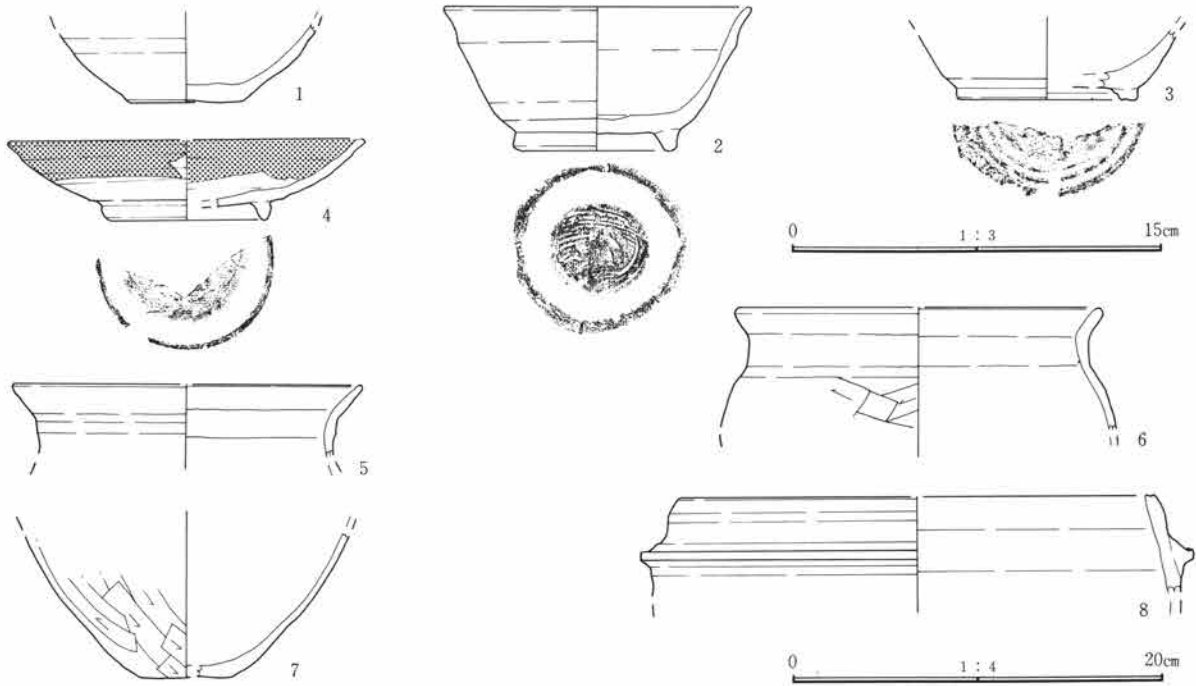


第48図 13号住居跡

第24表 13号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
23・24-9・10	隅丸方形?	404× - × 36	-	-	床下土坑	坏1 碗2 皿1 甕3 羽釜1	

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第49図 13号住居跡出土遺物

第25表 13号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第49図 1 坏 図版 52	口：— 高：— 底：4.6	底部 南西隅覆土	①粗片岩 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。体部は緩やかな丸みを帯び底部は僅かに立ち上がる。内面の見込み部は緩やかな彎曲を見せる。器厚は薄い。内外面とも器面は摩滅する。
第49図 2 碗 図版 52	口：12.4 高：5.8 底：6.0	約2/3 南壁上	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。歪みある器形。口縁部は外反し体部下半に丸みを持たせる。高台は開く。内面の見込み部は緩やかに彎曲する。器厚は比較的薄手。
第49図 3 碗 図版 52	口：— 高：— 底：(6.7)	底部約1/3 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部下半に丸みを持たせる。高台は開き気味に直立し、内面見込み部は緩やかである。器厚は厚手。内外面とも器面摩滅。
第49図 4 灰釉皿 図版 52	口：(14.4) 高：3.2 底：(6.4)	約1/4 床直	①細緻密 ②還元焰 ③淡黄色 ④灰釉陶器 虎溪山	左回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台の貼付痕強い。口縁部は外反し体部は丸みを持たせる。高台は開き気味に直立し丁寧に貼付される。施釉は漬け掛け。内底面の滑沢面が顕著。
第49図 5 甕 図版 52	口：(18.6) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部は丸みを帯びる。口縁部は外傾し下位は直立する。口縁部は横撫で下位は強い撫で。体部は横位斲削りを施す。内面撫で。
第49図 6 甕 図版 52	口：(19.6) 高：— 底：—	口縁部破片 床直上	①粗片岩 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④土師器	口唇部は丸みを帯びる。口縁部は外傾し下位は直立する。変換点は明瞭。頸部は内傾し、体部は上半に張りを持たせる。口縁部横撫で特に下位一頸部は強い撫で。体部は横位斲削り、内面は斲撫でを施す。
第49図 7 甕 図版 52	口：— 高：— 底：(5.0)	体部～底部 約1/5 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③暗褐色 ④土師器	体部は緩やかに小径の底部に至る。外面は縦位斲削りが入念に施され、底面も斲削り。内面は斲撫でを施すが剥落著しく判然としない。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第49図 8 羽釜 図版 52	口：(25.8) 高：－ 底：－	口縁部破片 覆土	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	小破片のため口径・傾き等不確定。轆轤整形。おそらく右回転。鈔貼付。口縁部は丸みを帯びて内傾し、鈔はほぼ水平に付される。鈔上端はごく僅かに上位に突出する。丁寧な貼付。内面は篋撫でが看取される。

床面はほぼ平坦面を築くが、緩やかな東側への傾斜が看取される。暗褐色土による貼床がなされているが、顕著な硬化面の広がりは見られなかった。

柱穴は確定的なもの無く、南側壁と傾斜変換点にピットを1基検出したが柱穴としての積極性は持たない。貯蔵穴・壁周溝は検出し得なかった。

床下調査においては、北壁に接して大型不整形の床下土坑を確認した。また、重複するように不整形の土坑も中央部から西壁際にかけて確認したが、不整形土坑とともに性格は特定できない。小ピットも数基検出したが、本住居跡に伴う施設とは断定し難い。

カマドは検出されなかった。おそらく流失した東壁に設けられていたものと考えられる。

遺物は8点を図示したが、南半で散漫な出土状態を呈す。覆土上層のものが多く、残存状態も破片であり、おそらく東傾斜に沿う流入のものが主体を占めると考えられ、住居居住に伴う遺物としては積極性を持たない。ただ、最も残存の良好な高台付壇(2)は、南壁上端出土であり、あるいは本住居跡の時期を想定する資料として位置付けられる要素もある。その他の遺物では1の須恵器杯・3の埴底部・5・6の土師器甕が南西隅を中心として広範囲に覆土上層から出土しており、流入あるいは廃棄の主要箇所を南西隅に求めることも可能ではある。

出土遺物の様相は10世紀前半に主体とする時期が求められるが、住居跡本来の帰属遺物としては特定できない。

14号住居跡

第Ⅱ台地調査区北西部で検出された。周辺は北西に急傾斜する地形で、必ずしも居住に適してはいないが、第Ⅱ台地調査区は急傾斜地形の中においても、緩やかな傾斜を呈する箇所であり、13軒の住居跡が密集して検出されている。

本住居跡は、この住居跡群の北端にあたり、西約5mに22号住居跡、東約5mに15号住居跡が近接するが、単独の検出であり現代の攪乱坑以外は重複遺構は無い。おそらく、この住居跡群は北側へ伸びるものと考えられよう。

平面形は、約3.4×3.2mの隅丸不整形正方形を呈し、東辺と西辺に約50cm程度の差がある。深さは約70cmを測り、非常に良好な遺存を誇る。ただし、北西部は急傾斜地形のため20cm程度の深さである。

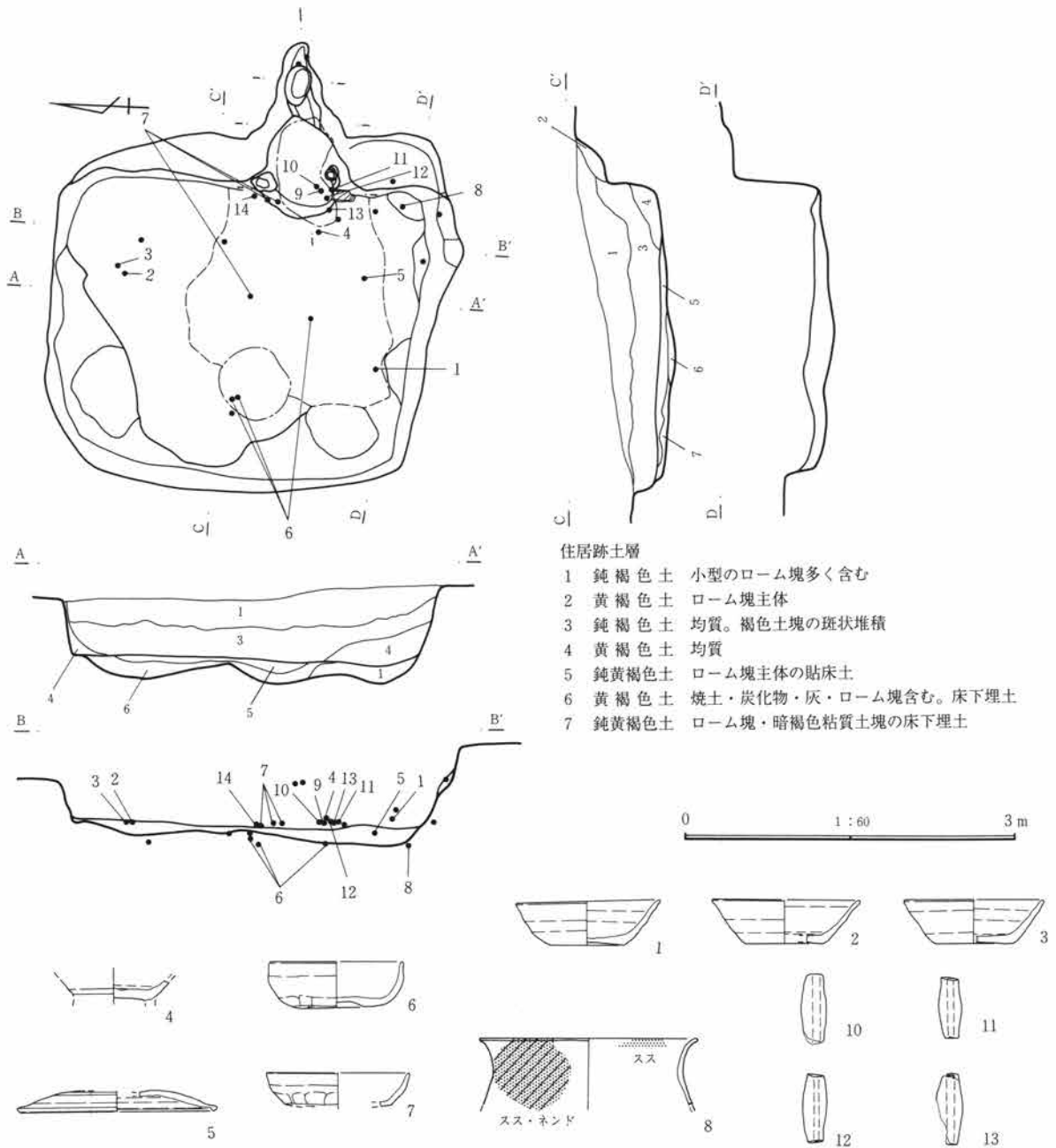
床面は僅かな凹凸が見られるがほぼ平坦面を築き、鈍黄褐色土による貼床がなされていた。硬化面は中央部よりカマド周辺にかけて顕著に確認された。

柱穴・貯蔵穴等の床面上の施設は調査当初は検出されなかったが、床下調査によって得られた数基のピット土坑が該当するものと思われる。すなわち床下平面図に記載したP₁~P₃は配置・規模から柱穴として位置付けたい。さらに、P₄は位置的にも貯蔵穴に相当する土坑と考えられよう。その他では、北東隅において壁周溝を検出した。

その他の施設としては、東壁の段差を挙げたい。底面の凹凸は強く平坦ではないが、掘り込みもしっかりした顕著な段差であり、テラス状遺構あるいは棚状遺構として捉えられる。この棚状遺構を除いた主軸長は約2.8mで、平面形は横長方形となる。

床下遺構としては、中央部の円形土坑と北側の不整

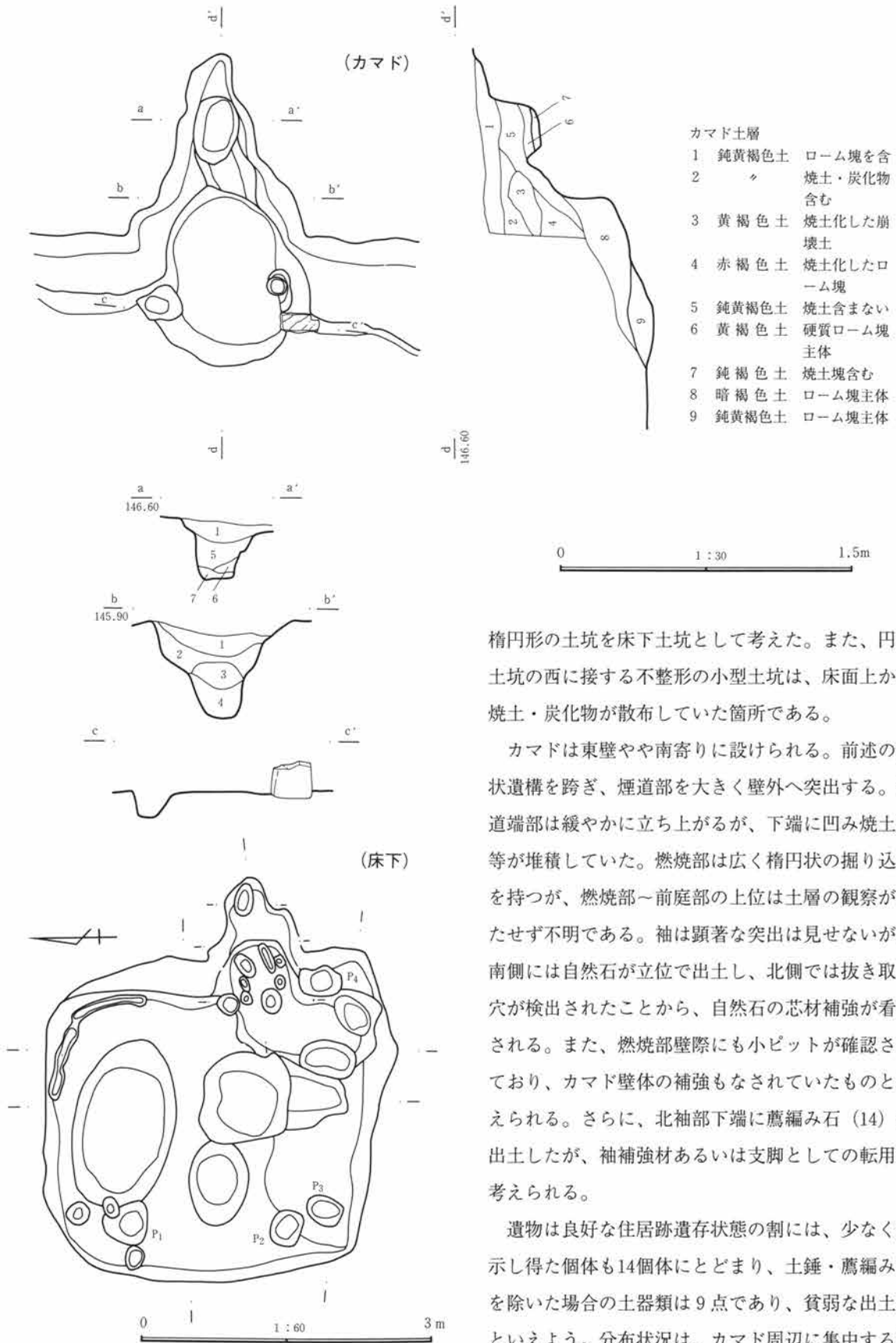
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第50図 14号住居跡(1)

第26表 14号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
88・89-24	隅丸不整形	342×316×68	N1°E	N92°E	貯蔵穴・壁周溝・ 棚・床下土坑	坏5 壺1 蓋1 甕2 土錘4 石1	



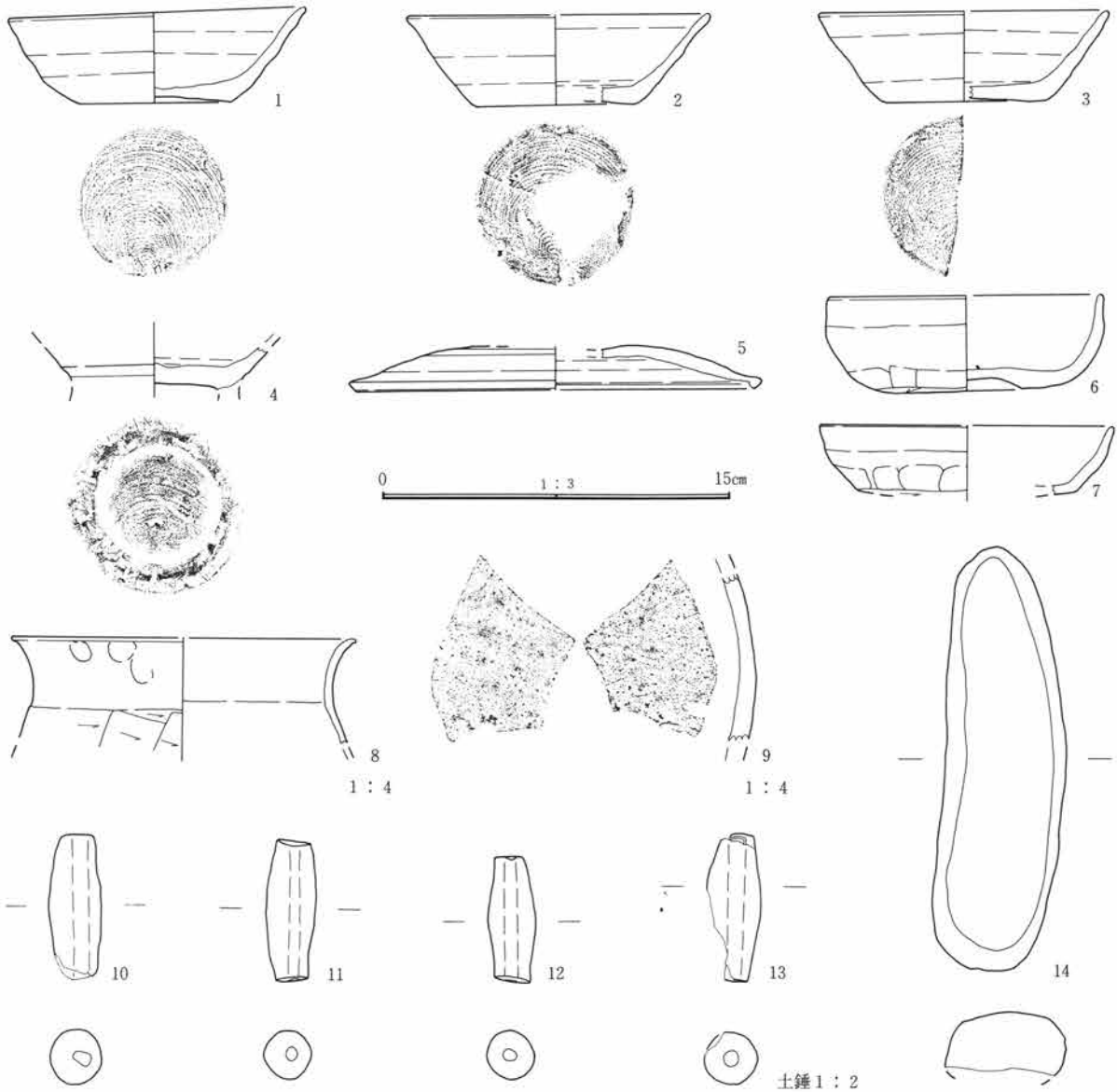
第51図 14号住居跡 (2)

楕円形の土坑を床下土坑として考えた。また、円形土坑の西に接する不整形の小型土坑は、床面上から焼土・炭化物が散布していた箇所である。

カマドは東壁やや南寄りに設けられる。前述の棚状遺構を跨ぎ、煙道部を大きく壁外へ突出する。煙道端部は緩やかに立ち上がるが、下端に凹み焼土塊等が堆積していた。燃焼部は広く楕円状の掘り込みを持つが、燃焼部～前庭部の上位は土層の観察が果たせず不明である。袖は顕著な突出は見せないが、南側には自然石が立位で出土し、北側では抜き取り穴が検出されたことから、自然石の芯材補強が看取される。また、燃焼部壁際にも小ピットが確認されており、カマド壁体の補強もなされていたものと考えられる。さらに、北袖部下端に薦編み石 (14) が出土したが、袖補強材あるいは支脚としての転用が考えられる。

遺物は良好な住居跡遺存状態の割には、少なく図示し得た個体も14個体にとどまり、土錘・薦編み石を除いた場合の土器類は9点であり、貧弱な出土量といえよう。分布状況は、カマド周辺に集中する傾向があるが、北側および西側の出土も見られ、全体

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第52図 14号住居跡出土遺物

に散漫な分布を見せる。しかしながら、殆どが床直あるいは床直上の出土であり、本住居跡に帰属し得る遺物と捉え得た。さらに特筆すべきはカマド出土の土錘（10～13）であろう。カマド南側の燃焼部より4点がまとまって出土している。補強材としての用途は考えられず、おそらく、東壁に設けられた棚状遺構からの流入と考えられる。その他の出土遺物として、1の須恵器坏は南壁際の床直上、2・3の坏は北側で床直から。4の埴底部はカマド前庭部、5の蓋は南側で床直から出土。6の土師器坏は床下から、7はカマド周辺。8の土師器甕はカマド南の

南東隅床直出土。粘土の付着が見られ、あるいはカマド構築材としての破片転用であろうか。9の須恵器甕体部破片もカマド内出土で、転用材の可能性は高い。14の薦編み石は前述のように、構築材あるいは支脚としての用途が想起されよう。

以上、本住居跡は出土遺物の量は少ないが、住居跡に帰属し得る遺物が多く、良好な出土状態といえよう。また、土錘の出土も注目しておきたい。

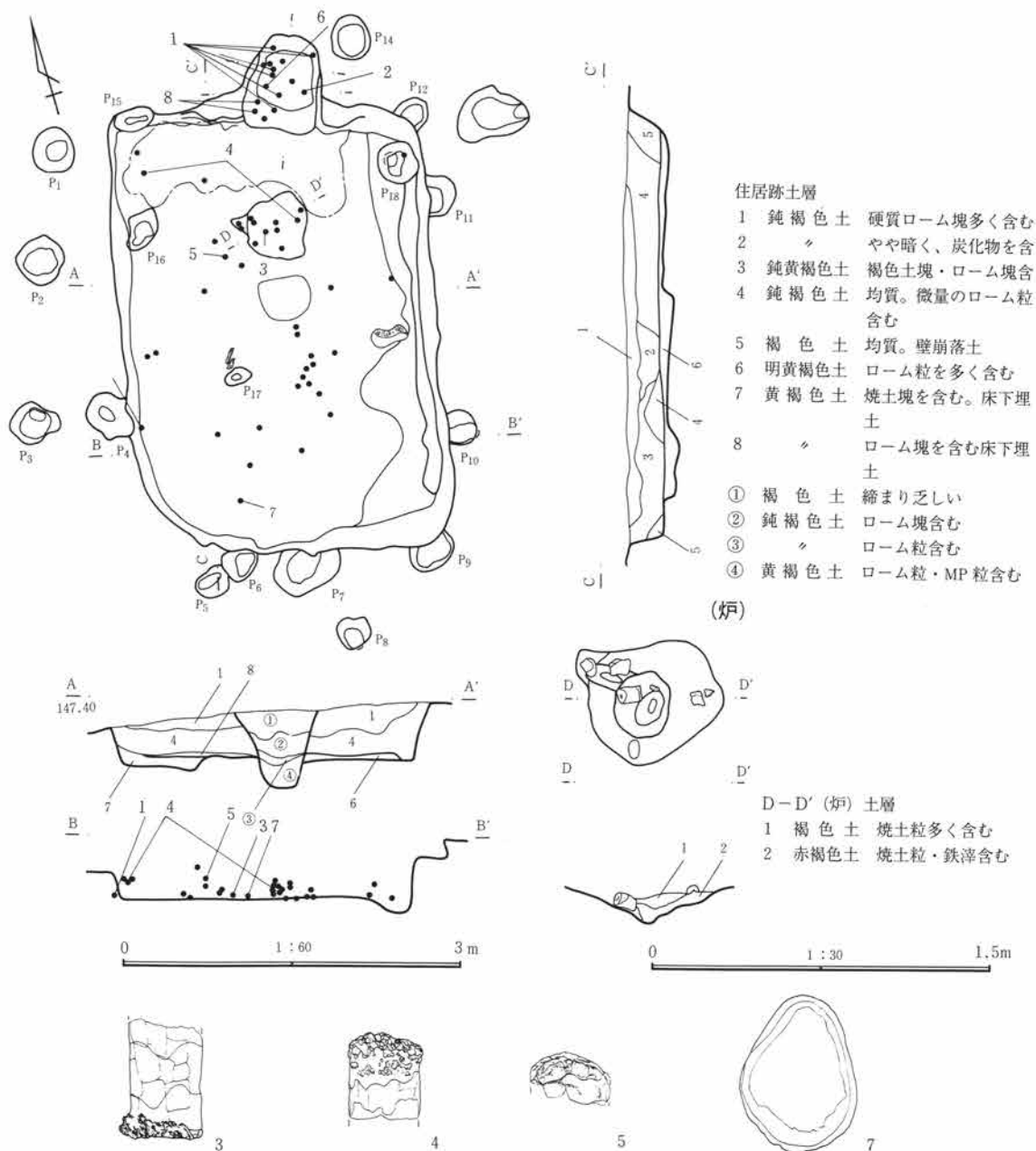
出土遺物の時期は、転用材の可能性を持つ8・9に注意を払うが、概ね9世紀前半段階のと考えたい。

第2節 竪穴住居跡

第27表 14号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第52図 1 坏 図版 53	口： 13.0 高： 3.9 底： 6.6	ほぼ完形 床直上	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部と体部は一体化し、体部下半に丸みを持たせる。底部は極僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やかに彎曲する。やや厚手の器厚を呈し量感に富む印象を得る。外底面に火禱痕残る。
第52図 2 坏 図版 53	口： 13.0 高： 3.9 底： 6.8	約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部と体部は一体化し、体部下半に僅かな丸みを持つもののほぼ直線状の体部形態を呈す。底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やかに彎曲する。やや厚手の器厚。
第52図 3 坏 図版 53	口： (12.6) 高： 3.9 底： (7.0)	約1/3 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③淡黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部と体部外面一体化し、体部は僅かな丸みを持つもののほぼ直線状の体部形態を呈す。底部は立ち上がらず、腰部も丸み帯びる。内面見込み部は緩やかに彎曲。厚手の器厚を呈す。
第52図 4 碗	口： - 高： - 底： 5.3	底部 高台部欠損 カマド前庭	①粗 石英 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台部欠損。体部下半に僅かな丸みを持たせる。内面の見込み部は緩やか。
第52図 5 蓋 図版 53	口： (17.3) 高： - 底： -	摘部欠損 約1/4 床直	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形摘貼付。摘は剥落する。かえり部は短く端部は鋭い。天井部は緩やかな彎曲を呈し中央部は凹む。摘接合痕明瞭。器厚は薄手。
第52図 6 坏 図版 53	口： 11.7 高： 4.1 底： -	約1/2 床下	①粗 片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部は内傾気味に直立し体部は丸みを帯びる。底面は平底で中央部が円環状に凹む。口縁部は横撫で、体部は指撫でか、底面は篋削り後撫で。底面の凹部は強い撫でが加わる。やや厚手の器厚。
第52図 7 坏	口： (12.6) 高： - 底： -	約1/6 床直	①粗 片岩 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部は丸みを持って外傾し、体部は凹む。底面は平底である。口縁部横撫で、体部は指撫で、指頭圧痕残る。底面は篋削り。薄手の器厚。
第52図 8 甕 図版 53	口： (19.8) 高： - 底： -	口縁部破片 南東隅下	①粗 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部丸みを帯び口縁部は外反気味に立つ。体部は緩やかに膨らむ。口縁部横撫で、指頭圧痕残る。体部は横位篋削りを施す。内面撫で。器厚は薄手。
第52図 9 甕 図版 53	口： - 高： - 底： -	体部破片 カマド	①粗 石英 白色粒 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	外面強い撫で、自然軸付着。内面撫で、円環状当て目残る。
第52図 10 土錘 図版 53	長： 4.2 径： 1.5 重：	ほぼ完形 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土師質	小型の土錘であり、中位が太く両端が不整形ながら細身の類似形態を呈す。棒状の芯材の中心に粘土を巻き付け中位を太く両端を細く整形する。おそらく掌上による整形であろう。外面を丁寧な縦位撫でを施し、両端を鋭利な工具で切断し、大きさの統一を図る。孔の大きさも径3～4mmとほぼ一定といえよう。芯材の画一が看取される。大きさ・重量・芯材の画一・類似する色調からも、同時期・同一製作者による所産と考えられる。
第52図 11 土錘 図版 53	長： 4.1 径： 1.5 重：	完形 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土師質	
第52図 12 土錘 図版 53	長： 3.7 径： 1.4 重：	完形 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土師質	
第52図 13 土錘 図版 53	長： 4.3 径： 1.6 重：	約3/4 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土師質	
第52図 14 薦編み石 図版 63	長： 18.4 幅： 6.0 厚： 2.8	裏面欠損 カマド	①緑色 片岩 ④455.8g	乳棒状の石材を素材とする。両側縁に僅かな摩滅痕が見られるが顕著ではない。端部の敲打痕も見られない。

第三章 検出された遺構と遺物



第53図 15号住居跡(1)

第28表 15号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
87・88-24・25	隅丸縦長方形	378×276×40	N11°E	N11°E	壁外柱穴・貯蔵穴・ 壁周溝・地床炉	甕1 台付碗1 羽口3 石3	

15号住居跡

第Ⅱ台地調査区中央やや北寄りで検出した小鍛冶施設を持つ住居跡である。単独で検出されたが、西約5mに14号住、東約4mに21号住居跡、更に南約

6mに16号住居跡が近接する。時期差は認められるものの、比較的等距離に配された住居配置と捉えられよう。重複する住居は無いが、周辺は柱穴状の土坑が多く検出され、本住居跡中央にもピットが重複



第54図 15号住居跡 (2)

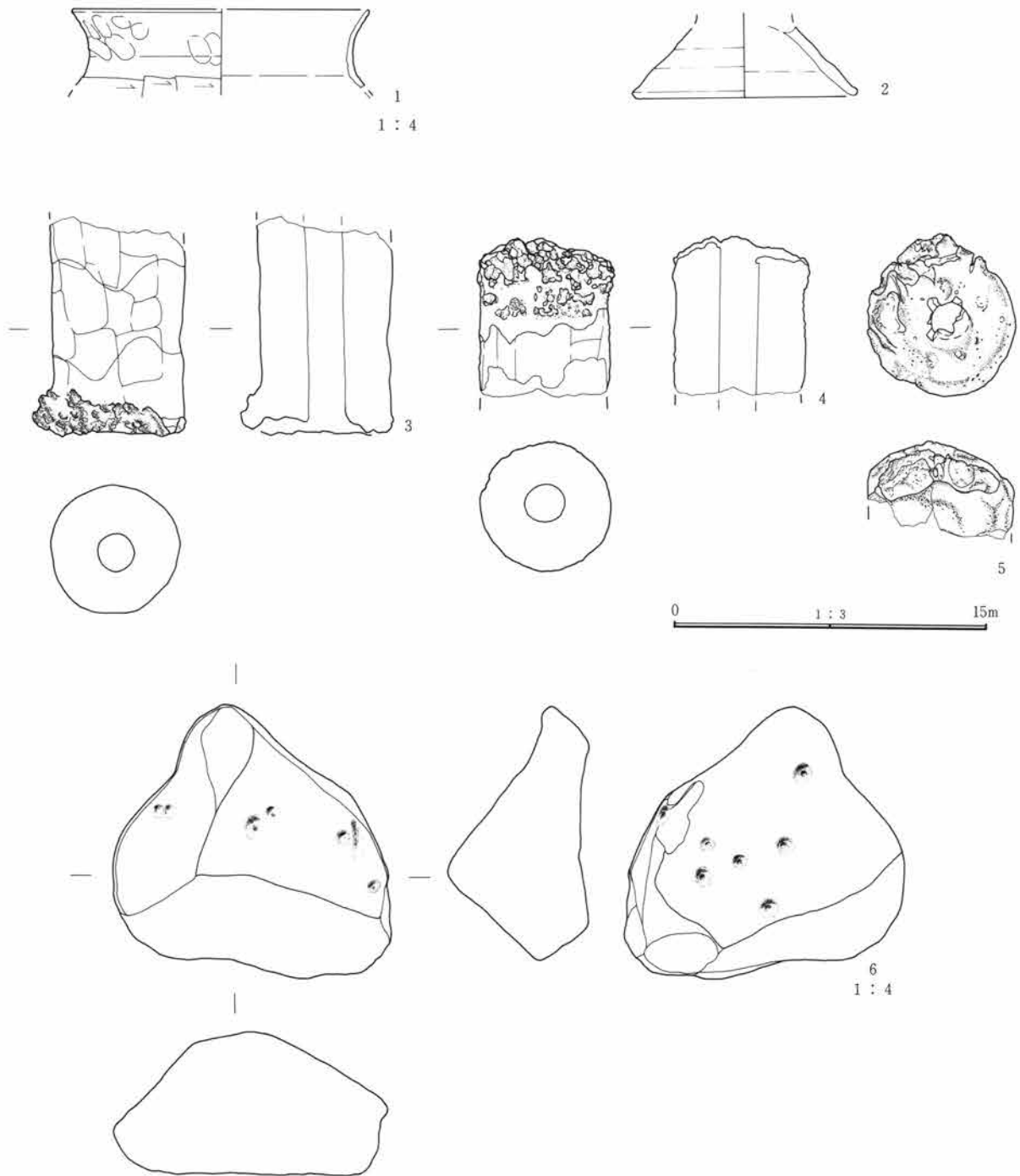
して確認された。

平面形は約3.8×2.8mの隅丸縦長方形を呈し、主軸を南北に持ち、他の住居跡の形状・方位等と大きな差が見られる。深さは40cm以上を測り、良好な遺存状態を見せる。壁も直立気味に立ち上がり、しっかりとした掘り込みを呈す。

床面は南側壁にかけて緩やかな傾斜をみせるものの、ほぼ平坦面を築き明黄褐色土による貼床がなされていた。硬化面は壁際を除くほぼ全面に認められたが、カマド周辺が特に顕著だった。

柱穴は、床面上に規則性を持ったピットは検出されず、壁外に柱穴状のピットを多数確認できたことから、壁外柱穴を持つ小鍛冶住居として位置付けた。ただし、住居跡中央に重複するピットの存在から、これら総ての壁外柱穴が本住居跡に属するものとは捉え難く、P₁~P₇・P₉~P₁₂・P₁₅は妥当性を帯びよう。また、床面上のピットはP₁₇が深さ・規模が柱穴としての可能性を持つ。貯蔵穴は、南東隅で検出

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

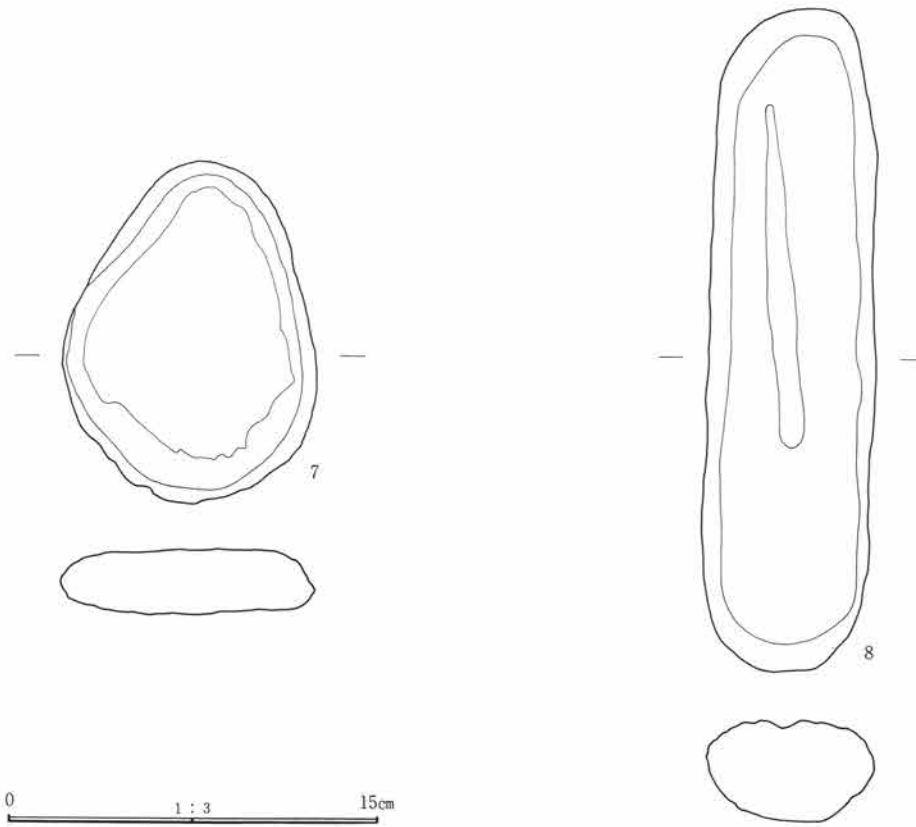


第55図 15号住居跡出土遺物(1)

した小型の土坑 P₁₈が該当する。壁周溝は、東側壁に沿って確認された。

小鍛冶施設としては、中央やや東寄りに不整形形の地床炉が検出された。鍛冶炉として位置付けられよう。炉底面は丸底で、埋土には焼土塊および鉄滓

が堆積しており炉内及び周辺には羽口の出土が見られた。壁体も下半が顕著に焼土化しており、継続的な鍛冶作業が想起されよう。また、炉の北西部は小溝状に凹みが落ち込み、自然石や焼土塊が出土している。炉に付随する施設の痕跡と思われる。また、



第56図 15号住居跡出土遺物(2)

第29表 15号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第55図 1 甕 図版 53	口：(19.0) 高：－ 底：－	口縁部 約1/4 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部には僅かな丸みを持たせ、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は横撫でを施し、指頭圧痕が残る。体部は横位斲削り。内面の器面は剥落が著しい。器厚は薄手。
第55図 2 台付甕 図版 53	口：－ 高：－ 底：10.4	脚部 約1/2 カマド	①粗 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	端部は丸みを帯び、裾部は緩やかな膨らみを持つ。内外面とも横撫でが施される。
第55図 3 羽口 図版 53	長：10.3 径：6.2	約2/3 床直	①粗 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土製品	鞘羽口。棒付による貫孔。外面は縦位の撫でにより仕上げられる。先端部に溶解物少量附着。
第55図 4 羽口 図版 53	長：7.6 径：6.3	約1/2 覆土	①粗 ②酸化焰 ③黄灰色 ④土製品	鞘羽口。棒付による貫孔。外面は撫でによる整形。方向・工具は判然としない。先端部に溶解物附着。
第55図 5 羽口 図版 53	長：4.7 径：5.0	端部破片 覆土	①粗 ②酸化焰 ③灰褐色 ④土製品	鞘羽口。棒付による貫孔。先端部に溶解物多量に附着し先端部を塞ぐ。
第55図 6 磨石 図版 64	長：17.3 幅：18.0 厚：9.0	ほぼ完形 カマド	①粗粒安山岩 ④2,678.0g	縄文時代多孔石の再利用か。各面に磨り痕が認められる。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第56図 7 磨石 図版 64	口：13.8 高：10.4 底：2.6	完形 覆土	①緑色片岩 ④583.4g	偏平な片岩を素材とする。表裏面とも縦位の擦痕が認められる。
第56図 8 砥石？ 図版 64	口：26.8 高：7.1 底：4.1	完形 カマド	①黒色 片岩 ④1,373.0g	大型で棒状の片岩を素材とする。表面中位に長軸方向に溝が走る。有溝研磨か。

住居跡南壁際には大型の自然石が出土しているが、おそらく鍛練具として使用された台石と思われる。その他にも、中央の鍛冶炉を中心にして、鉄滓の出土が多く見られ、本住居跡の小鍛冶遺構としての性格付けを裏付ける。

カマドは、北壁中央やや東寄りに設けられる。方形の煙道部を突出し、燃焼部は浅く凹むが、煙道部にかけて強く立ち上がる。燃焼部の凹みには炭化物とローム粒を含む黄褐色土が堆積しており、この上位の面を使用面として捉えた。使用面上には灰・炭化物が散布し、更にローム塊・焼土塊が堆積することから天井材崩壊土と考えた。袖は緩やかで、短く突出しており、東側の袖下位には大型の多孔石（6）と磨石（8）が出土している。芯材あるいは補強材としての縄文時代遺物の転用と位置付ける。その他の補強材としては、土師器甕が出土しており、粘土が付着することから転用材として捉えられる。無論、煮沸具としての用途からの粘土付着も考えておきたい。また、燃焼部中央やや西寄りに台付甕脚部（2）が逆位で出土しているが、あるいは支脚として、再利用された可能性も指摘しておく。

遺物は少なく、図示した遺物は8点のみである。出土土器量も少なく、個体図示し得た土器は前述のカマド出土の土師器甕（1）と台付甕脚部（2）の2点のみである。鍛冶炉及び周辺からは羽口（3～5）が欠損状態で出土した。また、南側床直で出土した磨石（7）は表裏面及び側縁に擦痕が著しいことから、鍛冶作業に伴う遺物として考えたい。

以上、本住居跡は小鍛冶施設を伴う住居であり、平面形及び主軸方位さらに壁外柱穴を持つ要素等、

本遺跡で調査された他住居跡とは様相を異にする。また、出土遺物の貧弱さ、鍛冶炉の周辺の欠損した鞆羽口の散布、さらに鉄製品類が見当たらない出土様相を考えると、住居廃棄時に居住者の移動が想起される。移動に伴って日常什器・鉄製品等を持ち去ったのではないだろうか。

乏しい出土土器からではあるが、廃絶前後の時期は、おそらく9世紀前半代と思われ、本遺跡で検出された一方の小鍛冶施設を伴う住居跡である20号住居跡との関連が注目されよう。

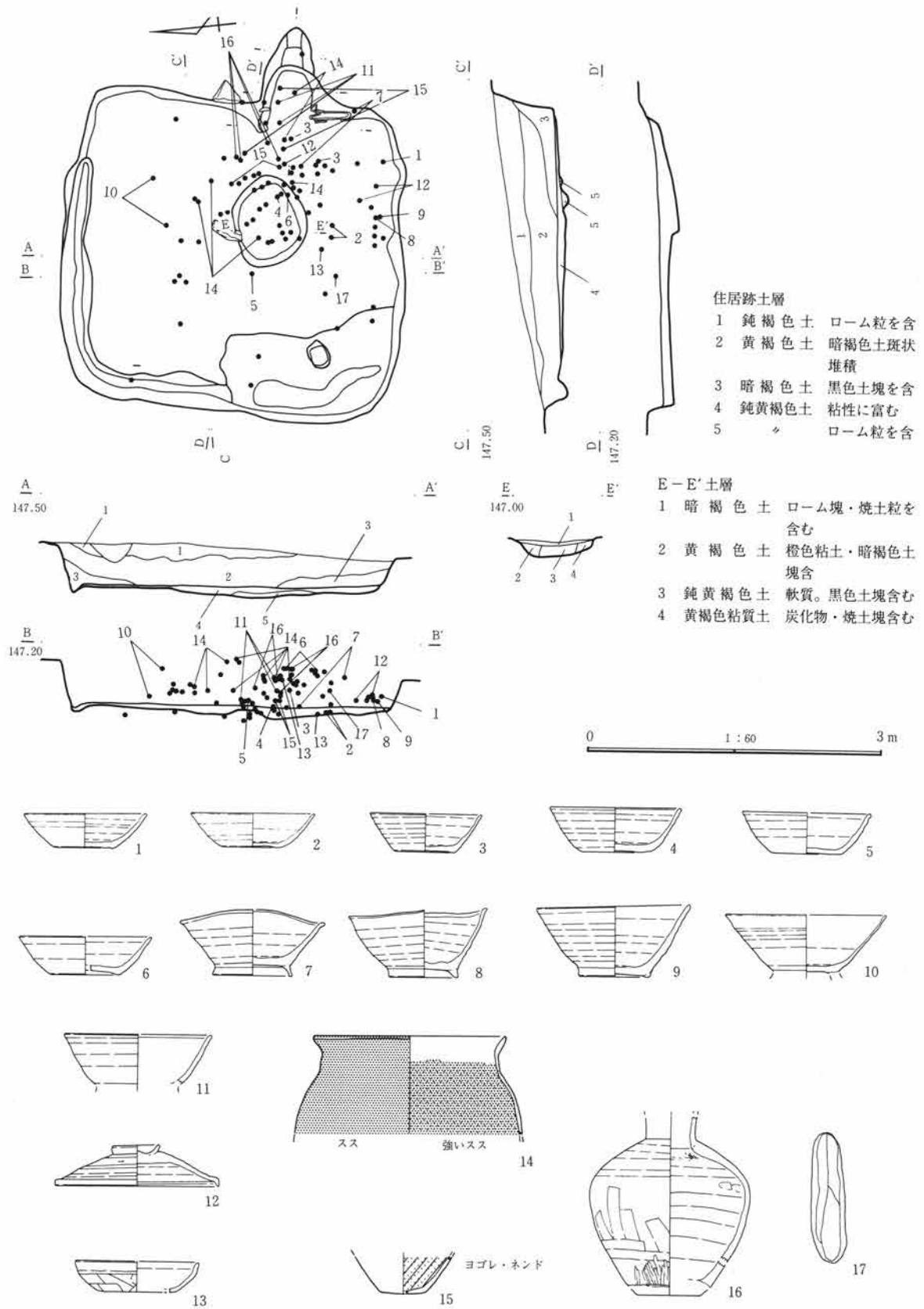
16号住居跡

第Ⅱ台地調査区ほぼ中央で検出された。北約6mに15号住、南西約1mに17号住居跡・24号住居跡等が群在して近接し、中央で検出された住居跡群の北西部にあたる。尚、24号住北西隅と本住居跡南東隅が重複するが、重複部分が僅かであり、新旧関係の把握にまでは至らなかった。また、15住・23～25号住は図らずも本住居跡と同レベル（標高147m）に横列する形態を呈す。周辺の地形は北西部への傾斜ながら、やや緩やかになる地点で、比較的居住に適する箇所といえよう。

平面形は隅丸正方形で、比較的整った形態といえよう。軸長約3.4×3.1mを測る。深さは約60cmで、良好な遺存を誇る。壁はやや開き気味に立ち上がるがしっかりした掘り込みである。

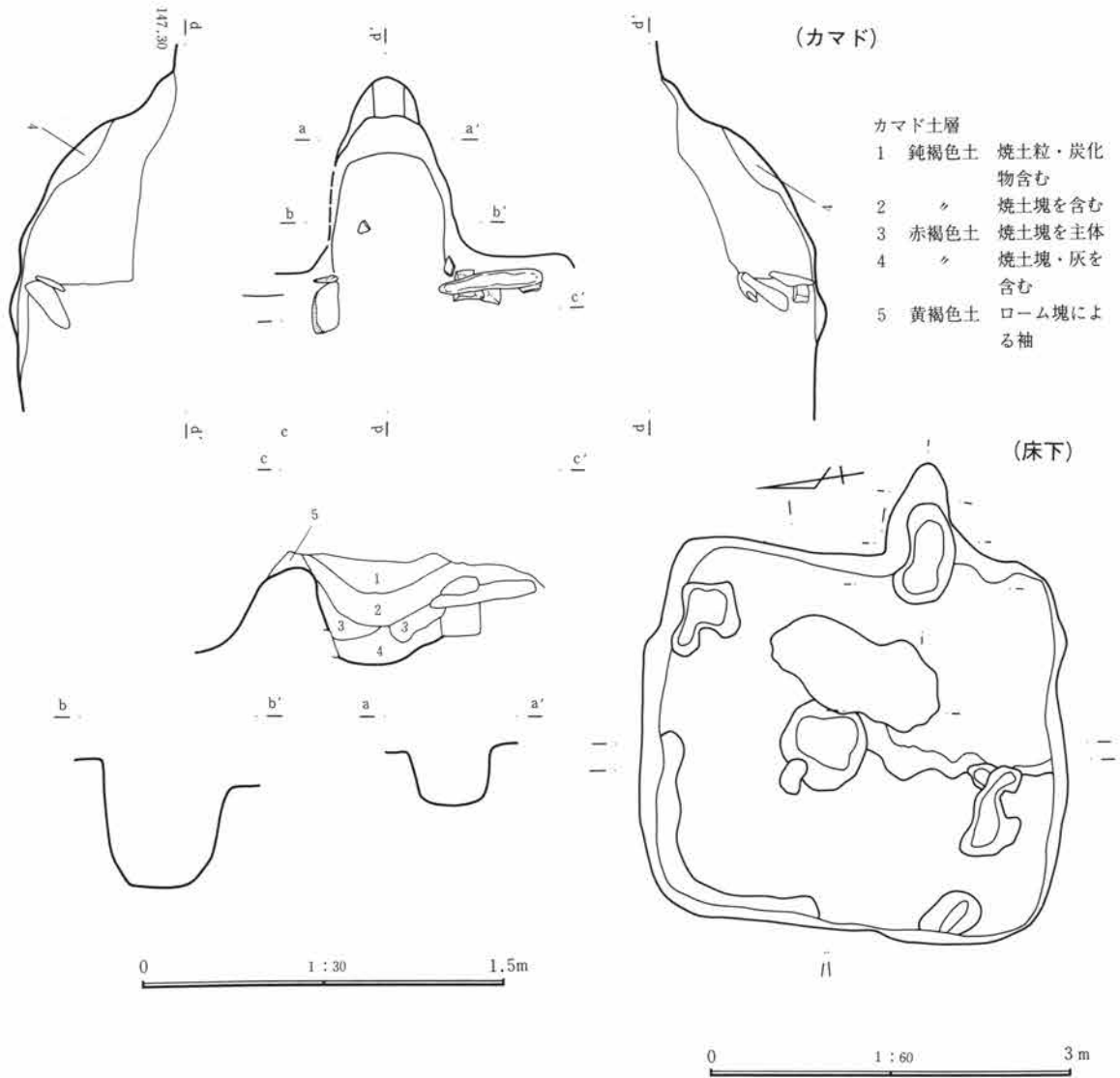
床面は、ほぼ平坦面が意識して築かれている。鈍黄褐色粘質土を基調とした貼床をなしているが、南西隅周辺部は、粘質土が判然とせず、緩やかな凹む結果となった。

第2節 竪穴住居跡



第57図 16号住居跡 (1)

第三章 検出された遺構と遺物



第58図 16号住居跡（2）

第30表 16号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
87-26・27	隅丸正方形	346×310×58	N13°E	N103°E	土坑?・壁周溝	坏7 碗5 蓋1 甕2 壺1 石1	

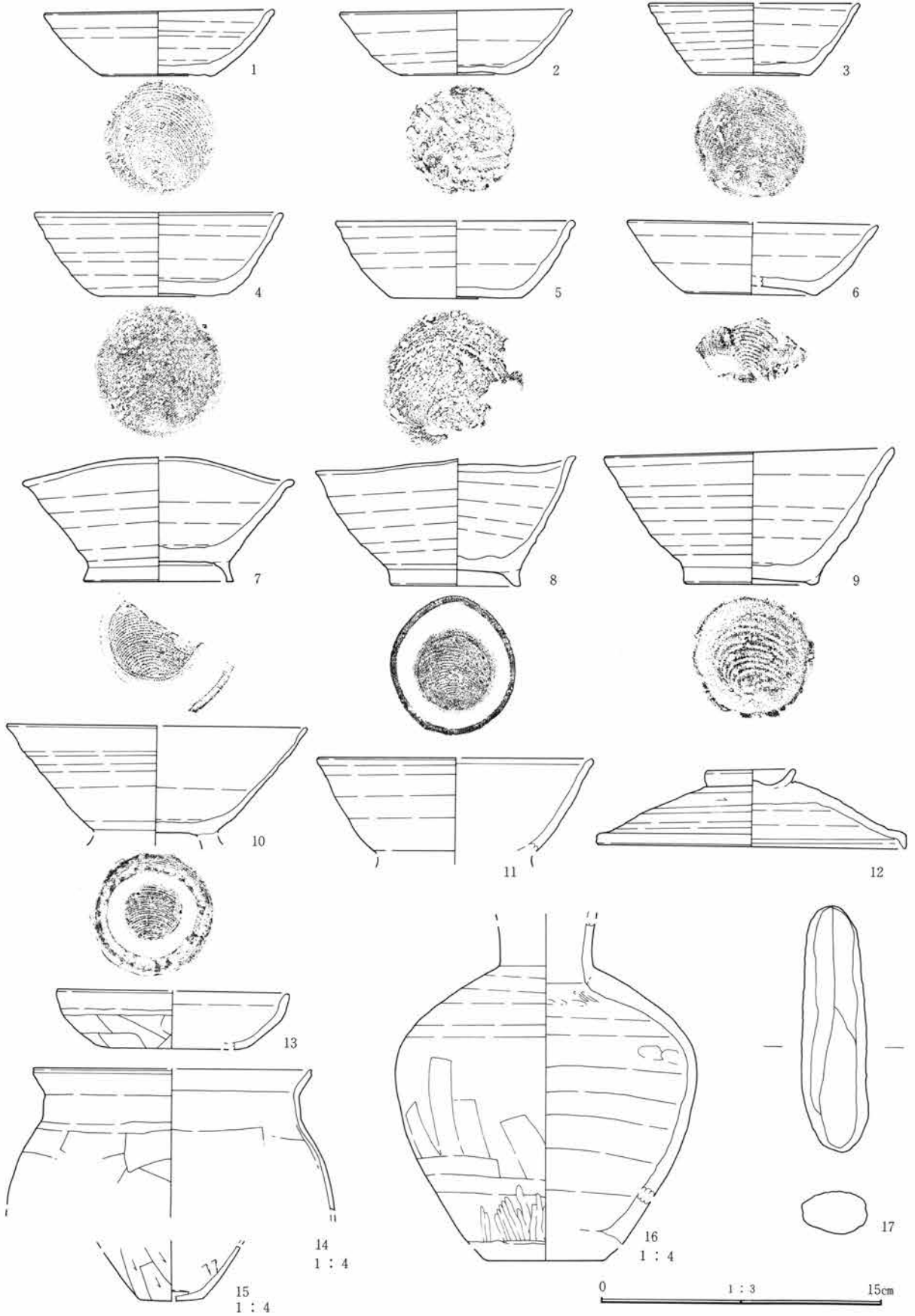
柱穴は良好な配置・規模を見せるものが無く、あるいは無柱穴の住居跡として位置付けられよう。床面上に検出された南西隅の小ピットは小径で浅く、柱穴としては積極性を持たない。

貯蔵穴も、該当する箇所に土坑が検出されなかったが、床下調査において、床面中央に径90×70cm程度の土坑が確認された。床下土坑特有の埋土ではな

く、焼土・炭化物を含むことから、床面上の施設として位置付けた。また、この土坑北側に自然石が床面に置かれた状態で出土し、周辺には遺物の散布が著しいため、本土坑を貯蔵穴あるいは炉として考えておきたい。

その他の施設としては、壁周溝が北壁から西壁にかけて検出された。

第2節 竪穴住居跡



第59図 16号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第31表 16号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第59図 図版	1 54	口：12.4 高：3.4 底：6.0	完形 南東隅下	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部僅かな丸みをもつ。底部僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。内面の轆轤目比較的強く口縁下は内稜状となる。
第59図 図版	2 54	口：(12.4) 高：3.5 底：5.9	約2/3 床下	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部中位に僅かな丸みを持つ。底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。口縁部内面は若干外傾し薄い内稜状となる。内外面器面剥落。
第59図 図版	3 54	口：(11.2) 高：3.8 底：6.2	約1/3 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は直線的に底部に至る。内面見込み部は緩やかな彎曲を見せ、口縁部は若干の外傾を呈す。器厚は薄手。内外面とも摩滅。
第59図 図版	4 54	口：13.2 高：4.5 底：6.4	完形 床直	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部僅かに外反し体部は下半に丸みを持たせる。内面見込み部は緩やか。器厚は比較的薄手だが口縁部は肥厚気味。外面体部下半～底部は摩滅する。
第59図 図版	5 54	口：12.8 高：4.1 底：7.0	約1/3 床直	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は僅かな丸みを持つ。内面見込み部は緩やか。器厚は比較的薄手。外面体部下半～底面は器面摩滅。内底面は器面の剥落著しい。
第59図 図版	6 54	口：(13.2) 高：3.9 底：7.0	約1/4 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部はほぼ一体化し体部中位に丸みを帯びる。底部は極僅かな立ち上がりを見せ、内面見込み部に緩やかな彎曲を呈す。底部はやや上げ底気味。
第59図 図版	7 54	口：(14.6) 高：6.6 底：(8.0)	約1/2 南東隅・ 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁～体部大きく歪む。口縁部は僅かに外反し体部は直線状を呈す。高台は開き薄手で鋭利な端部を作る。内面見込み部は緩やか。底部器厚は厚手。
第59図 図版	8 54	口：14.0 高：6.8 底：6.9	ほぼ完形 南壁下	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部と高台部に至り。口縁部は僅かに外反し、丸みを帯びる体部器形。高台は開き気味に直立し、内面見込み部は緩やか。体部の器厚が著しく薄手。
第59図 図版	9 54	口：15.4 高：7.0 底：7.0	完形 南壁下	①粗 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙 色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部と体部はほぼ一体化し、体部は僅かな丸みを持つ。高台は短く直立し、内面の見込み部は緩やか。器厚はやや厚手。軟質な感を受ける。
第59図 図版	10 54	口：(16.0) 高：— 底：—	約1/3 覆土	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反するが体部とほぼ一体化する。体部は直線状を呈し下半に極緩やかな丸みを持たせる。内面の見込み部は緩やかで、器厚も極めて薄い。高台部欠損。
第59図 図版	11 54	口：14.8 高：— 底：—	約1/3 カマド・ 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し、体部は中位～下半で丸みを持つ。口縁部内面は外反し浅い凹線が巡る。器厚は比較的薄手。
第59図 図版	12 54	口：16.5 高：4.1 摘：4.7	約3/4 南壁下	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形摘貼付。天井部高く平坦面を築く。かえりは丸みを帯び「く」字状の断面形を呈す。摘はボタン状で中心部が僅かに突出する。天井部上半回転斲削り、平坦面切離技法不明。摘は撫でによる貼付。
第59図 図版	13 54	口：12.3 高：— 底：—	約1/5 床下	①粗 片岩 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部極僅かに内彎し口縁部は外傾する。口縁～体部は緩やかな屈曲を見せ、底部も平底を呈す。口縁部横撫で、体部は斲削り後撫で。内底面凹凸が顕著。
第59図	14 甕	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁部 約1/4 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口唇部短く直立。口縁部上位は外傾下位は直立する。体部上半は緩やかに張り膨らみを持たせる。口縁部は横撫でを施し体部境に強い横撫でが及ぶ。体部上半は横位斲削りと斜位斲削り、体部内面は横位斲撫で。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第59図 15 甕 図版 54	口： — 高： — 底： (4.5)	底部破片 床直上	①粗 片岩 ②酸化焙 ③赤褐色 ④土師器	体部下半は強く開く。底部は小径で不安定な座り。外面体部は縦位鋭削り、底面も削りが一定方向に及ぶ。内面は撫でにより平滑に仕上げるが鋭当て目が残る。
第59図 16 壺 図版 54	最大径：24.0 高： 底：	頸部～胴部 約1/4 覆土	①粗 石英 ②還元焙 ③褐灰色 ④須恵器	頸部は直立し、なで肩で体部上半に膨らみを持たせる。轆轤整形後外面は撫でを加え体部中位より縦位・横位鋭撫で、下半は棒状工具の研磨が施される。内面肩部は指撫で、体部は横位鋭撫でが施される。尚、内面肩部には頸部接着時の圧縮痕が残る。
第59図 17 薦編み石 図版 64	長： 13.0 幅： 3.4 厚： 2.3	完形 覆土	①黒色 片岩 ④172.80g	棒状の円礫を石材とする。図右側縁に微小の摩耗痕が看取される。

床下遺構は良好なもの無く、カマド周辺の凹みや不整形の土坑・小ピット等が検出された。凹みは住居・カマド構築時の所産であろう。小ピット・不整形土坑は、本住居跡に伴うものとは判断できず、確定はできない。

カマドは東壁やや南寄りに設けられる。煙道部は細く突出し、強く立ち上がる。燃焼部は掘り込みを持たないが僅かに凹み、煙道部と比してやや広めに設けられていた。袖は突出しないが、両袖部下端に自然石が出土したことから、芯材としての利用が窺われる。袖本体は、地山ロームで作られ、芯材はローム塊を主体とした黄褐色土で補強されるようだ。また、南側袖上位には、乳棒状の自然石が斜位に出土しているが、あるいは天井部に懸架された構築材と思われる。補強材としては、上記の袖石や天井石の他、カマド埋土に含まれる焼土塊が、構築材崩壊土として考えられる。

本住居跡のカマドは遺存状態も良好であり、崩壊土が認められるものの、破壊を主体とする状況とは思われない。また、南袖上に出土した乳棒状の自然石を天井材とした場合、袖石の残存状態と併せて、カマド破壊行為を伴わない住居跡廃絶と捉えられよう。推論の域を出ないが、他のカマド破壊を伴った住居跡との対比も必要であろう。

出土遺物は比較的多く17点を図示した。カマドから中央部にかけて集中が見られ、覆土中より床面まで満遍なく出土した。その中で須恵器坏・壺類の南

壁際のまとまった出土が注意されよう。1の須恵器坏、9・8の高台付壺、須恵器蓋(12)が近接して、床直・床直上より出土している。同時に薦編み石も出土しており、南壁周辺を作業場あるいは備蓄場としての位置付けを考えておきたい。

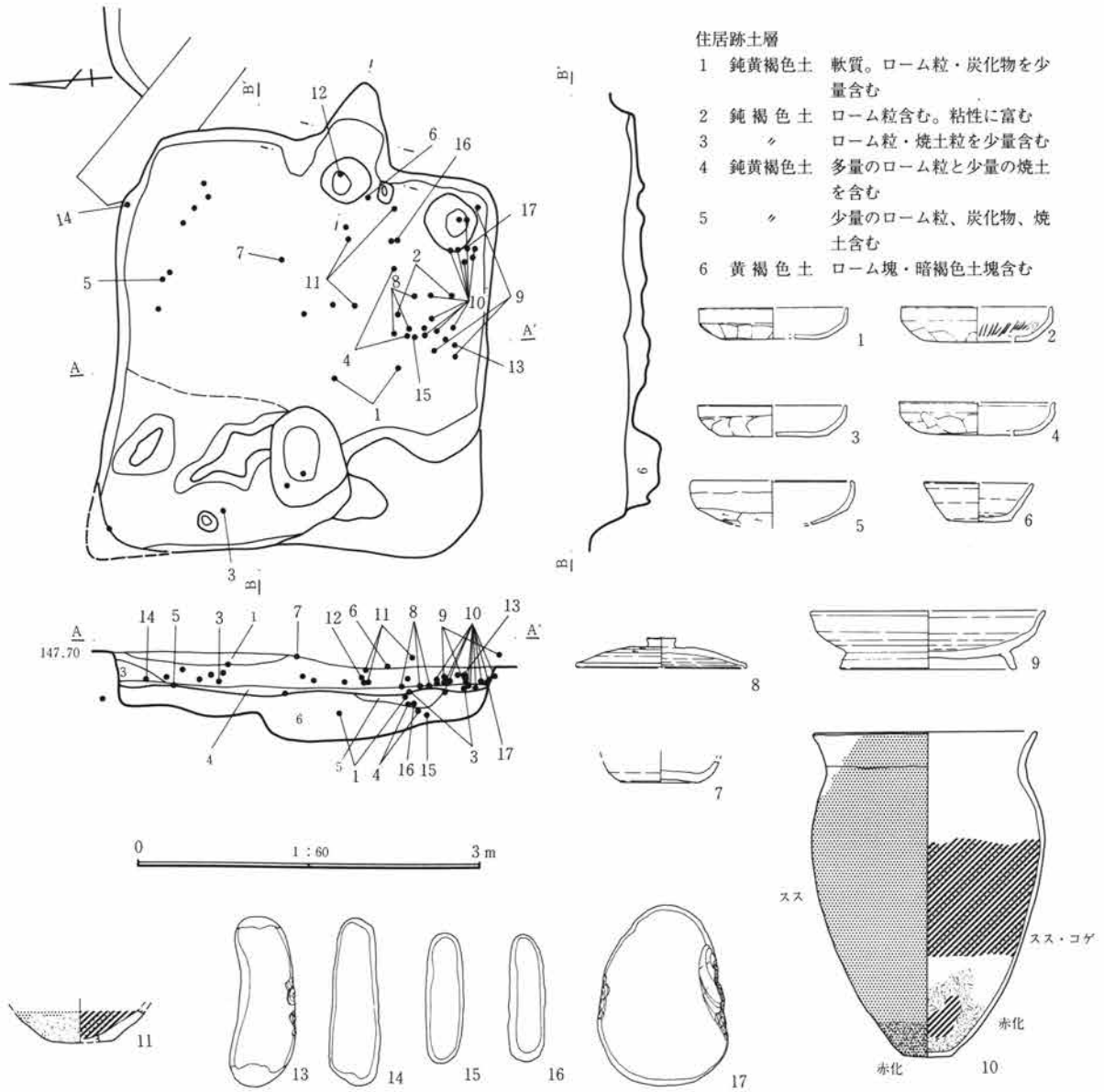
床面中央で検出された土坑上と周辺からは、4・5の須恵器坏が出土している。高台付壺(7)は東南隅の壁上と中央部の床直2点が接合した。

カマドからの出土は、11の壺以外は煮沸具である。土師器甕口縁部破片(14)・同底部(15)の出土を見るが、15に付着する粘土の痕跡から破片転用とは捉え難く、煮沸としての用途を充てておきたい。

中央部の覆土からは3・6の坏、14・15の土師器甕、16の須恵器壺破片が出土した。また、床下底面からは須恵器坏(2)と土師器坏(3)が出土しているが、床面出土遺物との大きな時期差は認められない。

以上のように、本住居跡出土遺物を概観したが、比較的床直出土遺物あるいはまとまった出土状態を呈しており、居住に伴う所産として捉え得る。特に、1・4・5・7～9の須恵器坏・壺類はまとまった出土を示し、遺存状態も良好である。これらの遺物から、住居跡の帰属する時期は概ね9世紀後半段階に比定されよう。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第60図 17号住居跡(1)

第32表 17号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
86・87-27	不整長方形	366×328×40	N103°E	N104°E	貯蔵穴・地床炉	坏7 蓋1 盤1 甕3 石5	18号住居 24号住居

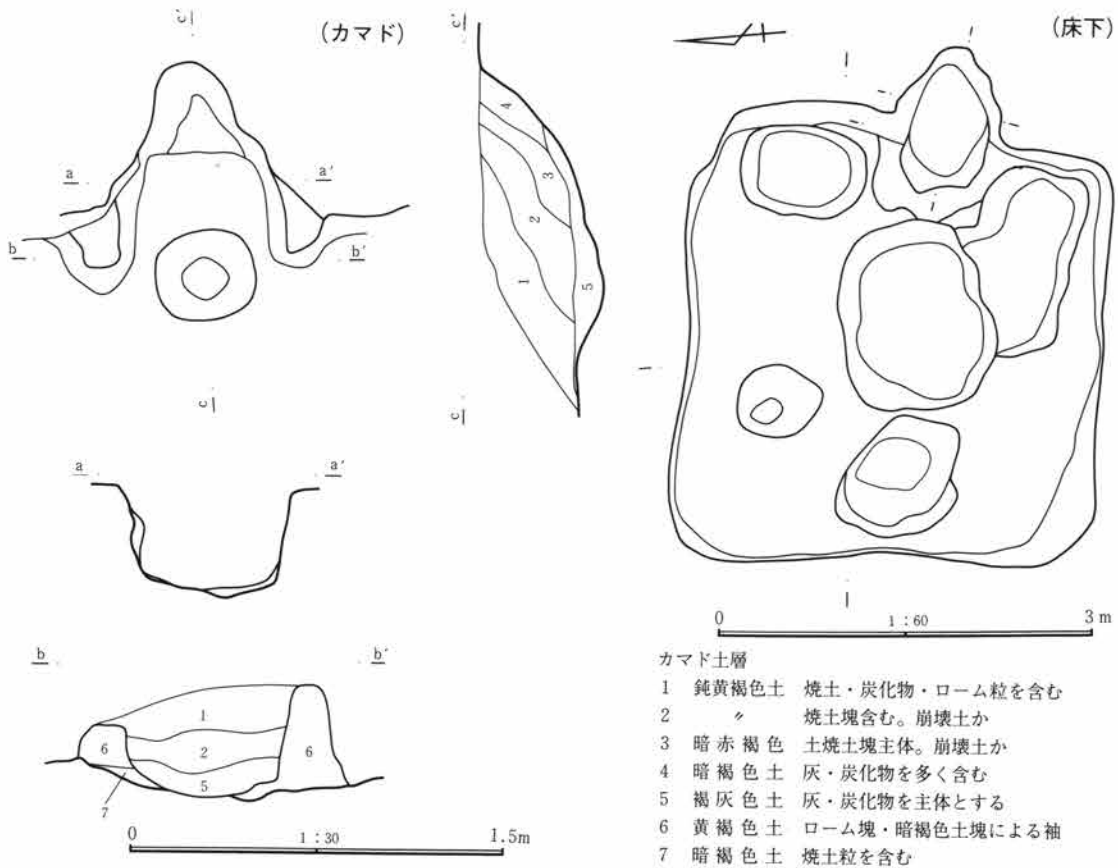
17号住居跡

第Ⅱ台地調査区中央で検出された。周辺は、18号住・19号住・23～25号住・31号住居跡が重複した状態で確認されており、本住居跡も東を18号住、南西部を24号住と重なる。またこの群在する住居跡群の

中心部でもある。

また、北西隅から東壁にかけて試掘坑が貫入しており、壁上端を壊すが、床面までは達していない。

平面形は、約3.7×3.3mの主軸を長軸に持つ不整長方形を呈し、北辺が長く南辺との差のためいびつ



第61図 17号住居跡 (2)

な形態をとっている。深さは約40cmを測り、比較的良好な遺存状態で、壁も直立気味に立ち上がる。

床面は、凹凸を持つが、ほぼ平坦面を意識して築かれる。鈍黄褐色土による貼床がなされていたが、西半は判然としなかった。硬化面も西半には見られず、中央から東半にかけて顕著に見られた。

床直上において、床面中央部より南東隅にかけて炭化材が出土した。良好な遺存ではないが、上屋材と思われ、住居対角線上の走行を示すものである。その他にも床面上には、小範囲の炭化物のまとまりが床面に見られ、住居廃絶時の火災が想起されよう。ただし、床面・壁等は特に焼けておらず、また、遺物の出土状態を見ても完形の出土は少ないことから、焼失住居としての積極的な確証を得られない。

柱穴は、特定できない。床下調査においても、明瞭な痕跡は認められなかった。

貯蔵穴は、東南隅の小型の土坑を充てたい。埋土

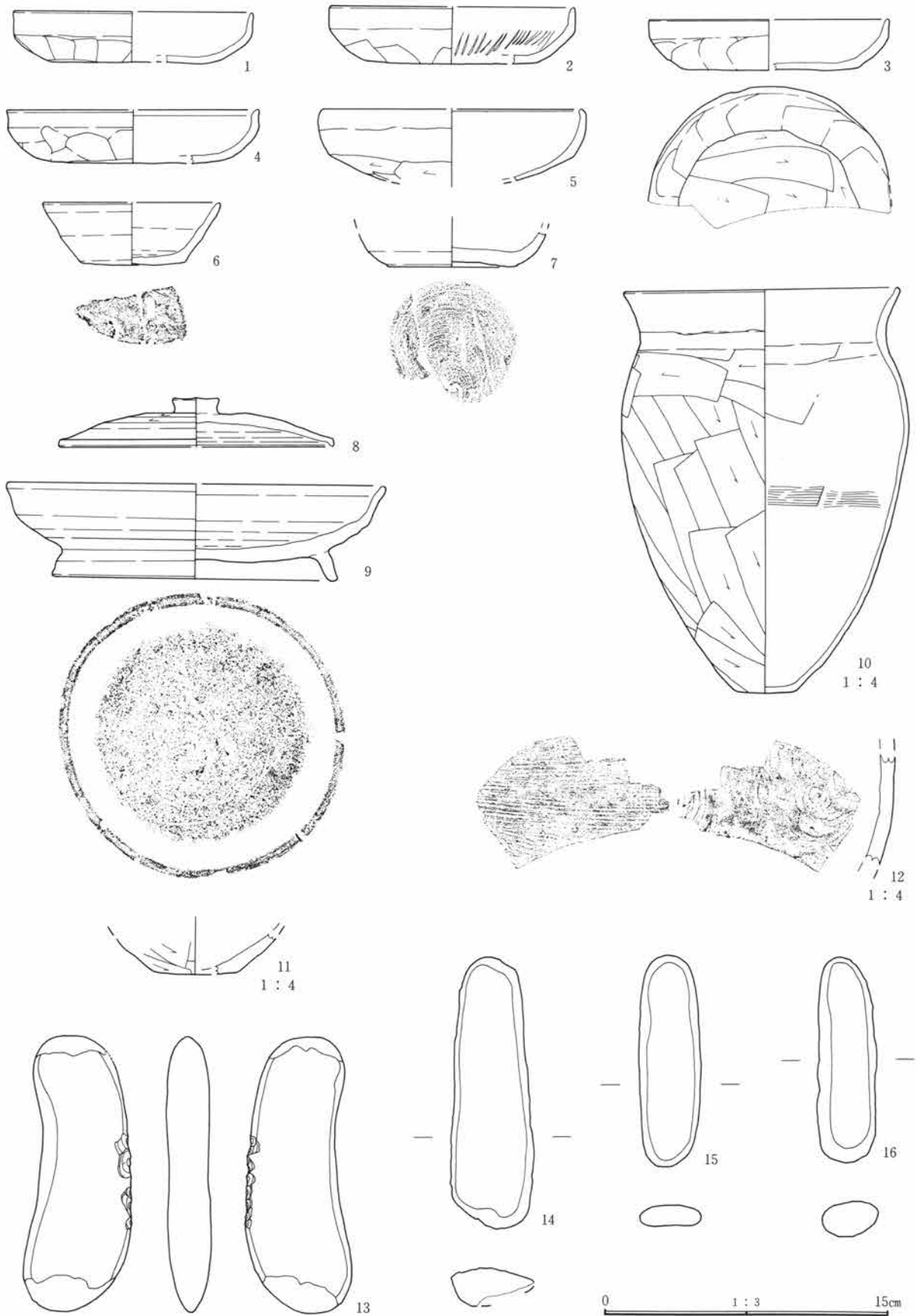
の観察は果たせ得なかったが、深さ約20cm程度の掘り込みである。

その他の遺構として西半部の土坑群が見られるが、掘り込みも浅く、住居跡施設とは思われない。

カマドは東壁中央やや南で検出した。煙道部は壁外に突出し、強く立ち上がる。燃烧部は緩やかに凹み、前庭部にかけて径約40cm程度の小穴が設けられる。袖は良好な突出を見せる。地山ロームの作り出しではなく、ローム塊と暗褐色土塊を突き固めた粘質土を構築材としていた。

出土遺物は比較的多く、16点を図示した。貯蔵穴南から中央部にかけて出土が偏り、これは先に述べた炭化材の在り方と近似する。南側の床直からは、土師器坏 (1・2・4)、須恵器蓋 (8)、須恵器盤 (9)、土師器甕 (10) 及び薦編み石 (13・15) が出土しており、まとまった出土といえよう。カマドからは、12の須恵器甕体部破片が見られたが、あ

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

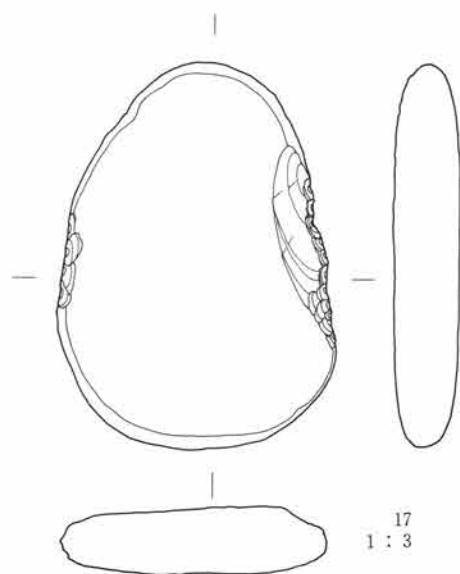


第62図 17号住居跡出土遺物 (1)

第2節 竪穴住居跡

るいは構築材としての破片転用か。磨石(17)は貯蔵穴西の床直で出土した。南側壁の一群と同様のあり方であろうか。3の土師器坏は西壁際覆土下位、6の須恵器坏はカマド覆土上層で出土した。

以上本住居跡は、火災を受けた住居跡ながら炭化材の遺存はさほど良好ではなく、上屋復元に至る資料ではない。しかしながら、炭化材が残存していた中央部から東南隅にかけて、やはり遺物が集中する傾向は重視しておきたい。遺物は8世紀後半段階の所産と考えられ、特に南側出土の一群は、火災に伴って放棄された遺物と捉えられることから、より一括性に富むものと評価したい。



第63図 17号住居跡出土遺物(2)

第33表 17号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第62図 1 坏 図版 55	口:(13.0) 高:(2.7) 底:—	約1/2 床直	①粗片岩 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部は直立し、体部は彎曲を持って底部に至る。底部は平底。口縁部は横撫で、体部は横位斲削り後撫で。底部は斲削りを施す。内面の器壁剥落著しいが放射状の研磨が細く施され、暗文状となる。
第62図 2 坏 図版 55	口:(13.0) 高:3.0 底:(9.0)	約1/6 床直	①粗片岩 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は僅かに内傾気味に直立。体部は彎曲を持って底部に至る。底部は平底。口縁部横撫で、体部は横位斲削り後撫で。底部は斲削り。内面は放射状の研磨が細く施され、暗文状となる。
第62図 3 坏 図版 55	口:(12.8) 高:2.7 底:(9.4)	約1/2 覆土下位	①粗片岩 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は直立し、体部は彎曲を持って底部に至る。底部は平底。口縁部は横撫で、体部は横位斲削り後撫で。底部は斲削り。内面は平滑。1・2に比して胎土は赤く粉状の感を得る。
第62図 4 坏 図版 55	口:(13.5) 高:(2.8) 底:—	約1/4 床直	①粗白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部は僅かに外反し口縁部は直立する。体部は緩やかな丸みを帯びる。底部は平底。口縁部は横撫で体部は斲削り後入念な指撫で、撫では底部にまで及ぶ。内面の口縁部は外傾し屈曲部は内稜状となる。
第62図 5 坏	口:(14.0) 高:— 底:—	約1/5 床直	①粗片岩 黒色鉱物 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部は内彎し口縁部~体部上半は緩やかな丸みを持たせる。口縁部は横撫で、体部上半は無調整部分、下半は斲削り。内面は平滑。
第62図 6 坏 図版 55	口:(11.8) 高:4.2 底:(7.0)	約1/8 覆土	①細 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部切離技法は不明。口縁部と体部は一体化し、体部は僅かな丸みを持たせる。内面見込み部は緩やかな屈曲を見せる。轆轤整形後外面体部~底部は撫でを加える。器厚薄手。
第62図 7 坏	口:— 高:— 底:7.0	底部破片 覆土	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底部僅かに立ちあがる。内面見込み部は緩やか。底部器厚は厚手。
第62図 8 蓋 図版 55	口:(14.5) 高:2.6 摘:2.4	約1/5 床直上	①粗片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形摘貼付。天井部は低く平坦面を築く。裾部は緩やかな丸みを持ち、かえり端部は丸みを帯びる。摘は小型のボタン状で中心部が僅かに突出する。天井部は回転斲削り、摘は撫でによる貼付。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第62図 9 盤 図版 55	口： 20.0 高： 5.0 底： 15.0	約1/3 南東隅上・ 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	大型の高台付盤。右回転轆轤整形底部回転糸切後回転斲削り。高台貼付後周縁撫で。口縁部僅かに外反し体部は屈曲気味に開く。高台は大きく開きしっかりした作り。内外面とも比較的轆轤目が強く鋭い印象を得る。
第62図 10 甕 図版 55	口： 19.6 高： 28.5 底： 4.0	ほぼ完形 床直	①粗 片岩 白色粒 ②酸化焰 ③暗赤灰色 ④土師器	口縁部は外傾し頸部は彎曲を持って括れる。体部上半に膨らみを持たせ小径の底部に至る。口縁部横撫で、頸部は強い横撫でで体部と画す。体部は上半は横位斲削り、下半は縦位・斜位の斲削りを施す。内面は頸部以下横位斲撫でが看取される。全体に均整の取れた器形と作りである。
第62図 11 甕	口： - 高： - 底： 5.8	底部破片 覆土	①粗 石英 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	大きく開く底部形態。外面体部は斜位の斲削り、底面も斲削りが施される。内面は器壁の剥落著しく判然としない。器厚は厚手。
第62図 12 甕	口： - 高： - 底： -	体部破片 カマド	①粗 石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	紐作り叩き整形。外面は平行叩が密に施され、内面は青海波文が残る。やや厚手の器厚を呈す。
第62図 13 石斧 図版 64	長： 14.5 幅： 5.4 厚： 2.3	完形 覆土	①変玄武岩 ④319.0 g	彎曲するやや偏平な円礫を素材とし、右側縁に細かな調整が及ぶ。上端と下端に縦位方向の研磨痕があり、特に下端は刃部を作出する。縄文時代の所産とは考えられない。
第62図 14 薦編み石 図版 64	長： 14.2 幅： 4.4 厚： 2.1	一部欠損 北壁下	①黒色 片岩 ④163.92 g	やや偏平な棒状の円礫を素材とする。左側縁に微小な摩滅痕が認められる。
第62図 15 薦編み石 図版 64	長： 11.1 幅： 3.4 厚： 1.1	完形 床直	①雲母石英片岩 ④73.72 g	偏平で小型の棒状円礫を素材とする。側縁の摩滅痕は顕著ではない。
第62図 16 薦編み石 図版 64	長： 10.8 幅： 3.1 厚： 1.8	完形 床直	①雲母石英片岩 ④102.45 g	やや偏平の乳棒状円礫を素材とする。側縁に微小の摩滅痕が認められる。
第63図 17 磨石 図版 64	長： 15.4 幅： 11.2 厚： 2.7	完形 床直	①黒色片岩 ④792.9 g	偏平な円礫を素材とする。側縁に剥離が施されるが、僅かに摩滅しており、あるいは薦編み石としての用途も考えられる。表裏面に磨痕、上下両端に摩耗痕が認められる。

18号住居跡

第Ⅱ台地調査区中央やや東寄り、17号住東で重複して検出された。さらに本住居跡東には19号住居跡、南東部で31号住居跡が重なる。本住居跡と17号住居跡は主軸方位を東西に持ち、N-105°-E前後に傾きを取める共通性を持つことから、両住居跡に何等かの共通した規則性が求められよう。

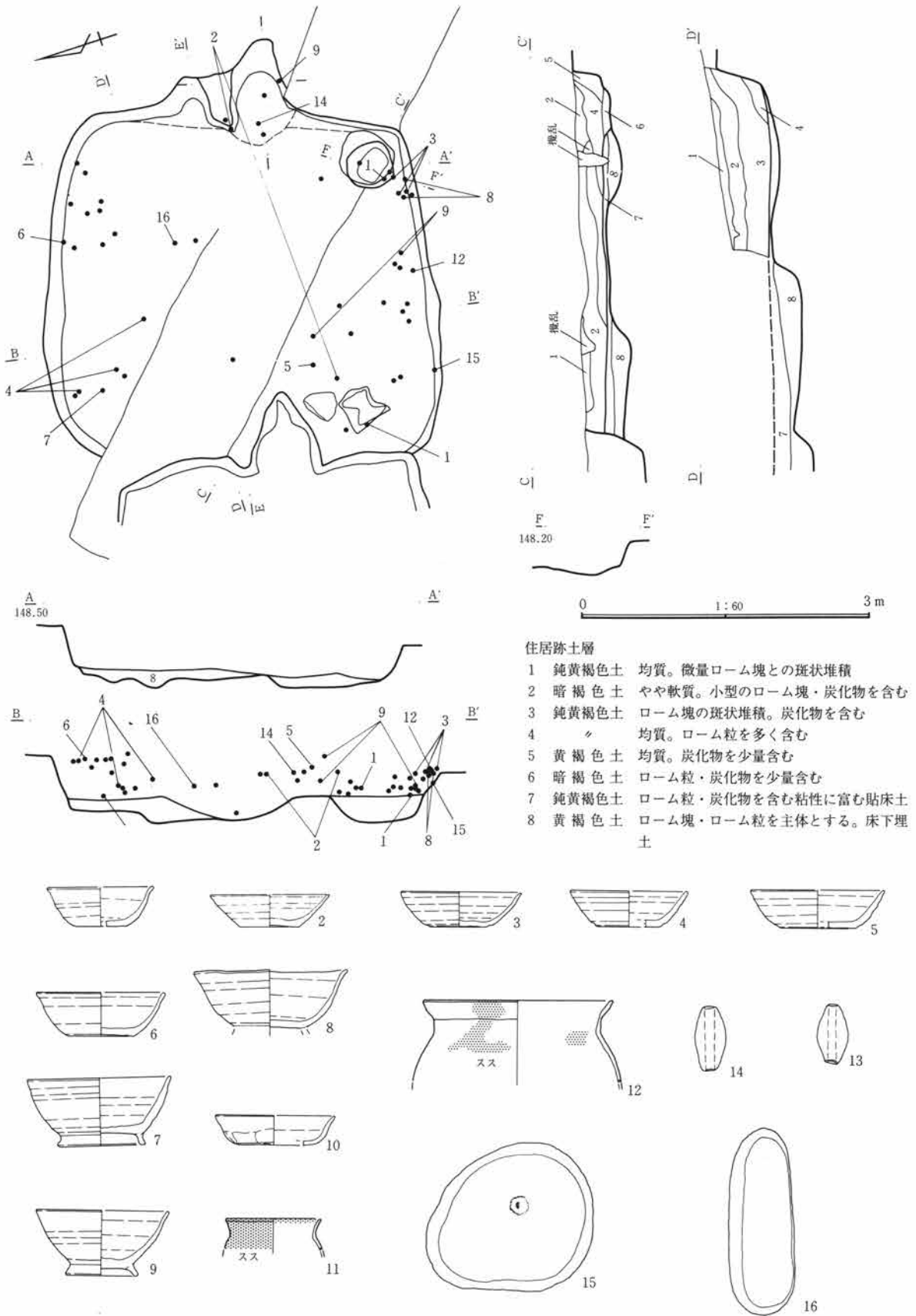
平面形は、約4.0×3.7mのやや大型の隅丸正方形を呈し、深さも約70cmを測り良好な遺存状態を見せるが、東南隅から北西隅にかけて試掘坑が走り、床面下にまで掘削されていた。壁は開き気味に立ち上がり、しっかりと掘り込まれていた。

床面はほぼ平坦面を築くようだ。鈍黄褐色粘質土を主体とした貼床がなされており、中央部を中心として各所に硬化面が認められたが、範囲としては捉えられなかった。

柱穴は、床面上では確認されなかった。床下調査において、数基のピットや壁に沿った小ピットが検出されたが、いずれも浅く主柱穴としては特定できない。無柱穴の住居跡として考えたい。

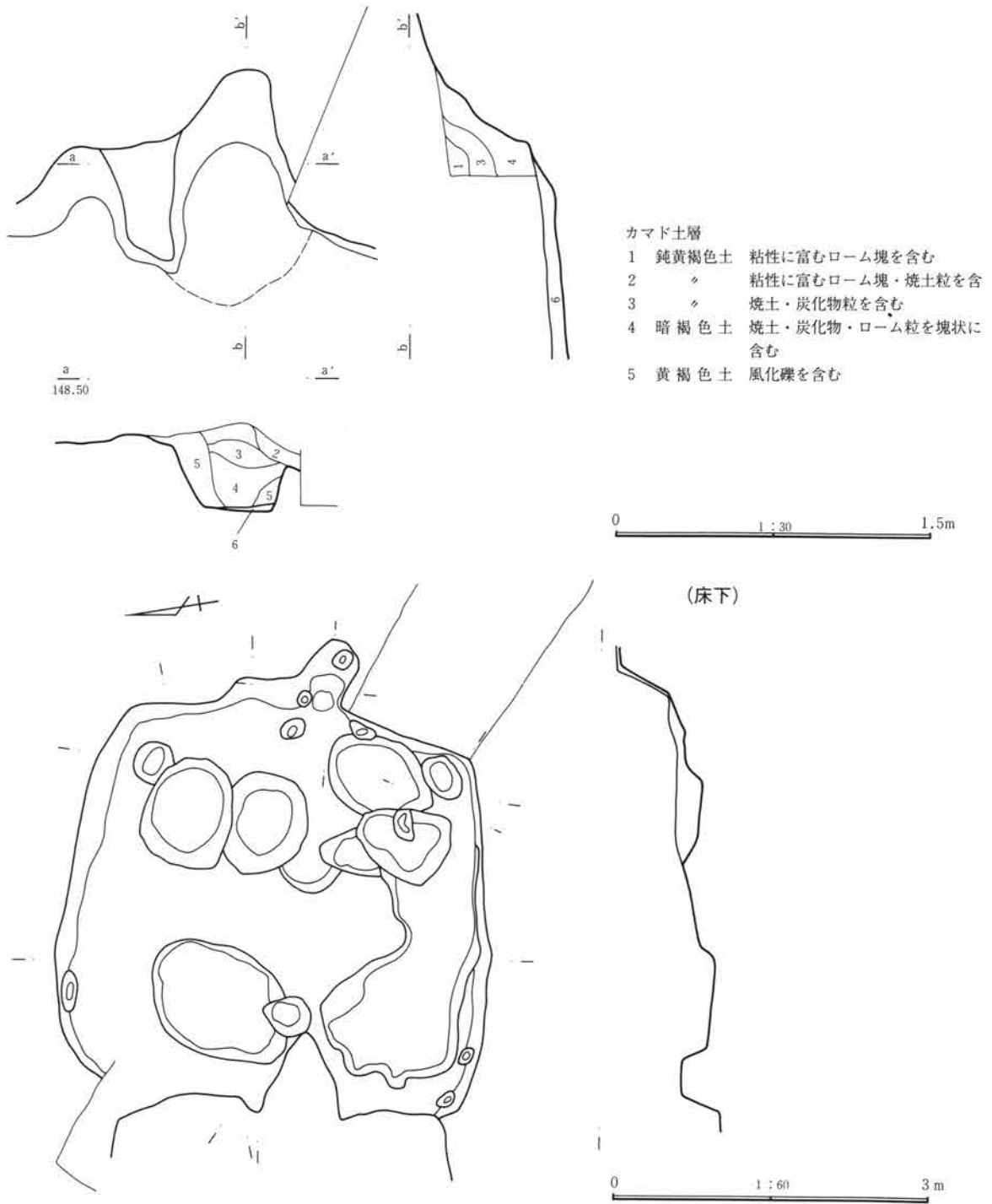
貯蔵穴は東南隅の土坑を充てたい。不整円形の平面形で浅く、不安定な掘り込みだが位置的には合致する貯蔵穴である。

床下遺構は、数基の床下土坑が検出された。いず



第64図 18号住居跡 (1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

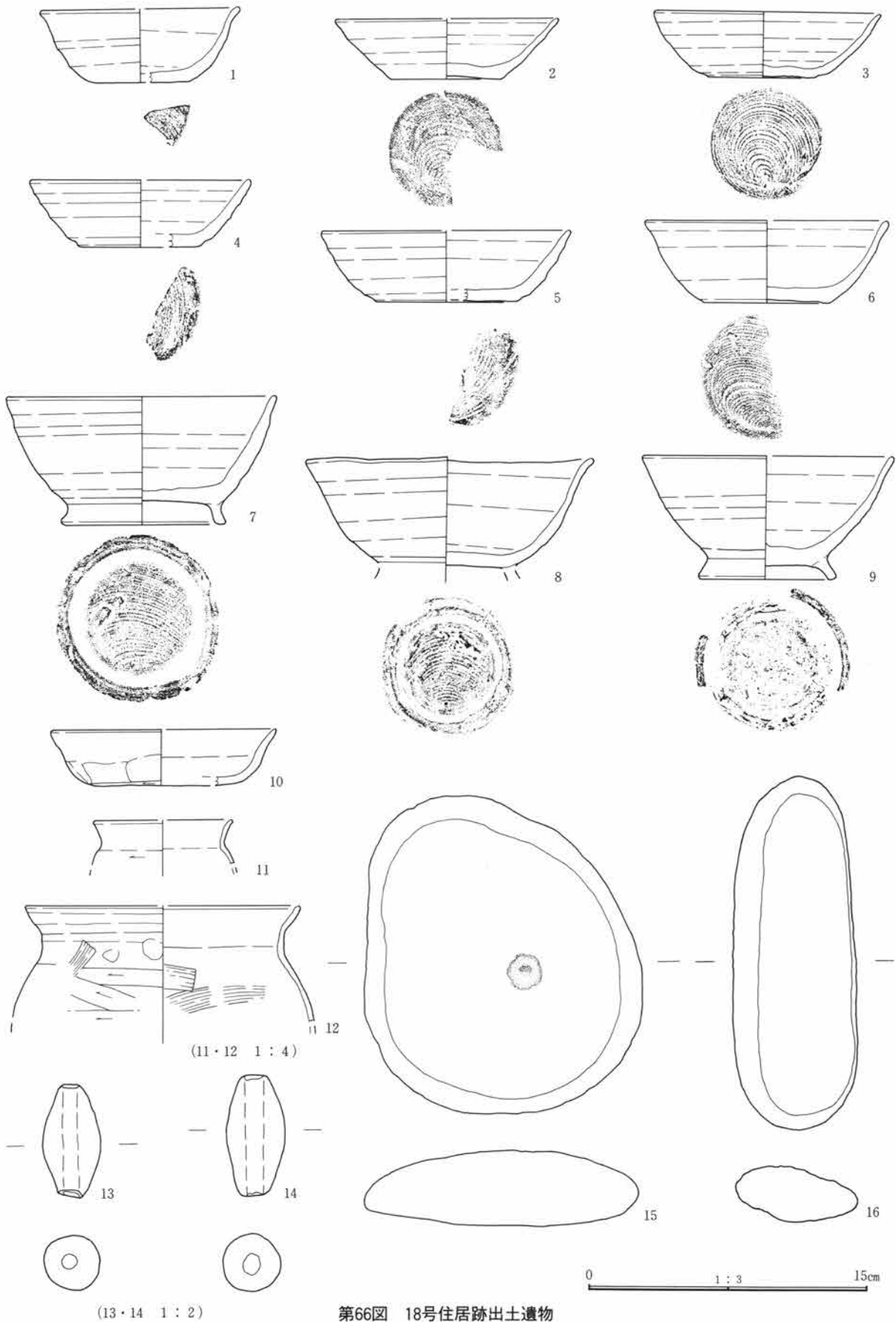


第65図 18号住居跡 (2)

第34表 18号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
86・87-27	隅丸正方形	398×370×68	N17°E	N106°E	貯蔵穴・床下土坑	坏7 甕3 甕2 土錘2 石2	17・19・ 31号住居

第2節 竪穴住居跡



第66図 18号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第35表 18号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第66図 器 種	1 坏	口：(10.8) 高：(4.0) 底：(5.0)	口縁～底部 破片 貯蔵穴上	①粗 石英 ②還元焰 ③暗赤褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部外反し体部丸みを帯びる。内面の見込み部は緩やか。口唇部は若干肥厚気味、体部器厚は薄手、底部はやや厚手。
第66図 器 種	2 坏	口：(12.2) 高：3.3 底：6.0	約1/4 カマド・ 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は直線状に開き底部は僅かに立つ。口縁部内面は僅かに肥厚し薄い内稜状となす。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。見込み部は緩やか。
第66図 器 種	3 坏 図版 55	口：12.3 高：3.5 底：5.8	ほぼ完形 南東隅上	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部は一体化し、体部は丸みを帯び、彎曲感を見せる。底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第66図 器 種	4 坏 図版 55	口：(12.0) 高：3.6 底：(6.2)	約1/3 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部は一体化し、体部下半に丸みを持たせ安定感ある器形を呈す。底部は僅かに立つ。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部下半に薄い撫でを加える。厚手。
第66図 器 種	5 坏	口：(13.6) 高：3.9 底：(7.5)	約1/4 覆土	①細 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部は一体化し、体部は下半に丸みを持たせ、底部は立ち上がる。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。器厚は厚手。
第66図 器 種	6 坏 図版 55	口：13.0 高：4.5 底：3.5	約1/3 覆土	①粗 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は外反し体部は丸みを持たせる。底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第66図 器 種	7 碗 図版 55	口：14.6 高：7.0 底：8.8	完形 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。身深の碗。口縁部下の轆轤目強く凹線状で体部と画す。体部は丸みを帯び高台は強く開く。しっかりした作り。内面見込み部は緩やかな彎曲を呈す。器厚は厚く量感がある。
第66図 器 種	8 碗 図版 55	口：15.8 高：— 底：—	ほぼ完形 高台部欠損 南東隅上	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部中位～下半に丸みを持たせる。高台は欠損するが開き気味に貼付される。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部下半に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第66図 器 種	9 碗 図版 55	口：(13.8) 高：6.7 底：7.4	約1/2 カマド	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は強く開き安定感ある器形を呈す。内面見込み部は緩やかに彎曲し内底径は小さい。器厚は薄手。
第66図 器 種	10 坏 図版 55	口：(12.3) 高：3.0 底：(7.0)	約1/2 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部内彎気味、体部上位は外彎気味で下半は丸みを持つ。底部は平底。口縁部は横撫で、体部は篋削り後撫で、削り方向は不祥。底面は不定方向の篋削りが施される。
第66図 器 種	11 小型甕 図版 55	口：(10.2) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 片岩 白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部に僅かな丸みを持ち口縁部は外傾する。頸部は強く屈曲し肩部に張りを持たせる。口縁部の横撫では強く、肩部と画す。肩部は横位篋削りを施す。内面は横撫で。薄手の器厚で均整の取れた作りである。
第66図 器 種	12 甕 図版 55	口：(19.8) 高：— 底：—	口縁～体部 破片 南壁上	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部に丸み。口縁部上位は内彎気味に開き下位は直立する。肩部は張りをを持たせる。口縁部上位は横撫で、上位と下位の境に横位篋撫でが及ぶ。下位は指頭圧痕残る。肩部は横位篋削り、内面は横位篋撫で。
第66図 器 種	13 土錘 図版 55	長：4.1 径：2.1 重：	完形 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	中位に膨らみを持たせ、両端を細く仕上げる。紡錘形。孔径6mmを測り棒状の芯材を中心に粘土を巻き付け、表面を丁寧な撫でによって仕上げる。掌上による製作か。両端は切離を伴わず丸みを帯びる。2個体とも大きさ・重量・孔径・胎土に共通性が窺われ、同時期・同一製作者の蓋然性は高い。
第66図 器 種	14 土錘 図版 55	長：4.4 径：2.1 重：	完形 カマド	①細 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第66図 15 磨石 図版 64	長： 15.2 幅： 17.3 厚： 4.1	完形 南壁	①変玄武岩 ④1,868.0g	偏平な円礫を素材とし表裏面とも磨痕が顕著である。ほぼ中央に凹みが認められるが、周縁が摩滅し機能は果たしていない。縄文時代凹み石の再利用か。
第66図 16 石 図版 64	長： 19.2 幅： 6.8 厚： 3.0	完形 覆土	①黒色片岩 ④629.2g	偏平な棒状の円礫を素材とする。やや大型。両側縁に微小の摩滅痕が認められる。

れも不整楕円形で、しっかりと掘り込まれていた。埋土もローム塊主体の黄褐色土が共通する。また、南側壁に沿って不整形の大型土坑が検出されたが、構築時の所産と思われる。

カマドは東壁ほぼ中央に設けられる。前述の試掘坑により南側の一部が逸失している。煙道部は壁外に突出し、強く立ち上がる。燃焼部には顕著な掘り込みを持たず、灰・炭化物が散布していた。袖は北袖が顕著に突出する。南側の袖部は、試掘坑により大半が逸失しているが、床面や下端の様相から、北側袖のような突出は見られないようだ。北側の袖基部はロームを作り出したものだが、先端部はローム塊を混入した鈍黄褐色土を突き固めた構築材で構成される。袖芯材としての自然石の出土を伴わず、粘質土を主体としてのカマド構築が窺われる。尚、カマド掘り方調査において、袖部分に小ピットが検出されたが、芯材の抜き取り穴とは捉え難く、構築時の所産と思われる。

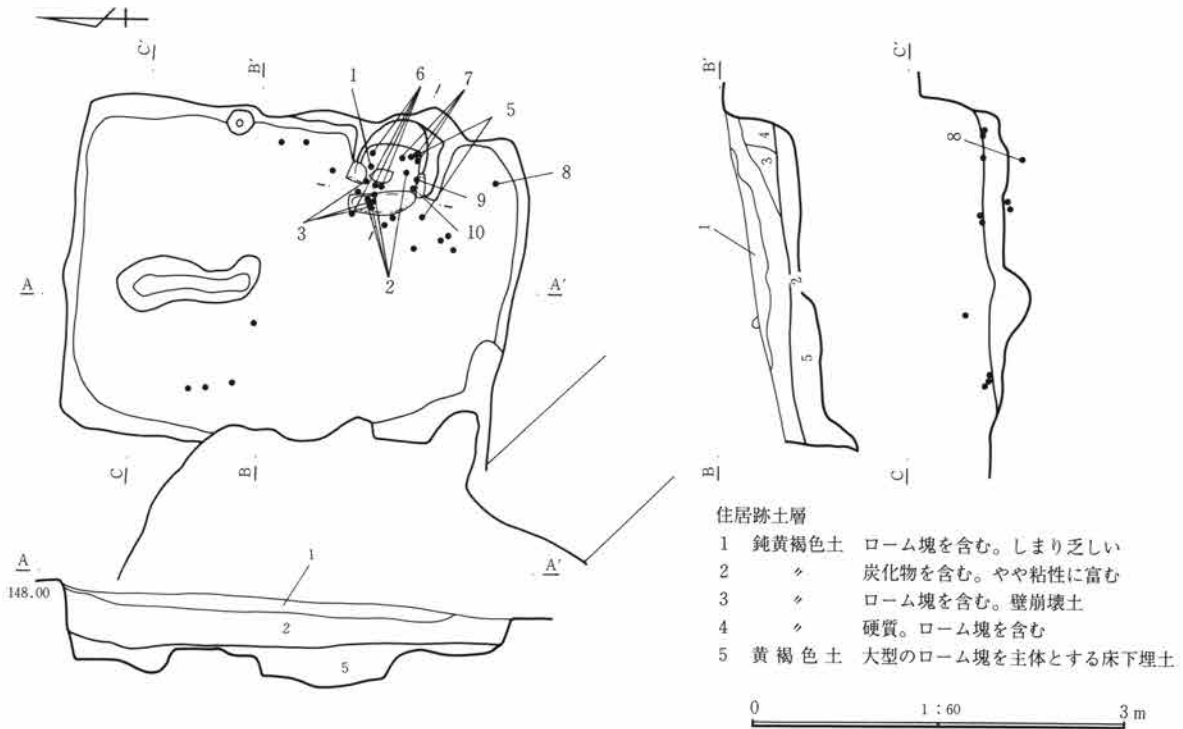
その他の施設では、性格が不明だが南西隅で検出した粘土塊が挙げられる。北側に大型の自然石を置くことから、何等かの作業痕跡が窺われるが、性格付けにまでは至っていない。

遺物は比較的多く出土し、16点を図示した。覆土上層から床直にかけて出土しており、主立った集中は見られない。ただし、若干ながら貯蔵穴周辺と南壁際に集中の偏りが見られる。須恵器坏 (1・3)、高台付碗 (8・9) 土師器甕 (12)、磨石 (15) が見られる。1 以外は比較的覆土上層の出土であり、あるいは南側からの流入・転入であろうか。北側には須恵器坏 (4・6)、高台付碗 (7) や石 (薦編

み石? 16) が見られるが、集中した出土ではなく、また床直出土のものは7のみである。カマド出土遺物は須恵器坏 (2)、高台付碗 (9)、土錘 (14) が見られる。構築材としての破片転用ではなく、流入と思われる。特に土錘は14号住でも、カマド内に出土の偏りが見られた。14号住の場合は、東壁に設けられた棚状遺構からの流入と捉えたが、本住居跡では棚状遺構は検出されておらず、同等の流入過程は類推できない。しかしながら、土錘の保有場所をカマド周辺に求める仮説は成り立つのではないだろうか。

以上のように、本住居跡出土遺物は覆土出土のものが多く、明確な時期特定はできない。しかしながら床直出土遺物 (1・7) を基軸に、覆土出土遺物ではあるものの完形個体の3・8やその他の土器を勘案して、9世紀前半～中頃に住居跡廃絶段階を求めたい。

さて、ここで問題となるのが、本住居跡と重複する17号住との新旧関係である。発掘調査で得られた土層図によると、17号住東壁及びカマドが本住居跡の西壁を切る重複状況が記され、本報告もその図に従って掲載した。しかしながら、出土遺物整理報告に至り、本住居跡出土遺物の様相は9世紀の所産であり、8世紀代の遺物を出土する17号住との差が明確になった。ここに、調査時に得られた所見とは逆の新旧関係を遺物所見から提示したい。掘削深度は17号住が深く、かつ17号住カマドの焼土等の散布、更に試掘坑の混在等が発掘調査の判断に誤認が生じたものと考えられる。



第67図 19号住居跡（1）

第36表 19号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
85・86-27	横長方形	364×264×38	N 0°E	N93°E	貯蔵穴・床下土坑	坏5 盤1 甕1 石3	18号住居 31号住居

19号住居跡

第Ⅱ台地調査区中央東寄りで見出された。西側から南西隅にかけて前述の18号住及び31号住居跡と重複する。

平面形は、約3.6×2.6mの横長方形で、主軸方位を南北にもつ。深さは約40cmを測り、壁はやや開き気味に直立する。

床面は西側に傾くが、平坦面は意識して築かれている。黄褐色土による貼床がなされるが、顕著な硬化面は認められず、全体に軟弱な床面といえよう。

柱穴は床面上では確定に至らず、床下調査で得られた数基のピットに可能性を求めたが、南壁際で得られた2基の小ピットと床面上東壁で確認した1小ピットが配置的な柱穴として考えた。しかしながら、無柱穴の住居跡としての位置付けも捨て難い。

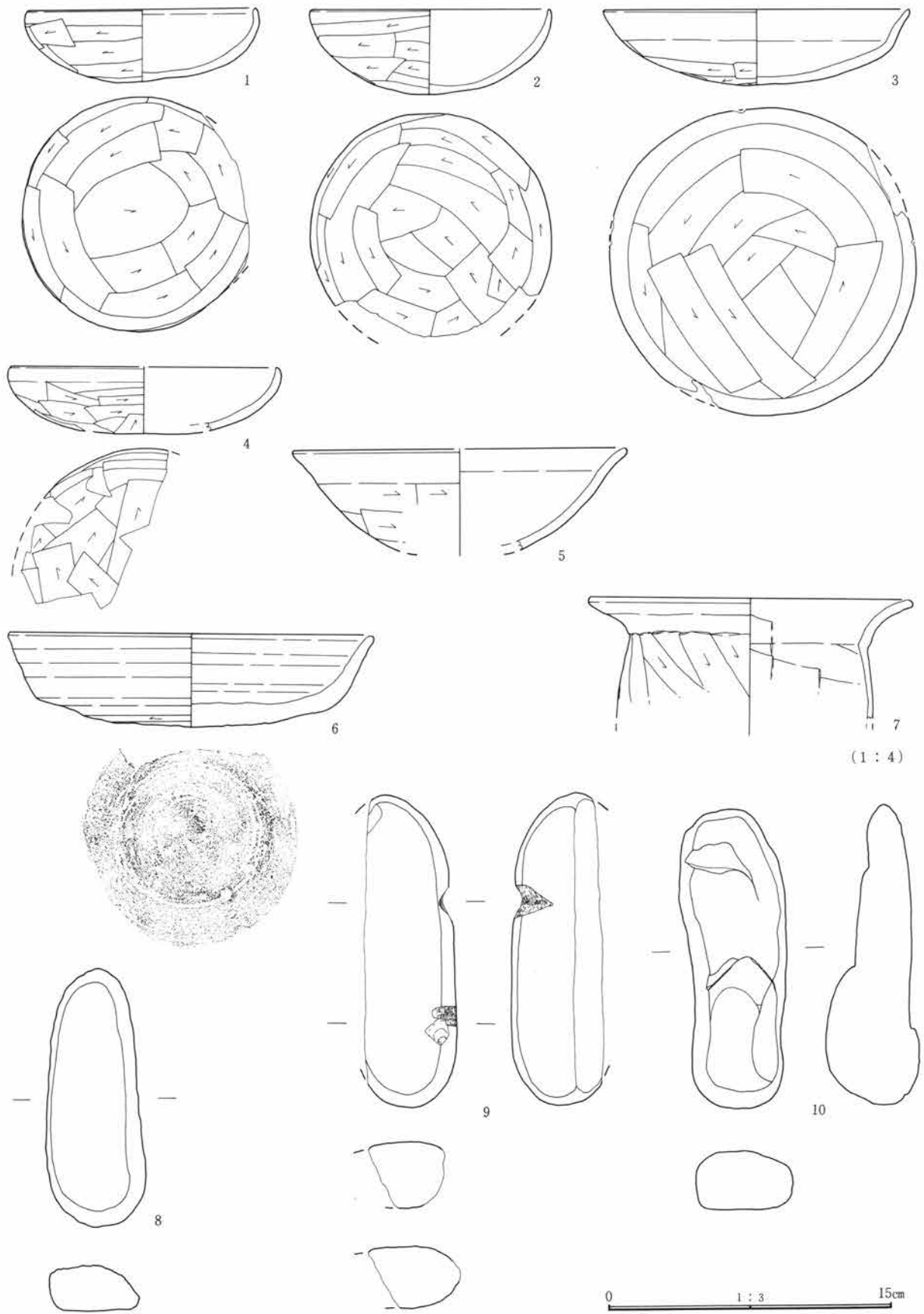
貯蔵穴も床面上では確認できなかった。床下調査で得られた南東隅やや西寄りの小土坑が深さ・規模とも貯蔵穴として捉えられよう。

その他の施設としては、中央部北寄りで不整形の溝状土坑が確認されたが、浅く埋土の特徴もなく、性格特定にまでは至らない。

床下遺構としては、中央部で見出された不整形楕円形の土坑を床下土坑とする。その他にも北東隅や北壁際の土坑、南東隅から西壁に伸びる溝状の落ち込みが見出されたが、構築時の所産と考える。

カマドは東壁の南寄りに設けられる。煙道部はさほど突出せず、強く段差を持って立ち上がる。燃焼部は馬蹄状を呈し、緩やかな凹みを持たせていた。袖は黄褐色粘質土による構築で両袖とも自然石を立て芯材あるいは補強材としていた。特筆すべきは、

第三章 検出された遺構と遺物



第69図 19号住居跡出土遺物

第37表 19号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第69図 坏 図版 56	口：12.3 高：3.9 底：—	ほぼ完形 カマド	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部は僅かに内彎し体部と一体化する。体部は丸みを帯びて丸底の底部に至る。口縁部横撫で後体部篋削りが施される。胎土は粉状で内外面とも摩滅する。
第69図 坏 図版 56	口：12.9 高：4.6 底：—	ほぼ完形 カマド	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部は僅かに内彎し口縁部は直立気味に丸みを帯びる体部と一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で後体部篋削りが施される。器面は滑らか。
第69図 坏 図版 56	口：16.3 高：4.0 底：—	ほぼ完形 カマド	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口径広く口縁部はやや広く緩やかに外反し丸底の底部に至る。口縁部は横撫でによって体部と画す。体部は篋削りが施される。外器面はやや摩滅気味。
第69図 坏 図版 56	口：(14.4) 高：— 底：—	約1/4 覆土	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は僅かに内彎し体部と一体化する。体部は丸みを帯びて丸底の底部にいたるが、器厚低く浅身となる。口縁部は比較的強い横撫で、体部は篋削りが施されるが、上位にはノッキングの痕跡が残る。器面滑らか。
第69図 坏 図版 56	口：(17.8) 高：— 底：—	破片 カマド	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は強く開く、外反気味で強い横撫でで体部と画される。体部は丸みを帯び、横位篋削りが施される。胎土は粉状で内外器面摩滅する。
第69図 盤 図版 56	口：19.4 高：5.0 底：—	約4/5 高台部欠損 カマド	①粗 石英 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	左回転轆轤整形。底部回転篋削り。口縁部は外傾し体部と一体化する。体部下端で屈曲し緩やかな外反部を経て、平底ながら不安定な底部に至る。内面の見込み部は緩やかで、器厚は著しく厚手。
第69図 甕 図版 56	口：23.0 高：— 底：—	口縁部 カマド	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部丸みを帯び口縁部は強く外反する。頸部は緩やかな屈曲を呈し、体部は若干の膨らみを持って長胴化する。口縁部は横撫で、体部外面は縦位篋削りを施す。頸部には篋当て目残る。内面体部は横位篋撫で。
第69図 薦編み石 図版 65	長：13.8 幅：5.3 厚：2.4	完形 南東隅下	①雲母石英片岩 ④282.6g	やや偏平で棒状の円礫を素材とする。両側縁に微小な摩滅痕が認められる。
第69図 薦編み石 図版 65	長：16.6 幅：5.0 厚：3.6	約3/4 カマド	①黒色片岩 ④447.8g	乳棒状の円礫を素材とする。右側縁上位に大きく判りが入り摩滅し、下位にも溝状の摩滅痕が認められる。半欠するが欠損後も使用したと思われる、微小の摩滅痕が看取される
第69図 敲石 図版 65	長：16.0 幅：5.6 厚：5.1	完形 カマド	①変玄武岩 ④621.2g	不定形の円礫を素材とする。下端に僅かな敲打痕が見られるが、表裏面には滑沢面もあり、磨石としての用途も考えられる。

前庭部で両袖からずれ落ちた形跡を持って出土した天井部の石である。両袖に懸架されていたものと思われる、北側に傾いたのみの状態で確認できた。その他の構築材である焼土化した粘土は、この天井石の崩壊土としても検出されており、本住居跡のカマドの在り方は、先に報告した4号住カマドと共に、該期のカマド構造を考える際には好資料を提供することになる。

遺物の出土は比較的少なく、10点を図示したのみ

である。分布状態は、圧倒的にカマド内及び周辺が多く、図示した遺物の殆どがカマド出土である。他の地点は散漫な出土状態であり、また、覆土の出土は少量で床直・床直上のものが目立った。

図示し得た遺物のうち、8を除き残り9点がカマド出土である。カマドへの集中的な出土分布は、煮沸具の一括残存が最も顕著に現れる現象だが、本住居跡カマドには日常供膳具である坏類の集中が目立ち、煮沸形態を具現化したものではない。また、構

第三章 検出された遺構と遺物

築材としての破片転用も本遺跡では多く見られる出土状態であるが、本住居跡カマド出土土器のうち、7の土師器甕に粘土の付着が多く、断面にまで及んでいたため、破片転用での出土として位置付けたい。また、薦編み石(9)と敲石(10)は出土位置から、袖・カマド壁体補強材への利用が想起される。

つまり、煮沸形態を残した出土状態ではなく、出土遺物すべてが構築材では無いことから、供膳具である土師器坏(1~5)と須恵器盤(6)はカマドへの一括廃棄と捉えられよう。カマド上層出土の破片と下層出土の破片が接合することから、この一連の廃棄の時期が住居跡廃絶時期と重なる要素も考えておきたい。遺物の時期は、概ね7世紀末~8世紀初頭段階と捉え得る。

20号住居跡

第II台地調査区東側で検出された。密集する住居跡群の最も東端に位置する。周辺の地形は北西の傾斜が主だが、南西側の傾斜も強く、そのため本住居跡南西隅の壁は流失していた。近接する遺構は19号住が西約2mに接するが、住居跡の重複はしておらず単独の検出となった。ただ、土坑の重複が東南隅で確認され、本住居跡を切る新旧関係で54号土坑が検出されている。

尚、本住居跡は、床面に鍛冶炉を2基設ける小鍛冶施設を持つ住居跡である。

平面形は、約4.0×3.1mの横長方形を呈し、主軸方位を南北に設ける。深さは約40cmだが、前述のように南西壁周辺の遺存は悪い。壁の遺存の良い北壁・東壁は、直立気味に立ち上がり、しっかりと掘り込まれていた。

床面は、極僅かに南西への傾斜が見られるが、ほぼ平坦面が意識されて築かれる。黄褐色粘質土を基調にした貼床がなされており、中央部からカマドにかけて広く硬化面が確認された。

床面上に柱穴は確認されず、床下調査において得られた小ピットも確証的ではないことから、無柱穴住居跡として位置付けたい。

貯蔵穴は南東隅の土坑を充てる。径50cm程度の不整形円形を平面形とし、床面からの深さは20cmに満たない。埋土は暗褐色土を基調としている。

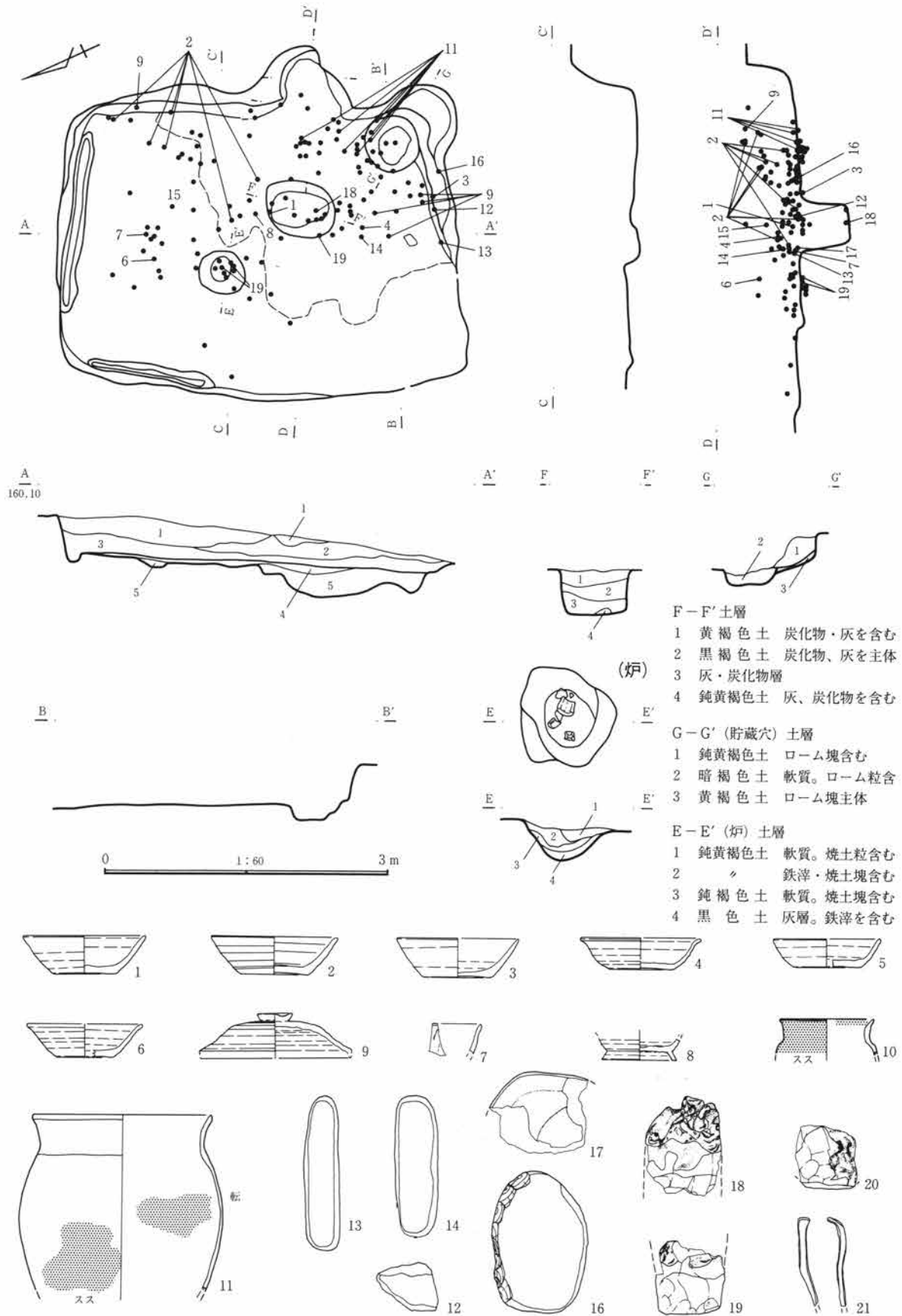
床下遺構は、中央部と周辺に不整形の土坑が群在する。床下土坑として位置付ける。

カマドは、東壁中央やや南寄りに設けられる。煙道部は突出し強く立ち上がる。燃烧部は馬蹄状で、掘り込みは持たない。袖は顕著ではないが、北側下端に自然石の出土を見ることから、補強がなされていたものと考えられる。

さて、本住居跡の床面には2基の炉が検出された。E-E'を1号炉、F-F'を2号炉として説明を加える。1号炉は床面中央北西寄りに設けられる。径約50cmの不整形円形を呈し、底面形態は丸底である。羽口・焼土塊・鉄滓が認められ、最下層に灰が堆積していた。2号炉は床面中央やや東寄りに設けられていた。不整形円形の平面形で箱形の断面形を呈す1号炉と同様に羽口・焼土塊・鉄滓が出土しており、最下層に灰が認められた。両炉とも同様な出土様相を呈し、大きな差は認められず、同時操業とも捉えられる。また、更にカマド前庭部においても鉄滓の出土が集中し、カマド本体も小鍛冶工房の一部として位置付けられた。

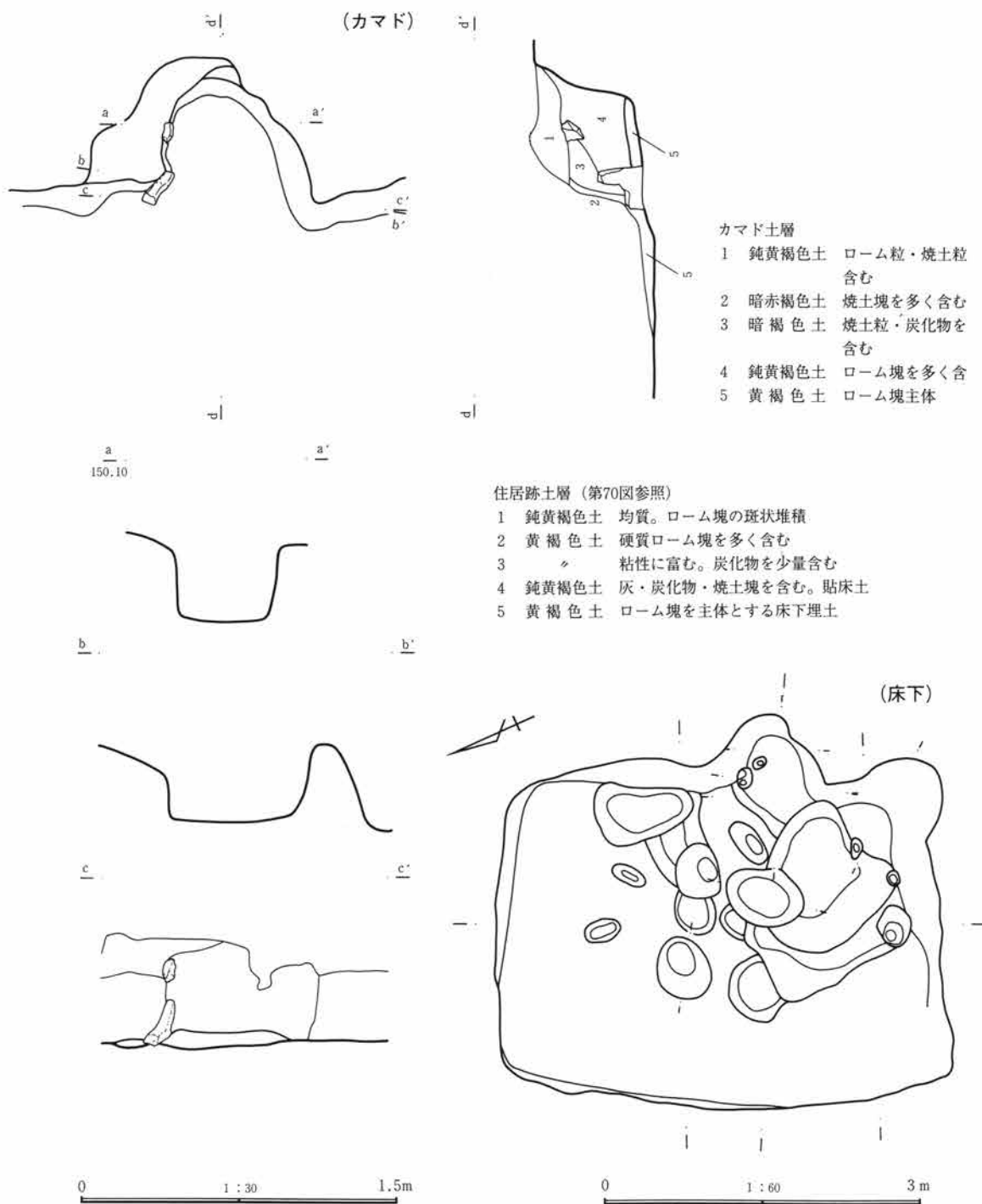
遺物は、比較的多く21点を図示した。中央部からカマドにかけて集中が見られたが、1箇所への偏りは顕著ではない。中央部2号炉および周辺は須恵器坏(1・4)、高台付碗底部(8)さらに羽口(18・19)が見られた。1号炉からは羽口(19)の一方が出土している。南壁周辺からは須恵器坏(3)・蓋(9)、凝灰岩製の砥石(12)、薦編み石(13・14)さらに台石(17)が出土している。カマド前庭部から貯蔵穴にかけては土師器甕(11)がまとも、中央部から北東部にかけて坏(2)が見られた。

出土遺物の時期は9世紀前半から中頃と見られ、先に述べた15号住に後続するものと思われる。さらに覆土出土だが、鉄釘(21)が見られ、製品類の鍛練も行っていた可能性が高い。



第70図 20号住居跡 (1)

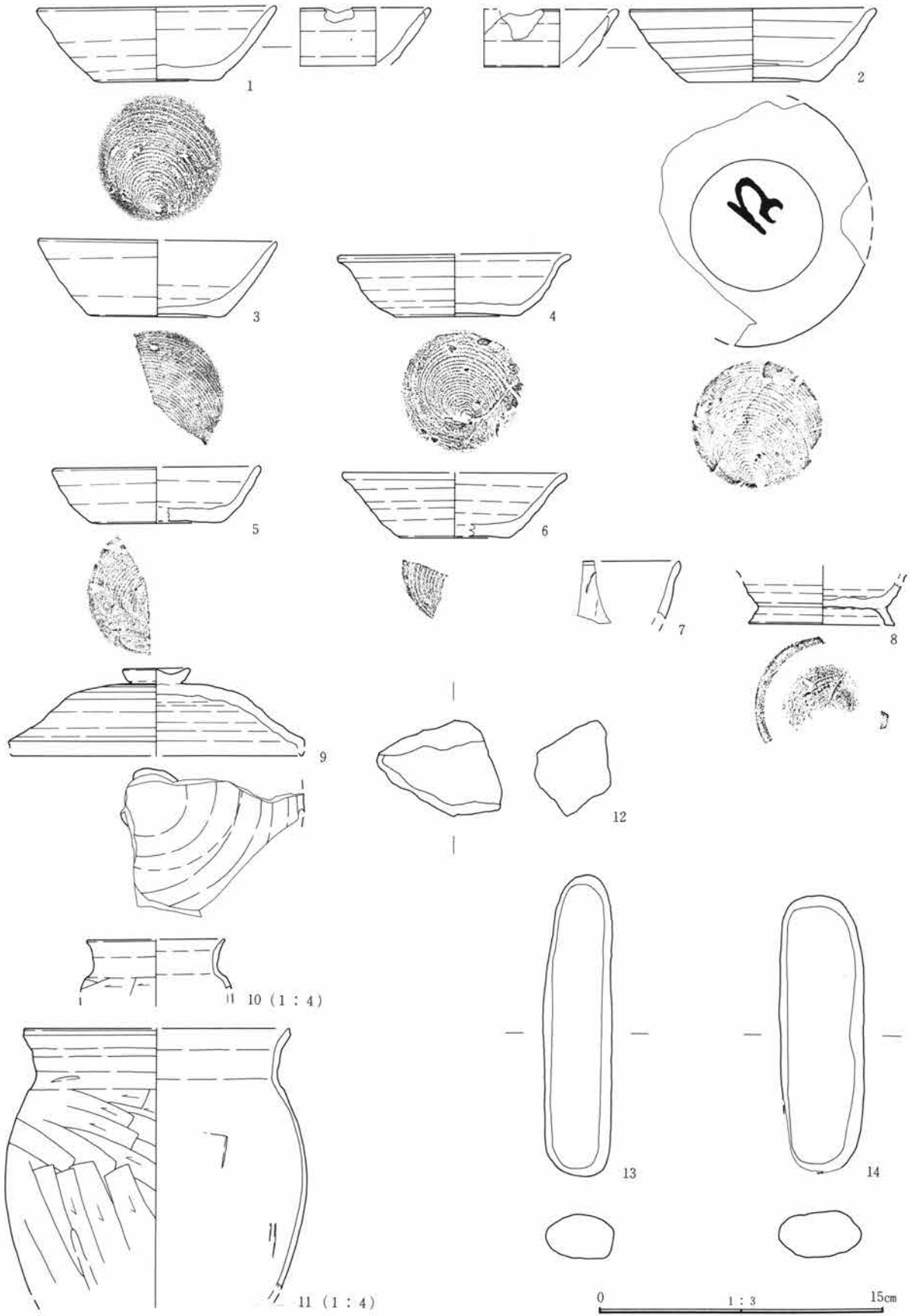
第三章 検出された遺構と遺物



第71図 20号住居跡 (2)

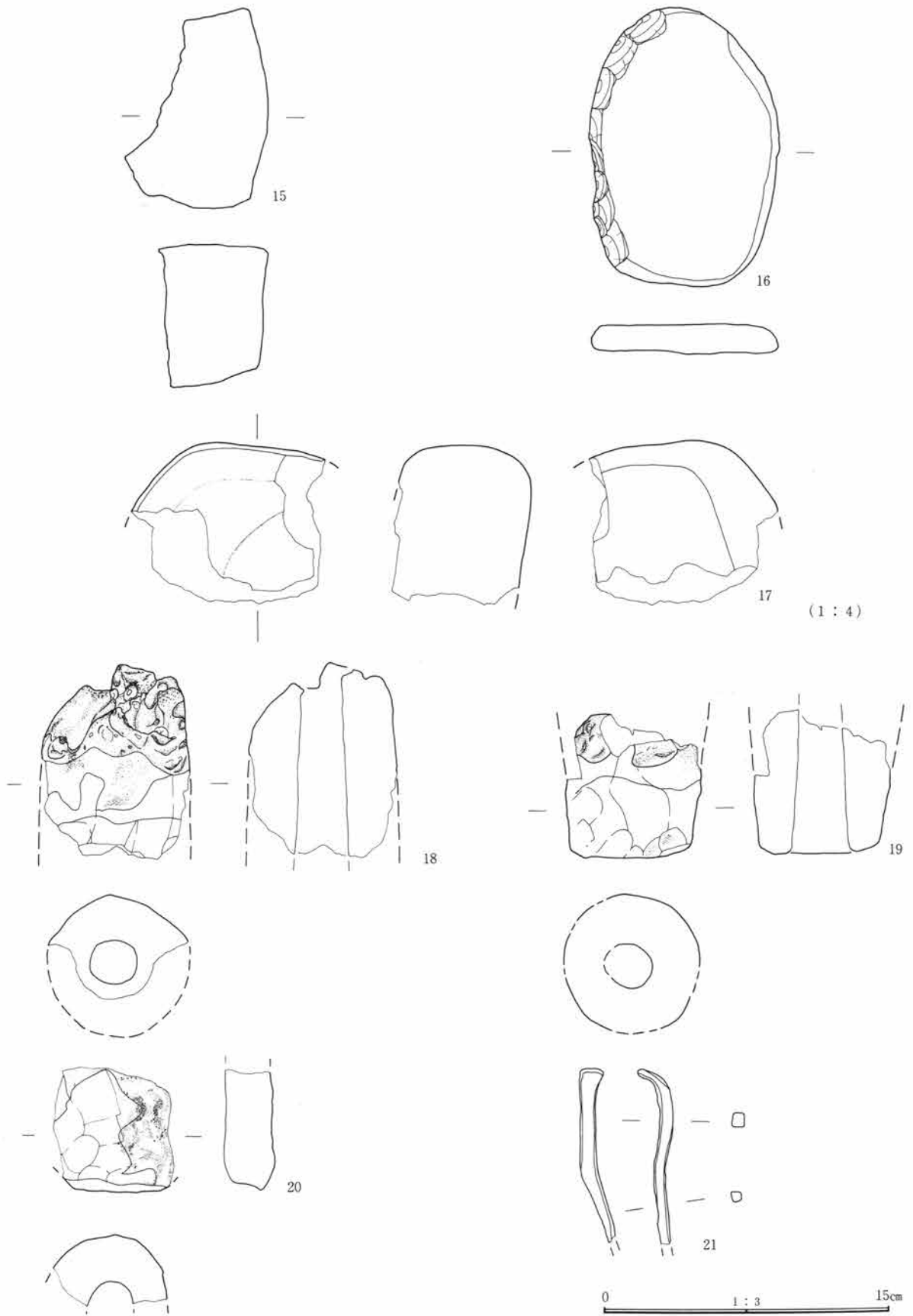
第38表 20号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
84・85-27・28	横長方形	418×314×40	N23°E	N113°E	貯蔵穴・床下土坑	坏6 埴2 蓋1 壺1 甕2 石6 羽口3 釘1	54号土坑



第72図 20号住居跡出土遺物 (1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第73図 20号住居跡出土遺物(2)

第2節 竪穴住居跡

第39表 20号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第72図 1 坏 図版 56	口：12.7 高：4.0 底：6.6	完形 床直	①細 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化する。体部はほぼ直線状に開き底部は僅かに立ち上がる。内面の見込み部は緩やか。器厚は厚手。口唇部の一部を剥離し、凹部を作出する。
第72図 2 坏 図版 56	口：(13.0) 高：4.0 底：7.0	約2/3 覆土	①細 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は僅かな丸みを帯びて直線状に開く。体部外面轆轤目強い。内面見込み部は緩やか。厚手。底部に墨書、判読不能。口唇部一部剥離凹部作出。
第72図 3 坏 図版 56	口：(12.6) 高：4.0 底：(7.0)	約1/3 南壁下	①細 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口唇部は尖り気味で、口縁部と体部一体化し、体部は僅かな丸みを帯びて直線状に開く。底部は若干上げ底。内面見込み部は緩やか。器厚は体部下半が厚手。
第72図 4 坏 図版 56	口：(12.2) 高：3.3 底：6.6	約1/4 覆土	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は外反し体部は中位に丸みを持たせる。底部は僅かに立ち上がり上げ底気味である。内面見込み部は緩やかに彎曲する。器厚は薄手。
第72図 5 坏 図版 56	口：(11.0) 高：3.0 底：6.8	約1/2 覆土	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部は一体化するが、体部は僅かな丸みを持たせる。底部は極僅かに立ちあがる。内面見込み部は緩やか。器厚はやや厚手で底部に顕著である。
第72図 6 坏 図版 56	口：(12.0) 高：3.5 底：5.9	約1/8 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰黒色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は僅かな外反し、体部はほぼ直線状に開く。底部は極僅かに立つ。内面見込み部は緩やか。外面の轆轤目比較的強く、器厚も薄手で端正な作り。
第72図 7 碗	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①細 緻密 ②還元焰 ③オリーブ 灰色 ④青磁器	口縁部僅かに内彎し体部上半に膨らみを持たせる。施釉は厚く内外面に掛かる。小破片のため判然としないが花卉文様が看取される。
第72図 8 碗	口：— 高：— 底：(6.8)	底部破片 床直	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部下半に円みを持たせ、高台は強く開く。内面見込み部は緩やかに彎曲し、器厚は薄手。特に高台器厚に顕著である。
第72図 9 蓋 図版 56	口：(15.8) 高：4.7 摘：3.6	約1/4 東壁上	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	かえり端部欠損。右回転轆轤整形摘貼付。天井部は高く丸みを帯び、裾部は反り気味で短い。かえり部は僅かに外傾する。摘はボタン状で中央部は突出。天井部は斲削り後薄い撫で。裾部内外面重ね焼きの黒斑あり。
第72図 10 小型甕	口：(9.8) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 石英 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部鋭く尖る。口縁部は外傾し下半は彎曲する。肩部が張り膨らみを持たせる。口縁部は強い横撫でで体部境を画す。体部は斲削り、肩部は横位に施される。内面は丁寧な撫で。外器面やや摩滅。
第72図 11 甕 図版 56	口：18.8 高：— 底：—	口縁部破片 カマド前庭	①粗 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部僅かに内傾、口縁部は直立気味に外傾し下半は彎曲する。体部上半～中位に膨らみを持たせる。外面口縁部及び体部境に強い横撫で、体部は上半斜位・横位斲削り、下半縦位斲削り。内面体部は横位撫で。
第72図 12 砥石 図版 65	長：5.1 幅：6.7 厚：4.1	破片 南壁下	①デイサイト質凝灰岩 ④62.90g	表面に僅かな擦痕が認められる。
第72図 13 鷹編み石 図版 65	長：17.0 幅：3.8 厚：2.4	完形 南壁下	①黒色片岩 ④241.0g	乳棒状の円礫を素材とする。両側縁に微小な摩滅痕が看取されるが顕著ではない。
第72図 14 鷹編み石 図版 65	長：14.7 幅：4.6 厚：2.6	一部欠損 覆土	①黒色片岩 ④260.8g	やや扁平な棒状の円礫を素材とし、両側縁に狭小ながら摩滅痕が看取される。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第73図 15 焼石 図版 65	長： 10.5 幅： 7.6 厚： 7.5	破片 覆土	①粗粒安山岩 ④684.8 g	礫面に加熱痕がある破砕礫。
第73図 16 磨石 図版 65	長： 14.7 幅： 10.1 厚： 1.7	完形 南壁下	①黒色片岩 ④411.0 g	偏平な円礫を素材とし左側縁に剝離が及ぶ。表面には素材長軸方向に磨痕が看取され、摩滅痕も見られる。摩滅痕は裏面・右側縁にも認められる。
第73図 17 台石 図版 65	長： 11.4 幅： 12.8 厚： 9.8	約1/4 炉内	①粗粒安山岩 ④2,220.0 g	破砕礫。表面縁辺に加工が及び石皿状となる。中央には微小の摩滅痕が見られ、作業台等の用途が想起される。縄文時代石皿とは趣を異にし、転用・再利用とは思われない。
第73図 18 羽口 図版 56	長： 10.2 径： 7.8	約1/2 炉内	①粗 ②酸化焙 ③ ④土製品	鞘羽口。棒付による貫孔。外面は撫でが施され面取り状に角張る。先端部に多量の溶解物が付着する。
第73図 19 羽口 図版 56	長： 7.6 径： 7.2	約1/4 炉内	①粗 ②酸化焙 ③ ④土製品	鞘羽口。おそらく基部。棒付による貫孔だが撫でにより広く開口する。外面は指撫でが施される。溶解物は中央部にかけて付着する。
第73図 20 羽口 図版 56	長： 6.6 径： 6.4	破片 炉内	①粗 ②酸化焙 ③ ④土製品	鞘羽口。おそらく基部。棒付による貫孔だが撫でによりやや広く開口する。外面整形は撫で。溶解物は薄く付着する。
第73図 21 鉄製品釘 図版 68	長： 9.2 頭部径：1.3	先端部欠損 覆土 重： 13.35		大型の鉄釘。足端部欠損。頭部の造作が大きく鈍角に曲げられている。断面方形の身部は彎曲する。

21号住居跡

第Ⅱ台地調査区の北東部に占地し、15号住が西約4 mに近接するが、重複する住居跡は無く単独の検出となった。土坑等の重複も無いが、近～現代のピットは見られ、本住居跡の床面南側の極一部が攪乱されていた。周辺の地形は北西への傾斜が緩やかで、壁の流失等は見られなかったが、木根が比較的多く残っており、北西隅の壁は検出にやや戸惑った経緯がある。

各壁に僅かな乱れがあるものの、比較的整然とした平面形を見せる。規模は約3.4×2.8mで、主軸方位を南北に持った隅丸横長方形を呈す。深さも、約50cmを測り良好な遺存を誇る。壁は大きな乱れは無く、やや開き気味に立ち上がるしっかりした掘り込みで形成される。

床面は平坦面を築き、黄褐色土による貼床がなされていた。硬化面は中央部よりカマド周辺にかけて

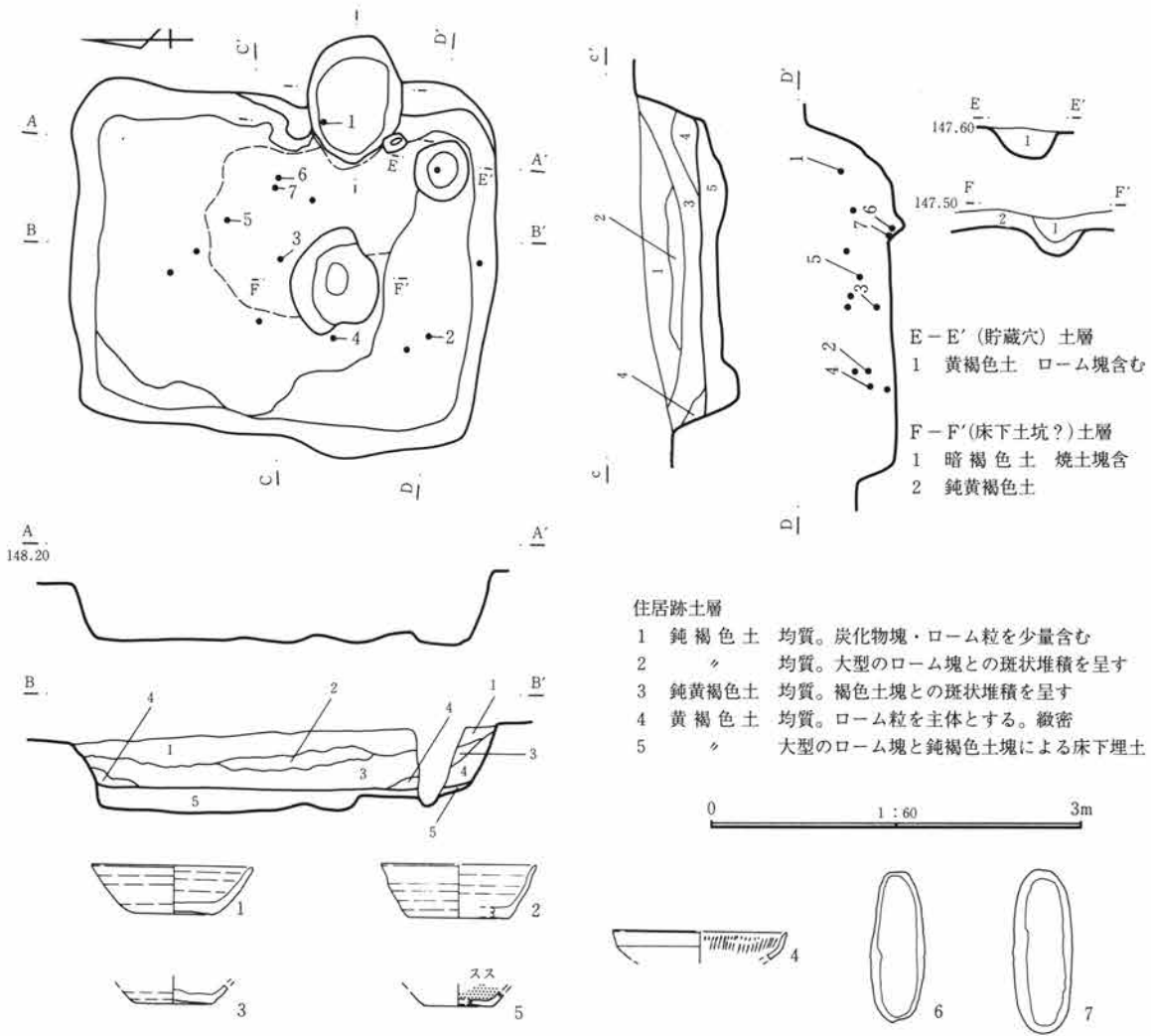
やや狭い範囲で確認された。

柱穴は床面上では検出されず、床下調査でも該当するピットが見られなかったことから、無柱穴の住居跡と考えた。

貯蔵穴は東南隅に設けられる小型の土坑を充てる。ローム塊含みの黄褐色土を基調とした埋土で、特に特徴的な様相は見せない。

その他の施設としては、床面中央で検出した不整形の土坑が挙げられる。上面に焼土塊が散布するため、15号住・21号住と同等の鍛冶炉としての位置付けも考えられたが、鉄滓・羽口の出土も無く、積極的な根拠を持たない。また、ロクロピット等の形態とは差があり、貼床土が僅かに乗ることから、床下土坑の可能性を高く持たない。

床下遺構としては、前段で述べた焼土塊を含む土坑以外に、小ピット・不整形の土坑が検出された。構築時の所産であろうか。



第74図 21号住居跡(1)

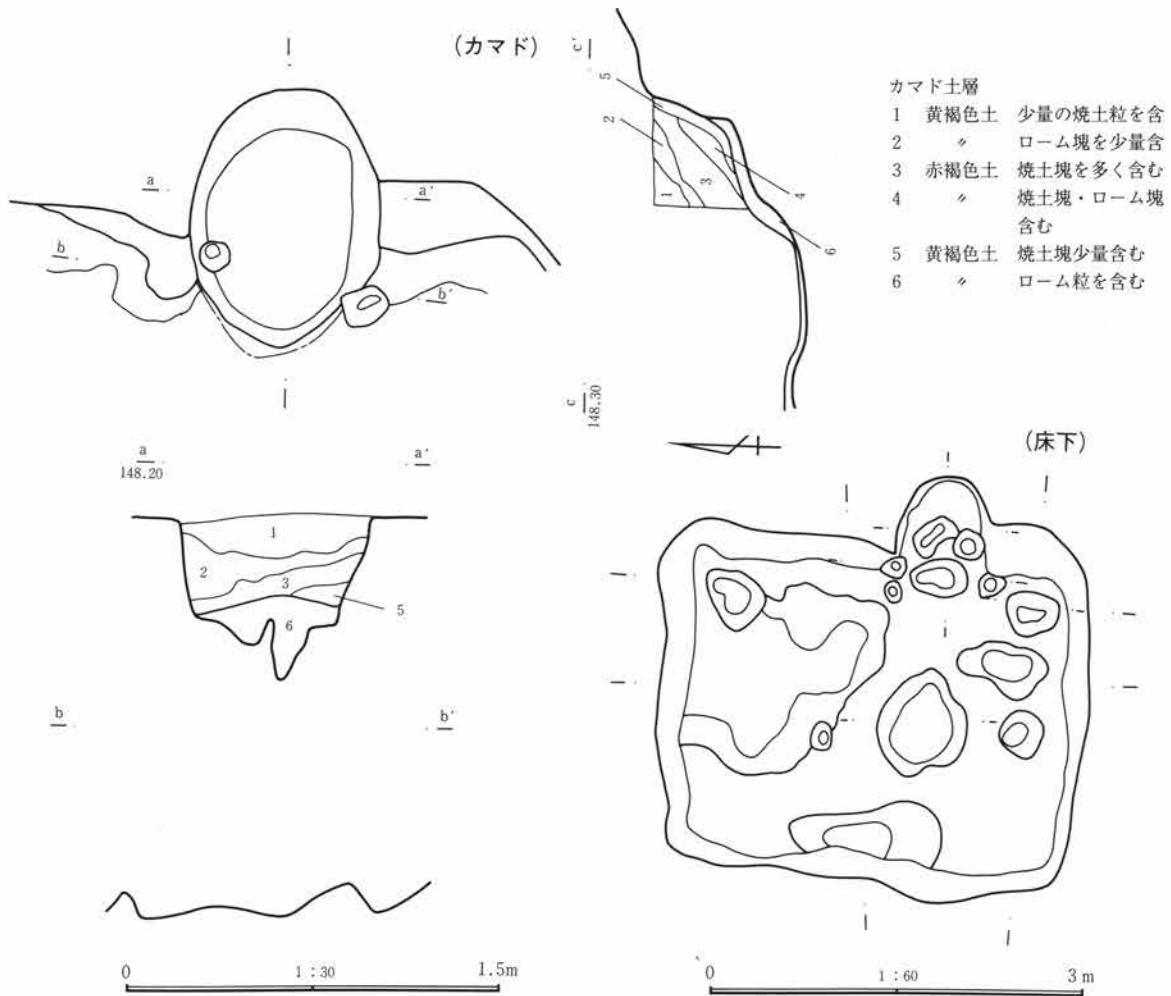
第40表 21号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
85-24	隅丸横長方形	346×278×46	N2°E	N94°E	貯藏穴・床下土坑?	坏4 甕1 石2	

カマドは東壁の南寄りに設けられる。楕円状の掘り込みを持って、煙道部は強く立ち上がる。燃烧部は、浅く凹む土坑状となり、焼土塊が多量に堆積していた。焼土粒・焼土塊の散布は狭く、燃烧部周辺で止どまっていた。袖は顕著に突出していないが、両袖と壁の接点部は僅かに内彎する傾向が見られ、下端も僅かな突出を見せるため、袖構築材の存在は確定的である。また、袖部下の床下調査においては、小ピットが検出されており、袖芯材の抜き取り

穴として位置付けられよう。おそらく、自然石や土器破片転用の補強材が設けられていたものと思われる。カマド埋土の様相も焼土塊・ローム塊を主体としており、構築材の崩壊が顕著に具体化する。さらに袖芯材の抜き取りが行われた要素から、カマド破壊行為が住居廃絶時に伴った可能性を考えておきたい。

遺物の出土点数も少なく、僅かに6点を図示したのみである。廃絶時の用具の持ち去りであろうか、



第75図 21号住居跡(2)

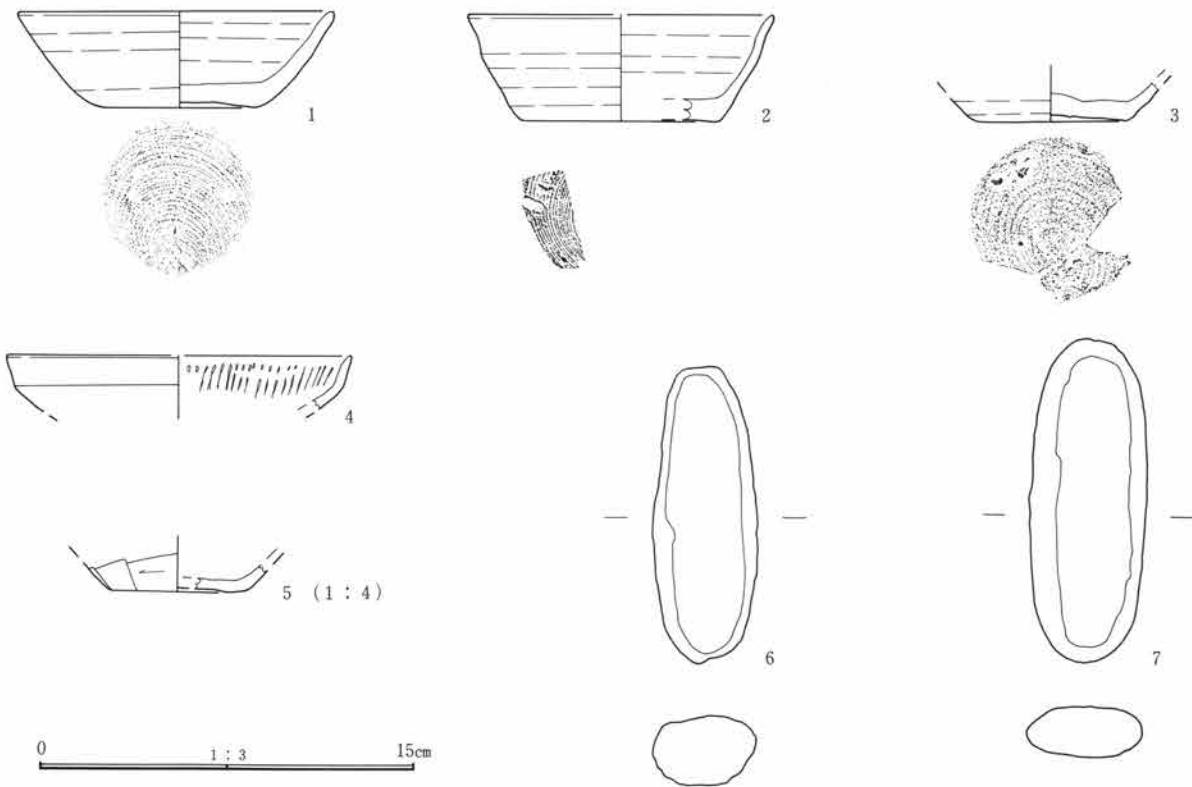
完形の個体は1点のみで、他は破片出土である。

遺物の分布は中央部分に比較的集中が見られるが、土器の床直出土は見られず、覆土上層～下層より出土している。故に、本住居跡出土遺物は居住に伴う所産とは確定し難く、廃絶後の流入が主体を占めるものと考えられる。

1の須恵器坏にしても、完形ながらカマド埋土上層の出土であり、カマド破壊時あるいは破壊後の流入と考えられる。2～5は中央部及び南壁にかけて覆土より出土した。小破片であり接合関係も動きが見られず、有機的な存在とは思われない。6・7の薦編み石は床直出土である。カマド前庭部の北西で2個が隣接して出土した。カマド際の出土ではあるが構築材とは捉えられず、薦編み石として位置付け

た。薦編み石はこの他にも、南側壁際で1点が床直上で出土しており、3点の薦編み石のみが居住にかかわるものと考えられよう。

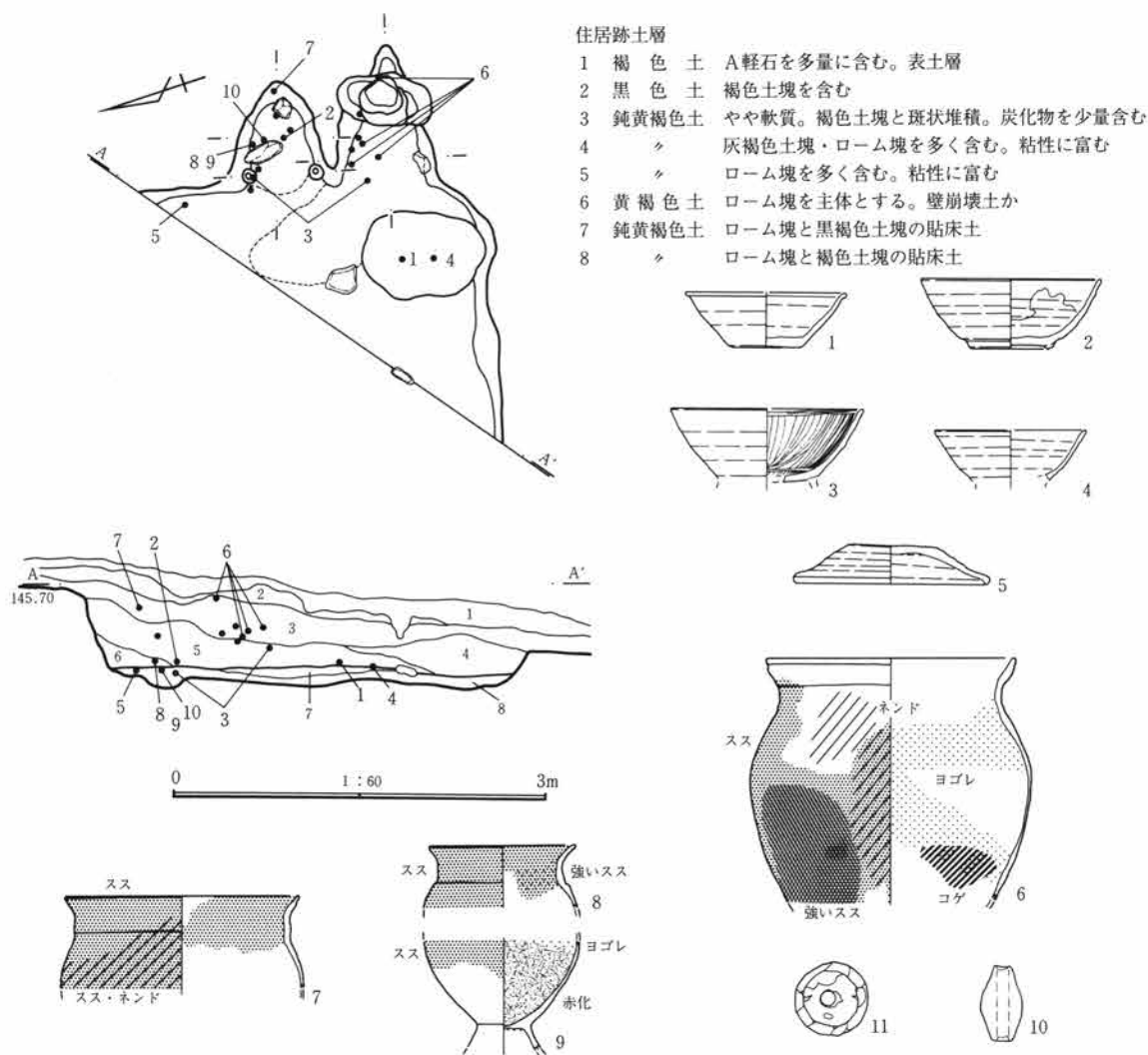
以上本住居跡は大きな重複もなく、良好な遺存状態を見せながらも、貧弱な出土遺物量が示すように、居住者の性格付け等は果たせ得ない。中央に設けられた焼土塊を出土する土坑にしても、炉や作業施設としての根拠に乏しく、床下土坑の一種と考えられた。出土遺物の時期判断も、極少量のため避けなければならないだろう。その中で、1の須恵器坏は完形であり、9世紀前半段階に帰属し得る遺物であり、住居跡廃絶時期やカマド破壊時期にこの段階が求められよう。



第76図 21号住居跡出土遺物

第41表 21号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第76図 1 坏 図版 57	口： 12.8 高： 3.8 底： 6.2	完形 カマド	①粗 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は僅かな丸みを帯びる。腰部も丸みを帯び底部は若干上げ底状を呈す。見込み部は緩やかで器厚も厚い。体部轆轤整形後薄い撫でを加える。
第76図 2 坏 図版 57	口： (12.4) 高： 4.3 底： (8.0)	約1/6 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部は緩やかに外反し、体部は中位に丸みを帯びる。底径広く僅かに立ち上がる。見込み部は緩やかに彎曲する。口縁～体部器厚は薄いが底部は厚手。堅緻な焼成。
第76図 3 坏 図版 57	口： - 高： - 底： (6.0)	底部破片 覆土下位	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。上げ底気味の底部。体部は直線状に開く。内底面中央肥厚し、見込み部は緩やかな彎曲を呈す。体部は器厚は薄く底部はやや厚手。
第76図 4 坏	口： (14.0) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	小破片。口縁部は外傾し体部に僅かな丸みを持たせる。口縁部は横撫で、体部外面は上半に無調整部分。内面は撫でを施し、細い斜位の放射状暗文を加える。
第76図 5 甕 図版 57	口： - 高： - 底： (7.5)	底部破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③黄褐色 ④土師器	体部は強く開く。底面は平底で凹凸のため不安定な座り。体部外面は横位鋭削り。底面も一定方向の鋭削り。内面は丁寧な撫でを施す。
第76図 6 薦編み石 図版 65	長： 12.0 幅： 4.3 厚： 2.8	完形 床直	①雲母石英片岩 ④230.6g	乳棒状の円礫を素材とする。側縁の摩滅痕は顕著ではない。
第76図 7 薦編み石 図版 65	長： 13.1 幅： 4.7 厚： 2.1	完形 床直	①雲母石英片岩 ④226.5g	やや偏平な棒状の円礫を素材とする。側縁に微小の摩滅痕が認められ、上下両端にも薄い敲打状の摩滅痕が看取される。



第77図 22号住居跡(1)

22号住居跡

第Ⅱ台地調査区北西部で検出され、北西部を調査区域外に伸ばす住居跡である。周辺の地形は傾斜が緩くなり、若干ながらも平坦地形に近くなる。近接する遺構も東に14号住があり、住居跡が群在する様相が看取される。おそらく調査区域外に該期集落は伸びるものと予想されよう。

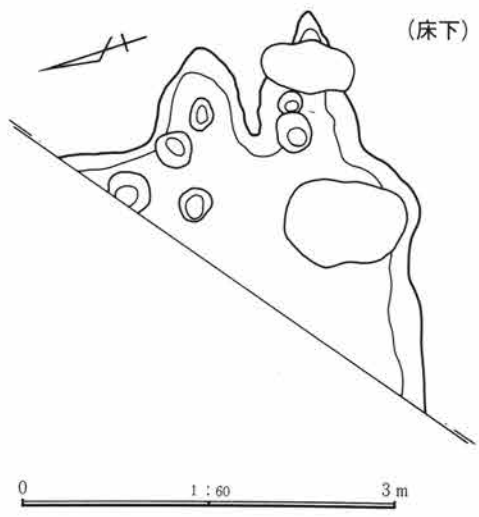
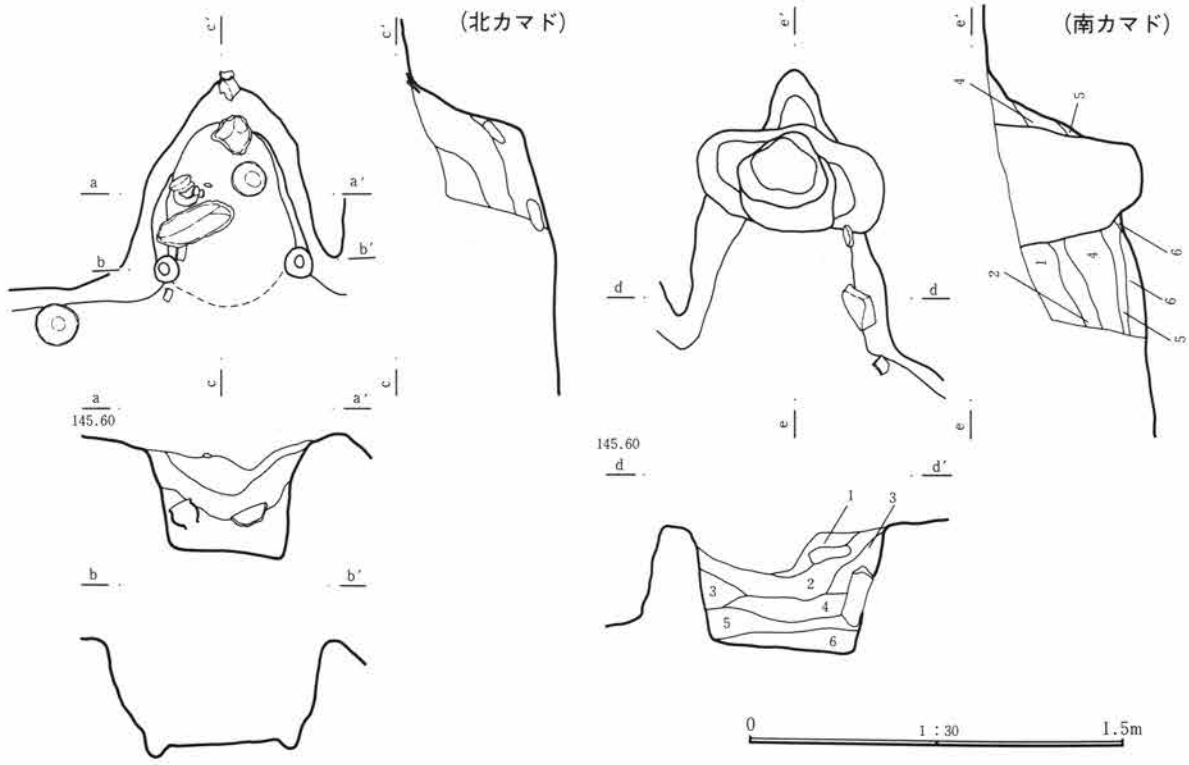
平面形は判然としないが、おそらく方形を基調としたプランを呈すものである。深さは、調査区壁面の土層では約80cmを測るが、遺構確認面においては40cm程度である。壁は南側でやや緩やかな立ち上がりをしめすが、東壁はほぼ直立する。

床面はほぼ平坦面が意識されるようで、鈍黄褐色

土を貼床としていた。硬化面は判然としないが、中央部とその周辺に僅かながら地点状に認められた。

柱穴・貯蔵穴も確定的なものは無く、調査当初は南東隅に開く楕円状の土坑を貯蔵穴としたが、後に52号土坑として別種遺構と判断した。床下遺構も、明瞭な掘り込みは検出されなかった。

本住居跡の特徴的な施設としては、東壁に設けられた2基のカマドが挙げられよう。無論、同時併存してはいないが、出土遺物、土層等の把握からは新旧が確定できず判然としない。しかしながら、北側カマドの南袖と南側カマドの北袖が重なっており、これはカマド作り替え→移動によるものであり、両者の時期には大きな差は無いものと捉えられる。



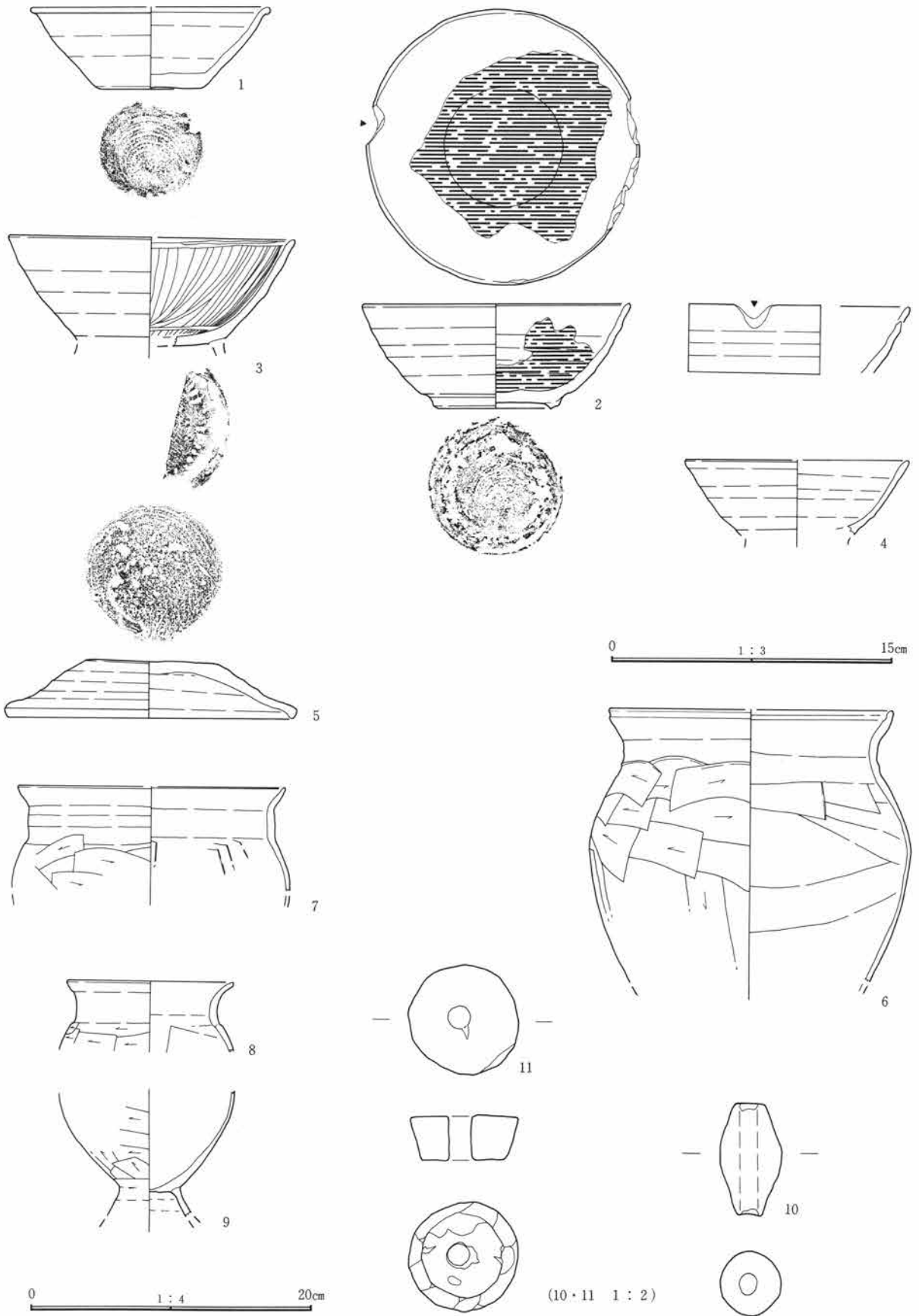
- 北カマド土層
- 1 暗褐色土 均質。粘性に富むが軟質
 - 2 〃 ローム粒を含む
 - 3 褐色土 ローム塊を多く含む
- 南カマド土層
- 1 暗褐色土 ローム塊を多く含む
 - 2 〃 ローム粒・焼土粒を少量含む
 - 3 暗赤褐色土 大型の焼土塊を含む。崩壊土か
 - 4 明褐色土 やや粘性に富む。ローム粒・小型の焼土塊を含む
 - 5 灰褐色土 灰・ローム塊を含む
 - 6 灰 層 焼土塊を含む

第78図 22号住居跡 (2)

第42表 22号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
90-24・25	方形	- × - × 85	-	N107°E		坏1 碗3 蓋1 甕4 土錘1 土製紡錘車1	52号土坑

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第79図 22号住居跡出土遺物

第2節 竪穴住居跡

第43表 22号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第79図 1 坏 図版 57	口：12.8 高：4.3 底：5.6	約1/4 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	丸みを帯びる口唇部は玉縁状となす。体部は緩やかな丸みを持ち、底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やかに彎曲し器厚は薄手である。体部外面は轆轤整形後薄い撫でを加える。
第79図 2 碗 図版 57	口：(12.8) 高：4.3 底：5.6	ほぼ完形 カマド	①粗片岩 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部と体部一体化し体部は丸みを帯びる。高台は短く強い横撫でで貼付される。内面見込み部は緩やかに彎曲し器厚も薄く整った器形を呈す。内面に墨痕が広く付着し、口縁部の一部は意図的な剝離により凹む。
第79図 3 碗 図版 57	口：(15.2) 高：— 底：—	約1/3 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	右回轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台欠損。口縁部僅かに外反し体部は緩やかな丸みを持つ。見込み部の彎曲は比較的明瞭。内面黒色処理後口縁部横位体部縦位の研磨を密に施す。研磨は内底面に及ぶが摩滅のため判然としない。底部外面には高台貼付時の篋状工具による粘土掻き寄せ痕が看取される。
第79図 4 碗 図版 57	口：(12.0) 高：— 底：—	約1/5 床直	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	右回轆轤整形。口縁部と体部一体化し体部丸みを帯びる。内面の見込み部は緩やか。口縁部は僅かに肥厚するが体部薄手の器厚を呈す。内面は入念な撫でにより滑らか。
第79図 5 蓋 図版 57	口：15.3 高：3.0 摘：—	完形 東壁下	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回轆轤整形。天井部回転糸切り。摘は貼付されない。天井部は糸切り後撫であるいは摩滅のため平坦面を築く。体部～裾部は緩やかに彎曲しかえりは丸みを帯びる。器形は異質であり、蓋の機能よりも坏・皿としての機能が優先する形態である。器厚は厚手。
第79図 6 甕 図版 57	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁～体部 破片 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部は直立し浅い凹線が巡る。口縁部上位は外傾し下位は直立する。体部は中位に膨らみを持たせる。口縁部下位に強い横撫でが幅広く施された後体部上半横位弧状の篋削り中位は斜位篋削り下半縦位篋削りを施す。下半には撫でも加える。口唇部内面にも浅い凹線が巡り、体部には篋撫でを施す。口縁部は肥厚し体部は薄手の器厚を呈す。
第79図 7 甕 図版 57	口：(19.0) 高：— 底：—	口縁部破片 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口唇部は僅かに内彎し、口縁部上位は外傾し下位は直立する。体部上半に緩やかな膨らみを持たせる。口唇部は浅い凹線が巡り、口縁部下位は強い横撫でが平行し体部と画した後、体部に横位篋削り。内面は篋撫で。
第79図 8 甕 図版 57	口：11.8 高：— 底：—	口縁部 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部上位は丸みを帯びて外傾し下位は直立するが、外反気味の口縁部形態を呈す。体部は上半に張りを持たせる。口縁部は強い横撫でを施しこれは体部横位篋削り後の整形である。6・7と整形順位に差がある。体部内面は横位篋撫で。口縁部器厚は比較的厚く体部は薄い。
第79図 9 甕 図版 57	口：— 高：— 底：4.3	体部～脚部 裾部欠損 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	台付甕脚部。あるいは8と同一個体か。出土位置は接する。体部中位に膨らみを持たせ脚部接合部で屈曲する。体部中位は横位・下半は縦位篋削り。接合部には強い横撫でが加わる。裾部も横撫で。体部内面は撫で。
第79図 10 土錘 図版 57	長：4.0 径：2.2 重：	ほぼ完形 カマド	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④土製品	中央部が膨らむ紡錘形。棒状の芯材を粘土で巻き、掌上での製作と思われる。外面は撫でにより平滑である。18住13・14と類似性が見られる。
第79図 11 土製紡錘車 図版 65	径：3.9 厚：1.6 重：	ほぼ完形 覆土	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土製品	粗雑な作り。棒状の芯材を粘土で巻き、上下面・側面を篋削りで整形する。篋削り後に撫でを加え平滑な面を作り出す。

第三章 検出された遺構と遺物

以下個別に22号住カマドを述べる。

<北側カマド>

東壁中央南寄りに設けられる。煙道部・燃烧部が壁外に突出し、比較的強い立ち上がりを見せる。燃烧部は僅かに凹み、灰・焼土粒が少量ではあるが散布していた。遺物の出土も見られ、煙道部に土師器甕口縁部破片(7)、燃烧部北には台付甕(8・9)、中央には高台付塼(2)と土錘(10)等が確認された。また、燃烧部奥にと北側には大型の自然石が出土しているが、構築材・補強材の一部と思われる。袖は、前述のように南袖を重ね、北袖は僅かな彎曲が該当する。袖の内側には小ピットが検出され、補強材の存在が看取された。

<南側カマド>

東南隅に設けられる。煙道部は比較的長く突出し、強く立ち上がる。しかしながら、大型の土坑が重複するため、煙道部と燃烧部の境は不明である。燃烧部は煙道部に比して広く作られ、使用面に僅かな凹みを持つ。使用面には焼土塊を混入する灰層が厚く堆積しており頻繁な使用状態が看取される。袖は、北袖が突出するが南側カマド袖と重なる。南袖は顕著ではないが、住居隅部の彎曲がこれに相応する。南側壁には自然石がかけられ、壁体補強材としての用途が充てられよう。遺物は土師器甕(6)が燃烧部北側でまとまって出土している。

以上のように、本住居跡で検出された2基のカマドは北側カマドの遺存が良く、出土遺物も多い。おそらく北側カマドが先行するものと思われるが、その場合、煮沸用途をしめす台付甕の遺存が問題であろう。また、北側カマドからは土錘の出土もあり、先に述べた14号住・18号住との共通性も興味ある課題である。本住居跡のその他の出土遺物ではあるが、東壁際より完形の須恵器蓋(5)が逆位で出土している。また、1の須恵器坏・4の塼口縁部は52号土坑対応地点での出土であり、本住居跡に帰属する出土遺物とは判断できない。

本住居跡の廃絶時期等はカマド出土の遺物等を勘案して、9世紀中葉段階を与えたい。

23～25号住居跡

第Ⅱ台地調査区中央やや南寄りで、検出された。重複住居跡であり、北から24号住・23号住・25号住と横列する重複状態を見せ、17号住～19号住見られた縦列の重複と対称的な様相を呈す。特に、24号住の東には17号住が北西隅には16号住の一部が重なり、一群の重複住居跡群の検出となった。

上記のような重複状態のため、ここでは23号住～25号住の土層による新旧関係を先に述べる。

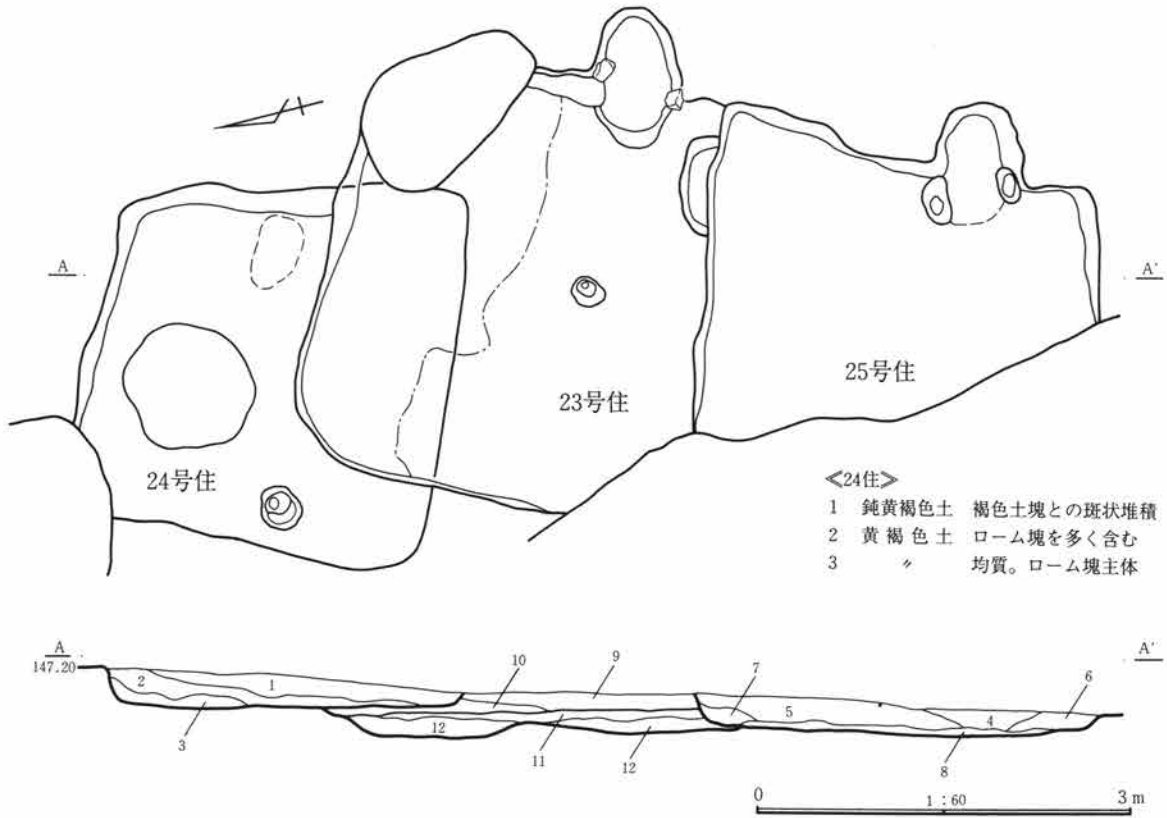
重複関係は、24号住が23号住を切る土層が確認されている。23号住覆土中に24号住床面と壁の立ち上がりが確認され、確定的な新旧である。次に23号住と25号住の新旧は、土層観察においては、25号住壁が23号住覆土中に観察され、その後の精査において、床面の差も認められたため、これも確定的な新旧と判断した。以上のような土層の判断からの新旧ではあるが、例えば17号住と24号住の新旧は発掘調査では17号住を先行した調査をしたため、24号住カマド等の把握ができなかった。出土遺物では明らかな差が見られ、17号住が古相を呈すように、発掘調査による所見は絶対的ではない。出土遺物の様相、分布状態等を踏まえて、検討を要する。23号～25号住居跡においても、出土遺物はかなり混入しており、整理作業においては明確には分離できなかった。整理作業の反省点を補う意味で、個々の住居の説明を述べる。

<23号住居跡>

24号住と25号住に挟まれて確認された。主軸方位を東西に持ち、平面形は辺長3.4m前後の隅丸正方形を呈するものと思われる。深さは約30cmを測り、東側の壁は直立気味に立ち上がるしっかりしたものだった。ただし西側壁は急斜面のため、北側と南側の壁は重複のため判然としない。また、北東隅には53号土坑が重複する。

床面は、緩やかに北西側へ傾斜するが、ほぼ平坦面を築く。暗褐色土による貼床がなされ、硬化面は南半が顕著だった。

柱穴は、床面中央に小ピットを検出したが、20cm



- <24住>
- 1 鈍黄褐色土 褐色土塊との斑状堆積
 - 2 黄褐色土 ローム塊を多く含む
 - 3 均質。ローム塊主体

- <25住>
- 4 黄褐色土 粘性に富む。焼土塊・鈍黄褐色土塊を含む
 - 5 鈍黄褐色土 暗褐色土塊・ローム塊・炭化物・焼土粒を含む
 - 6 黄褐色土 均質。ローム粒・焼土粒を少量含む
 - 7 暗褐色土 均質。やや暗い色調
 - 8 鈍黄褐色土 ローム塊・炭化物を含む
- <23住>
- 9 鈍黄褐色土 軟質。焼土粒・炭化物を含む
 - 10 焼土粒・炭化物・ローム塊を多く含む
 - 11 暗褐色土 ローム塊・ローム粒・焼土塊を含む。床下埋土
 - 12 鈍黄褐色土 暗褐色土塊とローム粒による床下埋土

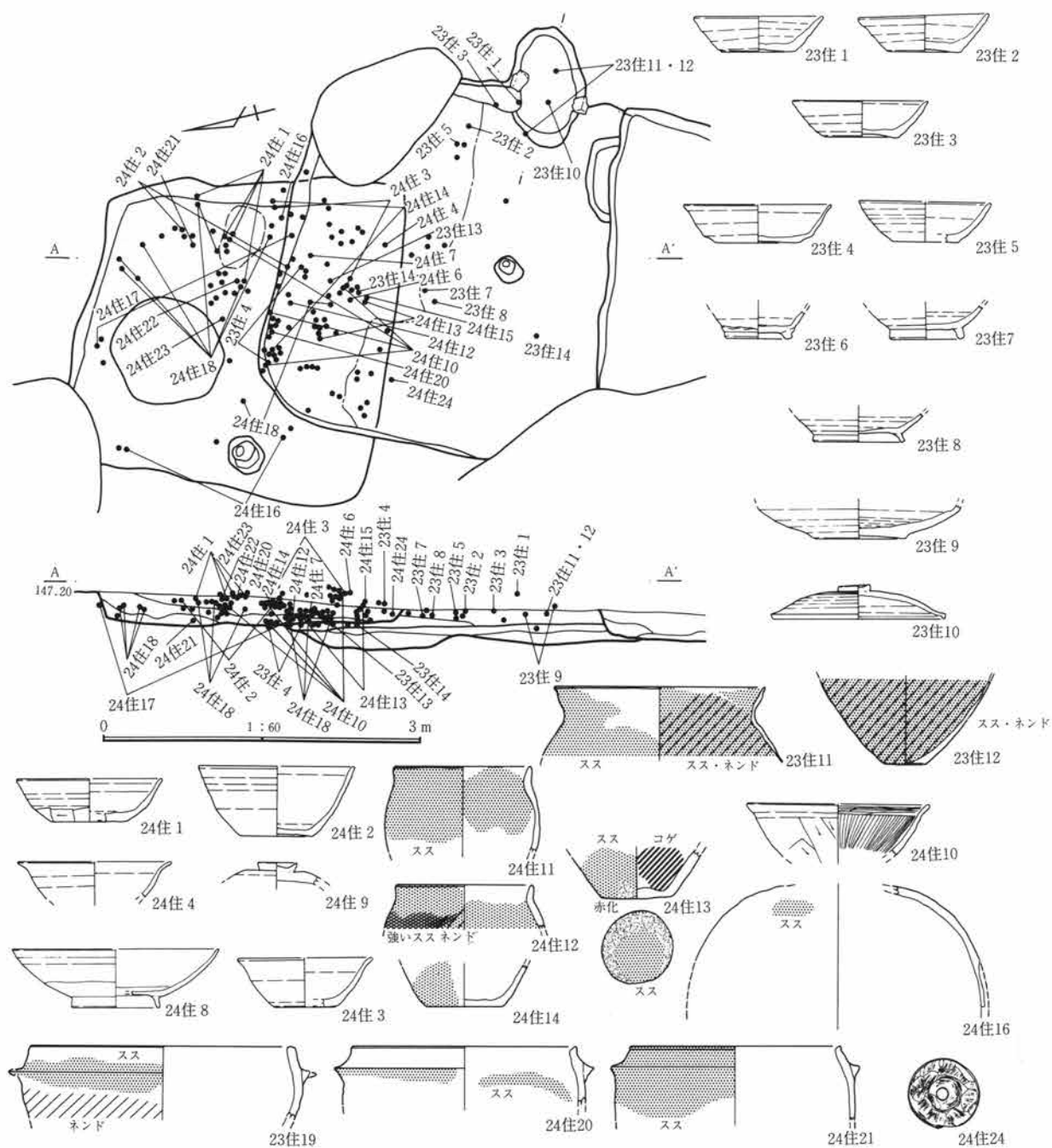
第80図 23・24・25号住居跡

第44表 23号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
87・88-27・28	隅丸正方形?	348× - × 30	N22° E	N110° E		坏5 碗3 皿1 蓋1 甕3 石1	24・25住 53号土坑

第45表 24号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
87・88-27	不整正方形	288× 280× 48	N112° E	-		坏6 碗2 蓋1 鉢1 甕5 壺1 羽釜5 瓦2 紡錘車1	17・23住 54号土坑



第81図 23・24号住居跡

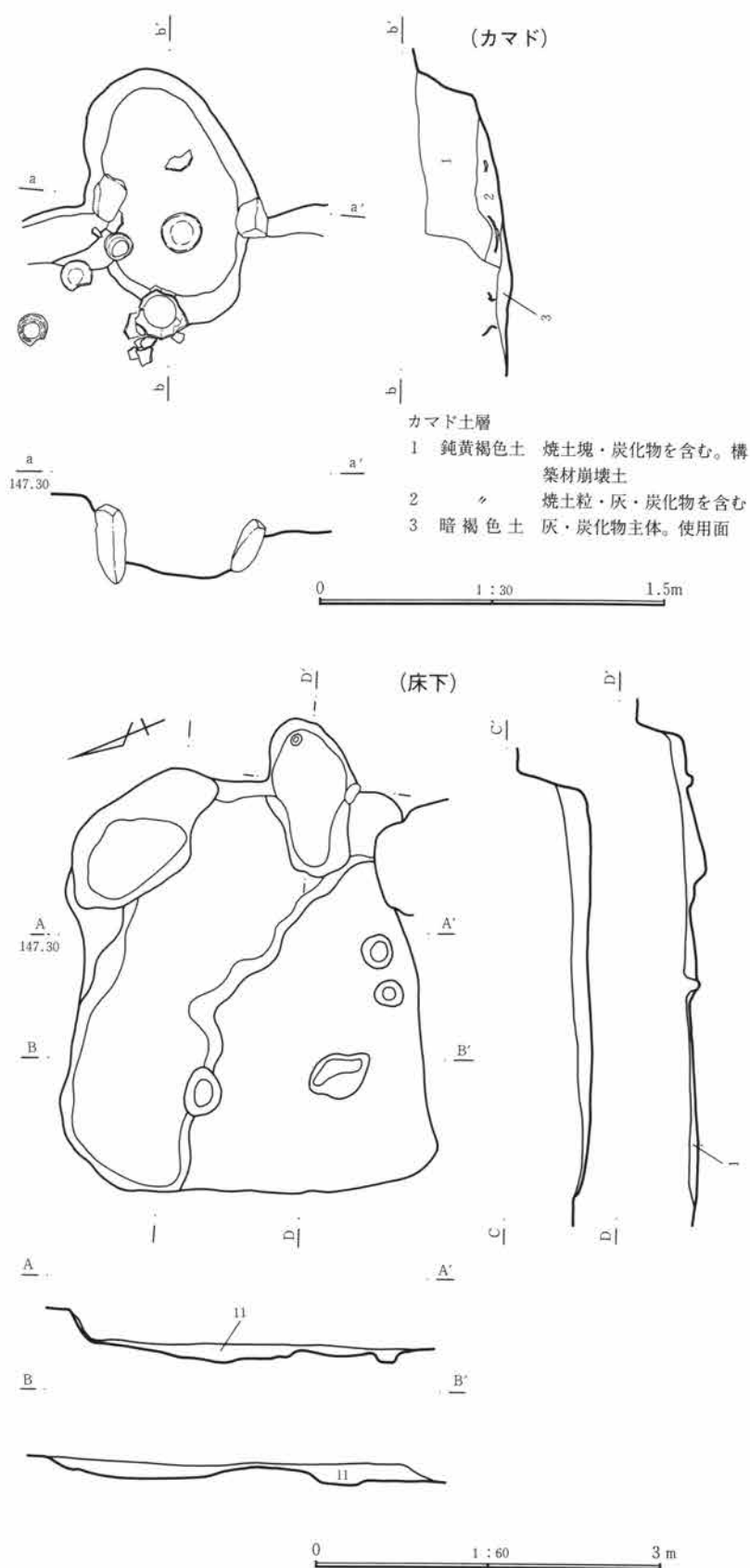
程度の深度でやや浅く積極性を持たない。また、床下調査でも明瞭な柱穴は検出できなかった。

貯蔵穴は、東南隅に設けられていたが、25号住重複のため南半が逸失しており、前葉は把握できない。おそらく不整楕円状の平面形を呈するものと思われる。深さは約20cmで焼土粒を含む暗褐色土を埋土としていた。

床下調査では北半の緩やかな凹みを検出した。構築時の所産とし、硬化面範囲との整合性が見られた。

カマドは東壁やや南寄りに設けられる。楕円状の燃焼部と煙道部は突出し、煙道部は強く立ち上がる。燃焼部は広く作り出され、緩やかに凹む。袖は明瞭な突出を見せないが、両袖基部部分に自然石が立位で出土しており、芯材として位置付けられよう。そ

第2節 竪穴住居跡

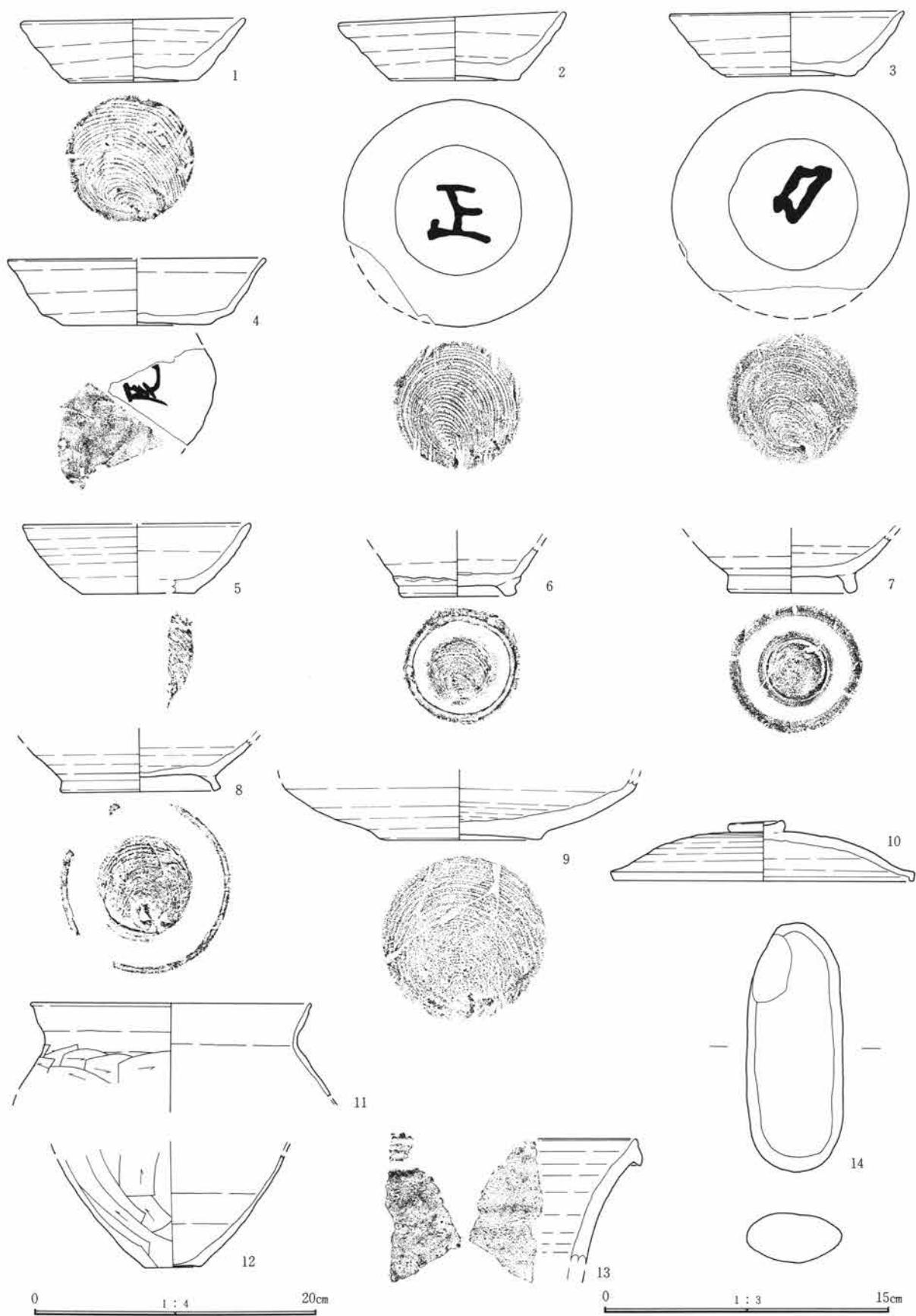


第82図 23号住居跡

他では、燃烧部中央に須恵器蓋(10)が逆位で、北袖部上及び周辺より須恵器坏(1~3・5)、さらに前庭部北側で土師器甕口縁部(11)が逆位で出土した。蓋・坏は完形の出土である。蓋は出土位置から煮沸にかかわる使用方法も想起できよう。カマド出土遺物以外では、坏(4)が北壁際で、高台付坩底部(7・8)が床面中央で出土している。坏4は、当初24号住出土遺物と見られていたが、出土地点の検証により23号住に帰属させた。また、14の薦編み石は西南部の床直出土である。覆土出土のものは、6・9・13があるが、24号住との重複部分からの出土のため、厳密な意味では本住居跡出土遺物には帰属し得ない可能性がある。

以上のように、本住居跡出土遺物はカマド周辺の出土状態が良好であり、1~3・5・10・11は一括性に富むものと考えられる。すべての遺物が、居住の痕跡を具現化はしていないが、おそらく、住居廃絶時あるいは放棄時の所産と思われる、ある程度の時間軸を持たせることが可能である。ただ、11の土師器甕は、逆位出土であり、粘土の付着もあるため「置台」等への転用と捉えられ注意を要する。11以外の供膳具(1~3・5・10)を参考にすると8世紀末葉~9世紀前半段階にその所産が求められよう。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



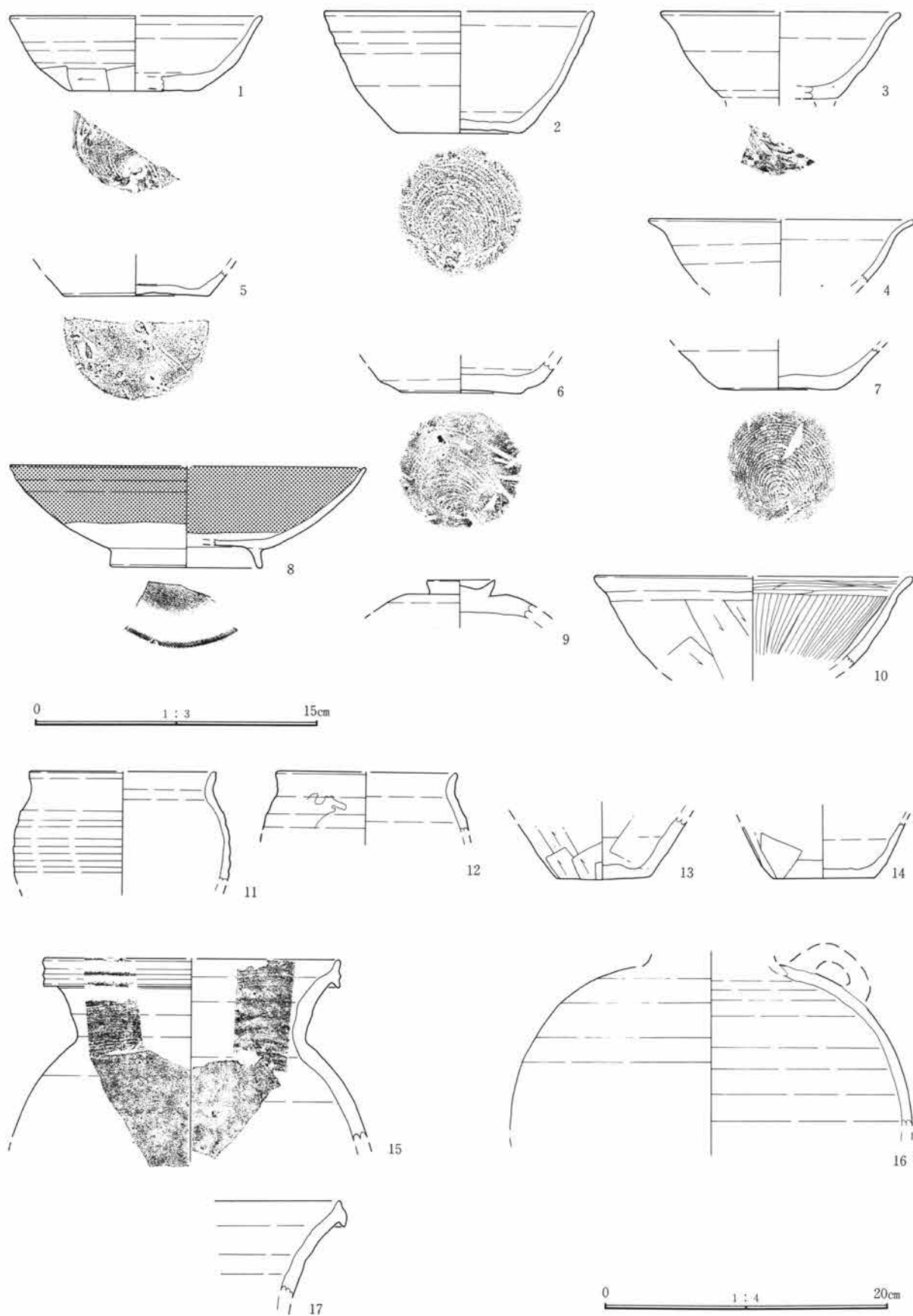
第83図 23号住居跡出土遺物

第2節 竪穴住居跡

第46表 23号住居跡遺物観察表

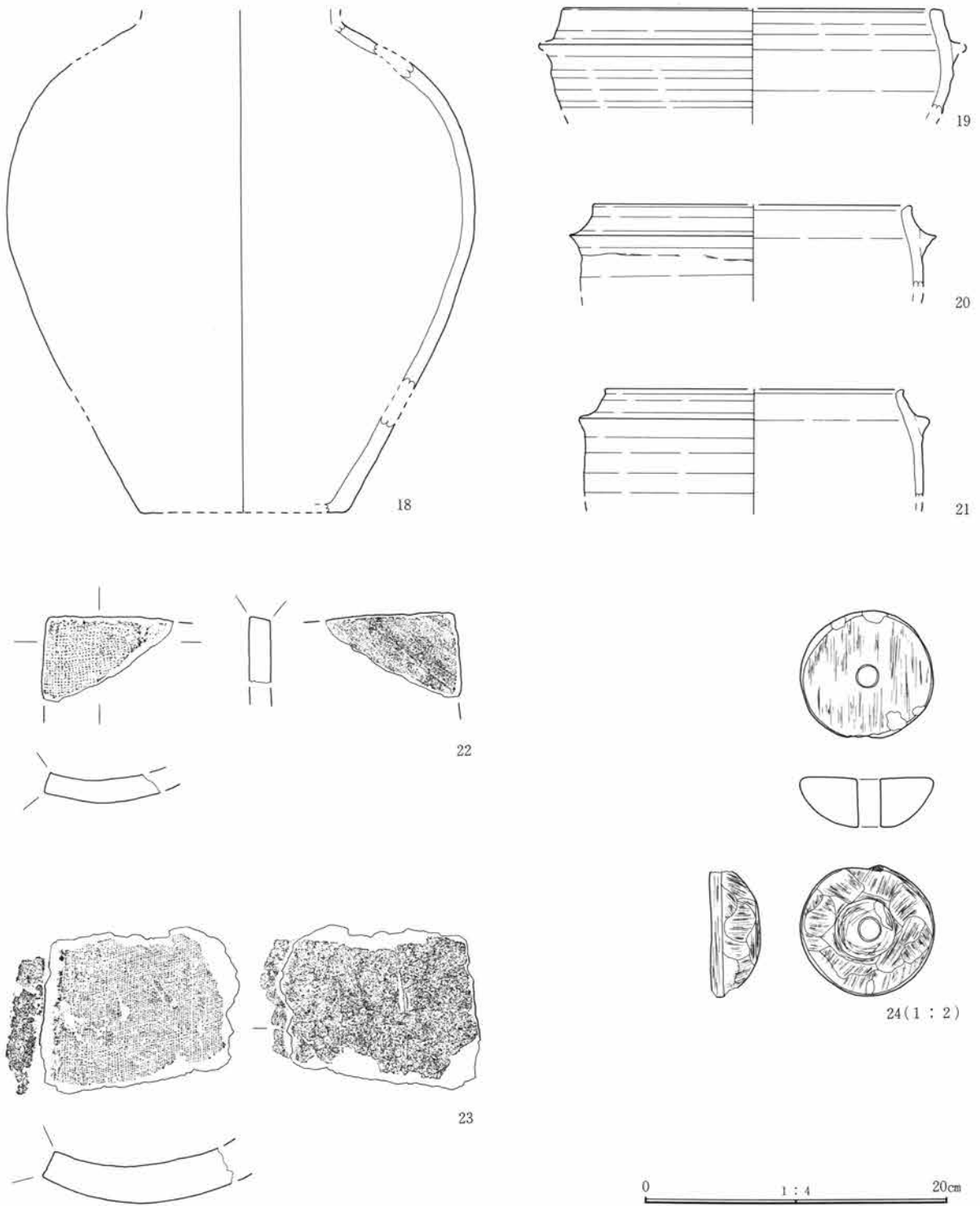
図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第83図 1 坏 図版 57	口：12.0 高：3.3 底：6.8	完形 カマド	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化する。体部は直線状に強く開き底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やかに彎曲する。器厚は厚手で量感に富む。
第83図 2 坏 図版 57	口：12.3 高：3.4 底：6.6	ほぼ完形 覆土下位	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は直線状に強く開く。底部は僅かに立ちあがる。内面見込み部は緩やかに彎曲する。器厚は厚手で量感に富む。底部外面に墨書「正」か。
第83図 3 坏 図版 57	口：12.6 高：3.4 底：6.8	ほぼ完形 覆土下位	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は直線状に強く開く。底部は僅かに立つ。内面見込み部は緩やかに彎曲する。1・2に比してやや薄手。底部外面に墨書「口」か。
第83図 4 坏 図版 57	口：(13.8) 高：3.5 底：(9.0)	約1/6 床直	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形。底部回転鋭削り、中央寛調整。口縁部外反し体部中位に僅かな丸みを持ち、腰部は外反する。内面見込み部は顕著に彎曲する。器厚は薄手で底部に顕著。底部外面に墨書「尾」か。
第83図 5 坏 図版 57	口：(12.2) 高：3.7 底：(5.8)	約1/4 覆土下位	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黒色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は緩やかに丸みを帯びる。底部は極僅かに立つ。内面見込み部は緩やか。器厚は比較的厚手。
第83図 6 壺	口：— 高：— 底：6.0	底部 覆土	①粗白色粒 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部は外反気味に開き、高台は開き気味に直立する。内面見込み部は顕著に屈曲する。体部器厚は薄手。高台の貼付は比較的雑。
第83図 7 壺	口：— 高：— 底：6.4	底部 覆土下位	①粗白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部は丸みを帯びて開く。高台は開き丁寧に貼付され、撫では中央部にまで及ぶ。内面見込み部は緩やか。器厚は比較的厚手。
第83図 8 壺	口：— 高：— 底：8.1	底部 覆土下位	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部は緩やかな丸みを帯びて開く。高台は強く開き丁寧に貼付される。内面の見込み部は緩やかに彎曲し、器厚は薄手。内底面には凹凸が著しい。
第83図 9 皿 図版 57	口：— 高：— 底：8.7	体部～底部 約1/3 覆土	①粗石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部上半は彎曲を持って立ち、下半は緩やかな丸みを帯びる。底部は大きく立ち上がり、上げ底状を呈す。
第83図 10 蓋 図版 57	口：16.0 高：3.2 摘：3.0	完形 カマド	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。天井部回転鋭削り切離後摘貼付。天井部は低く体部にかけて丸みを持たせる。裾部は広がりかえり部は丸みを帯びる。摘はボタン状で中央部が僅かに突出する。内面に重ね焼きの痕跡。
第83図 11 甕 図版 58	口：20.0 高：— 底：—	口縁部 約3/4 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部は玉縁状をなし口縁部上位は丸みを帯びて外傾し下位は外反気味に直立する。体部は上半に膨らみを持たせる。口唇部と口縁部下位に強い横撫で、体部は横位弧状の鋭削り。内面は撫で。
第83図 12 甕 図版 58	口：— 高：— 底：(4.0)	体部～底部 1/4 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	体部下半は緩やかな膨らみを持って小径の底部に至る。体部外面は縦位・斜位鋭削り、底面も鋭削りが及ぶ。内面は撫でにより滑らか。器厚は薄く底部に顕著である。
第83図 13 甕	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①粗石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	轆轤整形。回転方向不詳。口縁端部は直立気味に内傾し口頭部は外反する。内面の轆轤目強く薄く自然釉が付着する。
第83図 14 薦編み石 図版 65	長：13.2 幅：5.2 厚：2.7	一部欠損 床直	①雲母石英片岩 ④319.3g	やや厚めの扁平な棒状円礫を素材とする。両側縁に微小な摩擦痕が認められ、図下端には敲打状の摩擦痕が看取される。

第三章 検出された遺構と遺物



第84図 24号住居跡出土遺物 (1)

第2節 竪穴住居跡



第85図 24号住居跡出土遺物(2)

<24号住居跡>

23号住の北側で重複する。その他16号住・17号住と重複するが、新旧は不明である。また、床面北側には54号土坑が重複するが、土層の観察所見では、

住居跡が切られる新旧関係が指摘されている。

平面形は、辺長約2.8mの小型の不整正方形を呈すが、上記のように全体に重複が著しく全体像は判然としない。平面形の把握は、僅かな立ち上がりと、

第三章 検出された遺構と遺物

第47表 24号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第84図 版	1 坏 58	口：(13.4) 高：4.0 底：(7.0)	約2/5 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを帯び下半に緩やかな彎曲を持たせる。底部は僅かに立つ。内面見込み部は緩やかに彎曲する。轆轤整形後体部下半横位斲削りを施す。
第84図 版	2 坏 58	口：(14.3) 高：6.5 底：6.6	約1/2 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し体部は緩やかに丸みを帯びる。内面見込み部は緩やかに彎曲する。轆轤整形後体部下半に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第84図 版	3 坏 58	口：(12.6) 高：4.6 底：(5.8)	口縁部破片 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	高台欠損。右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部は中位に丸みを持つ。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第84図 版	4 坏 58	口：(14.0) 高：— 底：—	口縁部 約1/4 覆土	①細 片岩 白色粒 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	口縁部僅かに歪む。右回転轆轤整形。口縁部は強く外反し体部は丸みを帯びる。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。器厚は薄手。
第84図 版	5 坏 58	口：— 高：— 底：7.8	底部約1/2 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転斲削り後撫でを加える。体部は直線状に開き底部は僅かに上げ底気味である。内面の見込み部は明瞭に屈曲し、器厚は薄手。
第84図 版	6 坏 58	口：— 高：— 底：6.4	底部 覆土	①粗片岩 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。腰部は丸みを帯び、底部は顕著に立ち上がり、若干上げ底気味を呈す。器厚は厚手。
第84図 版	7 坏 58	口：— 高：— 底：6.1	底部 覆土下位	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に丸みを帯び、底部は僅かに立ち上がり、若干上げ底気味。轆轤整形後体部に撫でを加える。器厚は薄手。
第84図 版	8 灰釉 坏 58	口：(19.0) 高：5.4 底：(8.0)	約1/4 覆土下位	①細 緻密 ②酸化焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	左回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部と体部一体化し体部は緩やかな丸みを帯びる。高台は開き気味に貼付される。器厚は薄手で均整の取れた器形を呈す。施釉は刷毛掛け。内底面中央は滑沢面を持つ。
第84図 版	9 蓋 58	口：— 高：— 摘：3.6	摘部～肩部 破片 覆土	①細 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後摘貼付時撫で。摘はボタン状で中心部が僅かに突出する。天井部と体部境に放射状に「シワ」が見られる。器厚は厚手で量感に富む。
第84図 版	10 鉢 58	口：(17.0) 高：— 底：—	約1/5 覆土	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は外傾し体部は丸みを帯びる。体部縦位・斜位斲削りを施した後口縁部に強い横撫でを加える。内面は黒色処理され、口縁部横位・体部縦位の研磨を密接に施す。
第84図 版	11 小型甕	口：(13.2) 高：— 底：—	口縁～体部 破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は短く外反し体部は緩やかな膨らみを持つ。体部外面の轆轤目比較的強く、口縁部は横撫でにより体部と画す。口縁部は肥厚し体部器厚もやや厚手。体部内面の器壁剥落著しい。
第84図 版	12 小型甕	口：(13.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土下位	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は短く緩やかに外反し体部は膨らみを持たせる。口縁部の横撫で強く体部と画す。器厚は口縁部～体部とも厚手。体部外面に煤が付着する。
第84図 版	13 羽釜 58	口：— 高：— 底：6.8	底部 覆土下位	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。直線状に開く底部形態。体部外面は縦位斲削りを施す。斲削りは底面にまで及ぶ。内面は横撫でが主で縦位の撫でが加わる。器厚は厚手。
第84図 版	14 羽釜 58	口：— 高：— 底：7.4	底部 覆土	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③暗褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不詳。直線状に開く底部形態。体部外面は横位・斜位の斲削り後撫でを加える。底面も斲削り後撫で。内面は横位撫でを施す。器厚は薄手で底部に顕著。

第2節 竪穴住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第84図 甕 図版 58	口：(21.0) 高：— 底：—	口縁～肩部 破片 覆土	①粗 石英 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁端部は直立し上下端部とも鋭く尖る。口頸部は外反し接合部で屈曲する。体部は上半に張りを持たせる。口縁端部は強い轆轤目のため凸線状となる。内面体部下半に円環状の当て目残る。
第84図 壺 図版 58	口：— 高：— 底：—	肩部～体部 破片 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。肩部～体部中位に強く張る。肩部に把手の剥落痕が認められる。
第84図 甕 図版 58	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	轆轤整形。回転方向不祥。口縁端部は直立気味に内傾し口縁部は外反する。内面の轆轤目強く自然釉が付着する。23住13と同一個体か。
第85図 甕・壺	口：— 高：—	破片 床直 底：—	①粗 片岩 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。肩部は張り体部上半に膨らみを持たせる。底径は広く平底である。轆轤整形後外面は横位撫で、内面は横位寛撫でを加える。破片復元実測のため径・傾き等判然としない。
第85図 羽釜 図版 58	口：(25.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不祥。口縁部内傾し銜はほぼ水平に貼付される。体部は僅かな膨らみを持つ。体部轆轤目強く凹線状となる。内面横撫で。小破片のため径・傾き等判然としない。
第85図 羽釜 図版 58	口：21.2 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不祥。口唇部僅かに突出し口縁部は内傾する。銜はほぼ水平に貼付され体部は緩やかな膨らみを持たせる。内面横撫で。小破片のため径・傾き等判然としない。
第85図 羽釜	口：20.0 高：— 底：—	口縁部破片 床直上	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不祥。口唇部僅かに突出し口縁部は内傾する。銜は短くほぼ水平に貼付され体部は緩やかな膨らみを持たせる。内面は横撫で。器面剥落。小破片のため径・傾き等判然としない。
第85図 平瓦	厚：1.4	破片 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④	凸面縦位削り後撫でを入念に施す。凹面は布目。側部・端部とも面取りは1回。恐らく1枚造り。やや薄手。
第85図 平瓦 図版 58	厚：2.2	約1/8 覆土	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③灰色 ④	凸面縦位撫で。凹面は布目。側部の面取りは1回。素地土が縞状を呈す。恐らく1枚造り。厚手。
第85図 石製紡錘車 図版 65	径：4.5 厚：1.6 重：49.37	完形 覆土下位	①蛇紋岩	断面形は半円状の台形を呈す。周縁は擦痕が著しく看取され、滑沢面で占められる。側面は細かな剥離を施した後研磨される。

床面色調差、土層壁の延長によって判断した。深さは、遺存の良好な東壁付近で約50cmを測るが、他の壁は逸失しており、遺存状態は極めて悪い。東壁は直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを見せる。

床面はほぼ平坦面を築くが、硬化面は判然とせず、貼床もなされない。

柱穴は床面上では確認されなかった。西壁際やや南よりで検出されたピットは、10cm程度の深さで、灰・炭化物が堆積することから、妥当性は無い。

カマドは、東壁に設けられていたものと思われる。17号住と23号住が重複するため、詳細は不明だが、東壁やや北寄りの床面に焼土が散布しており、周辺にカマドの存在が窺われる。自然石等の出土も無く、抜き取り穴も検出されなかったため、確定的な要素ではない。

遺物の出土量は多く、24点を図示し得た。覆土中の出土が多く、完形のは石製紡錘車1点のみで他の土器類は破片出土である。

遺物の分布も顕著な集中は見せないが、東側から

第三章 検出された遺構と遺物

南側へ若干ながら偏りが見られる。南側は、23号住との重複部分であるが、土層重複関係を重視して、覆土上位の出土は本住居跡出土遺物と判断した。故に、紡錘車(24)は平面的位置では23号住の範囲内だが、断面位置の観察結果では、本住居跡出土遺物と捉えた。23住4・23住13は断面下位の出土であり、本住居跡出土遺物とするにはレベル差が大きいため、23住出土と判断した。

また、住居内の接合状態を見ても南側出土の破片と北側や西側出土の破片が接合した現象からも、この南側出土の多くは本住居跡出土遺物と確定できよう。南側出土の主な遺物としては、高台付碗(3・4)、坏底部(7・6)、鉢(10)、小型甕(12)、羽釜底部(13・14)、須恵器甕(15)、羽釜口縁部(19・20)等が見られるが、いずれも破片状態で覆土の出土である。南側出土以外の遺物としては、須恵器坏(1・2)、須恵器甕・壺(15~18)・羽釜(21)等が出土している。また、カマド推定地点である、東側の焼土周辺からは1・3・16・18が見られ、16はあるいはカマド補強材としての破片転用の可能性も見い出せるが、確証はない。

以上のように、24号住出土遺物は多くが覆土出土のため、居住痕跡を残すものではない。流入等の所産として念頭におきたい。

本住居跡は平面規模も小型で、カマドも特定できないことから住居跡としての積極性を持たないが、周辺の群在する住居の様相さらに、僅かながらも硬化面が持ち平坦面を築く床面、方形を基本とした平面形からも、住居跡として位置付けておきたい。また、周辺住居跡との重複関係は、土層及び出土遺物から、23号住が先行する様相が明確である。ただし東側に重複する17号住との新旧は、発掘調査の手順から17号住先行調査となったが、本住居跡が先行するものと思われる。17号住南西隅の平面形の乱れはこの重複が関与するものであろう。以上の事柄と出土遺物の様相から、1・2・5の供膳具に先行する要素が見られるが、他の遺物は概ね10世紀前半段階に求められよう。

<25号住居跡>

第Ⅱ台地調査区最南端に位置する。23号住の南に重複して検出された。周辺の地形は北西への斜面地形が強く、そのため本住居跡の西半は大きく流失していた。23号住以外の重複住居跡は見られず、また、南側への住居跡分布に希薄性が看取されるため、集落の南限に位置する住居跡として位置付ける。

平面形は西半を流失するため判然としないが、床下調査において北西隅の彎曲部の一部が検出されており、おそらく辺長3m前後の不整形を呈するものと思われる。深さは、遺存の良好な東壁付近で約30cmを測るが、全体的に壁の立ち上がり等は薄く、遺存状態は不良に近い。

床面はほぼ平坦面を築くものと思われる。黄褐色土による貼床がなされていたが、層厚は薄く明瞭な貼床ではなく、ほぼ地床といえよう。硬化面は中央部よりカマド周辺にかけて点在しており、範囲としては捉えられなかった。

柱穴は床面上では検出できなかった。床下調査においても、数基の小ピットを確認したが、深さは総て数cm程度で、柱穴としては位置付けられない。

貯蔵穴も見られなかった。

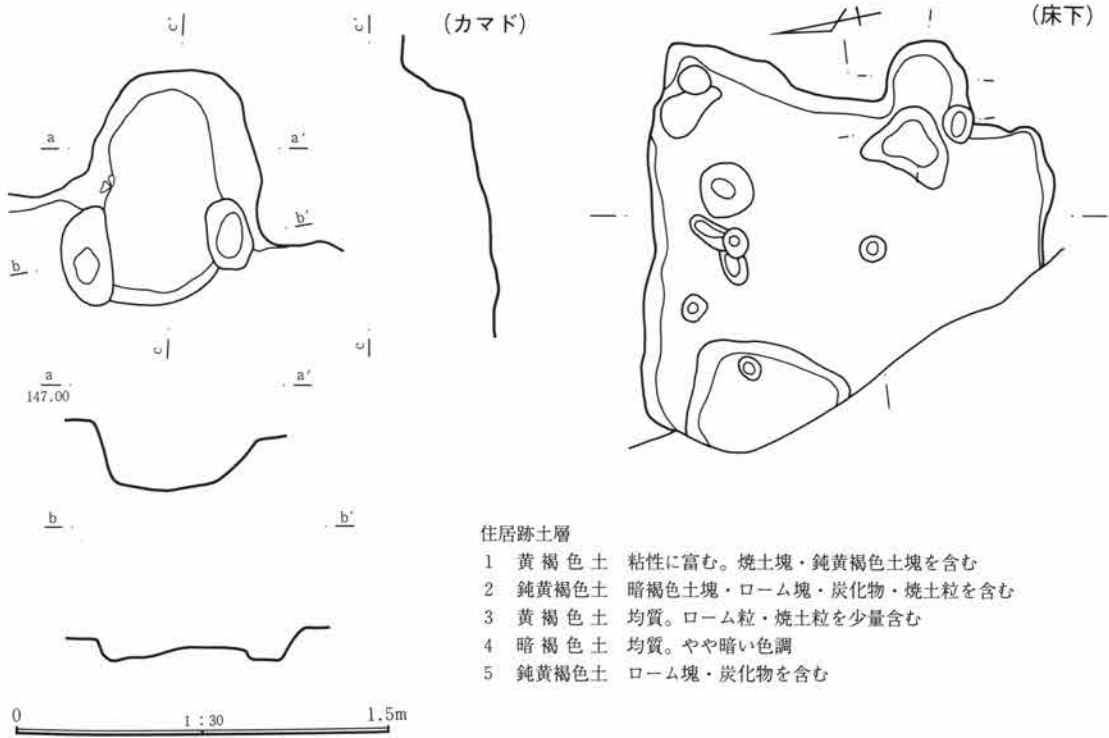
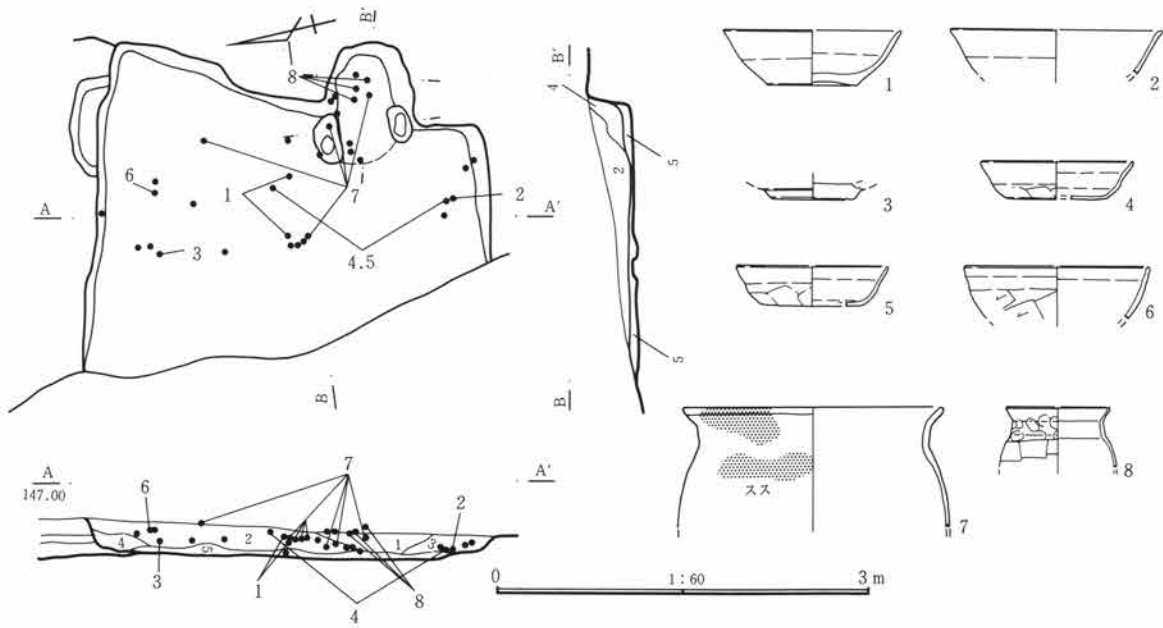
床下遺構は床面精査後に検出した。北西隅にかけて大型の土坑が確認されたが、本住居跡に帰属し得るものかは不明である。その他の小ピットも、床下遺構としての確証は無い。

カマドは東壁南寄りに設けられる。煙道部を突出し、楕円状の燃焼部を持つ。煙道部の立ち上がりはやや緩やかである。燃焼部は僅かな凹みを持ち、焼土の散布が見られたが、調査時の土層軸誤設定のため良好な土層図は図示できなかった。袖は僅かな痕跡を見せる。壁の僅かな彎曲が相当しよう。構築材や芯材は出土しなかったが、袖部下端に小ピットが確認された。芯材の抜き取り穴と捉えられよう。

カマド使用面下の調査において、前庭部に不整形の土坑が確認された。カマド構築時の所産としたい。

遺物の出土は少なく8点を図示した。カマド周辺及び中央部に若干の集中が見られ、覆土上層から床

第2節 竪穴住居跡



住居跡土層

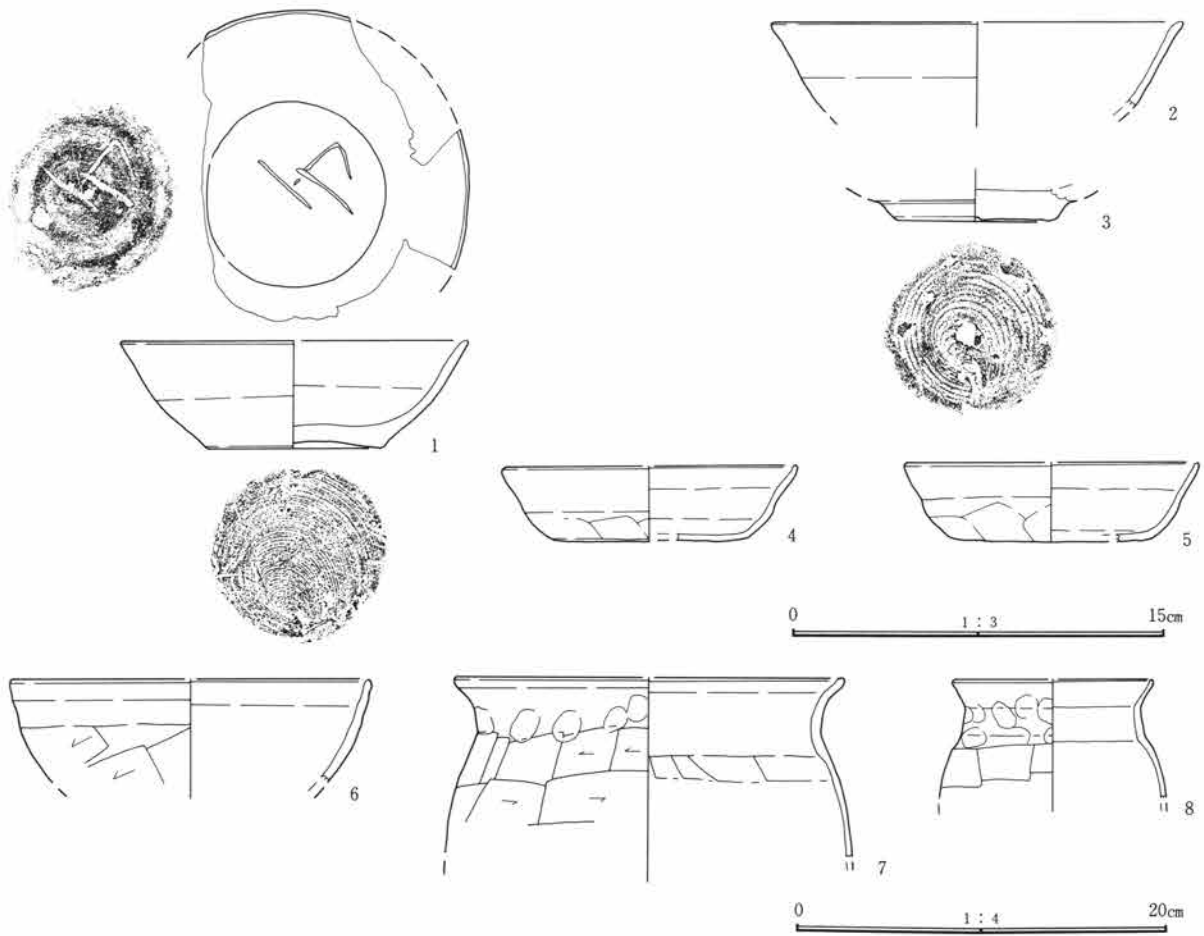
- 1 黄褐色土 粘性に富む。焼土塊・鈍黄褐色土塊を含む
- 2 鈍黄褐色土 暗褐色土塊・ローム塊・炭化物・焼土粒を含む
- 3 黄褐色土 均質。ローム粒・焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土 均質。やや暗い色調
- 5 鈍黄褐色土 ローム塊・炭化物を含む

第86図 25号住居跡

第48表 25号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
87・88-28	不整形	310× - × 30	-	N107°E		坏4 埴1 鉢1 甕2	23号住居

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第87図 25号住居跡出土遺物

第49表 25号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 ()推定値	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第87図 碗 図版	1 59	口：(14.0) 高： 4.4 底： 7.0	約1/2 覆土	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器 刻書土器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部と体部一体化し、体部は緩やかに丸みを帯びる。底部は僅かに立ち、若干上げ底気味である。轆轤整形後外面薄く撫でを加える。内底面に焼成前線刻「山」か。
第87図 碗 図版	2 59	口：(16.6) 高： - 底： -	口縁部 約1/4 床直上	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は僅かに外反し、体部も僅かな丸みを帯びるがほぼ一体化する。器厚は薄手で口唇部のみが若干肥厚気味である。
第87図 坏 図版	3 59	口： - 高： - 底： 6.4	底部 覆土下位	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底部の立ちあがりは顕著で体部は大きく開く形態を見せる。あるいは無台の皿か。器厚は厚手。
第87図 坏 図版	4 59	口：(12.0) 高： 3.1 底： 7.8	破片 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部は彎曲を持たせながら外傾し体部は丸みを帯びる。底部は平底。口縁部は横撫で、体部は篋削り後指撫で、底部は篋削りを施す。口縁部の撫では強く体部境との凹部を作る。内面撫で。薄手の器厚を呈す。
第87図 坏 図版	5 59	口：(12.0) 高： 3.1 底： 7.8	約1/4 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部は彎曲を持たせながら外傾し体部は丸みを帯びる。底部は平底。口縁部は横撫で、体部は篋削り後指撫で、底部は篋削りを施す。口縁部の撫では強く体部境との凹部を作る。内面撫で。4と同一個体か。

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第87図 6 鉢	口：(19.6) 高：－ 底：－	口縁部破片 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口縁部下位は僅かに外反するがほぼ体部と一体化する。体部は丸みを帯びる。口縁部上位は強い横撫で、下位はやや弱い撫で。体部は斜位の匏削りを施す。内面は撫でにより滑らかである。
第87図 7 甕 図版 59	口：(21.0) 高：－ 底：－	口縁部破片 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部は丸みを帯び、口縁部上位は外傾、下位～頸部は直立気味に彎曲する。体部は上半に膨らみを持つ。口縁部横撫で、下位に指頭圧痕残る。口縁部横撫で後体部は横位匏削り。体部内面は横位匏撫で。器面摩滅。
第87図 8 小型甕 図版 59	口：(10.8) 高：－ 底：－	口縁～体部 破片 カマド	①粗片岩 白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部上位は外傾、下位はやや内傾気味に直立する。体部は上半に膨らみを持つ。口縁部横撫で、指頭圧痕が明瞭に残り、頸部は強い横撫でで体部と画す。体部内面は横位匏撫で。内面器壁剥落。

面直上にかけて散漫に出土した。特殊遺物も出土しておらず、日常什器が中心である。

須恵器坏（1）と土師器坏（4）は中央部東寄り覆土から出土した。4は南壁際の1点と接合する。2の須恵器壺も南壁際から。須恵器坏（3）と土師器鉢（6）は、北側で出土した。3は床直上である。土師器甕（7・8）はカマド内出土。7は中央部東でもまとまった出土が見られた。

以上のように乏しい出土量だが、出土遺物は概ね9世紀中頃の所産と捉えられよう。北側で重複する23号住（8世紀末～9世紀前半）との新旧は、土層観察においても同様の切り合いが見られ、確定性を増している。

重複関係にある23号～25号住居跡の新旧を念頭においた記述をしてきたが、出土土器にある程度の時間幅が認められるものの、発掘調査所見に沿った出土遺物の様相が得られた。

本住居跡群は、第Ⅱ台地のほぼ中心部を占め、17号～19号住が東西、23号～25号住が南北に3軒単位で重複する形態を取る。その他31号住居跡が18号・19号住に重なり、住居跡密集地点となっている。これは北西の急斜面地形に制約された結果と思われるが、壁方位の一致が見られる住居もあり、継続性を持った構築、即ち居住移動も想起されよう。

27号住居跡

第Ⅰ台地調査区南側の北西傾斜地に位置する。周辺には1号掘立柱建物跡が近接し、土坑群が群在するが、住居跡同士は接しておらず単独の検出となった。このことは、北西の傾斜が比較的に強いこと、居住が敬遠された傾向も見いだせよう。尚、本住居跡内においても土坑が重複している。覆土の様相から、近世以降の所産と思われるが性格は不明である。

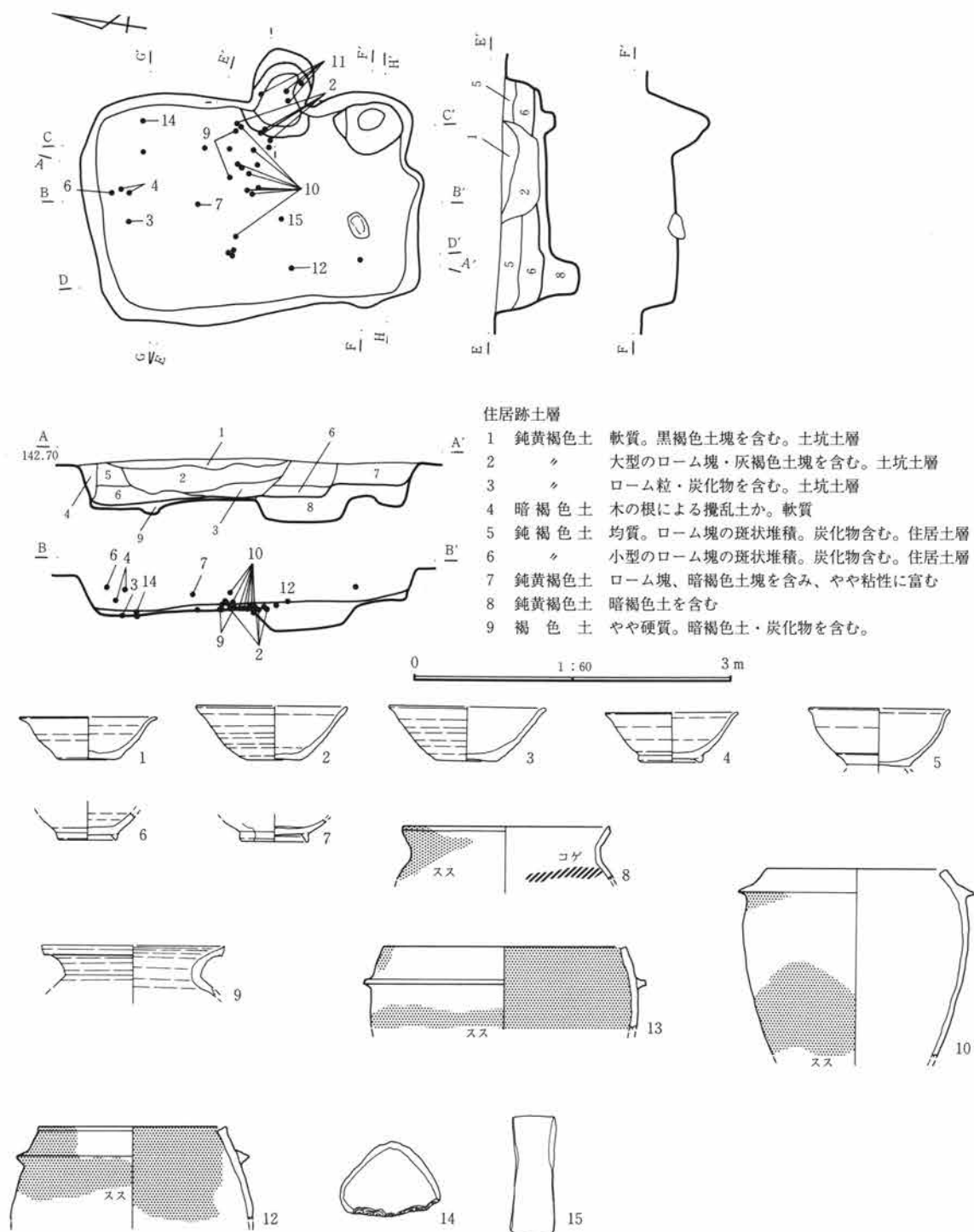
平面形は、3.1×2.1mの南北に長軸をもつ小型長方形を呈す。本遺跡検出住居跡で最小の規模である。深さは約40cmを測り、良好な遺存である。壁は若干開き気味の立ち上がりだが、しっかりした掘り込みを見せる。北西の急斜面地形の影響は殆ど無いといえよう。

床面はほぼ平坦面を築き、鈍黄褐色土による貼床がなされていたが、硬化面の広がりも顕著ではなく、判然としなかった。

柱穴は床面上では検出されなかったが、床下調査において、多数の小ピット・土坑が検出された。特定できないが、P₇～P₁₁が規模・配置から可能性を求められよう。

貯蔵穴は、南東隅の土坑を充てたい（P₁）。不整形の平面形で、深さは約30cm程度である。緩やかな掘り込みを呈し、埋土は暗褐色土が主体である。その他では、床下調査において各隅部に同様の土坑が検出されている（P₂～P₄）。規模・配置を勘案して可能性は指摘しておきたい。また、7号住に見ら

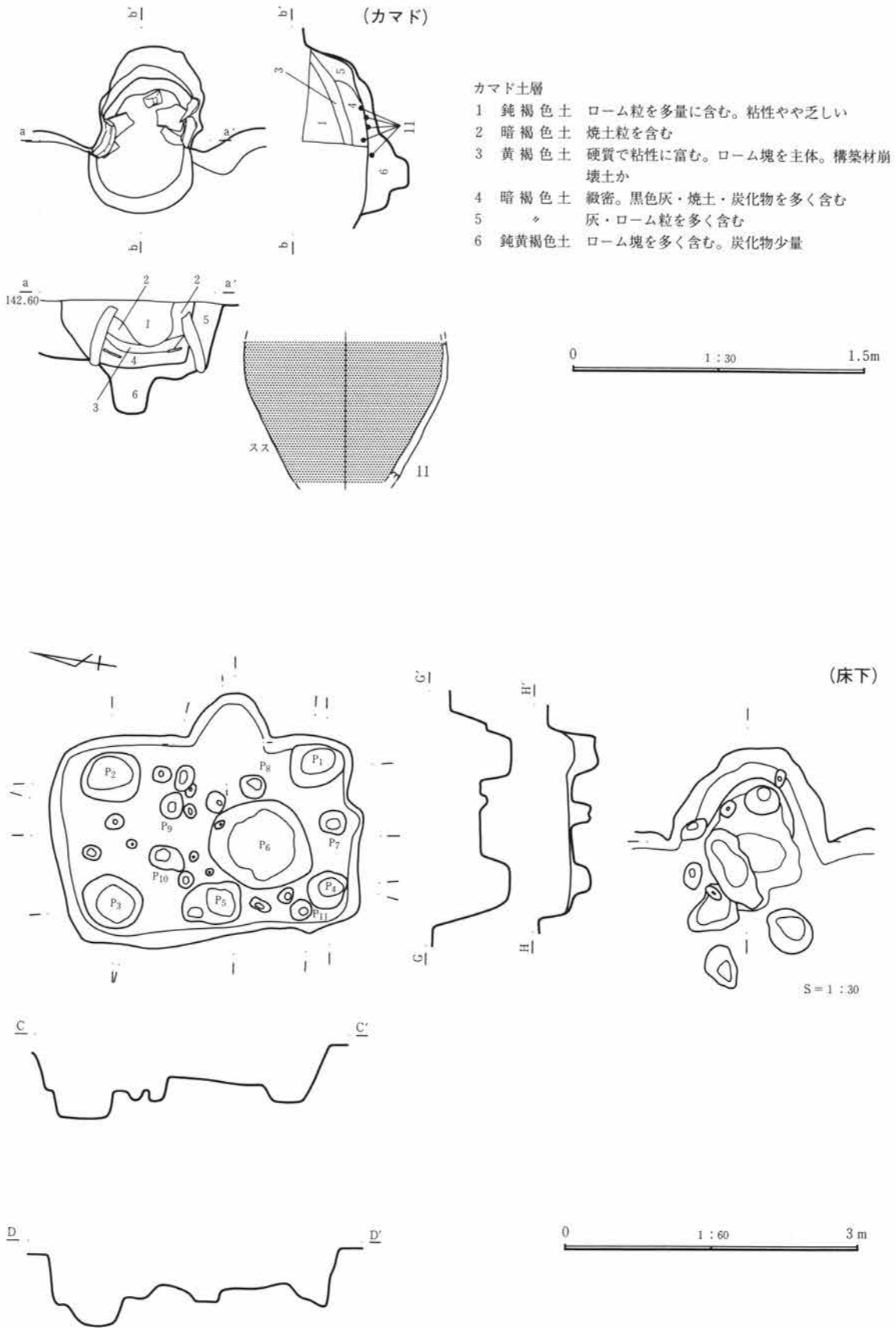
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第88図 27号住居跡(1)

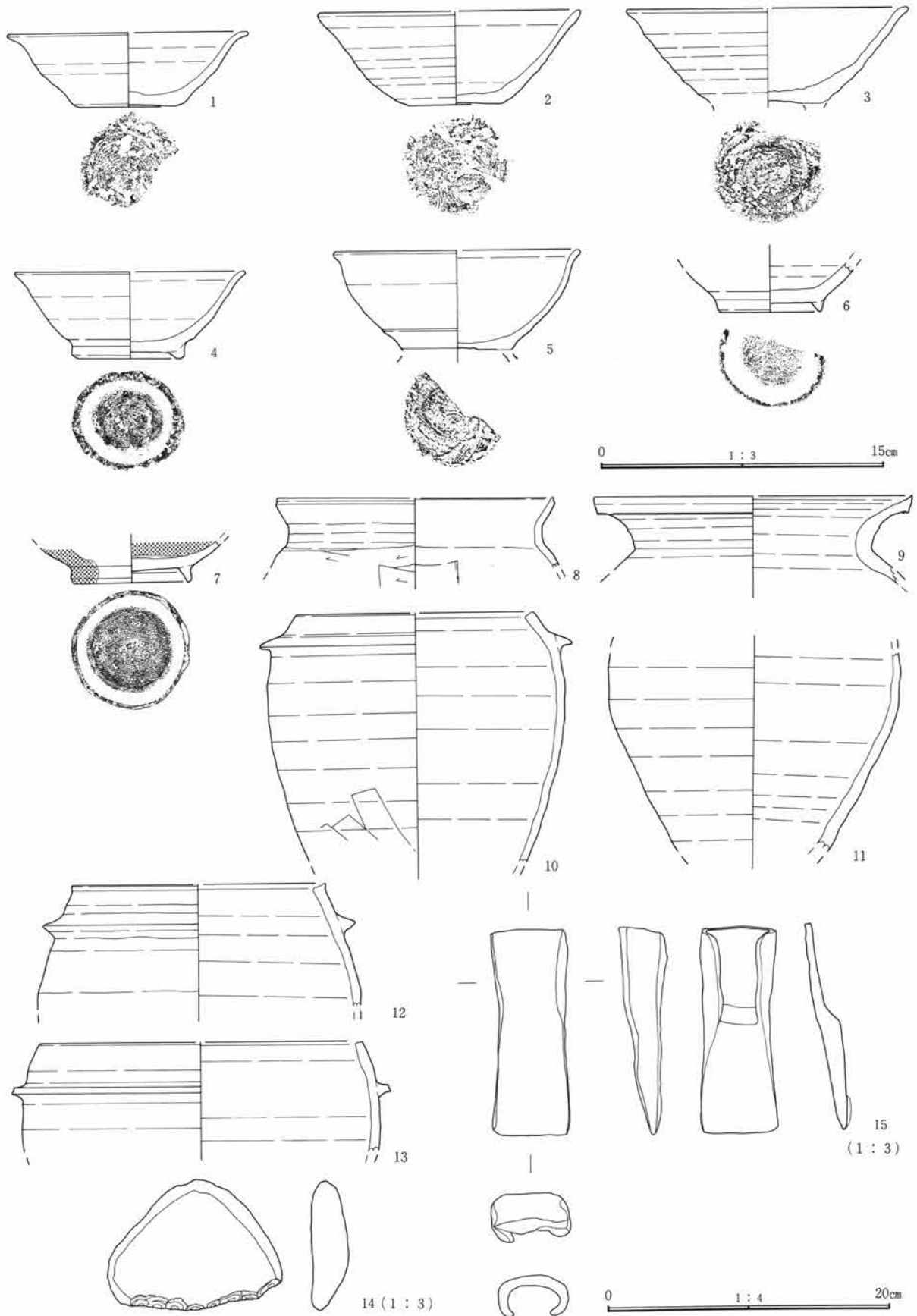
第50表 27号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
39-19・20	小型長方形	310×210×42	N80°E	N80°E	貯蔵穴・床下土坑	坏3 碗4 甕2 羽釜4 石1 鉄斧1	



第89図 27号住居跡 (2)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第90図 27号住居跡出土遺物

第51表 27号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第90図 1 坏 図版 57	口：(12.8) 高： 3.9 底：(5.2)	約1/3 覆土	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部強く外反し、体部上半～中位に丸みを帯びる。底部は極僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でを加える。薄手の器厚を呈す。
第90図 2 坏 図版 59	口： 14.0 高： 4.8 底： 5.0	ほぼ完形 カマド前庭	①粗 片岩 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部肥厚し緩やかな彎曲を経て体部下半に丸みを持つ。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部の一部に薄い撫でを加える。器厚は比較的薄手。
第90図 3 碗 図版 59	口：(14.6) 高： 5.0 底：(5.6)	約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台欠損。口縁部僅かに外反し体部はほぼ直線状に開く。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部下半に薄い撫でを加える。器厚は薄手。器壁の剝落著しい。
第90図 4 碗 図版 59	口：(12.2) 高： 4.6 底： 5.3	約1/3 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部外反し体部中位～下半に丸みを帯びる。高台は開き気味に直立する。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でが加わる。器厚薄く均整の取れた器形。
第90図 5 碗 図版 59	口：(13.0) 高： — 底： —	約1/3 覆土	①粗 片岩 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台欠損。口縁部外反し体部上半に丸みを帯びる。下半は高台貼付時の撫でにより強く外反する。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でが加わる。器厚薄手。
第90図 6 碗 図版 59	口：— 高： — 底：(5.5)	約1/4 覆土	①粗 白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部下半に僅かな丸みを持たせる。高台は短く直立し、内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に薄い撫でが加わる。
第90図 7 灰釉 碗 図版 59	口： — 高： — 底： 6.1	底部 覆土	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器 大原2号	左回転轆轤整形底部回転糸切り後高台貼付。体部下半に緩やかな丸みを持たせ、高台は開き気味に付される。高台端部に丸みを持たせるが接地部には重ね焼きの粘土粒が付着する。施釉は漬け掛け。
第90図 8 甕 図版 59	口：(19.6) 高： — 底： —	口縁部破片 覆土	①粗 片岩 白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④土師器	口唇部は内傾し凹線を巡らす。口縁部上位は外傾し下位は直立する。肩部は緩やかに張る。口縁部の横撫では下位が強く凹線状に平行する。口縁部横撫で後体部の横位篋削りが施される。内面横位篋撫で。
第90図 9 甕 図版 59	口：(22.6) 高： — 底： —	口縁部 約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③オリーブ黒色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部外傾し、口頸部は外反する。接合部で屈曲し、肩部は強く張る。内面口唇部の轆轤目強く凹線状に巡る。口縁部器厚は比較的薄手。
第90図 10 羽釜 図版 59	口： 17.0 高： — 底： —	口縁～体部 約1/4 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部著しく内傾し鈔も内傾気味に貼付される。体部上半に緩やかな膨らみを持つ。口縁部横撫で、体部も弱い横撫でが加わる。下半に縦位篋削りが施される。器厚薄く、内面黒色を呈す。
第90図 11 羽釜 図版 59	口： — 高： — 底： —	体部約3/4 カマド	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。上半に膨らみを持たせ、下半は著しく小径となる。轆轤整形後外面は弱い撫でが加わり、下半は篋撫でが施される。器厚は薄手。
第90図 12 羽釜 図版 59	口： 18.0 高： — 底： —	口縁部 約1/8 床直	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口唇部突出し口縁部は内傾する。鈔はやや下位を向くがほぼ水平に貼付され、体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、鈔貼付時の横撫では丁寧。体部も撫でが加わる。
第90図 13 羽釜 図版 59	口：(23.0) 高： — 底： —	口縁部破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	回転轆轤整形。回転方向不詳。口縁部は比較的長く内彎する。鈔はほぼ水平に貼付され方形の断面形を呈す。体部は緩やかな丸みを持たせる。口縁部横撫で、体部も撫でが加わる。器厚は薄手。
第90図 14 砥石 図版 65	長： 7.0 幅： 9.4 厚： 2.1	一部欠損 床直	①牛伏砂岩 ④132.50 g	三角形の円礫を素材とし、下端に雑な剝離が及ぶ。使用痕は表裏面に微小な擦痕が認められる。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第90図 15 鉄製品斧 図版 68	長: 10.9 幅: 4.1 厚: 2.6	完形 床直	④202.1g	無茎袋状鉄斧。ほぼ完存。身部が緩やかに括れ、刃部と袋柄端部が広がる形態である。刃部は比較的鋭く平刃を呈す。装着部と身部は厚くしっかりした作りである。

れた各隅部柱穴の存在を考えると、貯蔵穴としたP₁を含めて、柱穴としても位置付けられよう。

床下遺構としては、P₅・P₆の土坑が充てられる。特にP₅は大型の円形を呈した床下土坑として位置付けられよう。

カマドは、東壁中央やや南寄りに設けられる。壁外に大きく突出し、壁も強く立ちあがる。燃焼部は緩やかに凹み、焼土・黒色灰を多量に堆積していた。燃焼部奥には、棒状の自然石が立位に埋め込まれており、支脚として位置付けられよう。袖は両袖とも僅かな突出を見せ、これも立位の自然石を伴う。袖石である。袖石はやや内傾気味に埋められており、天井部を支えていたものと思われる。カマド土層で確認された3層は天井材崩壊土であろうか。周辺で出土した羽釜体部破片(11)は補強材としての破片転用と考えられる。カマド使用面下の調査では、壁際に抜き取り穴状の小ピットが確認された。補強材の存在を裏付けよう。

遺物の出土量は多くは無いが、15点を図示し得た。中央部からカマドにかけての出土が目立ち、また北側へも広がりを見せる。南東隅・南側からの出土が見られず、他の住居跡出土状態との差が認められた。覆土下位～床面の出土も多く見られ、良好な出土状態といえよう。カマド内からは前述の羽釜体部破片(11)がまとまって出土した。破片転用として捉えた。カマド前庭部から須恵器坏(2)が破片状態で、須恵器甕口縁部1/2が正位で、羽釜(10)が破片でまとまって出土した。須恵器甕はあるいは置き台としての利用であろうか。その他では、西側壁際からは羽釜口縁部破片(12)が、北側覆土上層からは須恵器高台付碗(4・6)、中央やや北寄り上層から灰釉陶器碗(7)が出土した。北側の床直

からは碗(3)、北東隅床直で砥石(14)、また中央部床面からは鉄斧(15)が出土している。

以上のように、本住居跡出土遺物はカマド及び周辺で居住に伴う要素を強く残す状況を呈す。3の碗さらに砥石・鉄斧等の床直出土遺物も重要な位置を占めよう。破片転用の羽釜(11)や覆土出土の(4・6・7・8)なども大きな時間差は無いものと捉え、これらの出土遺物の様相は、10世紀前半段階の所産と考えたい。

29号住居跡

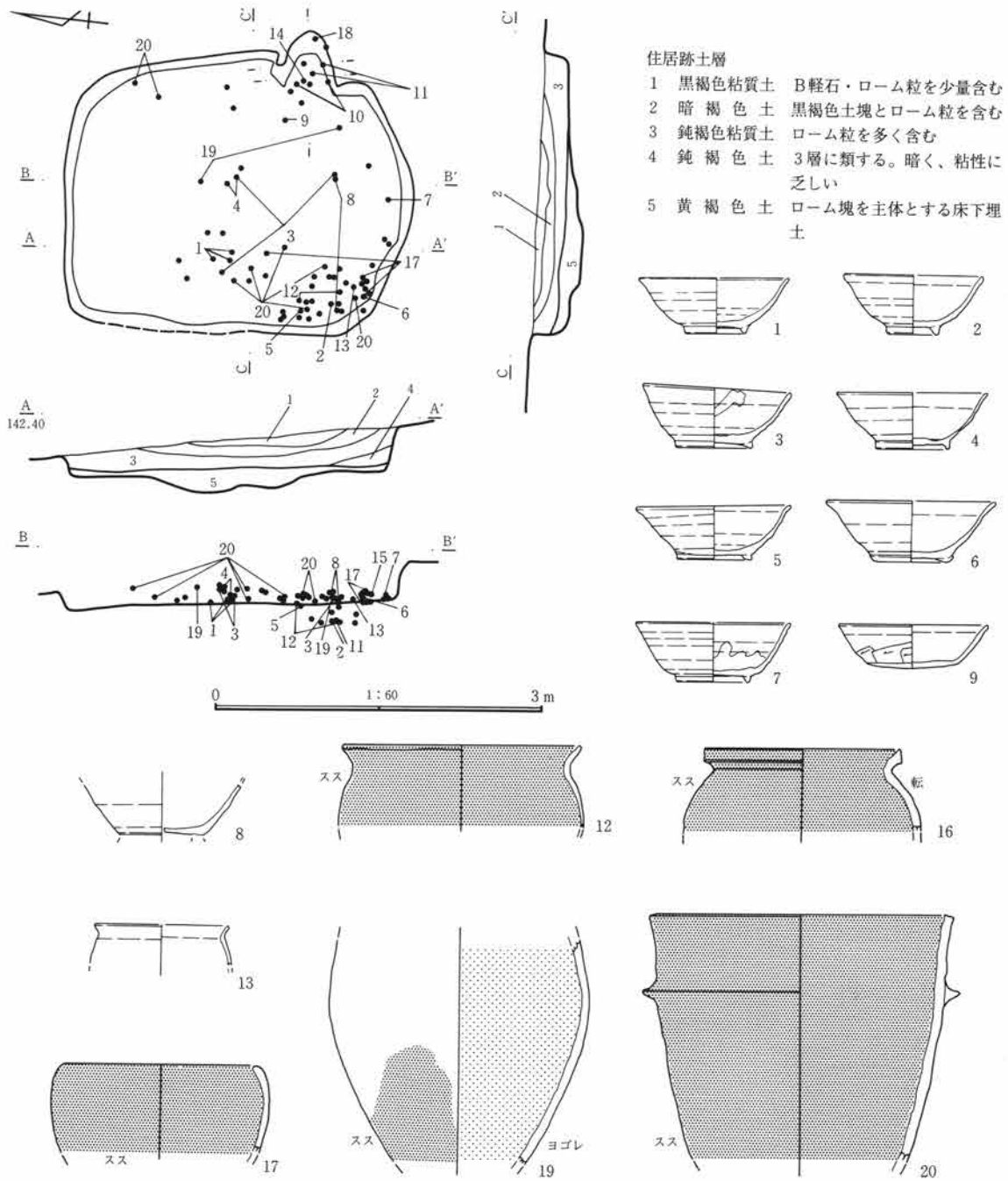
第I台地調査区南西部で検出された。27号住と同様単独の占地であり、北西への急斜面地形に位置する。重複遺構は無く、周辺にも同時期の遺構は存在しない。

平面形は、南北に長軸を持ち、南壁が大きく彎曲する不整長方形を呈す。規模は約3.2×2.5mでやや小型である。深さは遺存の良好な南側で約40cmを測るが、北側傾斜のため平均30cm程度の深さに止どまる。壁はほぼ直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを見せる。また、住居跡西側は、調査当初明確なプランが把握できず、土層観察の結果西壁の一部を確定した経緯がある。そのため西壁北部分は推定線での明示となった。

床面は、北西側へ僅かに傾くが、ほぼ平坦面を意識して築かれる。黄褐色土を基調とした貼床がなされるが、硬化面は広がりを持たず、中央部を中心として点在する程度だった。

柱穴は、床面上では検出されず、床下調査において確認された小ピットも規模・配置に妥当性が薄い。無柱穴の住居跡としたい。

貯蔵穴も床面上では検出されなかったが、床下調



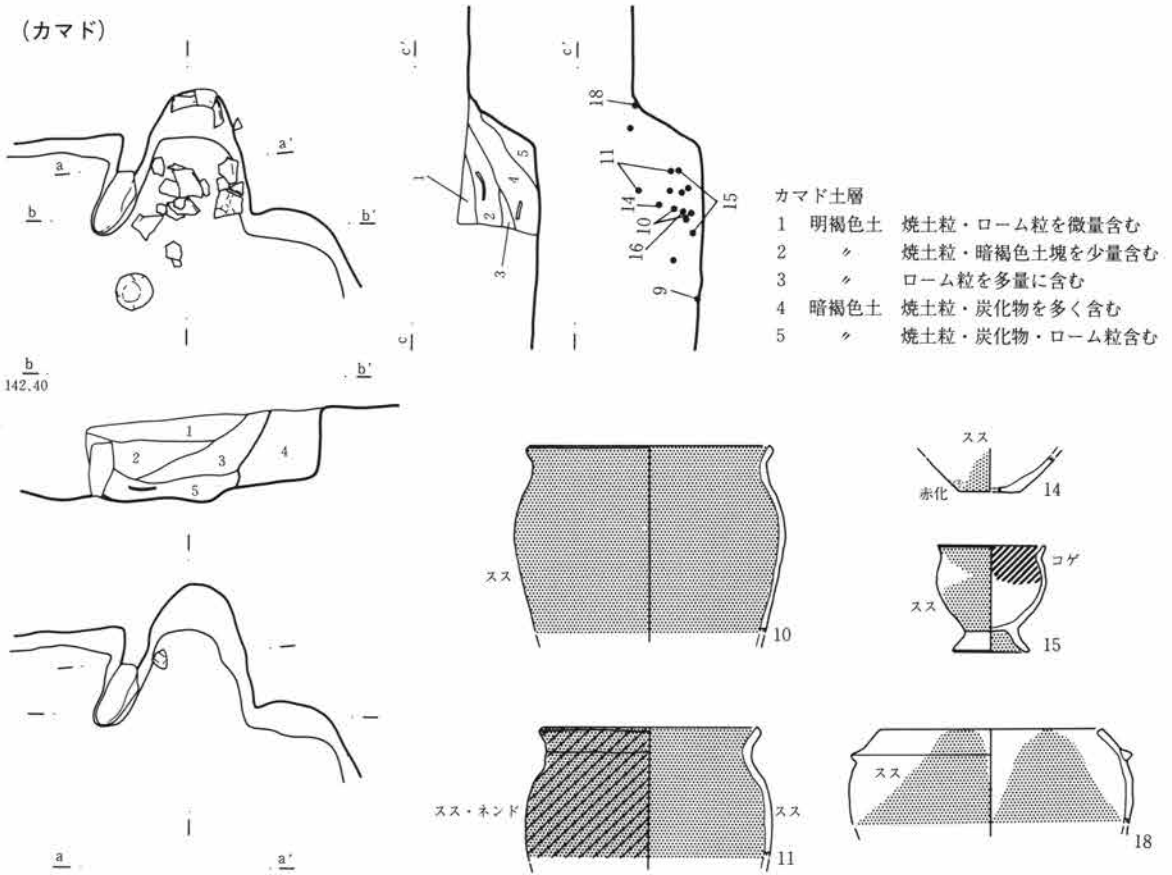
第91図 29号住居跡(1)

第52表 29号住居跡計測表

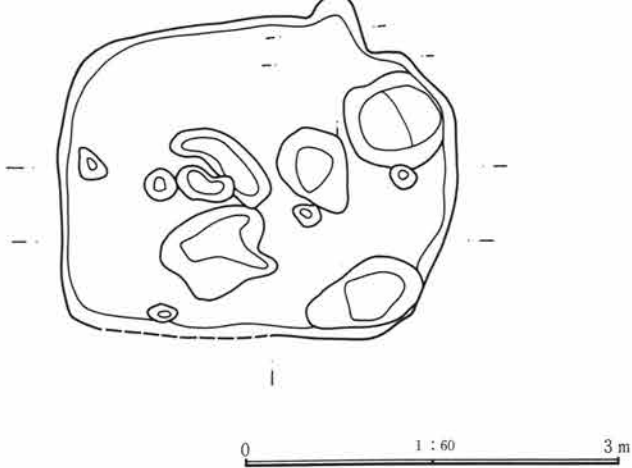
位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
42-17・18	不整長方形	316×250×34	N90°E	N92°E	貯蔵穴・床下土坑	坏1 碗8 甕6 壺1 鉢1 瓶1 羽釜2	

第三章 検出された遺構と遺物

(カマド)



(床下)



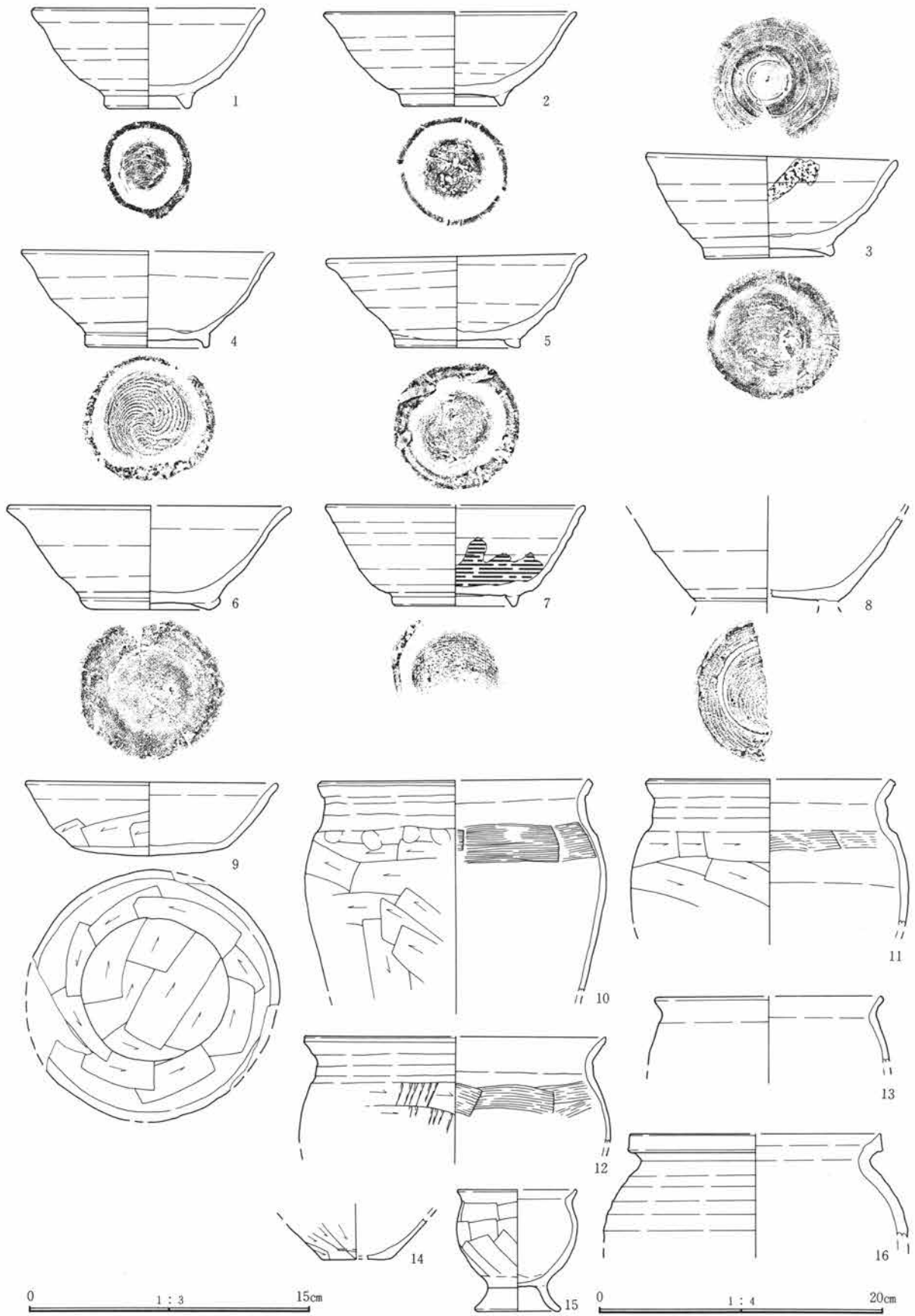
第92図 29号住居跡 (2)

査において東南隅に大型の土坑が確認され、西南隅においても遺物を出土する土坑が確認されている。両者とも配置・出土様相に貯蔵穴としての可能性が高く、貯蔵穴を2箇所にする住居跡と考える。

床下遺構として、不整形の土坑・小ピットが検出されたが、中央やや南寄りの不整形の土坑は床下土坑として位置付けられよう。

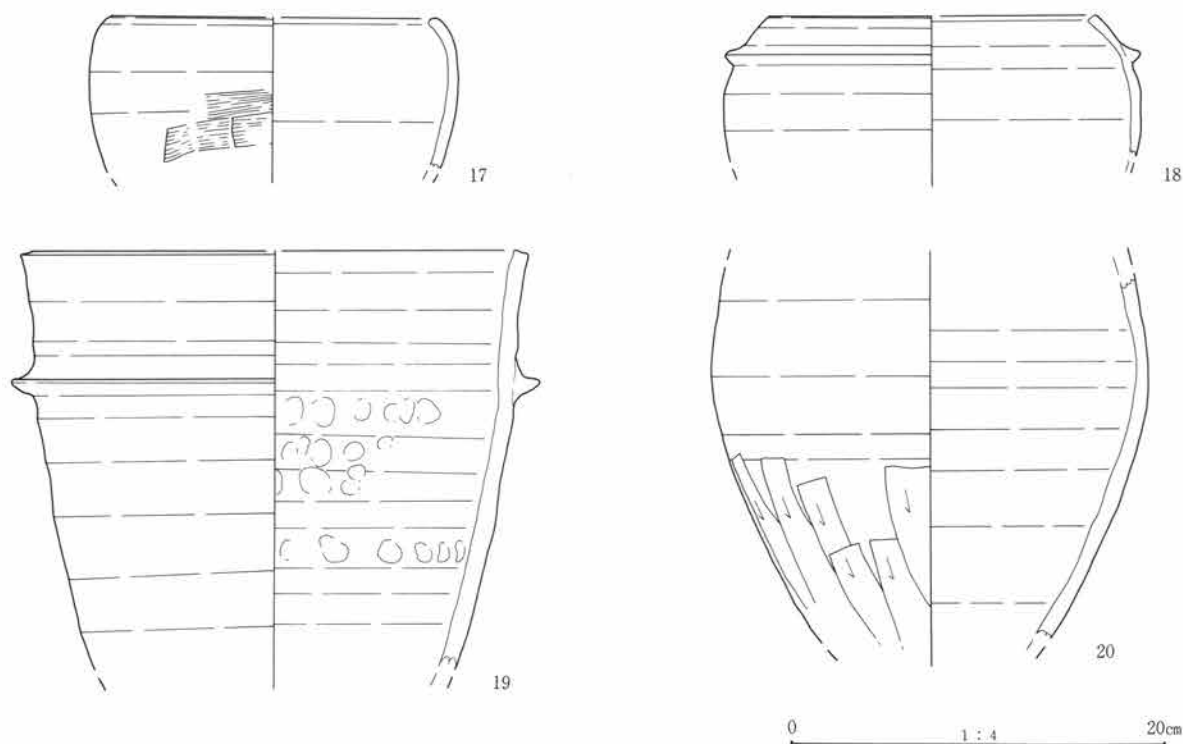
カマドは、東壁南寄りに設けられる。壁外に僅かに突出し、強く立ちあがり、燃焼部はほぼ平坦で、焼土・炭化物を多く散布する。袖は、北側が突出し顕著である。袖石として大型の自然石を埋めて、芯材としていた。南側は隅部の彎曲を利用している。燃焼部北側には、立位の自然石が出土しており、壁体補強材として位置付けられよう。また、煙道部で

第2節 竖穴住居跡



第93図 29号住居跡出土遺物 (1)

第三章 検出された遺構と遺物



第94図 29号住居跡出土遺物（2）

第53表 29号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第93図 図版	1 60	口：(12.3) 高： 5.4 底： 4.3	約1/3 床直	①粗 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部肥厚し体部は中位に丸みを帯びる。小径の高台は直立気味に付される。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に弱い撫でを加える。器厚は比較的薄手。
第93図 図版	2 60	口：(13.3) 高： 5.0 底： 5.2	約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯びる。高台は直立気味に丁寧に貼付される。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に弱い撫でを加える。器厚は比較的薄手。
第93図 図版	3 60	口： 13.4 高： 5.4 底： 6.5	ほぼ完形 覆土下位	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部中位は丸みを帯びる。高台は短く直立する。見込み部は緩やかで内底面の轆轤目強く中心部が凹む。轆轤整形後体部弱い撫で。口縁部内面に油煙が付着する。
第93図 図版	4 60	口：(13.6) 高： 5.1 底： 6.4	約1/2 覆土下位	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部中位は丸みを帯びる。高台は短く直立し歪む。見込み部は緩やかで内底面中央は肥厚する。轆轤整形後体部弱い撫で。器厚は薄手で端正な器形。
第93図 図版	5 60	口： 13.8 高： 4.9 底： 6.6	ほぼ完形 床直	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③白灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部は僅かに丸みを持つ。高台は短く直立し歪む。見込み部は緩やか。轆轤整形後体部下半に弱い撫で。高台接地部に棒状工具の当て目残る。器厚は比較的薄手。
第93図 図版	6 60	口：(14.9) 高： 5.5 底： 6.3	約1/2 床直	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は外反し体部は僅かに丸みを持つ。高台は短く雑に貼付される。見込み部は緩やか。口縁部内外面に微量の油煙が付着する。体部器厚は比較的薄手。外器面摩滅する。
第93図 図版	7 60	口：(13.8) 高： 5.4 底： 6.4	約1/4 南壁下	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部に歪み。口縁部極僅かに外反し体部は下半に丸みを持たせる。高台は短く直立する。見込み部は緩やかな彎曲を呈し、内底面に墨痕が顕著に看取される。器厚は薄手。

第2節 竪穴住居跡

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第93図 8 碗 図版 60	口：－ 高：－ 底：－	約1/4 覆土壁	①粗片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台欠損。体部は直線上に開き、内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に弱い撫でを加える。器厚は比較的薄手。
第93図 9 坏 図版 60	口：13.8 高：3.9 底：－	ほぼ完形 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④土師器	口縁部外反し体部は丸みを帯びて外傾する。底部は平底。口縁部の横撫では強く体部横位斲削り後の調整。体部斲削りは入念で最終的な削りのみを図示した。底面も斲削りを施す。
第93図 10 甕 図版 60	口：(19.5) 高：－ 底：－	口縁～体部 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部僅かに内傾し凹線が巡る。口縁部は比較的短い。上位は外傾し下位は内傾気味に直立する。体部は上半に膨らみを持たせる。口縁部は横撫で、中位と下位に凹線状の強い撫でが平行する。肩部に指頭圧痕が残り、体部上半は横位、下半は斜位・縦位の斲削りを施す。肩部内面の横位斲撫でが顕著。器厚は比較的厚手。
第93図 11 甕 図版 60	口：17.4 高：－ 底：－	口縁～体部 約1/2 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部は丸みを帯び、口縁部上位は外傾、下位は内傾気味に直立する。体部は上半に膨らみを持たせる。口縁部は横撫で。中位と下位の強い横撫では幅広である。体部は横位・斜位の斲削り。内面は横位斲撫で。厚手。
第93図 12 甕 図版 60	口：(22.0) 高：－ 底：－	口縁部 約1/4 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部は直立し凹線が巡る。口縁部は上位が外傾し下位は内傾気味に直立する。体部は上半に膨らみを持たせる。口縁部横撫で。中位と下位の強い横撫では幅広で体部の横位斲削り後の調整である。内面横位斲撫で。
第93図 13 小型甕 図版 60	口：16.2 高：－ 底：－	口縁部破片 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は外傾、頸部「く」字状に屈曲する。体部は緩やかに張る。器厚は薄手。
第93図 14 甕 図版 60	口：－ 高：－ 底：5.0	底部約1/2 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	直線状に強く開く体部器形。外面は縦位・斜位の斲削り。内面は斜位の斲撫でが施される。
第93図 15 台付甕 図版 60	口：8.6 高：8.6 底：5.8	約1/3 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③暗赤灰色 ④土師器	口縁部は短く外傾し体部は中位に膨らみを持たせ球胴状を呈す。下半より脚部にかけて緩やかな彎曲を持って外反する。口縁部と脚部は丁寧な横撫で。体部は上半が横位、下半が斜位の斲削り。内面は撫で。
第93図 16 甕 図版 60	口：(18.0) 高：－ 底：－	口縁部 約1/4 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は狭く直立する。口頸部も短く、頸部は緩やかに彎曲する。体部は上半～中位に膨らみを持たせる。外面の轆轤目は比較的強い。内面下半は器壁の剥落著しい。
第94図 17 鉢 図版 61	口：(16.6) 高：－ 底：－	口縁部破片 覆土下位	①粗石英 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	轆轤整形。回転方向不詳。口縁部内彎し体部上半～中位に膨らみを持たせる。内外面とも横位斲撫でを入念に施すが外面下半に顕著である。器厚は比較的薄手。
第94図 18 羽釜 図版 61	口：18.0 高：－ 底：－	口縁部 約1/2 カマド	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部強く内傾し鑊は僅かに内傾気味に貼付される。鑊端部は丸みを帯びる。体部は上半に膨らみを持たせる。口縁部は横撫で、鑊貼付時の横撫では丁寧。内面口唇部に指頭圧痕が残る。器厚薄手。
第94図 19 甕 図版 61	口：(26.4) 高：－ 底：－	口縁～体部 破片 覆土下位	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口縁部は長く外傾する。鑊は僅かに上位を向き端部は鋭い。体部は若干の膨らみを持つが口縁部と一体化しほぼ直線状に落ちる。内外面とも轆轤整形後弱い横撫でを加える。厚手の器厚。
第94図 20 羽釜 図版 61	口：－ 高：－ 底：－	体部約1/2 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。体部中位に膨らみを持たせる。轆轤整形後に弱い撫でを加え、下半は縦位の斲削りを施す。内面も撫で。器厚は厚い。

第三章 検出された遺構と遺物

は羽釜口縁部が逆位で出土するが、破片転用と考える。さらに、中央から南側にかけて土師器甕が出土しており、これは煮沸具の残存と考えておきたい。このように、袖石や煮沸具の残存を念頭に置くと、カマド土層においては崩壊土が確認されているものの、強力なカマド破壊行為は観察できない。自然営力による崩壊と捉えたい。

さて、29号住居跡出土遺物は量的にも多く、20点を図示し得た。遺物の分布はカマド及び周辺、中央部、西南隅に集中が見られる。出土層位も覆土下位より床直の出土が多く、上層の流入を示唆する遺物は少量と捉えた。カマド出土のものは、前述のように羽釜(18)が煙道部に、土師器甕(10・11・14・15)が燃焼部で出土した。また、土師器坏(9)が前庭部床直で出土している。中央部は散漫な出土とはいえ、須恵器高台付碗(1・3・4)と甑19がまとまる。1は床直、3・4は覆土下位の出土で、19も覆土下位だが、カマド前庭部で出土する体部大型破片は床直である。本住居跡で最も集中の偏る地点は南西隅であろう。前述の床下調査で得られた貯蔵穴出土のものが主体であり、床面精査の段階である程度の集中が見られ、貯蔵穴検出後も埋土中からもまとまった出土が見られた。ある程度の一括性は保証されよう。高台付碗(2・5・6)、土師器甕(11・12)、須恵器小型甕(13)が出土しており、完形の2以外はすべて破片状態だった。またこの西南隅貯蔵穴内および周辺からは、羽釜体部(20)や碗(8)・鉢(17)が散乱していた。20は東壁際にまで分布を広げる。南壁下の遺物分布区域では墨痕を残す碗(7)が破片状態で出土している。

以上のように、本住居跡出土遺物はカマド煮沸具さらに床直出土遺物、貯蔵穴出土遺物と分別され、相応に居住・廃絶に伴った出土状態を示すものと考えられる。ただ、完形個体の出土は少なく、各個体の遺存度等は検討課題として残るが、出土遺物の様相から9世紀末～10世紀初頭期の段階を充て、先に述べた27号住に若干先行する傾向が見いだせよう。

30号住居跡

第I台地調査区西側の急斜面地形で検出された。第I台地では最西端の住居跡といえよう。急斜面は北側へ傾き、そのため本住居跡の北半は大きく流失していた。周辺の遺構は少なく、近接する住居跡や重複も無い。27号・29号住居跡と同様に居住に適さない地点での単独占地である。

平面形は、判然としないが東西軸長2.5mを主軸とした長方形を呈するものと思われる。図破線は推定線であり確定性を持たない。深さも遺存の良い南壁で僅か10cm程度であり、極めて不良の遺存状態である。

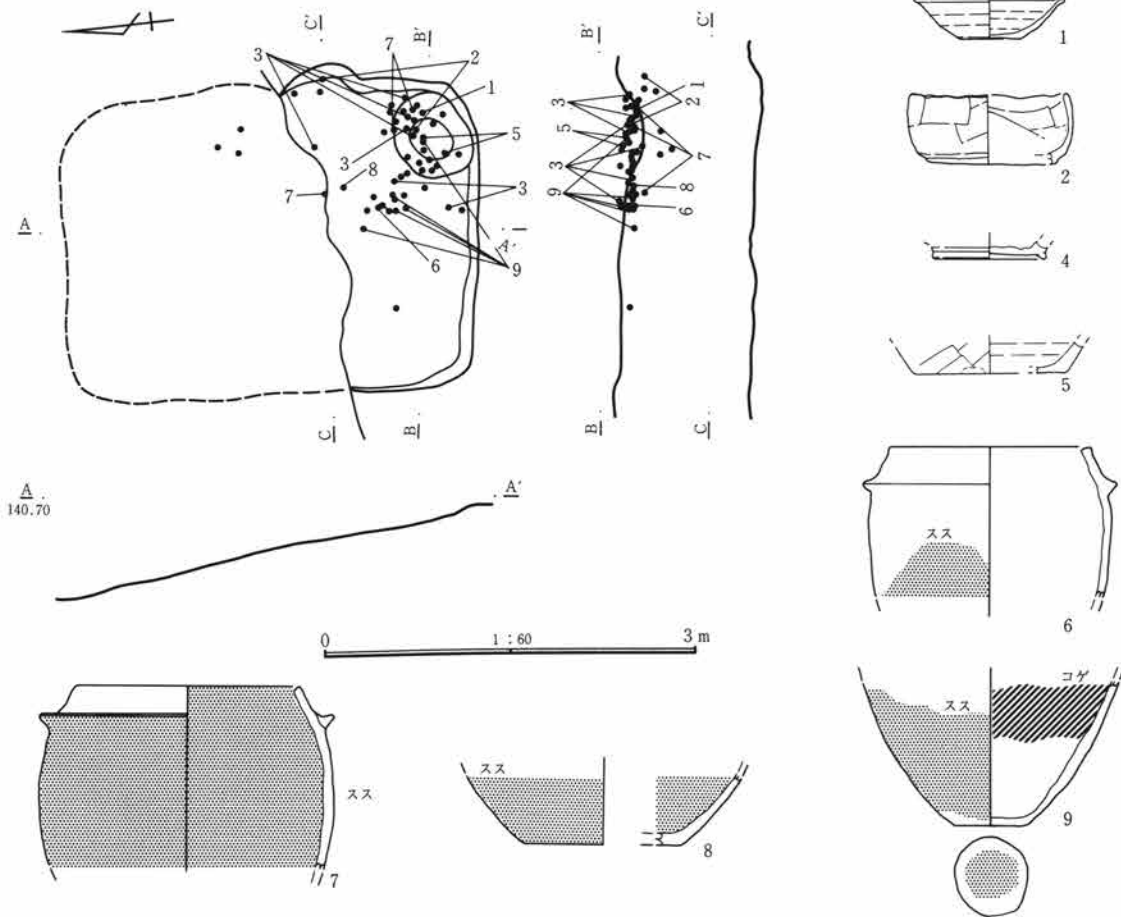
土層の観察においても、流失部が多く床面の判断にも困難が伴った。住居跡確認時において、既に地山ロームが露出しており、貼床の有無も判然とせず、地床表現で住居跡遺存部を確定した。床面の傾斜は東西軸においては僅かな凹凸があるものの、平坦面は保証されている。ただし、北側は遺存が悪く判断は控えるべきだが、おそらく傾斜に影響されたものと思われる。

柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は東南隅に浅い土坑が検出され、これを充てたい。約70×50cm不整楕円形状の平面形で丸底の坑底面を呈し、遺物の出土を見る。

床下遺構も検出に努めたが、確認できなかった。カマドは、東壁に設けられていたが、掘り込みも浅く微量の焼土粒が散布するのみで、遺存状態は極めて悪い。馬蹄状の燃焼部で煙道部を僅かに壁外に突出するし、緩やかな立ち上りを呈す。袖は顕著ではなく、袖石等の構築材や抜き取り穴も検出されなかった。遺物は数点が出土しているが、カマド構築・煮沸に伴う所産とは思われない。

本住居跡出土遺物は、遺存状態に比例して少ない。しかしながら、接合関係が頻繁であり、10個体が図示し得た。分布は貯蔵穴とその周辺に偏り、ほぼ床直である。貯蔵穴より出土したものは須恵器坏(1)、土師器坏(2)、甕底部破片(5)、羽釜口縁部破片(7)等である。貯蔵穴周辺では、須恵器



第95図 30号住居跡

第54表 30号住居跡計測表

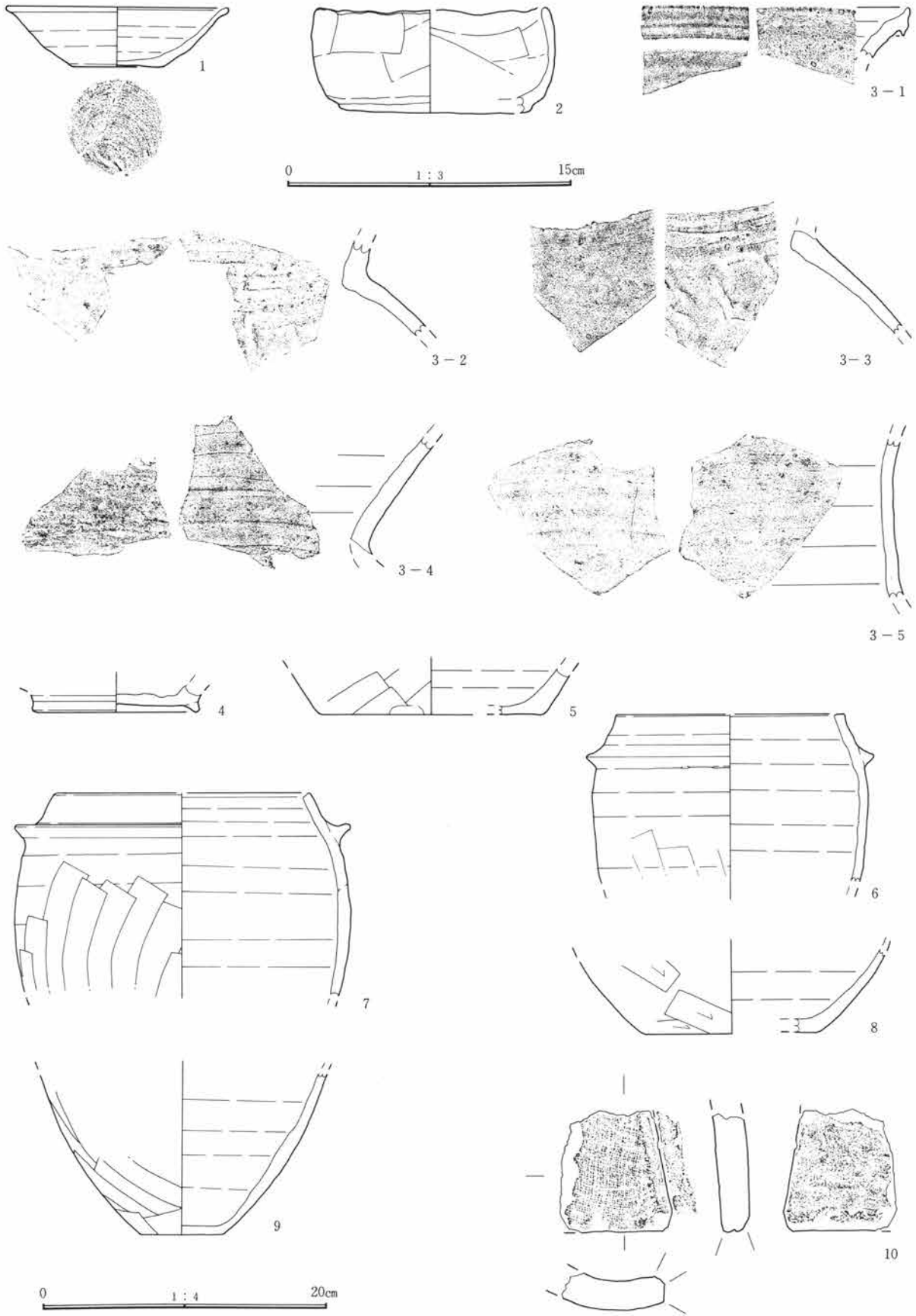
位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
45・46-14	長方形	250× - × 10	-	N95°E	貯蔵穴	坏1 碗1 甕2 壺1 羽釜4 瓦1	

大甕破片（3-1～5）、羽釜底部（9）が見られ、やや距離をおいて、羽釜（6・8・9）が破片状態で出土している。尚、4の壺底部破片、10の平瓦破片は出土地点の記録が無く、覆土出土扱いとしたが、床直上出土と捉えられる。

以上のように、本住居跡出土遺物は住居跡自体の遺存不良に比して、接合関係等から多くの個体を得た。出土位置も貯蔵穴、床直であり、本住居跡の居住・廃絶に伴う背景を整えている。しかしながら、本住居跡の遺存、さらには占地する急傾斜地形という要素を重視すると、出土遺物すべてに本住居跡と

密接な関連を求めるのは無理がある。出土遺物の殆どが破片状態の出土であり、接合関係の方向も傾斜に沿うことから、破片流入あるいは埋没前の廃棄行為が想起され、本住居跡居住～廃絶には積極的な関連を持たせられず、やや消極的な遺物と判断したい。ただし、出土遺物の時期幅はある程度狭く流入時期は一時期の所産と考えられよう。本報告では10世紀前半段階を充てたい。

第三章 検出された遺構と遺物



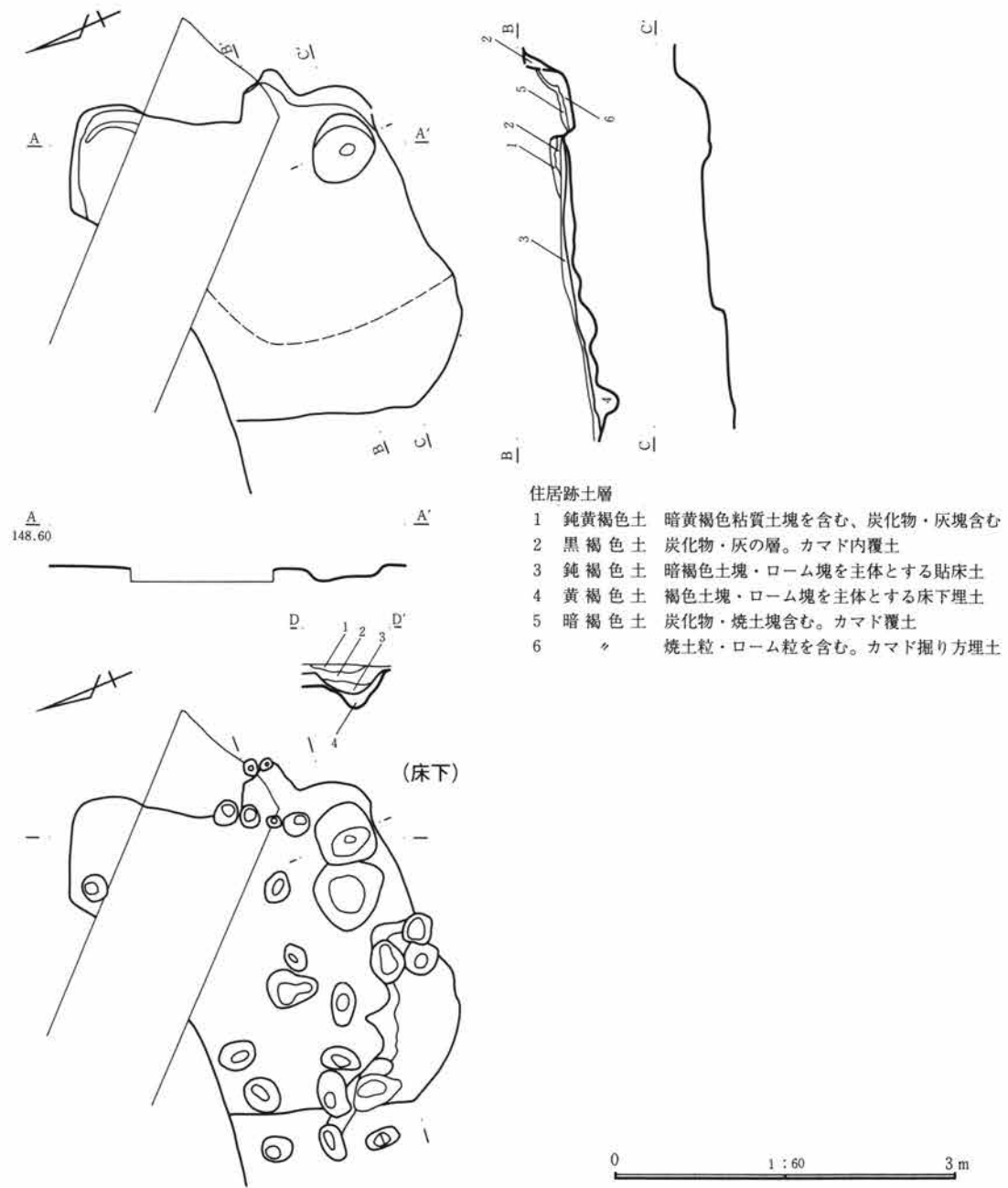
第96図 30号住居跡出土遺物

第2節 竪穴住居跡

第55表 30号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第96図 1 坏 図版 62	口： 11.9 高： 3.2 底： 4.8	約3/4 貯蔵穴	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部外反し体部に緩やか丸みを持たせる。底部は僅かに立つ。内面見込み部は緩やか。器厚は薄く端正な作り。
第96図 2 碗 図版 62	口： 12.0 高： 5.4 底： (9.5)	約1/2 カマド貯蔵穴	①粗片岩 石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁～体部著しく歪む。口縁～体部一体化し内彎する。底部は平底で、立ち上がりを持つ。内外面とも横位篋撫を施す。手捏ねの印象をも与える雑な作りである。
第96図3-1 大甕 図版 62	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 貯蔵穴周辺	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	5点とも同一個体。その他数点の体部破片が出土している。輪積後叩き整形。口縁端部は直立し丸みを帯びる。口頸部は強く外反し、頸接合部屈曲する。肩部で大きく張り、おそらく体部上半～中位に膨らみを持たせる。内面口縁部は顕著な横撫でが凹線状に巡る。頸部は若干肥厚気味である。叩き整形後体部外面は丁寧に撫でを施す。体部内面には青海波文が残る。頸部接合痕明瞭。器厚は大型器種としては薄手。
第96図3-2 大甕	口： - 高： - 底： -	頸部破片 貯蔵穴周辺	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	
第96図3-3 大甕 図版 62	口： - 高： - 底： -	頸部破片 貯蔵穴周辺	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	
第96図3-4 大甕	口： - 高： - 底： -	頸部破片 貯蔵穴周辺	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	
第96図3-5 大甕 図版 62	口： - 高： - 底： -	頸部破片 貯蔵穴周辺	①粗片岩 白色粒 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	
第96図 4 壺	口： - 高： - 底： 12.0	底部破片 覆土	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	轆轤整形後高台貼付。轆轤回転方向不祥。体部下半強く開く兆しを見せる。高台は短く開き気味に直立する。貼付は丁寧。底部器厚は薄手。割れ口に煤が付着する。
第96図 5 甕 図版 62	口： - 高： - 底： -	底部破片 貯蔵穴	①粗 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	輪積後轆轤整形。回転方向不祥。底部径広く体部下半は強く開く。体部は斜位の篋削り後撫で、底面も撫でが加わる。体部器厚は厚く、底部は著しく薄手。
第96図 6 羽釜 図版 62	口： (16.2) 高： - 底： -	口縁～体部 約1/8 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後左回転轆轤整形。口縁部内傾し鑄はほぼ水平に貼付される。体部は上半に緩やかな膨らみを持たせる。口縁部は横撫で、鑄貼付時の横撫ではやや雑。体部中位は篋削り後撫で。やや薄手の器厚を呈す。
第96図 7 羽釜 図版 62	口： (18.2) 高： - 底： -	口縁～体部 約1/5 貯蔵穴	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③赤褐色 ④須恵器	輪積後左回転轆轤整形。口縁部内傾し鑄はやや上位を向く。体部は中位に膨らみを持たせ、球胴状をなす。口縁部は横撫で、鑄貼付時の横撫では丁寧に、鑄下位が外反する。体部上半～中位篋削り後撫で。やや薄手。
第96図 8 羽釜 図版 62	口： - 高： - 底： (12.4)	底部破片 床直	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	輪積後回転轆轤整形。回転方向不祥。底径広く、体部下半は大きく開く。体部外面は撫で後斜位の篋削りを施す。やや厚手の器厚を呈す。
第96図 9 羽釜 図版 62	口： - 高： - 底： 5.6	体部～底部 約1/2 貯蔵穴周辺	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	輪積後左回転轆轤整形。体部中位～下半緩やかな膨らみを持たせる。底径は比較的小さい。外面は縦位・斜位の篋削り後弱い撫でを加える。内面の撫でによる凹凸著しい。やや薄手の器厚。
第96図 10 平瓦 図版 62	厚： 2.0	破片 覆土	①粗片岩 ②還元焰 ③褐色 ④	凸面は削り後入念な撫で。凹面は布目。端部の面取りは1回、側部は2回以上。厚手。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第97図 31号住居跡

第56表 31号住居跡計測表

位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
85-27・28	不整正方形	284×274×30	N105°E	N101°E	貯蔵穴・床下土坑		18号住居 19号住居

31号住居跡

第Ⅱ台地調査区南東部で18号住と重複して検出された。また、試掘坑も東壁から北西隅にかけて走り、本住居跡を大きく壊していた。

平面形は、軸長約2.8mの不整正方形を呈す。深さは、遺存の良好な北東隅付近で約30cmを測るが、他は殆どが北側と西側への斜面のため逸失しており、浅く判然としない。

壁は北東隅において直立気味の立ち上がりが確認された。また、南東隅付近の遺存も比較的良好で、緩やかな立ち上がりを呈す。

床面の遺存は不良であり、東半のみが遺存していた。黄褐色土により貼床がなされていたが、硬化面は確認されなかった。

柱穴は床面上で検出されず、床下調査で検出に努めたが、確定的なピットを得られなかった。

貯蔵穴は、東南隅の土坑を充てる。不整円形の平面形を呈し、浅く丸底の坑底面を見せる。

床下調査において、小ピットを多数検出したが、本住居跡内の施設として積極性を持たない。しかし、貯蔵穴西側に接して、ほぼ同規模の土坑が検出された。貯蔵穴と関連性を持つ床下土坑としたい。

カマドは東壁やや南寄りに設けられる。煙道部は強く立ち上がり、壁外に突出する。住居土層において焼土塊・炭化物を確認したが、上部構造を示唆する土層は観察に至らず、不明である。袖石等の出土も無く、構築材の有無は不明である。ただ、使用面下調査において、小ピットを数基検出したが、あるいは抜き取り穴の可能性もある。

遺物は出土せず、住居跡の時期・段階は不明である。また、18号住との重複関係も、重複部分の遺存が悪く判然としない。時期不明の住居跡としたい。

第3節 土坑・墓壙

(土坑) 本遺跡で検出された土坑は55基である。そのうち47基が第Ⅰ台地調査区で確認されており、住居跡同様、土坑も平坦地形を選ぶ傾向が理解されよう。

土坑の多くは、古代・中～近世の所産と思われ、縄文・弥生・古墳時代の土坑は見られない。この時期半別は遺物が主体的に出土した例が少ないため、埋土や形状、周辺遺構の様相から判断した。

本報告では、個々の土坑の説明を省き特徴性を持った土坑をまとめて述べてみたい。各土坑の計測値や位置等は57表を参照していただきたい。

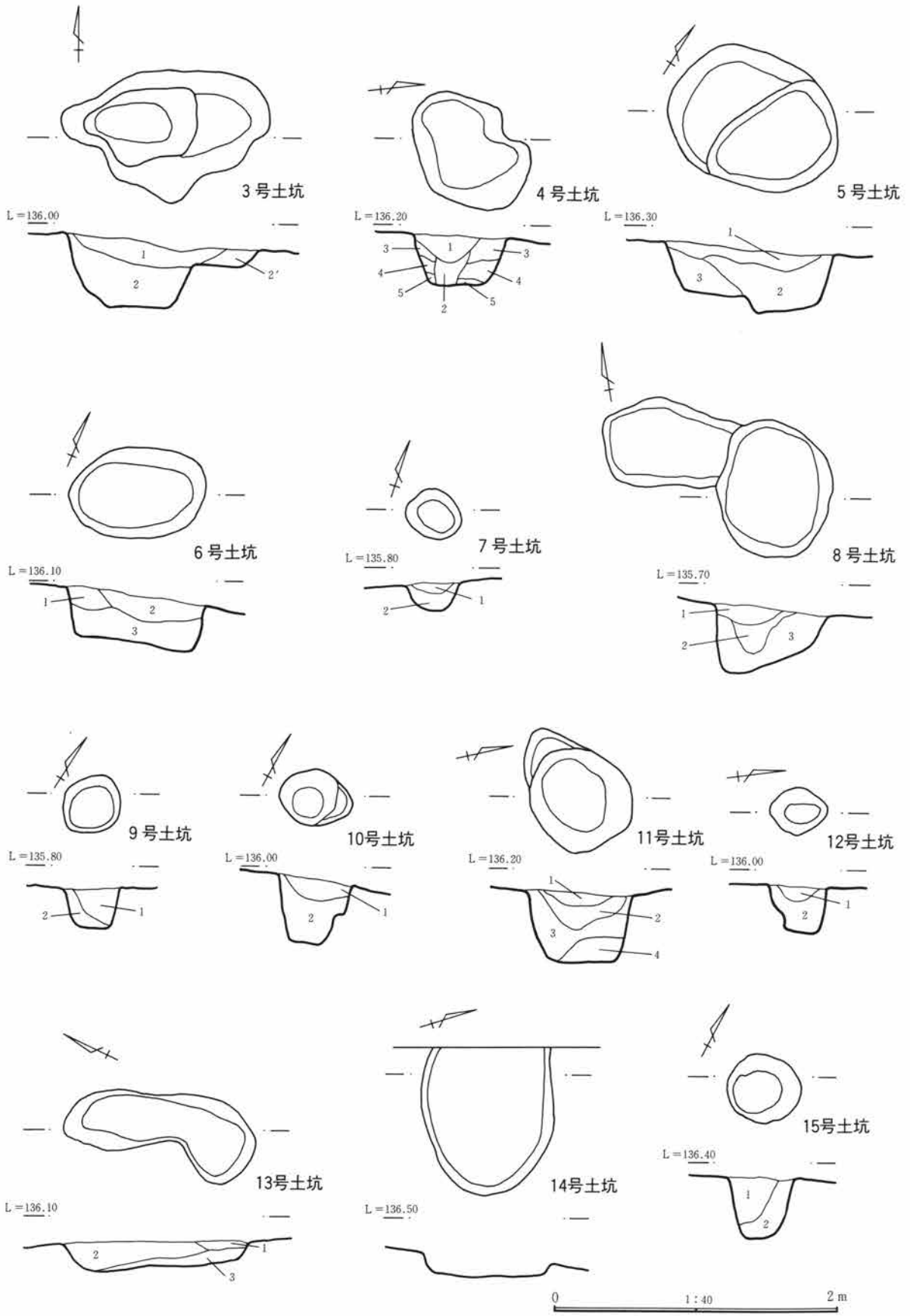
尚、1号土坑・2号土坑は欠番である。調査中に、1号土坑は3号墓壙に名称を変更している。

奈良・平安時代に比定される土坑としては、20号～24号土坑が充てられよう。埋土の特徴として斑状堆積であり、同様に位置する1号住や9号住の覆土と近似している。4基とも径約1.1～1.3mの円形を呈し、坑底面は平坦で、直立気味の壁を持つ。用途は不明だが有機的な性格と捉えたい。また、48号土坑は第Ⅰ台地調査区ほぼ中央に位置する大型方形土坑だが、調査当初28号住居跡として着手された経緯がある。完形の短頸壺と須恵器大甕口縁部破片が出土しており、該期の所産と考えたいが、埋土にAs-Aを含むことから問題が残る。あるいは墓壙が重複していたのであろうか。

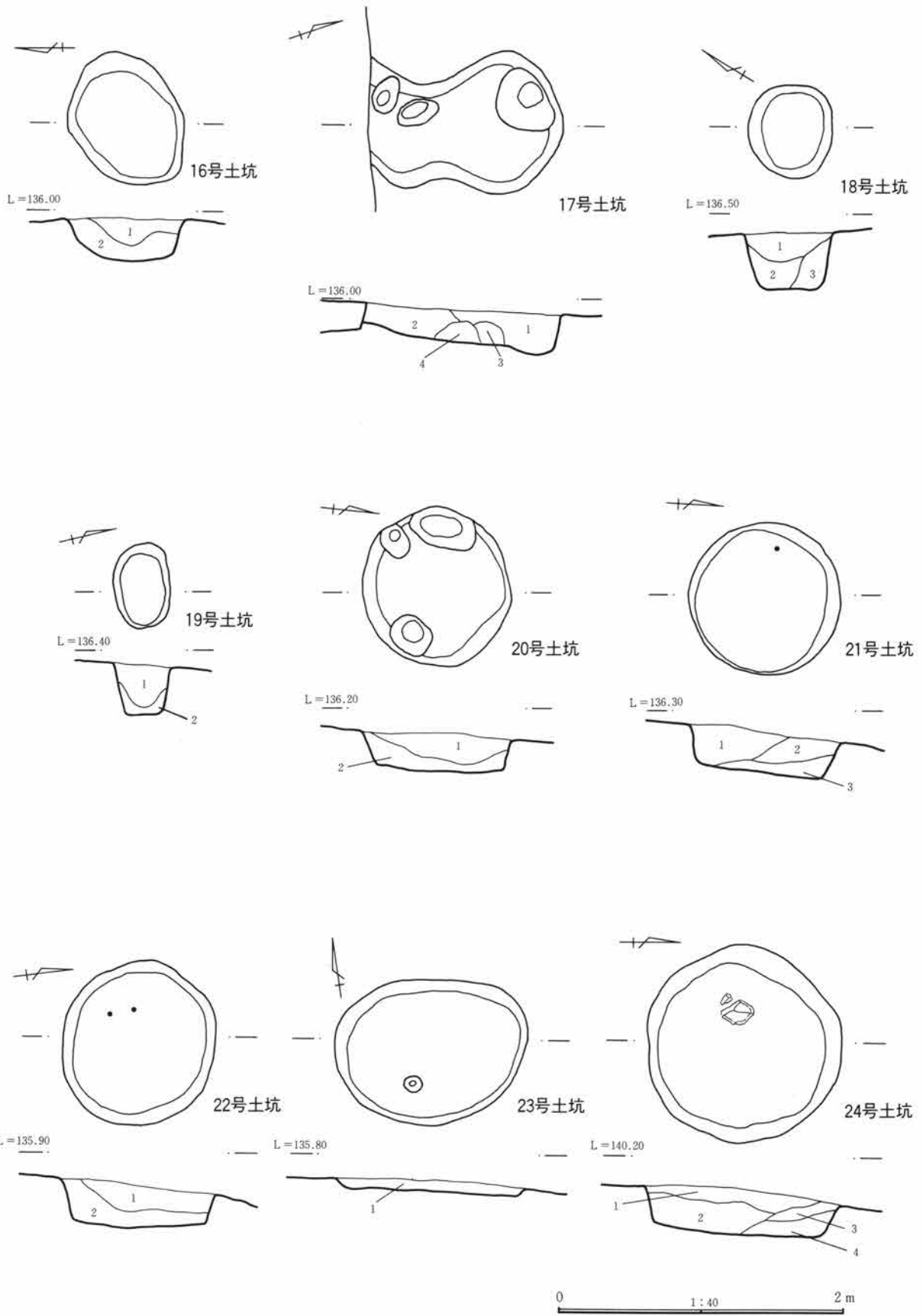
次に第Ⅱ区調査区では、50～54号土坑が該期の所産と捉える。特に52号・53号土坑は住居を切っているが埋土の特徴は、埋土はこの段階の特徴を備えており、周辺の住居跡群にかかわる性格が想起されよう。

埋土中にAs-Bを含む土坑としては、25～27号・30号・32号～41号・46号・47号土坑が挙げられ、比較的多く見られた。ただし純層でAs-Bが堆積する例は無く、混入層として捉えた。25号～27号土坑は4号住・5号住の西で一群をなす。34号～38号・40号土坑は27住と29住の間で一群をなす。いずれも

第三章 検出された遺構と遺物

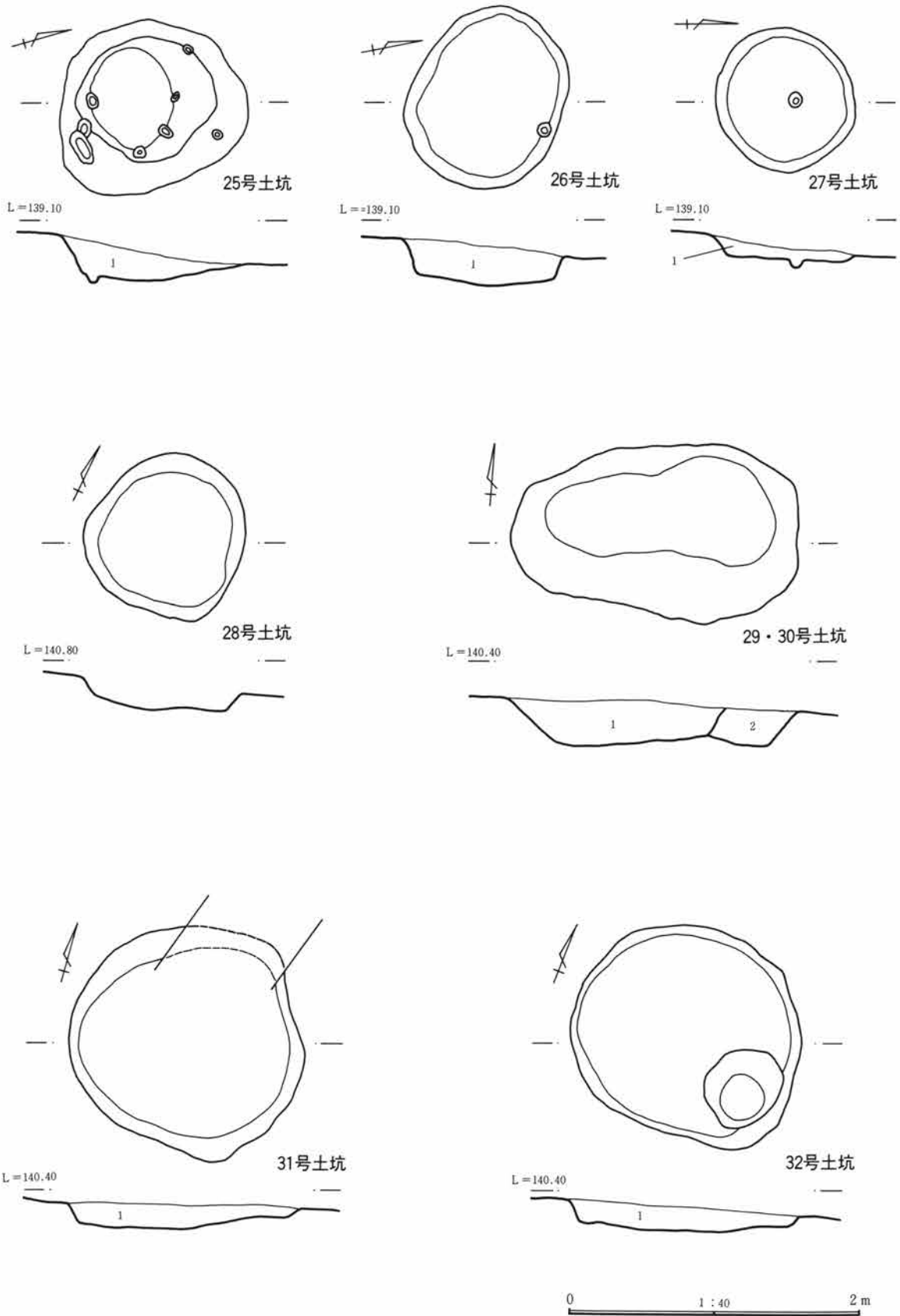


第98図 土坑 (1)

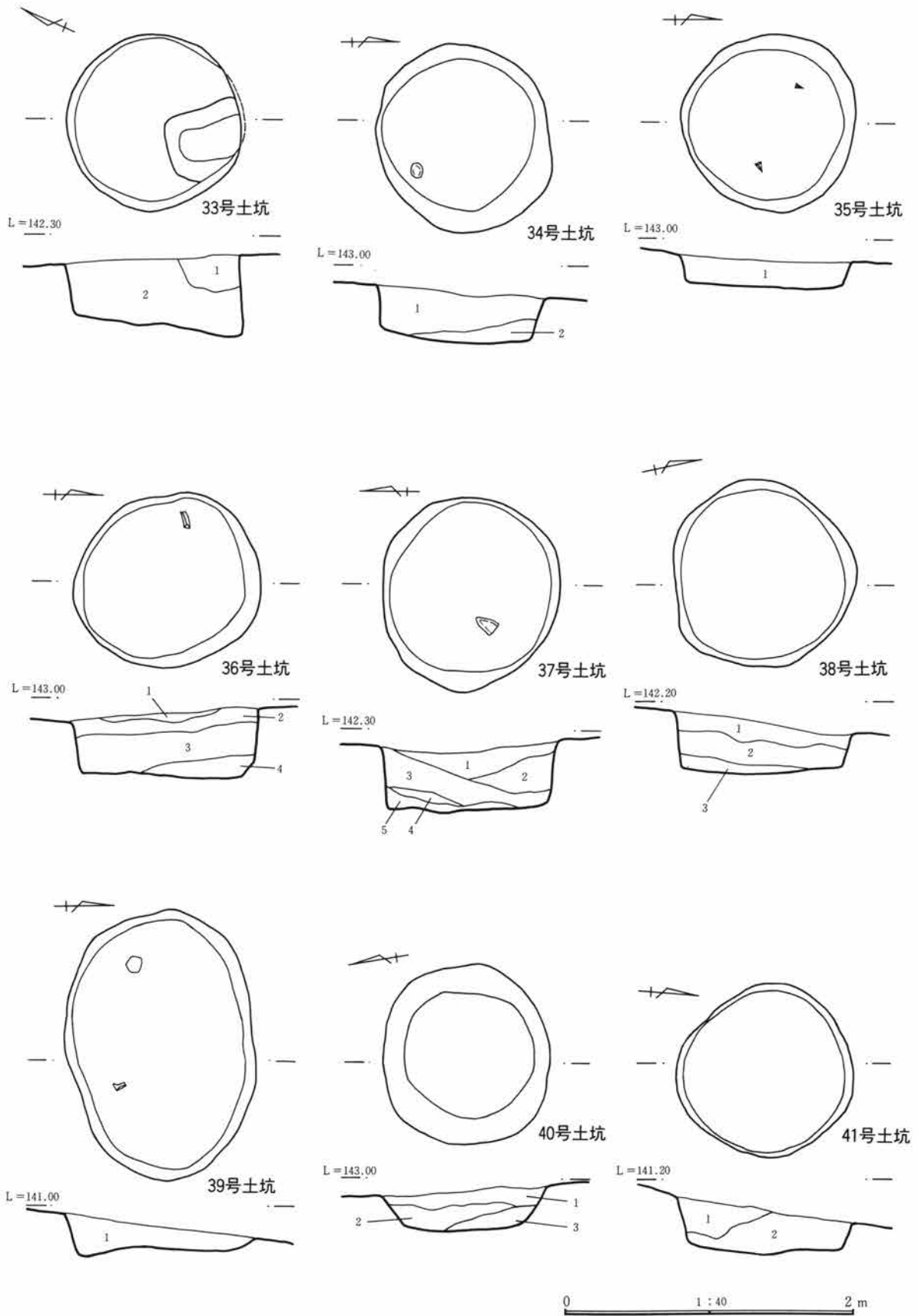


第99図 土坑 (2)

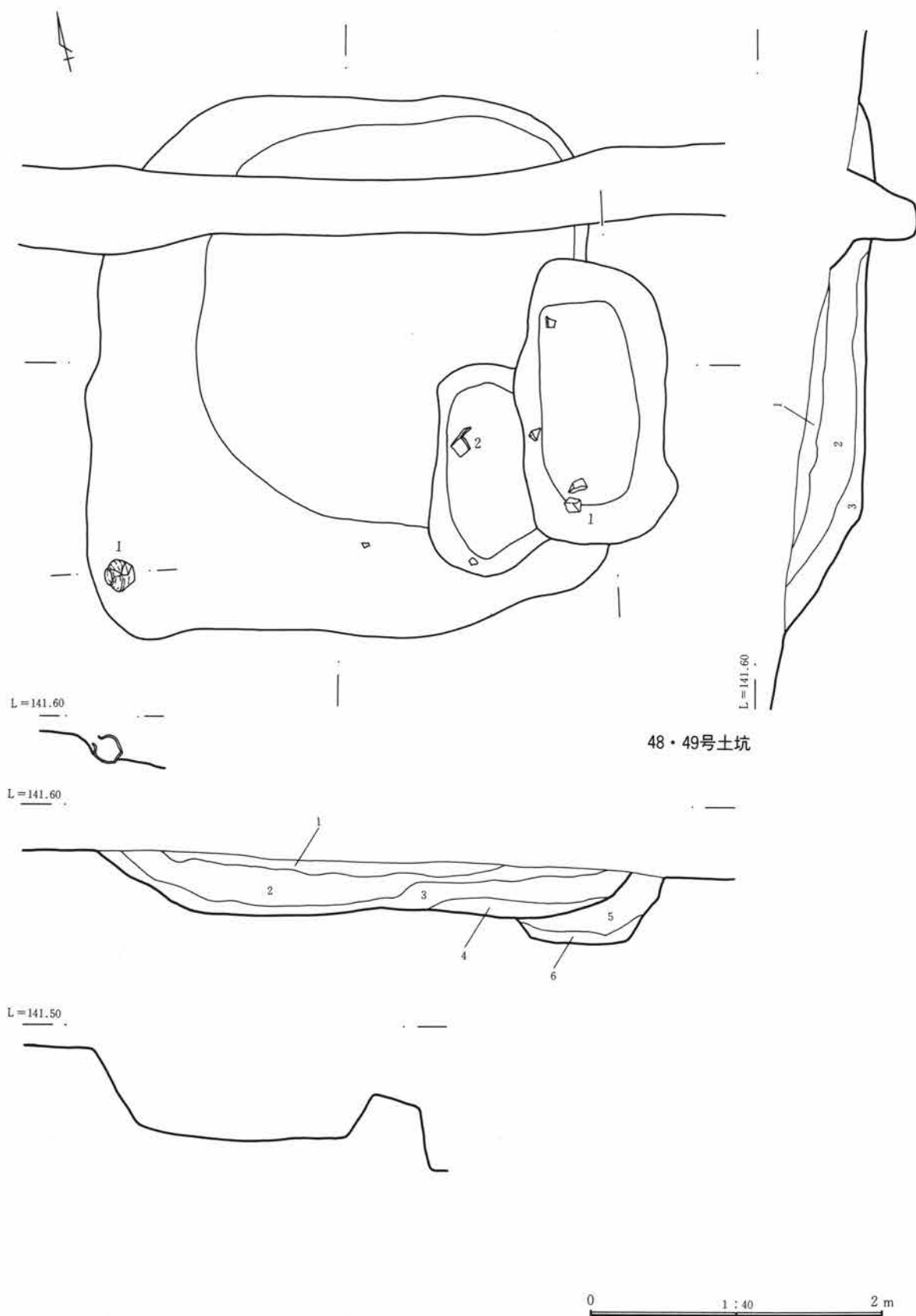
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第100図 土坑 (3)

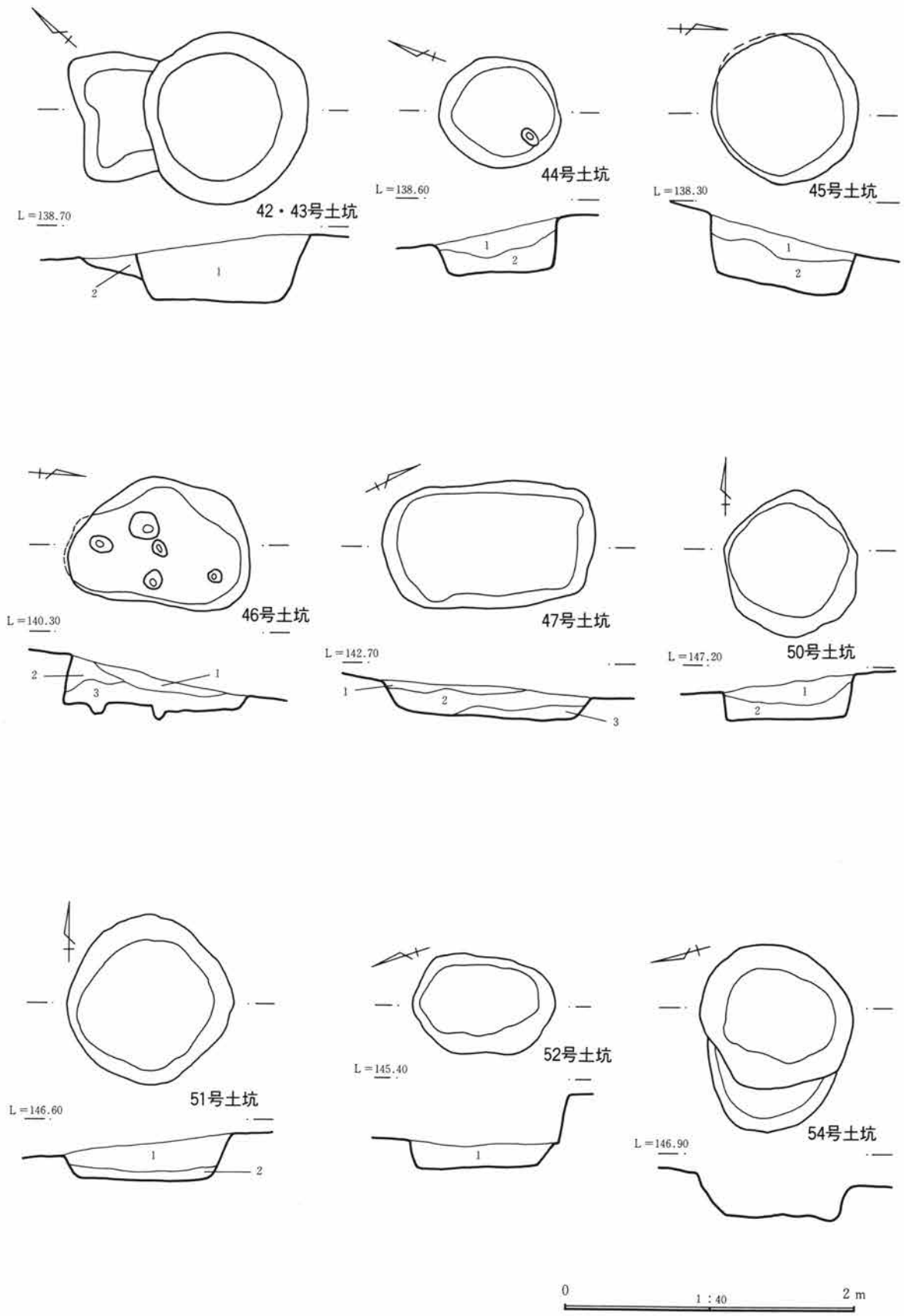


第101图 土坑(4)

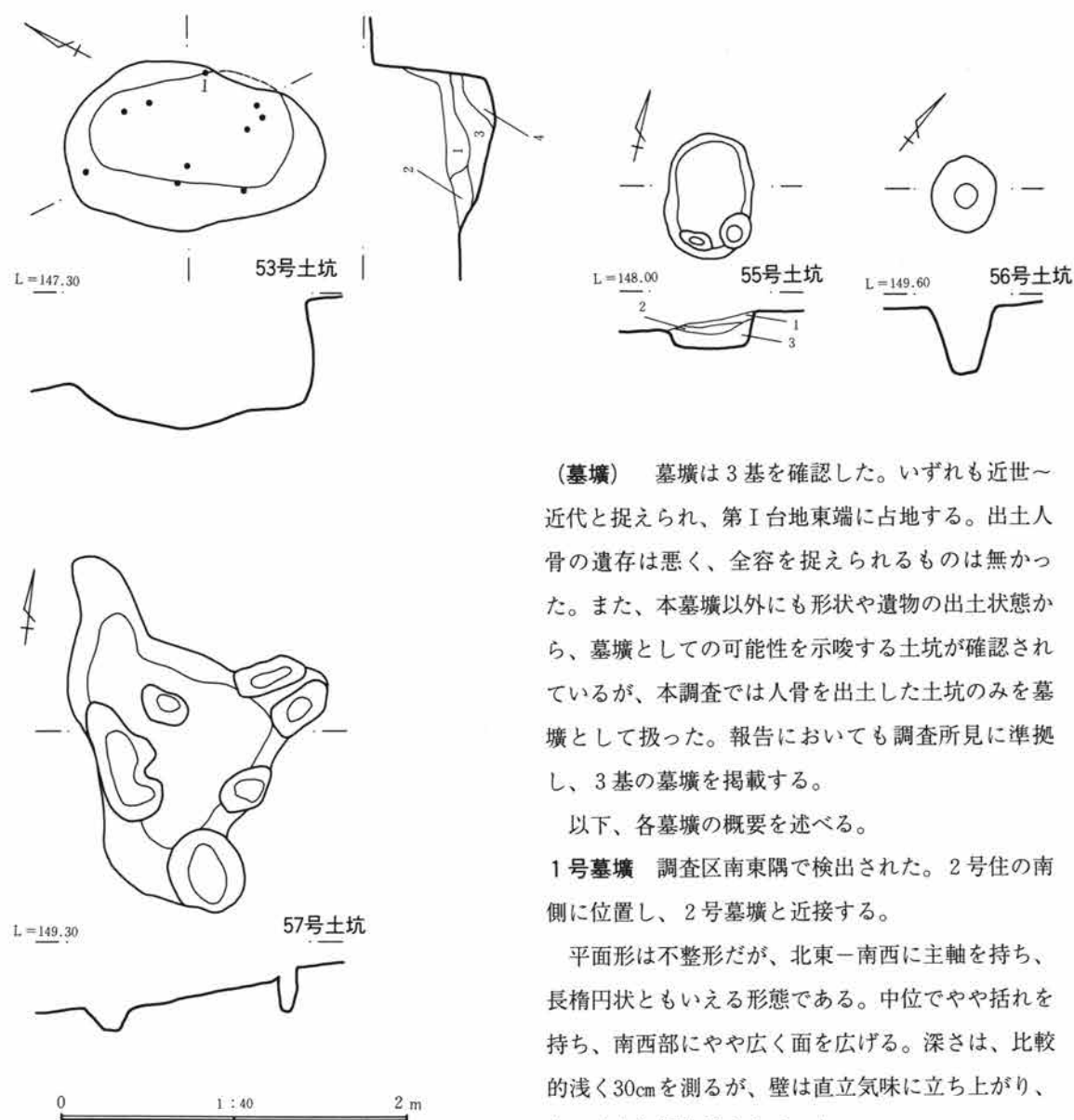


48・49号土坑

第102図 土坑(5)



第103図 土坑 (6)



第104図 土坑(7)

径1 m前後の掘り込みのしっかりした円形土坑が主で、重複せず単独で検出されている。あるいは2基1単位といった関連性も想定でき、有機的な性格が想起される。中世の所産であろうか。

As-Aを埋土中に含む土坑としては1号~19号土坑が第I台地調査区東部の7住北で群在する。周辺の溝あるいは溝状土坑も近世~近代の所産と思われる、屋敷跡の存在も考えられるが、掘立柱建物跡等は検出されず確定的ではない。

(墓壙) 墓壙は3基を確認した。いずれも近世~近代と捉えられ、第I台地東端に占地する。出土人骨の遺存は悪く、全容を捉えられるものは無かった。また、本墓壙以外にも形状や遺物の出土状態から、墓壙としての可能性を示唆する土坑が確認されているが、本調査では人骨を出土した土坑のみを墓壙として扱った。報告においても調査所見に準拠し、3基の墓壙を掲載する。

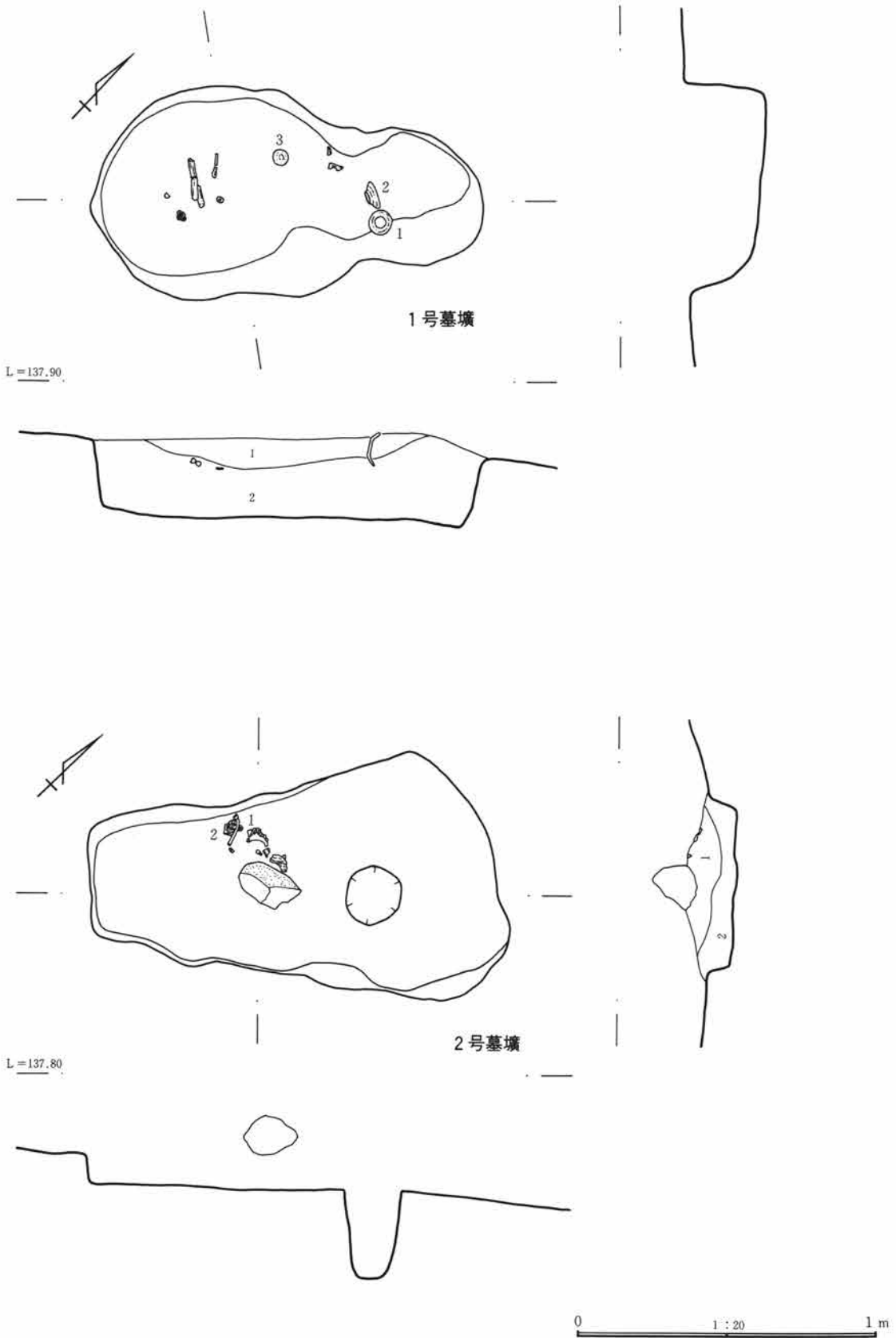
以下、各墓壙の概要を述べる。

1号墓壙 調査区南東隅で検出された。2号住の南側に位置し、2号墓壙と近接する。

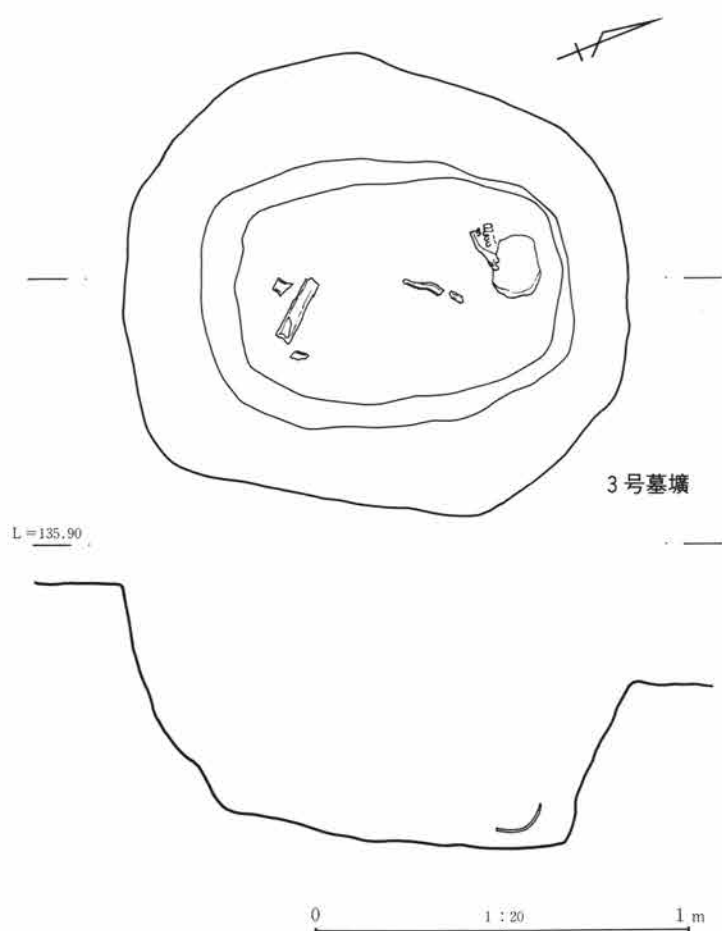
平面形は不整形だが、北東-南西に主軸を持ち、長楕円状ともいえる形態である。中位でやや括れを持ち、南西部にやや広く面を広げる。深さは、比較的浅く30cmを測るが、壁は直立気味に立ち上がり、しっかりと掘り込まれていた。

壙底面は僅かな凹凸を持って、緩やかな傾斜を北東側へ持たせるが、平坦面が意識されたものと思われる。

出土人骨の遺存は悪く、大腿骨1点と骨片が出土したのみである。上層の出土であり、そのため人骨の主要部分は攪乱を受け散逸したと思われる。その他の出土遺物として、完形の土師質小皿2点が南東部より浮いた状態で出土し、また磁器小坏1点が中央やや北寄りの上層から出土している。また、古銭(134図)やガラス小玉も人骨周辺から出土している。



第105図 1・2号墓墳



第106図 3号墓壙

2号墓壙 1号墓壙に近接して検出された。おそらく一群のものと考えられ、南側の調査区域外に墓域が伸びる要素も想定しておきたい。

平面形は方形を基調とした、約1.3×6.4mの不整形を呈す。主軸方位を1号墓壙と同様に北東-南西に持ち、関連性を窺わせる。深さは浅く約10cm程度である。壁も立ちあがり直立気味とはいえ、軟弱な壁である。遺存状態は悪い。

壙底面は北東側へ緩やかな傾斜を見せるが、ほぼ平坦面を築く。

出土人骨は中央やや東寄りに、壙底面やや上から顎を中心とした数本の歯を検出した。また、人骨の西側には大型の自然石が置かれており、推定レベルからは人骨の上位に原位置が求められた。その他の出土遺物は、煙管と煙管入れ金具が1点ずつ、および古銭（134図）が人骨の周辺より出土した。

3号墓壙 調査区北東部で検出された。13号住の南側に位置する。調査当初は1号土坑として着手された経緯がある。前述の1号・2号墓土壙も南東隅に占地する状況から、東側の急斜面地形に、墓域が設定されていた可能性もあろう。また、本墓壙は単独の検出ではあるが、他の2基の墓壙と大きく距離を保つことから複数群の墓壙群の存在も想起されよう。

3号墓壙は主軸を北西-南東に持ち、約1.3×1.2mの不整円形を呈する。この主軸方位は1号・2号墓壙と同様であり、一定の規則性も看取される。深さは、約70cmを測り、良好な遺存状態を示す。

壙底面は凹凸を持って緩やかに北東に傾斜する。壁はやや開き気味に立ちあがり、しっかりした掘り込みを見せる。壙底面の北東への傾斜は、他の1・2号墓壙と共通し、地形に影響された要素も重視したいが、これも主軸

方位と同様な規則性が窺われよう。

出土人骨は、壙底面北側に接して頭骨が出土し、南西壁際に大腿骨が検出された。これは、他の2例との差が見られ、土壙底面への埋葬例と位置付けられよう。その他の出土遺物は見られなかった。

以上のように、3基の墓壙の概略を述べたが、各々主軸方位・壙底面傾斜等に共通性が見られながら、出土遺物の差、大型自然石の有無、土壙上部～下部への埋葬等には埋葬形態の差が見られた。また、棺状の容器の痕跡も見いだせず、直接埋葬と捉えられよう。

おそらく3基とも近世～近代の所産と思われるが、当該期における土葬埋葬の一例として位置付けておきたい。

第3節 土坑・墓墳

第57表 土坑計測表

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
3号土坑	第I台地 25-12	不整形	146×94×54
土層註	1 暗灰褐色土 A軽石を含む 2 暗褐色土 大型のローム塊・黒褐色土塊を含む 2' ♪ ローム粒・黒褐色土塊を含む		
4号土坑	第I台地 26-12	不整形	94×62×36
土層註	1 暗褐色土 軟質。A軽石含む 2 ♪ ローム粒を含む 3 褐色土 ローム粒を多く含む。粘性に富む 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粘性に富む 5 鈍黄褐色土 ローム粒を主体とする		
5号土坑	第I台地 26-12	不整形	144×90×50
土層註	1 暗灰褐色土 A軽石を含む 2 暗褐色土 大型のローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む		
6号土坑	第I台地 25-11・12	不整形	96×62×48
土層註	1 鈍褐色土 A軽石を含む 2 暗褐色土 大型のローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む		
7号土坑	第I台地 24-13	不整形	40×34×24
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ 小型のローム塊を少量含む		
8号土坑	第I台地 24-12・13	不整形	170×46×54
土層註	1 暗灰褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 暗褐色土 ローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 軟質。A軽石・ローム塊を含む		
9号土坑	第I台地 25-12	不整形	46×38×30
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ 軟質。ローム塊を含む		
10号土坑	第I台地 25-13	不整形	52×40×52
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ 軟質。ローム塊を含む		

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
11号土坑	第I台地 25-13	不整形	94×67×54
土層註	1 暗灰褐色土 A軽石を含む 2 暗褐色土 ローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 軟質。A軽石・ローム粒を含む 4 黄褐色土 ローム粒を多量に含む		
12号土坑	第I台地 25-12	不整形	40×34×34
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ 軟質。ローム塊を含む		
13号土坑	第I台地 25・26-12	不整形	136×32×22
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ ローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 ローム塊・炭化物を含む		
14号土坑	第I台地 26-12	不整形	102×92×22
15号土坑	第I台地 26-13	不整形	52×46×44
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒を含む 2 ♪ 軟質。ローム塊を含む		
16号土坑	第I台地 25-13	不整形	98×74×30
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム粒・炭化物を含む 2 鈍褐色土 ローム粒を多く含む		
17号土坑	第I台地 25-13	不整形	136×66×36
土層註	1 暗灰褐色土 A軽石を含む 2 暗褐色土 大型のローム塊・黒褐色土塊を含む 3 鈍黄褐色土 軟質ローム塊主体 4 ♪ 硬質ローム塊		
18号土坑	第I台地 26-13	楕円形	66×58×40
土層註	1 鈍黄褐色土 軟質。ローム粒を多く含む 2 暗褐色土 軟質。炭化物を含む 3 ♪ 粘性乏しい。やや明るい		
19号土坑	第I台地 26-13	不整形	60×40×40
土層註	1 暗褐色土 軟質。ローム粒・炭化物を含む 2 ♪ 軟質。粘性乏しい		

第三章 検出された遺構と遺物

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
20号土坑	第I台地 30-11	不整形	112×102× 32
土層註	1 黒褐色土 黒色土塊・暗褐色土塊の斑状堆積 2 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む		
21号土坑	第I台地 33-11	円形	116×114× 40
土層註	1 黒褐色土 黒色土塊・暗褐色土塊の斑状堆積 2 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む 3 暗褐色土 ローム塊・暗褐色土塊を含む		
22号土坑	第I台地 33-10	楕円形	116×106× 36
土層註	1 黒褐色土 黒色土塊・暗褐色土塊の斑状堆積 2 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む		
23号土坑	第I台地 35-10	不整形	136×100× 12
土層註	1 暗褐色土 ローム塊を少量含む		
24号土坑	第I台地 36-17	円形	138×134× 36
土層註	1 鈍黄褐色土 ローム粒・少量の黒色土塊を含む 2 黒色土 少量のローム塊を含む 3 暗褐色土 少量のローム粒を含む 4 鈍黄褐色土 黒色土塊を多く含む		
25号土坑	第I台地 36-13	不整形	132×116× 34
土層註	1 暗褐色土 少量のB軽石・ローム塊を含む		
26号土坑	第I台地 36-14	楕円形	126×105× 32
土層註	1 黒褐色土 多量のB軽石・少量のローム粒含む		
27号土坑	第I台地 37・38-14	円形	98× 96× 24
土層註	1 黒褐色土 多量のB軽石・少量のローム粒含む		
28号土坑	第I台地 35-19	不整形	116×112× 26
29号土坑	第I台地 33-19	不整形	197×105× 30 30土坑と重複
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム塊を含む		

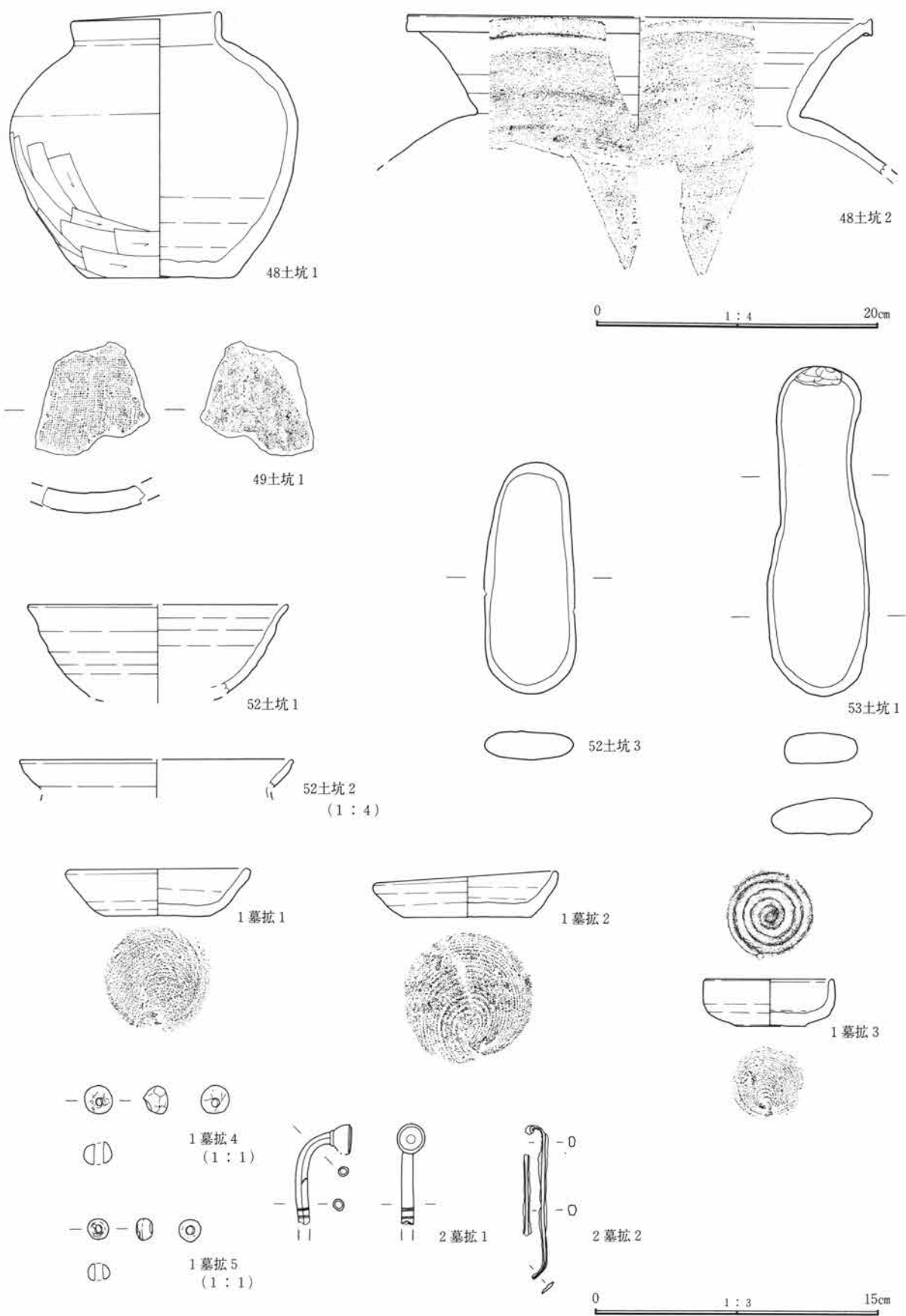
土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
30号土坑	第I台地 33・34-19	不整形	117× - × 25 29号土坑と重複
土層註	2 暗褐色土 B軽石・ローム塊を含む		
31号土坑	第I台地 33・34-20	不整形	164×148× 20
土層註	1 暗褐色土 ローム塊を含む		
32号土坑	第I台地 33-20	不整形	166×159× 22
土層註	1 暗褐色土 ローム塊と暗褐色土塊との斑状堆積 微量のB軽石を混入する		
33号土坑	第I台地 37-20・21	円形	122×118× 56
土層註	1 黒褐色土 A・B軽石を少量含む 2 鈍褐色土 暗褐色土塊・ローム塊の斑状堆積		
34号土坑	第I台地 40-20・21	不整形	132×118× 42
土層註	1 暗褐色土 B軽石・少量のローム粒を含む 2 暗褐色土 B軽石・多量のローム粒を含む		
35号土坑	第I台地 41-20	円形	124×106× 28
土層註	1 暗褐色土 B軽石・少量のローム粒を含む		
36号土坑	第I台地 42-20	円形	130×118× 50
土層註	1 暗褐色土 少量のA軽石を含む耕作土 2 鈍褐色土 少量のB軽石・多量のローム粒含む 3 暗褐色土 少量のB軽石・ローム粒を含む 4 鈍褐色土 ローム塊を多く含む		
37号土坑	第I台地 40-19	円形	134× 98× 52
土層註	1 暗褐色土 B軽石・ローム粒含む。粘性乏しい 2 黒褐色土 B軽石を含む。粘性乏しい 3 鈍褐色土 ローム塊を多く含む 4 暗褐色土 B軽石・ローム塊を含む 5 鈍褐色土 暗褐色土塊とローム塊の斑状堆積		
38号土坑	第I台地 40-18・19	円形	132×122×46
土層註	1 鈍褐色土 少量のB軽石・多量のローム粒含む 2 暗褐色土 多量のB軽石・少量のローム粒含む 3 鈍褐色土 粘質。B軽石・ローム粒を含む		

第3節 土坑・墓壙

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
39号土坑	第Ⅰ台地 40-17	楕円形	186×131× 42
土層註	1 黒色土 少量のB軽石を含む		
40号土坑	第Ⅰ台地 42-20	円形	126×116× 34
土層註	1 暗褐色土 B軽石・ローム粒を含む。粘性乏 2 黒褐色土 B軽石・ローム塊を含む。粘性乏 3 暗褐色土 B軽石・ローム塊を含む		
41号土坑	第Ⅰ台地 44-16	円形	122×118× 48
土層註	1 黒褐色土 B軽石・ローム粒を少量含む 2 鈍褐色土 ローム塊を多量に含む		
42号土坑	第Ⅰ台地 48-13	不整形	87× - × 18 43号土坑と重複
土層註	2 暗褐色土 粘質。ローム粒を含む		
43号土坑	第Ⅰ台地 48-13	円形	117×114× 47 42号土坑と重複
土層註	1 鈍褐色土 ローム粒を多量に含む		
44号土坑	第Ⅰ台地 48-13	円形	86× 76× 42
土層註	1 鈍褐色土 ローム粒を多く含む。粘性に富む 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む		
45号土坑	第Ⅰ台地 49-13	円形	104×100× 62
土層註	1 鈍褐色土 ローム粒を多く含む。粘性に富む 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む		
46号土坑	第Ⅰ台地 46-15	不整楕円形	126× 84× 48
土層註	1 黒褐色土 B軽石・ローム粒を少量含む 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする 3 黒褐色土 B軽石・ローム粒を少量含む		
47号土坑	第Ⅰ台地 42-19	長方形	148× 84× 34
土層註	1 暗褐色土 B軽石・ローム粒を少量含む 2 鈍褐色土 少量のB軽石・多量のローム粒を含む 3 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性に富む		

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
48号土坑	第Ⅰ台地 39-17・18	方形	368×362× 43 49号土坑と重複
土層註	1 黒色土 A軽石塊を含む 2 黒色土 A軽石・ローム粒を含む 3 暗褐色土 ローム粒を含む 4 〃 ローム粒・炭化物を含む		
49号土坑	第Ⅰ台地 39-18	長方形	192× 54× 50 48号土坑と重複
土層註	5 暗褐色土 ローム塊を多量に含む 6 暗褐色土 炭化物を多量に含む		
50号土坑	第Ⅱ台地 86-25	円形	102× 90× 36
土層註	1 黒褐色土 ローム塊を含む 2 〃 ローム粒を少量含む		
51号土坑	第Ⅱ台地 87-25	円形	118×112× 34
土層註	1 暗褐色土 軟質。黒褐色土塊・ローム塊を含む 2 黒色土 軟質。黒褐色土塊を含む		
52号土坑	第Ⅱ台地 89-26	楕円形	100× 69× 19 22号住居内
土層註	1 暗褐色土 黒褐色土塊・ローム粒を含む		
53号土坑	第Ⅱ台地 86-28	不整楕円形	150× 95× 72 23号住居内
土層註	1 鈍黄褐色土 粘質。焼土塊・ローム塊を含む 2 〃 粘質。ローム塊を多く含む 3 〃 粘質。焼土粒・灰褐色粘土塊を含む 4 〃 暗褐色粘質土を多く含む		
54号土坑	Ⅱ第台地 86・87-28	不整楕円形	128×105× 36
55号土坑	第Ⅱ台地 86-27	楕円形	72× 48× 22
土層註	1 灰層 2 黄褐色粘質土 3 〃 焼土粒を含む		
56号土坑	第Ⅱ台地 84-28	円形	44× 36× 42
57号土坑	第Ⅱ台地 84-28	不整形	216×116× 38

第三章 検出された遺構と遺物



第107図 土坑・墓墳出土遺物

第3節 土坑・墓墳

第58表 48号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 短頸壺 図版 66	口：11.0 高：18.5 底：10.4	ほぼ完形 壁面横位	①粗 石英 片岩 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	輪積後右回転轆轤整形。口頸部は短く外傾気味に直立する。肩部は張り、体部は中位に膨らみを持たせる。底部は無台平底である。体部は轆轤整形後撫で加え下半に入念な鈍削りを施す。内外とも器壁剥落著しい。
第107図 2 大甕 図版 66	口：(33.6) 高：— 底：—	口縁～肩部 破片 坑底面	①粗 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部轆轤整形。回転方向不祥。口縁端部はほぼ直立し鋭い。口頸部は強く外反し肩部は張る。肩部内面に青海波文残る。口縁部内外面に自然釉が付着する。器厚は比較的薄手。

第59表 49号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 平瓦 図版 66	厚：1.4	破片 覆土	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④	凸部は縦位撫で、凹面は布目。薄手。

第60表 52号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 碗 図版 66	口：(14.0) 高：— 底：—	約1/5 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	右回転轆轤整形。口縁部は外反し体部は中位に丸みを持たせる。内面も緩やかに見込み部に至る。体部はやや厚手ながら、整った器形の印象を得る。
第107図 2 甕 図版 66	口：(19.8) 高：— 底：—	口縁部破片	①粗 片岩 石英 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部は丸みを帯び下位に凹線が巡る。口縁部は外傾するが下位は直立と思われる。内外とも撫で。
第107図 3 薦編み石? 図版 66	長：12.4 幅：5.0 厚：1.6	ほぼ完形 覆土	①雲母石英片岩 ④159.44 g	偏平な棒状円礫を素材とする。両側縁および上下端部に微小の摩擦痕が認められる。中位で欠損。

第61表 53号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 薦編み石? 図版 66	口：17.6 高：5.5 底：1.9	ほぼ完形	①雲母石英片岩 ④279.7 g	両側縁が彎曲する偏平な棒状円礫を素材とする。両側縁凹部に顕著な摩擦痕が認められる。上位で欠損。

第三章 検出された遺構と遺物

第62表 1号墓墳遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 皿 図版 66	口： 10.0 高： 2.5 底： 5.6	完形 覆土上層	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	いわゆる土師質土器。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部僅かに肥厚し体部は直線状を呈す。下半は緩やかな円みを帯びる。底部は僅かに立ち上る。厚手の器厚。油煙等の付着は無い。
第107図 2 皿 図版 66	口： 10.0 高： 2.2 底： 6.8	完形 覆土上層	①粗 ②酸化焰 ③橙色 ④須恵器	いわゆる土師質土器。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口唇部僅かに内彎する。体部は短く底径は広い。厚手の器厚を呈す。油煙等の付着は無い。
第107図 3 小杯 図版 66	口： 6.8 高： 2.5 底： 3.9	完形 坑底面	①粗 石英 ②還元焰 ③褐色 ④	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部等体部上半は一体化し直立する。下半は緩やか丸みを帯び小径化する。底部は小径で僅かに立ち上る。内底面は轆轤目強うが摩滅痕のため滑沢。
第107図 4 小玉 図版 68	径： 0.65 厚： 0.60 重： 0.48	完形	①ガラス	玉状に仕上げられる。純度は高く夾雑物は少ない。
第107図 5 小玉 図版 68	径： 0.55 厚： 0.45 重： 0.18	完形	①ガラス	玉状に仕上げられる。純度は高く夾雑物は少ない。

第63表 2号墓墳遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第107図 1 煙管 図版 68	長： 5.3 受け皿径：1.6 管径：0.65	約1/3	④4.97 g	銅製品。雁首肩有。やや小型の火皿に脂返しが大きく彎曲する。ラウの一部が残存。基部に集合沈線による装飾がある。
第107図 2 煙草入金具 図版 68	長： 8.2 幅： — 厚： 0.9	約2/3	④6.03 g	偏平で幅狭の板状鉄製品を素材とし、やや幅広の先端部を折り曲げる。反対面も大きく「U」字状に曲げ、装着部としている。

第64表 墓墳計測表

土坑名	位置 (北西隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ
1号墓墳	第I台地 27-19	不整形	130×67×30
土層註	1 暗褐色土 A軽石・ローム塊・黒色土塊を含む 2 褐色土 純褐色土塊含む。骨片・古銭出土		
2号墓墳	第I台地 27-18	不整形	134×64×12
土層註	1 褐色土 A軽石・ローム塊を含む 2 純黄褐色土 硬質。A軽石を多く含む。		
3号墓墳	第I台地 25-12	不整形	134×118×70

第4節 溝

本遺跡で検出された溝は4条である。内訳は第I台地3条・第II台地1条であり、第I台地に集中が見られる。第I台地では、その他にも幾条もの小溝が検出されているが、これらは近代～現代の耕作溝であり、遺構としては積極的には扱わなかった。

また、ここに掲載する溝も近世～近代の所産と思われる、奈良・平安時代の住居跡に伴う溝や黒熊中西遺跡に見られた、頂上部に占地する古代寺院跡に至る道路状遺構に属する溝等は確認されなかった。

以下、順次各溝の概要を述べる

1号溝 第I台地調査区の中央東寄りで見出された。南東から北西に走る溝である。南東部は31・32-20グリッドで調査区域外に伸びる。幅約3m、深さ約120cmの規模を誇る。

溝は北西の傾斜に沿ってほぼ直線状に下降する。途中、徐々に幅を狭めやや浅くなるが溝底面の箱状の断面形態は基準となっている。耕作溝に切られ、5号住を切る重複関係を示し、北西端(36-14グリッド)と重なり収束するが、延長部の傾斜地へも伸びる可能性はある。ただし北西部には溝の痕跡は認められず、本報告では、この北西端の位置を収束部とした。

また、収束部の小ピットは溝との新旧関係も無く、掘り込みもしっかりしており、あるいは収束部施設としての可能性もある。ただ、埋土は均質土であり、溝覆土との差は大きい、重複も念頭におきたい。

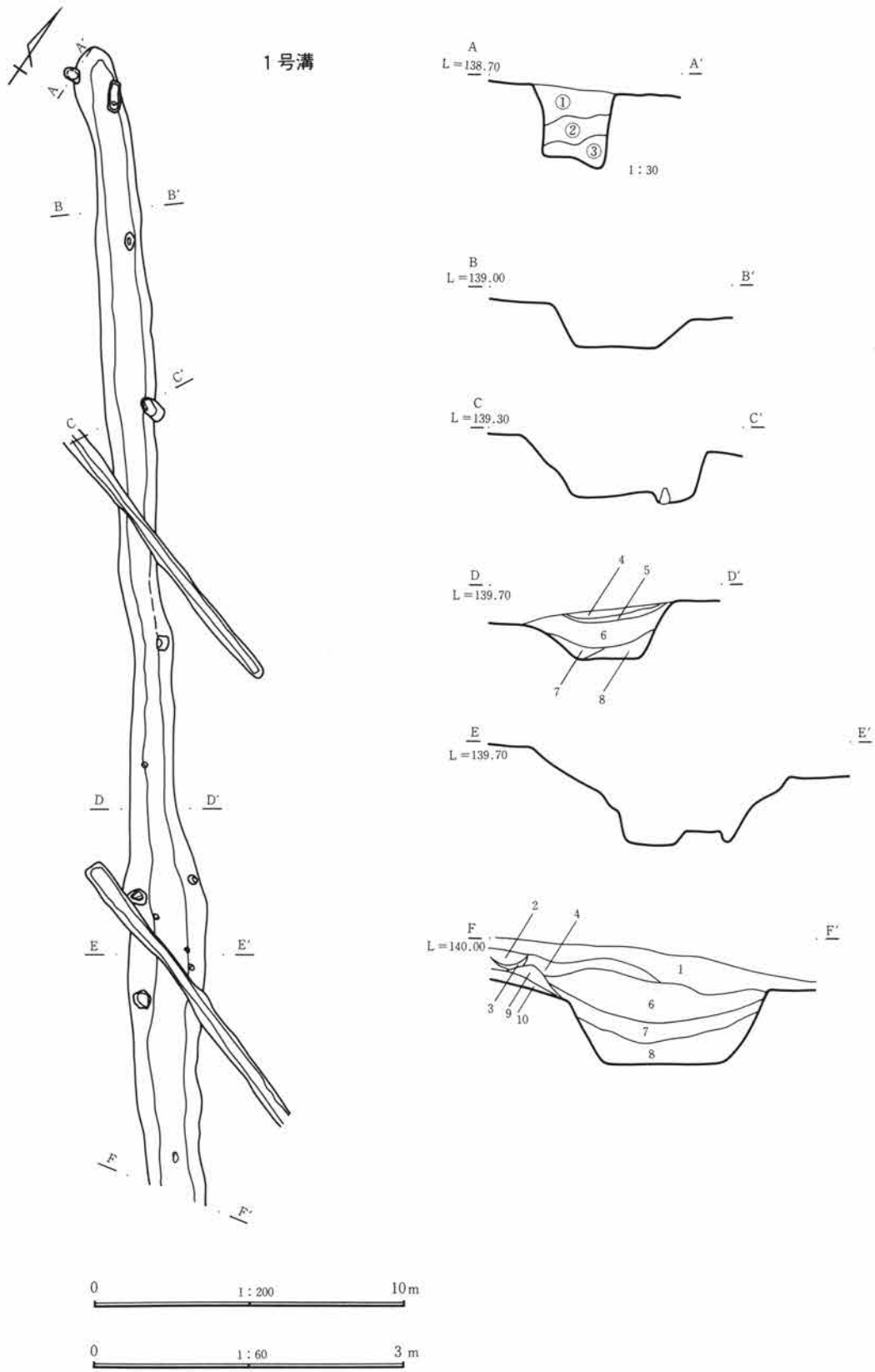
覆土の特徴としては、As-A混入の暗褐色土が上層に堆積しており、溝西に沿って黄褐色土が塊状に認められている。As-A降下以前の構築と思われる、標高値の低い西側に土盛りを行った可能性がある。下層や溝底面には酸化層等の水流の痕跡は無く、水利による溝とは捉え難い。溝底面の変化も見られず、一定の形状を保持する。おそらく、地割り溝等の用途が考えられよう。

出土遺物は須恵器・土師器小破片が数点見られたが、図示し得る個体ではなかった。

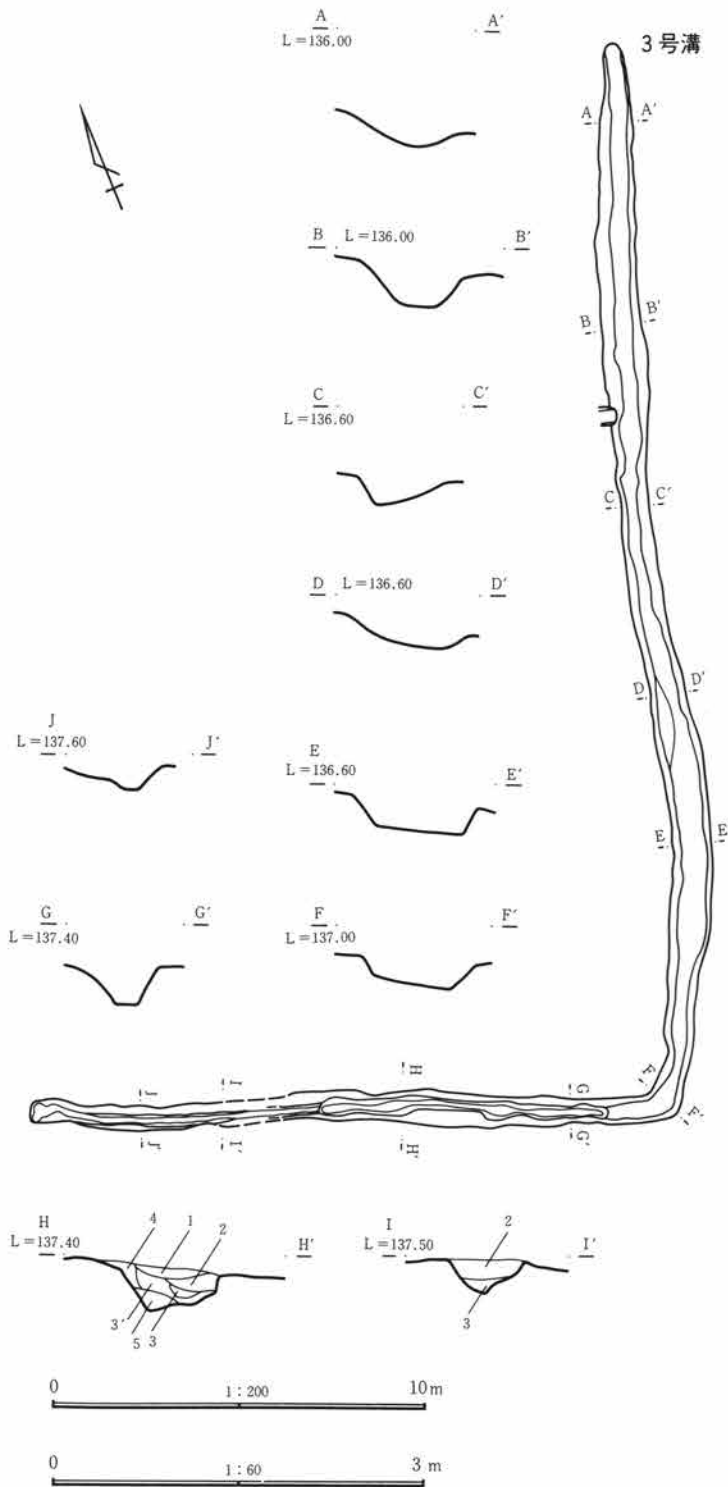
時期の判別は、不確定要素が多く困難が伴うが、As-A混入土が上層に堆積し、近代～近世の溝に切られる重複関係から、中世～近世の所産と捉えられよう。

第65表 溝計測表

溝名称	位置 (北西隅)	断面形	規模 (cm) 幅×深さ
1号溝	第I台地 31～36-14～20	箱状	3650×120
土層註	1 暗褐色土 現表土。軟質。A軽石含む 2 〃 旧表土。褐色土塊・A軽石を含む 3 A軽石層 塊～畝状に1号溝に沿う 4 暗褐色土 A軽石・ローム塊を含む 5 褐色土 多量のローム塊・黒色土塊を含む 6 〃 褐色土塊・ローム塊・炭化物を含む 7 〃 ローム塊・炭化物を含む 8 鈍褐色土 褐色土塊・礫・ローム塊を含む 9 鈍黄褐色土 軟質ローム塊・暗褐色土塊を含む 10 黄褐色土 硬質ローム主体。礫含む ① 鈍褐色土 緻密。包含物無し ② 黒褐色土 褐色土塊を少量含む ③ 鈍褐色土 ローム塊と褐色土塊の斑状堆積		
3号溝	第I台地 24～29-12～18	皿状	4480×42
土層註	1 黒色土 A軽石・炭化物・暗褐色土塊を含む 2 暗褐色土 軟質。炭化物・ローム塊を含む 3 黒色砂質土 細砂がレンズ状に堆積する 3' 黒色土 砂質土と暗褐色土のラミネ状堆積 4 鈍褐色土 硬質。A軽石・暗褐色土塊を含む 5 鈍黄褐色土 軟質。ローム塊を含む		
4号溝	第I台地 23・24-13～14	箱状	950×19
5号溝	第II台地 76～78-28～33	皿状	1100×5
土層註	1 暗褐色土 軟質。表土。 2 A軽石純層 3 鈍黄褐色土 ローム質。二次堆積土 4 黒色土 B軽石を含む 5 暗褐色土 ローム塊・黒色土塊斑状堆積 6 鈍黄褐色土 軟質。ローム粒を主体とする 7 〃 軟質。ローム塊を含む		



第108図 1号溝



第109図 3号溝

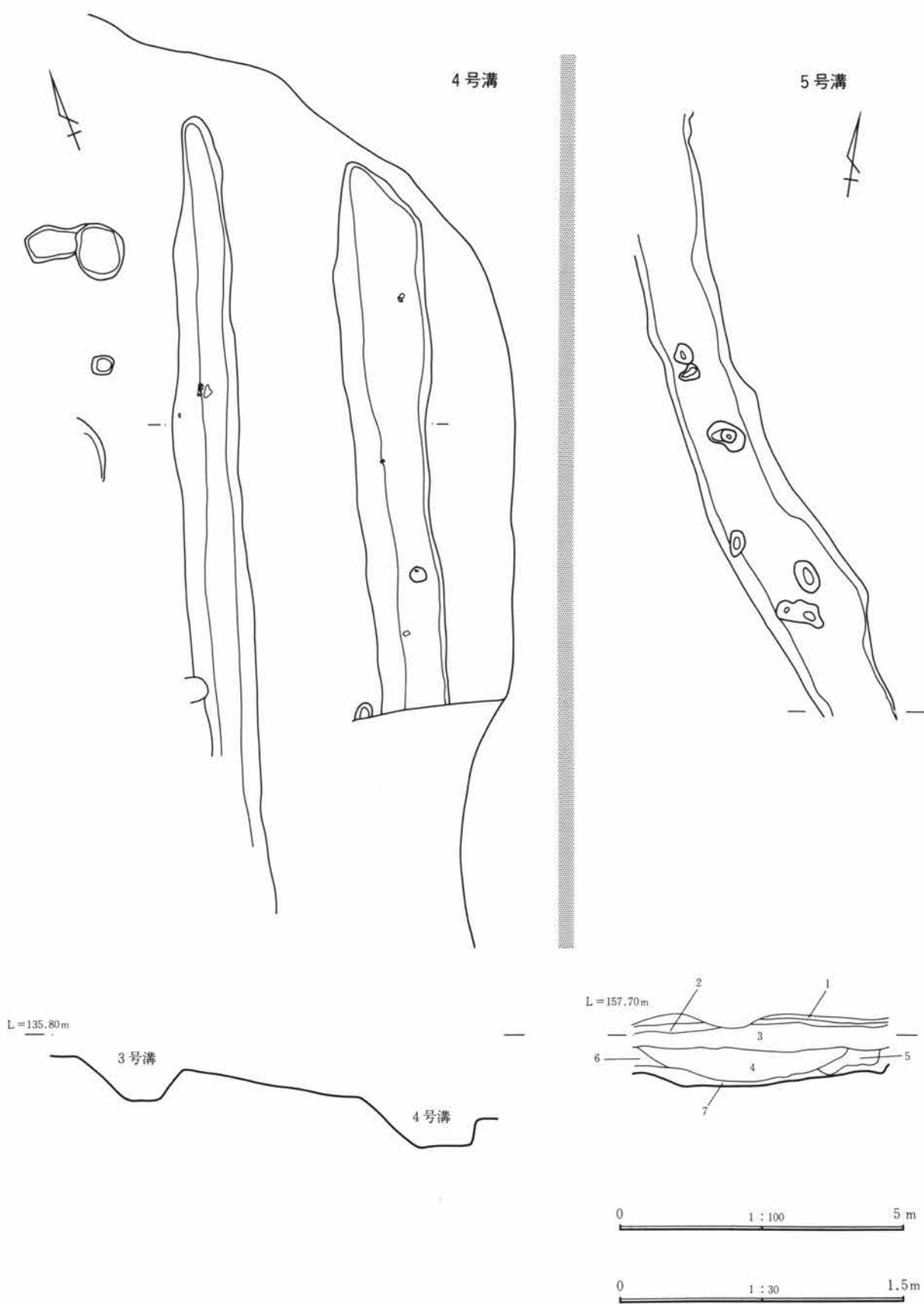
3号溝 第I台地調査区東端で検出された。東西に走り、屈曲部を経て南北に伸びる溝である。規模は、幅約1.0m、深さ約40cmで東西部の掘り込みはしっかりしており箱状の断面形を呈するが、南北部は緩やかな立ち上がりで、やや浅く断面形も皿状となる。標高は南北部が低く、そのため、東西部の掘削を強くしたものと思われる。

東西部は29-16グリッドで南北に伸びる耕作溝と重なり、8号住を切り直線的に屈曲部に至る。この耕作溝は当初2号溝として調査されたが、近代～現代の所産と思われる、今回の報告からは除外した。

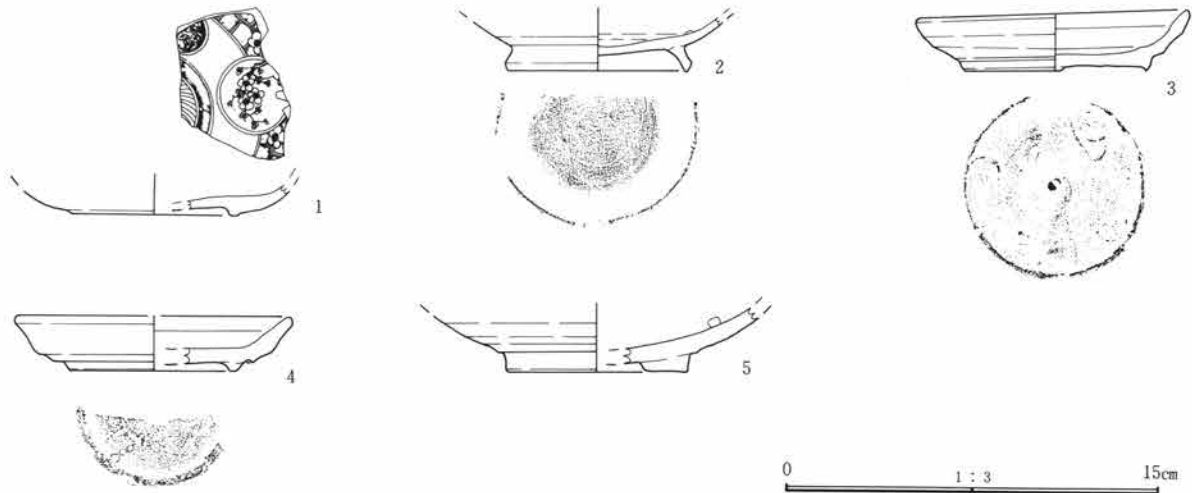
前述のように東西部は、掘り込みがしっかりしており、顕著な輪郭を見せている。屈曲部より北側は、緩やかな彎曲を持ち、7号住東端に近接し、4号溝と平行する。徐々に浅くなり輪郭も判然としなくなる。

収東部は24-12グリッドで、緩やかに立ち上がることから、本来の収東部は北東へ延長するものと思われるが、その痕跡等は検出されなかった。東西に走る段差で消失する可能性もある。

覆土の特徴は、As-A混入土が上層を覆い、砂質土と暗褐色土の互層堆積が見られことから、あるいは水利用による所産と思われる。As-Aの混入は多量であり、降下後も利用されていた痕跡も認められる。また、屈曲によって区画された内部には、本溝と同様にAs-Aを混入する土坑・ピットが混在しており、近世～近代遺構の密集地点でもあ



第110図 4号・5号溝



第111図 溝出土遺物

第66表 3号溝外遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第111図 1 磁器 皿 図版 66	口： - 高： - 底： (6.8)	底部破片 覆土	①緻密 ②還元焰 ③白色 ④磁器	高台は短く、体部下半は丸みを帯びた彎曲を呈す。絵柄は内面。

第67表 3号溝遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第111図 2 灰釉 皿 図版 66	口： - 高： - 底： 7.2	底部約2/3 覆土	①細 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	右回轉轆轤整形底部回轉篋切り後高台貼付。体部は緩やか丸みを帯びて開く。高台は内彎気味に開き、断面形状は三日月状。外底面に滑沢面を持つ。
第111図 3 皿 図版 66	口： 10.8 高： 2.3 底： 7.4	ほぼ完形	①細 ②還元焰 ③浅黄色 ④	左回轉轆轤整形篋調整。口縁部肥厚し体部は短く底径は広い。高台は極短く削り出しによる。外底面に重ね焼きの剝落痕跡が3箇所残存。
第111図 4 皿 図版 66	口： 11.0 高： 2.2 底： (6.8)	約1/3	①粗 石英 ②還元焰 ③浅黄色 ④	左回轉轆轤整形篋調整。器厚厚く体部中位で屈曲する。高台は短く削り出しによる。内外面とも薄く釉が付着する。
第111図 5 磁器 皿 図版 66	口： - 高： - 底： 7.4	底部破片	①粗 石英 ②還元焰 ③暗褐色 ④磁器	轆轤整形。回轉方向は不詳。高台は接地部が幅広で直立する。体部は強く開く。内面に厚く釉が掛かる。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

る。土坑の項で触れたが、あるいは近世の屋敷跡の存在も想定し、3号溝が区画溝としての機能も備えていた可能性を指摘しておきたい。

出土遺物は本溝に確実に伴うものは無く、流入によるものと捉えた。覆土中より灰釉陶器皿・軟質陶器皿・磁器(111図2～5)が出土している。また溝外より磁器皿破片(111図1)が出土している。

4号溝 先に述べた3号溝北東部と平行して検出された。第Ⅰ台地調査区の東端にあたり、南東側には農道が沿い、調査に伴う養生を行ったため、本溝南側は調査の手が及ばなかった。

平面規模は、幅約1.3mで平行する3号溝に比してやや幅広である。深さは約20cmで浅く、壁も西側の立ち上がりは緩やかで判然としない。東側の壁も直立気味ながら、傾斜のためか不確定な部分が見られた。

収束部は23-13グリッドに位置し、3号溝と同様に本来の収束部は北東部へ伸び、北側で東西に走る段差にまでは至るものと考えたい。

覆土の特徴としては、3号溝とほぼ同様であり、As-Aを混入する暗褐色土が認められている。ただ、互層堆積は顕著ではなく、水利としての機能は果たしてはいないと思われる。

遺物は自然礫等が溝底面と覆土で出土したが、施設としての用途は捉えられず、また土器類の出土も見られなかった。

本溝の機能や時期は確定的ではないが、3号溝と平行することから、近世～近代の所産で、3号溝と同様の区画溝に類した性格が想起されよう。

5号溝 第Ⅱ台地調査区と神社跡の間である76-78-28-33グリッドで検出された。第Ⅱ台地調査区が西側斜面に対し、5号溝は馬の背状台地頂部より東側の下位へ伸びる溝である。

規模は、幅約1.5m・深さ約10cm程度の浅い輪郭の不明瞭な溝である。台地頂部に端を発し、鞍部に沿って下る走行を見せるが、下端の様相は判然としない。トレンチ調査の弊害として明記しておきたい。

断面形は、浅い皿状を呈し、溝底面には小ピットが検出されている。他の溝との形状差が顕著である。

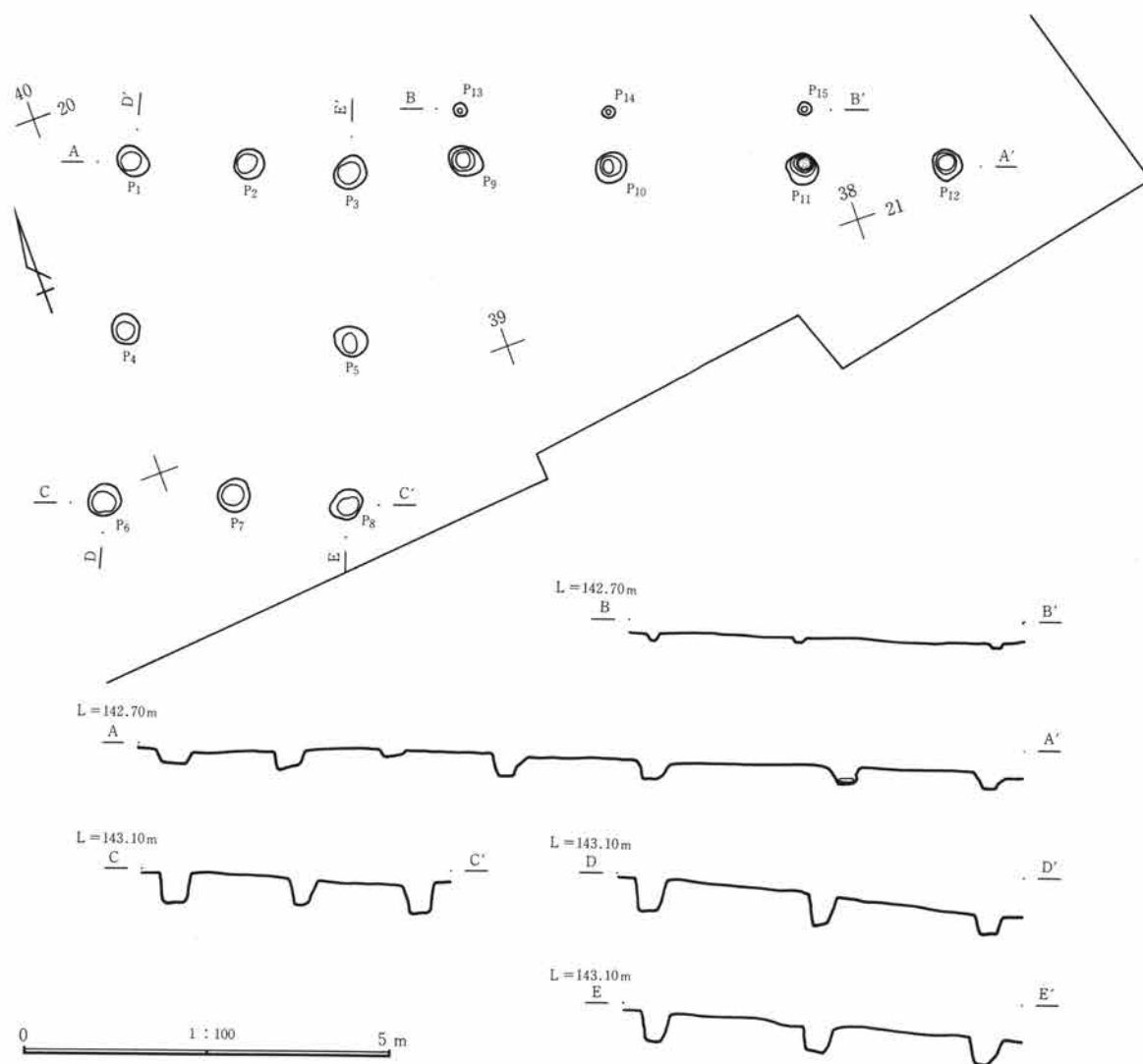
覆土の様相は、上層にAs-Aが純層に近い状態で溝を覆うように確認された。また、中層の主体層にはAs-Bが混入しており、As-A降下以前、As-B降下後の所産を物語る。また、住居跡覆土に類似した斑状堆積も見られ、住居跡廃絶時期に近い段階が想起されよう。

このように本溝の時期は、近世以前の所産であり、遡って平安時代終末にまで段階が求められよう。遺物の出土も無く、周辺遺構も皆無であり、その性格や詳細の不明部分は多いが、尾根に沿うこと、浅い断面形態からあるいは道路状遺構としての可能性をも念頭におきたい。

第5節 掘立柱建物跡

第Ⅰ台地調査区中央南側の調査区際で、33号坑・34号坑・27号住に近接して検出された。比較的高標高部分であり、緩やかながら北東への斜面地形に占地する。小ピットが規則性を保ち検出されたが、その様相から建物の一部は調査区域外へ伸びるものと推察される。

柱穴は15基検出され、そのうち、P₁～P₈が長辺約4.5×短辺約3.0mの規模で、2×2間の掘立柱建物を組む。柱穴径は約40cm程度で深さは30～40cmを測る。柱穴間の規模は各辺で僅かに差が見られるが、長辺は約2m・短辺は約1.5mの間隔で、規則性が認められた。またP₉～P₁₂は、P₁～P₃とやや軸をずらして東西に並ぶ。柵状遺構の可能性もあるが、P₁₁底面に偏平な自然石が礎石状におかれていたこと、さらに北側のP₁₃～P₁₅が雨垂れによる小穴と考えれば、軒先を持つ上屋が想定され、西側の2×2間の建物の延長が東側に存在する可能性が高い。P₉～P₁₂の柱穴間距離は、P₉～P₁₀=約2.0m・P₁₀～P₁₁=2.7m・P₁₁～P₁₂=2.0mであり、全長約6.7mに及ぶ。P₁₀～P₁₁の柱穴間が他の柱穴間に比してやや長く、これは入口部等の施設が想定される。北側の小穴(P₁₄～P₁₅)も比例して間隔を広げており、軒



第112図 1号掘立柱建物跡

先も対応した柱穴間構成を呈するものと考えられよう。

以上のように、本遺跡で検出された掘立柱建物跡は1棟のみであり、また調査区域外に一部を伸ばすため全容は把握できない。しかしながら、各柱穴規模や柱穴間距離は一定の規則性が認められ、整然とした建物の立地は確定的であろう。さて、帰属する時期ではあるが、柱穴内の遺物の出土もなく、周辺にも遺物の散布は無いことから積極的な確証を得られない。柱穴内の埋土の様相も、特徴性に乏しく、また、27号住との新旧関係も不明であるため、時期を決定するには至らない。

ここで本報告では、時期不明としながらも、本掘立柱建物跡が奈良・平安時代に属する遺構として、その可能性を考えてみたい。

本遺跡南側の調査区域外には塔之峰廃寺の存在が知られており、近接する遺構としては本掘立柱建物跡が最も近い。さらに黒熊中西遺跡における古代寺院跡が複数の建物による構成で成り立つ様相も重要であり、おそらく塔之峰廃寺も複数の建物からなる蓋然性は高い。つまり、本掘立柱建物跡は南側に占地すると思われる塔之峰廃寺の施設の一部として、位置付けられるのではないだろうか。あくまでも仮説であり、確証性に乏しいが、可能性を指摘した。

第6節 神社跡

(遺構)

第Ⅰ台地と第Ⅱ台地に挟まれた、狭小な谷頭部分で検出された。調査着手時より、当地点には近代の所産と思われる古瓦類が散乱しており、また、基壇状の高まりが観察されたため、寺院跡等の遺構の存在が予測された。遺構確認面は表土下僅か数cmにあると判断でき、重機による表土掘削を避け、総て人力による検出作業を優先した。尚、当地点の地目は山林であり、調査はこの鬱蒼と茂る雑木伐採作業を第1に着手した。

調査の進展に伴い、地業石を伴う柱穴や瓦溜まり、基壇の様相が明らかになり、記録及び地元の方の証言を兼ね合わせた結果、検出された基壇状遺構と瓦葺礎石建物は通称「おへっちゃま」と呼称される神社跡と判明した。

当遺構は、谷頭部のやや東寄りに位置し、第Ⅱ台地の東側斜面の裾部に占地していた。また、南側および東側にも斜面が迫っており、三方を斜面に囲まれ、北側が僅かに開ける地形上の特徴を見せる。特に南側と西側斜面は急激で、崖状ともいえる急斜面地形を呈す。本遺構が占地する地点は、斜面地形の終わる地形変換点であり、基壇削出に伴い平坦面が築かれた箇所である。

基壇状遺構はこの平坦地形に、約20×25mの規模で検出された。北側は斜面地形のため水準となる計測箇所は特定できないが、高さは概ね1.8m程度で、基壇状遺構そのものは明瞭な高まりで観察された。基壇上端の平坦面の規模は、約1.6×1.2mで東西に長軸を持つ長方形を呈し、緩やかに北側へ傾斜していた。平坦を意識した基壇面構築といえよう。

基壇状遺構は暗褐色土を基調とした盛り土を上部に乗せ、全体に砂質土やローム粒を混入させていた。盛り土上層からは、現代所産物（清涼飲料水空缶）が見られ、上層の遺存そのものは不良といえよう。しかしながら、最下層より炭化物を多量に含む層が見られた。断定はできないが、整地—土盛り段階で「焼き払い」等の行為が推定できよう。また同

層からは瓦類も出土しており、数回の建て替えも想定しておかなければならないだろう。

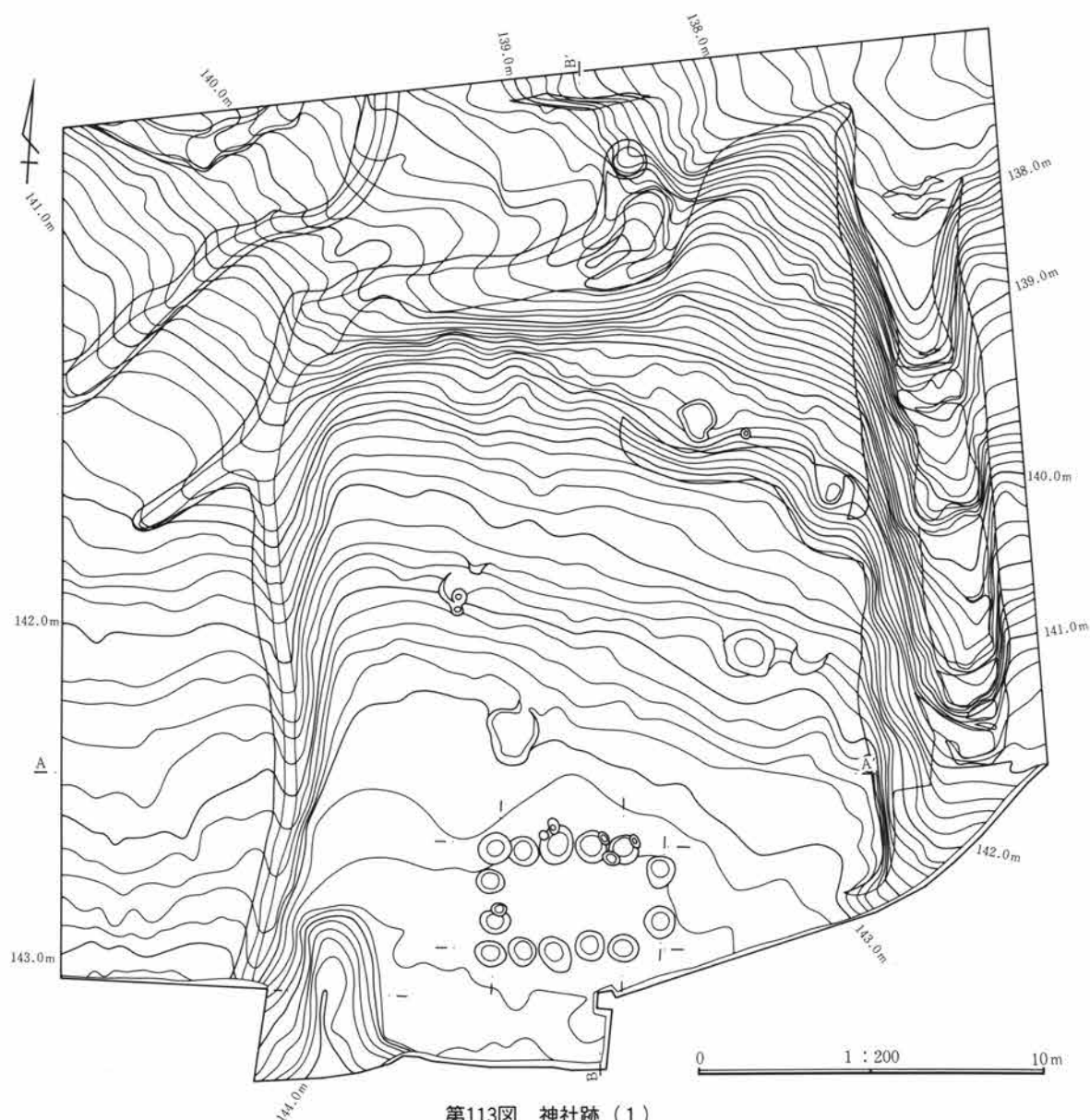
さらに、地山も整地段階で基壇状に削り出されており、幅狭の溝で区画する形態をとり、西側と北側で顕著だった。企画性を持った構築として位置付けられよう。

また、基壇東側は直線状に南北に溝が走る。幅約3.5mで深さも約1.2mと深い。東辺の区画溝としての性格も位置付けられるが、南側で西へ彎曲する形態をとり、登坂状態を取りながら、延長上に礎石建物が位置するため、道路状施設（例えば参道）の機能を兼ねた溝として捉えられよう。区画溝を共有した道路状施設としたい。

次に南西部の調査区域外にかかる箇所、高さ約1m程度の高まりが検出された。盛り土による高まりで舌状に張り出す形態をとり、調査区域外に伸びる様相が観察されたため、土塁状の遺構として位置付けられた。ただし北側の調査区域外の土塁状遺構は徐々に消滅する形態を取り、現状では明確には把握しづらい。

このように基壇状遺構は、四方を溝・道路状遺構・土塁によって画された施設であり、基壇土盛りや溝掘削等の大規模な工事を必要とした建物基壇として、居住空間よりも祭祀等に供された特殊な空間として、この基壇状遺構の性格を捉えた。尚、基壇状遺構の北東隅は北辺の幅狭の区画溝が及ばず、緩やかな傾斜をもって基壇面上端と繋ぐ。前述の東側の幅広の溝・道路状遺構（参道）とともに、昇降施設として位置付けられよう。

さて、基壇面の南よりに、東西に主長軸を持たせた、建物跡が検出された。14基からなるピットが約3.2×5.0mの範囲内で方形に配されており、礫を充填させた地業状ピットやピット中央に礎石を持たせたものが見られ、堅牢な建物の存在が想起された。基壇上端の平坦地形は、特にこの建物跡周辺が顕著であり、整地段階から建物構築がこの位置に特定されていた構築意識が存在していたようだ。尚、建物跡内部および周辺には、焼土の散布・著しい硬化面

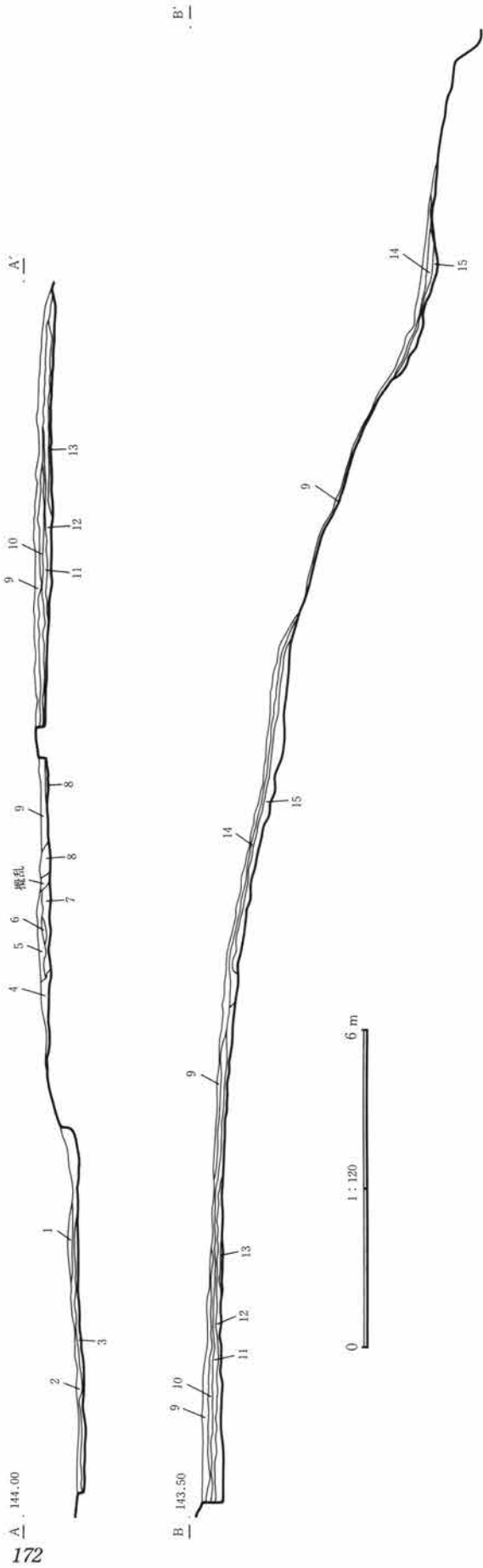


第113図 神社跡(1)

等は検出されず、居住空間ではなかったものと思われる。

ピットは径約90cm程度の不整円形の平面形を呈し、20~30cmの深さを測る。礫が伴出しており、このうちP1~P12はピット中央に大型の自然石を設けており礎石柱穴として位置付けられる。P13・P14は上面に小型の礫を充填しており、地業状のピットといえよう。ただしこの2基のピットともに小型礫の下位より礎石状に大型の自然石が出土している。他の12基のピットと同様に礎石柱穴として良いだろう。柱穴間距離は、P1~P12は概ね1m前後

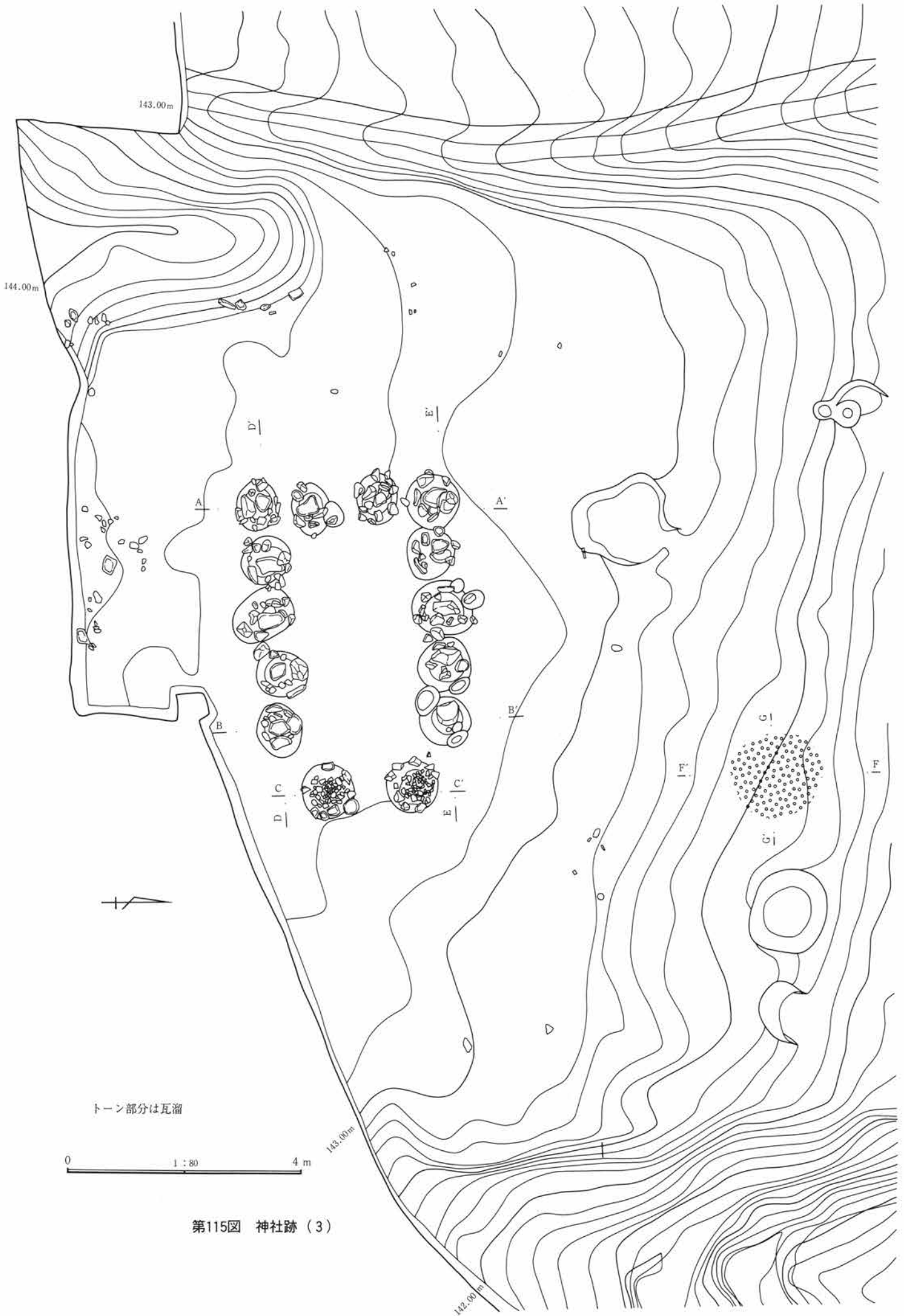
の間隔で配されており、北辺と南辺の5ケのピットは各々対応する位置関係を見せる。東辺P1~P12間と西辺P5~P8間も約3mの等距離を保ち対応している。しかしながら、P13・P14は他の12ケのピットとその配置はずれており、また地業状に小礫を状面に敷き詰めた形態は他のピットと性格を異にするようだ。おそらく建物本体はP1~P12によって構築され、P13・P14は建物とは別個の一例えは入り口部施設あるいは拝殿部として考えられよう。この他では、神社に特有の「鳥居」が想起されるが、P13・P14の距離は1m50cm程度であり、「鳥



基壇上土層注

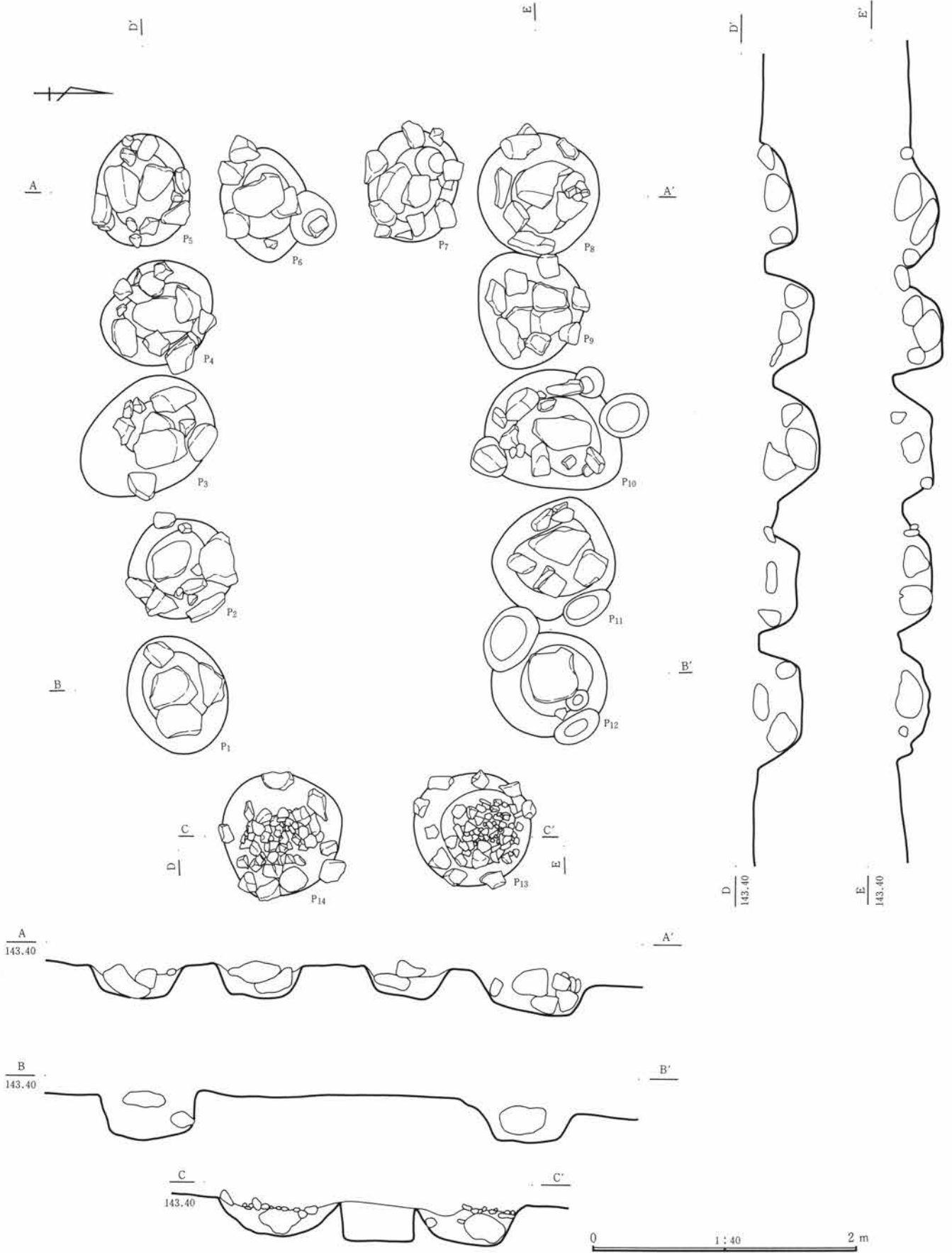
- 1 黒色土
 - 2 褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 純黄褐色土
 - 5 灰黒褐色土
 - 6 黄褐色土
 - 7 純黄褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 黒色土
 - 10 灰黒色土
 - 11 暗褐色土
 - 12 褐色土
 - 13 暗褐色土
 - 14 褐色土
 - 15 暗褐色土
- 表土
 As-A (浅間A軽石) 混土層
 As-A直下の旧地表土。粘性に富み、締まり乏しい砂質。ローム塊を少量含む。粘性・締まり乏しいローム層土を主体に砂質土塊を含む砂質土。締まりに乏しい砂質土。締まりに乏しいローム塊主体
 ローム粒を多量に含む。礫混入
 ローム層土を主体に黒色砂質土を帯状に含むやや暗い。黒色砂質土を含む
 ローム塊を主体とし少量の黒色砂質土を含む炭化物を多量に含む。瓦出土層位
 多量のAs-Aと少量のローム粒を含む。瓦出土層位
 As-A 混土層

第114図 神社跡 (2)

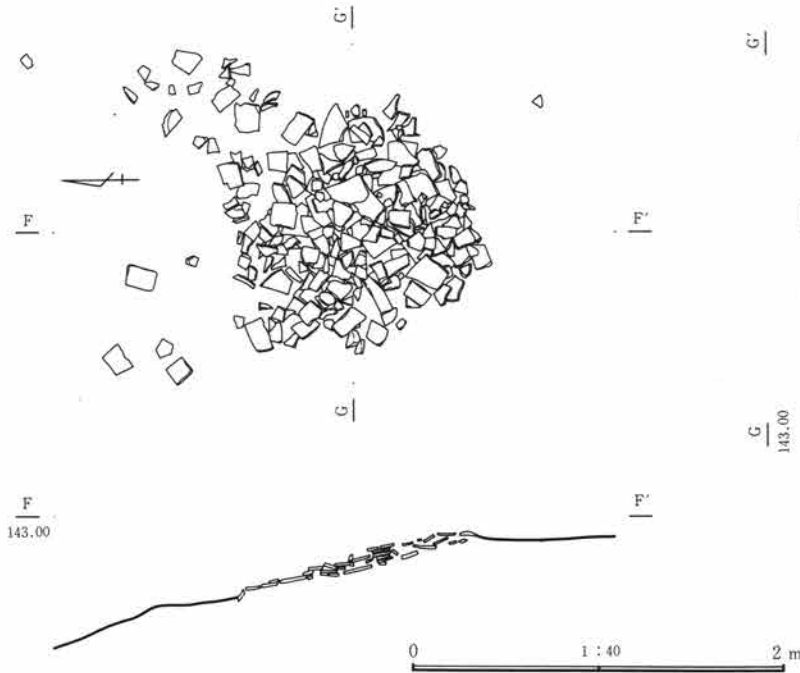


第115図 神社跡 (3)

第三章 検出された遺構と遺物



第116図 神社跡 (4)



第117図 神社跡（5）

居」としては考え難い。神社とした場合の性格上からは拝殿部が相応する配置である。

以上のように、礎石を持つ柱穴から、本体が3×4間（約3×3.8m）の長方形を呈す小型の建物の立地が推定される。小型ながら、礎石の状況からかなりしっかりした作りの建物であり、入り口部・あるいは拝殿部に相応する2本の柱穴にも礎石が設けられた様相は、神社・寺院の風格を備えたものと考えられる。

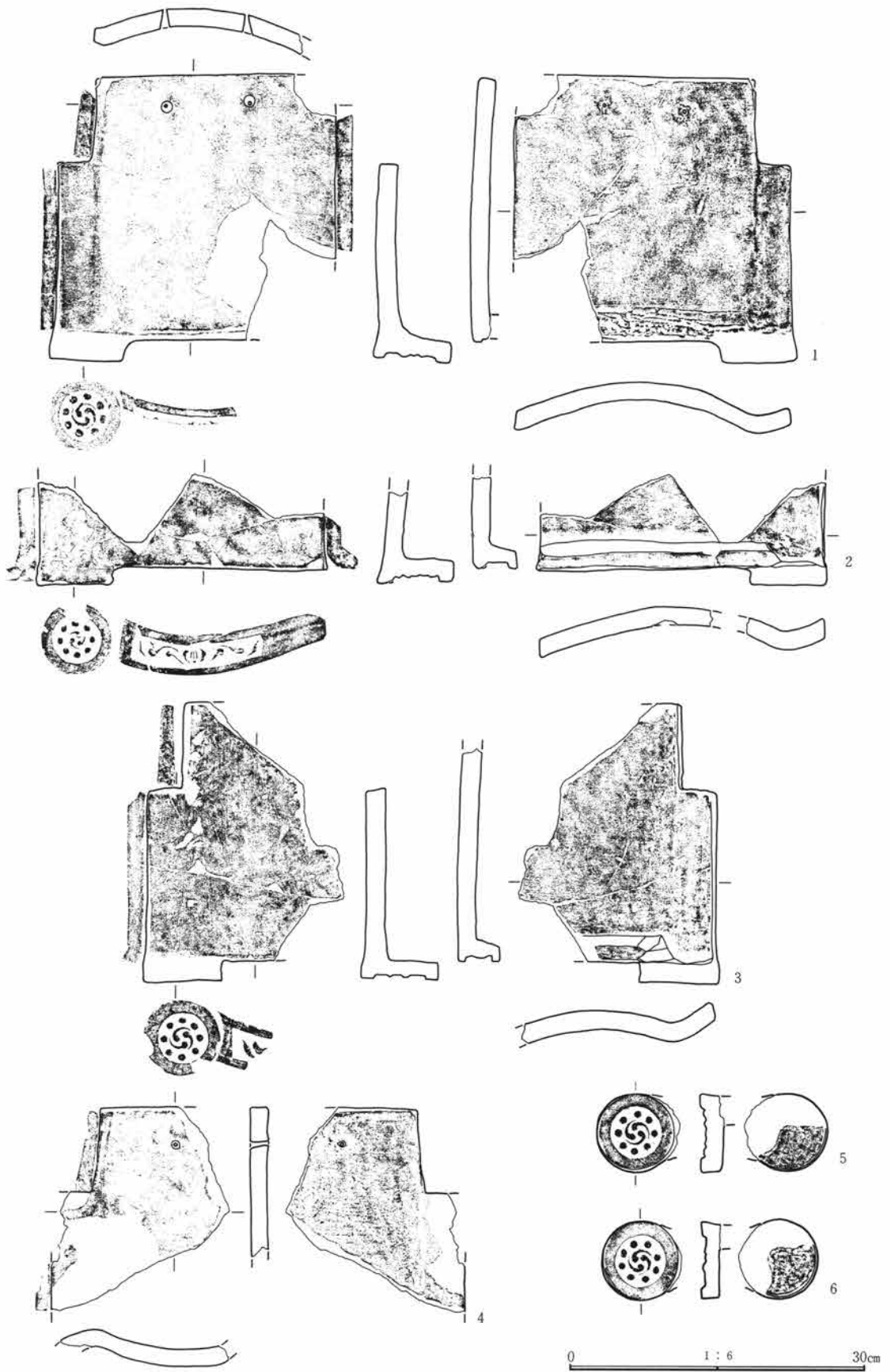
しかしながら検出された建物跡はこの礎石建物のみであり、その他の施設は存在しなかったようだ。神社跡とすると、3×4間の本殿に拝殿が付帯した形態と捉えられ、基壇上に本殿と拝殿が設けられた建物1棟のみが存在した様相は当該地域の神社の在り方の一側面を明示している。

この礎石建物の屋根には、瓦が葺かれていたものと思われ、基壇状遺構平坦面周辺や北側の傾斜地形に沿って、近世～近代に比定される瓦が散乱した状態で出土している。特に、礎石建物北側約6mでは、集中した瓦の出土が見られ、瓦溜まりとして調査した。径約1.5mの範囲で厚さ約10cm前後にまとまっ

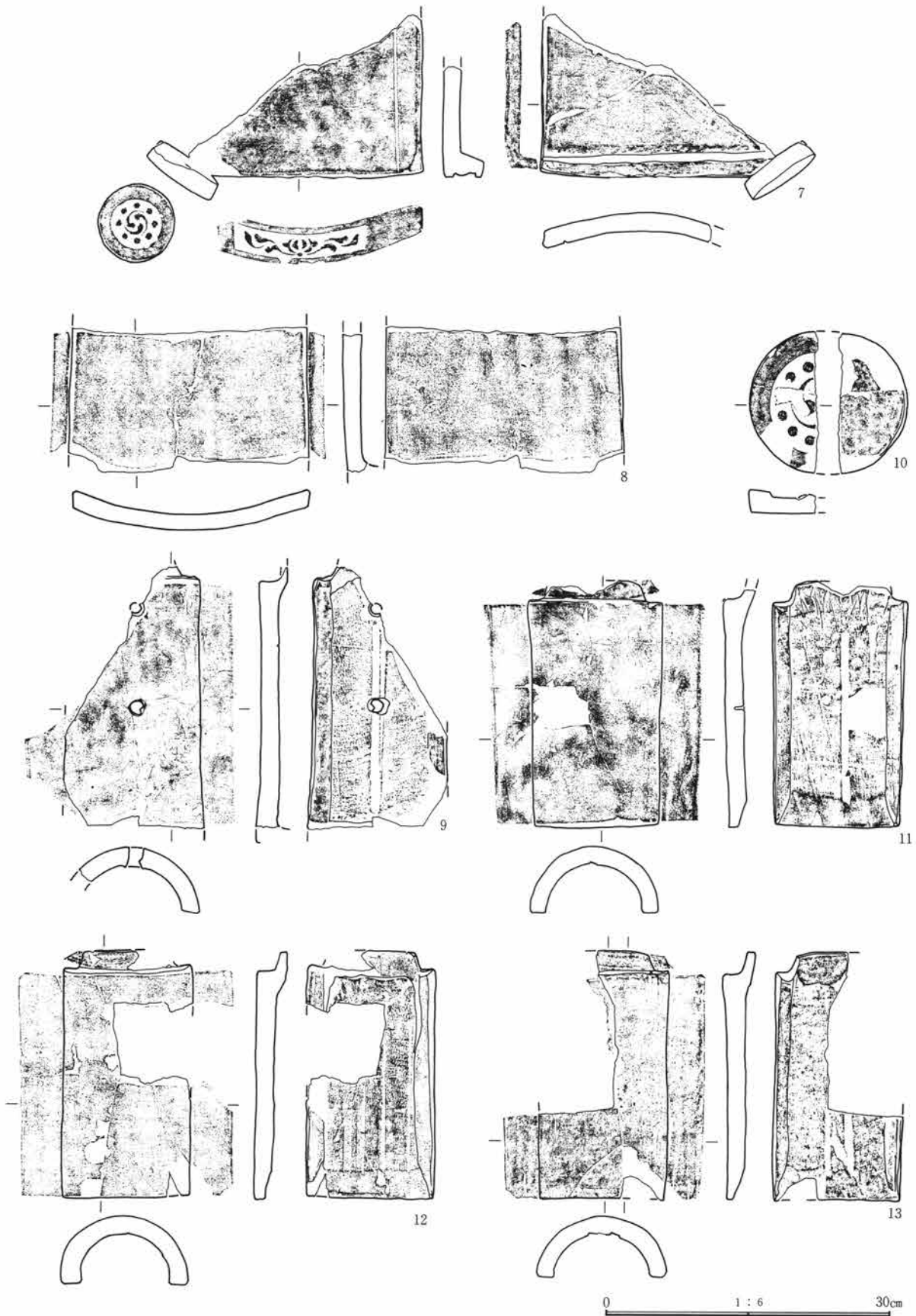
て瓦のみが集中していた。瓦については後述するが、平瓦主体の出土であり、他に巴瓦や丸瓦も見られた。この瓦溜まりは、前述の最下層で確認された炭化物を含む層位で確認されており、あるいは建て替えに伴う遺構としても考えられるが、瓦葺建物廃絶後の屋根瓦一括廃棄とした出土状態に近く、建物廃絶後の瓦溜まりとする位置付けが妥当であろう。

さて、当遺構の比定され得る時期であるが、基壇状遺構下位にはAs-Aが堆積していたが、上位基壇面には現代所産物も認められており、層位からは特定はできない。特に、As-Aに関しては降下後、各地において除去－廃棄作業が頻繁に行われており、二次堆積の可能性が強い軽石である。故に、出土した瓦や古銭（「寛永通寶」）からは近世～近代の所産とした大まかな時代幅しか与えられないだろう。創建年代に至っては、調査資料のみでは明確な判断はできない。ただし、瓦から得られる推定時期は19世紀末以降に妥当性が求められ、当遺構の創建～廃絶時期もその前後に充てられるものである。

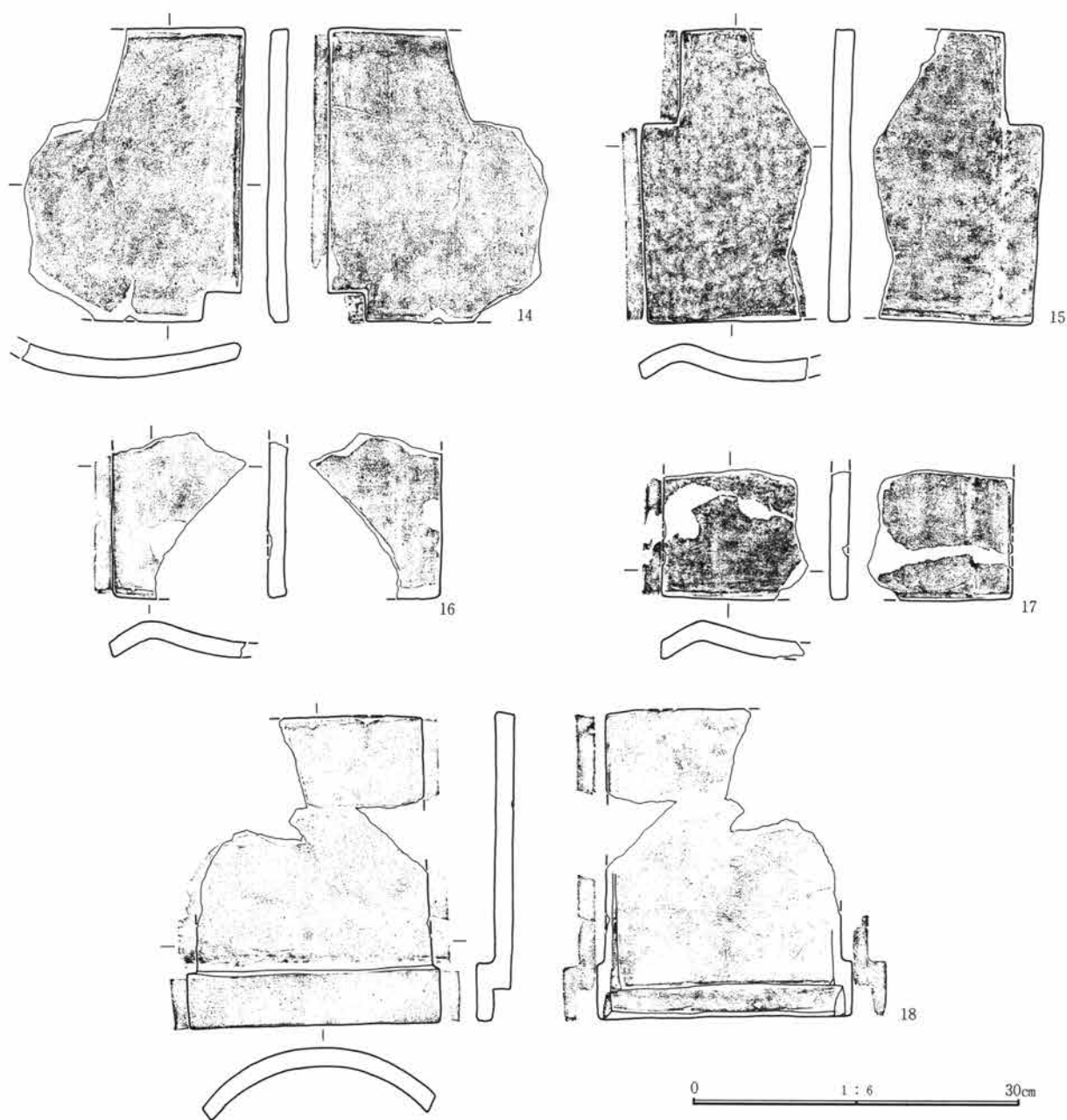
次に本遺構を神社跡として位置付ける記録をあたる、明治42年、黒熊地区の神社等を合祀し、黒熊地



第118図 神社跡出土遺物（1）



第119図 神社跡出土遺物 (2)



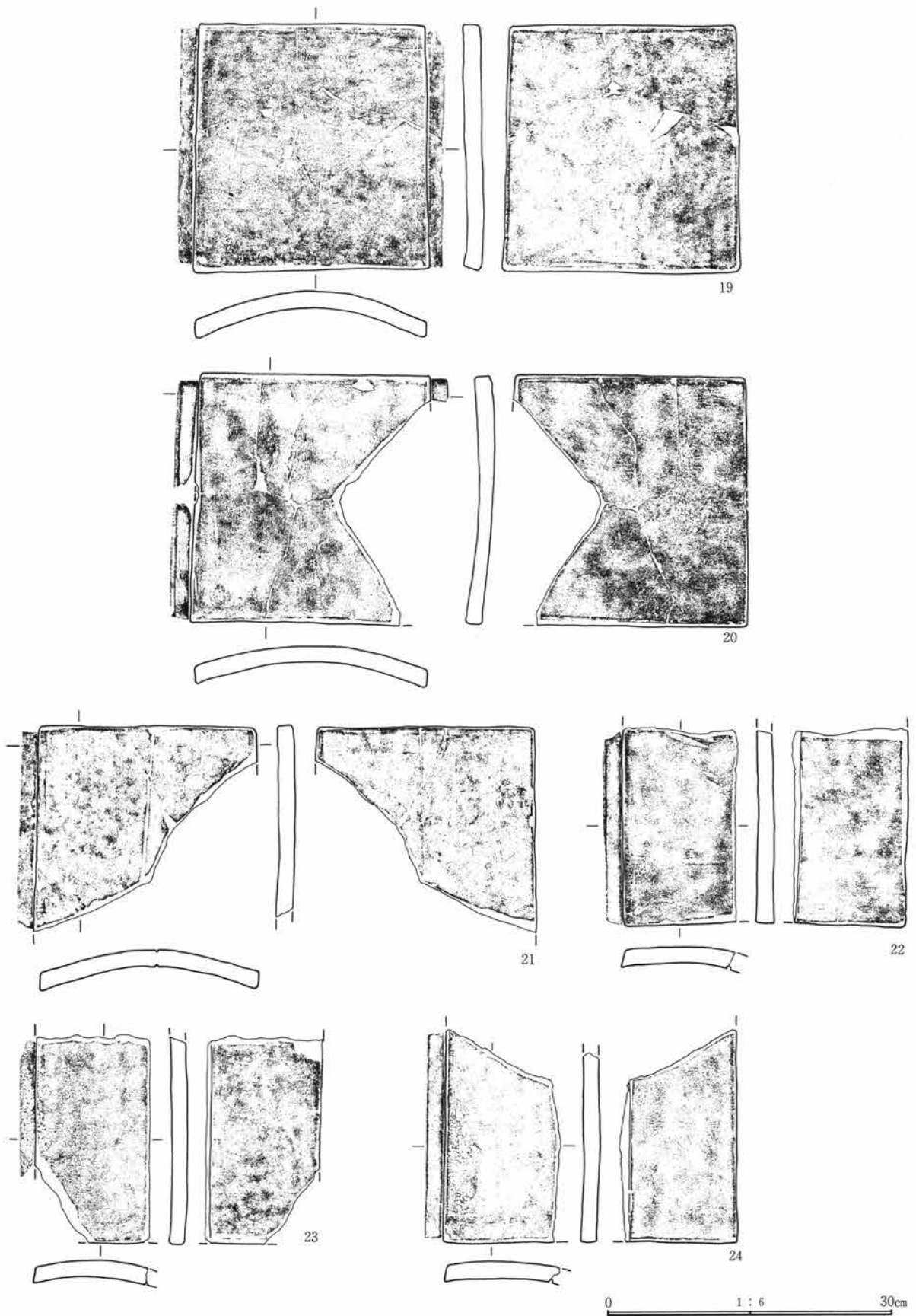
第120図 神社跡出土遺物（3）

877に浅間神社が鎮座された。合祀された「平地神社」は通称「おへっちやま」と呼ばれ、その境内には「八坂社」・「大山祇社」・「猿田彦社」も祀られていたが、合祀後に社殿等を取り壊された記録がある。「平地神社」の所在は、黒熊字平地973番地とされ、当遺構が検出された地割にもほぼ合致する。このことから、この基壇状遺構と瓦葺礎石建物は、合祀以前の「平地神社」である蓋然性が高い。

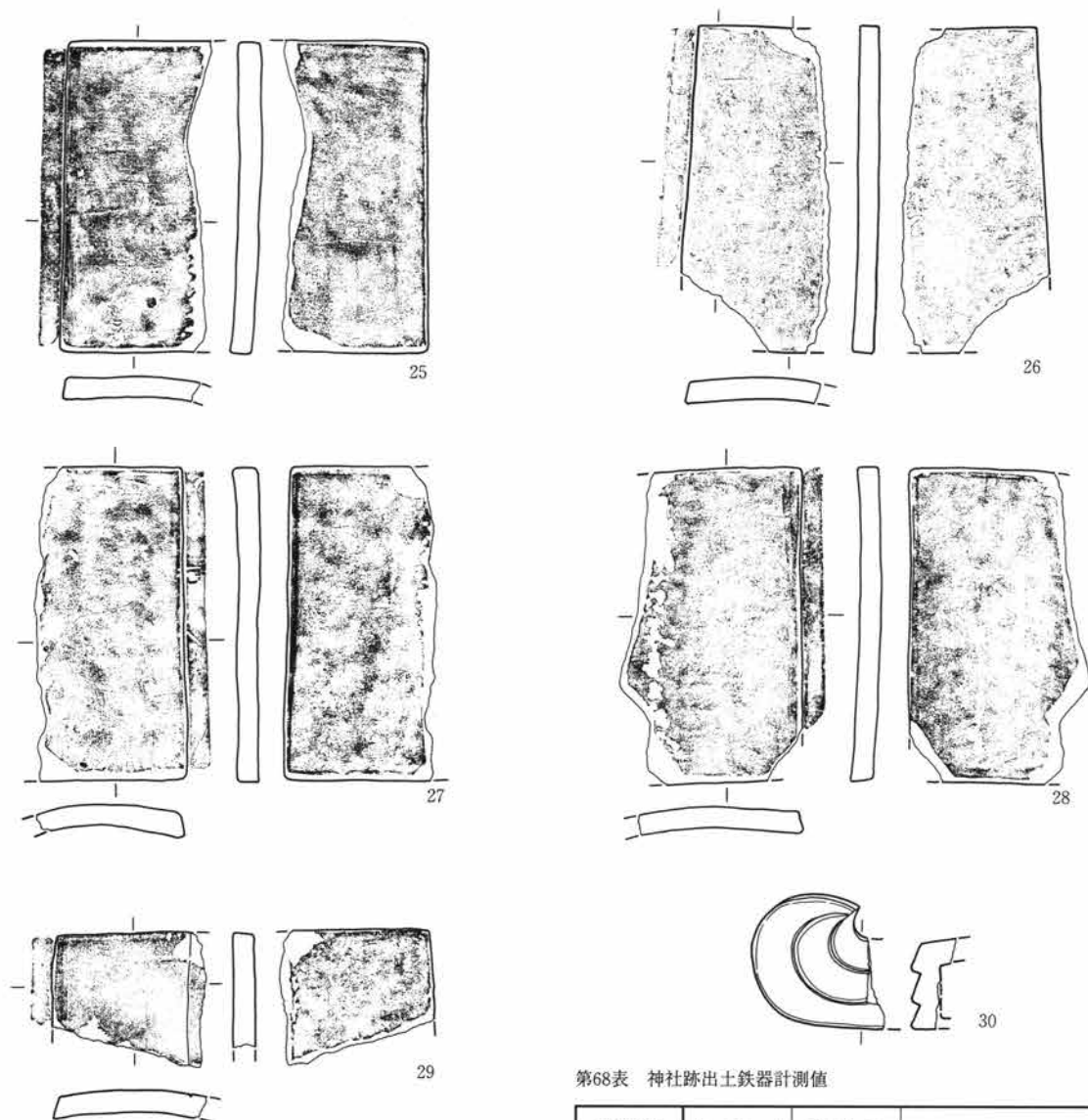
以上のように、当遺構は基壇をもつ瓦葺礎石建物

であり、記録・地元の方のお話を元に神社跡としての性格を求めた。基壇面には現代の所産物が出土したものの、基壇規模・参道・土塁等の周辺施設・建物（本殿・拝殿）の柱穴、さらに多量の瓦の出土は、近代における神社の形態の全容を検出したものと位置付けられる。

現在、調査地点の近くには浅間神社が存在し、黒熊地区の信仰の対象となっているが、今回の調査によって、明治末期における合祀以前の神社の位置が

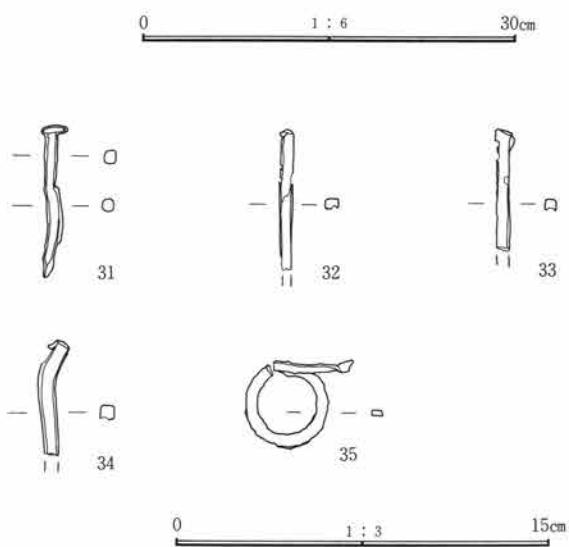


第121図 神社跡出土遺物(4)



第68表 神社跡出土鉄器計測値

図版番号 器種	法量(cm) (残存分)	残存率 出土状態	特徴
第122図 31 鉄釘 図版 68	長： 6.2 頭部幅：1.1 重： 3.12	先端部欠損	細身の鉄釘。断面方形の 身部を呈し、頭部は小さ く薄い作りである。
第122図 32 鉄釘 図版 68	長： 5.6 頭部径：— 重： 2.87	頭部・先端 部欠損	細身の鉄釘。身部のみの残 存だが、上端に頭部の折り 曲げ痕跡が認められる。
第122図 33 鉄釘 図版 68	長： 4.8 頭部径：— 重： 3.50	頭部・先端 部欠損	細身の鉄釘。身部のみの残 存。32と同様に頭部の折り 曲げ痕跡が認められる。
第122図 34 鉄釘 図版 68	長： 4.6 頭部径：— 重： 6.80	頭部・先端 部欠損	やや太めの鉄釘。身上半 は彎曲し、頭部の折り 曲げ痕跡が見られる。
第122図 35 鉄製品 図版 68	長： 3.5 幅： 4.5 重： 5.57		用途不明。幅狭の板状鉄 製品を素材とし、先端部 には振れが見られる。



第122図 神社跡出土遺物 (5)

第6節 神社跡

第69表 神社跡出土瓦計測値

図番号 器種	法量 (cm) (残存分)	残存率 出土状態	①胎土 ②色調 ③その他
第118図 1 軒瓦 図版 69	長: 28.8 幅: (28.5) 厚: 1.7	4/5	① 粗砂粒 片岩 ② 灰黄色 ③
第118図 2 軒瓦 図版 69	長: (11.3) 幅: 29.4 厚: 1.8	1/4	① 粗砂粒 ② 灰色 ③
第118図 3 軒瓦 図版 69	長: 28.2 幅: (20.1) 厚: 1.9	1/2	① 粗砂粒 ② 浅黄色 ③
第118図 4 軒瓦 図版 69	長: (20.4) 幅: 17.8 厚: 1.7	1/4	① 粗砂粒 片岩 ② 暗灰黄色 ③
第118図 5 軒瓦 図版 69	長: - 幅: - 厚: -		① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第118図 6 軒瓦 図版 69	長: - 幅: - 厚: -		① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第119図 7 隅瓦 図版 69	長: (19.4) 幅: 29.7 厚: 1.8	1/4	① 粗砂粒 片岩 ② 黄灰色 ③
第119図 8 軒平瓦 図版 69	長: (15.2) 幅: (25.0) 厚: 1.7	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第119図 9 巴瓦 図版 69	長: (27.1) 幅: (14.6) 厚: 1.9	2/3	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第119図 10 巴瓦 図版 69	長: - 幅: (7.2) 厚: -	瓦当面1/2	① 粗砂粒 ② 灰色 ③
第119図 11 丸瓦 図版 69	長: (25.7) 幅: 14.1 厚: 1.8	ほぼ完形	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第119図 12 丸瓦 図版 70	長: 25.7 幅: 13.6 厚: 1.9	4/5	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第119図 13 丸瓦 図版 69	長: 26.0 幅: 13.5 厚: 1.9	3/4	① 粗砂粒 ② 鈍黄色 ③
第120図 14 棧瓦 図版 69	長: 26.5 幅: (20.1) 厚: 1.7	2/3	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第120図 15 棧瓦 図版 69	長: 26.7 幅: (15.4) 厚: 1.6	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③

図番号 器種	法量 (cm) (残存分)	残存率 出土状態	①胎土 ②色調 ③その他
第120図 16 棧瓦 図版 69	長: (15.1) 幅: (12.1) 厚: 1.6	1/6	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第120図 17 棧瓦 図版 69	長: (11.7) 幅: (13.2) 厚: 1.7	1/6	① 粗砂粒 片岩 ② 黄灰色 ③
第120図 18 角棧伏間瓦 図版 69	長: 28.2 幅: 23.1 厚: 1.7	4/5	① 粗砂粒 ② 灰色 ③
第121図 19 鬘斗瓦 図版 70	長: 25.8 幅: 24.7 厚: 1.7	完形	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第121図 20 鬘斗瓦 図版 70	長: 25.9 幅: (24.8) 厚: 1.7	3/4	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第121図 21 鬘斗瓦 図版70・71	長: (21.3) 幅: (23.4) 厚: 1.7	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② オリーブ黒色 ③
第121図 22 鬘斗瓦 図版 70	長: (20.7) 幅: (12.1) 厚: 1.7	1/3	① 粗砂粒 片岩 ② 黒褐色 ③
第121図 23 鬘斗瓦 図版 70	長: (21.6) 幅: (12.0) 厚: 1.7	1/3	① 粗砂粒 片岩 ② 鈍黄褐色 ③
第121図 24 鬘斗瓦 図版 70	長: (22.2) 幅: (12.2) 厚: 1.7	1/3	① 粗砂粒 片岩 ② 鈍黄褐色 ③
第122図 25 鬘斗瓦 図版70・71	長: 25.3 幅: (12.0) 厚: 1.7	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② 黄灰色 ③
第122図 26 鬘斗瓦 図版 70	長: 26.5 幅: (12.0) 厚: 1.7	2/5	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第122図 27 鬘斗瓦 図版70・71	長: 25.4 幅: (12.4) 厚: 1.7	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第122図 28 鬘斗瓦 図版70・71	長: 25.7 幅: (14.8) 厚: 1.7	1/2	① 粗砂粒 片岩 ② 灰色 ③
第122図 29 鬘斗瓦 図版70・71	長: (10.9) 幅: (12.5) 厚: 1.8	1/6	① 粗砂粒 片岩 ② 灰黄褐色 ③
第122図 30 鬼瓦 図版 70	長: - 幅: - 厚: -	破片	① 粗砂粒 片岩 ② 鈍黄色 灰色 ③

第三章 検出された遺構と遺物

確定され、その様相が明らかになった。
黒熊地区の丘陵地形のはざまに、小型ながら堅牢な作りを呈する神社は、おそらく当地域に密着した深い信仰の対象であったと思われる。我々が発掘調査を進めた際も、地元の方の積極的なご助言とご協力を元に、円滑な調査が進展できた。近世～近代の遺物遺構を扱う機会の増えた近年の埋蔵文化財調査においては、本神社跡のような調査例が今後も増加するものと思われる。今回の調査によって得られた資料がさらに蓄積され、詳細な分析に至る研究を切に望む。

(出土遺物)

前項において、当遺構を基壇上に建つ瓦葺礎石建物の「神社跡」として位置付け、合祀以前の「平地神社」である蓋然性を指摘した。ただし、あくまでも遺構の状態と記録・伝承からの性格付けであり、当遺構からは神社固有の遺物が出土はしていない。おそらく合祀時に全て持ち去られたものと考えられ、遺構周辺から出土した遺物は多量の屋根瓦の数点の鉄製品のみである。瓦出土地点も、建物跡周辺ではなく、斜面・瓦溜まり・表土からであり、残念ながら原位置を推定できる要素は無かった。

周知のように、当遺跡が隣接する藤岡市は屋根瓦の生産地である。当地域の瓦窯業は古くは9世紀～10世紀に遡り、上野国分僧寺・尼寺の創建・修復に深く拘わる窯跡群が知られるが、近世・近代においては、江戸時代に領主の保護下の元、瓦窯業生産が確立され、(明治に入り安定した生産量を誇ったとされている。)現在もやや衰退の兆しが見られるとは言え、当市を代表する産業の一つに数え上げられている。

本神社跡周辺より出土した瓦も、当地域の生産と思われ、時期的にも近世～近代に比定される。本報告では神社遺構と併せてこれら出土瓦を掲載し、該期における瓦の様相を概観し、瓦器種の組成から屋根の構成を提示したい。尚、本神社跡出土の瓦は多量であり、紙面の都合上その全てを図示掲載できな

い。瓦器種を満遍なく抽出し、遺存の良好なものを優先して掲載した。

軒瓦 (第118図1～6)

1～3は巴と垂れに唐草文を施した巴唐草軒瓦であり、2のみ巴が逆となっている。5・6は接合部の状態から巴部分と判断される。1は最も遺存の良い軒瓦で、尻の切り込み長85mm、切り込み幅35mmを測る。他の切り込みの遺存する3・4も幅、長さ共に同じである。巴の直径は、計測位置によって異なるが長径は77mm～79mmである。また、1・4には焼成前のつり穴が穿たれている。4はこのつり穴によって軒瓦と判断した。

隅瓦 (第119図7)

7は垂れに対して角度を付けて小巴が付けられ、更に垂れに対して45°にカキヤブリが、その部分の裏面に撫でが認められる。また、巴の中心を境に反対側にも接合痕が残っている。「埼玉のかわら」によれば、廻隅瓦は、「磨きにかかる前のカラクサを2枚」使い、それぞれ逆の対角線に「カラクサ」を切り、これを型の上で接合すると記されている。従って、以上の特徴から本瓦は廻隅瓦であると考えられる。また、本瓦は垂れに対して90°の部分に焼成前の筋が引かれている。

平軒瓦 (第119図8)

棧のない平瓦の頭部である。頭部先端は欠損しているが、裏面に垂れの接合痕が残っていることから平軒瓦と判断した。平軒瓦は、破風に丸瓦を2本覆う場合に、その間に葺く平瓦の軒先に使用する瓦である。

巴瓦 (第119図9・10)

10は巴瓦の巴部分約半分の破片である。11は巴部分が接合部から欠損しており、万十の可能性もあるがここに含めた。同の中心線上2カ所に焼成前のつり穴が認められる。内面には、目の粗い布の圧痕が残る。布圧痕には撫でられたような痕跡が認められ、制作時に布袋を引き抜いたために生じたものと考えられる。

丸瓦 (第119図11~13)

すべて破風に葺くための玉縁丸瓦である。内面には制作時の粗い布痕が残り、袋を引き抜く際の撫で状痕が残っている。全長は260mm、胴の長さは235mmから240mmである。

棧瓦 (第120図)

14から17は棧瓦である。全体の形状を知りうる資料がなく幅は不明であるが、長さは264mm、尻の切り込み長さ85mm、同切り込み幅29mm、頭の切り込み長さ25mm、同切り込み幅35mmであり、軒瓦と同様の数値を示した。

角棧伏間瓦 (第120図18)

1点のみの出土であるが、棟の最上部に使用する瓦で、高さの低いものである。

平瓦 (第112図19~20)

19・20は、次に述べる鬘斗瓦に比して幅が広く、軒瓦の幅とほぼ同様である。この特徴から考えて、本瓦は破風近くに丸瓦と組み合わせて使用する平瓦であろう。

鬘斗瓦 (第121図21~第122図29)

21から24は、鋸により切り込み線を入れた鬘斗瓦である。中でも21は切り込み線から分割しておらず、未使用の可能性も考えられる。22から24は切り込み線より分割している。25から29は、瓦金槌により分割線を施し、分割されている鬘斗瓦である。鬘斗瓦の焼成は、他の瓦に比してややあまく、表面の光沢も少ない。

鬼瓦 (第122図30)

1点のみであるが、鬼瓦裾部分の小片である。小片のため、全体の文様や大きさは不明である。

小 結

神社跡出土瓦の数量は多いものの、屋根葺に使用する瓦の種類すべてが揃っているわけではない。しかし、限られたなかでもいくつかの特徴は指摘できる。屋根の形を推定できる資料としては廻隅瓦とケラバ瓦がある。廻隅瓦は、平と棟の交点に葺く瓦である。したがって、この瓦は切妻屋根には使用せ

ず、入母屋もしくは寄せ棟であった可能性が指摘できる。また、切り妻屋根の場合、通常破風部分にケラバ瓦を葺くが、この瓦が出土していないことも切妻屋根でなかったことの傍証となろう。

<参考文献>

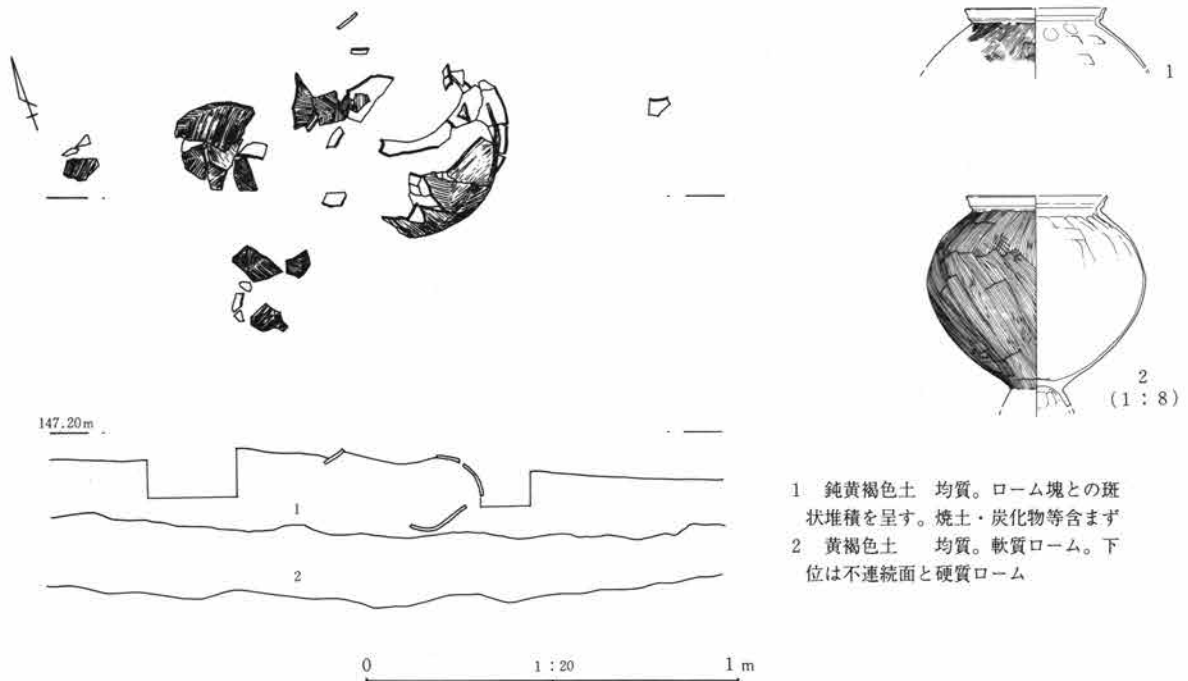
埼玉県立民俗文化センター「埼玉のかわら」埼玉県民俗工芸調査報告 第4集 1986
坪井利弘「日本の瓦屋根」理工学社 1976

(大西)

本節では、検出された基壇状遺構と礎石建物を神社跡として、遺構の様相と出土瓦を報告した。遺構・瓦の詳細は先に述べているため、最後に、本神社跡の立地を考えてみたい。

本神社跡は丘陵性台地に挟まれた、狭小な谷頭部分に占地する。周辺に該期の集落跡は検出されておらず、村落外の小規模神社跡と考える。集落は北側に展開する中位段丘面に占地し、距離を離す。

本神社跡の東西及び南側は斜面地形によって画され、北側のみが開ける地形が選ばれている。さらに、当地点を平坦に削平し、基壇を作出し、南側には土塁、西側と北側の一部は小溝、東側は参道を兼ねた幅広の溝で区画している。いわば、自然地形と人為区画による2重の区画が想定できよう。これは社域の確定としては重要な要素であり、人為区画による本殿・拜殿の確立と周辺の自然環境を包括した社域の在り方として位置付けられる。さらに北側の中位段丘は集落域が展開し、集落と連繋した立地ともなる。独立した立地様相の当神社跡ではあるが、自然環境と集落との接点を意識したのではないだろうか。以上、推定の域を出ない自論ではあるが、古代寺院跡が台地頂部等に選地する傾向に比して、近世・近代神社が低地部分を選び、周辺の自然環境との一体化を目指した立地形態として指摘しておく。今後の調査事例の増加を待ち、近世集落外の小規模神社立地形態として課題としたい。



1 鈍黄褐色土 均質。ローム塊との斑状堆積を呈す。焼土・炭化物等含まず
2 黄褐色土 均質。軟質ローム。下位は不連続面と硬質ローム

第123図 土器埋設遺構

第7節 土器埋設遺構

第Ⅰ台地調査区南西部の23-49グリッドで検出された。周辺は丘陵性地形が著しく、北側への急斜面を呈する地点である。近距離には遺構は無く、単独の検出となった。

土器は1箇所にまとまっており、台付甕が逆位の状態で出土した。調査当初は1個体分の埋設土器として位置付けたが、後に別個体の口縁部破片が認められ、2個体分の埋設として捉えた。

ただし埋設遺構といえども、明瞭な掘り込みを持

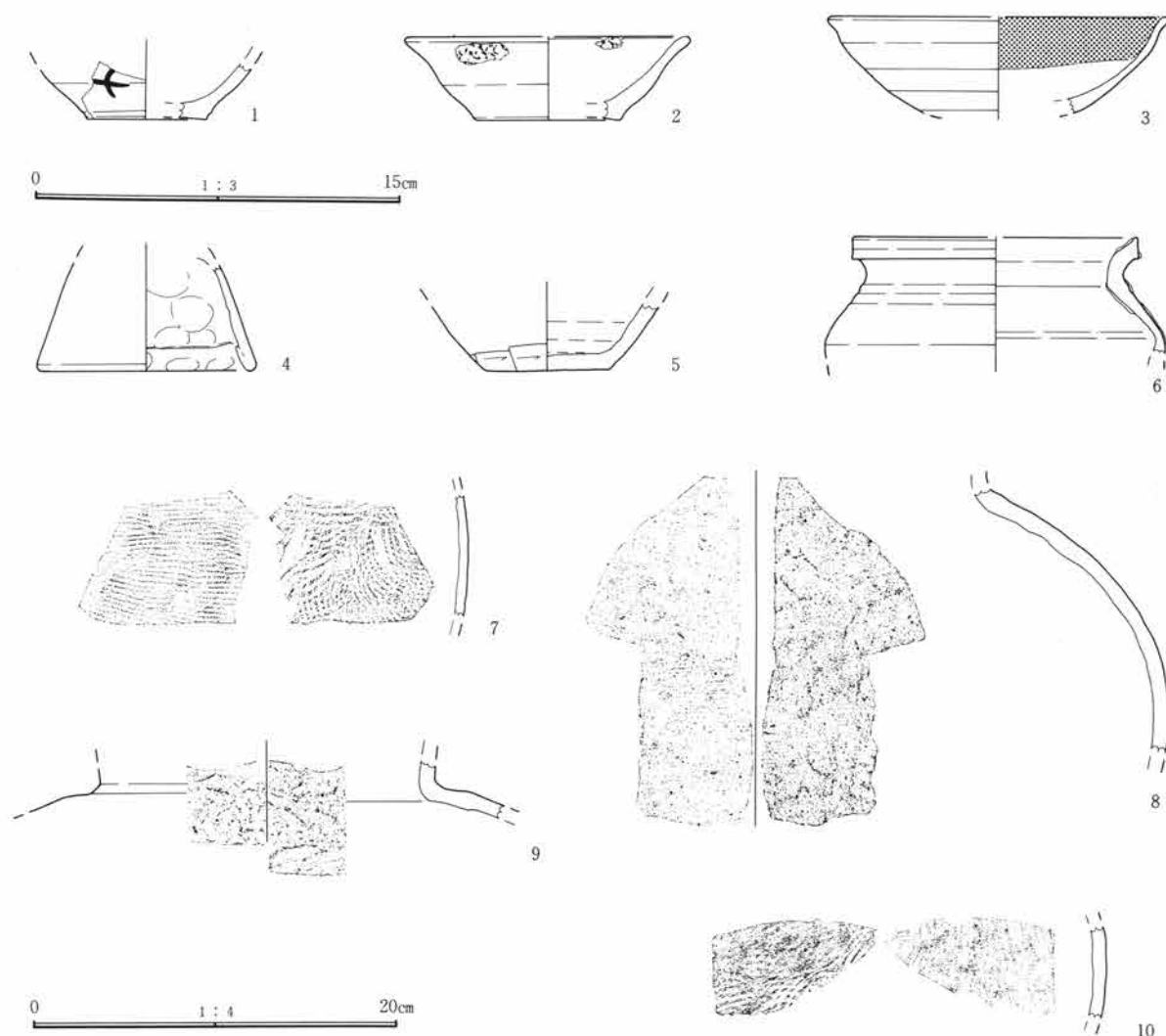
たない。調査においても、平面および断面の観察を入念に行ったが、土層の変化は無く、黄褐色土中に埋設された土器として確認した。確かに、当遺跡の遺構覆土は、鈍黄褐色土を基調とする例が多く、識別に苦慮する調査ではあった。当遺構もおそらく掘り込みが存在していたものとし、埋設土器として位置付けたい。

尚、土器内部及び黄褐色土からは焼土・炭化物・骨等の出土は見られなかった。土器は古墳時代初期のS字状口縁を呈する台付甕である。

第70表 土器埋設遺構遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第123図 1 台付甕 図版 67	口：(15.0) 高：－ 底：－	約1/2	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③淡黄色 ④土師器	いわゆるS字状口縁を呈する甕。口縁部は外傾し頸部は強く屈曲する。体部上半に膨らみ持つ。口縁部は横撫で体部外面は斜位刷毛目。内面横位宛撫で。肩部には指頭圧痕が残る。
第123図 2 台付甕 図版 67	口：15.0 高：－ 底：－	口縁部 約1/4	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③淡黄色 ④土師器	いわゆるS字状口縁を呈する甕。口縁部は外傾し頸部は強く屈曲する。体部上半に膨らみを持ち、脚部接合部で屈曲する。口縁部は横撫で体部外面は斜位刷毛目。脚接合部にも及ぶ。体部内面は横位宛撫で。脚部内面は縦位指撫でを施す。

第8節 遺構外出土遺物



第124図 第I台地出土遺物

第8節 遺構外出土遺物

本節では、住居跡・土坑等の遺構出土以外の遺物を扱う。発掘調査の手順上、表面採集・試掘・表土掘削時出土のものや遺構出土ながら帰属が不祥のものを各台地調査区毎に掲載した(125図・126図)。また、第I台地調査区域外ではあるが、その南方に存在する「塔之峰廃寺」との関連を捉える意味で、当地点周辺の表面採集遺物を同時に掲載した(126図)。これは、第I台地南東隅で検出された2号住に比定される7世紀代の遺物採集も兼ねている。遺構平面確認作業等で得られた遺物は、グリッド出土とし127図に集めた。これらは出土地点を記録化しているが、分布図による提示は避け、グリッド名を

明記し出土地点をあらわしたい。

尚、縄文時代の土器片や石器、1点のみ出土した砥石は後述する。また、第I台地で出土した近～現代遺物は割愛した。

(第I台地調査区遺構外出土遺物)

124図に掲載した遺物は、第I台地調査区出土のものである。すべて破片状態であり、出土地点も不祥である。表土掘削時の出土もある。1は墨書土器、2は油煙付着、3は灰釉陶器で転用硯という性格上抽出した。4の台付甕脚部は土器埋設遺構との関連が想起されよう。表土出土。5は酸化焙焼成轆轆甕あるいは土釜であろうか。6は試掘時の出土の

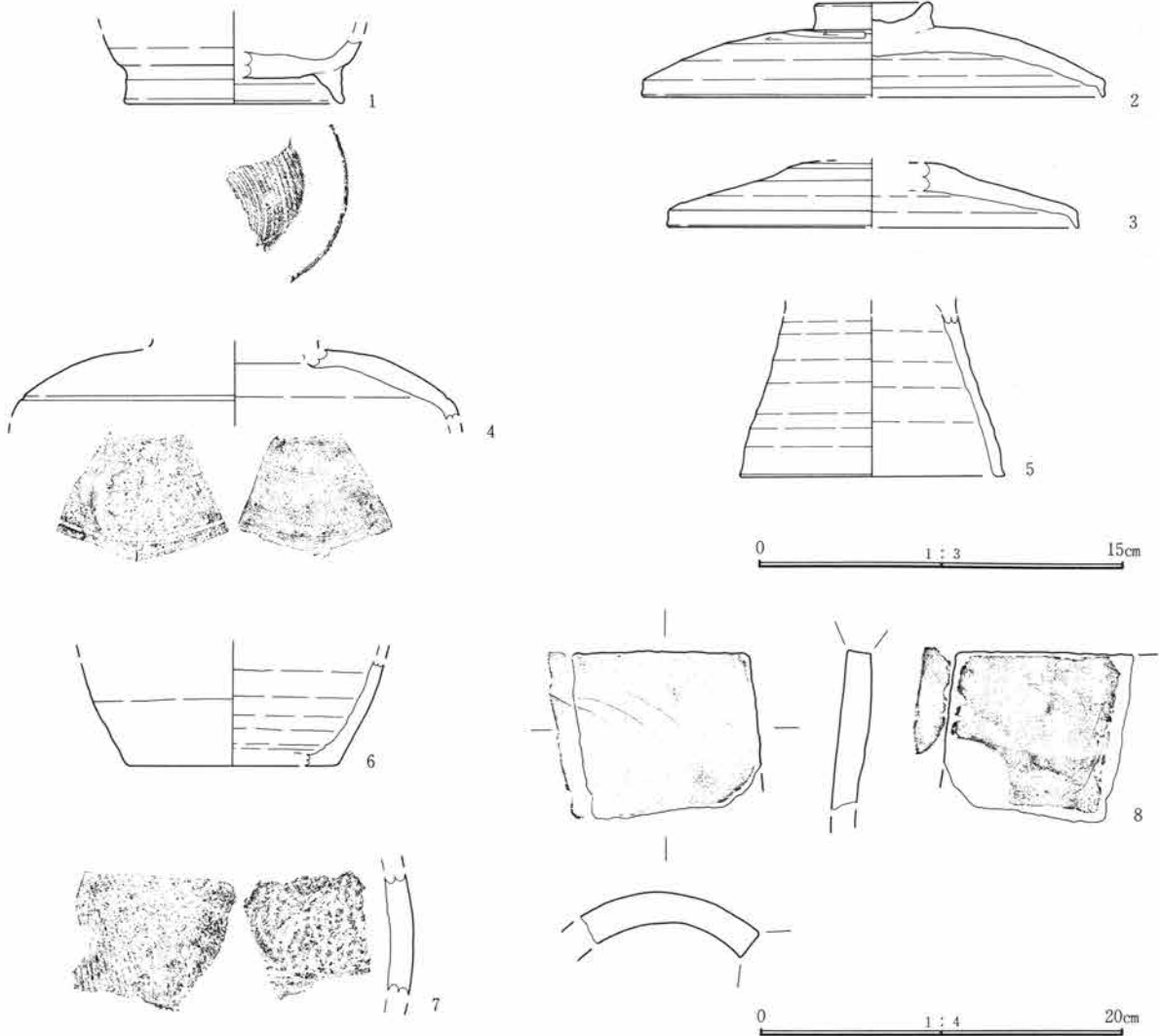
第三章 検出された遺構と遺物

第71表 第I台地遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第124図 1 坏	口： - 高： - 底： (5.0)	底部約1/5	①粗 白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器 墨書土器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部中位に丸みを帯びる。底部は僅かに立ち上がる。体部外面に墨書。細く端麗に書かれるが、判読不能。
第124図 2	口：(11.8) 高： 3.4 底： (5.9)	約1/6	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄 橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを帯びる。底部は僅かに立ち上がる。内面見込み部は緩やか。轆轤整形後体部に弱い撫でを加える。口縁部内外面に油煙付着。
第124図 3 灰釉 甕	口：(14.0) 高： - 底： -	口縁部 約1/6	①緻密 ②還元焰 ③浅黄色 ④灰釉陶器	左回転轆轤整形。口縁部外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。体部下半は回転筒削り。施釉は内面に顕著。内底面は研磨のため滑沢面を持ち、墨痕が残る。
第124図 4 台付甕	口： - 高： - 底： (9.0)	脚部破片	①粗 白色粒 ②酸化焰 ③黄褐色 ④土師器	古墳時代初頭期の台付甕脚部破片。端部を内面に折り返す。外面は丁寧撫で、内面は指頭圧痕残り、折り返し部分に顕著。
第124図 5 甕	口： - 高： - 底： 6.8	底部	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形。体部は大きく開き横位筒削りが施される。底面は切り離し後撫でを加える。体部器厚は厚いが底部は薄手。
第124図 6 甕	口：(15.8) 高： - 底： -	口縁部破片	①粗 片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	回転轆轤整形。回転方向不詳。口縁部は直立し、口頭部は短く外傾する。肩部は緩やかに落ち体部上半に屈曲状に膨らみを持たせる。口縁器厚は厚い。内外面に窯片が著しく付着。
第124図 7 甕	口： - 高： - 底： -	体部破片	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	叩き整形を施した体部破片。薄手の器厚で歪みがある。外面平行叩が密に、内面は青海波文が残る。
第124図 8 甕	口： - 高： - 底： -	体部破片	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	叩き整形を施した体部破片。やや厚手の器厚。外面平行叩、内面青海波文。
第124図 9 大甕	口： - 高： - 底： -	頸部破片	①粗 石英 ②還元焰 ③オリーブ 灰色 ④須恵器	叩き整形。口縁部は轆轤整形か。頸接合部は「く」字状に屈曲し、体部は強く張る。内面円環状当て目残る。体部外面自然軸が付着。
第124図 10 大甕	口： - 高： - 底： -	体部破片	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	輪積後叩整形。頸接合部は屈曲し肩部に緩やかな張りを持たせ体部中位が膨らむ。外面平行叩後撫で。自然軸付着。内面青海波文が顕著。器厚は比較的薄手。

甕口縁部破片。7は出土地点不詳。8は試掘時で調査区東端の出土。9は表面採集遺物である。10も8と同地点で出土したが、詳細な記録はない。

第I台地調査区では、9世紀後半から10世紀前半代の住居跡が主体に調査が重ねられた調査区であるが、124図に挙げた遺物も4を除き、概ね当該期に属するものと思われる。しかし小破片のため、時期特定はできず、第I台地調査区の遺物様相の一端とし、詳細な判断は避けたい。



第125図 第Ⅱ台地出土遺物

(第Ⅱ台地調査区遺構外出土遺物)

第Ⅱ台地調査区では、8世紀後半から9世紀代を主体にした住居跡群が、狭小な平坦地に重複して検出された調査区である。小鍛冶遺構を併設する住居跡2軒も確認されており、多様性を含んだ該期集落跡である。

125図に挙げた遺構外出土遺物の殆どが、ほぼ同時期の所産と思われ、濃密な遺構・遺物の集中が窺われよう。

1～3は同焼成・同胎土のものを集めた。橙色を呈し、重ね焼き痕が著しい一群である。おそらく9世紀後半から10世紀初頭に比定され得る資料と思われるが、同様な橙色を呈し重ね焼き痕跡を持つ例が住居跡出土遺物に無く、関係性を求められない。出

土地点も詳細にまでは至らない。4も出土地点不祥。同一個体と思われる細片が他に2片出土している。5はおそらく高盤脚部と思われる。表土掘削時の出土。6も表土掘削時出土。酸化焰焼成の轆轤甕であろうか。7は表面採集による甕体部破片。8は出土地点不祥の丸瓦破片。凹面・凸面とも撫でが加えられる特徴がある。

前にも述べたように当調査区は住居跡密集地点であり、住居跡出土遺物も豊富である。にもかかわらず、1～3のような橙色の色調を呈し、重ね焼き痕残す須恵器供膳具が見られず、この一群の位置付けは難しい。特徴ある様相を見せる一群であり、類例の検証が必要であろう。

第三章 検出された遺構と遺物

第72表 第Ⅱ台地遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第125図	1 碗	口：－ 高：－ 底：(8.8)	約1/4	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部下半は丸みを帯び、高台は開き気味に貼付される。内面見込み部は緩やかな彎曲を呈す。器厚は比較的厚手。内面橙色・外面黒色を呈す。
第125図	2 蓋 図版 68	口：(19.0) 高： 3.9 摘： 4.6	約1/4	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	左回転轆轤整形。摘貼付。天井部は低く緩やかな丸みを帯びる。かえり部は比較的鋭い。天井部は回転筒削り。摘はボタン状で丁寧に貼付される。器厚は厚手で、内外面に重ね焼きの黒斑がある。
第125図	3 蓋	口：(17.0) 高：－ 底：－	約1/4	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	左回転轆轤整形。摘部は欠損。天井部は低く緩やかな彎曲を呈す。かえり部は比較的鋭い。天井部は回転筒削り。器厚は天井部が顕著に厚い。重ね焼きの痕跡として外面裾部・内面全面が黒色を呈す。
第125図	4 壺	口：－ 高：－ 底：－	肩部破片	①粗 白色粒 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	轆轤整形。回転方向は不詳。頸接合部は緩やかな彎曲を呈し、肩部は強く張る。肩部は下位に1条の沈線が巡る。外面自然釉付着。
第125図	5	口：－ 高：－ 底：－	脚部	①粗 白色粒 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。脚部下位に僅かな丸みを持たせる。内外面に自然釉付着する。
第125図	6 甕	口：－ 高：－ 底：(11.8)	底部約1/5	①粗 片岩 石英 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	轆轤整形。回転方向不詳。僅かな膨らみを持ち立つ。底部は平底。轆轤整形後体部外面は横位撫でを入念に施す。
第125図	7 大甕	口：－ 高：－ 底：－	体部破片	①粗 白色粒 ②還元焰 ③オリーブ黄色 ④須恵器	叩き整形。外面平行叩、内面青海波文。器厚厚手。外面自然釉付着。
第125図	8 丸瓦 図版 68	厚： 1.6	破片	①粗 片岩 ②酸化焰気味 ③橙色 ④	凸面入念な撫で、凹面横位撫で。端部・側部とも面取りは1回。厚手

(南側区域外出土遺物)

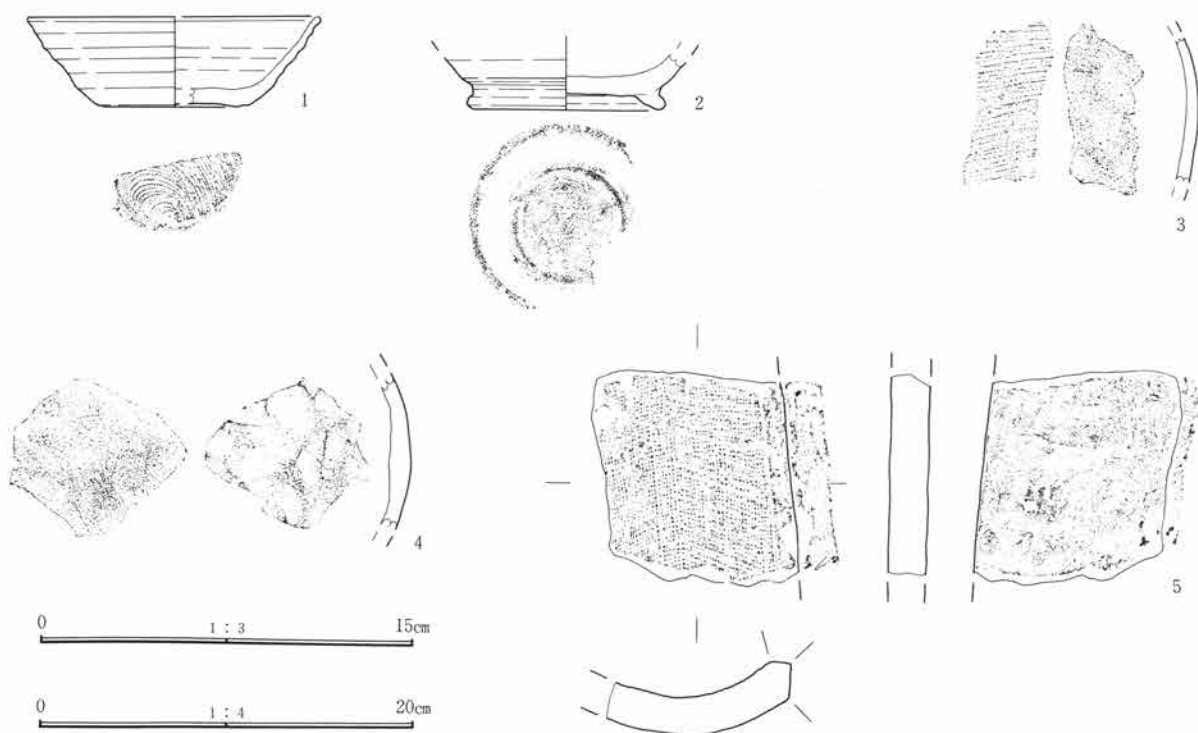
すべて表面採集遺物である。第Ⅰ台地調査区南の当地点には、「塔之峰廃寺」が存在するといわれ、詳細な調査の必要性が望まれていたが、現状は対象地の大部分がゴルフ場であり、発掘調査の手が及ばない。本遺跡を担当した調査班では、この事態を鑑み、休日を利用しゴルフ場対象地以外の畑地や山林を踏査し、「塔之峰廃寺」周辺の様相を探った。

表採地点やその量等詳細は紙面の都合上述べられないが、図示に耐え得る数点を抽出し、本報告書に掲載することによって、「塔之峰廃寺」の周辺様相を提示したい。尚、遺物採集の目的の一つとして、「塔之峰廃寺」以外に、本遺跡2号住居跡と同時期の遺物の広がりを確認する目的もあった。

表採された遺物は、須恵器坏・碗・甕類が多く、瓦も数点見られた。土師器類は以外に少なく、甕頸部小破片が見られた程度である。採集地点も、数箇所であり126図に掲載した遺物は、そのうちの1箇所からのものである。確定性に乏しいが、集落跡の一部と思われる。尚、他地点の遺物は細片であり、図示できなかった。

表採された須恵器坏(1)は9世紀後半、碗(2)は10世紀後半代に時期が求められよう。3・4は須恵器甕体部破片。5の丸瓦は側部の面取りが丁寧に2回に及び、凹面に剥ぎ取り痕が見られる。やや軟質な焼成で、平安時代の所産と思われる。

このように推定「塔之峰廃寺」周辺は、平安時代の遺物が散布しており、瓦も採集されることから、



第126図 南側区域外出土遺物

寺院跡の存在は濃厚である。本遺跡では4号住・10号住・24号住・30号住等で少量ながら瓦が出土しており、これらの住居跡は概ね10世紀前半代に比定される遺物が伴出している。また、24号住以外の住居跡は第I台地調査区に位置しており、当調査区周辺一特に南側には瓦を使用する施設が存在する可能性を示唆する。

さて、「塔之峰廃寺」については、詳細な発掘調査がなされておらず、表面採集遺物を持って語られている。『吉井町誌』(1974)によれば、多量の文字瓦を出土する寺院跡推定地として挙げられており、文字瓦の中の「辛子三」と同町多胡碑碑文の「給羊」との関連を注目している。

次に、群馬県立歴史博物館による第8回企画展『群馬の古代寺院と古瓦図録』(外山和夫他1981)において、個人の方の所蔵品である「塔之峰遺跡」出土品が解説されている。前述の、「辛子三」と記された文字瓦を含み、軒平瓦等5点が展示解説で紹介された。文字瓦を主体とした掲載であり、時代は奈良時代に求められている。

須田茂氏は滝ノ前窯跡とその出土遺物の分析に際して、同窯跡より出土した文字瓦「山物尸乙亡」と「塔之峰廃寺」出土とされる文字瓦「山字乙稲亡」との関連から滝ノ前窯跡から「塔之峰廃寺」への瓦供給を指摘されている。その際、「塔之峰廃寺」を丘陵上に所在する山地寺院であり平安時代に時期を求め、また、滝ノ前窯跡の操業や上野国分寺への瓦供給の背景に「塔之峰廃寺」の関連性を推測されている(須田1989)。

以上のように「塔之峰廃寺」に関する主な分析・記述を概観したが、寺院跡とした吉井町誌と須田氏の分析、瓦散布地として遺跡の性格を特定しなかった歴史博物館図録があるが、当遺跡の性格そのもの特定も至っていない。ただ、須田氏も『黒熊中西遺跡(1)』(須田1992)において塔之峰遺跡と呼称し寺院跡の存在を窺わせている経緯を踏まえると、寺院跡とした単独の性格付けを避け、寺院跡を含む塔之峰遺跡とした呼称方法が妥当性を帯びよう。

さて、黒熊栗崎遺跡第I調査区南側の表面採集遺物は平安時代に属し、須田氏が提示した「塔之峰廃

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

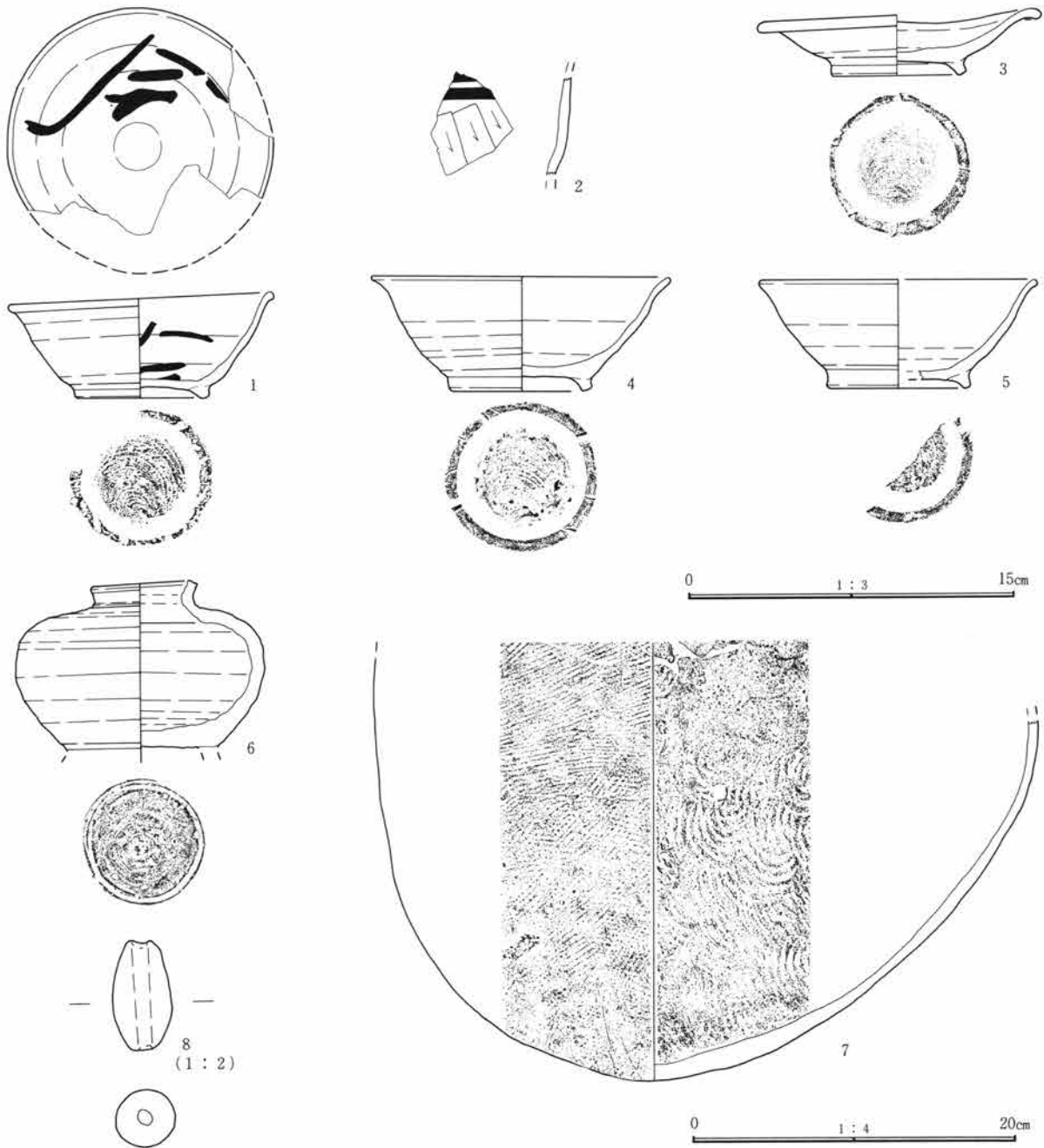
第73表 南側区域外表採遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第126図 1 坏 図版 68	口：(11.8) 高： 3.6 底：(5.4)	約1/3	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部僅かに外反し体部は下半に丸みを帯びる。内面の見込み部は緩やかな彎曲を呈す。器厚は比較的薄手。
第126図 2 碗	口： - 高： - 底： 7.6	底部約3/5	①粗 片岩 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄 橙色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。体部下半に僅かな丸みを持たせ、高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。内面は研磨、黒色処理されるが、剥落多く判然としない。
第126図 3 甕	口： - 高： - 底： -	体部破片	①粗 石英 白色粒 ②還元焰 ③オリーブ 黄色 ④須恵器	叩き整形。外面平行叩、内面は撫で、当て目は残存せず。器厚は薄手。外面に自然釉付着。
第126図 4 大甕	口： - 高： - 底： -	体部破片	①粗 白色粒 ②還元焰 ③オリーブ 黄色 ④須恵器	叩き整形。外面撫で、内面円環状当て目残り撫でも加わる。器厚は比較厚手。外面に自然釉付着。
第126図 5 丸瓦 図版 68	厚： 2.0	約1/8	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄 褐色 ④	凸面横位撫で後縦位撫で、凹面布目。側面取り2回。厚手。

寺」年代観とも合致する。塔之峯遺跡は、黒熊栗崎遺跡に南接する寺院跡を包括する遺跡として捉えられよう。両遺跡は同等の性格を具備した同時期の遺跡であり、同一遺跡の位置付けも可能である。

この場合、西方約1 kmに位置する黒熊中西遺跡の例を見ると、丘陵頂部に占地する複数の礎石建物と周辺に集落跡が併存している。この形態が当地域の古代寺院跡周辺の景観と推定すれば、塔之峰遺跡と黒熊栗崎遺跡は寺院跡と集落跡という一つのセットをなすものと考えられないだろうか。かつて編者は黒熊中西遺跡の寺院跡と集落跡を「集落併設型寺院」・「寺院併設型集落」として位置付けた(山口1994)経緯がある。塔之峰遺跡と黒熊栗崎遺跡も隣接する寺院跡遺跡と集落遺跡であり、黒熊中西遺跡と同様な景観が想定されよう。

このように、僅かな表面採集資料からではあるが、本遺跡に南接する塔之峰遺跡を寺院跡を包括する遺跡として位置付け、本遺跡との関連を考えてみた。しかしながら、表面採集資料の限界から、寺院跡の詳細な位置や性格・集落との関係等は判然としない。検証を重ねる必要がある。



第127図 グリッド出土遺物

(グリッド出土遺物)

本項では、遺構外出土遺物ながら出土地点の記録化が果たされたものを中心に述べる。遺構に帰属せず単独で出土したものや遺構確認時の出土のものが含まれており、いわゆる包含層出土や斜面一括廃棄の遺物ではない。本来ならば詳細な分布図を提示しなければならぬが、量的にも少なく、出土層位

もⅢ層下位や遺構覆土上層である。そのためグリッド名を記すことによって出土位置とした。

墨書土器(1)は第Ⅰ台地調査区北東部10-27グリッドで出土した。周辺に該期遺構は無く、単独出土の高台付碗である。2-4は第Ⅰ台地調査区中央の12-34・35グリッド出土で、重複する4号住・10号住・11号住が対応する。遺構確認時の出土である。

第三章 検出された遺構と遺物

第74表 グリッド遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土グリッド	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第127図 1 碗 図版 68	口： 12.2 高： 4.6 底： 6.0	約3/4 10-27	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器墨書土器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口唇部丸みを持ち玉縁状を呈す。口縁部外反し体部中位に丸みを持つ。高台は短く直立し内面見込み部は顕著に彎曲する。内底面に墨書。「会」か
第127図 2 甕？	口： - 高： - 底： -	破片 12-35	①粗片岩 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④土師器墨書土器	甕の体部破片であろうか。斜位窺削りが施される。平行する墨書が看取されるが、判読は不明。器厚は薄い。
第127図 3 皿 図版 68	口： 13.2 高： 3.1 底： 6.3	完形 12-34	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③明黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は丸み帯び強く外反するため玉縁状となる。体部中位に丸みを持たせ、高台は短くやや開き気味に付される。轆轤整形後体部に弱い撫でを加える。
第127図 4 碗 図版 68	口： 14.0 高： 5.3 底： 6.0	約4/5 12-34	①粗片岩 石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部強く外反し体部中位に丸みを持たせる。高台短く開き気味に付される。内面の見込み部は緩やか。器厚薄く均整の取れた器形を呈す。
第127図 5 碗 図版 68	口： 12.8 高： 5.0 底： 6.4	約1/3 11-28	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。口縁部は僅かに外反し体部は中位に緩やかな丸みを帯びる。高台は短く外反気味に付される。内面見込み部は緩やかに彎曲。器厚は比較的薄手。
第127図 6 短頸壺 図版 68	口： 6.6 高： 10.1 底： 9.5	ほぼ完形 27-76	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	右回転轆轤整形高台貼付後周縁撫で。高台欠損。口唇部僅かに突出し、口縁部は外傾する。肩部は強く張り体部中位に膨らみを持つ。体部下半は回転窺削り後撫で。底面も窺切り。器厚比較的厚手。
第127図 7 大甕 図版 67	口： - 高： - 底： -	体部	①粗片岩 石英 ②還元焰 ③オリーブ 黒色 ④須恵器	著しく歪む体部器形。底部も丸底で安定感に欠く。体部は中位～下半が叩き整形で外面は平行叩、内面は下半に青海波文、上半は撫でが加わる。器厚は比較的薄手。
第127図 8 土錘 図版 68	長： 3.4 径： 1.8 重：	完形 26-89	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成型。中位がやや膨らみ両端が小径となるものの丸みを帯びるずんぐりした形態。外面は撫でにより滑沢。

2は土師器甕の墨書土器。3の皿は完形である。4は小破片状態でまとまって出土した。5は第Ⅰ台地調査区北東部11-28グリッド出土。相応する住居跡・土坑は無く、1と同様に単独の出土である。6の短頸壺は第Ⅱ台地東斜面である27-76グリッドで出土した。周辺に遺構は無く集落跡と大きく距離を保ち、単独の出土である。7の大甕も6と同様に第Ⅱ台地調査区東斜面28-76で出土した。まとまった単独の出土である。8は第Ⅱ台地26-89グリッド出土。22号住が相応するが。当住居跡には他に土錘の出土が1点見られ、おそらく22号住に帰属し得る土錘と考えられる。

以上グリッド出土遺物を概観したが、高台付碗(1・5)・短頸壺(6)・甕体部(7)は遺構に近接せ

ず単独の出土状態を呈す。自然営力による流出も充分考えられるが、例えば1の碗には墨書が施され祭祀的な色彩も加わる。さらに短頸壺の単独出土は単なる流入・流出とは考えられず、何等かの人為的な行為が想定されなければならない。残念ながら、類例の蓄積・検証も及ばず、本報告ではこのような単独出土の事例に明確な論を提示できない。今後さらに詳細な調査による類例を重ねなければならないだろう。課題のひとつである。

(縄文土器)

黒熊栗崎遺跡では、奈良・平安時代の住居跡と近代神社跡が調査されたが、これらの遺構検出時あるいは掘削時に縄文時代の遺物が散見された。調査区域内では縄文時代の住居跡等の遺構は検出されず、おそらく周辺に包蔵地が存在するものと思われる。出土した土器片も前期～後期末葉と幅広く見られ、周辺遺跡の他時期にわたる立地が想起された。出土地点も特に明瞭な集中は見られず、全体に散漫な分布を見せる。

本遺跡が占地する中位～高位段丘面においては、黒熊八幡遺跡で縄文時代前期・中期初頭の遺構・遺物が検出されており、同標高地に位置する本遺跡との関連も考えられよう。また、その他の中位段丘面では吉井町黒熊遺跡群（茂木1985）や藤岡市白石根岸遺跡（斎藤1994）では縄文時代前期後半期の住居跡等が報告されている。中期加曽利EⅢ式期の敷石住居跡を検出した白石大御堂遺跡（綿貫1991）も近距離にある。さらに、距離は離れるが藤岡市緑埜鍛冶谷戸遺跡（藤岡市史編纂委員会1993）・谷地遺跡（寺内1988）では、後期後半～晩期初頭期の遺構・遺物が主体的に検出されている。

このように、藤岡～吉井町にかけての沖積地や丘陵地形における縄文時代遺跡の分布は、多時期にわたる様相を呈す。近年の発掘調査事例の増加に伴い、縄文時代遺跡も徐々に調査されており、詳細な遺跡分布を捉える必要が生じている。当地域の縄文時代遺跡分布を考える際、遺構未検出の本遺跡の出土遺物といえども軽視はできない資料であり、ここに提示し資料蓄積の一助としたい。

本遺跡より出土した土器片は、100点に満たず細片が多かった。若干の接合関係も認められたが、隣接した出土状態の場合に限られ、距離を置いた接合関係は認められなかった。完形に復元された個体も無い。

本報告では、出土破片のうち状態の良好な50数点を選び、時期毎に掲載した。以下説明を加えるが、胎土・色調等は第75表を参考にして載きたい。

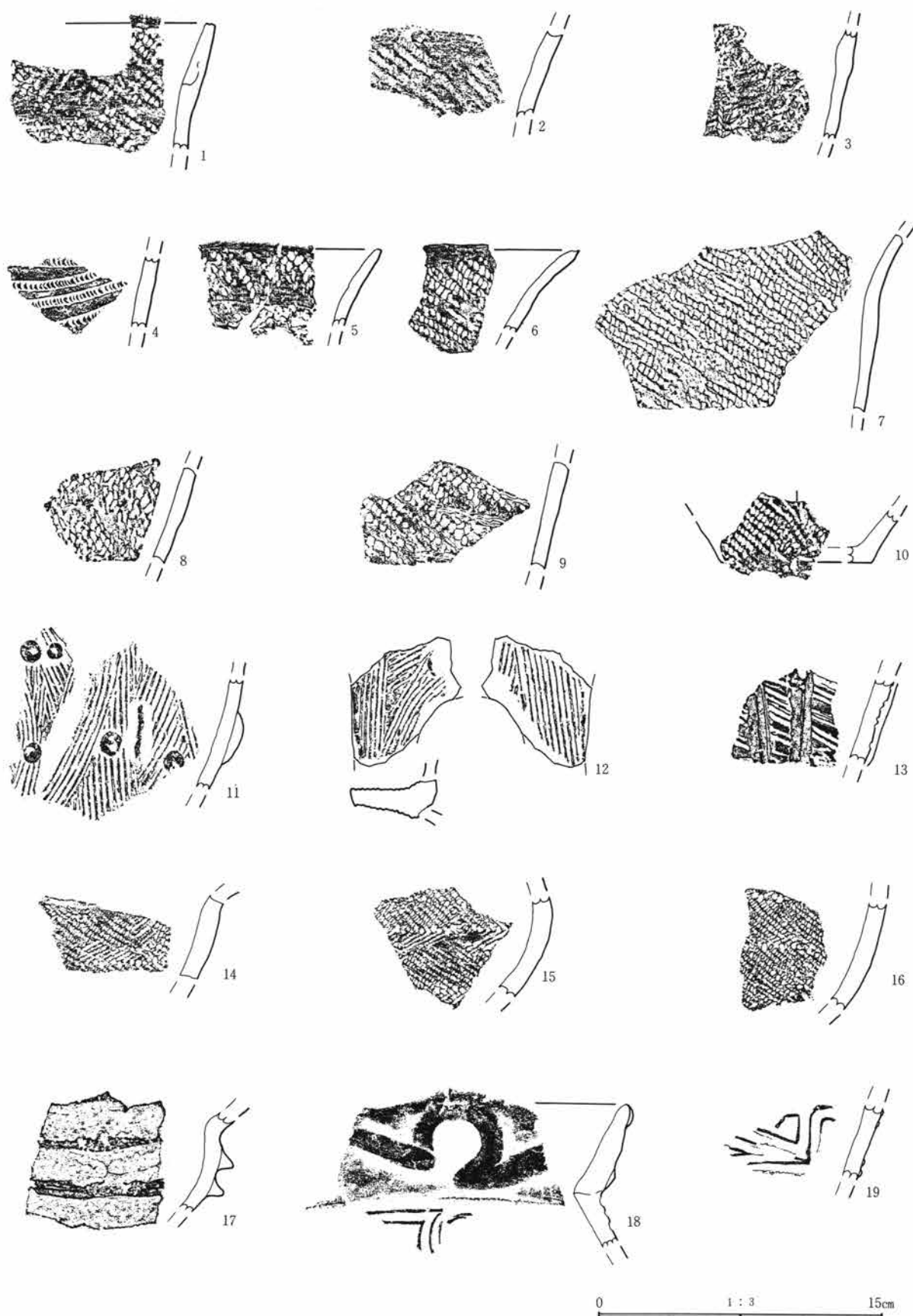
1～3は黒浜式あるいは併行期の土器である。1は口縁部破片であり、口縁部に向かって緩やかに外反する器形を呈する。LRとRLによる羽状縄文を施文している。2はRL。3はLR縄文を施文している。3は器面調整が乱雑で凹凸が多い。

4～16は諸磯式土器である。4は半截竹管による連続爪形文を4条施している。器面は丁寧に研磨されている。5・6は口縁部破片であり、ともに口縁部に向かって緩やかに外反する器形を呈する。5はRの捺糸文を施文する。器面には撫でによる調整痕が顕著に認められ、胎土には砂粒を多く含む。6はRL縄文が施文される。7・9もRL縄文を施文するものである。7は口縁部に向かって外反する器形となる。丁寧に撫でによって器面調整されている。8はR捺糸文を施文している。10はRL縄文を施す平底の底部である。4は諸磯a式、5～10はb式に比定されよう。

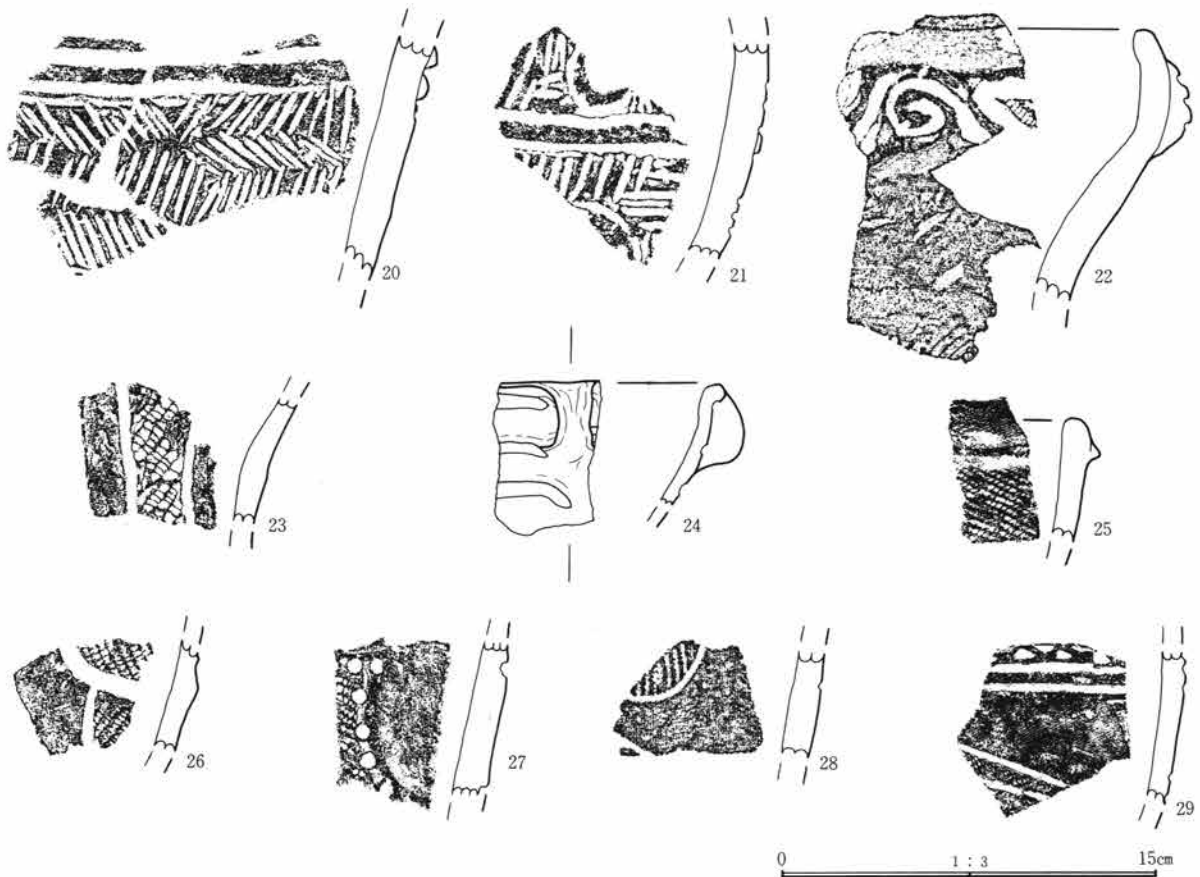
11～13は諸磯c式に比定される。11は口縁部付近の破片であり集合沈線を施し、ボタン状突起と耳状突起を貼り付けている。12は集合沈線のみ部位であるが11と同様の構成になると思われる。13は斜位に沈線を施したのち、縦位に2条の隆線を貼り付けている。

14はRLとLRによる羽状縄文を構成する。頸部屈曲部で欠損する。15・16は同一個体であり、LRとRLによる羽状縄文を施文している。15は原体に変化をつけており、RLよりもLRの原体の方が細かい。14～16は諸磯c式あるいは前期終末期の横位羽状縄文を構成する一群と思われる。

17は口縁部に向かって大きく外反する器形を呈し、文様は2条の平行隆線を横位に施している。18は頸部で「く」字状に屈曲する器形を呈する。口縁部文様帯は幅1cm程の幅広の隆帯を用いて口縁部主幹文様を配する。主幹文様は波頂部下に円の一部途切れた意匠であり、幅広の隆帯を横位に連繋する構成を取る。胴部文様帯は細隆線を用いた文様が展開する。19は18と同一個体であり、胴部文様帯の部位に相当する。17は中期中葉か。18・19は胴部の細隆



第128図 縄文土器実測図(1)



第129図 縄文土器実測図(2)

線の在り方から中期初頭に位置付けられ、東北地域の要素も加味しなければならないだろう。

20・21は勝坂式である。20は横位2条の隆線で区画し、下位は矢羽根状の沈線を施文している。21も20と同様、横位の隆線で区画する。文様は弧状の隆線を貼り付け、空間に短沈線を充填施文する。勝坂式終末期の所産であろうか。

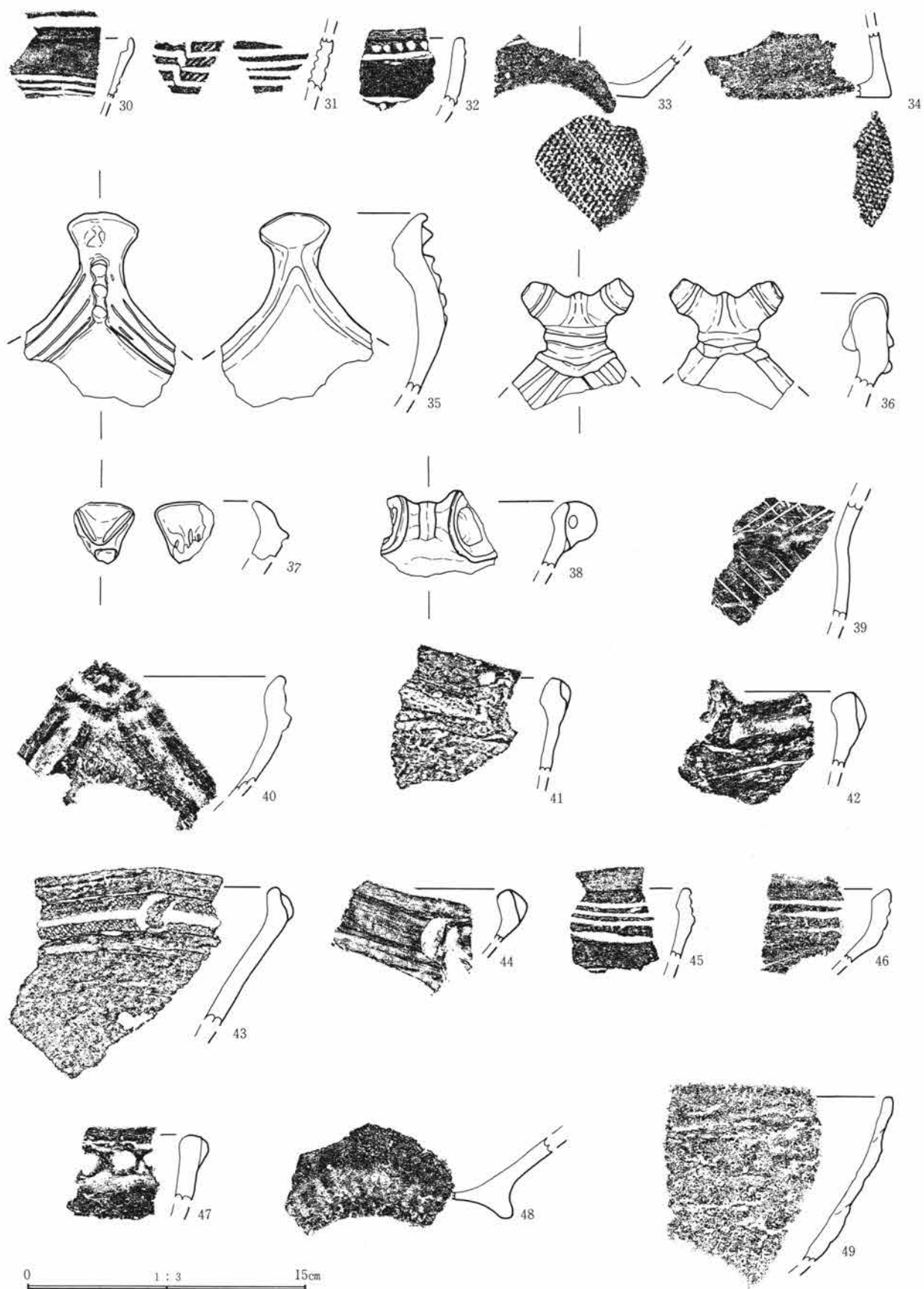
22・23は加曾利EⅡ・Ⅲ式である。22はキャリパー状の器形を呈する口縁部文様帯には渦巻文を配し、区画内はRL縄文を充填している。口縁部文様帯以下は無文部をへて胴部上半にLR縄文が施文される。23は胴部懸垂沈線間にRL縄文を充填し磨消部との交互の配列。

24～28は称名寺式に比定される。24は口縁部に耳状の突起をもち、口縁部平行して3条の沈線を施している。胎土に砂粒を多く含みざらついた感触を得る。25は口縁に平行した隆線によって口縁部に無文

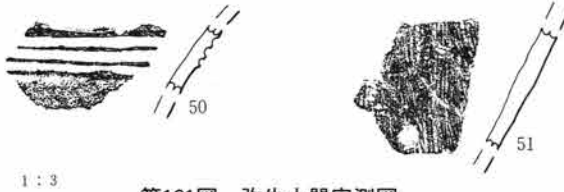
帯を形成し、隆線以下にRL縄文を施文している。26は太さの異なる沈線を使用して区画し、区画内にRL・LR縄文を縦位に充填している。27は隆線によって区画し、区画内にRL縄文を施す。隆線に沿って円形刺突を加えている。胎土には砂粒を多く含む。28は沈線によって区画し、区画内はRL縄文を充填している。24～28は称名寺式の前段階と捉えた。

29は堀之内2式である。刺突を挟んだ平行沈線を横位にめぐらす。文様帯内は斜位に2条の沈線を施し、この沈線間に部分的にLR縄文を充填している。器面は丁寧に研磨され、光沢をもつ。

30～34は加曾利B式に比定した。30は3条の沈線をめぐらし、口縁部に無文帯を形成する。裏面の口唇直下に沈線を1条めぐらせている。31はLR縄文を地文にし、数条の平行沈線を施している。平行沈線間には縦位の刻みを斜位に配置させている。裏面にも4条の平行沈線が施文されている。32は口唇直



第130図 縄文土器実測図(3)



第131図 弥生土器実測図

下に刺突列を加え、横位沈線で画す。以下間隔を置いて刺突列と横位沈線が連続する。30～32の器面は丁寧に研磨され光沢を持つ。33・34は底部破片である。ともに底面に網代痕を残す。

35～46は後期末末期に併行する「高井東式」に比定されよう。35は波頂部に魚尾状の突起を配した大波状口縁部の破片である。波頂部下にボタン状突起を貼付し、その下に刻みを施した隆線を縦位に貼り付けている。口縁部は「く」字状に内折し、3条の沈線を口縁に沿って施文している。器面は丁寧に研磨されている。36は波頂部に隆線をめぐらせた突起を左右対称に2つ配する。波頂部下には2条の隆線をめぐらす。口縁は肥厚し、2条の沈線を施している。37は波頂部の魚尾状突起である。側縁を僅かに隆起させ、それに沿って沈線を施している。裏面にも沈線が施文される。36は橋状把手のつけられた口縁部破片である。両側面を強く隆起させ、眼鏡状の効果を見せる。胎土には砂粒を多く含み、ざらつく。39は体部の括れ部の破片である。括れ部の無文帯を挟んで上位に格子目文、下位に斜線文がそれぞれ沈線によって施されている。40～46は口縁部破片であり、いずれも口縁部が内折する。40～42は口縁に沿った隆線を貼り付けることによって口縁部の稜を作出している。40は波頂部の尖った波状口縁を呈し、波頂部下に横位隆線を貼り付けている。41・42は口唇直下に瘤状突起が付けられている。ともに波底部付近に貼付され、42は沈線も1条施文されている。43・44も波底部突起を付す口縁部破片である。43は「く」字状に内折する口縁部にLR縄文を施し、浅い幅広の横位沈線で中位を磨消している。瘤状突起を付す。44は瘤状突起のみ貼付されている。器面は入念に研磨されており、光沢をもつ。45・46は内折

する口縁部に3条の横位沈線を施文するものである。

47は安行式の粗製土器である。指頭圧痕の施された隆帯を口唇直下にめぐらせている。48は上げ底の深鉢底部破片である。49も粗製土器。薄手の無文土器で、器表面に粘土紐の輪積痕が部分的に認められる。胎土には砂粒を多く含み、ざらつく。

50・51は弥生式土器である。50は半截竹管による横位の沈線が施されている。51は木口状工具による刷毛目が縦位に施される。50は前期後半～中期前半、51は中期後半に位置付けられよう。

以上のように黒熊栗崎遺跡出土の縄文土器破片を概観したが、前期後半の諸磯式土器(4～16)は周辺遺跡でも比較的量をもって出土している。おそらく前期においては、中位段丘面から高位段丘面にかけての積極的な集落居住が果たされたのであろう。中期の出土量は少ない。18・19の初頭期とした資料は当地域では類例が見当たらず、ここでは東北地域の要素を考えたが、口縁部の意匠や体部のソーメン状隆線の貼付等問題も多く、確定的ではない。中期初頭の遺跡は、黒熊八幡遺跡や保美遺跡群平塚台遺跡(千田幸生1994)が挙げられるが、濃密な分布ではなく資料も整わない。

後期では称名寺式(24～28)、堀之内式(29)、加曾利B式(30～32)さらに「高井東式」(35～46)が出土している。特に加曾利B式や「高井東式」は当地域の中位段丘面や高位段丘面ではまとまった出土量を見ないことから、本遺跡の資料は丘陵地形における縄文時代後期後半～終末期の資料として、重要な位置を占めよう。群馬県内では該期土器研究は必ずしも充実しておらず、藤岡市谷地遺跡や前橋市横俵遺跡群等の数遺跡の資料で語られているにすぎない。今後研究の進展が望まれる時期である。黒熊栗崎遺跡では後期の遺構は検出されておらず、また完形土器の出土は見なかったが、今後の資料増加を鑑み、破片資料の掲載によって当地域の該期土器群の一端を提示した。ご活用戴きたい。

(橋本)

(石器)

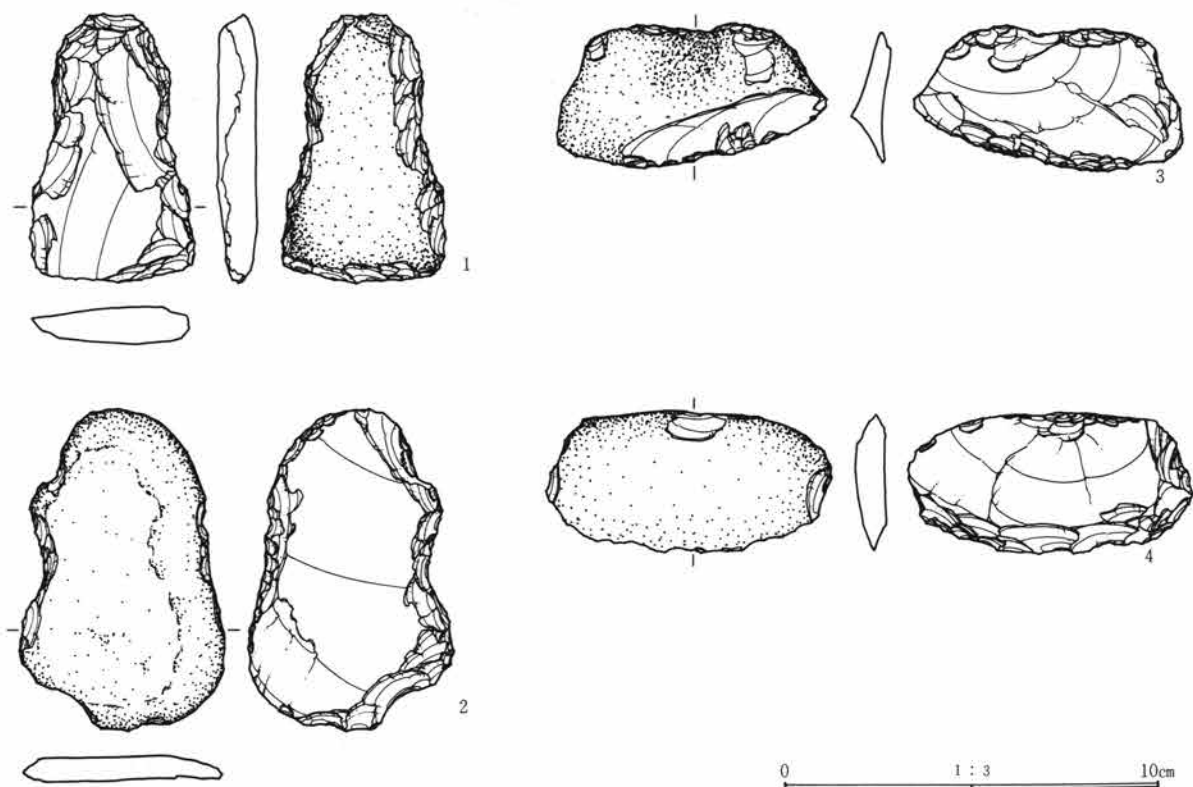
前項の縄文土器と同様に、本遺跡より出土した縄文時代の石器も遺構に帰属し得るものは無かった。古墳時代以降の遺構確認・検出時の出土が主体を占める。

また、本遺跡の発掘調査では遺構調査と平行して、調査区域内の数箇所に旧石器試掘坑を設け、旧石器時代の遺物の検出に努めたが、その結果軟質ローム層中より2点の石器の出土を見ている。しかし、その後の整理作業で、この2点の石器は縄文時代の所産と判断したが、本項で併せて掲載し資料化を果たしておきたい。縄文時代の石器は剥片類が多く、製品類は少なかった。剥片も加工痕等が明瞭に観察されるものは無く、いわゆる不定形石器は位置付けられなかった。製品類は石鏃や石匙・磨製石器等が見られず、打製石斧や石核が主体で、石器組成には偏りが見られた。

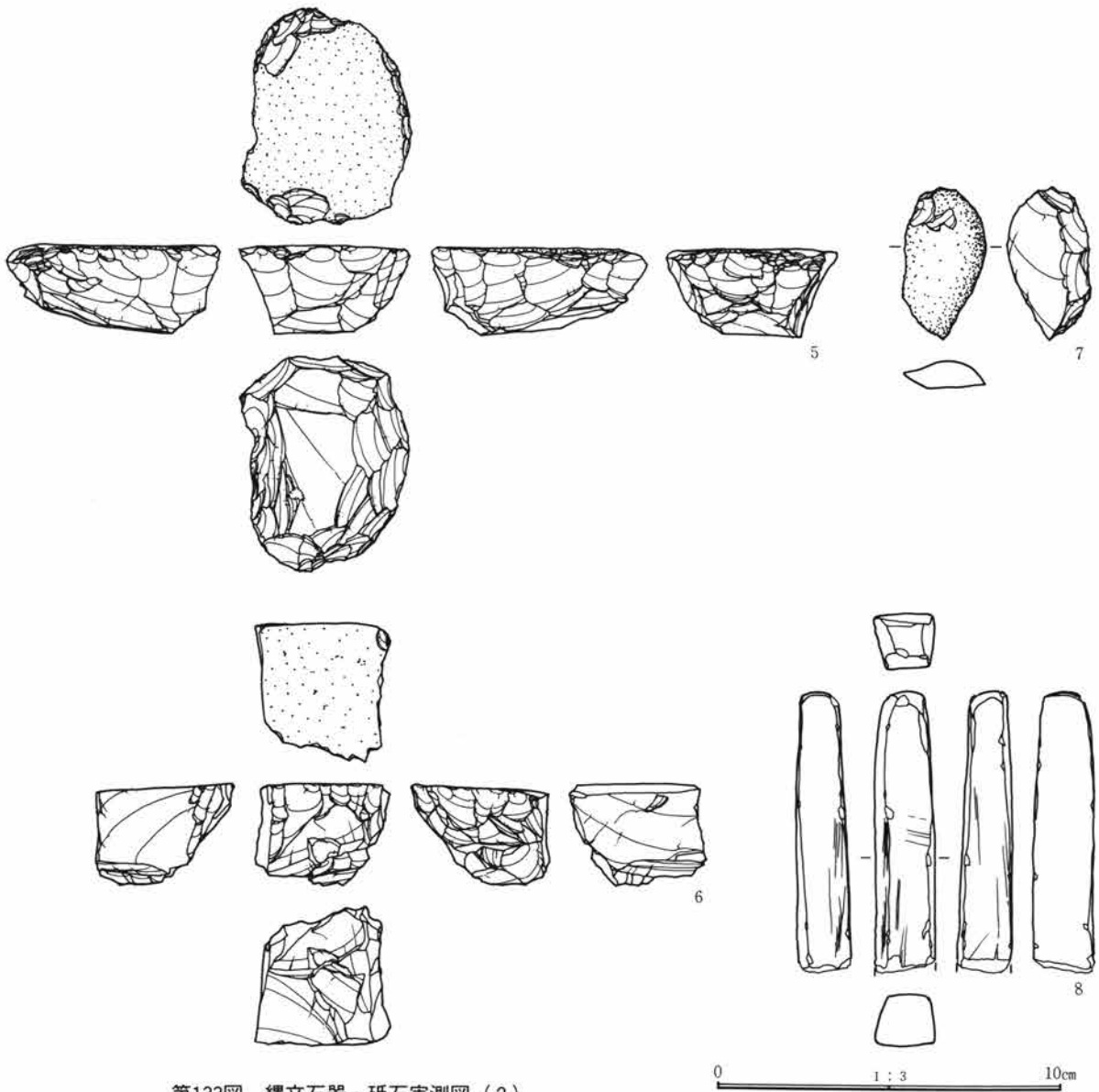
尚、縄文時代石器以外に遺構外よりおそらく奈良・平安時代に比定される砥石1点の出土を見ている。

133図1は11-25グリッド出土の打製石斧。硬質泥岩製で150.87gを測る。礫面を大きく残す横長剥片を素材とし、撥形を呈す。刃部は比較的直線状に作出されており、入念な調整が及ぶ。2も打製石斧。第I台地表土出土。黒色片岩製で173.98gを測る。礫面を大きく残した縦長剥片を素材としており、いびつな撥形を呈す。調整は側縁から刃部に及ぶが、左側縁中位に集中し抉状に凹む。

3はスクレイパー。27-76グリッド出土である。硬質泥岩製で89.32gを測る。礫面を大きく残した横長剥片を素材とし、剥片形状を踏襲した調整を施す。頭部や側縁の調整は雑で、主な調整は裏面の刃部に集中する。刃部はこの調整によって緩やかに彎曲し、凸刃状を呈す。4もスクレイパー。やや薄手の横長剥片を素材としており、礫面を大きく残す。やはり剥片形状を意識した調整が施され、側縁から刃部に集中する。刃部は緩やかな彎曲を呈し、規則性を持った調整により僅かに鋸歯状となる。石材は硬質泥岩で109.92gを測る。第I台地調査区表採品である。



第132図 縄文石器実測図(1)



第133図 縄文石器・砥石実測図(2)

134図5・6は石核を集めた。5は17-54グリッド出土で、320.50gを測る。硬質泥岩製で上面の礫面よりの削出がある程度の規則性を持って行われたようだ。6も硬質泥岩製で上面に礫面を残す。5に比して比較的多方向の削出が行われている。20-53グリッド出土で199.16gを測る。

7は剥片。20-53グリッド出土で30.38gを測る。石材は粗粒安山岩製で礫面を残した縦長剥片である。この6・7は前述の旧石器時代試掘によって得られた石器である。出土層位は軟質ロームで当地域においては類例の少ない資料として調査当時は位置

付けた。しかしながら、整理作業を経て出土層位の検証、硬質泥岩としての石材の傾向を把握した限りは、旧石器時代遺物としての積極性は持てず、縄文時代の所産としたい。ただし、7の剥片は作出技法等に旧石器時代石器としての可能性を持ち、検討を要するだろう。

8は砥石である。砥沢石を柱状に加工し、4面を使用している。特に図正面と反対面の使用が著しく滑沢面を持つ。使用痕跡は縦位方向に擦痕が見られる。下端部が欠損しており、先端部は摩滅する。20-64グリッド出土で118.49gを測る。

第三章 検出された遺構と遺物

第75表 縄文土器観察表

挿図番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②色調 ③焼成	出土位置
第131図 1 図版 72	深鉢 口縁部	①繊維・石英 ②橙色 ③良好	表土
第131図 2 図版 72	深鉢 胴部	①繊維・白色粒 ②褐色 ③やや軟	表土
第131図 3 図版 72	深鉢 胴部	①繊維・石英 ②橙色 ③良好	23-56グリッド
第131図 4 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英・片岩 ②明褐色 ③良好	20-54グリッド
第131図 5 図版 72	深鉢 口縁部	①細・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	表土
第131図 6 図版 72	深鉢 口縁部	①細・白色粒 ②暗褐色 ③良好	表土
第131図 7 図版 72	深鉢 胴部	①粗・片岩 ②明 赤褐色 ③良好	20-50グリッド
第131図 8 図版 72	深鉢 胴部	①細・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 9 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英 ②橙色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 10 図版 72	深鉢 底部	①粗・片岩 ②鈍 赤褐色 ③良好	表土
第131図 11 図版 72	深鉢 突起	①粗・石英・片岩 ②橙色 ③良好	20号住覆土
第131図 12 図版 72	深鉢 突起	①粗・石英・片岩 ②橙色 ③良好	20号住覆土
第131図 13 図版 72	深鉢 頸部か	①粗・石英 ②暗褐色 ③良好	23住覆土
第131図 14 図版 72	深鉢 頸部	①粗・石英 ②暗褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 15 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英 ②鈍褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 16 図版 72	深鉢 胴部	①粗・片岩・石英 ②暗褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 17 図版 72	深鉢 頸部	①粗・石英 ②鈍褐色 ③良好	29住覆土上層
第131図 18 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・大粒の石英 ②褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第131図 19 図版 72	深鉢 胴部	①粗・大粒の石英 ②褐色 ③良好	第I台地調査区 表土
第132図 20 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英・片岩 ②橙色 ③やや軟	第I台地調査区

挿図番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②色調 ③焼成	出土位置
第132図 21 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英・片岩 ②橙色 ③やや軟	第I台地調査区
第132図 22 図版 72	深鉢 口縁部	①細・黒色粒 ②鈍褐色 ③良好	1号溝覆土
第132図 23 図版 72	深鉢 胴部	①粗・石英 ②明褐色 ③良好	11-31グリッド
第132図 24 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・白色粒 ②鈍褐色 ③やや軟	
第132図 25 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	
第132図 26 図版 72	深鉢 胴部	①細・石英 ②鈍褐色 ③良好	14-25グリッド
第132図 27 図版 72	深鉢 胴部	①細・石英 ②鈍 赤褐色 ③やや軟	表土
第132図 28 図版 72	深鉢 胴部	①細・白色粒 ②褐色 ③やや軟	
第132図 29 図版 72	深鉢 胴部	①細・黒色粒 ②鈍褐色 ③良好	表土
第133図 30 図版 72	深鉢 口縁部	①緻密・白色粒 ②灰褐色 ③良好	表土
第133図 31 図版 72	深鉢 胴部	①緻密・白色粒 ②灰褐色 ③良好	表土
第133図 32 図版 72	深鉢 口縁部	①緻密・黒色粒 ②鈍褐色 ③堅緻	表土
第133図 33 図版 72	深鉢 底部	①緻密・黒色粒 ②鈍褐色 ③良好	表土
第133図 34 図版 72	深鉢 底部	①細・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 35 図版 72	深鉢 突起	①細・石英 ②褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 36 図版 72	深鉢 突起	①細・白色粒 ②明褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 37 図版 72	深鉢 突起	①細・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	表土
第133図 38 図版 72	深鉢 把手	①粗・石英 ②鈍褐色 ③やや軟	第I台地調査区
第133図 39 図版 72	深鉢 胴部	①粗・白色粒 ②褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 40 図版 72	深鉢 突起	①粗・白色粒 ②鈍褐色 ③良好	表土

第9節 出土古銭

黒熊栗崎遺跡では奈良・平安時代の住居跡の他に近世～近代に比定される墓壙・神社跡が検出されている。これらの遺構と出土遺物の主なものは、前に述べたとおりであるが、本節ではこれら近世～近代所産の遺構出土の古銭を集めて報告したい。併せて、この遺構とは別個に表面採集や遺構外出土遺物として扱った古銭も掲載した。尚、説明は遺構毎に行う。

1～6までは神社跡出土のものを集めた。「文久永寶」(1)と「寛永通寶」(2～5)からなる。このころから当神社跡は19世紀中頃以降の所産とも捉えられる。1の「文久永寶」背面には波形文が、3の「寛永通寶」背面には「文」がある。

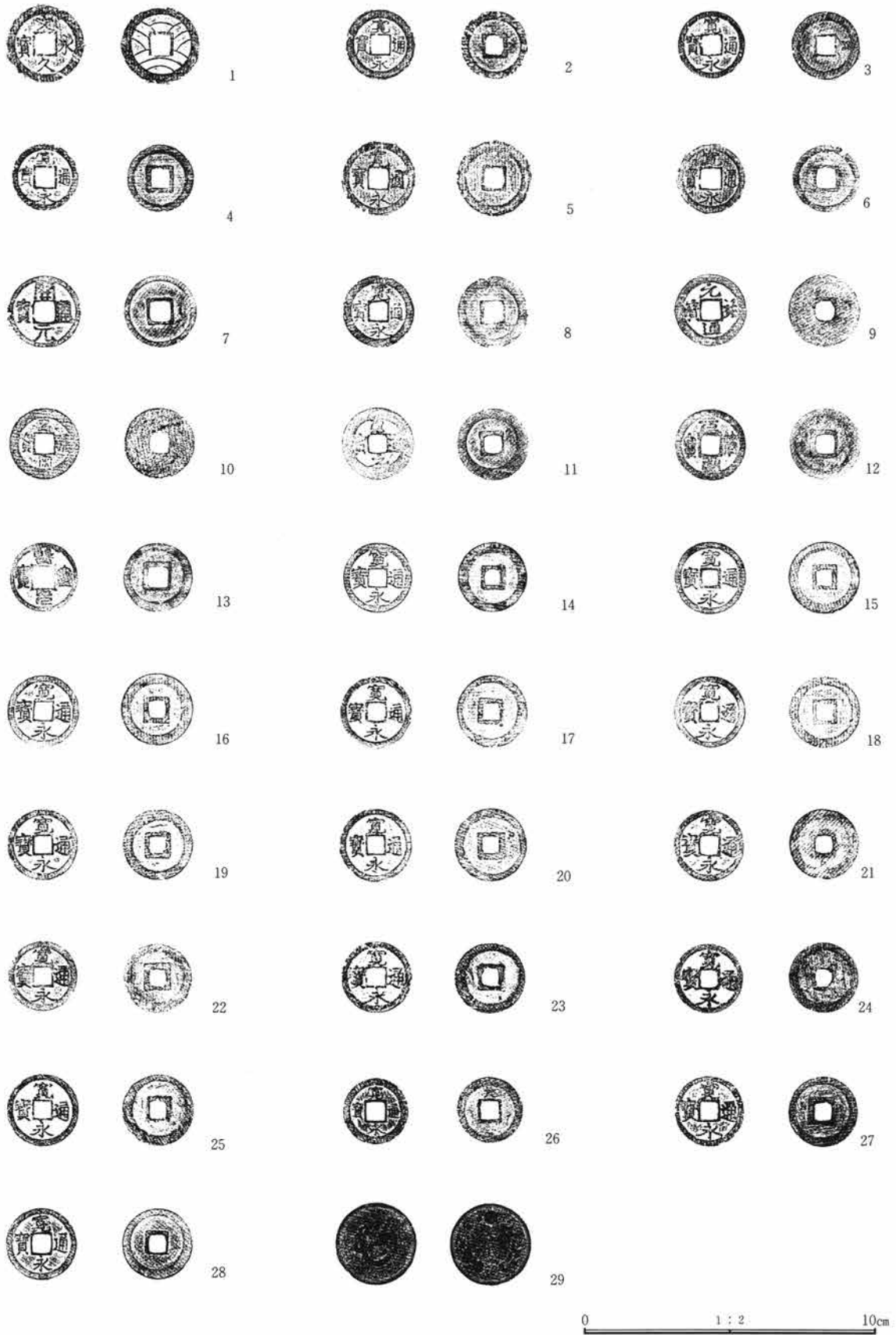
8～13は1号墓壙出土のもの。6枚の出土であり、墓壙としての性格を想起させよう。8の「寛永通寶」以外はすべて「北宋銭」である。「元佑通寶」(9)・「皇宋通寶」(10)・「至道元寶」(11)・「元符通寶」(12)・「熙寧元寶」(13)が見られ、概ね11世紀の所産である。しかしながら「寛永通寶」との共伴例から、墓壙そのものは18～19世紀以降の所産としたい。副葬された6枚の古銭が、このように別種のもので占められた様相は注意を要し、当時の一葬法として位置付けたい。

2号墓壙は11枚の「寛永通寶」で占められる(14～21・23～25)。1号墓壙と比して、同種の古銭で副葬する葬法であろうか。枚数も多く疑問が残る。

その他では、遺構外出土である「開元通寶」(7)は10世紀中頃の初鑄造とされている。26の「寛永通寶」は背に「文」がある。28の「寛永通寶」は第I台地調査区出土で、おそらく1～3号墓壙に関係するものと考えられる。29の「一銭」銅貨は明治14年の紀年銘がある。

挿図番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②色調 ③焼成	出土位置
第133図 41 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・石英 ②鈍褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 42 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・石英 ②鈍褐色 ③良好	表土
第133図 43 図版 72	深鉢 口縁部	①細・黒色粒 ②褐色 ③良好	第I台地調査区
第133図 44 図版 72	深鉢 口縁部	①細・石英 ②鈍褐色 ③堅緻	第I台地調査区
第133図 45 図版 72	深鉢 口縁部	①細・白色粒 ②褐色 ③良好	表土
第133図 46 図版 72	深鉢 口縁部	①細・白色粒 ②黒褐色 ③良好	表土
第133図 47 図版 72	深鉢 口縁部	①細・白色粒 ②褐色 ③やや軟	表土
第133図 48 図版 72	深鉢 底部	①細・黒色粒 ②橙色 ③良好	表土
第133図 49 図版 72	深鉢 口縁部	①粗・石英 ②橙色 ③不良	表土
第134図 50 図版 72	甕 胴部	①細・白色粒 ②鈍褐色 ③堅緻	試掘坑
第134図 51 図版 72	甕 胴部	①粗・石英 ②鈍褐色 ③堅緻	表土

第三章 検出された遺構と遺物



第134図 古銭

第9節 出土古銭

第76表 古銭計測表

挿図番号 器種	法量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第128図 1 銅 銭 図版 71	径 : 2.67 孔径 : 0.67 重 : 2.15	神社跡	「文久永寶」
第128図 2 銅 銭 図版 71	径 : 2.30 孔径 : 0.61 重 : 2.82	神社跡	「寛永通寶」
第128図 3 銅 銭 図版 71	径 : 2.30 孔径 : 0.62 重 : 1.86	神社跡	「寛永通寶」 背に「文」
第128図 4 銅 銭 図版 71	径 : 2.26 孔径 : 0.65 重 : 2.95	神社跡	「寛永通寶」
第128図 5 銅 銭 図版 71	径 : 2.45 孔径 : 0.66 重 : 2.73	神社跡	「寛永通寶」
第128図 6 銅 銭 図版 71	径 : 2.28 孔径 : 0.68 重 : 1.85	神社跡	「寛永通寶」
第128図 7 銅 銭 図版 71	径 : 2.45 孔径 : 0.69 重 : 2.51	遺構外	「開元通寶」
第128図 8 銅 銭 図版 71	径 : 2.41 孔径 : 0.62 重 : 2.36	1号墓壙	「寛永通寶」
第128図 9 銅 銭 図版 71	径 : 2.46 孔径 : 0.65 重 : 3.14	1号墓壙	「元祐通寶」
第128図10 銅 銭 図版 71	径 : 2.38 孔径 : 0.65 重 : 2.46	1号墓壙	「皇宋通寶」
第128図11 銅 銭 図版 71	径 : 2.43 孔径 : 0.60 重 : 3.20	1号墓壙	「至道元寶」
第128図12 銅 銭 図版 71	径 : 2.43 孔径 : 0.64 重 : 2.73	1号墓壙	「元符通寶」
第128図13 銅 銭 図版 71	径 : 2.33 孔径 : 0.70 重 : 3.02	1号墓壙	「熙寧元寶」
第128図14 銅 銭 図版 71	径 : 2.36 孔径 : 0.65 重 : 3.92	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図15 銅 銭 図版 71	径 : 2.45 孔径 : 0.53 重 : 3.53	2号墓壙	「寛永通寶」

挿図番号 器種	法量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第128図16 銅 銭 図版 71	径 : 2.45 孔径 : 0.58 重 : 3.22	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 17 銅 銭 図版 71	径 : 2.44 孔径 : 0.53 重 : 3.82	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 18 銅 銭 図版 71	径 : 2.44 孔径 : 0.54 重 : 3.23	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 19 銅 銭 図版 71	径 : 2.40 孔径 : 0.56 重 : 3.05	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 20 銅 銭 図版 71	径 : 2.43 孔径 : 0.66 重 : 3.63	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 21 銅 銭 図版 71	径 : 2.40 孔径 : 0.60 重 : 2.82	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 22 銅 銭 図版 71	径 : 2.34 孔径 : 0.58 重 : 2.74	遺構外 グリッド 表土	「寛永通寶」
第128図 23 銅 銭 図版 71	径 : 2.41 孔径 : 0.60 重 : 3.73	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 24 銅 銭 図版 71	径 : 2.36 孔径 : 0.66 重 : 2.44	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 25 銅 銭 図版 71	径 : 2.44 孔径 : 0.65 重 : 3.36	2号墓壙	「寛永通寶」
第128図 26 銅 銭 図版 71	径 : 2.22 孔径 : 0.64 重 : 1.81	遺構外	「寛永通寶」 背に「元」
第128図 27 銅 銭 図版 71	径 : 2.35 孔径 : 0.59 重 : 2.77	遺構外	「寛永通寶」
第128図 28 銅 銭 図版 71	径 : 2.40 孔径 : 0.60 重 : 3.15	第 I 台地	「寛永通寶」
第128図 29 銅 銭 図版 71	径 : 2.77 重 : 6.46	遺構外	「一銭」 明治14年

IV章 成果と問題点

平安時代のカマド構築材の選択について —— 4号住居跡のカマドから ——

外山 政子

はじめに

黒熊栗崎遺跡の第I台地調査区と名付けた東側台地には、平安時代の住居跡が散在していた。ほぼ同時期の9世紀後半から10世紀にかけてのもの15軒であるが、厳密に見れば同時存在していたのは多くても5軒程度ではなかったかと推定している。住居の規模も構造もよく似ており、規格性の高い、地域の中で通常の家づくりであったと思われる。ただ細かく対比して行くと、貯蔵穴の数や、カマドの構造に各戸の特色が見られるようである。

ここでは、石を使っていて比較的遺存状態の良好な4号住居跡のカマドからカマド構築材の選択について考えてみたい。

4号住居跡カマド構造

4号住居跡は第I台地調査区のほぼ中央に位置する。5.5×4.0m程の長方形の住居で、カマドを東辺やや南寄りに作り出している。カマドは焚口および燃焼室壁面に石を立て、煙道は、土師器カメ・羽釜・甑を重ね、煙道の入口は石を立ててカメの口を支えるつくりとなっている。焚口部はおよそ50cm・燃焼部幅40cm・奥行40cmでこの時期のカマドの規模としては平均的なものである。

焚口左右の石（袖石）の位置が住居東壁ラインと平行せず、右側が手前にある。これは5号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・29号住居跡にも認められている。カマドが住居東辺の右よりに設置されて、右側が狭い間取りでは炊事の作業効率を考えると左側に焚口を振っているのは実際的な配慮であろう。

使用痕跡から

カマド内からは、羽釜や甑破片、土師器カメ破片が多く出土している。住居内出土とカマド内出土の土器類を観察した結果、煮沸具とされているカメ・羽釜類は内外にススがこびりつき、また内面に粘土が付着していたり、破片の断面にもススが付着していた。これは本来の煮炊きによる使用痕跡ではなく、カマドの構築材・補強材としての転用によるものと考えられる。当遺跡の各住居出土の土器類の使用痕跡を検討すると、そのほとんどがカマド補強材として転用されたものであることが解る⁽¹⁾

転用材としての土器

土器片をカマドの補強材として使用する傾向は、平安時代、特に煮沸具として羽釜が採用されてから目立つように思われる。これは煮炊きのスタイルの変化、ナベ・カマをカマドに据える方式に変化があったためと考えている⁽²⁾。この時期のカマドのスタイルの好例として利根郡月夜野町村主遺跡3号住^{すくろ}⁽³⁾がある。土師器長カメを複数据えて粘土で固定する古墳時代以来のカマドのスタイルに対して、羽釜を1個据え、簡

(1) 本報告書の各住居跡挿図に示している。

(2) 外山政子 「矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具」『矢田遺跡(1)』1990 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

(3) 中沢 悟 「大原Ⅱ遺跡村主遺跡」1986 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

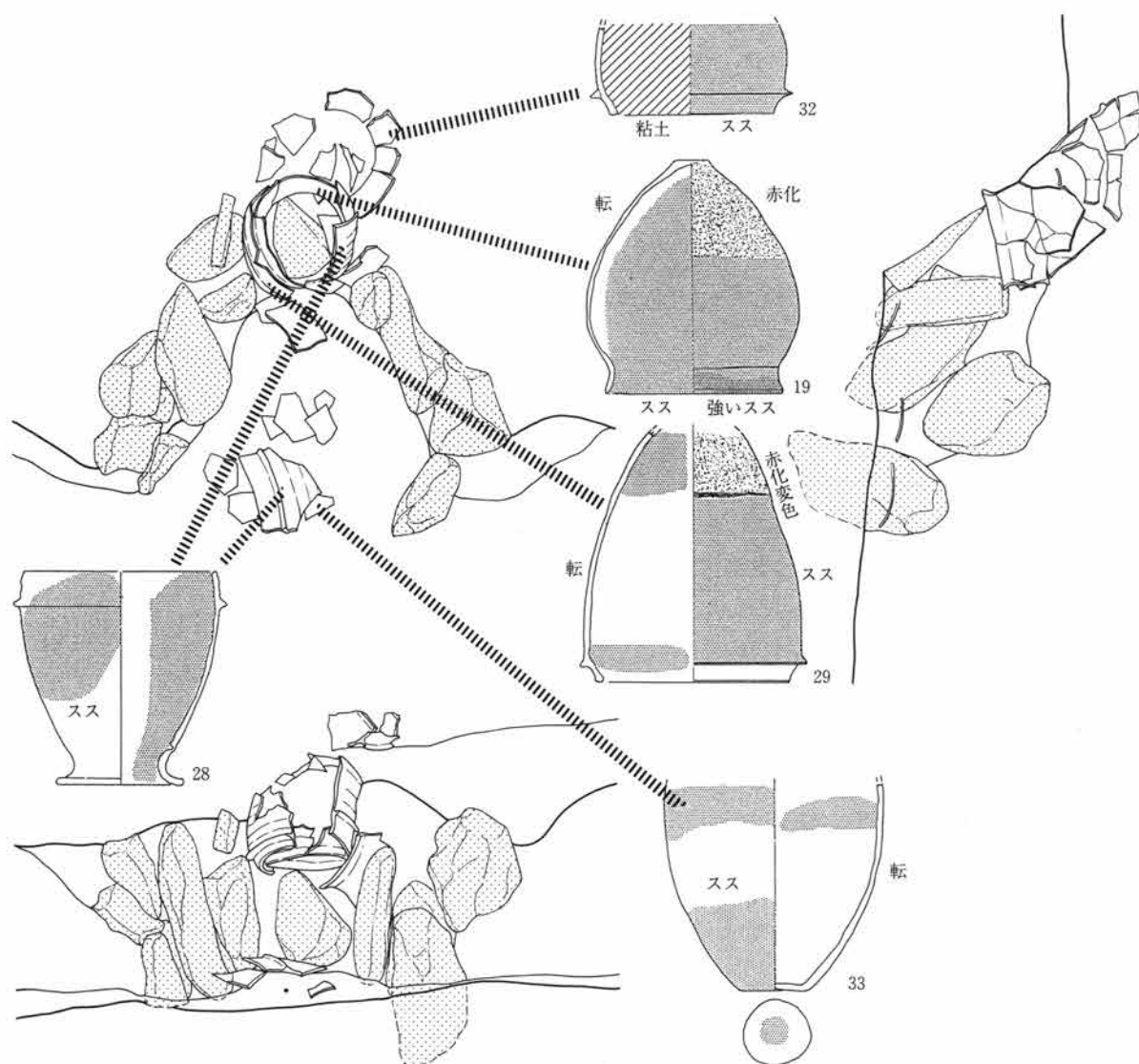


図1 黒熊栗崎遺跡4号住居跡カマド

便にかけはずしを可能にしたスタイルである。

この方式であると、かけ口とカマとの間に隙間があって、煙りが住居内に漏れる。加熱の効率からも火力を上へ逃がさない工夫をして隙間を埋める必要があるので、土器片や小石片を補助材として使用していたと思われる。

煙道部への転用

4号住居跡のカマドは石を使ってかなりしっかりした構造であることとともに煙道に土器類を重ねている点に特色が認められる。

煙道部はその性格からも遺存状態が悪く、全容の分かるものは少ない。古墳時代のもは、地山を掘り抜いたトンネル状のもの、粘土で立ちあげたものなどが主体である。比較的カマド奥壁と煙道出口との距離がある。再び、先の村主遺跡3号住のカマドをみると、住居の掘り込みから推定できる旧地表面の位置から考えて、煙道が一部を欠いているとはいえ、現状より長く高い位置まで延びる可能性は少ないだろう。とするとカマドの燃焼部と煙道の出口までの距離があまりないことになる。このこと

は、住居の壁や屋根構造の復元を考えるうえで充分考慮すべきことであろう。

平安時代の煙道は古墳時代の煙道に比べて、カマドの奥壁から角度をもって立ちあがるものが多い。これは煙道入口位置をカマド床面に対してより高い部分に設置し、空気の引きを良くして、火力の効率を上げるためだと考えられている。この傾向は当遺跡の住居にもあてはまるものが多い。比較的残りの良い5号住では、煙道をトンネル状に掘り込んでいるが、角度は急である。

土器類を重ねて煙道としている類例は少ない。時期的にも奈良時代以後で、しかも集落内で普遍的に存在するというものでもないようである。

今のところ、時期的に遡る例としては、富岡市下高瀬上之原遺跡13号住居跡⁽⁴⁾がある。8世紀中～後葉の住居である。この住居には新旧2つのカマドがあり、双方とも煙道はカメを数個重ね、新しいカマド（東カマド）の煙道入口は石を立ててカメがずれないように押さえる方法をとっており、黒熊栗崎4号住居跡と同じである。13号住居跡では、煙道はカマド床面に対して高い位置に設けられて、斜めに立ち上がっている。下高瀬上之原遺跡には同時期の住居が検出されているが、このような煙道をもっているものは13号住居跡のみである。

平安時代の9世紀前半代の例としては、多野郡吉井町矢田遺跡331号住居跡がある。矢田遺跡は古墳時代から平安時代にかけての大集落であるが、このスタイルの煙道をもつ住居は各期を通じて数例のみである。矢田遺跡331号住居跡⁽⁵⁾は、いわゆる土師器「コ」字カメの時期の住居で、カマド床面より高い位置から階段状に煙道をつくり出している。

羽釜が煮沸具として登場してからの時期のものとしては、矢田遺跡140号住居跡・216号住居跡・高崎市新保遺跡50号住居跡⁽⁶⁾が見られる。各カマド煙道とも高い位置から斜め上方に延ばすタイプである。

構築材の選択

狭い知見のみで類例を挙げてみたが、一集落の住居群の中でも、このスタイルを採用しているのはほんの数例しかないのは不思議である。通常カマド構築材の選択は、手近な資材を活用するということが第一であると思える。例えば石材を多用する集落、少ない集落とあり、河原石・砂岩やかたい地山を切り出してカマドとしている場合もあり、多くは粘土を積み上げ、あるいは稲わらのような植物繊維を混ぜてつくりあげている。各地の地理的条件によって違いがあるようで、すべての基本は身近に資材があるかどうかということである。この原則によれば、カマド補強材としての羽釜類は個々の家の中で、普遍的に破損し、転用できる状態にあったと言える。また一方、土器類を重ねた煙道は、その類例の少なさから、材料を入手し難かったと言えるのだろうか。破損の実験を試みなければならないが、筒状に破損するということが通常の使用状態では、おこり難いことなのかもしれない。

(4) 新井 仁 『下高瀬上之原遺跡』1994 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕

(5) 春山秀幸 『矢田遺跡－平安時代住居跡編（1）－』1990 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕

(6) 友廣哲也 『新保遺跡Ⅲ－奈良・平安時代編－蛭沢遺跡』1988 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕

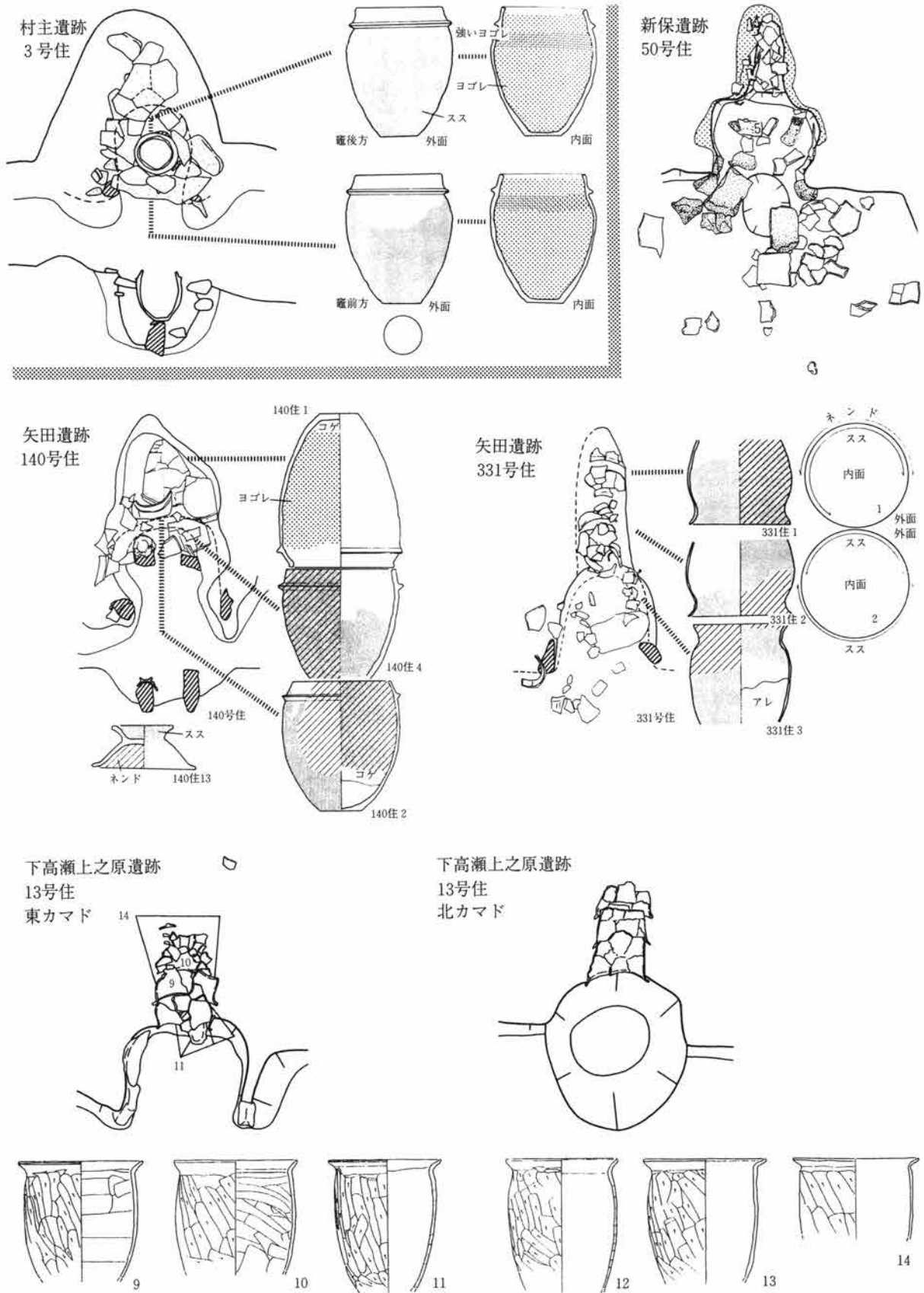


図2 平安時代のカマド煙道部土器転用例

しかも、住居内出土のカメ・羽釜類で底部のみ欠損して上部が筒状に遺存している例は希少である。煙道にするために、わざわざ上手に打ち欠いて筒状にしているという可能性もあるのではないだろうか。とすれば、集落内でこうした土器を使って煙道をつくる住居が少ないことは、当時の人々の「器」に対する価値観が反映されていると解釈できるだろう。類例として挙げ得た各住居とともに黒熊栗崎遺跡4号住居跡はそうした意味で注目される住居だと言える。

まとめと課題

カマドは日常生活に欠かすことのできない中心的な炊事施設であるため、日々の使い勝手で各住人がそれぞれに工夫をこらしていると考えられる。基本設計は住居を作る際に同時に行うものであろうから、設置の位置や構造、煙道の出し方等、所属集団の持つイメージに規制されているため、大きな規格性の中におさまって、後の時代の私達にその時代の特色として認識されている。また、大きさについても日常的に使用するナベ・カマの大きさー必要とされる食事の分量ー平均的な家族人数によっておのずから一定の規格性をもっている。こうしたカマドの性格と構築材の選択の基準とを併せて考えた時、土器類を重ねるスタイルを採用することが各戸住人の「工夫」と言えるのか、もう少し別の意味を考えるべきか、充分検討する価値があるだろう。

さらに、村の生活空間の中で、破損したものをどのように処理していたのか、例えば羽釜のように必ず各住居で使われていて、各個人(?)・各住居所有と思われる「器」については、それぞれの住居の住人の裁量によってカマドなどに転用されているが、一方、大型の須恵器カメの破片のように複数の住居で分有(?)して転用している場合もある⁽⁷⁾。こういう土器は、本来の使用時点ではどこに所属していたのか、例えば複数の住居間で共有していたと考えられるのだろうか。破損した後のあり方の検討からも、同一生活空間での構成員の行動を考えることができよう。見過ごされがちな作業ではあるが使用痕跡の検討とともに、住居間の土器接合関係を詳細に検討する必要があるだろう。

(7) 多野郡甘楽町白倉下原遺跡に良好な例が確認されている。整理担当者の木村收氏のご教示による。

補遺

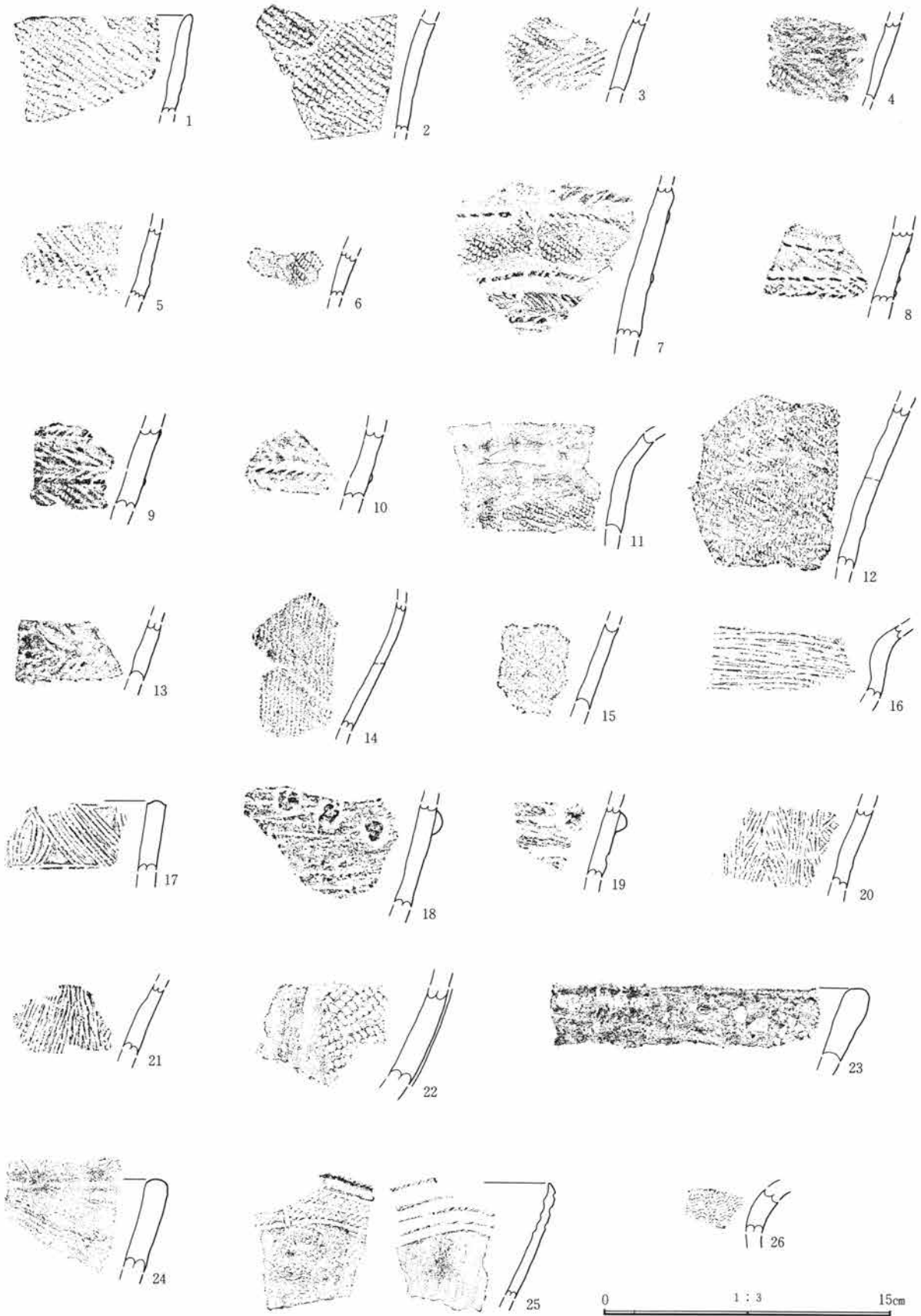
黒熊中西遺跡出土旧石器・縄文・弥生遺物

黒熊中西遺跡は、既に報告書が刊行されているが（『黒熊中西遺跡（1）』（須田1992）・『黒熊中西遺跡（2）』（山口1994））、平安時代の寺院跡と集落跡とその出土遺物が中心に掲載されている。しかしながら、上記報告書刊行後、僅かながら黒熊中西遺跡より出土した縄文土器及び石器等、さらに旧石器時代に比定される槍先形尖頭器1点が記載漏れであることが判明した。重要な資料も含み、遺跡は違うが本書に図と観察表を補遺として掲載し、資料の充実を図りたい。

遺1表 黒熊中西遺跡出土縄文・弥生式土器観察表

挿図番号	器種部	①胎土・②色調 ③焼成	出土位置	器形・文様の特徴	備考
補遺1図1	深鉢 口縁部	①繊維 ②鈍橙色 ③良好	8号土坑（平安）埋 土	尖り気味の口唇部。口唇部直下より0段多条RL縄文を 横位に施す。内面は研磨され滑沢。外面微量煤附着	黒浜式
補遺1図2	深鉢 体部	①繊維 ②鈍橙色 ③良好	8号土坑（平安）埋 土	1と同一個体か。やや反り気味の体部上半の破片。0段 多条RL縄文の横位施文。内面滑沢。	黒浜式
補遺1図3	深鉢 体部	①繊維 ②暗褐色 ③やや軟質	G区g-7グリッド	歪みあり。単節RLとLR縄文による横位羽状構成。	黒浜式
補遺1図4	深鉢 体部	①繊維 ②橙色 ③軟質	G区e-6グリッド	器面摩滅。単節RL横位施文。	黒浜式
補遺1図5	深鉢 体部	①繊維 ②鈍橙色 ③良好	8号土坑（平安）埋 土	1・2と同一個体か。内彎気味の体部下半の破片か。0 段多条RL縄文の横位施文	黒浜式
補遺1図6	深鉢 体部	①細砂粒 ②鈍褐 色 ③良好	71号住（平安）埋土	RL縄文を地文とし、円形竹管文が施される。	諸磯a式
補遺1図7	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②鈍褐色 ③軟質	12号土坑（近世） 埋土	RL縄文を地文とし、横位浮線文を多段に重ねる。浮線 文には幅広の爪形状の刻みが連続する。	諸磯b式
補遺1図8	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②鈍橙色 ③軟質	12号土坑（近世） 埋土	7と同一個体か。RL縄文を地文とし、浮線文を貼付す る。浮線文には幅広の爪形状刻みが施される。	諸磯b式
補遺1図9	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②鈍橙色 ③軟質	12号土坑（近世） 埋土	7・8と同一個体か。幅広の爪形状刻みを施す浮線文が 横位に付され以下RL縄文が施される。内面剥落著しい	諸磯b式
補遺1図10	深鉢 体部	①粗砂粒 ②鈍黄 橙色 ③軟質	G区e-13グリッド	横位浮線文が貼付され、小型の刻みが沿う。地文はRL 縄文。	諸磯b式
補遺1図11	深鉢 頸部	①石英 砂粒 ②黒褐色 ③良好	9号土坑（近世） 埋土	外反する頸部破片。頸部は撫でによる無文で、体部上半 に横位RL縄文が施される。	諸磯b式
補遺1図12	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②明褐色 ③良好	9号土坑埋土 G区c-18グリッド	11と同一個体か。おそらく体部中位～下半の破片。横位 RL縄文が施される。	諸磯b式
補遺1図13	深鉢 体部	①白色粒粗 砂粒 ②鈍橙色 ③良好	G区i-7グリッド	器面摩滅する。LR縄文横位施文。	諸磯b式
補遺1図14	深鉢 体部	①細砂粒 ②褐色 ③やや軟質	71号住（平安）埋土	緩やかな彎曲を呈す。RL細縄文の横位施文。器厚薄手	諸磯b式
補遺1図15	深鉢 体部	①粗砂粒 ②鈍褐 色 ③良好	49号住（平安）埋土	RL縄文の横位施文	諸磯b式
補遺1図16	深鉢 頸部	①石英 粗砂粒 ②鈍橙色 ③良好	H区a-25グリッド	頸部屈曲部。体部上半は緩やかに影らむ。横位平行沈線 の充填施文。	諸磯b式後半
補遺1図17	深鉢 体部	①石英・粗砂粒 ②鈍褐色 ③良好	G区r-24グリッド	横位平行沈線に画された間を斜位沈線群と対弧状モチ ーフが充てられる	諸磯c式

補遺



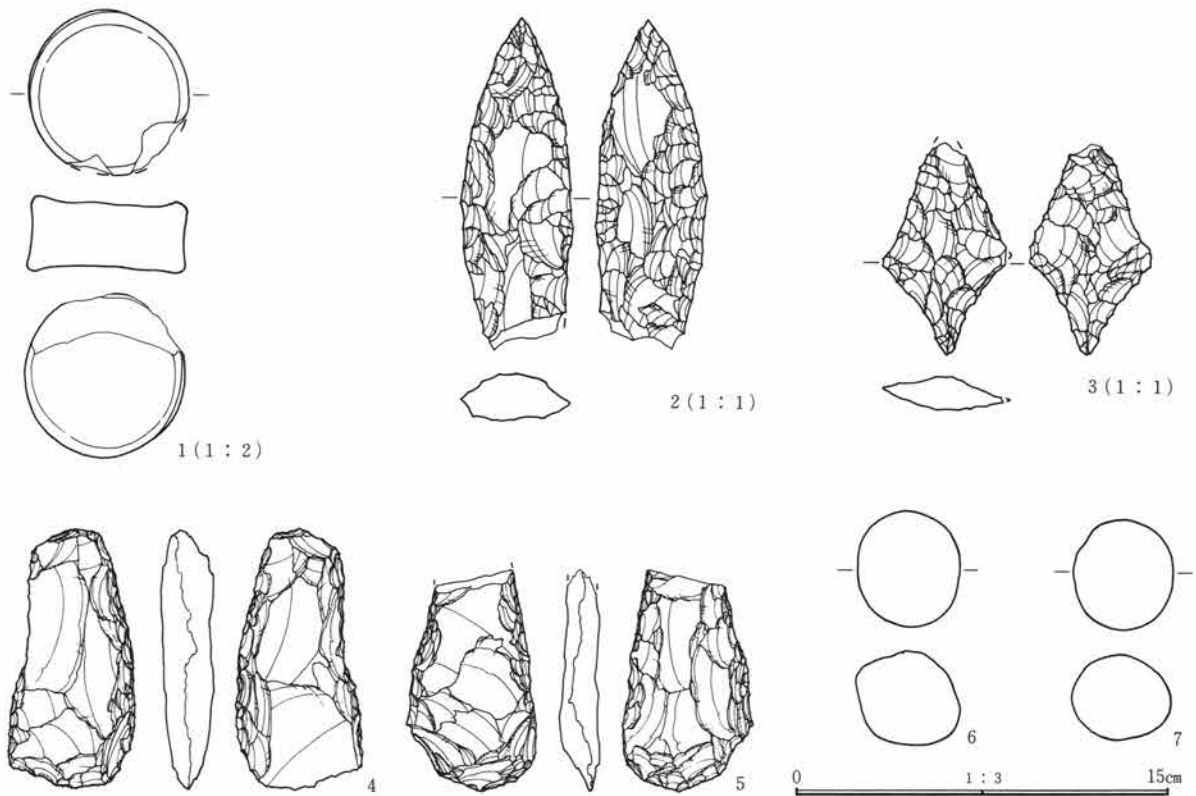
補遺 1 図 黒熊中西遺跡出土縄文・弥生式土器

挿図番号	器種部	①胎土・②色調 ③焼成	出土位置	器形・文様の特徴	備考
補遺1図18	深鉢 体部	①粗砂粒 ②鈍橙 色 ③やや軟質	G区r-25グリッド	地に疎らな横位平行沈線が施され、小瘤状貼付文を付す。全体に雑な施文。	諸磯c式
補遺1図19	深鉢 体部	①粗砂粒 ②鈍橙 色 ③良好	G区y-25グリッド	地に横位沈線と斜位細沈線が施され、小瘤状貼付文が付される。全体に雑な施文	諸磯c式
補遺1図20	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②橙色 ③堅緻	2号建物(平安)埋 土	集合沈線による施文。垂下沈線文と縦位矢羽状沈線文の交互配列。	諸磯c式
補遺1図21	深鉢 体部	①石英 粗砂粒 ②橙色 ③堅緻	2号建物(平安)埋 土	20と同一個体か。集合沈線による施文。斜位沈線と垂下沈線による構成。	諸磯c式
補遺1図22	深鉢 体部	①白色粒 細砂粒 ②鈍橙色 ③堅緻	5号建物(平安)埋 土	隆帯に凹線が沿い、RL縄文が縦位に充填施文される。	加曾利EⅢ式
補遺1図23	深鉢 口縁部	①片岩 粗砂粒 ②明褐色 ③良好	試掘(29トレンチ) 坑	口径約36cmの大型の深鉢口縁部破片。無文	中期後半
補遺1図24	深鉢 口縁部	①白色粒 粗砂粒 ②暗褐色 ③良好	G区t-17グリッド	無文。横位・斜位の条痕状の調整痕。	中期後半
補遺1図25	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②暗褐 色 ③堅緻	28号住(平安)埋土	口唇部内屈。横位平行沈線が3条巡り、沈線間はLR細縄文が充填され、刺突文で連繫される。内面も沈線施文	加曾利B1式
補遺1図26	甕 頸部	①細砂粒 ②鈍橙 色 ③良好	21号土坑(平安)埋 土	外反する頸部。横位櫛描き波状文。7~8本単位か。	弥生後期櫛式

補遺第2表 黒熊中西遺跡出土旧石器・縄文時代石器・土製品観察表

挿図番号	器種部	①胎土・②色調 ③焼成	出土位置	特 徴	備考
補遺2図1	耳栓	①片岩・石英 ②鈍褐色 ③良好	5号建物	表表面とも無文。側面は緩やかに彎曲し、表表面外縁端部とも僅かに突出する。側面の一部が欠損。 43.3g	中期後半か
挿図番号	器 種	石 材	出土位置	特 徴	備考
補遺2図2	槍先形尖頭器	黒曜石	3号建物基壇下	細身で断面「D」字状の尖頭器。基部を欠損。小型種に比して、背面側はやや急角度の調整が及ぶ。 4.0g	層位検証に乏しいが旧石器であろう
補遺2図3	有茎石鏃	黒曜石	3号住(平安)埋土	やや薄手の凸レンズ状の断面形を呈す。先端部欠損。側縁の調整は丁寧で、基部は入念に作出される。 1.5g	縄文早・前期?
補遺2図4	打製石斧	硬質泥岩	7号住(平安)埋土	横長剥片を素材とし、右側縁及び刃部に丁寧な調整が施こされる。使用痕は顕著ではない。 115.6g	縄文前期?
補遺2図5	打製石斧	硬質泥岩	F区v-20グリッド	頭部欠損。横長剥片を素材とし、周縁を丁寧に調整する使用痕は刃部両面に僅かに摩滅痕が見られる。 76.1g	縄文前期?
補遺2図6	小型磨石	粗粒安山岩	2号建物埋土	小型の円礫を素材とする。全面が磨られるが、顕著な敲打痕は認められない。 71.5g	時期不祥
補遺2図7	小型磨石	粗粒安山岩	2号建物埋土	小型の円礫を素材とする。全面が磨られ面をなす箇所もある。敲打痕は認められない。 101.8g	時期不祥

補遺



補遺 2 図 黒熊中西遺跡出土旧石器・縄文時代石器・土製品

【謝 辞】

黒熊栗崎遺跡の発掘調査・整理調査に関わった、すべてのの方々にお礼を申し上げます。

私達は、遺跡を通して多くの事柄を学びました。結果、私達が目指すべきものは、生活を基盤とした日常の歴史学として位置付けました。

時の権力者による栄華を誇る様々な文化遺産も、立ち戻れば、当時の生活が凝縮した結果なのではないでしょうか。私達が手にして美しいと思う考古遺物の多くが日常の生活品であるように、生活に根ざした遺物の美しさには、強い説得力があります。

無論、非日常の例えば古墳や寺院跡およびその出土遺物等も考古学的に重要な資料であり、その時代を代表する美術品としても高く評価されています。けれども、古墳築造にしても、仏教遺物製作にしても一握の選ばれた者ではなく、日常生活に根本を置いた者の作品なのです。

否、作品といった構えたものではなく、製作者に

とって、変哲もない日常に過ぎなかったのではないのでしょうか。私達が驚きに似た印象で彼らの作品を眺めても、私達の驚きは彼らの日常を知らない限り、本物の驚きにはならないでしょう。

私達は当時の日常を知らなければなりません。そして、当時からの日常が断続することなく、継続して今日に至った事実も知らなければなりません。

日常が継続してきた今、この継続の背景を明らかにする作業も私達に課せられた課題として、考古学の新たな道として、私達の日常の意識下に置きたいものです。

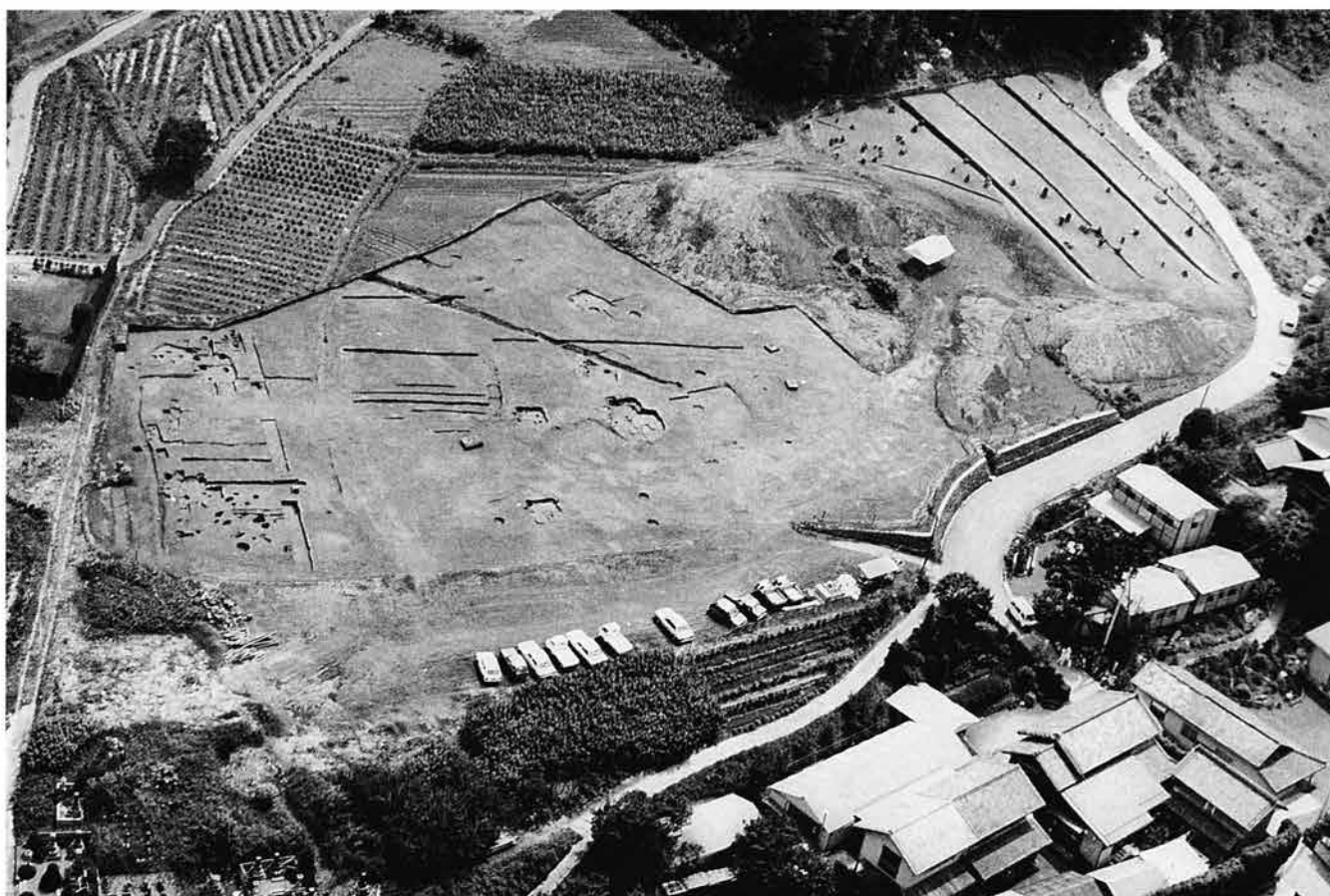
そのためには、私達は私達の日常を大事にして、公平な分析の視点を広げていくべきでしょう。

考古学は、全ての遺構・遺物がそして人間が、均等に扱われる最も歴史学たる分野として信じて、あらためて、私達に日常生活の重要性を示唆していただいた、本遺跡関係者の方々への感謝の意を深めて、謝辞といたします。

写 真 图 版

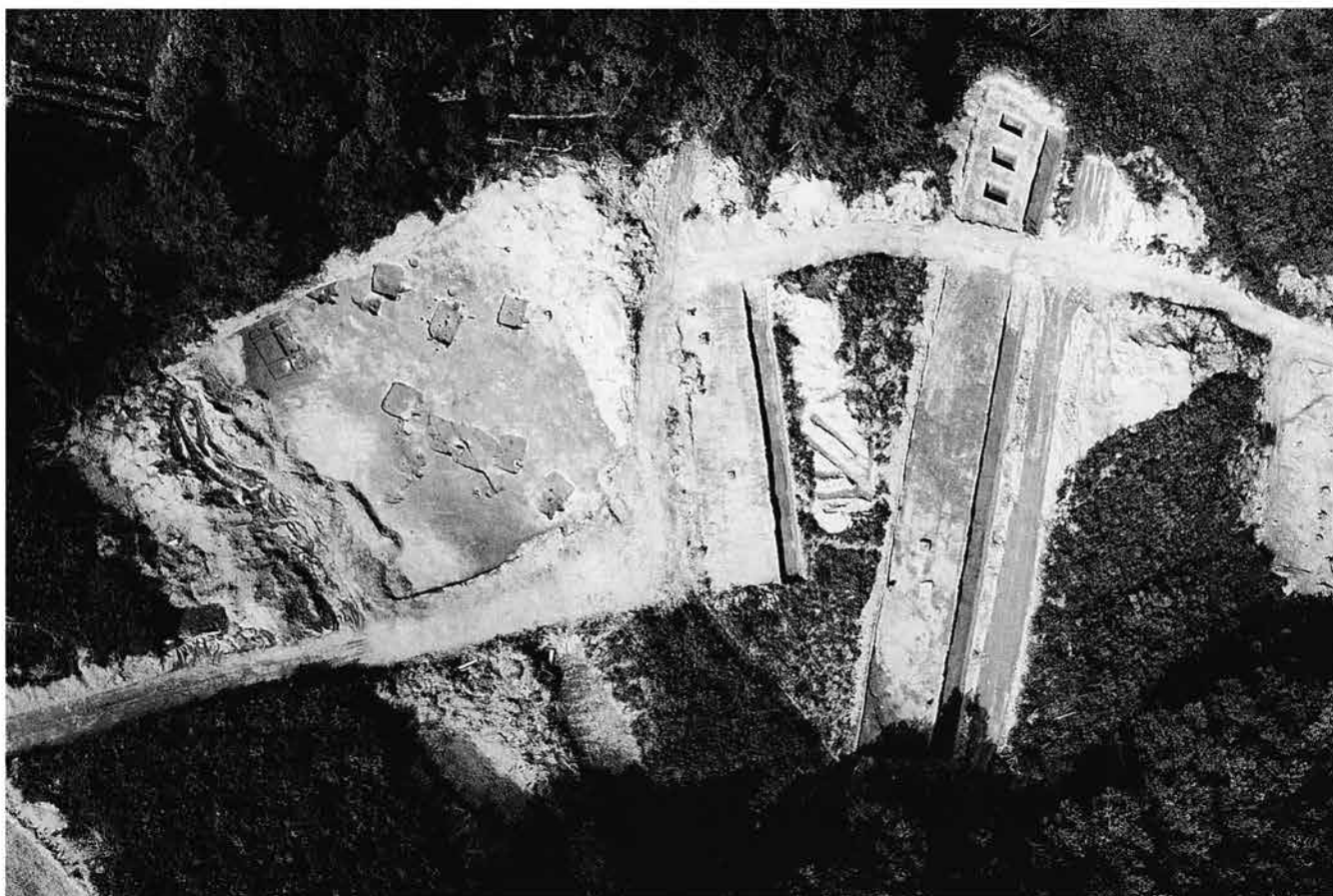


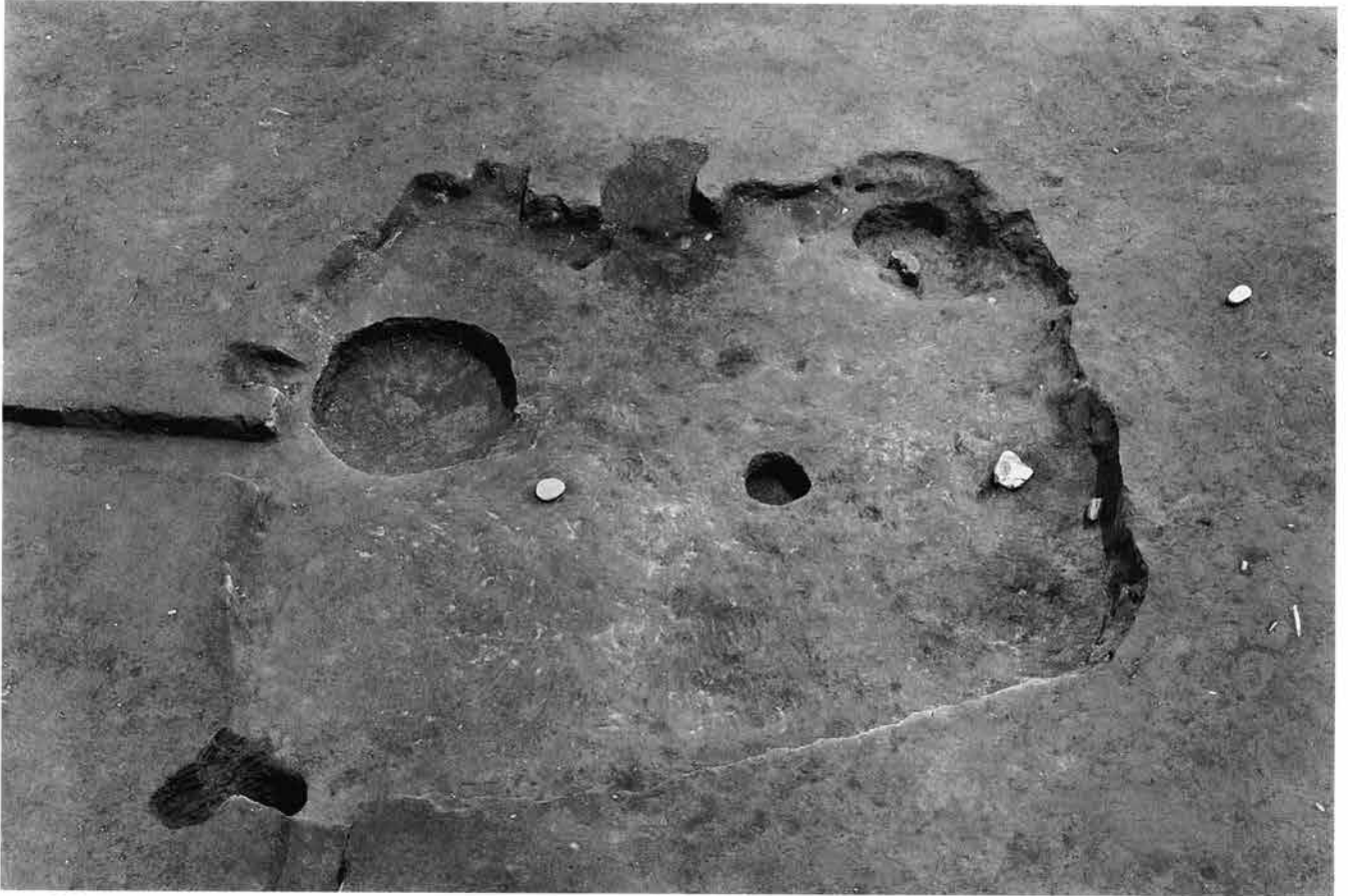
▲遺跡全景



▲第 I 台地全景

第 II 台地全景▼





▲ 1号住居跡



▲ 1号住居跡掘り方



▲ 1号住居跡カマド

1号住居跡遺物出土状態▼

1号住居跡遺物出土状態▼



図版 4



▲ 2号住居跡



▲ 2号住居跡掘り方

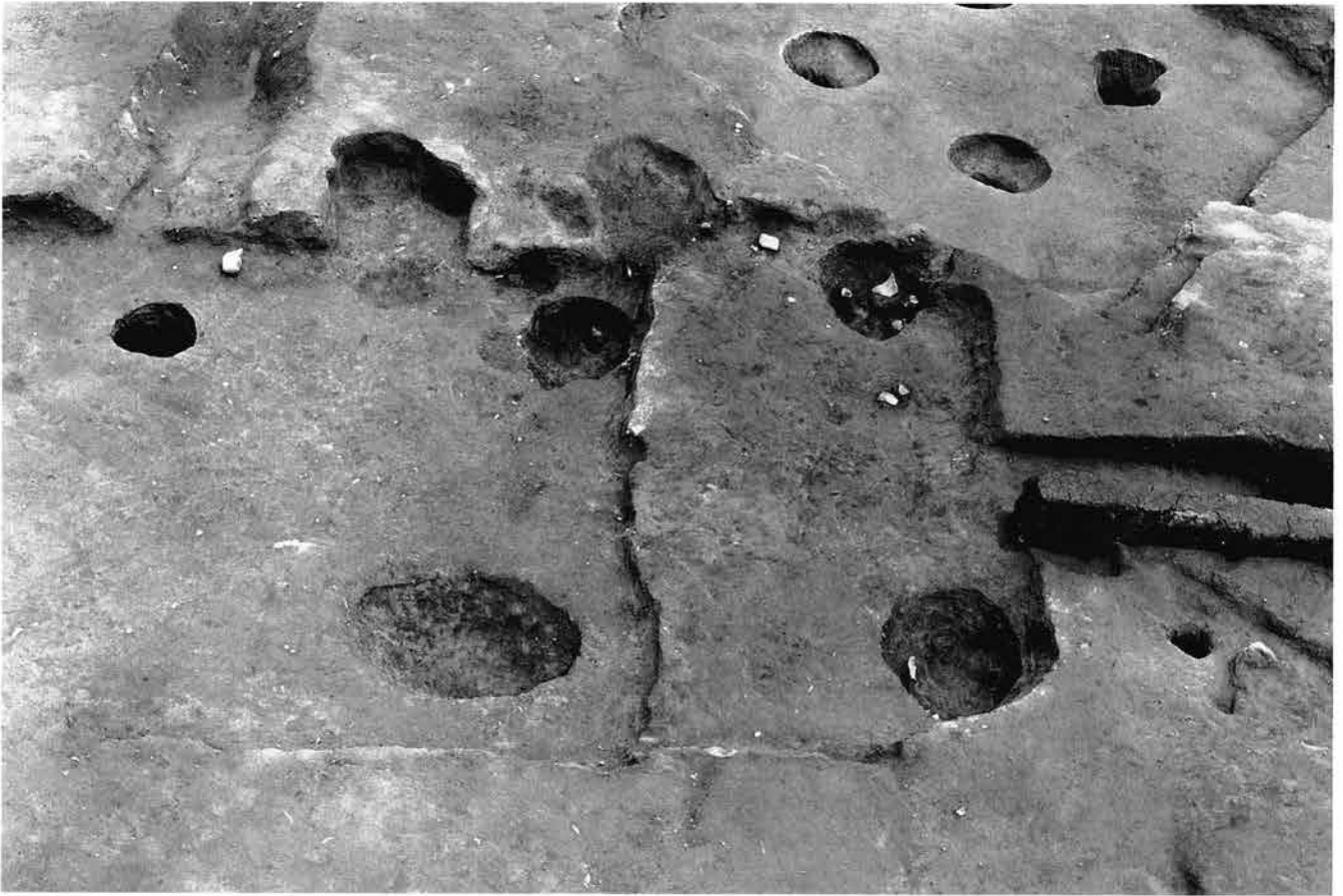
2号住居跡遺物出土状態▼



▲ 2号住居跡カマド

2号住居跡遺物出土状態▼





▲ 3号住居跡



▲ 3号住居跡掘り方

3号住居跡カマド▼



▲ 3号住居跡遺物出土状態

3号住居跡貯蔵穴▼

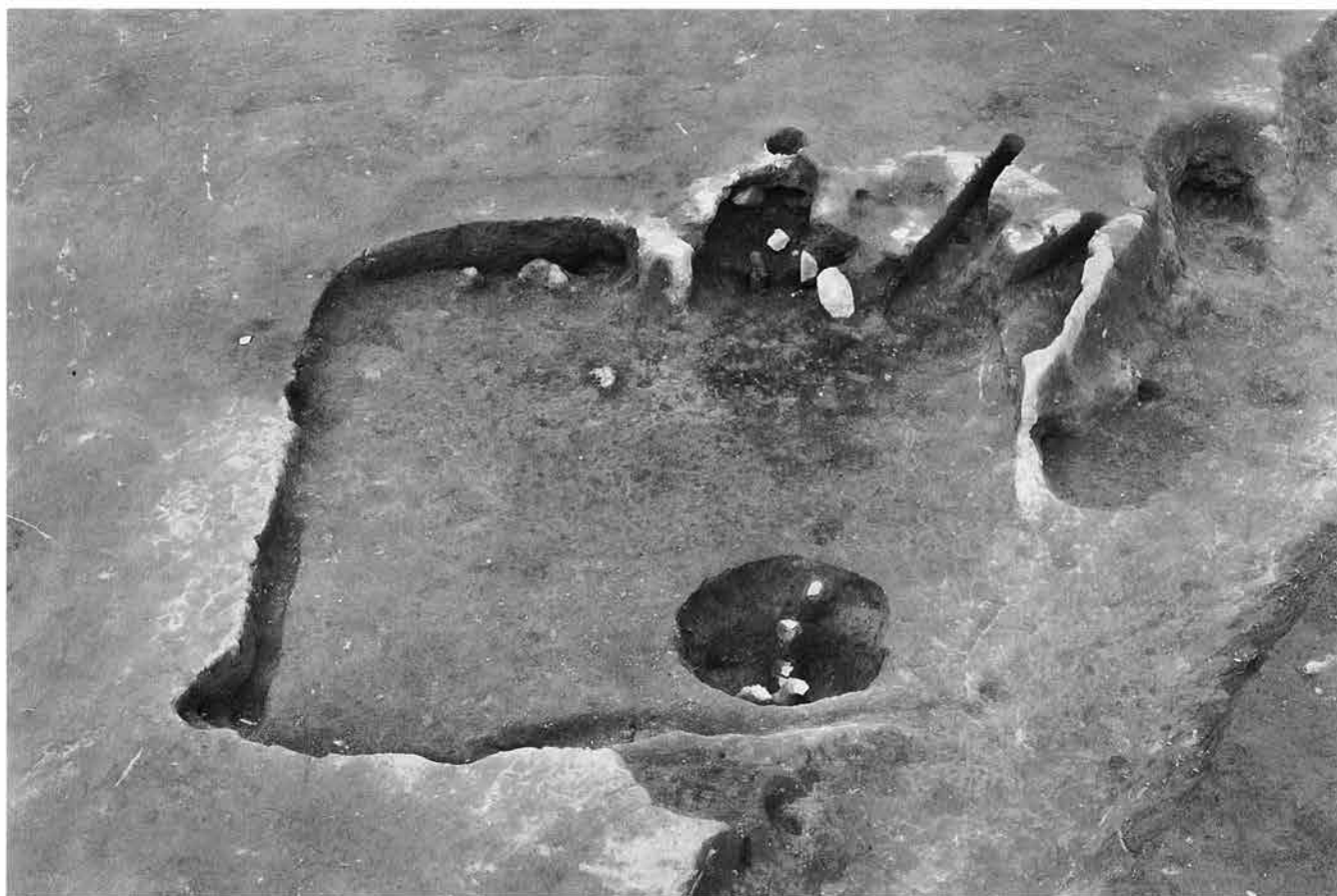




▲ 4号住居跡

4号住居跡カマド ▼



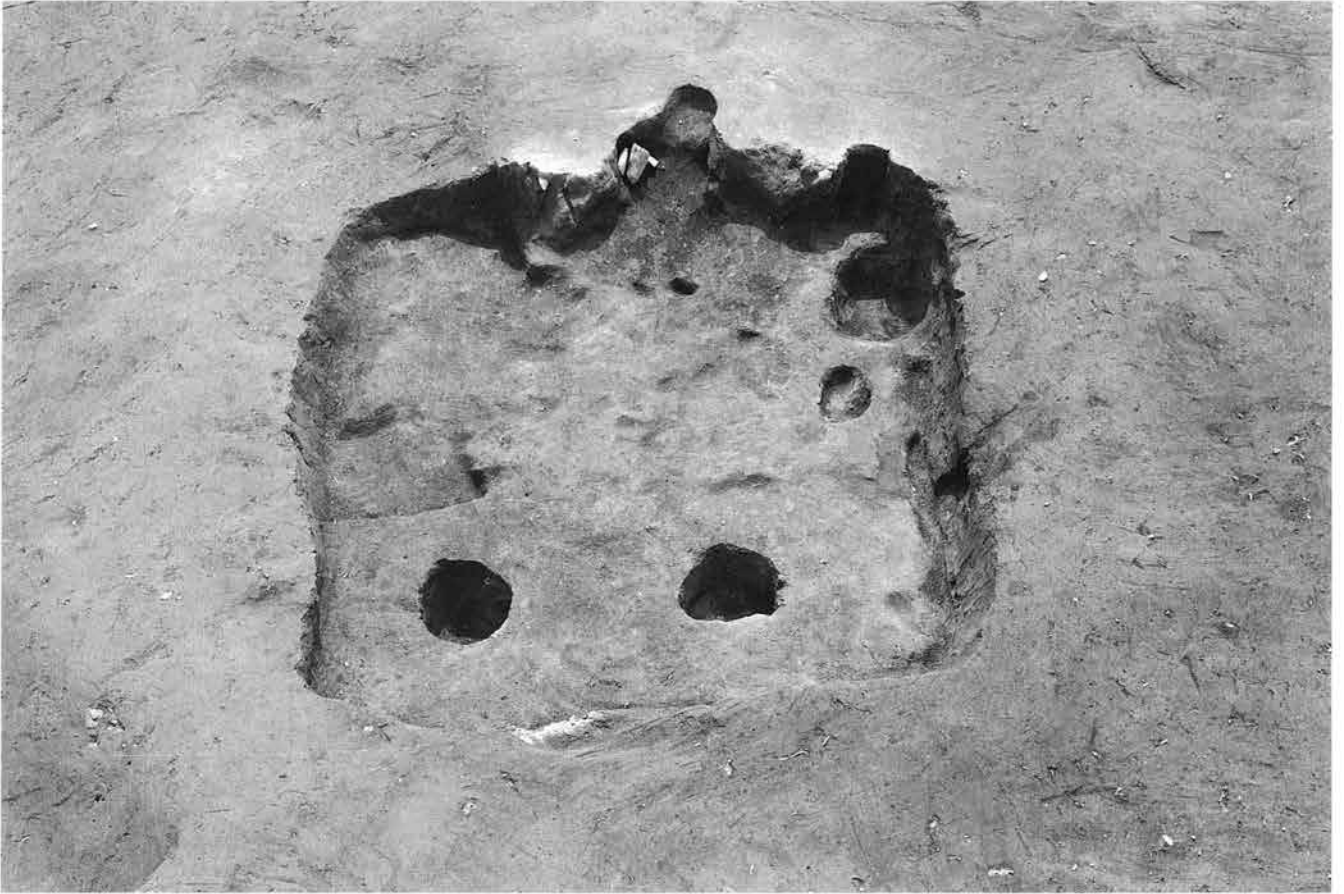


▲ 5号住居跡

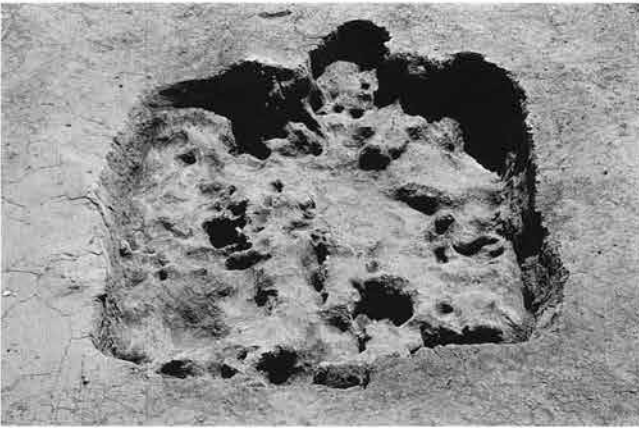
5号住居跡カマド▼



図版 8



▲ 6号住居跡



▲ 6号住居跡掘り方



▲ 6号住居跡遺物出土状態

6号住居跡遺物出土状態▼

6号住居跡カマド▼





▲ 7号住居跡



▲ 7号住居跡掘り方

7号住居跡遺物出土状態▼



▲ 7号住居跡カマド

7号住居跡遺物出土状態▼





▲ 8号住居跡



▲ 8号住居跡掘り方

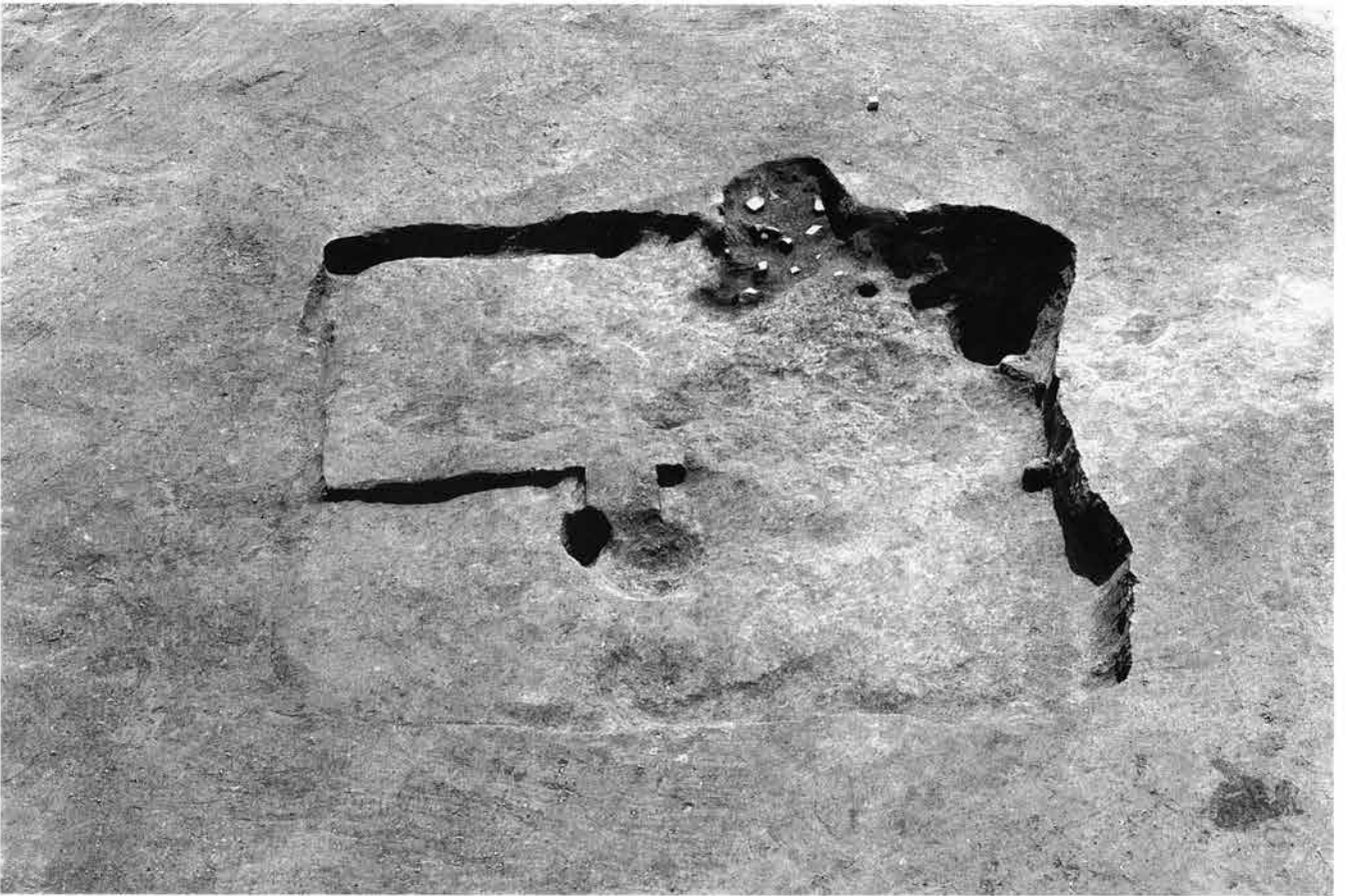


▲ 8号住居跡遺物出土状態

8号住居跡遺物出土状態▼

8号住居跡カマド▼



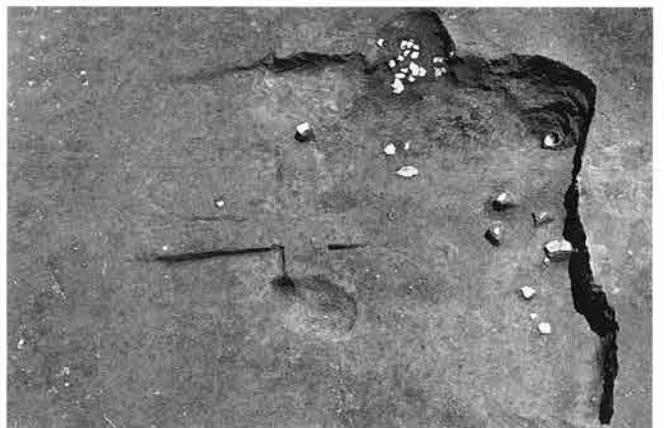


▲ 9号住居跡



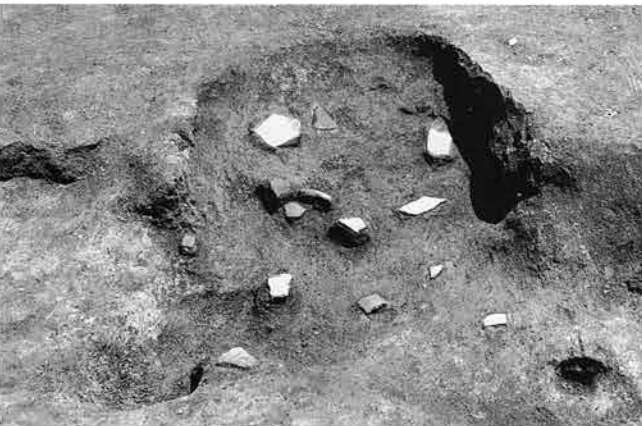
▲ 9号住居跡掘り方

9号住居跡カマド▼



▲ 9号住居跡遺物出土状態

9号住居跡貯蔵穴▼





▲ 4・10・11号住居跡



▲10号住居跡カマド

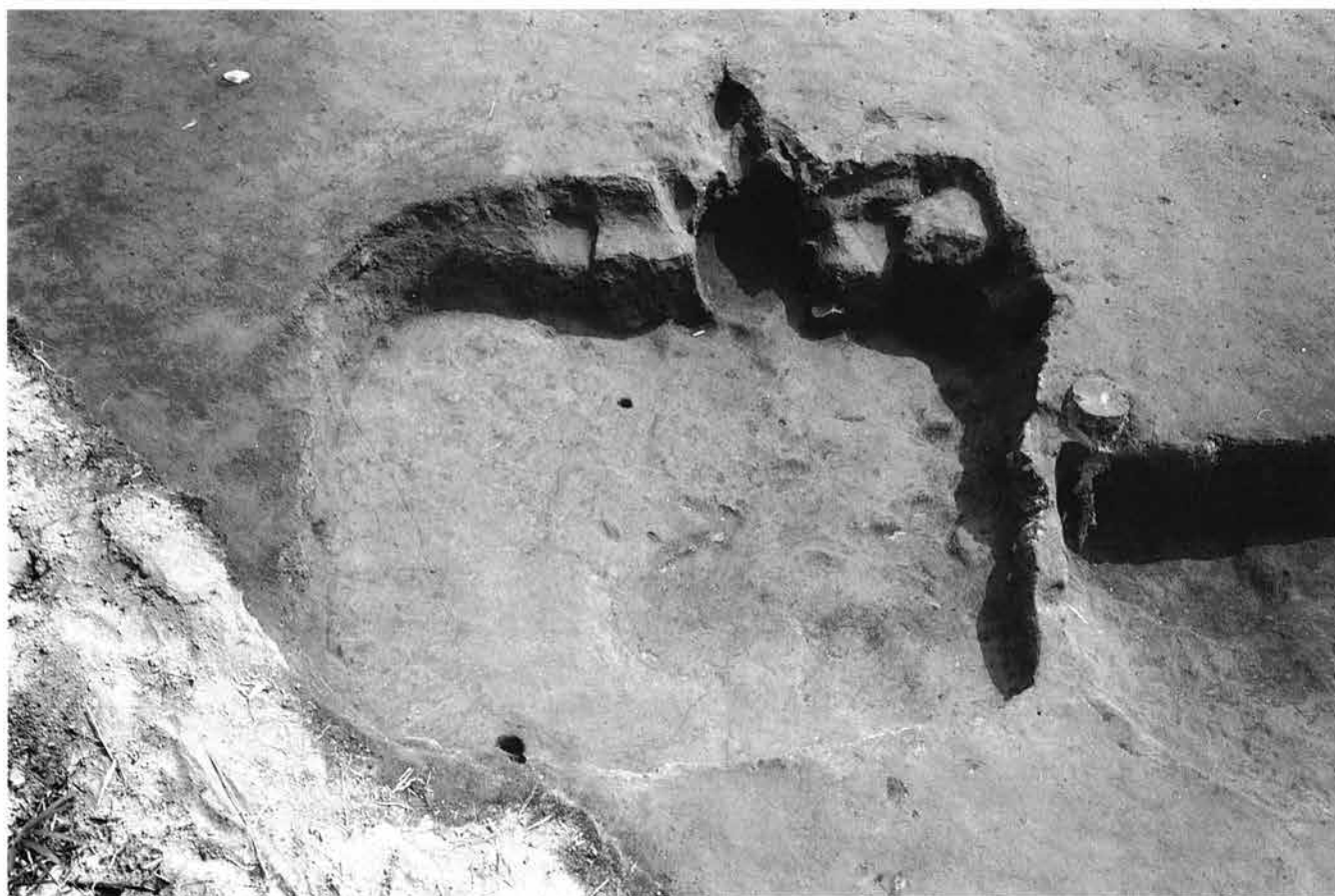
4号住居跡遺物出土状態▼



▲ 4・10・11号住居跡掘り方

13号住居跡▼





▲14号住居跡



▲14号住居跡遺物出土状態

14号住居跡カマド▼



▲14号住居跡掘り方

14号住居跡カマド掘り方▼





▲15号住居跡



▲15号住居跡掘り方

15号住居跡遺物出土状態▼



▲15号住居跡カマド

15号住居跡炉遺物出土状態▼





▲16号住居跡



▲16号住居跡掘り方

16号住居跡遺物出土状態▼



▲16号住居跡カマド

16号住居跡遺物出土状態▼





▲17号住居跡



▲17号住居跡遺物出土状態

17号住居跡カマド▼



▲17号住居跡掘り方

17号住居跡遺物出土状態▼





▲18号住居跡



▲18号住居跡掘り方

18号住居跡カマド▼



▲18号住居跡遺物出土状態

18号住居跡カマド▼





▲19号住居跡



▲19号住居跡掘り方

19号住居跡カマド遺物出土状態▼



▲19号住居跡カマド掘り方

19号住居跡カマド▼





▲20号住居跡



▲20号住居跡掘り方

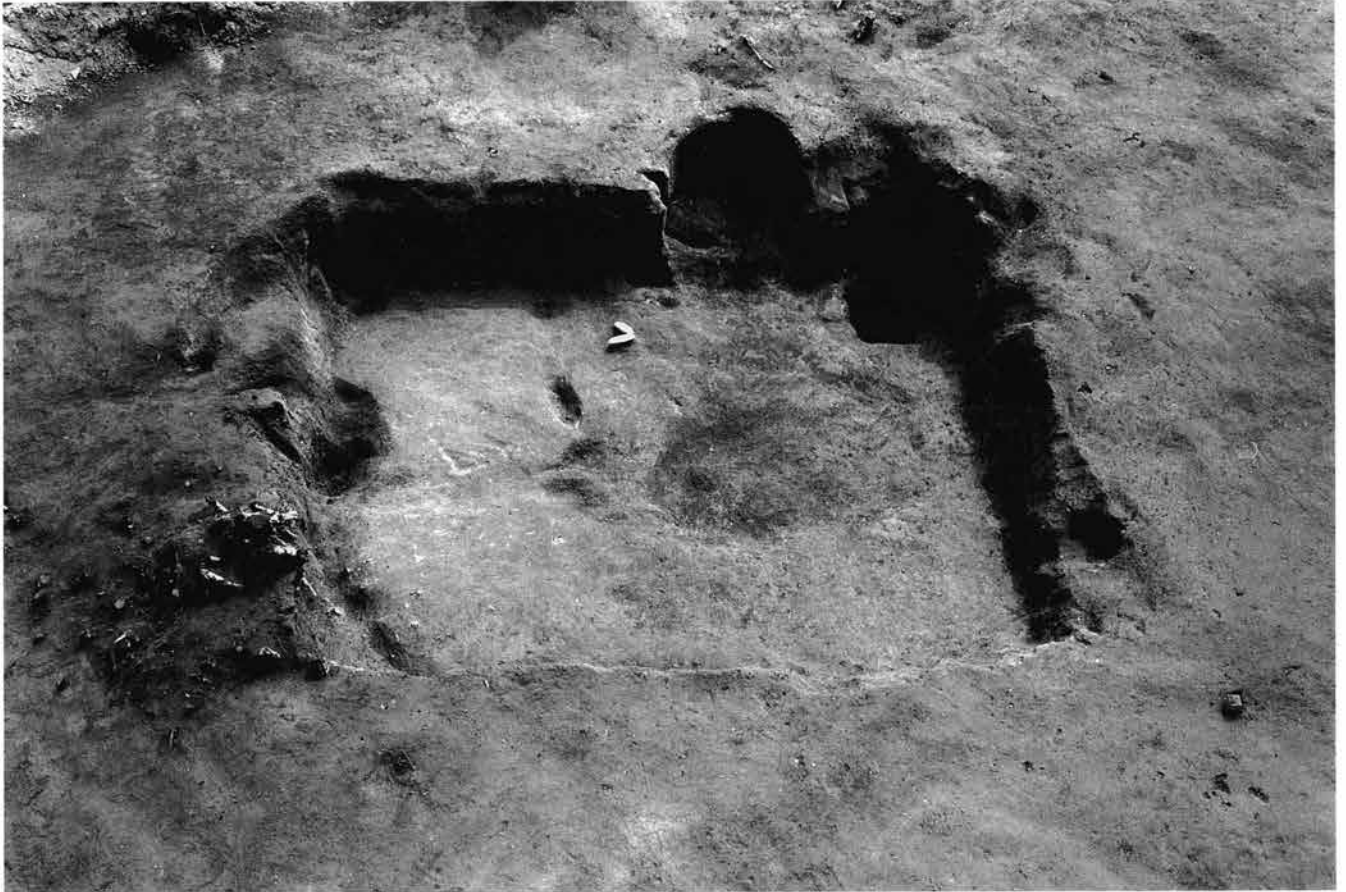
20号住居跡カマド▼



▲20号住居跡

20号住居跡カマド遺物出土状態▼





▲21号住居跡



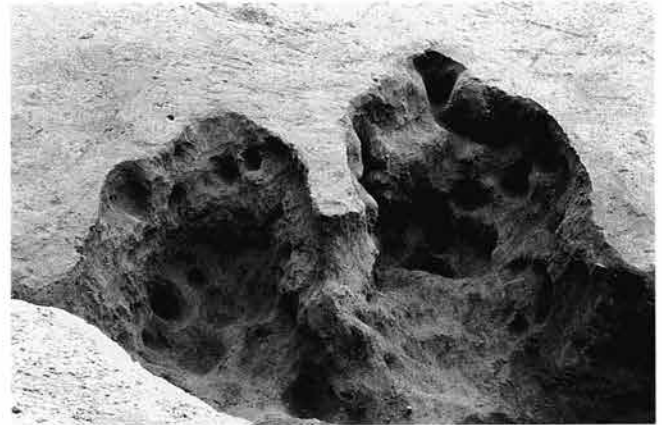
▲21号住居跡掘り方

22号住居跡▼



▲21号住居跡カマド

22号住居跡カマド掘り方▼





▲23号住居跡遺物出土状態



▲23号住居跡掘り方

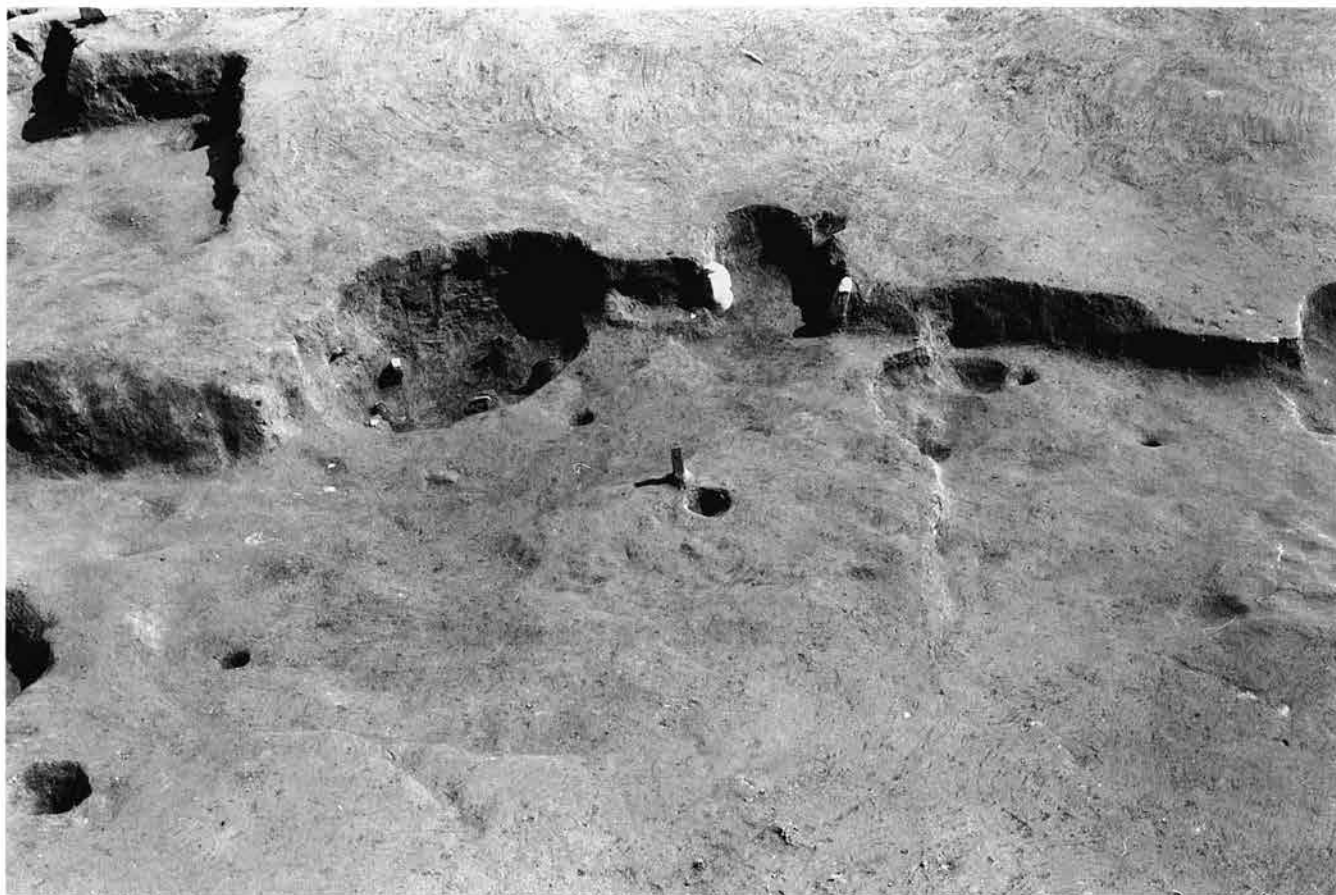
23号住居跡カマド▼



▲23号住居跡カマド遺物出土状態

23号住居跡遺物出土状態▼





▲23号住居跡



▲24号住居跡掘り方

24号住居跡遺物出土状態▼



▲24号住居跡遺物出土状態

24号住居跡遺物出土状態▼





▲25号住居跡遺物出土状態



▲25号住居跡掘り方

25号住居跡カマド遺物出土状態▼



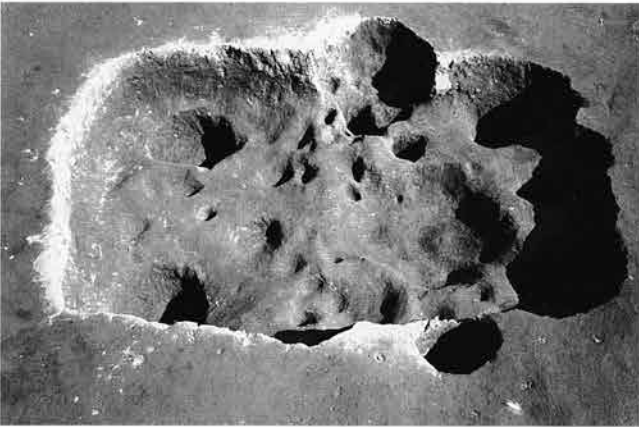
▲25号住居跡カマド

25号住居跡遺物出土状態▼



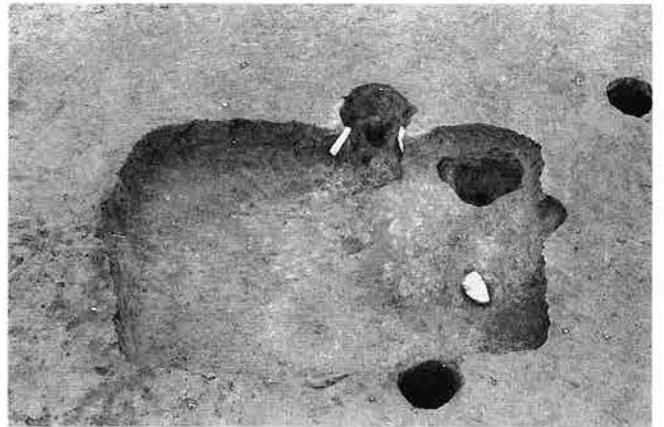


▲27号住居跡遺物出土状態



▲27号住居跡掘り方

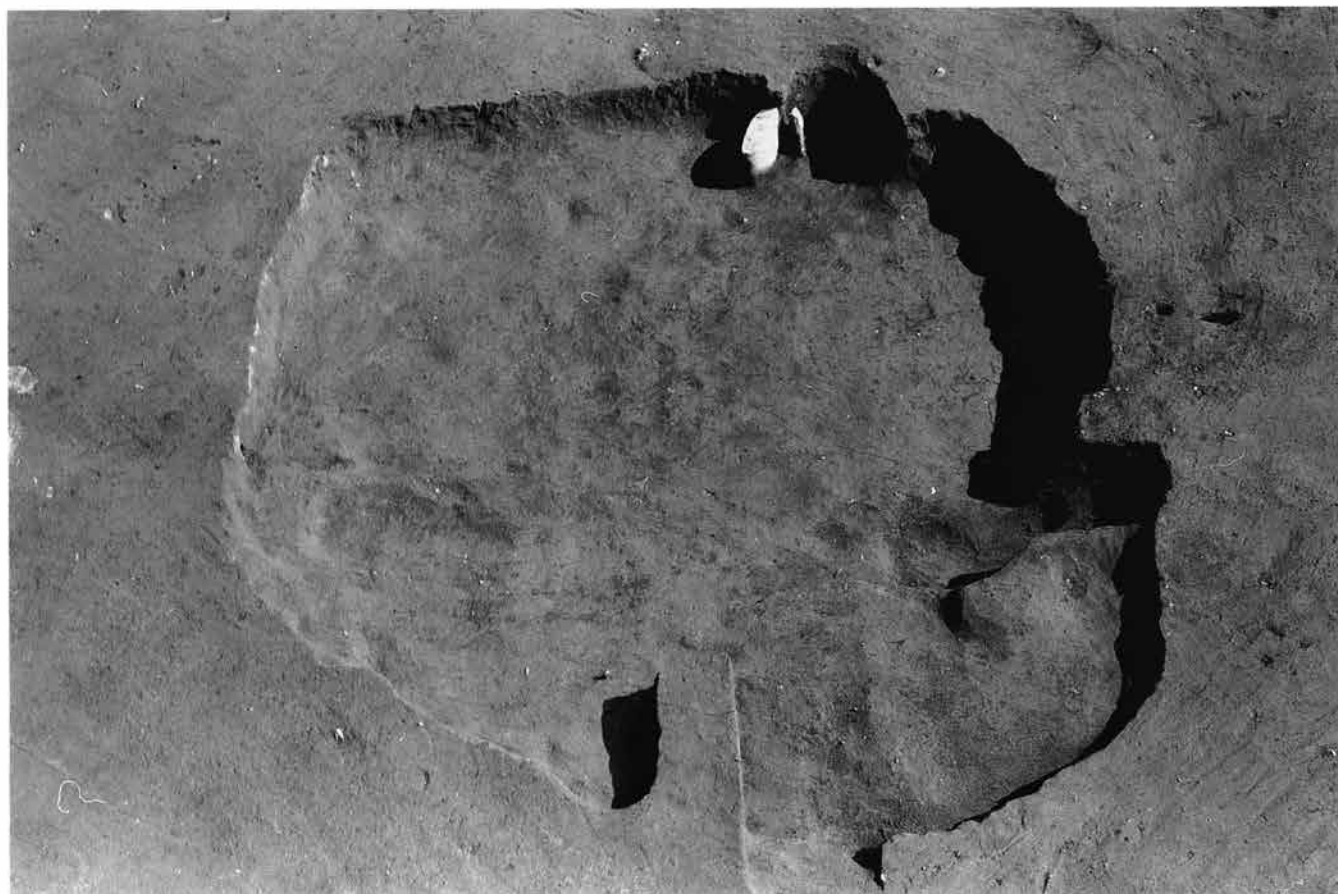
27号住居跡カマド遺物出土状態▼



▲27号住居跡

27号住居跡カマド▼





▲29号住居跡



▲29号住居跡掘り方

29号住居跡カマド遺物出土状態▼



▲29号住居跡遺物出土状態

29号住居跡カマド▼





▲30号住居跡

31号住居跡 ▼





▲作業風景

作業風景 ▼





▲20号土坑



▲21号土坑



22号土坑▼



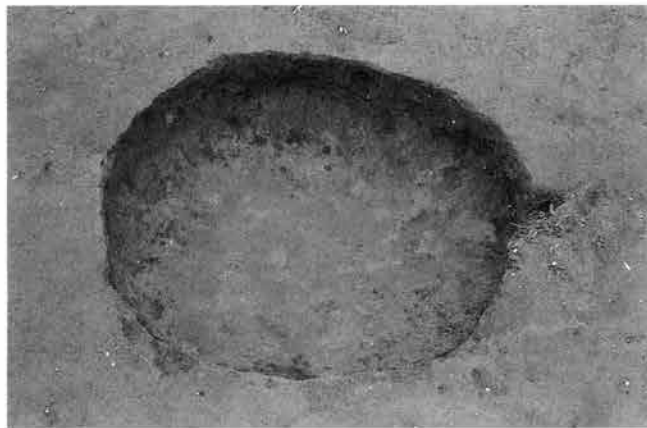
23号土坑▼



▲24号土坑



▲26号土坑



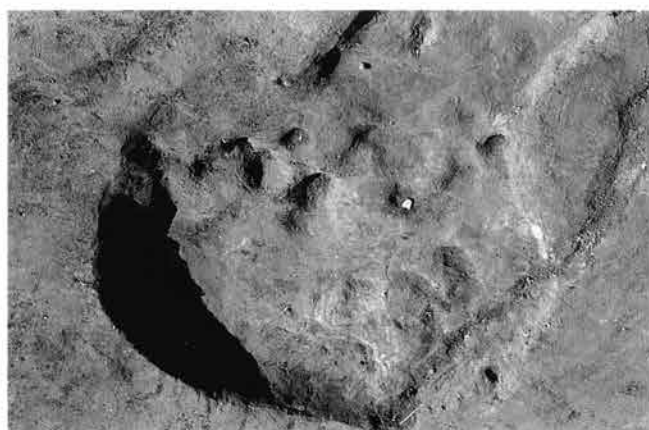
27号土坑▼



28号土坑▼



▲29·30号土坑



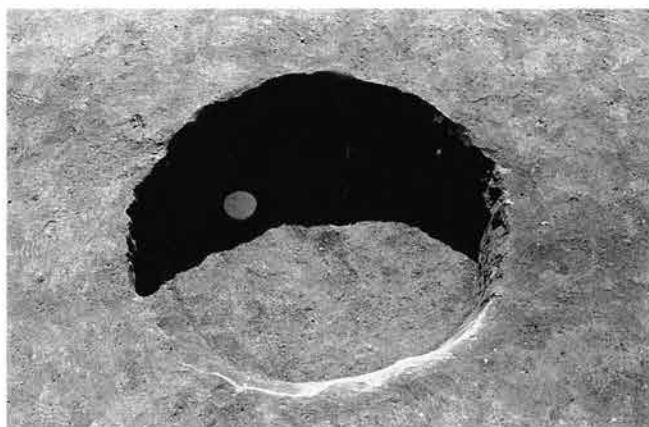
▲31号土坑



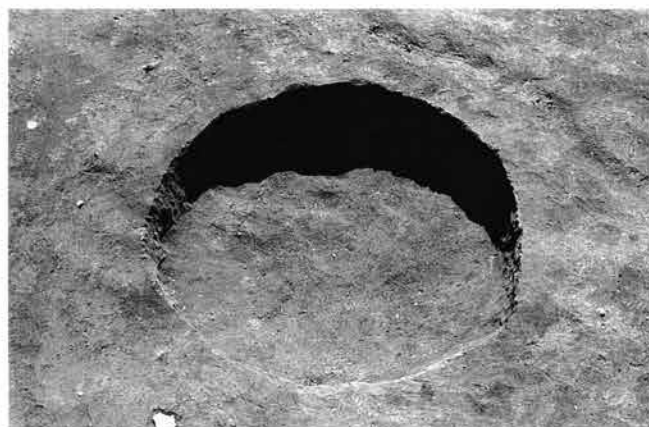
▼32号土坑



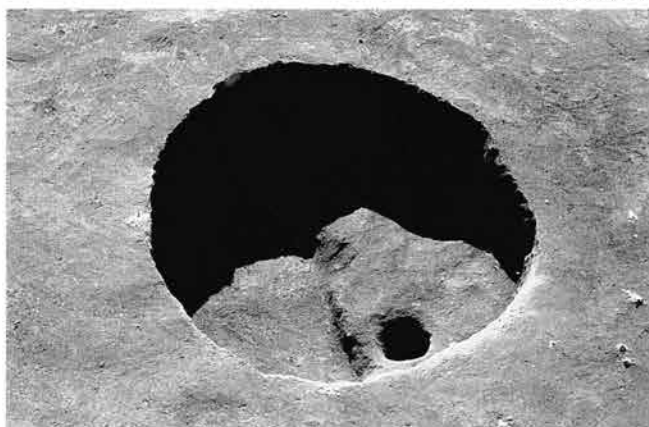
▼33号土坑



▲34号土坑



▲35号土坑



▼36号土坑



▼37号土坑

图版30



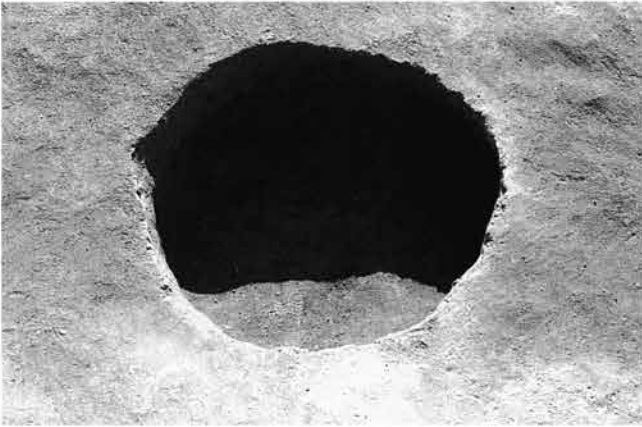
▲40号土坑



▲41号土坑

42·43号土坑▼

44号土坑▼



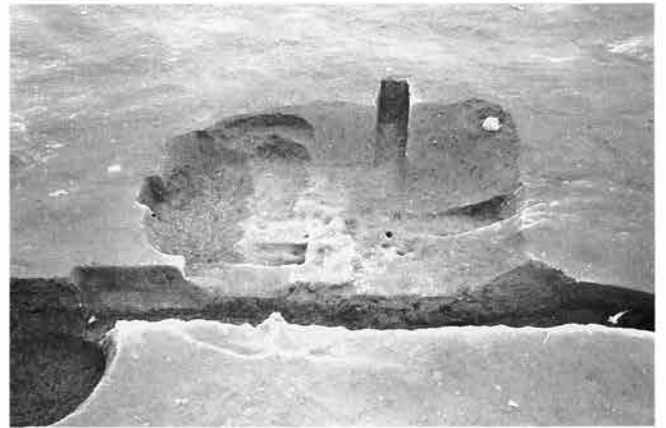
▲45号土坑



▲47号土坑

48号土坑遺物出土状态▼

48·49号土坑▼





▲50号土坑



▲51号土坑

52号土坑▼

3号墓坑▼



▼1号墓坑



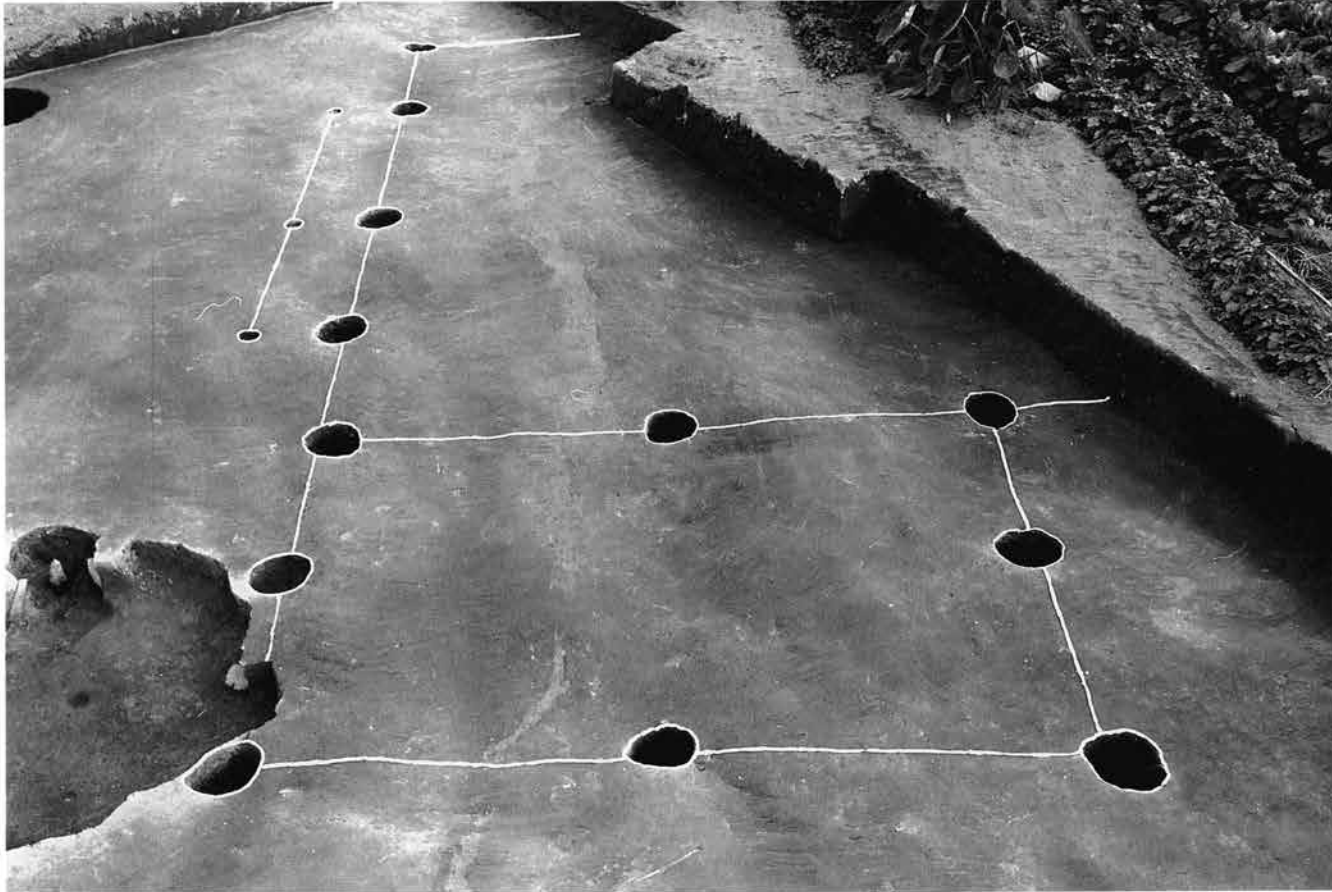


▲ 1号沟



▲ 3号沟

1号建物▼





▲神社跡

神社跡 ▼





▲神社跡礎石列



▲神社跡参道

神社跡礎石列▼



▲神社跡建物跡

神社跡瓦溜め▼





▲神社跡空撮

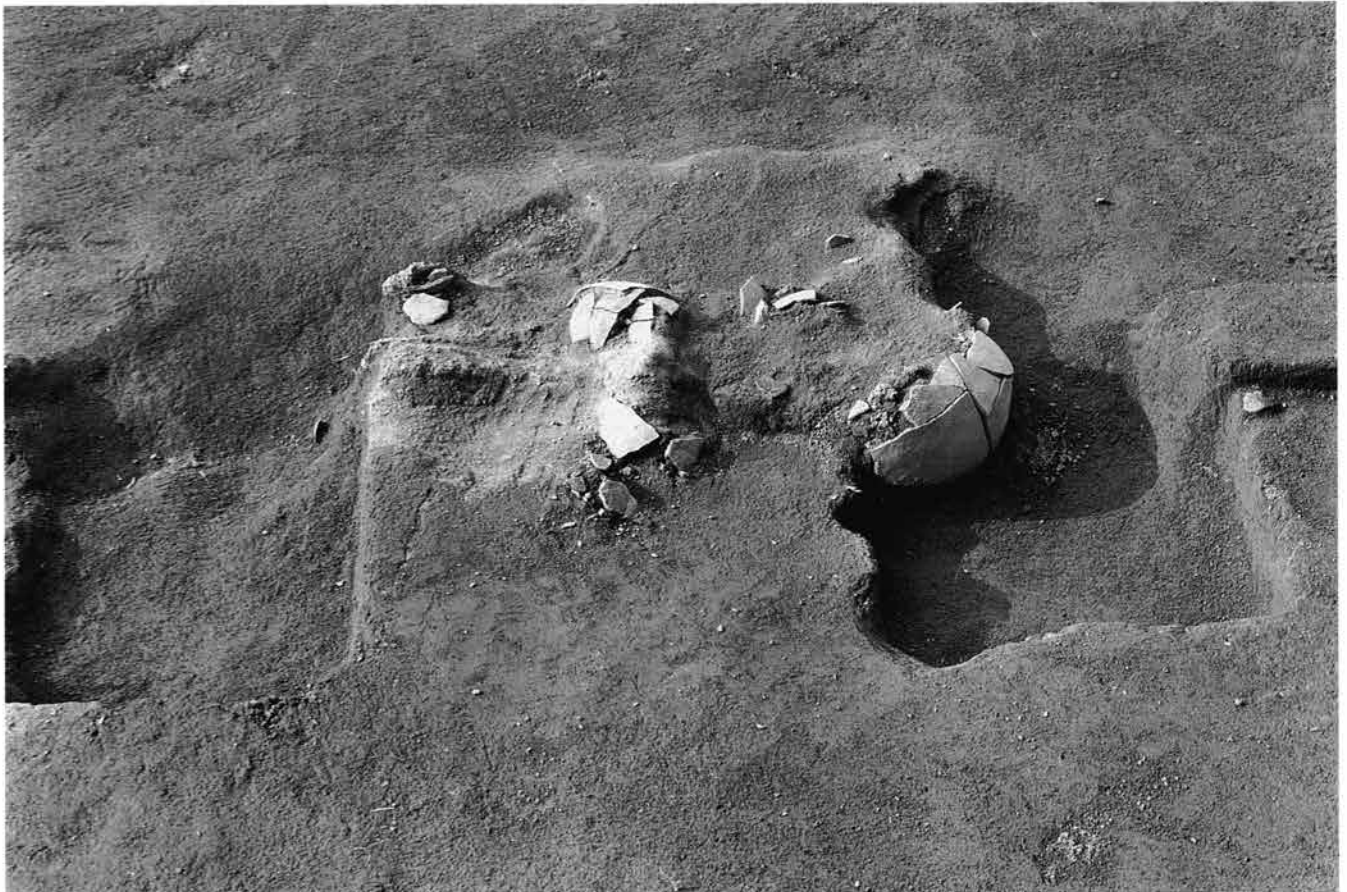
▼神社跡作業風景





▲20-53グリッド石器出土状態

23-49グリッド土器出土状態 ▼





▲作業風景

作業風景 ▼

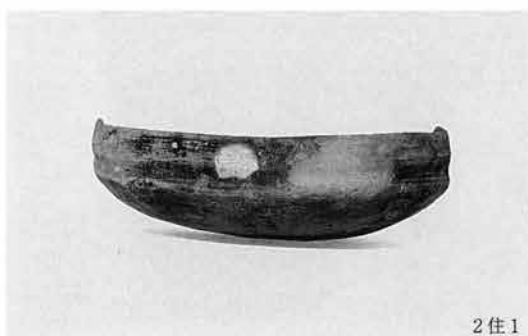
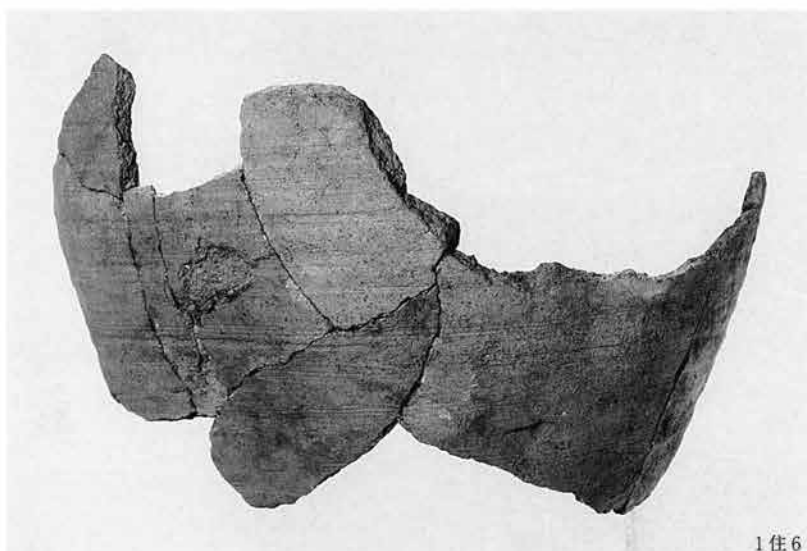




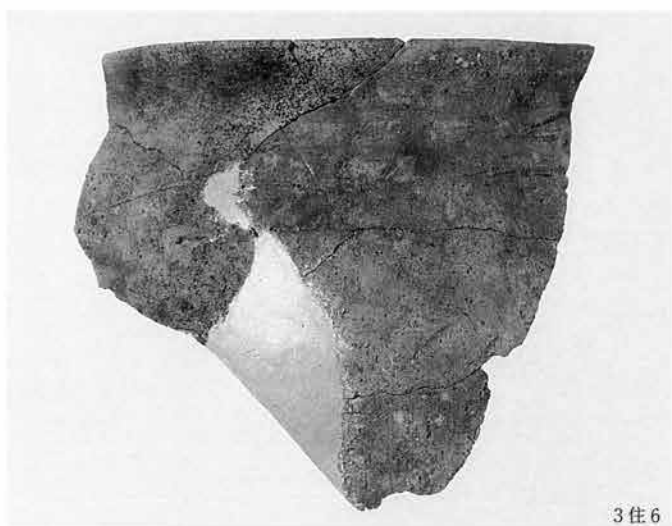
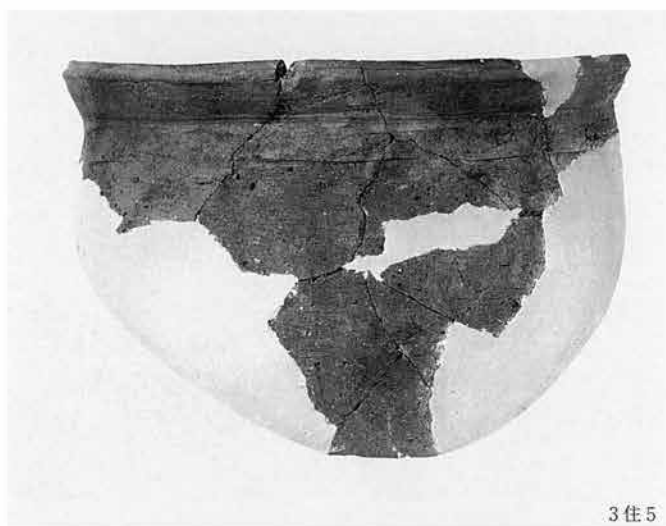
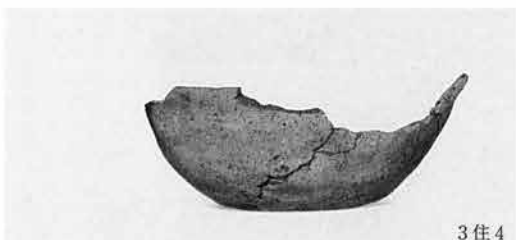
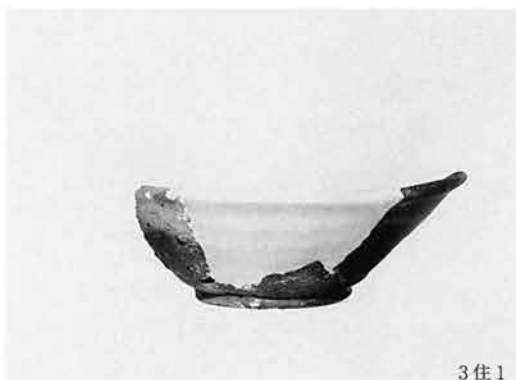
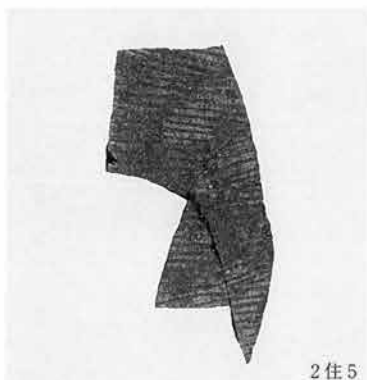
▲第II台地遠景

試掘風景▼





图版40





3 住 9



3 住 10



3 住 11



4 住 1



4 住 2



4 住 3



4 住 4



4 住 5



4 住 6



4 住 7



4 住 8



4 住 9



4 住 10



4 住 13



4 住 16

図版42



4住12



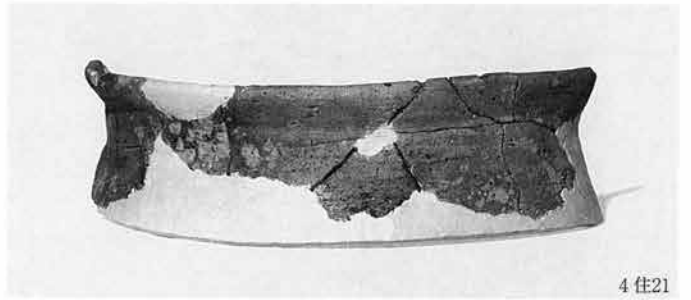
4住17



4住18



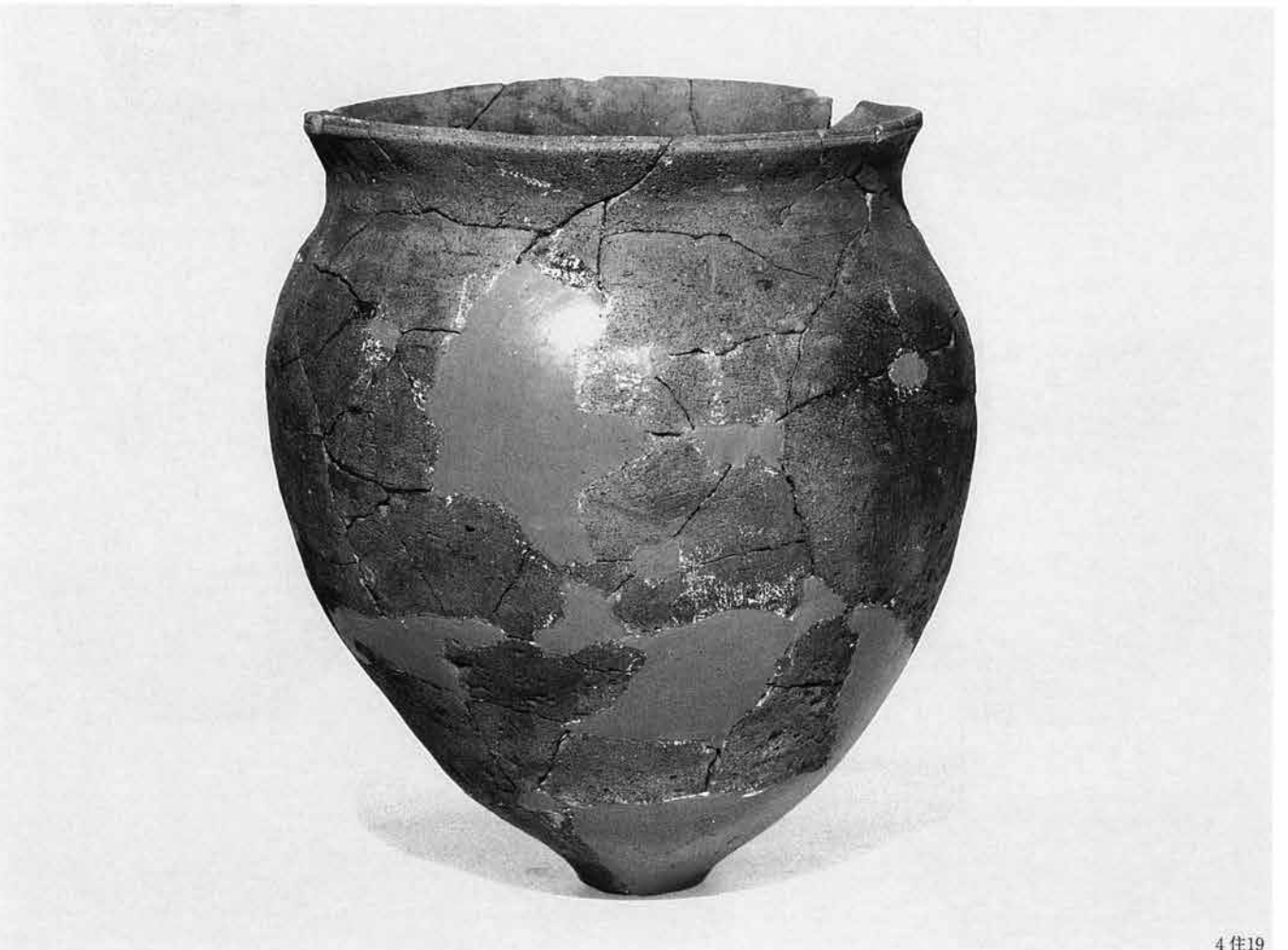
4住20



4住21



4住22



4住19



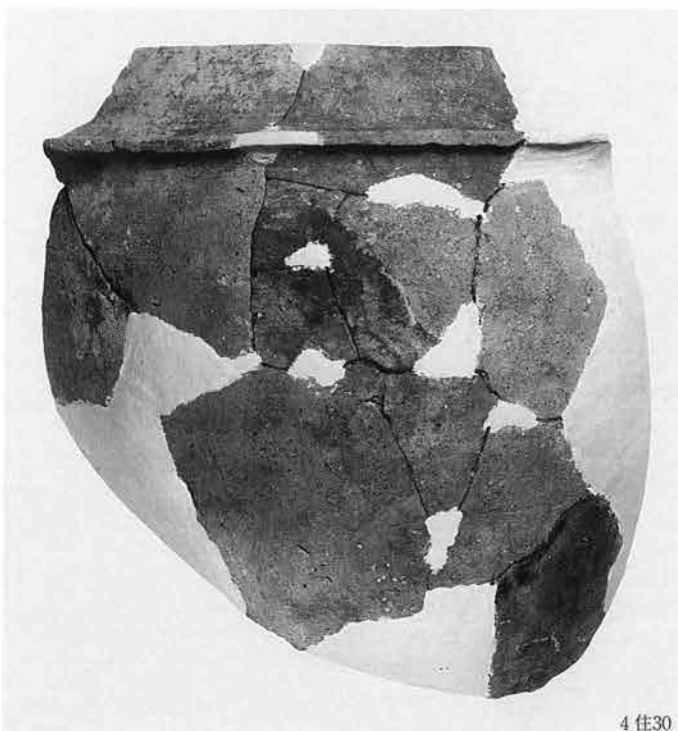
4 住25



4 住26



4 住27



4 住30



4 住31



4 住32



4 住28



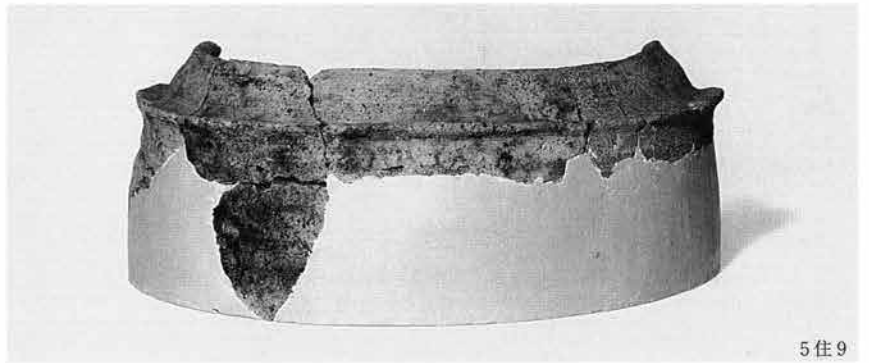
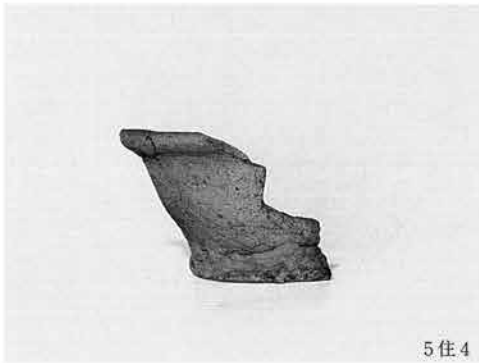
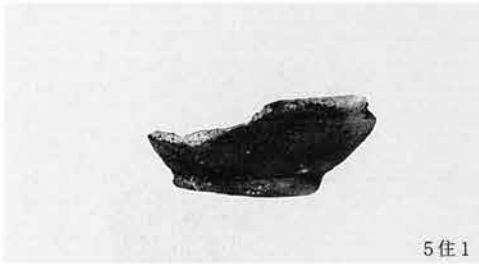
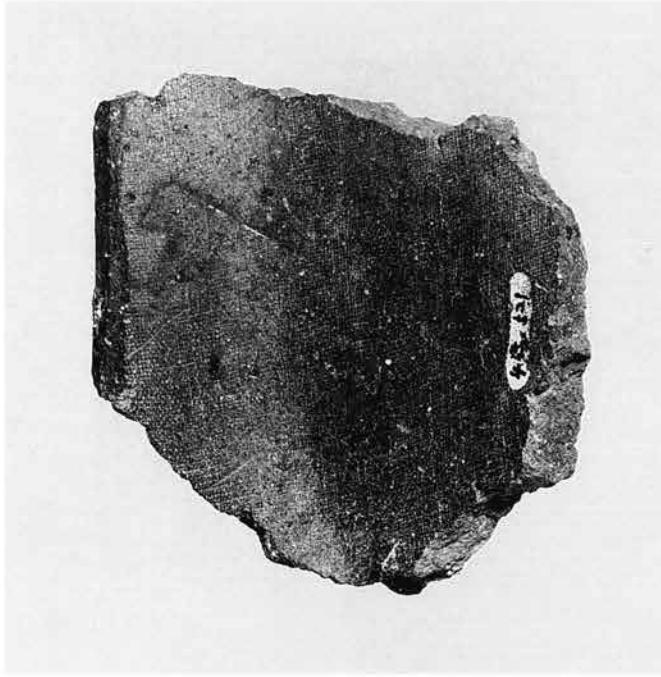
4 住29



4 住33



4 住34





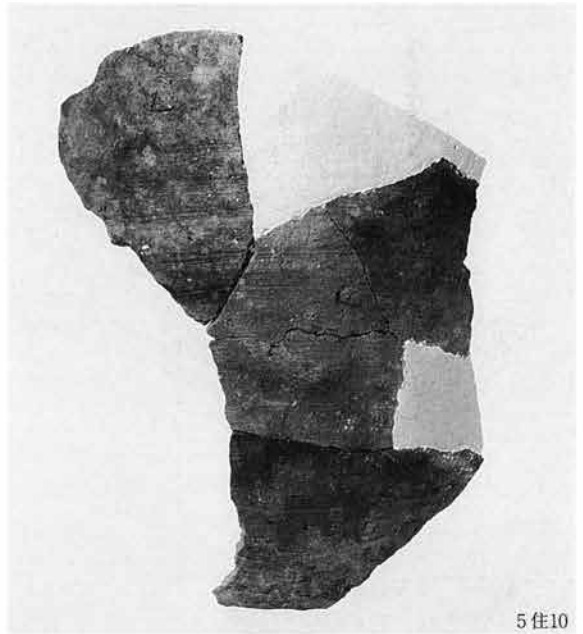
5住5



5住7



5住8



5住10



6住1



6住3



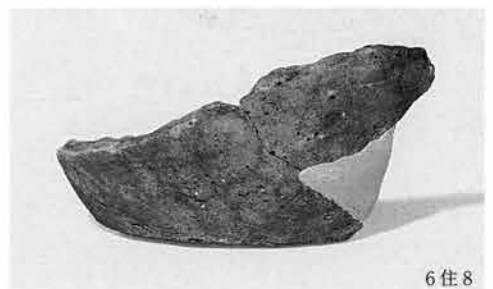
6住2



6住4



6住5



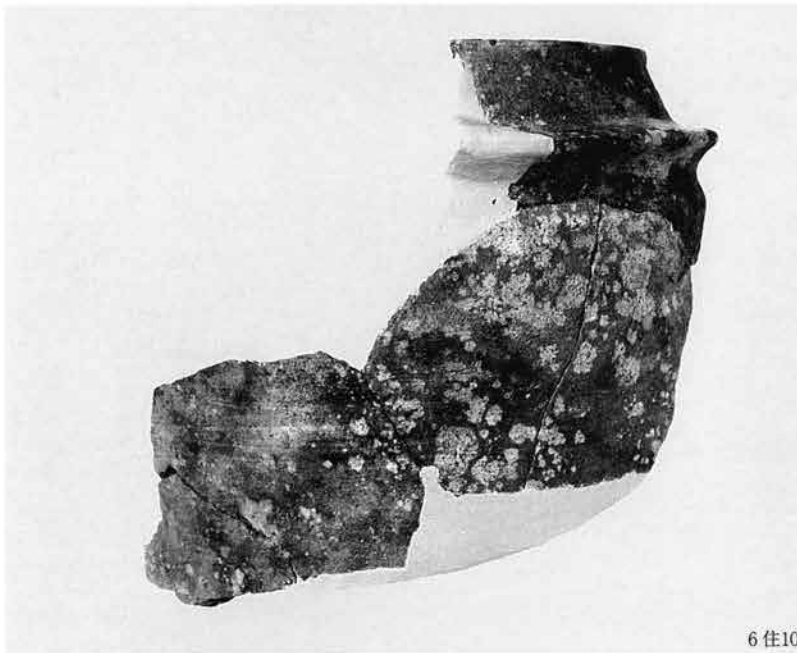
6住8



6住6



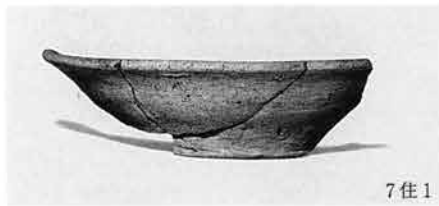
6住9



6住10



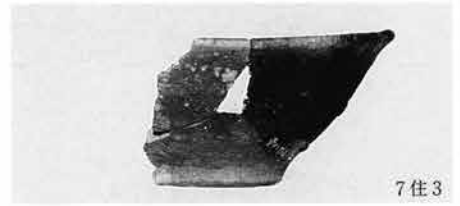
6住7



7住1



7住2



7住3



7住4



7住5



7住6



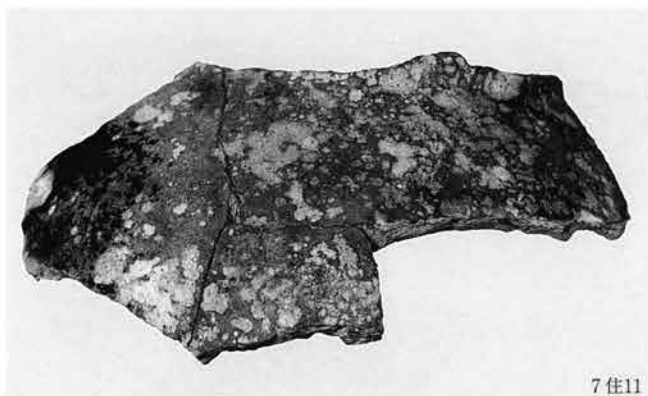
7住7



7住8



7住9



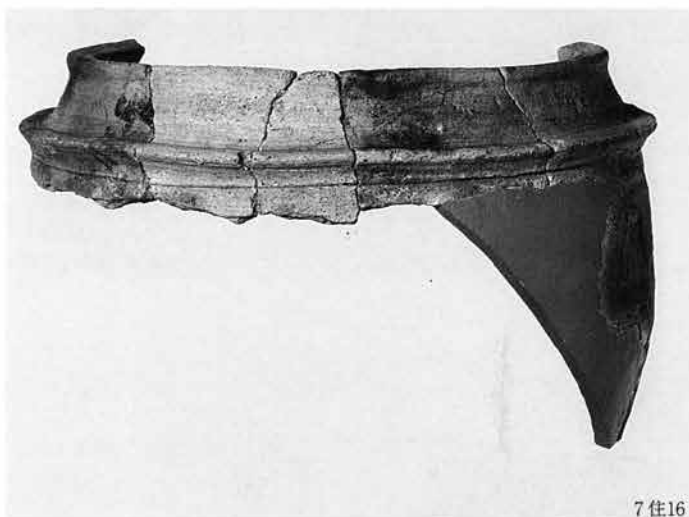
7住11



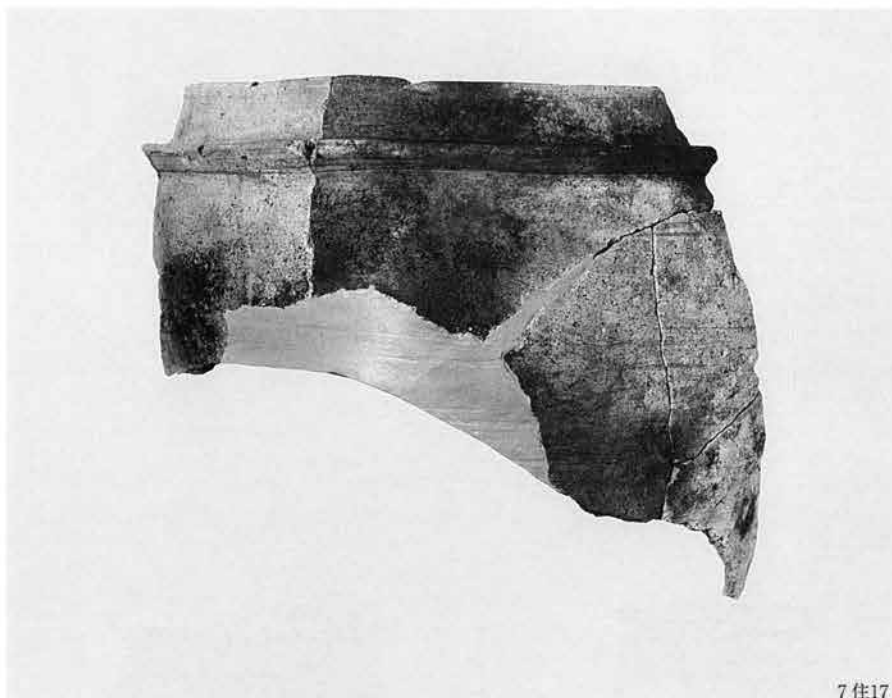
7住12



7住15



7住16



7住17



8住1



8住2



8住3



8住5

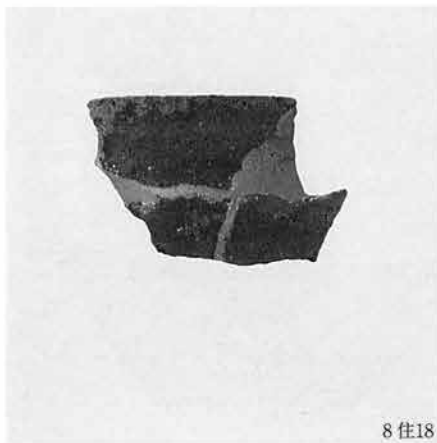
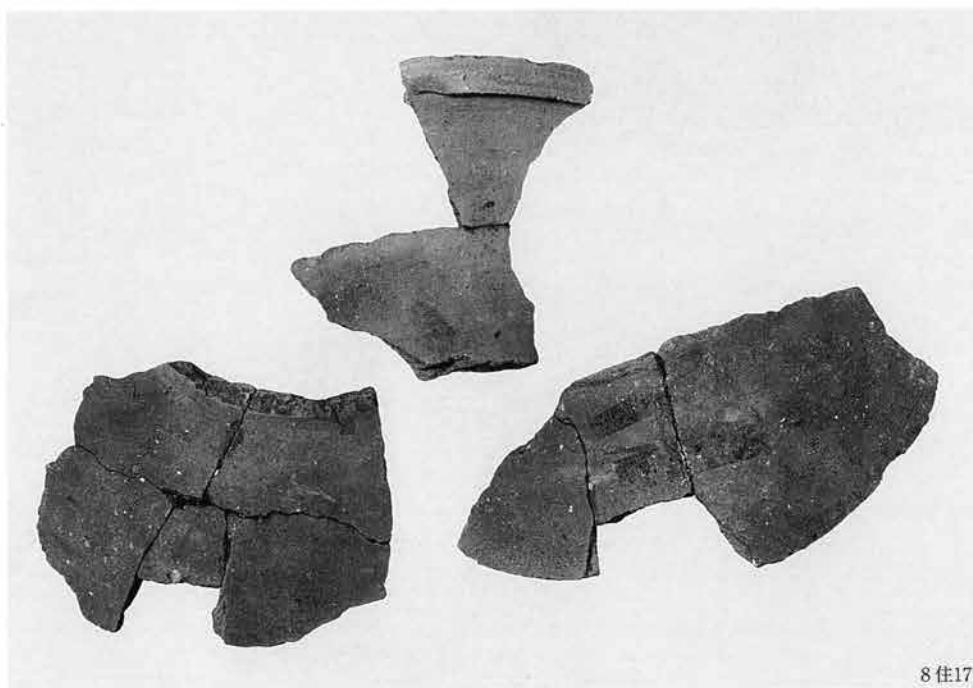
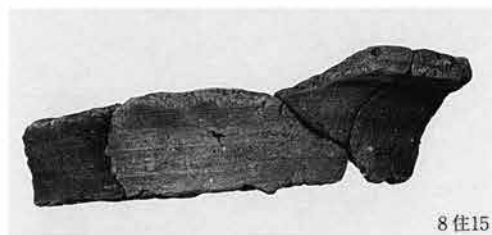
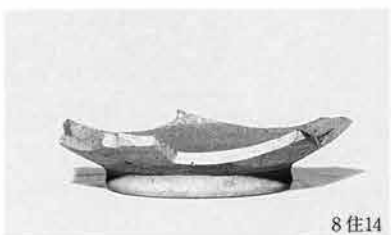
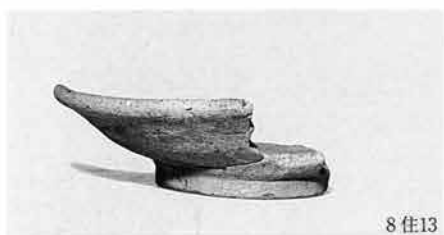


8住4



8住6

図版50

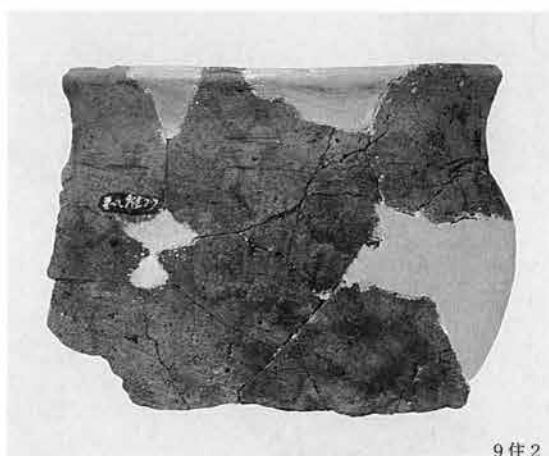




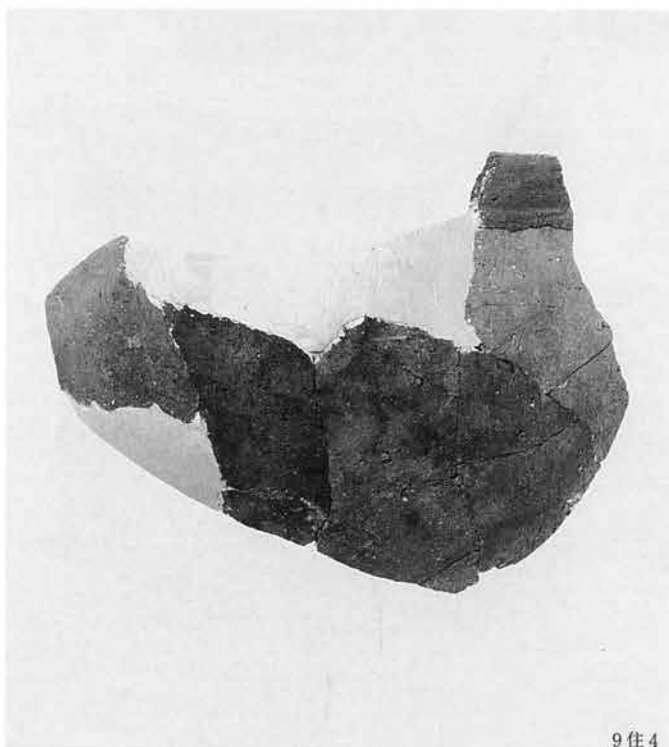
9住1



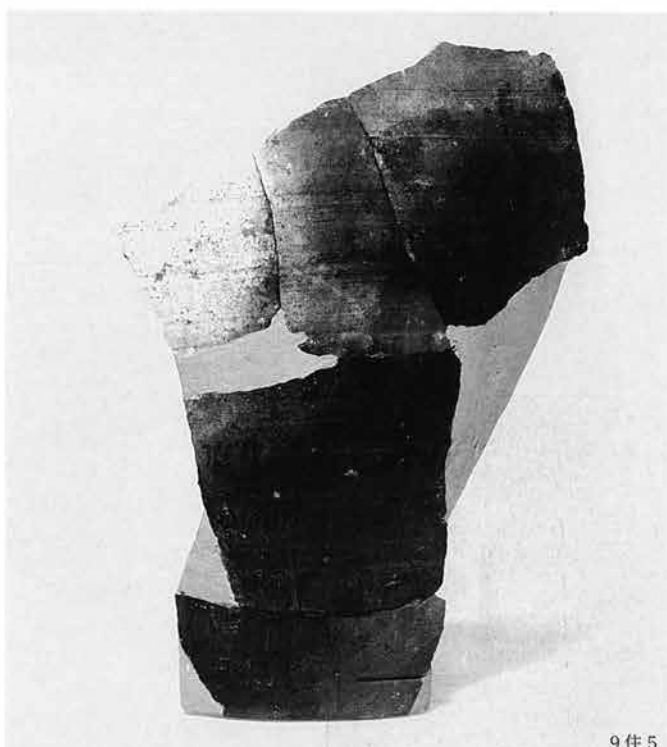
9住3



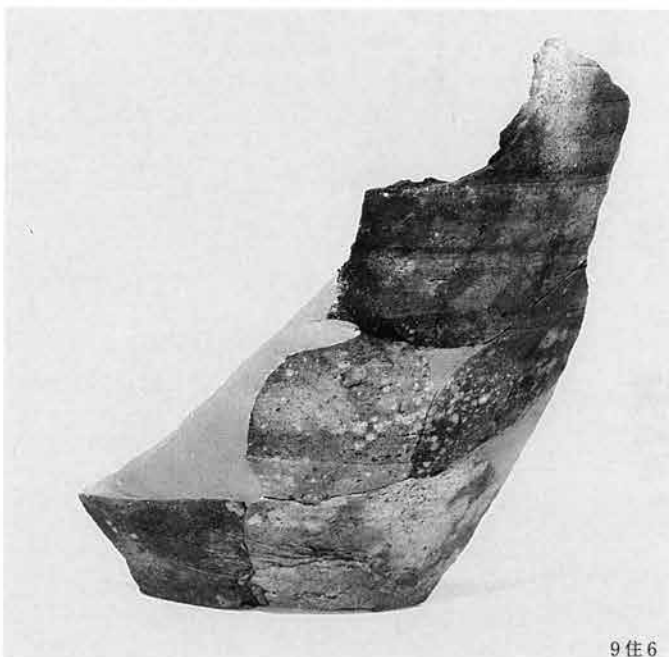
9住2



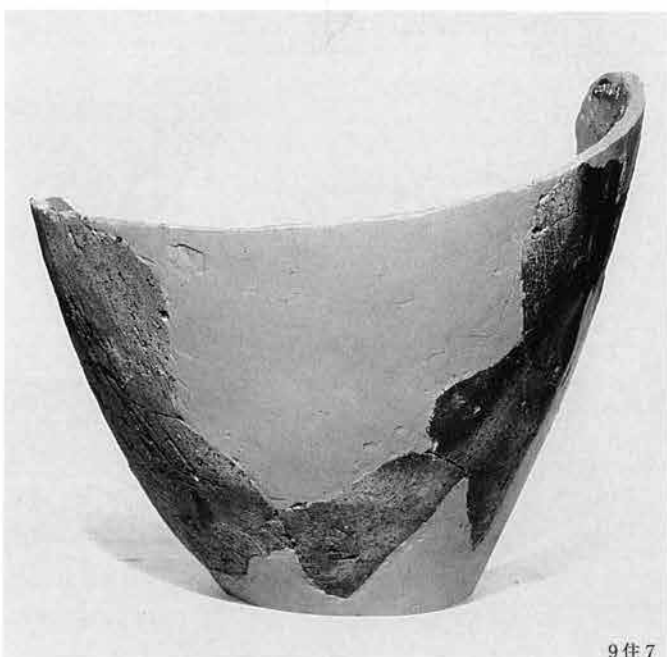
9住4



9住5

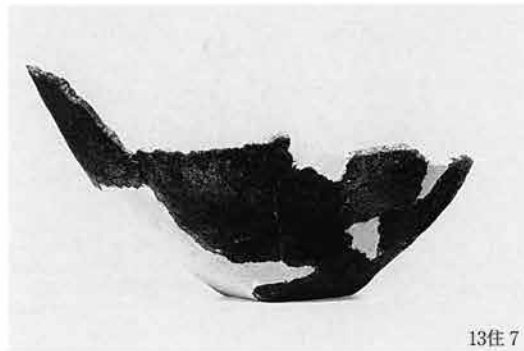
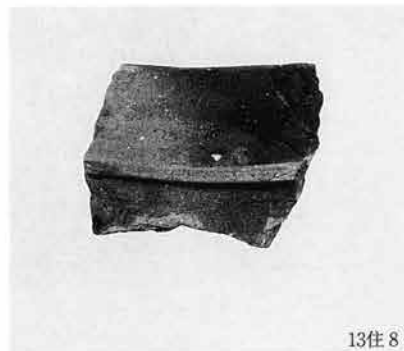
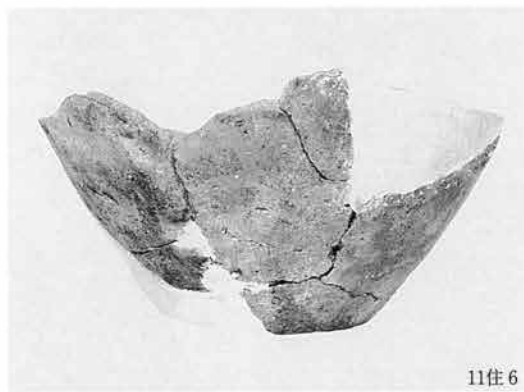


9住6



9住7

図版52





14住1



14住2



14住3



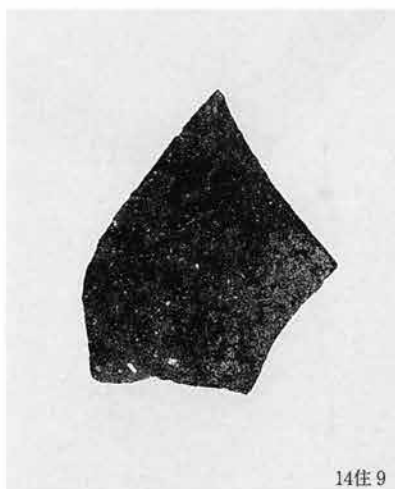
14住5



14住6



14住8



14住9



14住10



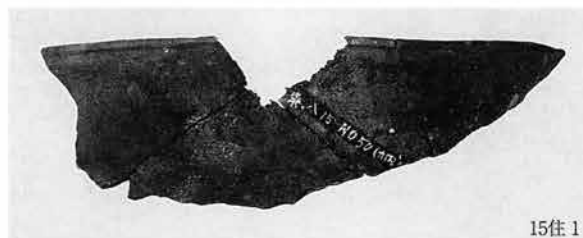
14住11



14住12



14住13



15住1



15住2



15住4



15住3



15住5



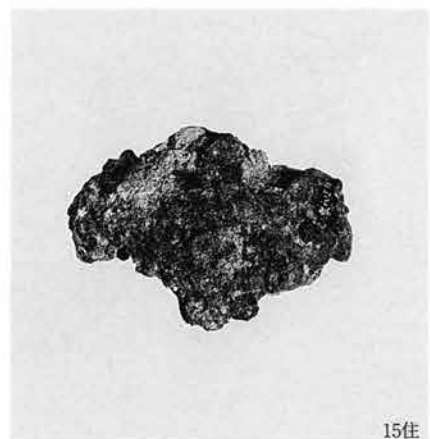
15住



15住



15住



15住

図版54



16住 1



16住 2



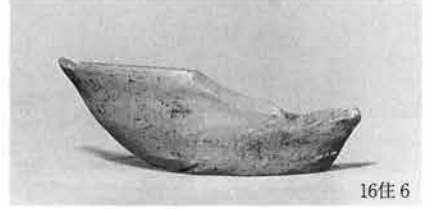
16住 3



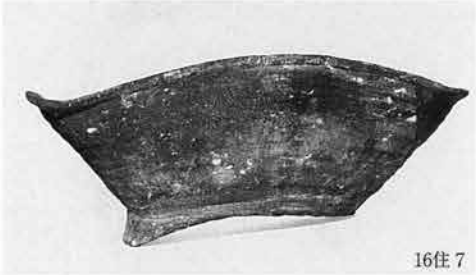
16住 4



16住 5



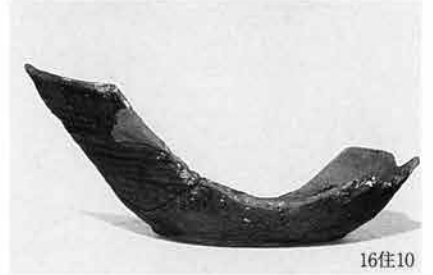
16住 6



16住 7



16住 8



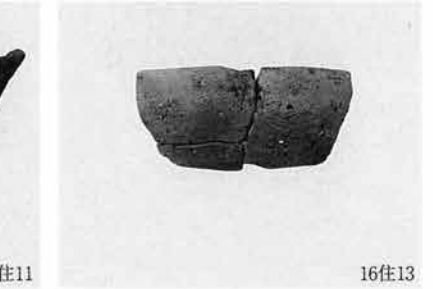
16住 10



16住 9



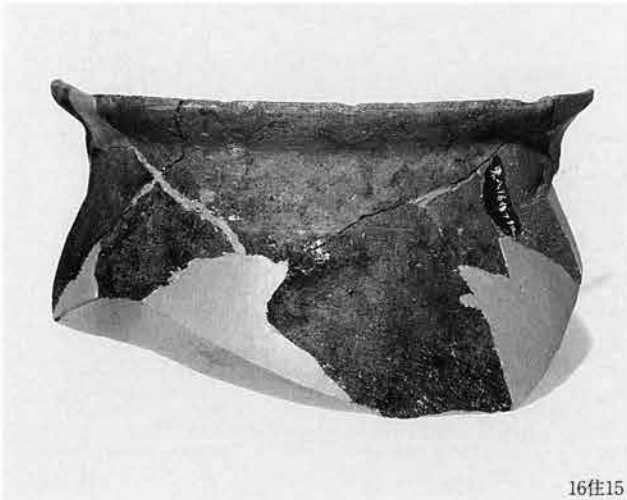
16住 11



16住 13



16住 12



16住 15



16住 16



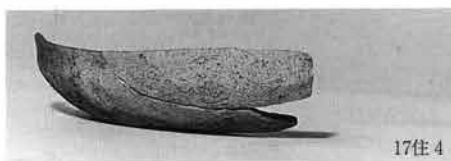
17住 1



17住 2



17住 3



17住 4



17住 6



17住 8



17住 10



17住 9



18住 4



18住 3



18住 6



18住 10



18住 7



18住 8



18住 9



18住 11



18住 12



18住 13



18住 14

図版56



19住1



19住4



19住2



19住3



19住6



19住5



19住7



20住1



20住2



20住3



20住4



20住5



20住9



20住11



20住18



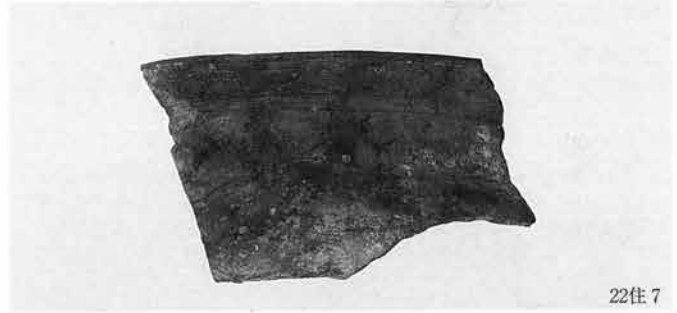
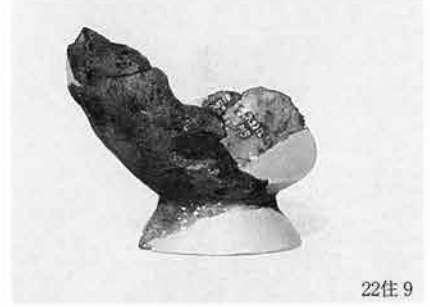
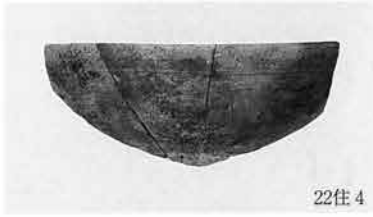
20住19



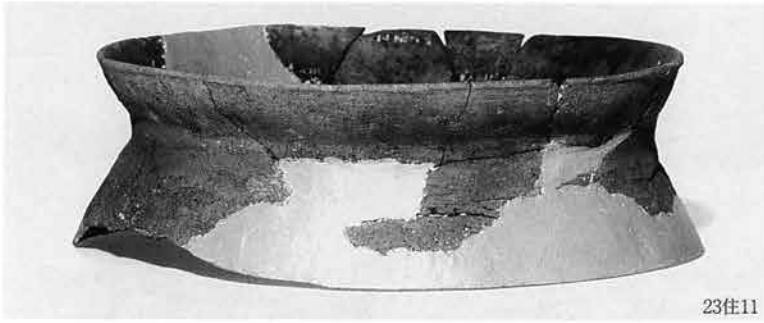
20住20



20住



図版58



23住11



23住12



24住1



24住3



24住4



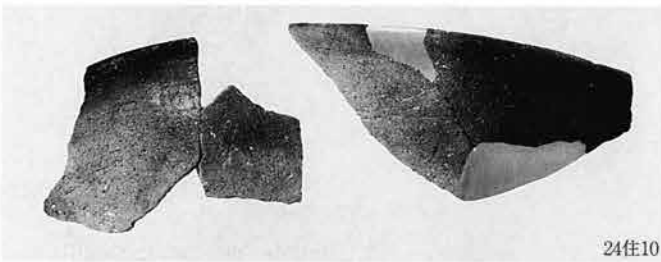
24住2



24住8



24住9



24住10



24住13



24住14



24住15



24住17



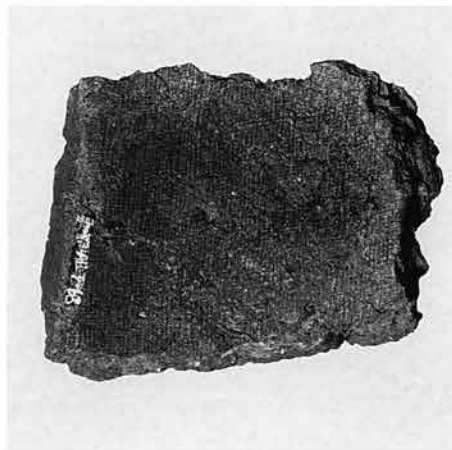
24住19



24住20



24住16



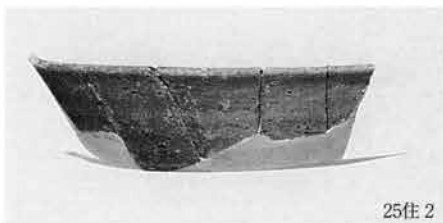
24住23



24住23



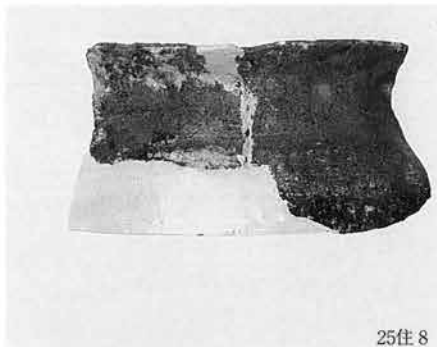
25住1



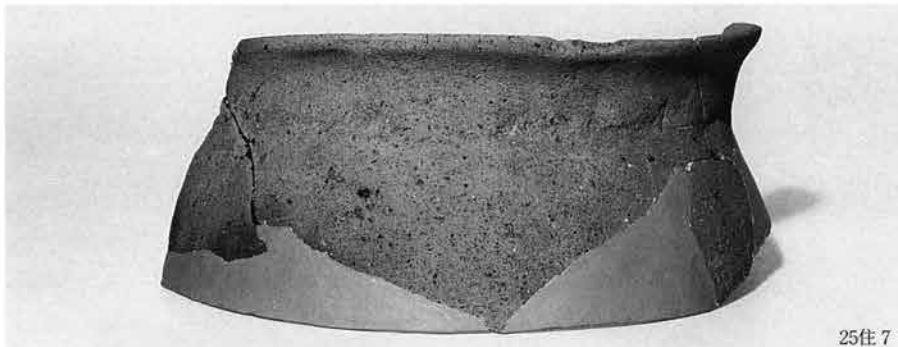
25住2



25住5



25住8



25住7



27住1



27住2



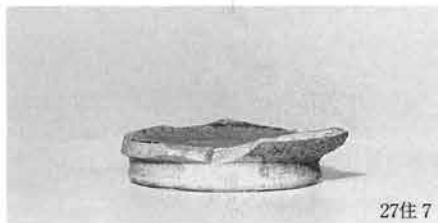
27住3



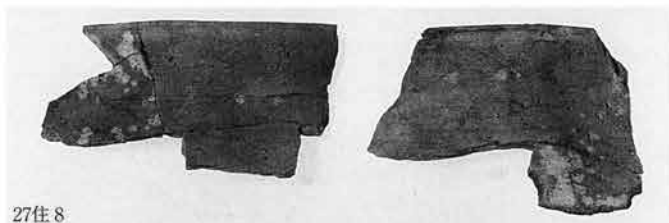
27住4



27住5



27住7



27住8



27住9

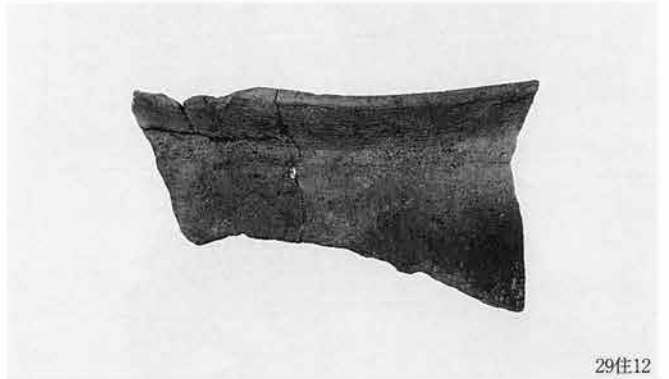
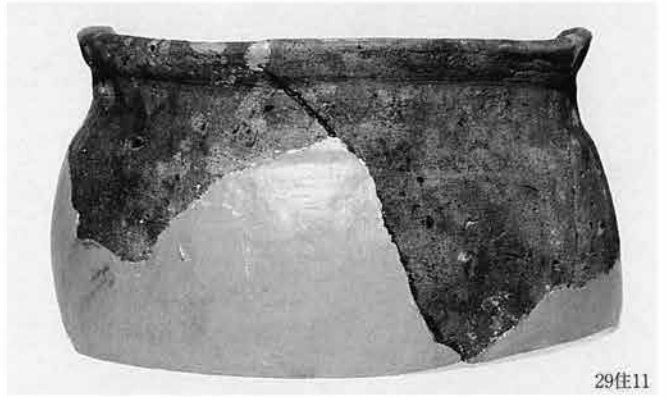


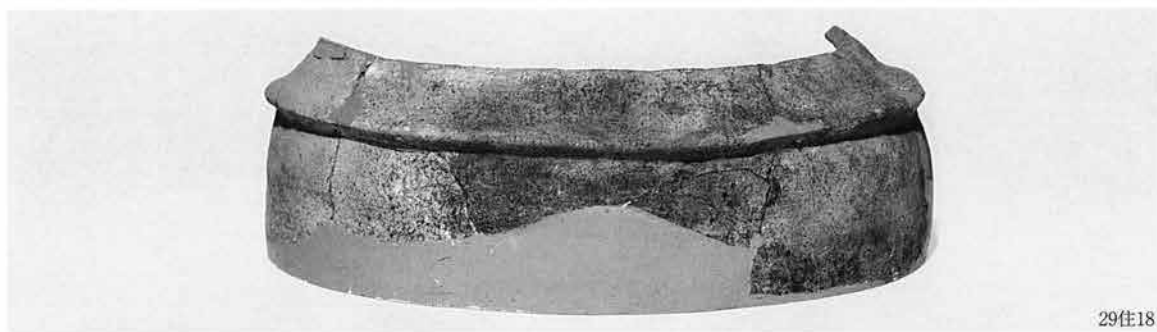
27住10



27住11

图版60





29住18



29住19



29住20

図版62



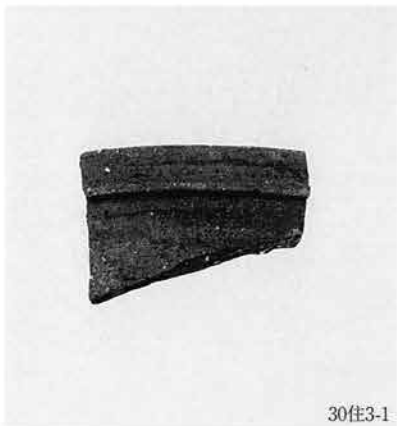
30住1



30住2



30住5



30住3-1



30住3-3



30住3-5



30住7



30住6



30住8



30住9



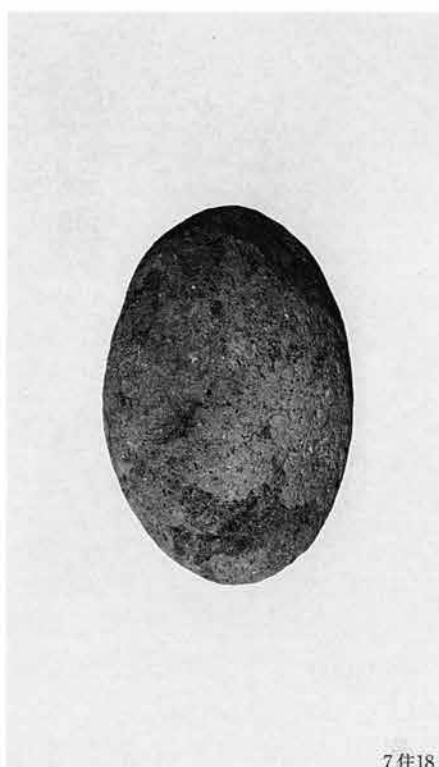
30住10



4住36



4住37



7住18



8住



8住



8住22



8住23



8住21



11住7



14住

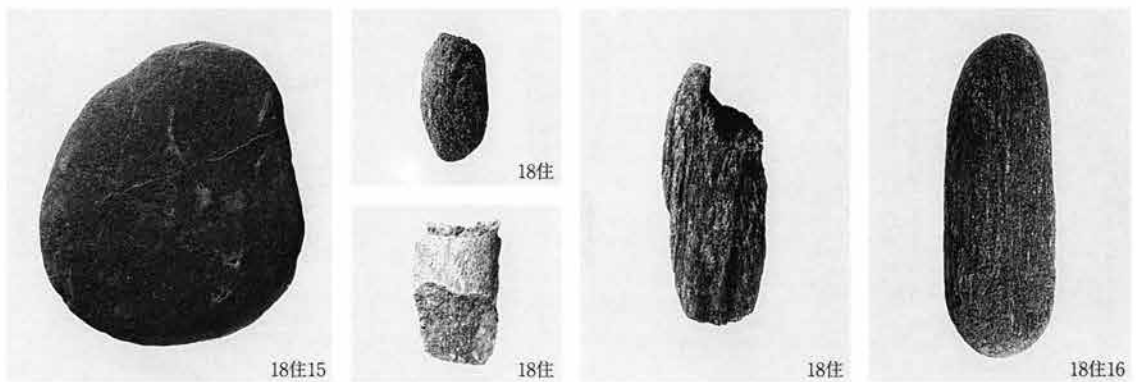
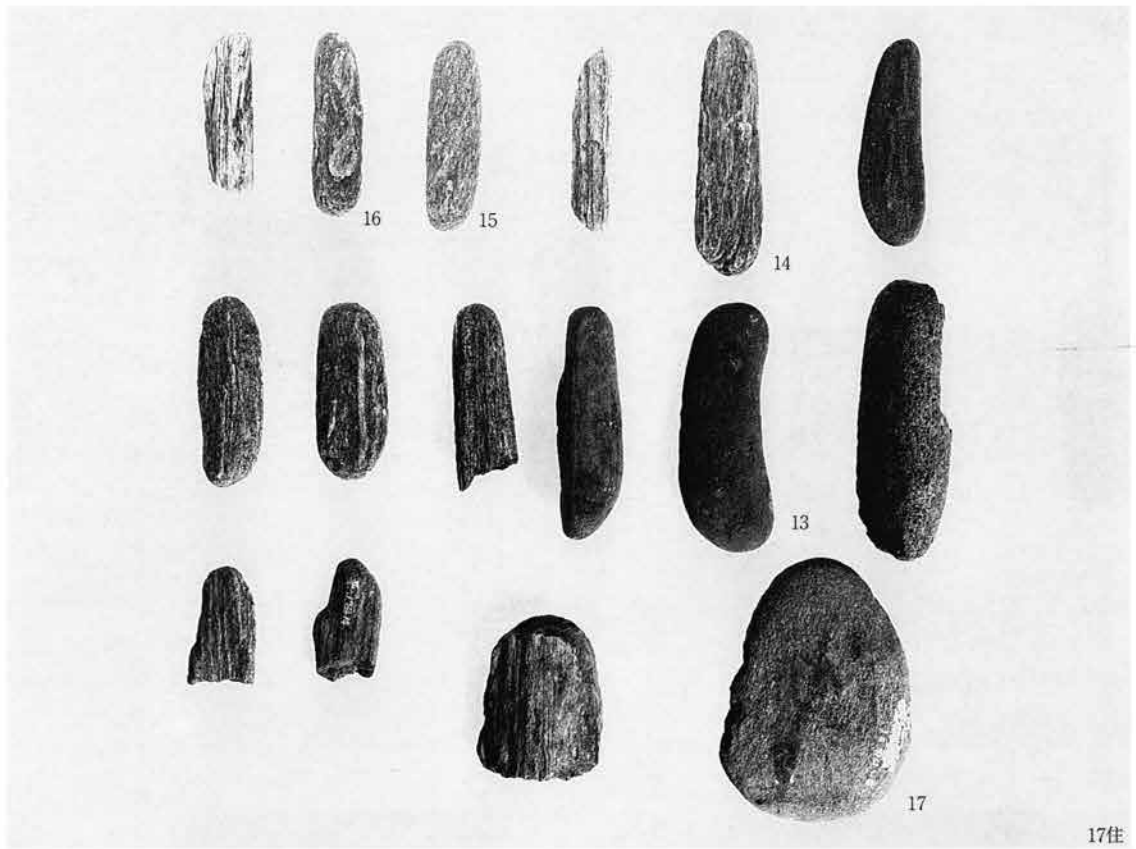
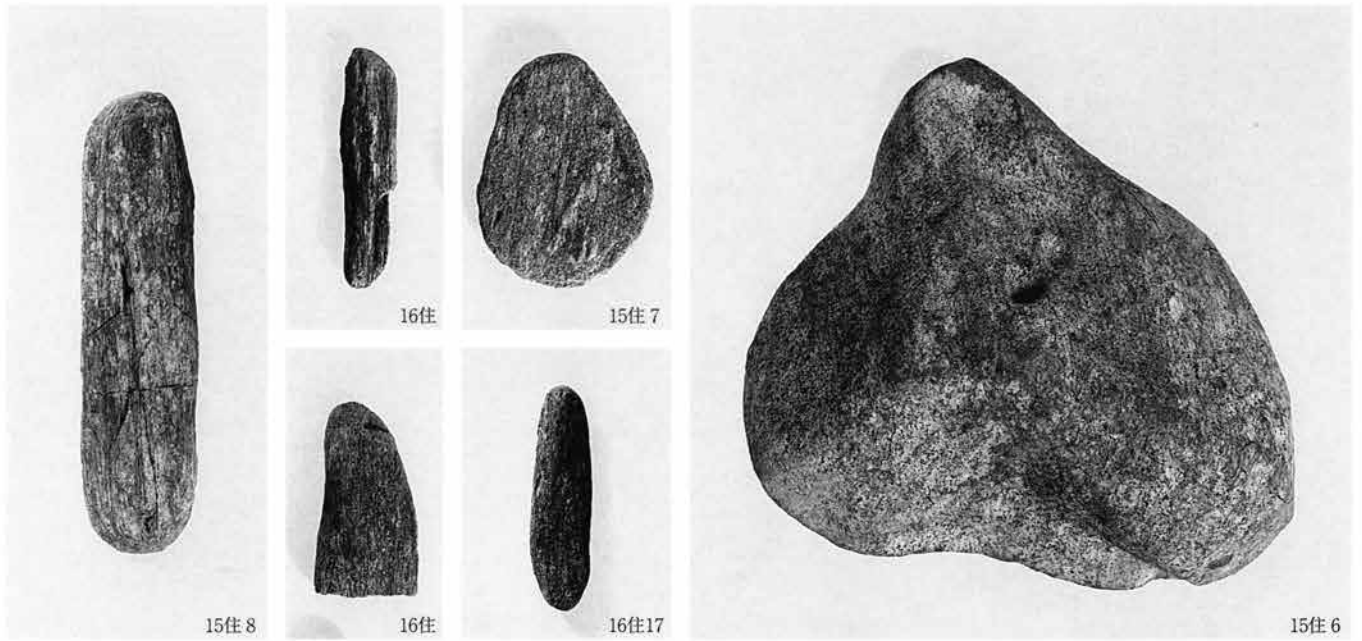


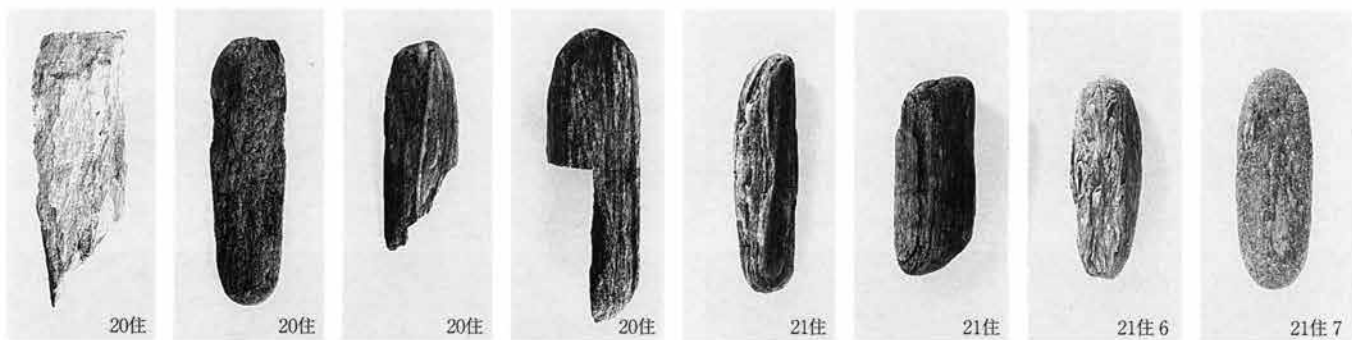
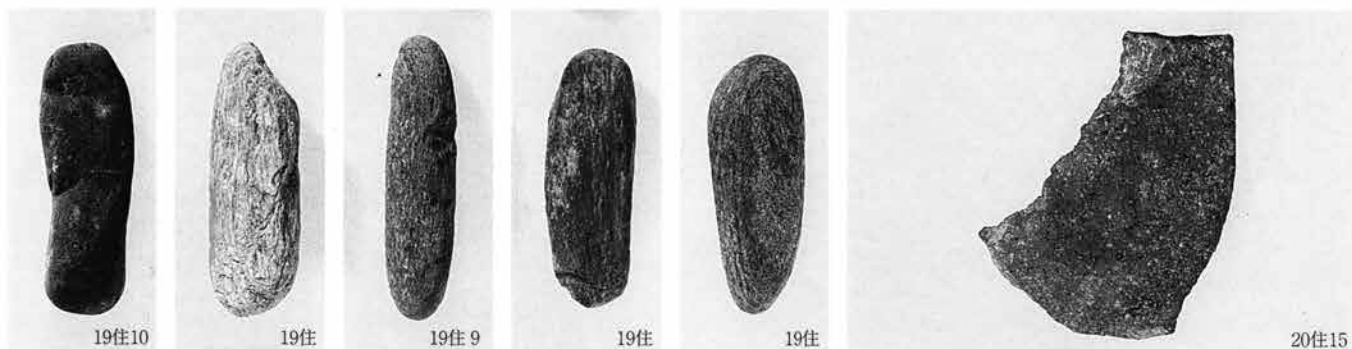
14住



14住14

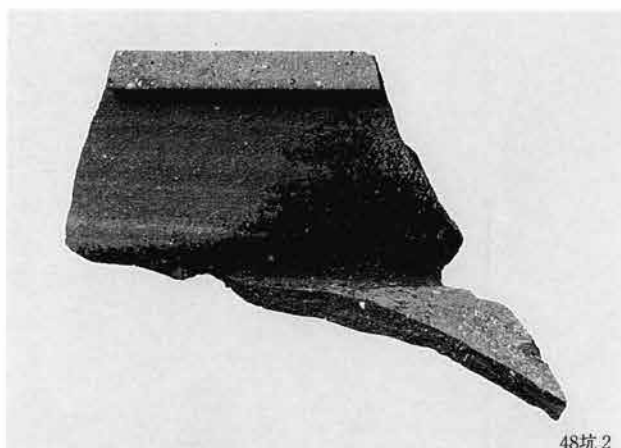
図版64







48坑 1



48坑 2



49坑 1



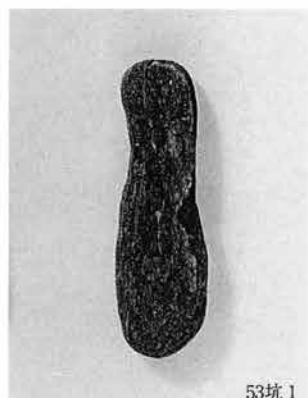
52坑 1



52坑 2



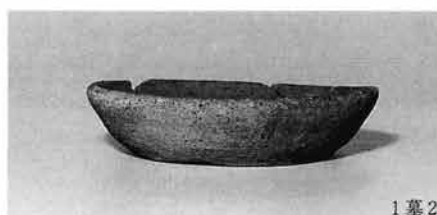
52坑 3



53坑 1



1墓 1



1墓 2



1墓 3



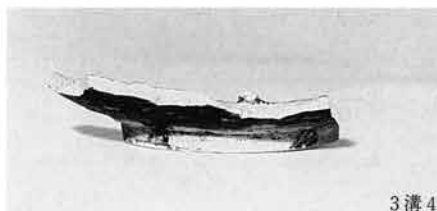
3溝外 1



3溝 2



3溝 3



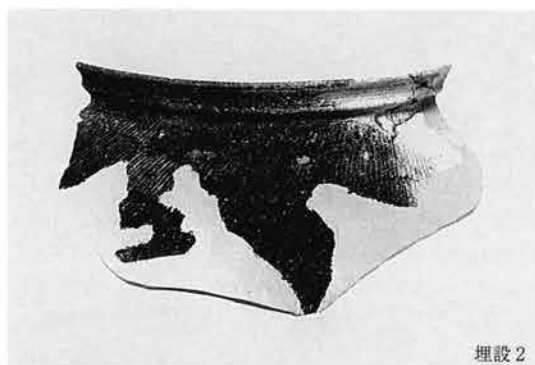
3溝 4



3溝 1



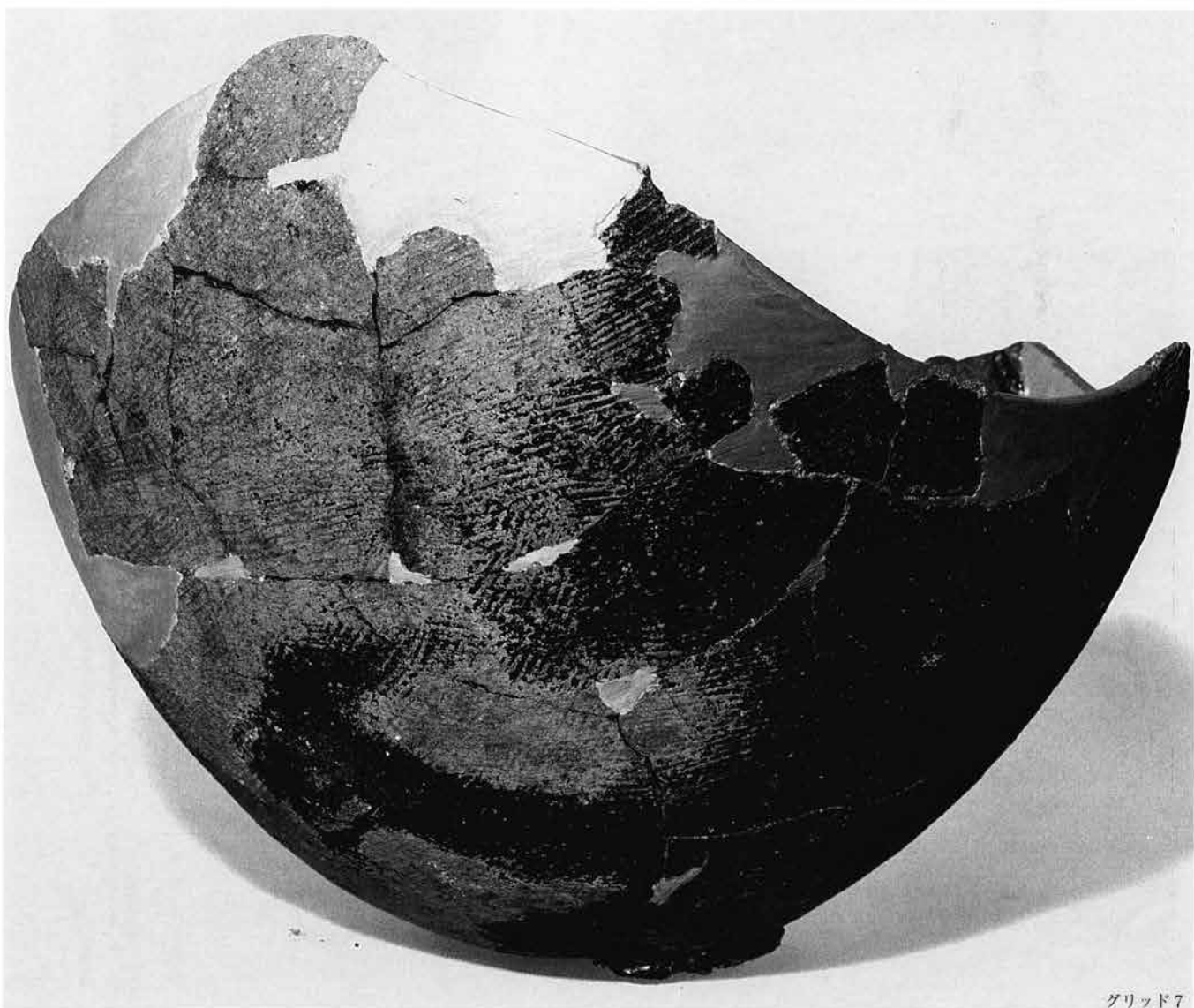
埋設1



埋設2



埋設1



グリッド7

図版68



南側1



グリッド1



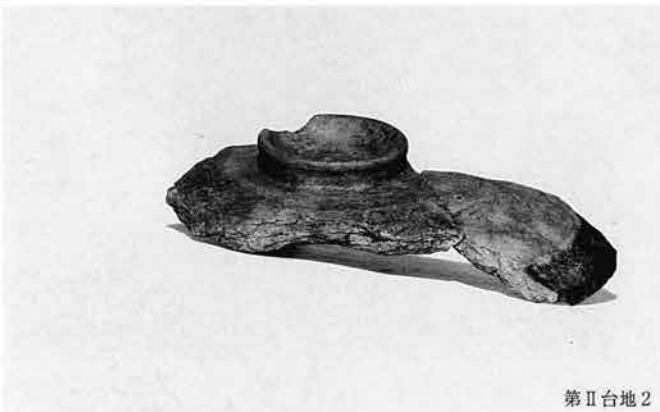
グリッド5



グリッド4



グリッド3



第II台地2



グリッド6



第II台地8



グリッド8

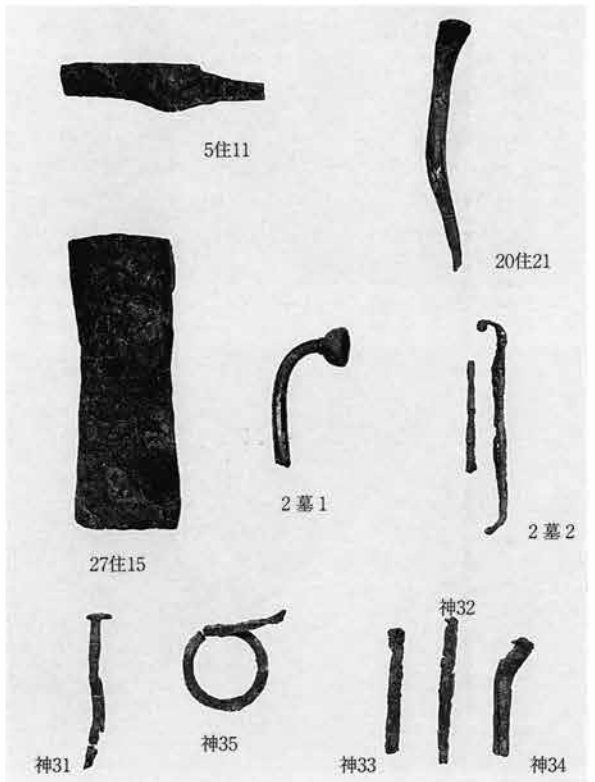


1墓4

1墓5



南側5



5住11

20住21

2墓1

2墓2

27住15

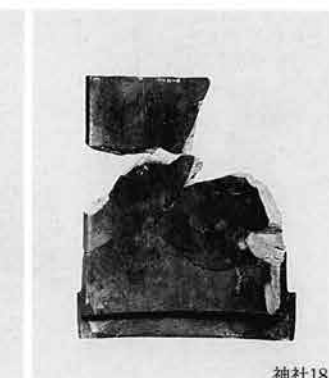
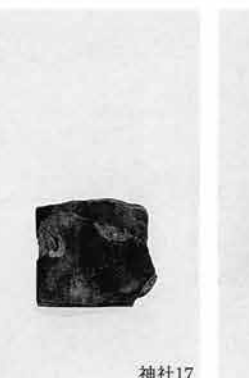
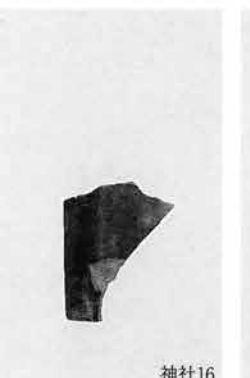
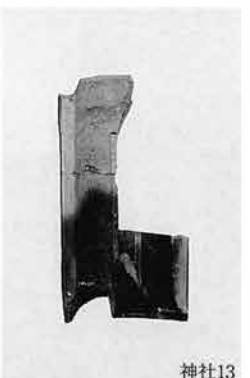
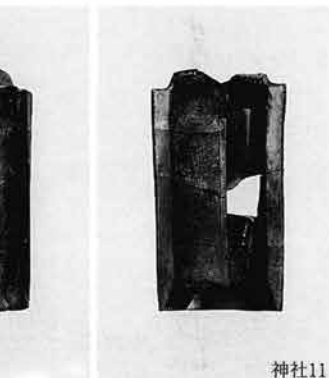
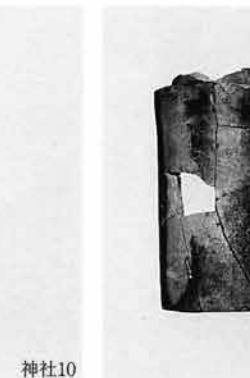
神32

神31

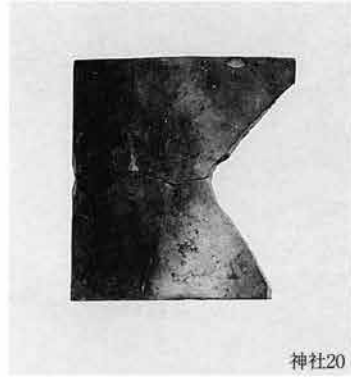
神35

神33

神34

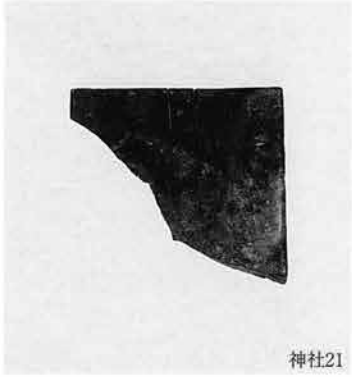
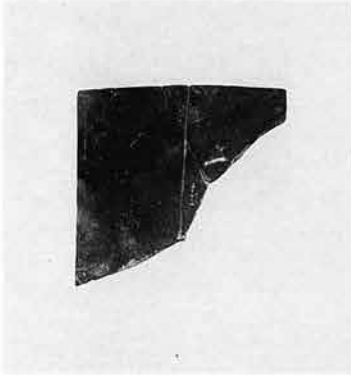


図版70



神社19

神社20



神社21

神社22



神社23

神社24

神社25



神社26

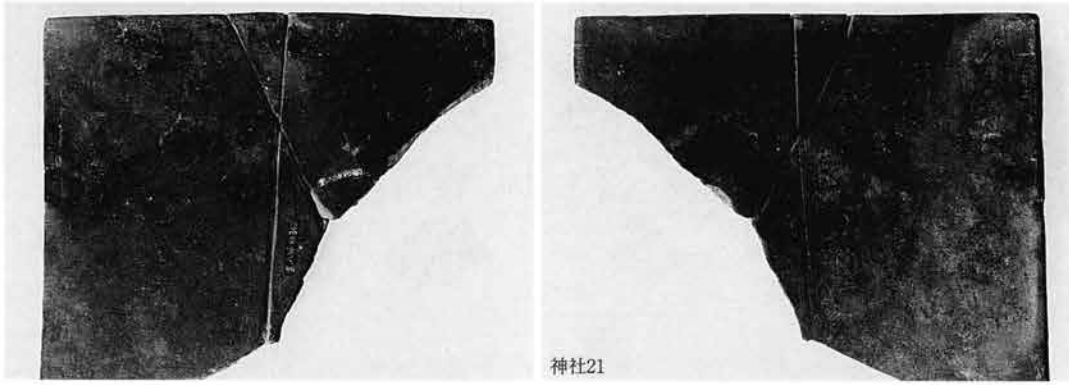
神社27

神社28

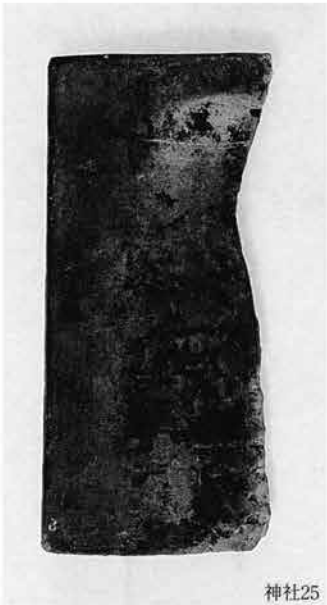


神社29

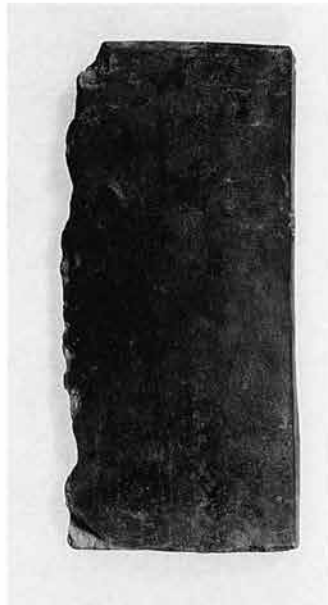
神社30



神社21



神社25



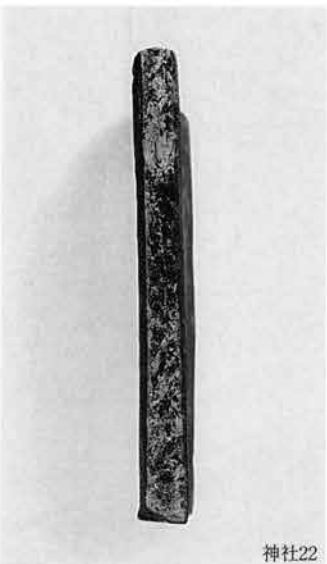
神社27



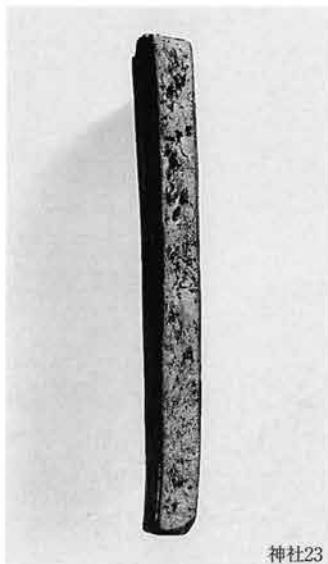
神社28



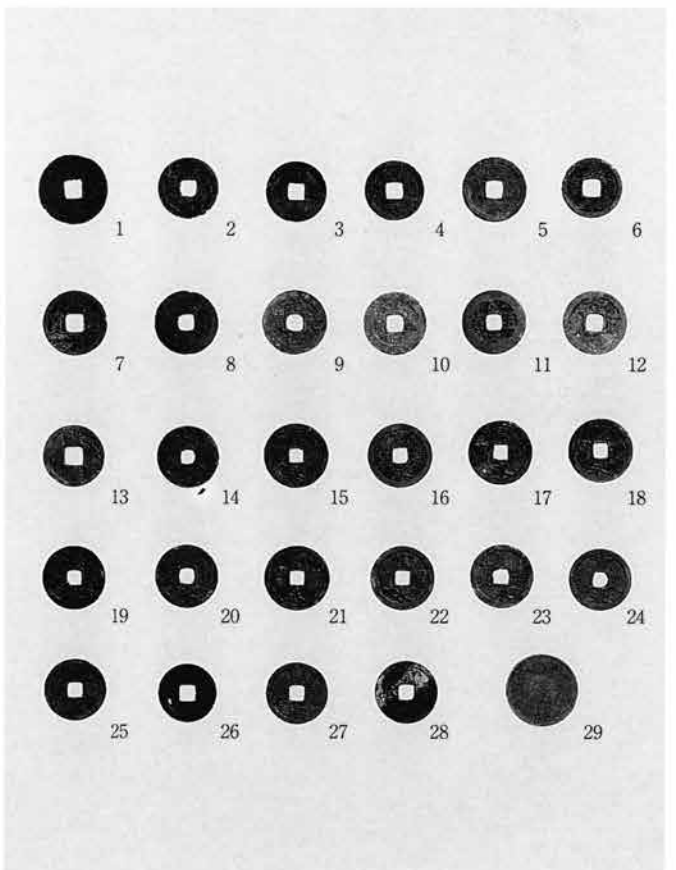
神社29

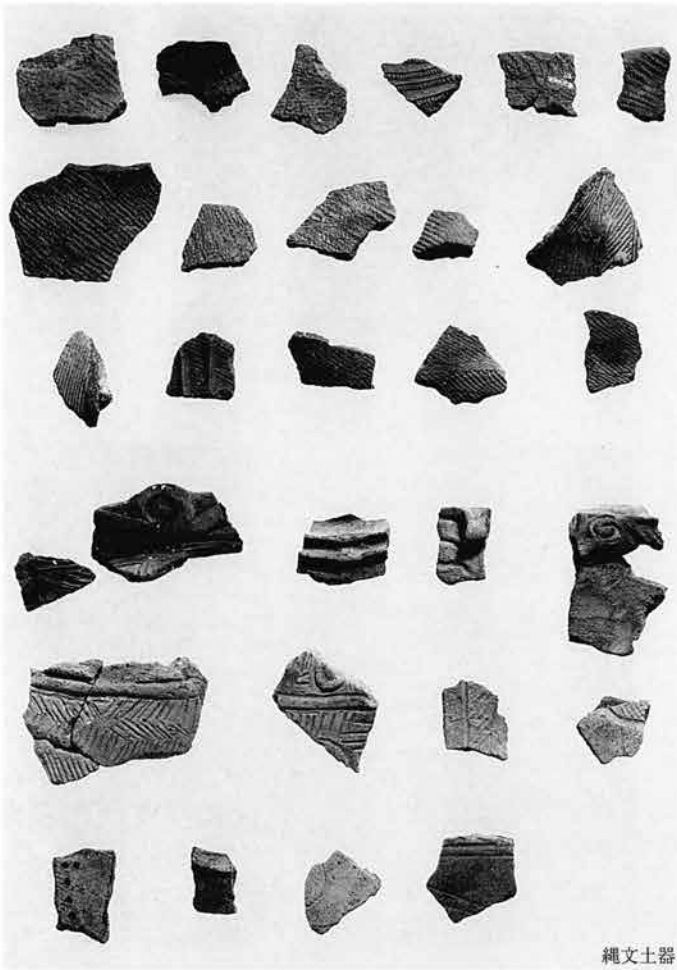


神社22

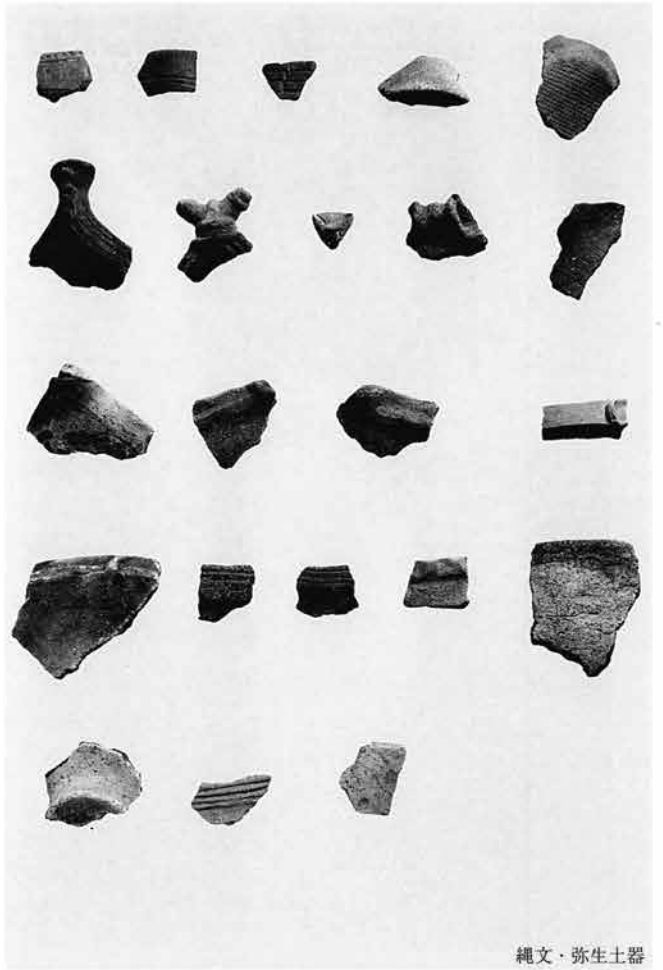


神社23





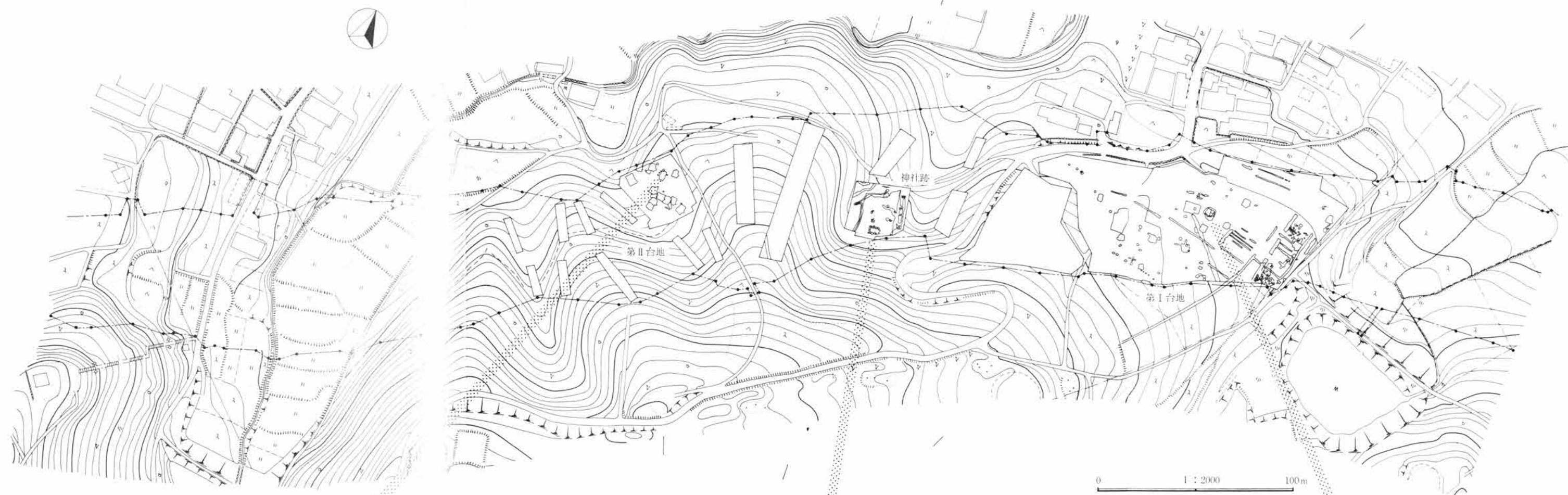
縄文土器



縄文・弥生土器

▼黒熊栗崎遺跡現況





15号住居跡 (小鍛冶)



神社跡 (礎石建物)



4号住居跡カマド



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第184集

黒熊栗崎遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第29集

平成7年2月21日 印刷

平成7年2月28日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局